

医学部教員一覧（令和7年4月1日現在）

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
教授(代表)	樋口 肇	博士(医学)	臨床腫瘍学、がん薬物療法、胆膵内視鏡、消化器内科学	researchmap ^
教授(代表)	松崎 恭一	博士(医学)	培養表皮移植、乳房再建、眼瞼・顔面の形成、難治性潰瘍	researchmap ^
教授(代表)	宮崎 淳	博士(医学)	尿路上皮癌、精巣癌、尿路感染症	researchmap ^
教授(代表)	堀口 淳	博士(医学)	乳腺外科治療、内分泌療法、化学療法、分子標的治療	researchmap ^
教授(代表)	竹本 稔	博士(医学)	内科学、糖尿病、脂質代謝、老年医学、動脈硬化、早老症	researchmap ^
教授(代表)	中里 道子	博士(医学)	精神医学、児童青年期精神医学、認知行動療法	researchmap ^
教授(代表)	鷺田 直輝	博士(医学)	腎臓内科学、透析療法、在宅医療	researchmap ^
教授(代表)	野口 佳裕	博士(医学)	人工内耳、人工中耳、遺伝性難聴、めまい平衡医学	researchmap ^
教授(代表)	海老沼 浩利	博士(医学)	消化器内科学、肝臓病学、感染症、免疫疾患	researchmap ^
教授(代表)	板野 理	博士(医学)	消化器外科、移植外科	researchmap ^
教授(代表)	吉田 成利	博士(医学)	呼吸器外科、肺癌の外科治療、胸壁・縦隔腫瘍、重症筋無力症、良性肺疾患、胸腔鏡手術、肺移植・再生	researchmap ^
教授(代表)	中世古 知昭	博士(医学)	血液内科学、造血器悪性腫瘍、造血幹細胞移植	researchmap ^
教授(代表)	志賀 隆	博士(医学)	救急医学	researchmap ^
教授(代表)	菅谷 誠	博士(医学)	リンパ腫、アトピー性皮膚炎、皮膚免疫、ケモカイン	researchmap ^
教授(代表)	村井 弘之	博士(医学)	神経内科学、神経免疫学、神経感染症学	researchmap ^
教授(代表)	河村 朗夫	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
教授(代表)	松本 哲哉	博士(医学)	感染症学	researchmap ^
教授(代表)	廣瀬 晃一	博士(医学)	アレルギー、臨床免疫学、リウマチ・膠原病学	researchmap ^
教授(代表)	桐生 茂	博士(医学)	画像診断、腹部イメージング、CT、MRI、画像解析、小動物イメージング、分子イメージング	researchmap ^
教授(代表)	潮見 隆之	博士(医学)	人体病理学、実験病理学、分子病理学	researchmap ^
教授(代表)	角田 亘	博士(医学)	リハビリテーション医学、神経内科学、ニューロリハビリテーション、脳卒中学	researchmap ^
教授(代表)	淵本 康史	博士(医学)	小児外科学	researchmap ^
教授(代表)	臼井 智彦	博士(医学)	眼科学	researchmap ^
教授(代表)	坂尾 誠一郎	博士(医学)	呼吸器内科学	researchmap ^
教授(代表)	八木 満	博士(医学)	脊椎・脊髄外科(側弯症、脊椎変性疾患、転移性脊椎腫瘍、脊椎外傷など)	researchmap ^
教授(代表)	永松 健	博士(医学)	産婦人科、周産期医学、出生前診断、不育症、周産期遺伝診療、生殖免疫学、高年妊娠	researchmap ^
教授(代表)	真鍋 晋	博士(医学)	心臓外科学	researchmap ^
教授(代表)	前田 剛志	博士(医学)	血管外科学	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
統括教授	藤井 知行	博士(医学)	産婦人科学	researchmap ^
統括教授	松野 彰	博士(医学)	脳神経外科学	researchmap ^
統括教授	須田 康文	博士(医学)	整形外科	researchmap ^
教授	浦野 友彦	博士(医学)	老年医学、骨粗鬆症、高齢者運動器疾患、ゲノム医学、内分泌代謝学	researchmap ^
教授	下澤 達雄	博士(医学)	臨床検査、高血圧、内分泌学、腎臓病学、エビジェネティクス	researchmap ^
教授	岡 孝和	博士(医学)	心身医学、漢方医学、心因性発熱、慢性疲労症候群	researchmap ^
教授	赤羽 正章	博士(医学)	放射線医学	researchmap ^
教授	丸茂 丈史	博士(医学)	薬理学	researchmap ^
教授	花崎 元彦	博士(医学)	麻酔学、神経麻酔、小児麻酔	researchmap ^
教授	坂元 亨宇	博士(医学)	病理学	researchmap ^
教授	馬場 靖子	博士(医学)	麻酔科学、手術医学、集中治療学	researchmap ^
教授	志賀 俊哉	博士(医学)	麻酔科学、ペインクリニック、臨床疫学	researchmap ^
教授	宮下 徹也	博士(医学)	麻酔・集中治療医学	researchmap ^
教授	戸矢 和仁	博士(医学)	放射線治療、放射線腫瘍学、小線源治療	researchmap ^
教授	進 伸幸	博士(医学)	婦人科腫瘍学、腹腔鏡下手術、子宮鏡下手術、病理診断、細胞診、家族性腫瘍	researchmap ^
教授	大和田 倫孝	博士(医学)	婦人科悪性腫瘍	researchmap ^
教授	土橋 洋	博士(医学)	病理・病理診断学	researchmap ^
教授	大東 貴志	博士(医学)	泌尿器科腫瘍、腹腔鏡手術、前立腺肥大症	researchmap ^
教授	内田 克紀	博士(医学)	泌尿器科学、前立腺癌、膀胱癌、前立腺肥大症、尿路結石症	researchmap ^
教授	永井 敏雄	博士(医学)	内科循環器病学一般 心臓病学 心不全 高血圧 分子心臓生物学	researchmap ^
教授	山田 佳彦	博士(医学)	内科学、内分泌学、代謝・栄養学	researchmap ^
教授	梅田 啓	博士(医学)	内科学、呼吸器病学	researchmap ^
教授	今西 順久	博士(医学)	頭頸部外科学、耳鼻咽喉科学	researchmap ^
教授	岩崎 聡	博士(医学)	中耳手術、人工聴覚器、難聴、聴覚医学、難聴遺伝学	researchmap ^
教授	石井 淳一郎	博士(医学)	前立腺癌、腎癌、尿路上皮癌、尿路結石症、前立腺肥大症	researchmap ^
教授	後藤 純信	博士(医学)	生理学	researchmap ^
教授	新井 健	博士(医学)	整形外科	researchmap ^
教授	牛島 輝明	博士(医学)	成人心臓外科、低侵襲心臓手術	researchmap ^
教授	佐藤 敦久	博士(医学)	腎臓内科学、内分泌学、高血圧	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
教授	赤松 直樹	博士(医学)	神経内科学、臨床神経生理学、てんかん、脳波	researchmap ^
教授	桂 研一郎	博士(医学)	神経内科学、脳卒中、予防医学、脳循環代謝学	researchmap ^
教授	荻野 美恵子	博士(医学)	神経内科、臨床倫理、医学教育、難病医療、在宅医療、緩和医療、医療政策、医療経済	researchmap ^
教授	岡本 秀彦	博士(医学)	神経生理学、ヒト脳イメージング、聴覚医学	researchmap ^
教授	安藤 哲也	博士(医学)	心療内科学	researchmap ^
教授	池田 佳史	博士(医学)	食道外科 胃外科 甲状腺・副甲状腺外科	researchmap ^
教授	大竹 孝明	博士(医学)	消化器病学、肝臓学	researchmap ^
教授	高橋 芳久	博士(医学)	消化器疾患(特に肝疾患)の病理	researchmap ^
教授	篠田 昌宏	博士(医学)	消化器外科学	researchmap ^
教授	清水 伸幸	博士(医学)	消化器外科、低侵襲治療、消化器内視鏡、医療安全	researchmap ^
教授	鈴木 裕	博士(医学)	消化管外科、内視鏡外科、栄養、内視鏡治療	研究実績詳細はP.105参照
教授	郡司 勇治	博士(医学)	小児科学、小児内分泌学	researchmap ^
教授	田村 雄一	博士(医学)	循環器内科学・肺循環学・肺高血圧症・ゲノム医学・医学教育・医学教育統括センター	researchmap ^
教授	岡野 光博	博士(医学)	耳鼻咽喉科学、アレルギー学、鼻科手術	researchmap ^
教授	上田 和	博士(医学)	産婦人科学	researchmap ^
教授	北川 元生	医学博士	細胞シグナル伝達、遺伝子発現調節の分子機構	researchmap ^
教授	大野 彰二	博士(医学)	呼吸器内科学、びまん性肺疾患	researchmap ^
教授	重松 邦広	博士(医学)	血管外科学	researchmap ^
教授	織谷 健司	医学博士	血液内科学、骨髄増殖性腫瘍、免疫学	researchmap ^
教授	森 圭介	博士(医学)	眼科学、網膜硝子体疾患、黄斑部疾患、レーザー治療、網膜硝子体手術、臨床遺伝学	researchmap ^
教授	武田 守彦	博士(医学)	冠血管治療、末梢血管治療、心不全の治療と疫学	researchmap ^
教授	渡邊 雄介	博士(医学)	音声言語医学 音声外科 歌唱障害 言語聴覚士教育	researchmap ^
教授	池田 俊也	博士(医学)	医療政策学、医療経済学、薬剤経済学、医療管理学、公衆衛生学	researchmap ^
教授	桜井 亮太	博士(医学)	医療情報学、循環器内科学、スポーツ医学、公衆衛生学、医学教育	researchmap ^
教授	墨 誠	博士(医学)	血管外科学(胸部・腹部大動脈瘤、大動脈解離、閉塞性動脈硬化症、静脈血栓・塞栓)	researchmap ^
教授	高橋 和郎	博士(医学)	臨床検査医学	researchmap ^
教授	笠原 英子	博士(医学)	予防医学	researchmap ^
教授	小阪 淳	博士(理学)	網膜・視神経系の分化・発生・再生の研究	researchmap ^
教授	國松 聡	博士(医学)	放射線医学	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
教授	大西 かよ子	博士(医学)	放射線医学	researchmap ^
教授	末廣 栄一	博士(医学)	脳神経外科学	researchmap ^
教授	山根 文孝	博士(医学)	脳神経外科学	researchmap ^
教授	大山 健一	博士(医学)	脳神経外科学	researchmap ^
教授	下地 一彰	博士(医学)	脳神経外科学	researchmap ^
教授	小野田 恵介	博士(医学)	脳神経外科学	researchmap ^
教授	坂本 昌也	医学博士	糖尿病学、内分泌代謝学	researchmap ^
教授	森 一郎	博士(医学)	デジタル病理、脈管病理、乳腺病理	researchmap ^
教授	江幡 重人	博士(医学)	整形外科	researchmap ^
教授	大谷 俊郎	博士(医学)	整形外科	researchmap ^
教授	井上 高光	博士(医学)	腎泌尿器外科学	researchmap ^
教授	河合 弘二	博士(医学)	腎泌尿器外科学	researchmap ^
教授	森 泰文	博士(医学)	神経伝達機構	researchmap ^
教授	伊藤 鉄英	博士(医学)	消化器内科学	researchmap ^
教授	井上 和明	博士(医学)	消化器内科学	研究実績詳細はP.263参照
教授	矢永 勝彦	九州大学卒、医学博士	消化器外科学	researchmap ^
教授	杉村 宏一郎	医学博士	循環器内科学	researchmap ^
教授	舘野 馨	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
教授	藤本 善英	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
教授	大澤 陽介	医学(博士)	消化器内科学	researchmap ^
教授	船橋 伸禎	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
教授	原田 竜彦	博士(医学)	耳鼻咽喉科学、神経耳科学、生物音響学	研究実績詳細はP.187参照
教授	石崎 憲	博士(医学)	歯科・口腔外科学	researchmap ^
教授	黨 康夫	博士(医学)	呼吸器内科学	researchmap ^
教授	林 真一郎	博士(医学)	呼吸器内科学	研究実績詳細はP.169参照
教授	Myat Thandar	医学博士	公衆衛生学	researchmap ^
教授	橋本 律夫	博士(医学)	高次機能障害、アルツハイマー型認知症	researchmap ^
教授	篠浦 丞	博士(医学)	消化器内科	researchmap ^
教授	齊藤 聡	博士(医学)	消化器内科	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
教授	合屋 雅彦	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
教授	大門 雅夫	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
教授	桑野 和善	博士(医学)	呼吸器内科	researchmap ^
教授	山沢 英明	博士(医学)	呼吸器内科	researchmap ^
教授	岩田 信恵	博士(医学)	脳神経内科学	researchmap ^
教授	竹内 英之	博士(医学)	脳神経内科学	researchmap ^
教授	山下 賢	博士(医学)	脳神経内科学	researchmap ^
教授	宮崎 勝	博士(医学)	消化器外科	researchmap ^
教授	吉野 一郎	博士(医学)	呼吸器外科	researchmap ^
教授	糸川 博	博士(医学)	脳神経外科	researchmap ^
教授	山口 崇	博士(医学)	脳神経外科	researchmap ^
教授	東野 哲也	博士(医学)	耳鼻咽喉科	researchmap ^
教授	石井 直弘	博士(医学)	形成外科学	researchmap ^
教授	小黒 恵司	博士(医学)	救急医学	researchmap ^
教授	内田 恵博	医学博士	医学教育統括センター	研究実績詳細はP.25参照
教授	康 祐大	博士(医学)	消化器外科学	researchmap ^
教授	鈴木 翔	博士(医学)	消化器内科学	researchmap ^
教授	宮下 和季	博士(医学)	糖尿病・代謝・内分泌内科学	researchmap ^
教授	高山 達也	博士(医学)	腎泌尿器外科学	researchmap ^
教授	久末 伸一	博士(医学)	腎泌尿器外科学	researchmap ^
教授	濱田 利久	博士(医学)	皮膚科学	researchmap ^
教授	片岡 幹統	博士(医学)	消化器内科、(消化管、消化器内視鏡治療・診断)	研究実績詳細はP.69参照
教授	矢野 晴美	博士(医学)	臨床感染症学、医学教育学	researchmap ^
教授	村瀬 真一	博士(医学)	薬理学	researchmap ^
教授	河上 裕	博士(医学)	免疫学	researchmap ^
教授	加藤 正人	医学博士	麻酔・集中治療医学	researchmap ^
教授	山田 芳嗣	医学博士	麻酔・集中治療医学	researchmap ^
教授	矢島 大介	博士(医学) 修士(薬学)	法医学	researchmap ^
教授	内山 智之	医学博士	脳神経内科学	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
教授	中江 淳	博士(医学)	生理学	researchmap ^
教授	中村 俊康	博士(医学)	整形外科科学	researchmap ^
教授	高後 裕	博士(医学)	消化器内科学	researchmap ^
教授	西澤 俊宏	博士(医学)	消化器内科学	researchmap ^
教授	吉田 雅博	医学(博士)	消化器外科学	researchmap ^
教授	福田 浩二	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
教授	山崎 力	博士(医学)	公衆衛生学	researchmap ^
教授	多田 裕司	博士(医学)	呼吸器内科学	研究実績詳細はP.308参照
教授	忍足 俊幸	博士(医学)	眼科学	researchmap ^
教授	加藤 康幸	Master of Public Health (米国)	感染症内科学、熱帯医学、旅行医学	researchmap ^
教授	小無田 美菜	博士(医学)	病理・病理診断学	researchmap ^
教授	押味 貴之	博士(医学)	医学英語教育、医療通訳、医学教育学	researchmap ^
教授	Batmunkh Munkhbat	博士(医学)	公衆衛生学	researchmap ^
教授	穴山 貴嗣	博士(医学)	呼吸器外科	researchmap ^
教授	福澤 龍二	博士(医学)	病理・病理診断学	researchmap ^
教授	清岡 崇彦	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
教授	中條 大輔	博士(医学)	糖尿病学、内分泌代謝学	researchmap ^
教授	安西 慶三	博士(医学)	糖尿病学、内分泌代謝学	researchmap ^
教授	針谷 正祥	博士(医学)	リウマチ・膠原病内科学	researchmap ^
教授	谷脇 考恭	博士(医学)	脳神経内科学	researchmap ^
教授	藤岡 伸助	博士(医学)	脳神経内科学	researchmap ^
教授	川合 剛人	博士(医学)	腎泌尿器外科学	researchmap ^
教授	荻野 暁義	博士(医学)	脳神経外科	researchmap ^
教授	鹿嶋 晃平	博士(医学)	小児科学	researchmap ^
教授	山下 裕史朗	博士(医学)	小児科学	researchmap ^
教授	佐合 治彦	博士(医学)	産婦人科学	researchmap ^
教授	稲見 茂信	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
教授	小島 太郎	博士(医学)	老年病学	researchmap ^
教授	後関 利明	博士(医学)	眼科学	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
特任教授	天野 隆弘	博士(医学)	医学教育、神経内科学、脳卒中学	researchmap ^
准教授	中山 徹三	博士(医学)	臨床麻酔、周術期医療	researchmap ^
准教授	奥田 逸子	博士(医学)	放射線医学、抗加齢医学	研究実績詳細はP.44参照
准教授	長島 正樹	博士(医学)	膝関節外科、人工膝関節、スポーツ医学	researchmap ^
准教授	井上 寧	博士(医学)	内科学、呼吸器学、ウィルス学、睡眠医学	researchmap ^
准教授	多田 雄一郎	博士(医学)	頭頸部腫瘍学、唾液腺腫瘍学	researchmap ^
准教授	高橋 優宏	博士(医学)	耳科学、聴覚医学、遺伝学	researchmap ^
准教授	矢郷 香	博士(歯学)	口腔外科、歯科インプラント	researchmap ^
准教授	長瀬 清亮	博士(医学)	呼吸器内科学、肺癌薬物療法	研究実績詳細はP.163参照
准教授	大平 寛典	博士(医学)	外科 一般消化器外科 消化管(食道、胃、大腸)の鏡視下手術	研究実績詳細はP.41参照
准教授	橋本 佐	博士(医学)	精神医学	researchmap ^
准教授	渡辺 知佳子	博士(医学)	消化器内科学	researchmap ^
准教授	佐藤 一道	博士(医学)	歯科・口腔外科学	researchmap ^
准教授	笹生 豊	博士(医学)	整形外科学	researchmap ^
准教授	和田 啓伸	博士(医学)	呼吸器外科学	researchmap ^
准教授	大和田 千桂子	医学(博士)	血液内科学	researchmap ^
准教授	渡部 玲子	広島大学卒、医学博士	血液内科学	researchmap ^
准教授	山口 晃志	博士	法医学	researchmap ^
准教授	森村 壮志	博士(医学)	皮膚科学、アトピー性皮膚炎、乾癬、皮膚リンパ腫	researchmap ^
准教授	小川 朋子	博士(医学)	脳神経内科学	researchmap ^
准教授	黒住 献	群馬大学卒、医学博士	乳腺外科学	researchmap ^
准教授	中山 政憲	博士(医学)	整形外科学	researchmap ^
准教授	伊藤 純	博士(医学)	腎臓内科学	researchmap ^
准教授	大谷 真	博士(医学)	心療内科学	researchmap ^
准教授	船尾 陽生	博士(医学)	整形外科学	researchmap ^
准教授	湯澤 聡	博士(理学)	生化学、構造生物学	researchmap ^
准教授	鈴木 知子	博士(薬学)	公衆衛生学、疫学、メンタルヘルス	researchmap ^
准教授	吉岡 広陽	博士(生命科学)	解剖学、分子生物学、骨代謝、エビジェネティクス	researchmap ^
准教授	早坂 裕介	修士(美学、TESOL)	音楽学・音楽史、第二言語習得理論、eラーニング・コンピュータ支援学習(CALL)、教育工学・教材・教育メディア一般	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
准教授	内山 清貴	博士(医学)	腎臓内科	researchmap ^
准教授	本村 あゆみ	博士(医学)	法医学	researchmap ^
准教授	田島 拓	博士(医学)	画像診断学、CT、MRI	researchmap ^
准教授	片岡 史夫	慶應義塾大学卒、医学博士	婦人科学	researchmap ^
准教授	田中 達也	佐賀大学大学院(医学系研究科博士課程)卒業、医学博士	脳神経外科	researchmap ^
准教授	吉田 知彦	博士(医学)	糖尿病・代謝・内分泌内科学	researchmap ^
准教授	鶴田 雅士	医学博士	大腸外科	researchmap ^
准教授	上原 平	九州大学医学部卒業、医学博士	神経内科、臨床神経生理、てんかん	researchmap ^
准教授	山下 健太郎	札幌医科大学卒、医学博士	消化器病学、特に消化管疾患	researchmap ^
准教授	留野 渉	博士(医学)	消化器内科学	researchmap ^
准教授	山根 建樹	医学博士	消化器内科学	研究実績詳細はP.366参照
准教授	一瀬 雅典	医学博士	消化器外科学	研究実績詳細はP.14参照
准教授	大山 隆史	博士(医学)	消化器外科学	researchmap ^
准教授	星本 相淳	博士(医学)	消化器外科学	researchmap ^
准教授	保田 壮一郎	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
准教授	中山 崇	千葉大学卒、医学博士	循環器内科学	researchmap ^
准教授	大多 茂樹	大阪大学理学部大学院、理学博士	腫瘍免疫学、幹細胞生物学	researchmap ^
准教授	岡田 智志	博士(医学)	産婦人科学	researchmap ^
准教授	中川 俊介	博士(医学)	産婦人科学	researchmap ^
准教授	望月 太一	(博士(医学))	呼吸器内科学	researchmap ^
准教授	大原 博敏	博士(医学)	形成外科	researchmap ^
准教授	ヒガブ中井アハマド	博士(医学)	呼吸器内科	researchmap ^
准教授	栗田 康夫	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
准教授	結束 貴臣	博士(医学)	消化器内科	researchmap ^
准教授	坂本 康成	博士(医学)	消化器内科	researchmap ^
准教授	木村 茂樹	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
准教授	吉澤 彰宏	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
准教授	川島 広稔	博士(医学)	リウマチ・膠原病内科学	researchmap ^
准教授	福山 朋房	博士(医学)	血液内科学	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
准教授	山出 史也	博士(医学)	小児科学	researchmap ^
准教授	太田 智之	博士(医学)	放射線医学	researchmap ^
講師	國松 奈津子	博士(医学)	放射線診断学	researchmap ^
講師	西村 瑤子	博士(医学)	病理・病理診断学	研究実績詳細はP.37参照
講師	林 雄一郎	学士(医学)	病理・病理診断学	researchmap ^
講師	竹腰 知紀	博士(医学)	皮膚科学、乾癬	researchmap ^
講師	富永 奈保美	博士(医学)	脳神経内科学	研究実績詳細はP.157参照
講師	Lkhagvasuren Battuvshin	博士(医学)	心療内科学	researchmap ^
講師	池田 尚平	博士(医学)	循環器内科	researchmap ^
講師	山口 学	学士(医学)	呼吸器外科学、気管食道科学、呼吸器内視鏡、肺癌治療	研究実績詳細はP.227参照
講師	宮宗 秀伸	博士(医学)	解剖学	researchmap ^
講師	小林 元	博士(理学)	医学教育、分子生理学	researchmap ^
講師	若宮 富浩	博士(医学)	脳神経外科学	研究実績詳細はP.228参照
講師	遠藤 拓郎	博士(医学)	救急医学	researchmap ^
講師	千葉 拓世	学士(医学)	救急医学	研究実績詳細はP.125参照
講師	吉田 絢子	博士(医学)	眼科学	researchmap ^
講師	渡部 佳弘	博士(医学)	眼科学	researchmap ^
講師	Khandakar Mohammad Anwarul Haque	Ph.D.	感染症学	研究実績詳細はP.288参照
講師	永吉 陽子	学士(医学)	産婦人科学	researchmap ^
講師	古館 佐起子	博士(医学)	耳鼻咽喉科	researchmap ^
講師	岩澤 仁	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
講師	山賀 政弥	博士(医学)	糖尿病学、内分泌代謝学	researchmap ^
講師	策 愛子	博士(医学)	リウマチ・膠原病内科学	researchmap ^
講師	畑 太悟	博士(医学)	消化器外科	researchmap ^
講師	関根 速子	博士(医学)	乳腺外科	researchmap ^
講師	香野 日高	博士(医学)	腎泌尿器外科学	researchmap ^
講師	荒畑 幸絵	博士(医学)	小児科学	researchmap ^
講師	松原 大輔	博士(医学)	小児科学	researchmap ^
講師	伊藤 洋子	博士(医学)	眼科学	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
講師	尾内 宏美	博士(医学)	眼科学	researchmap ^
講師	難波 広幸	博士(医学)	眼科学	researchmap ^
講師	栗原 絹枝	博士(医学)	歯科・口腔外科学	researchmap ^
講師	遠藤 太嘉志	博士(医学)	病理学	researchmap ^
講師	竹内 理恵	博士(医学)	公衆衛生学	researchmap ^
講師	三木 景太	博士(医学)	循環器内科	researchmap ^
講師	佐藤 愛子	博士(医学)	精神医学	researchmap ^
講師	加藤 孝征	博士(医学)	消化器内科学	researchmap ^
講師	皆川 卓也	博士(医学)	消化器外科(特に肝胆膵外科)、一般外科、内視鏡外科	researchmap ^
講師	福岡 良磨	博士(医学)	循環器内科学	researchmap ^
講師	伊藤 文人	博士(医学)	救急医学	researchmap ^
講師	佐藤 公一	博士(医学)	循環器内科学	研究実績詳細はP.252参照
講師	鎌田 稔子	博士(医学)	呼吸器外科学	researchmap ^
講師	古山 桂太郎	博士(医学)	放射線医学	研究実績詳細はP.297参照
講師	田中 真生	博士(医学)	脳神経内科学	researchmap ^
講師	手塚 修一	博士(医学)	脳神経内科学	researchmap ^
講師	田部井 勇助	医学博士	脳神経外科(悪性脳腫瘍)	researchmap ^
講師	大西 俊一郎	千葉大学卒、同大学院修了、医学博士	糖尿病<特にコーティングを活用した治療意欲の向上>、コミュニケーション	researchmap ^
講師	別所 雅彦	博士(医学)	整形外科	researchmap ^
講師	稲井 広夢	医学博士	腎泌尿器外科学	研究実績詳細はP.22参照
講師	細谷 幸司	学士(医学)	腎臓内科学	研究実績詳細はP.347参照
講師	安積 貴年	博士(医学)	消化器内科学	researchmap ^
講師	島田 理子	医学博士	消化器外科、上部消化管	researchmap ^
講師	平野 佑樹	慶應義塾大学卒、医学博士	消化器、上部消化管、食道癌、胃癌、ソケイヘルニアなどの良性疾患	researchmap ^
講師	渡辺 浩史	学士(医学)	小児科学	researchmap ^
講師	上田 浩平	東京大学医学部卒、東京大学大学院博士(医学)	循環生理学、腎臓ナトリウム輸送体、核内受容体	researchmap ^
講師	増淵 達夫	学士(医学)	耳鼻咽喉科学	研究実績詳細はP.359参照
講師	服部 知洋	博士(医学)	呼吸器内科学	researchmap ^
講師	眞田 喬行	博士(医学)	呼吸器内科	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
講師	須原 正光	学士(医学)	血管外科学	researchmap ^
講師	磯貝 宜広	博士(医学)	整形外科科学	researchmap ^
講師	鈴木 二郎	博士(医学)	産婦人科学	researchmap ^
講師	北瀬 悠磨	博士(医学)	小児科学	researchmap ^
講師	渡部 佳弘	博士(医学)	耳鼻咽喉科	researchmap ^
講師	地引 政利	博士(医学)	血管外科学	researchmap ^
講師	石田 隆	博士(医学)	消化器外科	researchmap ^
助教	杉本 一将	博士(医学)	循環器内科	researchmap ^
助教	光武 明彦	学士(医学)	脳神経内科学	researchmap ^
助教	岡 晋一郎	博士(医学)	耳鼻咽喉科	researchmap ^
助教	石井 研	学士	消化器内科	researchmap ^
助教	篠崎 真莉子	学士	循環器内科学	researchmap ^
助教	柴宮 明日香	学士	血液内科学	researchmap ^
助教	小林 桃子	学士	臨床腫瘍科	researchmap ^
助教	水野 裕理	学士	脳神経内科学	researchmap ^
助教	高谷 紗帆	学士	感染症学	researchmap ^
助教	秦 佳孝	学士	小児外科学	researchmap ^
助教	田中 尚	学士	小児外科学	researchmap ^
助教	小野里 優希	学士	呼吸器外科	researchmap ^
助教	弓削 徳久	学士	心臓外科	researchmap ^
助教	西江 亮祐	学士	血管外科学	researchmap ^
助教	百川 文健	学士	血管外科学	researchmap ^
助教	堤 瑛理	学士	眼科学	researchmap ^
助教	乗松 雄大	学士	皮膚科学	researchmap ^
助教	加治 真由	学士	麻酔・集中治療	researchmap ^
助教	平野 博史	学士	麻酔・集中治療	researchmap ^
助教	田中 綾	学士	歯科・口腔外科学	researchmap ^
助教	Ryan Clair Marie	学士	医学教育統括センター	researchmap ^
助教	水越 諒	学士	整形外科科学	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
助教	岡馬 恵介	学士(医学)	法医学	researchmap ^
助教	CHAW KYI THA THU	University of Medicine (1), Yangon (Bachelor of Medicine and Bachelor of Surgery), Saitama University (PhD, Life Science)	免疫学 (Immunology)、医学英語 (Medical English)、English Communication、Neuroscience	researchmap ^
助教	大村 和也	学士(医学)	麻酔・集中治療医学	researchmap ^
助教	石井 名実子	博士(医学)	法医学	researchmap ^
助教	堀岡 希衣	旭川医科大学大学院医学系研究科博士課程修了、医学博士	法医学	researchmap ^
助教	福留 潤	学士(医学)	放射線医学	研究実績詳細はP.345参照
助教	松岡 亮介	学士(医学)	病理学	researchmap ^
助教	赤塚 太朗	学士(医学)	皮膚科学	研究実績詳細はP.261参照
助教	小川 明子	学士(医学)	乳腺外科学	研究実績詳細はP.56参照
助教	岡元(上原) 燈紀子	修士(医学)	糖尿病・代謝・内分泌内科学	研究実績詳細はP.53参照
助教	山田 晋之介	博士(理学)	超微形態学	researchmap ^
助教	梶 有貴	筑波大学卒、公衆衛生修士(東京大学)	総合診療医学	researchmap ^
助教	Maung Thein Htaik	学士(教育学)	総合教育センター	研究実績詳細はP.260参照
助教	岡 愛子	学士(医学)	耳鼻咽喉科学	researchmap ^
助教	柿沼 薫	学士(医学)	産婦人科学	研究実績詳細はP.282参照
助教	杉崎 顕史	学士(医学)	眼科学	researchmap ^
助教	植田 由依	学士(医学)	小児科学	研究実績詳細はP.36参照
助教	萬納寺 英里	医学博士	腫瘍内科	研究実績詳細はP.221参照
助教	吉田 雅康	学士(医学)	歯科・口腔外科学	研究実績詳細はP.124参照
助教	石原 洋	学士(医学)	消化器内科	researchmap ^
助教	高橋 宏太	学士(医学)	消化器内科	researchmap ^
助教	木内 達	学士(医学)	呼吸器内科学	研究実績詳細はP.81参照
助教	井桁 龍平	学士(医学)	救急医学	研究実績詳細はP.23参照
助手	飯塚 藍	学士	整形外科	researchmap ^
助手	平 明彦	学士	脳神経内科学	researchmap ^
助手	戸村 正樹	学士	脳神経内科学	researchmap ^
助手	田村 卓也	学士	消化器外科	researchmap ^
助手	洞口 哲	学士	リハビリテーション医学	researchmap ^
助手	井関 萌	学士	眼科学	researchmap ^

職位	氏名	学位	専門分野	研究実績
助手	石井 貴弥	学士	解剖学	researchmap 

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 一瀬 雅典
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
1) 消化器外科学に関する実務(特に肝胆膵領域) 2) 消化器内視鏡学に関する実務 3) 救急・災害医学に関する実務		1) 肝胆膵外科 消化器外科 2) 内視鏡治療 ESD 3) ICLS DMAT		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1. 病理学的に検索しえた胃潰瘍出血に対するクリップ止血の1例 (査読付)	共著	平成2年6月	Progress of Digestive Endoscopy(消化器内視鏡の進歩) 36巻 Page294-297, (1990.06)	胃潰瘍出血への内視鏡的クリップ止血術後に胃切除術を行い、止血部の状態を病理学的に検索し得た1例を経験した。69歳男性。吐下血で当院紹介入院となり、緊急内視鏡にて胃角部小弯の巨大潰瘍からの拍動性出血をクリップ止血。潰瘍治癒が悪く3週後に胃切除術を施行した。病巣部の病理所見でクリップの血管把持部に器質化と血管内血栓形成が確認され、クリップによる物理的血管遮断後の止血機序と考えられた。 (役割) 筆頭著者として論文作成の主導的役割を果たした。 (著者)一瀬 雅典(国立佐倉病院), 蜂巢 忠, 佐藤 慎一, 他
2. 止血用留置スネアの開発と使用経験 (査読付)	共著	平成2年6月	Progress of Digestive Endoscopy(消化器内視鏡の進歩) 36巻 Page161-163, (1990.06)	ポリペクトミー後の予防的止血処置器具として、隆起性病変を絞扼後、絞扼したループが外れる留置スネア装置を開発した。材質は非通電性の釣り糸で最大径4cmまでの隆起病変に使用でき、最大絞扼力は300gで、ループは緩まぬようにできている。当院では1989年5月から5ヶ月間に3例の大腸ポリープのポリペクトミーに留置スネアを使用し全例で出血無く外来処置が可能であった。本装置は隆起性病変の処置に際し偶発症を予防するために有用と考える。 (役割) 実症例での使用に参画した。 (著者)蜂巢 忠(国立佐倉病院), 一瀬 雅典, 佐藤 慎一, 他
3. Meckel憩室による腸閉塞の1例 (査読付)	共著	平成2年8月	日本臨床外科医学会雑誌(0386-9776)51巻8号 Page1768-1771(1990.08)	メッケル憩室による腸閉塞を経験したので報告する。症例は19歳男性。7ヶ月前にも腸閉塞症状の既往があり、主訴腹痛で腸閉塞の診断で入院手術となった。回腸末端から約50cmの腸間膜対側に高さ1cm程のメッケル憩室とその頂点から回盲部腸間膜に至る索状物により約30cmの回腸が絞扼されていた。メッケル憩室の合併症の殆どは小児期までに発症するが、開腹既往のない若年者の腸閉塞では本疾患の可能性も考慮すべきと思われた。 (役割) 症例の手術に参画した。 (著者)大島 郁也(栃木厚生連塩谷総合病院), 紅谷 明, 一瀬 雅典

4. 咽頭麻酔におけるリドカイン中毒の1例 査読付	共著	平成2年8月	Gastroenterological Endoscopy32巻8号 Page1962-1966(1990. 08)	症例は70歳男性。吐血にて来院時緊急内視鏡を施行。前処置は硫酸アトロピン1A筋注後、ジメチルポリシロキサンロープ10ml服用し、4%リドカイン10mlにて咽頭麻酔を行った。このとき全身状態に異常を認めず、エタノール局注による止血に無事成功した。2日後止血確認の検査時同様の前処置を行い胃内観察中に間欠性の全身痙攣を起し意識消失。検査中止後も心肺停止に至った。これに対し挿管・心マッサージ等により蘇生を得た。以上リドカイン中毒の1例経験を報告する。(役割)症例の蘇生を含む臨床経過に参画した。(著者)大島 郁也(栃木厚生連塩谷総合病院), 紅谷明, 一瀬 雅典
5. 肝細胞癌の副腎転移の1手術例 (査読付)	共著	平成2年11月	日本消化器外科学会雑誌23巻11号 Page2639-2643(1990. 11)	症例は65歳男性, 肝内転移を伴ったHCCの診断でTAE施行。経過観察中computed tomography (CT) により左副腎腫瘍を認めた。肝原発巣は, 3回のTAEにより著明な縮小を示したが, 孤立性の副腎腫瘍は次第に増大したため手術を施行した。副腎腫瘍は肝原発巣に類似した組織像でありHCCの副腎転移と診断した。初回治療より4年3か月経過した現在生存中で, TAEと外科的治療による集学的治療が長期生存を可能にしたと考えられた。(役割)症例の手術に参画した。(筆者)(著者)天野 穂高(国立佐倉病院外科), 横山健郎, 柏原英彦, 蜂巢 忠, 大森耕一郎, 一瀬 雅典
6. 超音波内視鏡に求めるもの 胆道疾患診断におけるMiniature Ultrasonic Probeの有用性と問題点	共著	平成3年6月	Progress of Digestive Endoscopy(消化器内視鏡の進歩) 38巻 Page71-75(1991. 06)	極細径超音波プローブは挿入部最大径3.4 mm, 周波数7.5 MHz, ラジアル走査式であり, 胆管挿入は16 Frに拡張した経皮経肝胆管ドレナージ瘻孔より, 16 FrのPTCSチューブを通して行った。総胆管結石症9例, 上部胆管癌3例を含む悪性例6例に用いた。胆管周囲構造(門脈, 肝動脈, 脾頭, 主膵管, 十二指腸)が観察され, 胆管癌の管外侵襲の診断に有用だった。正常胆管壁は約2 mmの厚さであり, 胆管癌では肥厚した低エコー帯を認識し得たが, 胆管壁の微細な描出は不十分であった。(役割)筆頭著者として論文作成の主導的役割を果たした。(著者)一瀬 雅典(千葉大学 第2外科), 神津 照雄, 大島 郁也, 他
7. 超音波内視鏡下穿刺法の基礎的研究(第1報) (査読付)	共著	平成3年8月	Gastroenterological Endoscopy 33巻 8号 Page1657-1663(1991. 08)	電子リニア型超音波内視鏡EPE-703FL (7.5 MHz)およびEPB-503FS (5 MHz)を用い, また深部穿刺針(23G, 有効刺入長20 mm)および起立機構を試作して, 超音波内視鏡下穿刺法の基礎的研究を行った。経食道リンパ節穿刺モデルの穿刺吸引で試作針は十分な組織を採取でき, 雑種成犬の全麻下による経食道的リンパ穿刺実験では目標臓器への穿刺と安全性が確認された。以上より, 本法は体腔内深部組織診断に有用となる可能性が示唆された。(役割)各種実験を共同で行った。(著者)原田昇(千葉大学 第2外科), 神津照雄, 大島郁也, 一瀬雅典, 他
8. 総胆管結石および肝内結石に対する経皮的胆道鏡下截石術の検討	共著	平成3年12月	Progress of Digestive Endoscopy(消化器内視鏡の進歩) 39巻 Page41-46(1991. 12)	1) 総胆管結石症における経皮的胆道鏡下截石術 (PTCL)は、ハイリスク例や多次手術既往例の治療に有用である。2) 多彩な病型と胆管像を特徴とする肝内結石症においては、截石のみならず乳頭機能の温存や狭窄治療の面からも、PTCLが有用である。3) flashlamp laserは胆道鏡下截石の完全截石率の向上と、治療に要する胆道鏡施行回数減少に有用である。(役割)筆頭著者として論文作成の主導的役割を果たした。(著者)一瀬 雅典(千葉大学 第2外科), 神津 照雄, 原田 昇, 他

9. 巨大な肝外発育型肝細胞癌の1例 (査読付)	共著	平成5年1月	日本消化器外科学会雑誌26巻1号 Page121-125(1993. 01)	69歳男, 腹部腫瘍, 消化管出血を主訴にし, 諸検査にて肝外側区域より肝外発育を示し, 胃体中部前壁に直接浸潤した肝細胞癌と診断した. 手術は肝外側区域部分切除をともなった腫瘍摘出術および幽門側胃切除術を施行し, 腫瘍をen blocに切除した. 切除標本で腫瘍の大きさは19×16×13 cm, 重量は2, 120 gであり, 非癌部肝は高度の肝硬変を併存していた. (役割) 症例の術者であり, 治療を担当した. (著者) 天野 穂高(国立佐倉病院), 一瀬 雅典, 蜂巢 忠, 他
10. 著明なinflammatory polypを伴った逆流性食道炎の1例 (査読付)	共著	平成5年4月	胃と腸 28巻5号 Page471-477(1993. 04)	66歳男性. 胃潰瘍経過観察中に食事つかえ感が出現. 内視鏡検査で中下部食道に多数の隆起性病変とその口側の地図状びらんを認めた. ヨード染色で隆起性病変は不染, 口側びらん部分には濃染像を認めた. 生検組織は炎症細胞浸潤を伴う肉芽組織で, 逆流性食道炎に伴う炎症性変化と診断し, PPIを投与したところ多くの隆起は消失した. 病理診断は重層扁平上皮に覆われた線維化を伴うinflammatory polypであった. 類した症例の報告はなく極めてまれと思われた. (役割) 症例の臨床経過に関与した. (著者) 有馬美和子(千葉大学 第2外科), 神津照雄, 一瀬雅典, 他
11. 膵分節切除術および尾側膵空腸吻合術を施行したインスリノーマの1例 (査読付)	共著	平成5年10月	日本消化器外科学会雑誌26巻10号 Page2469-2472(1993. 10)	73歳女, 低血糖発作を主訴とし, 臨床所見および内分泌学的検査でインスリノーマが疑われた. 血管造影, dynamic computed tomographyで腫瘍は約1.0cmの濃染像として抽出され, 局在部位は胃十二指腸動脈と上腸間膜静脈の間であった. 術中超音波検査ではhypoechogenicな腫瘍像として描出され, 主膵管と接するように存在していた. 以上の所見より手術は膵管損傷の危険性, 残膵機能の温存を考慮し, 膵分節切除術および尾側膵空腸Roux-Y吻合術(Letton&Wilson法)を施行した. 術後経過は良好であり, 腫瘍の局在によっては考慮すべき1術式である. (役割) 論文報告症例の手術・治療に参画した (著者) 天野 穂高(千葉大学 第2外科), 蜂巢 忠, 一瀬 雅典, 他
12. 胆膵疾患における画像診断の新しい展開 胆道鏡下細径プローブ超音波検査法	共著	平成5年12月	胆と膵 14巻12号 Page1449-1456(1993. 12)	胆管内超音波法につき著者らの行っている経皮的挿入法を中心に, 手技・胆管並びに周囲構造のリエンテーション・周波数による画像の相違・有用性などにつき呈示した. 本法で胆管壁は高/低/高エコーの3層に描出され, 門脈/肝動脈/膵等の周囲構造も明瞭に観察される. 胆管癌の壁深達度診断・大血管浸潤診断などが可能であり, 今後機種開発によりさらなる有用性が見込まれる. (役割) 筆頭著者として論文作成の主導的役割を果たした. (著者) 一瀬 雅典(千葉大学 第2外科), 神津 照雄, 磯野可一
13. 胆管内索状架橋構造を認めた先天性胆道拡張症術後肝内結石症の1例 (査読付)	共著	平成6年2月	胆道 8巻1号 Page63-68(1994. 02)	24歳女性. 先天性胆道拡張症にて胆嚢総胆管左右肝管切除, 肝管空腸吻合術の施行後9ヶ月に肝内結石症を惹起し入院した. 経皮経肝胆道鏡にて食物繊維と思われる索状物を核とした結石を完全除去した. 吻合部狭窄はないが胆汁鬱滞や逆流が結石形成の原因と考えられた. この治療時に肝内の嚢腫状拡張胆管内を横断する粘膜に覆われた索状架橋構造物を認めた. こうした構造物の報告は本邦2例目であり, 内部に血管が走行していると考えられた. (役割) 筆頭著者として論文作成の主導的役割を果たした. (著者) 一瀬 雅典(千葉大学 第2外科), 菊池 俊之, 原田 昇, 他

14. ラジアル型細径超音波プローブによる肝外胆管癌の進展度診断	共著	平成6年7月	胃と腸 29巻8号 Page795-801(1994. 07)	ラジアル型細径超音波プローブを用いた胆管内超音波法 (IBUS) の肝外胆管癌進展度診断における有用性につき検討した。基礎的検討では、胆管壁内側高エコー層は粘膜層を含む境界エコー、中間低エコー層は主に線維筋層と外膜層、外側高エコー層は漿膜下層に対応し、腫瘍は低エコー層の肥厚として観察された。腫瘍エコーと血管の接触状態を基準として大血管浸潤の有無が診断可能 (正診率100%) であり、腫瘍エコーの外縁形状を基準に、外膜層を越えるか否かの壁深達度・膵浸潤診断が可能 (正診率91.7%) であった。(役割) 筆頭著者として論文作成の主導的役割を果たした。(著者) 一瀬 雅典 (千葉大学 第2外科), 神津 照雄, 浅野 武秀, 他
15. 魚骨穿通による肉芽性肝膿瘍の1例 (査読付)	共著	平成7年5月	日本消化器外科学会雑誌28巻5号 Page1095-1099(1995. 05)	56歳男。右上腹部痛を主訴にUS, CT, MRIにて肝後下区域 (S6) に腫瘍を認めたため、肝細胞癌と診断した。開腹の結果、魚骨が十二指腸より肝臓に穿通したための肉芽性膿瘍であった。魚骨除去、十二指腸縫合閉鎖術を施行し、良好な経過を得た。魚骨による消化管穿孔穿通例のうち肝臓への穿通例は極めてまれであり、診断にはCTや超音波検査の針状石灰化像に注目すれば正診可能と考えられた。(役割) 症例の手術に参画した。(著者) 松崎 弘志 (千葉大学 第2外科), 菊池 俊之, 一瀬 雅典, 他
16. 魚骨穿孔性腹膜炎の1治験例 (査読付)	共著	平成8年10月	日本腹部救急医学会雑誌16巻5号 Page987-989(1996. 10)	85歳男性。急性腹症にて近医より紹介入院。腹部筋性防御・腹膜刺激症状を認めたが、腹部レントゲンでは腹腔内遊離ガス増は認めず、虫垂炎または憩室炎による汎発性腹膜炎の診断で開腹手術施行。回腸末端から80cmの回腸に長さ2.5cmの魚骨片が刺さり穿孔していた。同部小腸を7cm切除した。術後呼吸器合併症併発したが軽快退院した。消化管穿孔の原因異物は本邦では魚骨による消化管穿孔が多く、その診断にはCTが有用であることが文献検索から示唆された。(役割) 症例の手術に参画した。(著者) 大島 郁也 (栃木厚生連塩谷総合病院), 紅谷 明, 一瀬 雅典
17. 胆管癌術前進展度診断における胆管腔内超音波法 (IDUS) の有用性の検討 三次元IDUSの有用性を含めて (査読付)	単著	平成9年12月	千葉医学雑誌 74巻4号 Page265-274(1998. 08)	基礎的検討では、IDUSにより胆管及び周囲構造の詳細な連続観察が可能であり、胆管壁の主体として観察される中間低エコー層が主に線維筋層と外膜層に対応し、腫瘍はこの低エコー層の肥厚として観察される事を確認した。臨床例での検討では、胆管横断面方向の進展 (垂直進展) について、膵外胆管では腫瘍エコー外縁形状から外膜層を越えるか否かの壁深達度診断、膵内胆管では外側高エコー断裂有無から膵浸潤診断が可能であった。また腫瘍エコーと血管壁の接触状態から血管浸潤の有無も診断可能であった。胆管長軸方向の進展 (水平進展) の診断は2D画像では客観的表現が困難であり、3D-IDUSはこの点をカバーでき有用と思われた。(役割) 学位論文。著者として論文を作成した。(著者) 一瀬 雅典 (千葉大学 医 第2外科)

<p>18. 胆管空腸吻合部良性狭窄にexpandable metallic stentを留置し6年後再狭窄をきたした1手術例 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成13年9月</p>	<p>日本消化器外科学会雑誌34巻9号 Page1424-1428(2001. 09)</p>	<p>71歳男. 1980年に他院にて施行した胆嚢摘出術・胆管切除・左右肝管空腸吻合術の10年後1990年に吻合部狭窄・肝内結石のため筆者らの施設で碎石後に左右吻合部にexpandable metallic stent(EMS)を留置した. 1996年に発熱・黄疸が出現し入院. 胆道造影で左胆管空腸吻合部の著明な狭窄を認め, 腹部造影CTでは左右肝内胆管拡張と肝右葉の著明な萎縮を認めた. 外瘻での減黄後に開腹手術施行. 左胆管空腸吻合部の狭窄部stentは癒痕組織に強固に埋没しており一部を除去し, 切開部空腸で左肝管をパッチするような形で吻合, 右葉は著しく萎縮していたため右吻合部はそのまま放置した. 術後2年を経過した現在, 経過は良好である. (役割)症例の内視鏡治療に参画した. (著者)松崎 弘志(千葉大学 第2外科), 岡住 慎一, 高山 亘, 竹田 明彦, 福長 徹, 一瀬 雅典, 岩崎 好太郎, 浅野 武秀, 落合 武徳</p>
<p>19. TS-1が奏効し16ヵ月投与継続している胃癌の1例 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成15年8月</p>	<p>癌と化学療法 30巻8号 Page1157-1160(2003. 08)</p>	<p>47歳女. 健診で胃角部変形を指摘され, 内視鏡で体下部小彎から幽門部を中心に3型病変を認め, 生検では印環細胞癌と診断された. 手術では空腸間膜に白色の結節を少量認め, 術中迅速病理検査で腹膜転移と診断され試験開腹とした. 術後TS-1 80mg/日を4週投与, 2週休薬を1コースとして化学療法を開始したところ奏効し, 4コース後には粘膜面の潰瘍性病変はほぼ消失したが, 6コース以後は内視鏡上の粘膜変化に相反し胃内腔の狭窄と胃壁肥厚を呈し, lentinanを2mg/週で併用し, 9コース目より少量のcisplatin併用し, 現在10コース目を投与中である. (役割)症例の主治医として長期担当した (筆者)坂田 治人(千葉大学 大学院 医学研究院 先端応用外科), 植松 武史, 望月 亮佑, 一瀬 雅典, 深澤 公明, 向井 稔, 落合 武徳</p>
<p>20. 内視鏡的胃粘膜切除術(EMR)における切開剥離法(ESD)の有用性</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年10月</p>	<p>栃木県医学会々誌 35巻 Page29-32(2005. 10)</p>	<p>内視鏡的粘膜切除術(EMR)施行148例177病変のうち, 胃のEMR76例92病変の成績を報告した. 手技は把持法49病変(A群), 吸引法15病変(B群), 切開剥離法(ESD)28病変(C群)で, 平均標本径は各群で15mm, 12mm, 25mm, 一括切除率は57. 1%, 20%, 88. 5%, 完全切除率は55. 1%, 35. 8%, 76. 9%であった. 1病巣切除に要する平均時間は22. 2分, 37. 2分, 60. 7分で, 偶発症発生率は24. 5%, 26. 6%, 53. 6%であった. 完全切除63病変では分割切除の腺腫1病変と一括切除の癌1病変に局所再発を認めたが, 後治療で保存的に治癒した. 不完全切除29病変のうち側方断端陽性のみの場合, 21病変中17病変が保存的手法でフォローされ, 手術は4病変のみであったが, 垂直断端陽性や深達度sm2以上では積極的に手術が行われていた. (役割)筆頭著者として論文作成の主導的役割を果たした. (著者)一瀬 雅典(栃木県厚生農業協同組合連合会塩谷総合病院 胃腸科), 奥山 和明, 植松 武史, 他</p>

21. 早期十二指腸乳頭部癌に経十二指腸乳頭部全切除術を施行し5年生存を得た1例 (査読付)	共著	平成19年6月	日本臨床外科学会雑誌 68巻6号 Page1442-1446(2007. 06)	早期乳頭部癌に経十二指腸乳頭部全切除術を施行して良好に経過し5年生存を得たので報告する。症例は63歳,女性。心窩部違和感の精査にて,腺腫または早期十二指腸乳頭部癌と診断し経十二指腸乳頭全切除を施行した。病理組織標本では露出腫瘍型の乳頭部癌で深達度はmでdu0, panc0, ew(-), t1, nx(p-stage I)であった。術後合併症なく25病日で退院後良好に経過し健在である。本手技は早期乳頭部癌症例に対し合併症も少なく有用であると考えられる。 (役割)症例の手術を考案し施行した。 (筆者)坂田 治人(千葉大学 医学研究院先端応用外科学), 植松 武史, 一瀬 雅典, 深澤 公朗, 阿久津 泰典, 松原 久裕
22. 両側副腎に腫瘍を形成した非Hodgkin悪性リンパ腫の1例 (査読付)	共著	平成20年4月	日本臨床外科学会雑誌 69巻4号 Page923-927(2008. 04)	症例は72歳,男性。食思不振を主訴に来院し,CTなどで両側副腎に腫瘍(右8cm,左5cm)を認め,ACTH上昇と,cortisol低下があり,副腎機能低下を呈していた。腫瘍径より悪性腫瘍を疑い,両側副腎摘出術を行った。病理組織学的所見では,非ホジキン B細胞悪性リンパ腫の1亜型であり,intravascular large B-cell lymphomaの診断であった。術後,化学療法を行い,再発を認めず生存中である。副腎原発のintravascular large B-cell lymphomaは極めて稀であり,本邦報告6例目である。 (役割)症例の手術を術者として施行した。 (筆者)外浦 功(栃木県厚生農業協同組合連合会塩谷総合病院 外科), 一瀬 雅典, 松原 久裕
23. 拡散MRI画像にて高信号を呈し悪性腫瘍と鑑別困難であった肝炎症性偽腫瘍の1例 (査読付)	共著	平成21年2月	日本臨床外科学会雑誌 70巻2号 Page475-480(2009. 02)	症例は75歳,女性。上腹部痛にて入院。38度を超える発熱と,採血にて著明な炎症所見を認めた。画像検査では肝後区域に径5cm大の腫瘍を認めた。造影CTで腫瘍辺縁と,内部が樹枝様に造影された。MRIではT1強調で低信号,T2強調で高信号,拡散強調MRIでは著明な高信号を呈した。腫瘍の急速な増大と,発熱持続による全身状態悪化が懸念され,画像上も悪性疾患が疑われ,肝切除術施行した。切除標本は径5cm大の境界明瞭,辺縁不整,弾性・軟な被膜のない黄白色充実性腫瘍で,病理組織学的に肝炎症性偽腫瘍と診断された。 (役割)症例の手術を術者として施行した。 (筆者)外浦 功(栃木県厚生農業協同組合連合会塩谷総合病院 外科), 一瀬 雅典, 松原 久裕
24. 大網裂孔ヘルニアによるイレウスの1例 (査読付)	共著	平成24年1月	日本臨床外科学会雑誌 73巻1号 Page143-147(2012. 01)	症例は40歳,男性。腹痛と嘔吐で当院受診。造影CT検査では腸管拡張および胃の背側に嵌り込んでいるような腸管を認め,腸閉塞の診断でイレウス管を挿入した。保存療法で改善せず手術を施行したところ,小腸が大網の裂孔より網嚢に入り込み,ゴルフボール大に嵌頓した状態であった。嵌頓部分を含め小腸を部分切除し,裂孔部を広く切開して網嚢腔を大きく開放した。大網裂孔ヘルニアは比較的稀な疾患であるが,手術歴のない腸閉塞では本症も念頭に置く必要があると思われた。 (役割)筆頭筆者の論文作成を監督した。 (筆者)碓井 麻美(国際医療福祉大学塩谷病院 外科), 一瀬 雅典, 嶋尾 仁, 竹田 明彦, 深澤 公朗, 松原 久裕

<p>25. 急速に腫大する卵巣腫瘍に対して Cytokeratin 7/20の免疫組織染色によりS状結腸癌卵巣転移と診断した1例</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年3月</p>	<p>産婦人科の実際 66巻3号 Page369-373 (2017. 03)</p>	<p>35歳女性. S状結腸癌根治切除後1年のCTで腹水貯留と右卵巣の腫大(22cm大)を認め、CEA値再上昇を認めた. 超音波断層法で22×19×10cmに腫大した多房性嚢腫状卵巣内に充実性成分を認め、腹水貯留を確認し、卵巣悪性腫瘍と診断したが、原発かS状結腸癌からの転移かの鑑別困難であった. 卵巣悪性腫瘍の診断で、単純子宮全摘出術、両側卵巣・卵管切除術および大網部分切除術を施行したが、病理結果は中等度分化型腺癌でS状結腸癌の組織像と類似した. cytokeratin 7陰性、20陽性で、状結腸癌卵巣転移と診断した. (役割)症例の大腸手術を施行した. (筆者)柿沼 薫(国際医療福祉大学病院 産婦人科), 大和田 倫孝, 田川 実紀, 今井 賢, 野中 宏亮, 柿沼 敏行, 岡田 真也, 一瀬 雅典</p>
<p>(その他) 1. クリップ止血法</p>	<p>共著</p>	<p>平成2年10月</p>	<p>臨床外科 第45巻 10号 Page1203-1206(1990. 10)</p>	<p>出血血管を物理的に把持止血することは、外科手術における最も確実な止血法であるが、最近開発されたオリンパス社製HX-3Lによる経内視鏡的クリップ止血術も、外科手術の結紮に相当する確実な止血手技である。本稿ではクリップ止血法の手技・適応・止血症例の実際と成績・安全性などについて解説する。予防止血やマーキングなどへの応用もできる本法は一般病院に適した手技と考える。 (役割)症例での使用・成績に関与参画した。(著者)蜂巢 忠(国立佐倉病院), 一瀬 雅典, 佐藤 慎一, 他</p>
<p>2. 肝・胆・膵の内視鏡下外科手術 経皮経肝的胆管結石切石術 (PTCL, PTCCL)</p>	<p>共著</p>	<p>平成4年11月</p>	<p>外科 54巻12号 Page1376-1383(1992. 11)</p>	<p>経皮経肝的胆道結石切石術 (PTCL・PTCCL) の適応・手技・合併症とその対策について言及した。経皮経肝的切石術は肝内結石症に対する有用性は高く、総胆管結石症や胆嚢結石症では他の治療法を補完する位置づけである。手技的には挿入経路の作成は作業効率のみならず合併症回避の点でも重要である。切石にはEHLやレーザーなどの先進的医療機器の開発・使用が切石効率を上げるため、ますますの機器発展が望まれる。 (役割)データの収集・解析を行った。(著者)神津 照雄(千葉大学 第2外科), 一瀬 雅典, 菊池 俊之, 他</p>
<p>3. 早期食道癌の深達度診断</p>	<p>共著</p>	<p>平成4年9月</p>	<p>消化器外科 第15巻10号 Page1717-1727(1992. 09)</p>	<p>表在食道癌の正確な術前深達度診断が要求される時代になってきた。病理組織学的にも細かい深達度分類が提案され、第8版の食道癌取り扱い規約も刊行され、型分類である程度の深達度分類ができるようになってきたが、IIcには現行分類ではmm癌の浅いものからsm癌の深いものまでが含まれてしまう。陥凹面平滑なものをIIcと定義すれば0-II型が殆ど粘膜癌に入る。細径超音波プローブ開発で直接的所見で粘膜癌の診断の可能性も出てきており、今後討論されるであろう粘膜癌の細分類につきep癌/lpm癌/mm癌とする筆者らの分類を呈示した。 (役割)データの収集・解析を行った。(著者)神津 照雄(千葉大学 第2外科), 山田 英夫, 有馬 美和子, 二宮栄一郎, 原田 昇, 一瀬 雅典, 吉村 清司, 小出 義雄, 磯野 可一</p>

4. 【消化管狭窄への挑戦】 消化管良性・瘢痕狭窄に対する内視鏡的拡張術の変遷と現状、未来	共著	平成25年5月	消化器内視鏡 25巻5号 Page628-633(2013. 05)	内視鏡的拡張術は器械的拡張法, 切開法, 凝固蒸散法, ステント挿入法に分類され, 手技の主体は器械的拡張術である。1990年頃までは硬性ブジーが主体で水銀ブジー, Eder-Puestowダイレーター, Celestinダイレーター, Savary-Gilliardダイレーターが用いられたが, その後, TTS(through-the-scope)型バルーンが開発されて爆発的な拡がりをみせ, 今日の狭窄治療の第一選択手技となった。高周波メスによる切開法は, 難治性の狭窄に用いられ, ステロイドの局注も併用されている。繰り返す難治性狭窄にプラスチックステントの有用性が期待されているが, 本邦では導入されていない。(役割)実症例での使用、論文作成に関与した。(著者)嶋尾 仁(国際医療福祉大学塩谷病院 消化器外科), 一瀬 雅典, 深澤 公朗, 蔵田 能裕, 山根 建樹
5. 【PEGの現状】 PEGおよび関連手技 Pull/Push法	共著	平成25年8月	臨床消化器内科 28巻10号 Page1353-1360(2013. 08)	内視鏡的胃瘻造設術は, 本邦では留置するカテーテルが口腔内を通過するか否かで Pull/Push法と Introducer法の二つに分類するのが一般的である。Pull/Push法は今日でも造設手技の6割近くを占め, もっとも多く用いられている。ただこのうちPush法は非常に使用頻度が少なく5%以下となっている。術直後のカテーテル抜去の偶発症やカテーテル交換時の腹腔内誤留置を防止するために, 胃瘻造設に先立ち胃壁固定を3~4ヶ所で行うことが推奨されている。多くの症例がこの方法の適応となるが, 残胃や小腸に留置する場合, 腹壁の非常に厚い症例にはとくに推奨される。(役割)実症例での使用、論文作成に関与した。(著者)嶋尾 仁(国際医療福祉大学塩谷病院 消化器外科), 一瀬 雅典, 深澤 公朗, 蔵田 能裕, 山根 建樹
(その他・症例報告等)	—			
1) 肝Biliary Cystadenocarcinomaの1治験例	—	昭和62年12月	第768回千葉医学会例会 (1988. 12)	
2) 肝嚢胞腺癌の1治験例	—	昭和63年11月	日本臨床外科医学会集談会(1989. 11)	
3) 非機能性膵内分泌腫瘍の1例	—	昭和63年12月	第787回千葉医学会例会 (1989. 12)	
4) 改良型クリップ装置(HX-3L)の下部消化管における有用性	—	平成元年11月	第38回日本消化器内視鏡学会総会(1989. 11)	
5) 経内視鏡的クリップ止血後胃切除術を施行した出血性難治性胃潰瘍の1例	—	平成元年12月	第49回日本消化器内視鏡学会関東地方会(1989. 12. 8-9)	
6) 腸間膜fibrosarcomaの1手術例	—	平成2年2月	第35回日本消化器外科学会総会(1990. 2)	
7) 胆管癌におけるminiature ultrasonic probe (prototyre)の使用経験	—	平成2年11月	第40回日本消化器内視鏡学会総会(1990. 11. 28-30)	
8) 超音波内視鏡に求めるもの 胆道疾患診断におけるMiniature Ultrasonic Probeの有用	—	平成9年4月	第51回日本消化器内視鏡学会関東地方会(1990. 12. 6-7)	
8) Miniature Ultrasonic Probeによる胆管悪性病変の診断	—	平成3年5月	第41回日本消化器内視鏡学会総会(1991. 5. 15-17)	
9) 総胆管結石および肝内結石に対する経皮的胆道鏡下截石術の検討	—	平成3年6月	第52回日本消化器内視鏡学会関東地方会(1991. 6. 28-29)	

10)胆管内腔からの超音波走査による胆管病変の新しい診断法	—	平成3年7月	第38回日本消化器外科学会総会(1991.7)
11)胆管内腔からの超音波走査による胆管悪性病変の診断 極細径超音波プローブの有用性	—	平成3年9月	第27回日本胆道学会総会(1991.9.19-20)
12)細径超音波プローブによる胆管癌の診断 放射線治療例の効果判定における有用性	—	平成3年11月	第42回日本消化器内視鏡学会総会(1991.11)
13)細径超音波プローブによる胆道疾患診断の新たな展開 新型高周波プローブの有用性	—	平成4年10月	第44回日本消化器内視鏡学会総会(1992.10.29-31)
14)経胆管的超音波法による胆管癌の進展度診断	—	平成5年9月	JDDW1993 第29回日本胆道学会総会(1993.9.20-24)
15)ミニチュアプローブによる胆道癌の進展度診断-外科標本との対比-	—	平成5年9月	JDDW1993 第3回国際胆膵治療内視鏡シンポジウム(1993.9.23)
16)「胆道領域における3次元表示管内超音波(3D-IDUS)の意義」	—	平成9年4月	DDW-Japan1997 第33回胆道学会総会(1997.4.17-20)
17)「当院における内視鏡的胃粘膜切除術症例の検討」	—	平成15年12月	第1072回千葉医学会例会(2003.12.20-21)
18)EMR不完全切除に対する胃切除術後7ヶ月で多発肝転移・吻合部再発をきたした中分化型sm浸潤胃癌の1例	—	平成16年5月	第67回日本消化器内視鏡学会総会(2004.5.26-27)
19)「当院における内視鏡的胃粘膜切除術(EMR)の現状-胃症例を中心に」	—	平成16年11月	第44回栃木県総合医学会(2004.11.13)
20)「当院における大腸癌治療の現況」	—	平成23年12月	第1232回千葉医学会例会(2011.12.11-12)
21)「当院における大腸癌肝転移の治療成績」	—	平成25年12月	第1274回千葉医学会例会(2013.12.14-15)
22)「当院における消化管穿孔に対する治療選択と成績」	—	平成26年12月	第1296回千葉医学会例会(2014.12.13-14)
23)「国際医療福祉大学塩谷病院における鏡視下手術の現状」	—	平成27年12月	第1320回千葉医学会例会(2015.12.19-20)

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 稲井 広夢				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文) 1) Risk factors for chronic kidney disease after chemotherapy for testicular cancer	共著	2012年11月	International Journal of Urology, 20(7): 716- 722	Hiromu Inai, Koji Kawai, Atsushi Ikeda, Satoshi Ando, Tomokazu Kimura, Takehiro Oikawa, Mizuki Onozawa, Jun Miyazaki, Katsunori Uchida, Hiroyuki Nishimura
2) Oncological outcomes of metastatic testicular cancers under centralized management through regional medical network	共著	2013年12月	Japanese Journal of Clinical Oncology 2013; 43(12) 1249-1254	Hiromu Inai, Koji Kawai, Takahiro Kojima, Akira Joraku, Toru Shimazui, Atsushi Yamauchi, Tomoaki Miyagawa, Tsuyoshi Endo, Yoshiharu Fukuhara, Jun Miyazaki, Katsunori Uchida and Hiroyuki Nishiyama
(その他、学会発表) 該当なし				

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 井桁 龍平				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
医歯薬学		(1)集中治療医学、(3)救急蘇生学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 臨床現場での患者安全への取り組み M&Mカンファレンスの実践	共著	2017年12月	治療 99(12), 1566-1572頁	M&Mの実践の仕方を具体例を用いて紹介した。 担当：筆頭著者として文献的考察を元に執筆を行った。 井桁龍平, 志賀隆
2 迅速導入気管挿管:RSI プラクティスは7つのP's	共著	2019年10月	INTENSIVIST 気道 11(4), 669-682頁	RSIの概念、手法、禁忌などに関して、エビデンスを交えて解説している。すでにRSIは欧米では緊急気管挿管の標準的な手法として広く用いられており、本邦の救急集中治療医も習熟しておくべき技術と言える。しかしRSIは挿管成功率を高め、合併症を減らしうるが、最悪CVCIなどの危機的な状況を招く可能性もあり、そのリスクとベネフィットをよく理解し、7P'sに準じた周到な準備が重要である。 担当：筆頭著者として文献的考察を元に執筆を行った。 井桁龍平, 岡本賢太郎
(学術論文) 1 Compartment syndrome due to Capnocytophaga canimorsus infection: A case report コンパートメント症候群を併発したCapnocytophaga canimorsus感染症 (査読付)	共著	2020年1月	Acute Medicine & Surgery Jan 1:7(1), 474頁	Capnocytophaga canimorsus感染症によるコンパートメント症候群を経験した。コンパートメント症候群は肺炎球菌感染などでは報告はあるがCapnocytophagaでは報告例はない。今回我々はCapnocytophagaにコンパートメント症候群を併発し急激な経過を辿った1例を経験したため報告する。 担当：筆頭著者として文献的考察を元に執筆を行った。 Ryuhei Igeta, Hsiang-Chin Hsu, Michio Suzuki, Alan T. Lefor, Jumpei Tsukuda, Takuro Endo, Rimi Tanii, Yasuhiko Taira, Shigeki Fujitani
(その他) (学会発表) 1 急性膿胸により高アンモニア血症、意識障害を来した一例	—	2017年9月	第32回日本救命医療学会 総会・学術集会(横浜)	内容：urease産生菌による急性膿胸により高アンモニア血症を来した症例を報告した。 発表者：加納誠也, 岡本賢太郎, 川口剛史, 永富彰仁, 井桁龍平, 遠藤拓郎, 藤谷茂樹, 平泰彦
2 t-NIRSから予測される脳循環と血液ガスから予測される体循環の比較に基づいた重症病態の把握	—	2018年6月	日本集中治療医学会第2 回関東甲信越支部学術集会(栃木)	内容：重症病態における脳循環をt-NIRSを用いることでどう反映されるかを検討した。 発表者：川口剛史, 津久田純平, 福田俊輔, 井桁龍平, 吉田英樹, 加納誠也, 森川大樹, 岡本賢太郎, 田北無門, 内藤貴基, 高松由佳, 藤井修一, 西山幸子, 遠藤拓郎, 永富彰仁, 尾崎将之, 森澤健一郎, 下澤信彦, 藤谷茂樹, 平泰彦

3 walk-in 患者に対するNEWSの有用性の検討	—	2018年11月	第46回日本救急医学会総会学術集会(横浜)	内容：walk in患者のトリアージ時点でのバイタルサインをNEWSで評価し、入院(重症度含め)・帰宅の転機に相関があるか検討した。軽症例が多い中NEWSが高いと入院率が高い傾向にあったが虫垂炎などNEWSが高値でなくても入院適応となる疾患群もいたため今後は症候学も加味したトリアージシステムが有用と考えられた。 発表者：井桁龍平, 津久田純平, 吉田英樹, 岡本賢太郎, 川口剛史, 内藤貴基, 藤井修一, 森澤健一郎, 下澤信彦, 藤谷茂樹, 平泰彦
4 院外心停止症例の予後予測における初回TOI値の有用性	—	2018年11月	第46回日本救急医学会総会学術集会(横浜)	内容：心肺蘇生の際様々な予後指標が用いられているが、初回TOI値を使用して予後評価を行った症例を報告する。 発表者：川口剛史, 津久田純平, 藤井修一, 井桁龍平, 吉田英樹, 内藤貴基, 田北無門, 岡本賢太郎, 森澤健一郎, 藤谷茂樹, 平泰彦
5 NIRSを指標とした心肺蘇生の可能性を示した一例	—	2019年3月	第46回日本集中治療医学会学術集会(京都)	内容：心肺蘇生の際様々な予後指標が用いられているが、NIRSを使用して予後評価を行った症例を報告する。 発表者：川口剛史, 津久田純平, 井桁龍平, 藤井修一, 田北無門, 岡本賢太郎, 内藤貴基, 森澤健一郎, 藤谷茂樹, 平泰彦
6 Capnocytophaga canimorsus 感染症により四肢コンパートメント症候群を発症し急速な転帰を辿った1症例	—	2019年3月	第46回日本集中治療医学会学術集会(京都)	内容：Capnocytophaga canimorsus感染症によるコンパートメント症候群を経験した。コンパートメント症候群は肺炎球菌感染などでは報告はあるがCapnocytophagaでは報告例はない。今回我々はCapnocytophagaにコンパートメント症候群を併発し急激な経過を辿った1例を経験したため報告する。 発表者：尾上梨郁, 井桁龍平, 福田俊輔, 遠藤拓郎, 岡本賢太郎, 藤井修一, 森澤健一郎, 下澤信彦, 藤谷茂樹, 平泰彦
7 救急隊接触時バイタルから算出されるNational early warning scoreは搬送後の死亡予測において有用である	—	2019年10月	第47回日本救急医学会総会・学術集会(東京都千代田区)	内容：救急隊接触時からNEWSを算出しその後の死亡率との相関を検討した。 発表者：遠藤拓郎, 尾上梨郁, 清水剛治, 井桁龍平, 福田俊輔, 津久田純平, 森澤健一郎, 下澤信彦, 吉田徹, 藤谷茂樹, 平泰彦

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 井坂 由莉
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
医学分野 呼吸器内科学		COPD、サルコイドーシス		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1 右外転神経麻痺による複視で発症したサルコイドーシスの一例(査読付)	共著	2018年10月	日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会雑誌 38巻(1_2), 76-80	症例は53歳男性, 咳嗽, 複視, 頭痛で受診し, 右外転神経麻痺を指摘された。他疾患が否定的で, 縦隔リンパ節の腫大を認めた。ぶどう膜炎も併存していた。経気管支肺生検で非乾酪性類上皮細胞肉芽腫を認め, サルコイドーシスの組織診断群と診断した。神経サルコイドーシスとしては比較的稀な右外転神経の単独麻痺を呈した貴重な症例であり, 文献的考察を交えて報告する。 分担: 症例提示部分のデータのまとめ, および考察部分の内容の議論に参加した。 川述 剛士, 桑原 聖和, 井坂 由莉, 岡谷 匡, 佐藤 峻, 田中 萌, 田中 健介, 福岡 みずき, 河野千代子, 氷室 圭一, 山田 嘉仁
(その他・学会発表) 1 部分肺静脈還流異常症の一例	一	2016年10月	第53回 日本臨床生理学会総会、東京都千代田区	58才女性。健診で胸部レントゲン異常を認め, 造影CTで左上肺静脈が左上大静脈遺残部へ異常還流する像を認め, 部分肺静脈還流異常症と診断した。血液検査等に異常はなかった。右心カテーテル検査でUpper-SVCからLower-SVCの間で酸素飽和度のstep upを認めた。心房中隔欠損症は伴わず, 平均肺動脈圧11mmHg, Qp/Qs1.44であり, 手術は行わず経過観察とした。 井坂由莉, 永田淳, 伊藤誠, 露崎淳一, 山内圭太, 篠原昌夫, 家里憲, 黒田文伸, 佐々木篤志, 笠井大, 杉浦寿彦
2 神経性食思不振症を背景に緑膿菌肺膿瘍を来した一例	一	2018年2月	第228回 日本呼吸器学会関東地方会、東京都千代田区	33才女性。神経性無食欲症を背景として緑膿菌肺膿瘍を来した。ビベラシリン/タゾバクタムで改善傾向となり4週目に退院した後, シタフロキサシン内服を継続し, 合計4か月の治療期間を要した。市中肺炎で緑膿菌が起炎菌となる頻度は低く, リスク因子として気管支拡張症等が知られるが神経性無食欲症の報告はない。 井坂由莉, 桑原聖和, 佐藤峻, 田中萌, 岡谷匡, 川述剛士, 田中健介, 鈴木未佳, 福岡みずき, 河野千代子, 山田嘉仁
3 非小細胞肺癌に対するEGFR-TKIによる薬剤性肺障害の臨床的検討	一	2019年4月	第59回日本呼吸器学会学術講演会、東京都千代田区	当院でEGFR-TKIによる薬剤性肺障害が出現した症例を後方視的に検討した。発症危険因子として高齢, 治療前KL-6高値, PS不良が挙げられた。死亡の危険因子として, PS不良(特に2以上), およびHRCT画像がDADパターンであることが挙げられた。Late lineでのEGFR-TKI投与は, TKI-ILDの発症率とは関連がないが, 重症化や死亡率とは関連がありそうな傾向が見られた。さらなる解明により発症予測が可能となれば, 致命的なTKI-ILDを減らせるのではないかと期待される。 井坂由莉, 石田友邦, 北原慎介, 桑原聖和, 岡谷匡, 川述剛士, 田中健介, 鈴木未佳, 河野千代子, 山田嘉仁
4 多発右冠動脈右室瘻の右室容量負荷により卵円孔開存から右左シャントを呈した79才男性	一	2019年11月	第237回 日本呼吸器学会関東地方会、東京都千代田区	79歳男性。塵肺の安定経過中に低酸素血症が出現。肺換気血流シンチグラフィーでミスマッチはなく, 15%の右左シャントを認めた。心エコーで右心拡大, 開存した卵円孔から右左シャントを認めた。両心カテーテル検査で多発右冠動脈右室瘻を認め, 平均肺動脈圧は正常。卵円孔により容量負荷が軽減され肺高血圧や心不全を来たさず高齢まで経過し得た可能性がある。 井坂由莉, 須田理香, 山本慶子, 杉浦寿彦, 重田文子, 坂尾誠一郎, 田邊信宏, 巽浩一郎, 加藤央隼, 館野馨

教 育 研 究 業 績 書

氏名 内田 恵博

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
乳癌の治療、診断、基礎研究		外科治療、薬物療法、画像診断、分子生物学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 膵内分泌腫瘍 新外科学体系27B	共著	1989年	中山書店	新外科学体系27B、膵臓の外科II、 腫瘍および類似疾患 V. 膵内分泌腫瘍 pp.212-257 内田恵博、黒田慧、森岡恭彦 膵内分泌腫瘍の診断、外科的治療を網羅的に 書いた教科書
2再発乳癌治療ガイドブック	共著	2002年11月	南江堂	乳癌の再発部位別の診断方法を詳細に記載 筆頭著者 安達勇 他編 2章 検査法と評価 A. 再発部位の診断法 6. その他(腹膜、心嚢膜、脊髄など) この部位は内田恵博の単独
3乳癌治療のコツと落とし穴	共著	2004年8月30日	中山書店	乳癌の再発部位別の診断方法を詳細に記載 編集者：霞富士夫 ①手術：手術術式の選択法 p.68 この部分は内田恵博の単独 ②手術、手術術式の選択法；乳房温存手術 の整容性 p.114 この部分は内田恵博の単独
4癌のリハビリテーション	共著	2006年3月20日	金原出版	癌のリハビリテーション、乳癌、pp189-195 この部分は内田恵博が単独 編集者：辻哲也、黒宇明元、 癌のリハビリが一般的でないときに書いた 癌のリハビリの本
(学術論文) 1 RADIOIMMUNOASSAY of c-myc PROTEIN (査読付)	共著	1986年	Jpn J Cancer Res pp:615-619	日本語題目：c-mycタンパクのラジオ・ イムノアッセイ(RIA) この論文のほとんどを自分で行った。 共著者：Yoshihiro Uchida, Ken Yamaguchi c-myc遺伝子の構造解析から表面に露出している と考える部位のペプチドを合成し、それに対する 抗体作成。C-mycタンパクの抽出法と存在量の 測定を行うRIA系を世界で最初に作成した
2 Lower Incidence of K-ras 12 Mutation In Flat Colorectal Adenomas than In Polypoid Adenomas (査読付)	共著	1994年	Jpn J Cancer Res pp:147-151	日本語題目：K-rasのcodon12の点突然変異の頻 度は隆起型腺種と比較して平坦型選手で低い 共著者：Seiichi Yamagata, Tetsuichiro Muto, Yoshihiro Uchida この研究のほとんどは内田恵博が行った。 現在ではK-ras遺伝子の変異が治療の方針を決め ているが、それ以前の研究。全癌病変であると 考えられている2つの病変で変異の有無に差が あることを示した。
3 Polypoid Growth and K-ras Codon Mutation In colorectal cancer (査読付)	共著	1995年	Cancer pp:953-957	日本語題目：大腸がんにおけるポリープ様生育 とk-ras遺伝子の点突然変異 共著者：Seiichi Yamagata, Yoshihiro Uchida この二人で実験の大部分は行った 2の論文を発展させたもので、癌のタイプにより RAS遺伝子の変化がことなることを報告した。 私が指導した医師が、この論文で博士号を取得
4 Magnetic resonance galactography for a patient with nipple discharge (査読付)	共著	1997年	Breast Ca. Res. Treat. pp:87-90	日本語題目：乳頭分泌症例のMRIによる乳管造影 共著者：Masataka Yoshimoto, Fujio Kasumi, Takuji Iwase, Kaoru Takahashi, Takashi Tada and Yoshihiro Uchida 研究全般にかかわった

5 Surgical treatment of hepatic metastases from breast cancer(査読付)	共著	2000年	Breast Ca. Res. Treat. pp:177-184	乳房のMRI診断の論文 日本語題目：乳癌肝転移の外科的治療 共著者：Masataka Yoshimoto, Takashi Tada, Kaoru Takahashi, Masujiro Makita, Yoshihiro Uchida, and Fujio Kasumi 研究全般にかかわった 乳癌の肝転移病巣を外科的に切除した場合の治療効果の論文
6 Results of a Randomized Phase III Trial Comparing High Dose Mitomycin C (MMC) Administered (Pts) Immediately After Surgery Followed by CMF and CMF Alone in Node-Positive, Premenopausal Breast Cancer (BC) Patients (査読付)	共著	2000年	Proc Am Soc Clin Oncol	日本語題目：閉経前乳がん術後でリンパ節転移が見られた患者に対するCMF単独とCMF+MMCの効果を見た無作為第Ⅲ相試験の結果 共著者：Masataka Yoshimoto, Mitsue Saito, Tada Takashi, Kaoru Takahashi, Masujiro Makita, Yoshihiro Uchida, Fujio Kasumi 研究全般にかかわった 抗がん剤治療の無作為試験の論文
7 Surgery for Ductal Carcinoma in situ (査読付)	共著	2000年	Breast Cancer pp:337-340	日本語題目：非浸潤性乳管癌の外科的治療 共著者：Kaoru Takahashi, Mitsue Saito, Masujiro Makita, Takashi Tada, Yoshihiro Uchida, Masataka Yoshimoto, Fujio Kasumi, Futoshi Akiyama, and Goi Sakamoto 研究全般にかかわった 診断技術が進んできたので非浸潤癌も温存療法が可能になってきたという論文
8 Comparison of FDG PET and SPECT for Detection of Bone Metastases in Breast Cancer (査読付)	共著	2005年	AJ Roentgenology pp:1266-1273	日本語題目：乳癌骨転移におけるFDG-PETとSPECTの骨転移検出率の検討 共著者：Takayoshi Uematsu, Sachiko Yuen, Seigo Yukisawa, Takeshi Aramaki, Masahiro Endo, Yoshihiro Uchida, Junichiro Watanabe 研究全般にかかわった 骨転移検出にはPETCTよりSPECTのほうが優れているという論文
9 Magnetic resonance imaging findings in an axillary accessory breast fibroadenoma (査読付)	共著	2005年	Breast J pp:493-494	日本語題目：腋窩部副乳腺に生じた線維腺腫のMRI所見 共著者：Yuen S, Uematsu T, Uchida Y, Kasami M, Yukisawa S, Aramaki T, Morimoto N, Endo M, Furukawa H 研究全般にかかわった MRI画像診断の論文
10 Dynamic contrast-enhanced MR imaging in screening detected microcalcification lesions of the breast: is there any value? (査読付)	共著	2007年	Breast Ca. Res Treat. pp:269-81	日本語題目：MMGの石灰化症例をMRIでスクリーニングするかちはあるか？ 共著者：Uematsu T, Yuen S, Kasami M, Uchida Y. 研究全般にかかわった 微細石灰化例でマンモトーム生検を行う前に乳房MRI検査を行うことは価値があるという論文
11 Breast carcinomas with strong high-signal intensity on T2-weighted MR images:Pathological characteristics and differential diagnosis (査読付)	共著	2007年	J Magn Reson Imaging pp:502-510	日本語題目：MRI T2画像の乳癌診断における意義 共著者：Sachiko Yuen , Takayoshi Uematsu , Masako Kasami , Kumiko Tanaka , Kiyomi Kimura , Junichi Sanuki , Yoshihiro Uchida , Hiroyoshi Furukawa 研究全般にかかわった 乳癌のMRI診断に関する論文
12 Ultrasonographically Guided 18-Gauge Automated Core Needle Breast Biopsy with Post-Fire Needle Position Verification (PNPV) (査読付)	共著	2007年	Breast Cancer pp:219-228	日本語題目：エコーガイドCNB施行時に正確に針生検が行われているかを見る方法 共著者：Takayoshi Uematsu, Masako Kasami, Yoshihiro Uchida, Sachiko Yuen, Junichi Sanuki, Kiyomi Kimura, Kumiko Tanaka 研究全般にかかわった まだ乳癌の診断が細胞診主流だった時代に、CNBの行い方などを書いたもの
13 Preoperative computed tomography-guided percutaneous hookwire	共著	2007年	Acta Radiol pp:483487	日本語題目：マンモトーム施行時に挿入されたマークマイクロ位置を正確に示し、容易に手術可能にしたCT誘導フックワイア挿入法

<p>localization of metallic marker clips in the breast with a radial approach: Initial Experience</p> <p>(査読付)</p>	共著	2007年	Acta Radiol pp:714-720	<p>共著者: Uematsu T, Kasami M, Uchida Y, Sanuki J, Kimura K, Tanaka K, Takahashi K</p> <p>全般にかかわった</p> <p>CTによる微小病変の手術のためのマーキング方法を書いた論文</p> <p>日本語題目: MMGの石灰化を読影する際のディスプレイ別の影響について</p> <p>共著者: Uematsu T, Kasami M, Uchida Y</p> <p>全般にかかわった</p>
<p>14 Soft-copy reading in digital mammography of microcalcifications: diagnostic performance of a 5-megapixel cathode ray tube monitor versus a 3-megapixel liquid crystal display monitor in a clinical setting 15 Comparison of magnetic resonance imaging, multidetectorrow computed tomography, ultrasonography, and for tumor extension of mammography breast cancer</p> <p>(査読付)</p>	共著	2008年	Breast Ca. Res Treat. pp:461-74	<p>日本語題目: MRI、CT、超音波検査、MMGの乳癌画像の比較検討</p> <p>共著者: Uematsu T, Yuen S, Kasami M, Uchida Y</p> <p>全般にかかわった</p>
<p>16 Comparison of estrogen receptor, progesterone receptor and Her-2 status in breast cancer pre- and post-neoadjuvant chemotherapy</p> <p>(査読付)</p>	共著	2008年	The Breast pp:523-527,	<p>日本語題目: 術前抗がん剤治療前後のER、PgR、HER2の乳癌プロファイルの変化の比較</p> <p>共著者: M. Kasami, T. Uematsu, M. Honda, T. Yabuzaki, J. Sanuki, Y. Uchida, H. Sugimura Uematsu Takayoshi</p> <p>全般にかかわった</p>
<p>17 Segmental enhancement on breast MR images: differential diagnosis and diagnostic strategy</p>	共著	2008年	Eur Radiol pp:2067-2075	<p>日本語題目: 乳癌のMRIにおける区域性造影</p> <p>共著者: Sachiko Yuen, Takayoshi Uematsu, Kasami Masako, Yoshihiro Uchida, Tsunehiko Nishimura</p> <p>全般にかかわった</p>
<p>18 Morphologic Study of Nipple-Areola Complex in 600 Breasts (査読付)</p>	共著	2009年	Aesthetic Plastic Surge pp:295-297	<p>日本語題目: 600例から見た乳頭の形状</p> <p>共著者: Jun-ichi Sanuki, Eisuke Fukuma, Yoshihiro Uchida</p> <p>全般にかかわった</p>
<p>19 Axillary mass suspected to be occult breast carcinoma: a case study of skipped axillary lymph node metastasis from endometrial carcinoma</p>	共著	2009年	Breast Cancer pp:72-76	<p>日本語題目: 腋窩に転移した診断に針生検が有効であった共著者: unichi Sanuki, Yoshihiro Uchida, Takayoshi Uematsu, Yoshiharu Yamada, Masako Kasami</p> <p>全般にかかわった</p>
<p>in which core-needle biopsy was useful for diagnosis</p> <p>20 A RETROSPECTIVE COMPARATIVE ANALYSIS ON EFFICACY OF ERIBULIN MESYLATE WITH TAXANE REGIMENS</p> <p>(INCLUDING COMBINATION WITH BEVACIZUMAB):</p>	共著	2015年	The Breast	<p>日本語題目: 再発乳癌に対して抗癌剤のエリブリンで投与群は生存期間が延長するとの後ろ向き試験</p> <p>共著者: Yasuko Kikuchi, Kazuo Shirakawa, Hajime Kanauchi, Takako Wakeda, Takayoshi Niwa, Kotoe Nishioka, Keiichirou Tada, Yoshihiro Uchida</p> <p>全般にかかわった</p>
<p>(その他)</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>:</p>				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 内海 裕也
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学分野 臨床医学系 神経内科学		1)臨床神経内科学、2)不随意運動学、3)パーキンソン病学、4)頭痛学 5)神経免疫学		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1「頭の痛くならない 頭痛の本」	共著	1986年	予防健康出版社	頭痛の原因、症状、検査法、治療法及び、それぞれの頭痛に対する対処法について概説した一般向け啓発書。 著者：内海裕也 監修：檜林博太郎 p. 1-59
2「内科学Ⅳ」	共著	1999年	文光堂	中毒性神経疾患、中枢神経に及ぼす中毒物質、金属、農薬、アルコール、食中毒、有機溶剤、ガス中毒、麻薬・覚せい剤中毒についての概説。 著者：内海裕也、湯浅龍彦 監修：黒川 清、松澤佑次 p. 1669-1673
3「ステロイドを使うといわれたとき」	共著	1999年	保健同人社	神経の病気とステロイド療法、神経免疫疾患、多発性硬化症、重症筋無力症等について、原因、検査、治療法を概説し、それぞれの疾患におけるステロイドの使用法を説明した一般向け啓発書。 著者：内海裕也、佐藤猛 監修：橋本博史 p. 233-239
4「基本的臨床技能ビジュアルテキスト改訂第2版」	共著	2003年	医学書院	神経の診察、東京医大におけるOSCE実施に際し、医学部学生が修得しなければならない基本的臨床技能の神経診察、手技と観察要点を、写真を多用して解説したもの。 著者：内海裕也 監修：松岡 健 p. 66-91
5「ダイナミックメディスン5」	共著	2003年	西村書店	中毒性神経疾患、中枢神経に及ぼす中毒物質、金属、農薬、アルコール、食中毒、有機溶剤、ガス中毒、麻薬・覚せい剤中毒についての概説。 著者：内海裕也、湯浅龍彦 監修：下条文武、斉藤 康 p. 248-260
6「内科学Ⅱ 改訂第2版」	共著	2003年	文光堂	中毒性神経疾患、中枢神経に及ぼす中毒物質、金属、農薬、アルコール、食中毒、有機溶剤、ガス中毒、麻薬・覚せい剤中毒についての概説。 著者：内海裕也、湯浅龍彦 監修：黒川 清、松澤佑次 p. 1740-1745
7「新 臨床栄養学Ⅱ」	共著	2004年	光生館	14章「感覚器・神経疾患」 主要神経疾患、脳血管障害、変性疾患、末梢神経疾患の概説を行った、管理栄養士、栄養士養成を目的とした教科書。 著者：内海裕也 監修：井上修二 p. 255-264
8「PRIONS Food and Drug Safty」	共著	2005年	Springer-Verlag	厚労省班研究において、日本における硬膜移植によって発症したCJD患者の疫学調査 Dura mater related Creutzfeldt-Jakob disease in Japan:Relationship between sites of grafts and clinical features T. Sato, M. Masuda, H. Utsumi, Y. Enomoto, M. Yamada, H. Mizusawa and T. Kitamoto p. 31-40

9 「Neurological CPC」	共著	2006年	医学書院	症例5 歩行障害と痴呆を呈した71歳女性 順天堂大学における、長期症状を示した患者の臨床 症状、経過、臨床診断及び、病理診断について検討 したもの。最終的にパーキンソン症候群のPSPで あった症例についてまとめたもの。 著者：内海裕也、阿部一博、吉井 治、森 秀生、 須田耕一 監修：水野美邦、森 秀生 p.47-61
10 「コンパクト内科学」	共著	2009年	金芳堂	内科学の簡易教科書として作成され、Ⅷ 神経・運 動器疾患 B. 神経変性疾患、脱髄性中枢性神経疾 患、末梢神経疾患、筋疾患について概説した。 著者：内海裕也 他、監修：井上修二、上原譽志 夫、金澤眞雄、川口 実、代田常道p.319-332
11 「チャート式 内科 診断学」	共著	2009年	中外医学社	8. 神経症状と検査異常 A症状・所見 10. 嚥下障 害・構音障害について、チャートを用いた内科診断 のプロセスと考え方を提示したもの。 著者：内海裕也 他、監修：富野康日己p.447-451
12 「神経疾患 最新の 治療」	共著	2012年	南江堂	〈内科関連の神経疾患〉3. 尿毒症性脳症について解 説したもの。 著者：内海裕也 監修：小林祥泰、 水澤英洋 p.352-355
13 今日の神経疾患治療 指針第2版」	共著	2013年	医学書院	第Ⅲ編疾患各論第10章不随意運動No.3ミオクロ ヌス、asterixis、restless legs症候群について解 説したもの。 著者：内海裕也 監修：水澤英洋、鈴木則宏、梶龍 兒、吉良潤一、神田隆、斉藤延人 p.706-709
14 「今日の治療指針 2013年版-私はこう治療し ている」	共著	2013年	医学書院	我が国を代表して毎年改定される治療指針で、第15 章 神経・筋疾患 ミオクロヌスについて解説し たもの。 著者：内海裕也、高木誠 監修：山口徹、 北原光夫、福井次矢 p.821-822
15 「今日の治療指針 2014年版-私はこう治療し ている」	共著	2014年	医学書院	第15章 神経・筋疾患 多発性硬化症 我が国を代表して毎年改定される治療指針で、多発 性硬化症について解説したもの。 著者：内海裕也 監修：山口徹、北原光夫 p.858- 859
(学術論文) 1 「Excessive daytime sleepiness and sleep episodes in Japanese patients with Parkinson' s disease」 (査読付)	共著	2008年	IF2.167 Journal of the Neurological Sciences271 (2008) p.47-52	睡眠障害質問票による、パーキンソン病における日中過剰 睡眠と睡眠障害についての、関東地区多施設共同疫学調 査。 Keisuke Suzuki, Tomoyuki Miyamoto, Masayuki Miyamoto, Hirova Utsumi
2 「Correlation between depressive symptoms and nocturnal disturbances in Japanese patients with Parkinson' s disease.」 (査読付)	共著	2009年	IF3.245 Parkinsonism and Related Disorders15 (2009) p.15-19	うつ気分質問票及び睡眠障害質問票によるパーキンソン病 のうつ病と夜間睡眠との関連性についての、多施設共同疫 学調査。 K. Suzuki, M. Miyamoto, T. Miyamoto, H. Utsumi
3 「Fatigue in Japanese Patients with Parkinson' s Disease : A Study Using Parkinson Fatigue Scale」 (査読付)	共著	2009年	IF4.480 Movement Disorders Vol.24 No.13 2009 p.1977-1983	パーキンソン疲労スケールを用いて、パーキンソン病の疲 労の特質についての、関東地区多施設共同疫学調査。 Yasuyuki Okuma, Satoshi Kamei, Akihiko Morita, Hirova Utsumi

4 「Clinical implications of the type 1/type 2 balance of helper T cells and P-glycoprotein function in peripheral T lymphocytes of myasthenia gravis patients」 (査読付)	共著	2010年	IF2. 737 Eur J Pharmacol. 2010. Feb 10;627 (1 - 3) : 325-333 Epub 2009 Oct. 26	重症筋無力症において免疫治療により症状が改善し安定している患者においては、末梢血T細胞において、液性免疫に関与すると考えられるtype II細胞が是正され、type I type IIの比率が改善し、ステロイド耐性の指標とされるP-糖蛋白の増加が抑制されていることを明らかにした。 Masayuki Masuda, Sachiko Tanaka, Kanako Nakajima, <u>Hirova Utsumi</u>
5 「Factors Affecting Health-Related Quality of Life Assessed with the SF-36v2 Health Survey in Outpatients with Chronic-Stage Ischemic Stroke in Japan -Cross-Sectional Analysis of the OASIS Study」 (査読付)	共著	2010年	IF2. 987 Cerebrovasc Dis 2010 2 ;29:361-371	日本全国規模のSF-36を用いて、脳循環改善剤であるイブジラストの効果を二重盲検法を使用して評価した多施設共同研究。 Yukito Shinohara for the OASIS Study Group (<u>Hirova Utsumi</u> et al)
6 「Cilostazol for prevention of secondary stroke (CSPS2) : an aspirin-controlled, double-blind, randomized non-inferiority trial」 (査読付)	共著	2010年	IF21. 659 Lancet Neurology 2010 ; 9(10)959-968	脳血管障害二次予防におけるシロスタゾールが、標準血栓予防剤であるアスピリンに対し非劣性を証明し、出血副作用が優位に減少していることを二重盲検無作為抽出試験で明らかにした、日本全国規模の多施設共同研究。 Yukito Shinohara, Yasuo Katayama, Shinichiro Uchiyama, for the CSPS 2group (Hirova Utsumi et al)
7 「Clinical implication of peripheral CD4+CD25+regulatory T cells and Th17 cells in myasthenia gravis patients」 (査読付)	共著	2010年	IF2. 901 J Neuroimmunol. 2010 Aug 25;225 (1 - 2) : 123-131	重症筋無力症患者で、臨床症状の改善が明らかで、良好な経過をたどる状態ではCD4+CD25+制御T細胞及び、TH17細胞の増加が認められることを証明した。 Masuda M, Matsumoto M, Tanaka S, <u>Utsumi H</u>
8 「Topical naphazoline in the treatment of myasthenic blepharoptosis」 (査読付)	共著	2011年	IF2. 302 Muscle Nerve 2011 July ; 44 (1): 41-4	軽症から中等度の眼瞼下垂を呈している患者に、プリピナ(ナゾフェリン)点眼によって70%が改善したとの報告。 Nagane Y, Utsugisawa K, Suzuki S, <u>Utsumi H.</u>
9 「Pramipexole Reduces the Prevalence of Fatigue in Japanese Patients with Parkinson's Disease」 (査読付)	共著	2011年	IF1. 037 Internal Medicine 50:2163-2168 ; 2011 July	パーキンソン病疲労質問票を用いて、パーキンソン病患者における疲労感の比率が、D2受容体刺激剤であるプラミペキソールによって改善することを明らかにした、関東地区多施設共同試験。 Akihiko Morita MD, Yasuyuki Okuma, MD, Satoshi Kamei, <u>Hirova Utsumi, MD.</u>
10 「Factors Associated with Depressive State in Patients with Myasthenia Gravis: a Multicentre Cross-Sectional Study」 (査読付)	共著	2011年	IF13. 471 BMJ 2011 Dec 19;1(2):e000313	重症筋無力症患者で、ステロイド1日5mg以上服薬している長期ステロイド患者において、うつ病スケールを用いて、うつ病状態が悪化しており、長期ステロイド服用がうつ状態に影響を及ぼしていることを明らかにした多施設共同試験。 Suzuki Y, Utsugisawa K, Suzuki S, <u>Utsumi H.</u>
11 「Low-dose glucocorticoid therapy complements the pituitary-adrenocortical system and reduces anxiety and insomnia in myasthenia gravis patients」 (査読付)	共著	2012年	IF1. 578 Clin Neuropharmacol. 2012 Jan;35(1):30-6	重症筋無力症の患者において、過去ステロイド療法を行い、ステロイド治療を終了した症例に比較し、プレドニン1日 15mg服用し、脳下垂体副腎機能が保たれた状態では、不安感及び不眠、うつ傾向が減少していることを証明した。 Ito S, Masuda M, Tanaka S, <u>Utsumi H</u>
12 「Quantitative Assessment of Gait Bradykinesia in Parkinson's Disease Using a Portable Gait Rhythmogram」 (査読付)	共著	2012年	IF0. 721 Acta Med. Okayama, 2012 Vol. 66, No. 1, pp, 31-40	三次元の加速度計測装置で、携帯可能な歩行計を用いて、パーキンソン病患者の歩行加速度と歩行速度を計測し、歩行障害の客観的・量的評価が出来ることを証明した。 <u>Hirova Utsumi</u> , Hiroo Terashi, Yohei Ishimura

1 3 「Long-term Effects of Cabergoline and Levodopa in Japanese Patients with Early Parkinson's Disease:A 5-Year Prospective Study」 (査読付)	共著	2012年	IF0.721 Acta Med, Okayama, 2012 Apr Vol. 66, No. 2 pp, 163-170	パーキンソン病初期患者において無作為抽出により、ドーパミン受容刺激剤であるカベルゴリンで薬物治療を開始した症例と、L-ドーパで開始した症例の経過観察をした。重症度ヤールⅢ度を維持する努力を行い、症状悪化に伴い投与量を増加して、さらに必要な場合はカベルゴリン開始例ではL-ドーパを導入し、L-ドーパ開始例ではカベルゴリンを導入し、5年間経過観察をした。結果、カベルゴリン導入開始例の方が、長期L-ドーパ治療による副作用の発現が少ない傾向にあったことを、関東地区多施設共同試験で明らかにした。 <u>Hirova Utsumi</u> , and CASTLE Study Group
1 4 「Regional cerebral blood flow patterns in patients with freezing of gait due to lacunar infarction:SPECT study using three-dimensional stereotactic surface projections」 (査読付)	共著	2012年	IF0.818 Int J Neurosci. 2012 Mar 15. [Epub ahead of print]	ラクネ脳血管障害によるすくみ足を呈する患者において、三次元立体脳表血流量を評価し、帯状回において脳血流が低下していることを明らかにした。 Terashi H, Ishimura Y, <u>Utsumi H</u>
1 5 「Taste Disorder in Myasthenia Gravis : a Multicenter Cooperative Study」 (査読付)	共著	2012年	IF3.765 European Journal of Neurology, 2012 Mar 31. doi: 10.1111/j.1468-1331.2012.03713.x. [Epub ahead of print]	東日本多施設共同試験において、重症筋無力症の味覚障害の疫学調査を行い、甘味感覚が低下していることを明らかにした。 Chiaki Kabasawa, Yuuko Shimizu, Shigeaki Suzuki, <u>Hirova Utsumi</u> ,
1 6 「Evaluation of the Efficacy of Pramipexole for Treating Levodopa-induced Dyskinesia in Patients with Parkinson's Disease」 (査読付)	共著	2012年	IF1.037 Internal Medicine Vol. 52, No. 3:325-332 ; 2013 Feb	関東地区多施設共同試験で、パーキンソン病において、L-ドーパ治療にドーパミン受容体刺激剤であるプラミペキソールを導入することにより、L-ドーパ長期服用によるジスキネジアを減少させる傾向にあることを明らかにした。 <u>Hirova Utsumi</u> , Yasuyuki Okuma, Osamu Kano, Nobutaka Hattori
(その他) 該当なし				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 碓井 真吾
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学分野 内科系臨床医学		(A) 消化器内科学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 <特集>臨床医学の展望 2014 消化器病学	共著	平成26年2月	日本医事新報社(4684号)	担当概要部分: p.36~41 Topicとして、大腸カプセル内視鏡販売承認、より侵襲の少ない検査へ、というタイトルで、保険適用となった大腸カプセル内視鏡につき、概説した。共著: 三浦総一郎, 穂苅量太, 高本俊介, 渡辺知加子, 碓井真吾
2 我が国における非B非C肝 硬変の実態調査2011	共著	平成24年12月	響文社	担当概要部分: p.152~155 肝硬変の成因別実態については、過去数回にわたり集計されてきたが、前回調査時より高齢化や非B非C肝癌患者の増加が見られている。そこで、非B非C肝硬変の実態を明らかにするため、当院での集計を行い、過去の報告と比較検討した。共著: 碓井 真吾, 山岸由幸, 海老沼浩利, 齋藤 英胤
3 外来で診る肝臓疾患・膵 臓疾患	共著	平成24年10月	慶應義塾大学出版	担当概要部分: 10 肝硬変 p.62~65 肝硬変について最新のガイドラインに基づき、定義、原因・疫学、分類、予後、症状、診断、治療について説明した。共著: 海老沼浩利, 中村雄二, 富田謙吾, 山岸由幸, 若林寛二, 樋口肇, 中本伸宏, 碓井真吾, 石橋由佳, 楮柏松, 若山遊子。
(学術論文) 1 Genotype-Associated Differential NKG2D Expression on CD56+CD3+ Lymphocytes Predicts Response to Pegylated- Interferon/Ribavirin Therapy in Chronic Hepatitis C. (査読付) ジェ ノタイプ間において、 CD56CD3陽性リンパ球のNKG2D の発現の違いが、C型肝炎に 対するペグインターフェロン +リバビリン療法の奏功に影響 を与える	共著	平成27年5月	PLoS One. 2015 May12;10(5)	C型肝炎患者グループ1型の患者は、グループ2型の患者と比較し、末梢血中のCD56CD3陽性リンパ球のNKG2Dの発現が減少しており、ペグインターフェロン+リバビリン療法による奏率が低いことに相関している。共著: Chu PS, Ebinuma H, Nakamoto N, Sugiyama K, Usui S, Wakayama Y, Taniki N, Yamaguchi A, Shiba S, Yamagishi Y, Wakita T, Hibi T, Saito H, Kanai T. T. 担当箇所は共同作業により描出不可。
2 Pregnant woman with non-comatose autoimmune acute liver failure in the second trimester rescued using medical therapy. (査 読付) 非自己免疫性肝炎による 非昏睡型急性肝不全を呈した 妊娠中期の女性の救命例	共著	平成27年3月	Hepatology. 2015 Mar;45(3):349-55.	非昏睡型の自己免疫性急性肝不全で、劇症肝炎のリスクが高い妊娠16週の25歳女性症例。入院当初、肝障害の病因は不明であった。入院直後から集学的治療を行い、後に肝生検などより自己免疫性肝炎による急性肝不全重急性型と診断された。また妊娠は継続し、合併症なく健康な児を分娩した。共著: Sato H, Tomita K, Yasue C, Umeda R, Ebinuma H, Ogata S, Du W, Soga S, Maruta K, Yasutake Y, Narimatsu K, Usui S, Watanabe C, Komoto S, Teratani T, Suzuki T, Yokoyama H, Saito H, Nagao S, Hibi T, Miura S, Kanai T, Hokari R. 担当箇所は共同作業により描出不可。
3 【ここまで変わった実地診 療の食道がん・胃がん・大腸 がん】 飲む大腸内視鏡 大 腸カプセル内視鏡の現状 (査 読付)	共著	平成27年2月	診断と治療 (0370- 999X)103巻2号 Page231-234	大腸カプセル内視鏡が2014年より保険適用となり、侵襲の少ない検査として期待されている現在、第2世代の大腸カプセル内視鏡が用いられ、ポリープの検出率の向上に寄与している。現在のところ通常の大腸内視鏡検査と比較し、多量の腸管洗浄液の服用が必要であり、前処置法の改良が行われている。潰瘍性大腸炎の病勢評価のために大腸カプセル内視鏡検査が有用である可能性がある。共著: 碓井 真吾, 細江 直樹 担当箇所は共同作業により描出不可。

4 Modified bowel preparation regimen for use in second-generation colon capsule endoscopy in patients with ulcerative colitis. (査読付) 潰瘍性大腸炎患者に対する第2世代大腸カプセル内視鏡検査の為に用いる、改良した前処置法	共著	平成26年9月	Dig Endosc. 2014 Sep;26(5):665-72	潰瘍性大腸炎患者に対し、少ない量での腸管洗浄液の内服を用いた前処置法を用いて大腸カプセル内視鏡での観察は有用であるが、腸管の洗浄度は良好とは言えなかった。そこで、腸管洗浄液の内服量は増やさずに、緩下剤などの内服を変更し、腸管洗浄度が向上した臨床研究である。Usui S, Hosoe N, Matsuoka K, Kobayashi T, Nakano M, Naganuma M, Ishibashi Y, Kimura K, Yoneno K, Kashiwagi K, Hisamatsu T, Inoue N, Serizawa H, Hibi T, Ogata H, Kanai T. 担当個所は共同作業により描出不可。
5 アルコール性肝疾患のマルチプレックスサイトカインアッセイ (査読付)	共著	平成26年3月	アルコールと医学生物学32巻	アルコール性肝疾患患者13例を対象に、Bio-Plexサスペンションアレイシステムを用いて27種類のサイトカイン測定を行い、健康人7人あるいは他肝疾患との相違について解析した。SAHとウイルス性劇症肝炎5例との比較では、IL-8、VEGFはSAHで有意に高値で、IL-1RAは低値であった。共著：梅田 瑠美子, 山岸 由幸, 海老沼 浩利, 中本 伸宏, 榑 伯松, 碓井 真吾, 堀江 義則, 齋藤 英胤, 加藤 眞三, 日比 紀文. 担当個所は共同作業により描出不可。
6 Prominent steatosis with hypermetabolism of the cell line permissive for years of infection with hepatitis C virus. (査読付) C型肝炎ウイルスの持続感染可能なセルラインにおける脂質変性	共著	平成26年4月	PLoS One. 2014 Apr 9;9(4)	C型肝炎ウイルスが持続感染可能なセルラインを確立し、数年の持続感染により、ウイルスが感染した細胞が脂肪変性を起こし肝の代謝に関与していることを示した。共著：Sugiyama K, Ebinuma H, Nakamoto N, Sakasegawa N, Murakami Y, Chu PS, Usui S, Ishibashi Y, Wakayama Y, Taniki N, Murata H, Saito Y, Fukasawa M, Saito K, Yamagishi Y, Wakita T, Takaku H, Hibi T, Saito H, Kanai T. 担当個所は共同作業により描出不可。
6 Applicability of second-generation colon capsule endoscope to ulcerative colitis: a clinical feasibility study. (査読付) 潰瘍性大腸炎患者に対する第2世代大腸カプセル内視鏡の有用性：臨床での実現可能性評価のための研究	共著	平成26年9月	J Gastroenterol Hepatol. 2013 Jul;28(7):1174-9.	第2世代大腸カプセル内視鏡を潰瘍性大腸炎患者に対し用いて、通常の腸管洗浄液の量よりも少ない量で行った。通常の下部消化管内視鏡と比較して診断が可能であることを示した臨床研究。共著：Hosoe N1, Matsuoka K, Naganuma M, Ida Y, Ishibashi Y, Kimura K, Yoneno K, Usui S, Kashiwagi K, Hisamatsu T, Inoue N, Kanai T, Imaeda H, Ogata H, Hibi T. 担当個所は共同作業により描出不可。
8 C-C motif chemokine receptor 9 positive macrophages activate hepatic stellate cells and promote liver fibrosis in mice. (査読付) CCR9陽性マクロファージがマウスにおける肝線維化を促進させる	共著	平成25年7月	Hepatology. 2013 Jul;58(1):337-50.	CCR9陽性のマクロファージが肝の線維化に重要な役割を果たしていることを証明した基礎研究。共著：Chu PS, Nakamoto N, Ebinuma H, Usui S, Saeki K, Matsumoto A, Mikami Y, Sugiyama K, Tomita K, Kanai T, Saito H, Hibi T. 担当個所は共同作業により描出不可。
9 重症型アルコール性肝炎に対する集学的治療と転帰、およびその後の経過についての検討 (査読付)	共著	平成24年10月	アルコールと医学生物学31巻 Page66-70	当院で2003年以降に重症型アルコール性肝炎に対して、ステロイド療法に加え血漿交換や血液濾過透析、顆粒球吸着療法、白血球除去療法などを組み合わせた集学的治療を行った17例の転帰と長期経過について検討した。共著：梅田 瑠美子, 山岸 由幸, 海老沼 浩利, 中本 伸宏, 榑 伯松, 碓井 真吾, 堀江 義則, 齋藤 英胤, 加藤 眞三, 日比 紀文. 担当個所は共同作業により描出不可。
10 【バルーン内視鏡のすべて】 [小腸疾患へのアプローチ]内視鏡治療の実際 ポリペクトミー・EMR (査読付)	共著	平成24年6月	消化器内視鏡24巻6号 Page1039-1043	2001年にダブルバルーン内視鏡が報告されて以来、バルーン内視鏡は小腸疾患のみならず、術後腸管におけるERCPなど、さまざまな目的で使用されている。小腸腫瘍に対するポリペクトミー・EMRは各施設で行われるようになってきており、その有用性が報告されている。今後、小腸におけるポリペクトミー・EMRが、安全、確実に施行できるよう、更なる工夫、検討が必要である。共著：細江 直樹, 今枝 博之, 柏木 和弘, 長沼 誠, 碓井 真吾, 井上 詠, 岩男 泰, 杉野 吉則, 日比 紀文, 緒方 晴彦. 担当個所は共同作業により描出不可。
11 【小腸潰瘍性病変の的確な診断と概念の確立】 カプセル内視鏡による成人発症Henoch-Schoenlein紫斑病の小腸病変 (査読付)	共著	平成24年5月	消化器内科54巻5号 Page565-569	カプセル内視鏡によって観察しえたHenoch-Schoenlein紫斑病の小腸病変を解説した。共著：細江 直樹, 市川 理子, 石橋 由佳, 木村 佳代子, 碓井 真吾, 米野 和明, 長沼 誠, 柏木 和弘, 今枝 博之, 向井 万起男, 日比 紀文, 緒方 晴彦. 担当個所は共同作業により描出不可。

12 Role of enhanced visibility in evaluating polyposis syndromes using a newly developed contrast image capsule endoscope. (査読付) ポリポーシスに対するコントラストカプセル内視鏡の有用性	共著	平成24年4月	Gut Liver. 2012 Apr;6(2):218-22	新しく開発されたコントラストカプセル内視鏡を使用し、ポリポーシス症例に対し診断に有用である可能性が示された。共著：Hatogai K, Hosoe N, Imaeda H, Rey JF, Okada S, Ishibashi Y, Kimura K, Yoneno K, Usui S, Ida Y, Tsukada N, Kanai T, Hibi T, Ogata H. 担当箇所は共同作業により描出不可。
13 Evaluation of liver fibrosis by transient elastography using acoustic radiation force impulse: comparison with Fibroscan®. (査読付) フィブrosキャンとエラストグラフィによる肝線維化評価の比較	共著	平成23年10月	J Gastroenterol. 2011 Oct;46(10):1238-48.	肝臓の線維化を非侵襲的測定し数値化することができるFibroscanとARFIの2つの方法を、病理所見と合わせ比較した臨床研究。Ebinuma H, Saito H, Komuta M, Ojio K, Wakabayashi K, Usui S, Chu PS, Umeda R, Ishibashi Y, Takayama T, Kikuchi M, Nakamoto N, Yamagishi Y, Kanai T, Ohkuma K, Sakamoto M, Hibi T. 担当箇所は共同作業により描出不可。
14 MyD88-dependent pathway accelerates the liver damage of Concanavalin A-induced hepatitis. (査読付) Concanavalin A肝炎では、MyD88を介した経路が肝障害を促進させる	共著	平成22年9月	Biochem Biophys Res Commun. 2010 Sep 3;399(4):744-9	自己免疫性肝炎の動物モデルとされているConcanavalin A(ConA)肝炎を用いて、自己免疫性肝炎における自然免疫の関与を検討した。野生型とMyD88+マウスを比較すると、MyD88-/-マウスでは野生型と比較して、これらの炎症性サイトカイン産生量の軽減を認めた。NKおよびNKT細胞はConA肝炎マウスにおいてTNF α およびIFN γ 産生陽性細胞の割合がConA非投与群と比較して著明に増加した。共著：Ojio K, Ebinuma H, Nakamoto N, Wakabayashi K, Mikami Y, Ono Y, Po-Sung C, Usui S, Umeda R, Takaishi H, Yamagishi Y, Saito H, Kanai T, Hibi T. 担当箇所は共同作業により描出不可。
15 食道静脈瘤破裂した妊婦に対し静脈瘤結紮を行い、その後帝王切開術を施行した1例 (査読付)	共著	平成22年12月	Progress of Digestive Endoscopy 77巻2号 Page56-57, 3	先天性胆道閉鎖症手術の既往がある36歳女性。妊娠25週2日早朝に5度吐血し救急搬送された。緊急上部内視鏡検査を施行し食道静脈瘤破裂と診断、食道静脈瘤結紮術(EVL)を施行した。産婦人科との連携により保存的妊娠継続としたが腹水コントロールに難渋し体重は著明に増加した。入院32病日(妊娠29週5日)の胎児エコーで胎児の成長停止と判断され、第34病日(妊娠30週0日)に帝王切開を施行した。その後EVLを追加し退院、新生児も早産超低出生体重児であったが、第92病日に退院した。共著：碓井 真吾, 中村 公子, 齋藤 義正, 山岸 由幸, 海老沼 浩利, 鈴木 秀和, 今枝 博之, 橋本 志歩, 金 善恵, 峰岸 一博, 中塚 誠之, 橋本 統, 緒方 晴彦, 齋藤 英胤, 日比 紀文. 担当箇所は共同作業により描出不可。
16 マウス自己免疫性肝炎モデルにおけるTLRシグナルを介したKupffer細胞の初期関与の可能性 (査読付)	共著	平成22年3月	消化器と免疫46号 Page197-199	自己免疫性肝炎の動物モデルとされているConcanavalin A(ConA)肝炎を用いて、自己免疫性肝炎における自然免疫の関与を検討した。肝組織のRT-PCRではTLR2およびTLR4の明瞭な発現が確認され、MyD88も発現を認めた。さらに、macrophageおよび樹状細胞でTLR2の発現を認めた。MyD88-/-マウスでは野生型と比較し、血清ALT値が優位に軽減し、肝組織もアポトーシス領域の減少を認めた。共著：尾城 啓輔, 海老沼 浩利, 若林 寛二, 中本 伸宏, 碓井 真吾, 梅田 瑠美子, 楮 柏松, 山岸 由幸, 金井 隆典, 齋藤 英胤, 日比 紀文. 担当箇所は共同作業により描出不可。
17 G群溶連菌による streptococcal toxic shock syndromeの1例 (査読付)	共著	平成21年6月	臨床皮膚科 63巻7号 Page505-509	症例は71歳男性。呼吸苦、右下腿痛の主訴で救急受診し、壊死性筋膜炎、全身炎症反応症候群の診断で緊急入院した。集学的治療を開始、またデブリドマンを施行した。感染巣残存のため右大腿部切開術を施行した。入院時の血液培養より非A非B群溶連菌が検出され、後にG群 β 溶連菌と同定された。劇症型溶連菌感染症と同様の病態を呈した1例を経験した。共著：岡田 玲奈, 林 裕嘉, 齋藤 玲子, 木花 いづみ, 碓井 真吾, 荻原 通, 山口 健治. 担当箇所は共同作業により描出不可。
(その他) 1. 肝硬変患者における浮腫・腹水治療の展望	共著	平成27年7月	Medical Tribune ウェブ 座談会	トルバプタンが「肝硬変における体液貯留」の2013年9月に効能追加が承認された。同薬は既存利尿薬とは異なる作用機序を有し、血清アルブミン低値例でも利尿を期待することが可能で、腎機能に対する影響や有害事象の発現も少ないとされている。トルバプタン投与の対象となる患者像や至適導入時期など、適切な使用法をめぐって討議した。岡村 幸重, 田原 利行, 碓井 真吾, 金子 文彦. 担当箇所は共同作業により描出不可。

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 伊藤(植田) 由依				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
内科系臨床医学 小児科学		小児循環器学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 該当なし				
(学術論文) 1 心筋シンチグラムで心室前中隔の血流低下を認め微小血管狭窄症と判断した16歳女児例 (査読付)	共著	2017年5月	日本小児循環器学会雑誌 33(3): 259-264	微小血管狭窄症は、表在冠動脈に器質的狭窄や攣縮を伴うことなく、微小冠動脈の循環障害に起因する狭心症と定義される。症例は16歳女児で、労作時の胸痛と心電図で軽度のST低下を指摘されて当院に紹介となった。運動負荷により硝酸薬抵抗性の狭心痛が出現し、201TI心筋シンチグラフィで心室前中隔の虚血を認めた。冠動脈造影では狭窄および攣縮は認めなかったが、エルゴノビン負荷で前下行枝(LAD)に血流速度の低下を認めた。上記結果から微小血管狭窄症と判断した。β遮断薬とCa拮抗薬の併用で治療を開始し、胸痛頻度の低下と心筋シンチグラフィで虚血所見の改善傾向を認めている。 分担：データ収集を行った 宮本尚幸、渡辺健、伊藤由依、佐々木宏太、佐々木健一、秦大資
2. 1歳未満のインフルエンザ児に対するペラミビルの臨床投与成績 (査読付)	共著	2019年5月	小児感染免疫 Vol. 31 No2 95-101	抗インフルエンザ薬として1歳未満の児で承認されているオセルタミビルとペラミビルの2剤のうち、唯一の静脈注射薬であるペラミビルを1歳未満のインフルエンザ患児に点滴静注し、ペラミビルの有効性と安全性について検討した。対象は2011年9月から2017年9月までにインフルエンザの診断で入院した1歳未満の当科入院患者74名である。67例にペラミビル(10mg/kg/回)を単回、単回で解熱しなかった7例に2回投与した。37.5℃未満が持続して解熱するまでの時間と月齢、合併症、有害事象について後方視的に検討した。投与から解熱までの平均時間はA型71例で18.7時間、B型3例で28.0時間であった。6シーズン各群の平均有熱期間は、12.7から23.9時間であり、群間有意差はなかった。A型インフルエンザ罹患の1ヶ月児1名、全体の1.35%に二峰性発熱をみとめた。合併症は肺炎3例、喘息4例、クループ1例、熱性痙攣1例、痙攣重積1例、中耳炎1例、蜂窩織炎1例、尿路感染症1例であった。有害事象として下痢(2.7%)と一過性の好中球減少(24%)を認めた。1歳未満の児に対してペラミビルは安全に使用できた。 分担：筆頭著者として論文全体のデザイン設計を行い、論文の草稿を執筆した 伊藤由依、羽田敦子、吉岡孝和、片山俊郎、秦大資
(その他・学会発表) 1 心臓カテーテル検査・治療のヘパリン使用における定期的な活性凝固時間測定の有用性-第三報-	-	2016年7月	第52回日本小児循環器学会総会・学術集会、東京都文京区	伊藤由依、加藤健太郎、佐々木宏太、本倉浩嗣、宮本尚幸、渡辺健
2 運動脳低下と意識消失発作を主訴に cardiacMRI で診断された心臓粘液種の12歳女児の一例	-	2016年7月	第52回日本小児循環器学会総会・学術集会、東京都文京区	佐々木宏太、宮本尚幸、加藤健太郎、本倉浩嗣、伊藤由依、菅仁美、帆足孝也、津田悦子、渡辺健
3 3度のショックから神経学的後遺症なく蘇生したFontan術後患児の1例	-	2016年7月	第52回日本小児循環器学会総会・学術集会、東京都文京区	本倉浩嗣、加藤健太郎、伊藤由依、菅仁美、坂口平馬、鍵崎康治、渡辺健
4 7番染色体短腕重複症候群(7p重複症候群)の1例, A Report of 7p Duplication Syndrome	-	2016年7月	第52回日本周産期・新生児医学会学術集会、富山市	林美輝、宮本尚幸、伊藤由依、小泉正人、水本洋、渡辺健、秦大資
5 心原性脳梗塞を契機に診断された12歳の拘束型心筋症の1例	-	2019年10月	第28回日本小児心筋疾患学会 学術集会、大阪府大阪市	植田由依、吉村元文、陳又豪、鈴木康太、橋本佳亮、真田和哉、田邊雄大、芳本潤、満下紀恵、新居正基、元野憲作、濱本奈央、大崎真樹、田中靖彦
6 小児不整脈アブレーションにおける被ばく低減の検討と低減へのとりくみ	-	2020年1月	第31回日本Pediatric Interventional Cardiology学会、	植田由依、芳本潤、陳又豪、真田和哉、石垣瑞彦、佐藤慶介、金成海、満下紀恵、新居正基、田中靖彦
7 小児先天性試験増カテーテル検査・治療における鎮静と全身麻酔の現状	-	2020年1月	第31回日本Pediatric Interventional Cardiology学会	植田由依、金成海、石垣瑞彦、佐藤慶介、芳本潤、満下紀恵、新居正基、田中靖彦

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	藤井(西村) 瑤子
			研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
医学系、病理学、膵胆道癌			膵胆道癌、神経浸潤		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要	
(著書) なし					
(学術論文) 1. Cystic tumor of the liver without ovarian-like stroma or bile duct communication: two case reports and a review of the literature. (査読付) (肝における、卵巣様間質や胆管との交通を示さない嚢胞性腫瘍2症例の報告と文献レビュー)	共著	2014年7月	World J Surg Oncol. 2014;12:229.	肝における、卵巣様間質や胆管との交通を示さない嚢胞性腫瘍を2症例経験したため、病理像の検討や文献的考察を行い報告した。 分担：本論文の病理学的見地を担当した。 Kishida N, Shinoda M, Masugi Y, Itano O, <u>Fujii-Nishimura Y</u> , Ueno A, Kitago M, Hibi T, Abe Y, Yagi H, Tanimoto A, Tanabe M, Sakamoto M, Kitagawa Y.	
2. Two cases of pathological complete response to neoadjuvant chemoradiation therapy in pancreatic cancer. (査読付) (術前放射線化学療法に病理学的完全奏功を示した膵癌2症例の報告)	共著	2015年2月	Keio J Med. 2015;64(2):26-31.	申請者の所属施設では他の国内施設に先駆けて平成16年度より膵癌に対する術前放射線化学療法の併用を継続して行っており、その中で病理学的完全奏功を示した貴重な2症例を経験し、その病理像を詳細に検討し報告した。 分担：26-31、全て。 <u>Fujii-Nishimura Y</u> , Nishiyama R, Kitago M, Masugi Y, Ueno A, Aiura K, Kawachi S, Kawaida M, Abe Y, Shinoda M, Itano O, Tanimoto A, Sakamoto M, Kitagawa Y.	
3. Early hepatocellular carcinoma with high-grade atypia in small vaguely nodular lesions. (査読付) (小結節境界不明瞭型病変において高度異型を示す早期肝細胞癌)	共著	2016年4月	Cancer Sci. 2016;107(4):543-50.	早期肝細胞癌に対する異型度に基づく亜分類と意義を報告した。 分担：検体採取や病理学的評価を一部担当した。 Ojima H, Masugi Y, Tsujikawa H, Emoto K, <u>Fujii-Nishimura Y</u> , Hatano M, Kawaida M, Itano O, Kitagawa Y, Sakamoto M.	
4. Anisakiasis mimics cancer recurrence: two cases of extragastrintestinal anisakiasis suspected to be recurrence of gynecological cancer on PET-CT and molecular biological investigation. (査読付) (アニサキス症は癌の再発と見誤られうる：術前にPET-CTにて婦人科領域癌からの肝転移と診断された腸管外アニサキス症2例の報告と分子生物学的検討)	共著	2016年4月	BMC Med Imaging. 2016;16:31.	術前に転移性肝腫瘍と診断された腸管外アニサキス症を2症例経験したため、国立感染症研究所と共同で詳細な検討を行い報告した。 分担：本論文の病理学的見地を担当した。 Nogami Y, <u>Fujii-Nishimura Y</u> , Banno K, Suzuki A, Susumu N, Hibi T, Murakami K, Yamada T, Sugiyama H, Morishima Y, Aoki D.	

<p>5. Endomyocardial fibrosis: missing tricuspid valve and Fontan-like circulation. (査読付) (三尖弁の不明瞭化とフォンタン様循環を示した心筋内線維症の症例報告)</p>	共著	2016年9月	Heart Vessels. 2016;31(9):1579-82.	<p>原因不明の心不全で亡くなり病理解剖により心筋内線維症が明らかとなった症例を経験したため、病理像の詳細な検討を行い報告した。 分担：本論文の病理学的見地を担当した。 Shiraishi Y, Kohno T, <u>Fujii-Nishimura Y</u>, Shimoda M, Ikeda Y, Nakajima K, Nishiyama T, Nishiyama N, Murata M, Maekawa Y, Sano M, Fukuda K.</p>
<p>6. Two cases of pancreatic ductal adenocarcinoma with intrapancreatic metastasis. (査読付) (膵内転移を示した膵管癌2症例の報告)</p>	共著	2016年11月	World J Gastroenterol. 2016;22(41):9222-9228.	<p>膵内転移を示した稀な膵管癌2症例を経験したため、病理学的考察とともに報告した。 分担：本論文の病理学的見地を担当した。 Fujita Y, Kitago M, Masugi Y, Itano O, Shinoda M, Abe Y, Hibi T, Yagi H, <u>Fujii-Nishimura Y</u>, Sakamoto M, Kitagawa Y.</p>
<p>7. KRAS mutations in cell-free DNA from pre- and postoperative sera as a pancreatic cancer marker: a retrospective study. (査読付) (術前・術後の血清内の無細胞DNAにおけるKRAS変異は膵癌のマーカーとなる)</p>	共著	2018年3月	Br J Cancer. 2018;118(5):662-669.	<p>膵癌患者から採取された術前ならびに術後の血清内の無細胞DNAを解析し、術後血清におけるKRAS変異の意義を明らかにした。 分担：本論文の病理学的見地を担当した。 Nakano Y, Kitago M, Matsuda S, Nakamura Y, Fujita Y, Imai S, Shinoda M, Yagi H, Abe Y, Hibi T, <u>Fujii-Nishimura Y</u>, Takeuchi A, Endo Y, Itano O, Kitagawa Y.</p>
<p>8. Mesenchymal-epithelial transition of pancreatic cancer cells at perineural invasion sites is induced by Schwann cells. (査読付) (膵癌の神経浸潤部ではシュワン細胞によって間葉上皮転換が引き起こされる)</p>	共著	2018年4月	Pathol Int. 2018;68(4):214-223.	<p>膵癌組織の神経浸潤部における癌細胞の形態変化に注目し、病理検体を用いた組織学的研究ならびに培養細胞株を用いたin vitroの系での研究を行い、膵癌の神経浸潤部ではシュワン細胞との相互作用によりMETが引き起こされることを初めて報告した。 分担：214-223、本論文の全てを担当した。 <u>Fujii-Nishimura Y</u>, Yamazaki K, Masugi Y, Douguchi J, Kurebayashi Y, Kubota N, Ojima H, Kitago M, Shinoda M, Hashiguchi A, Sakamoto M.</p>
<p>9. Concurrent presentation of an intraductal tubulopapillary neoplasm and intraductal papillary mucinous neoplasm in the branch duct of the pancreas, with a superior mesenteric artery aneurysm: a case report. (査読付) (膵管内管状乳頭腫瘍と上腸間膜動脈瘤の併存を示した症例の報告)</p>	共著	2018年4月	World J Surg Oncol. 2018;16(1):83.	<p>膵管内管状乳頭腫瘍と上腸間膜動脈瘤の併存を示す稀な症例を経験したため、その病理像の考察を含めた報告を行った。 分担：本論文の病理学的見地を担当した。 Inomata K, Kitago M, Obara H, <u>Fujii-Nishimura Y</u>, Shinoda M, Yagi H, Abe Y, Hibi T, Matsubara K, Oshima G, Sekimoto Y, Inoue M, Itano O, Sakamoto M, Kitagawa Y.</p>

10. Late-onset visceral varicella-zoster virus infection presented as acute liver failure after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation. (査読付) (骨髄移植後に急性肝不全をもたらした全身性水痘帯状疱疹ウイルス感染症の報告)	共著	2019年8月	Transpl Infect Dis. 2019;21(4):e13121.	骨髄移植後に原因不明の劇症肝炎をきたし、剖検により全身性水痘帯状疱疹ウイルス感染症であったことが明らかにされた症例を経験したため、国立感染症研究所と共同で病理学的検索を行い、報告した。 分担：本症例の病理解剖ならびに病理診断を行い、本論文の病理学的見地を担当した。 Kikuchi T, Arai M, Koda Y, Kato J, Shimizu T, Katano H, <u>Fujii-Nishimura Y</u> , Sakamoto M, Ebinuma H, Nakamoto N, Kanai T, Okamoto S, Mori T.
11. Characterization of spatial distribution of tumor-infiltrating CD8+ T cells refines their prognostic utility for pancreatic cancer survival. (査読付) (膵癌組織において浸潤する細胞傷害性T細胞の密度と分布は患者の予後に関わる)	共著	2019年10月	Mod Pathol. 2019;32(10):1495-1507.	膵癌組織において浸潤する細胞傷害性T細胞の密度と分布を解析し、臨床病理学的意義を明らかにした。 分担：研究のための検体採取や病理学的評価を一部行った。 Masugi Y, Abe T, Ueno A, <u>Fujii-Nishimura Y</u> , Ojima H, Endo Y, Fujita Y, Kitago M, Shinoda M, Kitagawa Y, Sakamoto M.
12. Clinicopathological features of hepatocellular carcinoma with fatty change: Tumors with macrovesicular steatosis have better prognosis and aberrant expression patterns of perilipin and adipophilin.. (査読付) (脂肪変性を伴う肝細胞癌の臨床病理学的特徴：大滴性脂肪変性を伴う肝細胞癌の予後は良く、ペリリピンとアディポフィリンの異常発現を示す)	共著	2020年4月	Pathol Int. 2020 ;70(4):199-209.	肝細胞癌の脂肪化の臨床病理学的意義を解明した。 分担：研究のための検体採取や病理学的評価を一部行った。 Kubota N, Ojima H, Hatano M, Yamazaki K, Masugi Y, Tsujikawa H, <u>Fujii-Nishimura Y</u> , Ueno A, Shinoda M, Sakamoto M.
13. 遺伝性出血性毛細血管拡張症に肺動脈性肺高血圧症・門脈圧亢進症を合併し治療に難渋した1例.	共著	2012年10月	Therapeutic Research 33巻10号 Page 1503-1505 2012年10月	遺伝性出血性毛細血管拡張症に肺動脈性肺高血圧症・門脈圧亢進症を合併し治療に難渋し病理解剖に至った症例を経験したため、詳細な病理像の検討を加え報告した。 分担：本症例の病理解剖ならびに病理診断を行い、本論文の病理学的見地を担当した。 武井 眞, 田村 雄一, 山本 恒久, 小野 智彦, <u>西村 瑤子</u> , 木村 謙介, 佐野 元昭, 片岡 雅晴, 佐藤 徹, 福田 恵一.
14. 肝十二指腸間膜内に発生した神経鞘腫の1例.	共著	2017年10月	外科 79巻10号 Page 994-998 2017年10月.	肝十二指腸間膜内に発生した神経鞘腫の1例を経験し、報告した。 分担：本症例の病理診断を行い、本論文の病理学的見地を担当した。 高島 順平, 伊藤 康博, 半田 寛, 阿部 雄太, 渋谷 慎太郎, 江川 智久, <u>西村 瑤子</u> , 坂元 亨宇.
15. 浸潤性膵管癌術後に発症した異時性膵腺扁平上皮癌の1例.	共著	2018年2月	日本臨床外科学会雑誌 79巻2号 Page 412-417 2018年2月.	浸潤性膵管癌術後に異時性膵腺扁平上皮癌が発生した稀な1例を経験したため報告した。 分担：本症例の病理診断を行い、本論文の病理学的見地を担当した。 古田土 高志, 伊藤 康博, 黒木 淳平, 三原 康紀, <u>西村 瑤子</u> , 江川 智久.
(その他) (総説)				

1. 早期肝細胞癌の病理と画像 早期肝細胞癌の分子病理.	共著	2012年12月	【肝細胞癌のすべて2012】肝・胆・膵. 2012;65(6):1146-1151.	申請者の元所属施設では長年に渡り、肝癌の分子病理学的研究を世界的に主導して行ってきた。申請者は当施設で蓄積された知見をもとに、早期肝細胞癌の分子病理について、総説を発表した。 分担：本総説の執筆全て(1146-1151)を担当した。 西村 瑤子, 坂元 亨宇.
2. 肝癌の病理と病態. 組織学的に早期の肝癌と診断するための手順や最新の病理学的手段がありますか?	共著	2013年10月	肝癌診療Q&A. 中外医学社. 2013;92-96.	申請者の元所属施設では長年に渡り、肝癌の分子病理学的研究を世界的に主導して行ってきた。申請者は当施設で蓄積された知見をもとに、組織学的に早期の肝癌と診断するための手順や最新の病理学的手段をまとめて発表した。 分担：本総説の執筆全て(92-96)を担当した。 西村 瑤子, 坂元 亨宇.
3. NAFLD/NASHの病理.	共著	2019年5月	日本臨床. 2019;77巻:744-748.	申請者の元所属施設では長年に渡り、肝癌の分子病理学的研究を世界的に主導して行ってきた。申請者は当施設で蓄積された知見をもとに、非アルコール性脂肪肝炎の病理像についての総説を発表した。 分担：744-748、全て。 西村 瑤子, 辻川 華子, 眞杉 洋平, 坂元 亨宇.
(その他) (学会発表) 1. 術前化学放射線療法に完全奏効を示した膵癌2症例.	—	2012年4月	第101回日本病理学会. 2012年4月(東京).	申請者の所属施設では他の国内施設に先駆けて平成16年度より膵癌に対する術前放射線化学療法の併用を継続して行っており、その中で病理学的完全奏効を示した貴重な2症例を経験し、その病理像を詳細に検討し発表した。 西村 瑤子, 眞杉 洋平, 上野 彰久, 北郷 実, 河地 茂行, 田邊 稔, 相浦 浩一, 北川 雄光, 坂元 亨宇.
2. 特徴的な肝血管異常を示した遺伝性出血性毛細血管拡張症(Osler-Weber-Rendu病)の1例.	—	2012年11月	第101回日本病理学会. 2012年11月(名古屋).	特徴的な肝血管異常を示した遺伝性出血性毛細血管拡張症(Osler-Weber-Rendu病)の1例を経験したため、肝の病理像を詳細に検討し発表した。 西村 瑤子, 木村 徳宏, 武井 眞, 田村 雄一, 福田 恵一, 坂元 亨宇.
3. 特徴的な組織像を根拠に大腿骨アダマンチノーマの肺転移と診断した1例.	—	2014年4月	第103回日本病理学会. 2014年4月(広島).	肺胞隔壁に沿った進展を示す特徴的な組織像を根拠に大腿骨アダマンチノーマの肺転移と診断した1例を経験し、詳細な病理像を含め発表した。 西村 瑤子, 林 雄一郎, 江本 桂, 佐々木 文, 河野 光智, 須佐 美知郎, 森岡 秀夫, 坂元 亨宇, 亀山 香織.
4. 膵癌神経周囲浸潤部におけるfocal differentiationの意義の検討.	—	2015年5月	第104回日本病理学会. 2015年5月(名古屋).	膵癌組織の神経浸潤部における癌細胞の形態変化に注目し、病理検体を用いた組織学的研究を行い、その意義を発表した。 西村 瑤子, 眞杉 洋平, 橋口 明典, 道口 洵也, 山崎 剣, 尾島 英知, 北郷 実, 板野 理, 北川 雄光, 坂元 亨宇.

<p>5. 膵癌神経浸潤部で見られる間葉上皮転換の意義.</p>	<p>—</p>	<p>2017年4月</p>	<p>第106回日本病理学会. 2017年4月 (東京) .</p>	<p>膵癌組織の神経浸潤部における癌細胞の形態変化に注目し、病理検体を用いた組織学的研究ならびに培養細胞株を用いたin vitroの系での研究を行い、膵癌の神経浸潤部ではシュワン細胞との相互作用によりMETが引き起こされることを発表した。 西村 瑤子, 山崎 剣, 眞杉 洋平, 道口 洵也, 尾島 英知, 橋口 明典, 坂元 亨宇.</p>
<p>6. 転移性腫瘍が疑われた消化管外アニサキス症の2例.</p>	<p>—</p>	<p>2019年4月</p>	<p>第108回日本病理学会. 2019年4月 (東京) .</p>	<p>術前に転移性肝腫瘍と診断された腸管外アニサキス症を2例経験し、国立感染症研究所と病理像の詳細な評価や遺伝子解析を行い発表した。 西村 瑤子, 眞杉 洋平, 山田 健人, 杉山 広, 森嶋 康之, 野上 侑哉, 阪埜 浩司, 青木 大輔, 日比 泰造, 坂元 亨宇.</p>
<p>7. Gamma-Synuclein is a novel prognostic marker and promotes tumor cell migration in biliary tract carcinoma. (シヌクレインγは胆道癌の予後規定因子であり、がん細胞の遊走を促進する)</p>	<p>—</p>	<p>2020年1月</p>	<p>American Society of Clinical Oncology Gastrointestinal Cancers Symposium. January 2020 (San Francisco) .</p>	<p>胆道癌におけるSNCGの発現と臨床病学的因子との関連を明らかにし、胆道癌細胞株を用いた機能解析を行い発表した。 Yusuke Takemura, Hidenori Ojima, Go Oshima, Naoto Kubota, Masahiro Shinoda, Minoru Kitago, Hiroshi Yagi, Yuta Abe, Shutaro Hori, Yuki Masuda, <u>Yoko Fujii-Nishimura</u>, Taizo Hibi, Michiie Sakamoto, Yuko Kitagawa.</p>

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 梅田瑠美子
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
慢性肝疾患におけるエネルギー代謝について、体成分分析装置を用いて		体成分分析装置、慢性肝疾患		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 該当なし				
(その他・学会発表等) 1, 重症型アルコール性肝炎症例の検討	—	2009年10月	JDDW 2009 (京都)	当院における重症型アルコール性肝炎症例8例の検討 梅田瑠美子, 堀江義則, 菊池真大, 一松収, 日比紀文
2, 重症型アルコール性肝炎(SAH)に対する白血球除去療法施行例から治療の標準化について	—	2010年5月	肝臓病学会総会 (山形)	重症型アルコール性肝炎(SAH)に対する白血球除去療法施行例から治療の標準化についての検討 梅田瑠美子, 山岸由幸
3, 重症型アルコール性肝炎(SAH)に対する顆粒球吸着療法(G-CAP)のサイトカイン推移からみた治療効果の検討	—	2011年5月	第97回消化器病学会総会 (東京)	重症型アルコール性肝炎(SAH)に対する顆粒球吸着療法(G-CAP)のサイトカイン推移からみた治療効果の検討 梅田瑠美子, 山岸由幸
4, 慢性肝疾患患者におけるエネルギー代謝評価における加齢の重要性-体成分分析装置(In Body S20)を用いて	—	2011年10月	JDDW 2011 (福岡)	パネルディスカッション 慢性肝疾患患者におけるエネルギー代謝評価における加齢の重要性について体成分分析装置(In Body S20)を用いて検討 梅田瑠美子, 海老沼浩利

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 大平 寛典				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1				
(学術論文) 1 Ki67 and tumor size as prognostic factors of gastrointestinal stromal tumors(Ki67と腫瘍径がGISTの予後因子となる) 査読有	単著	2005	JMAJ(Japan Medical Association Journal)	The aim of study is determine the usefl prognostic factor of GIST. (本研究の目的は消化管原発GISTの予後因子を検討、Ki67と腫瘍径であった)
2 Validity of modified gastrectomy combined with sentinel node navigation surgery for early gastric cancer (SNNS併用胃癌縮小手術の有用性) 査読有	単著	2007	Gastric Cancer 2007; 10: 117-22.	The present study examined the clinical validity of modified gastrectomy for early gastric cancer, in terms of the results of sentinel node navigation surgery (SNNS), using infrared ray electronic endoscopy (IREE) plus indocyanine green (ICG) staining. (ICGをtracerとし赤外線腹腔鏡を用いたSNNS併用の胃癌縮小手術の有用性の検討)
3 New double-stapling technique for esophagojejunostomy and esophagogastrostomy in gastric cancer surgery, using a peroral intraluminal approach with a digital stapling system. (胃癌胃全摘における経口digital stapling systemによる食道空腸吻合) 査読有	単著	2009.12	Gastric Cancer. 2009;12(2):101-5.	We describe a new double-stapling technique for esophagojejunostomy and esophagogastrostomy, using a peroral intraluminal approach with a digital stapling system, a flexible shaft remote-control stapler - the Surg-ASSIST and Power Circular Stapler 21 mm (PCS). (胃癌胃全摘における経口digital stapling system (Surg-ASSIST and Power Circular Stapler) による食道空腸吻合を2例経験したので報告する。合併症なく経過は良好であった。)
4 Tailoring Treatment for Early Gastric Cancer after Endoscopic Resection Using Sentinel Node Navigation with Infrared Ray Electronic Endoscopy Combined with Indocyanine Green Injection(早期胃癌内視鏡切除後症例に対するSNNS併用切除) 査読有	単著	2009.12	Digestive Surgery .2009;12(2):101-5.	This study evaluated the efficacy of sentinel node navigation surgery using infrared ray electronic endoscopy (IREE) combined with indocyanine green in patients after endoscopic treatments of early gastric cancer. (早期胃癌内視鏡切除EMR`ESD後症例に対する追加外科切除時におけるICG蛍光SNNS併用を行った、そのreview)
5 The possibility of performing a limited resection and a lymphadenectomy for proximal gastric carcinoma based on sentinel node navigation(上部胃癌に対する外科切除時におけるICG蛍光SNNS併用を行った縮小手術症例の検討。査読有	単著	2009.12	Surg Today. 2009;39(12):1026-31.	This study examined the possibility of performing a limited resection and a lymphadenectomy with sentinel node navigation surgery (SNNS) for the treatment of proximal gastric carcinoma. (上部胃癌に対する外科切除時におけるICG蛍光SNNS併用を行った縮小手術症例の検討)
6 Laparoscopy-assisted total gastrectomy for advanced gastric cancer with carcinomatous ascites after S1 plus cisplatin chemotherapy: a case report. (癌性腹水を有する進行胃癌に対するS1/CDDP後の腹腔鏡下胃全摘術) 査読有	単著	2010.12	Surg Laparosc Endosc Percutan Tech. 2010 Dec;20(6):e206-10.	A 29-year-old man with a type 4 tumor Curative resection was considered impossible, and S1 and cisplatin were given. Twenty-five days after completion of the S1 treatment, laparoscopy-assisted total gastrectomy was performed. (癌性腹水を有する進行胃癌に対しS1/CDDP施行、腹水が消失し、腹腔鏡下胃全摘術を行った。切除標本上は胃の病変は消失しCRと考えられた。)

<p>7 Combination therapy with FK 506 and RS61443 for rejection following allogeneic small bowel transplantation in rats. (ラット小腸移植におけるFK506とRS61443の組み合わせによる免疫抑制療法) 査読有</p>	<p>共著</p>	<p>2000.12</p>	<p>Transplant Proc. 2000; 32: 2492-3</p>	<p>Yoshida S, Toyama Y, Aoki T, Nakamura J, Odaira H, Inagaki Y. (共著: 特定の担当パートはなし) Combination therapy with FK 506 and RS61443 for rejection following allogeneic small bowel transplantation in rats. (ラット小腸移植におけるFK506とRS61443の組み合わせによる免疫抑制療法の検討)</p>
<p>8 術後に脳転移が発見され急激な経過をとったAFP・HCG産生胃癌の1例。査読有</p>	<p>単著</p>	<p>2007.5</p>	<p>日本消化器病学会雑誌第104巻5号 666-670</p>	<p>症例は69歳男性、嘔吐にて発症。進行胃癌poorly differentiated adenocarcinoma、血清AFP 254ng/mlと上昇するも、肝転移なし。胃全摘術を施行、免疫染色にてAFP/HCGに陽性であった。経過良好であったが術後22日目に頭痛を発症、頭部CTにて小脳に腫瘍性病変が存在、開頭手術の結果、胃癌転移の腫瘍内出血と診断された。</p>
<p>9 Recurrent gastrointestinal stromal tumor (GIST) of the stomach associated with a novel c-kit mutation after imatinib treatment (imatinib投与後にc-kit mutationを獲得した再発GIST)。査読有</p>	<p>共著</p>	<p>2006.3</p>	<p>Gastric Cancer. 2006;9(3):235-9.</p>	<p>Koyama T, Nimura H, Kobayashi K, Marushima H, Odaira H, Kashimura H, Mitsumori N, Yanaga K (共著: 特定の担当パートはなし) A 57-year-old man with gastrointestinal stromal tumor (GIST) of the stomach with peritoneal dissemination underwent gastrectomy. After surgery, he was treated with 400 mg/day of imatinib, without recurrence, for 26 months. At 26 months, the imatinib dose was reduced because of nausea, and 4 months after the dose reduction, recurrence of GIST was detected, for which surgical resection was performed again. The first surgical specimen had a mutation of exon 11 in the c-kit receptor gene. Intriguingly, the second surgical specimen had a novel mutation of exon 17, in addition to the above-mentioned mutation, in the c-kit receptor gene. Based on the result of molecular analysis, the novel mutation of exon 17, induced by longterm chemotherapy, was judged to have been responsible for the recurrence, which perhaps was triggered by the dose reduction of imatinib. (胃GIST切除例に対しimatinib投与。高度の再発に対し追加での切除を施行。2回目の切除標本ではc-kit mutationがみられた。imatinib投与によりmutationを獲得したものと思われる。)</p>
<p>10 Metastasis to the skin at the drain site after complete resection of the lower bile duct cancer: report of a case. (ドレーン刺入部に皮膚転移をきたした胆管癌) 査読有</p>	<p>共著</p>	<p>2012.12</p>	<p>Surg Today. 2012 Dec;42(12):1248-52.</p>	<p>Noro T, Ohdaira H, Takizawa R, Kawasaki N, Kitajima M, Suzuki Y. (共著: 特定の担当パートはなし) A 73-year-old female had undergone subtotal stomach-preserving pancreaticoduodenectomy. Skin metastasis was noted at the site where the drain from the lower border at pancreaticojejunostomy had been removed 22 weeks postoperatively, and it was en bloc resected with the abdominal wall without exposing the carcinoma. Multiple nodules were confirmed in the axilla and chest wall 40 weeks after the initial operation. Careful discussion is necessary to avoid this mode of metastasis. The surgical field should not be exposed to pancreatic juice, even with LBDC. Nevertheless, this case is rare. Therefore, the risks and benefits of using such drains must be considered. (73才女性、下部胆管癌に対するSSPPD術後、ドレーン刺入部に皮膚転移を疑う結節の存在が確認。病変を露出することなく一括での腹壁部分切除を施行。術後病理で皮膚転移が確定。下部胆管癌の皮膚転移はまれであるため報告した。)</p>
<p>11 A case of mediastinal goiter treated surgically using a clavicle-lifting technique (縦隔に進展する巨大甲状腺腫に対して鎖骨挙上法を用いた切除の1例報告) 査読有</p>	<p>共著</p>	<p>2015.1</p>	<p>International Journal of Surgery Case Reports 16 (2015) 12-14</p>	<p>Eisaku Ito, Hironori Ohdaira, Jungo Yasuda, Masashi Yoshida, Yutaka Suzuki (共著: 特定の担当パートはなし) Mediastinal goiter is a benign disease, which is defined as a goiter with the greater portion of its mass lying below the thoracic inlet. It is controversial whether the cervical approach is the best approach for all mediastinal goiter surgeries. It appears that a transcervical approach using the clavicle-lifting technique may be an acceptable treatment for mediastinal goiters that extend to the aortic arch. (縦隔に進展する巨大甲状腺腫への外科的アプローチは困難であり頸部からのアプローチが良いかの判断に迷う。我々は小児用ケントによる鎖骨挙上法により良好な視野のもと、手術を行って)</p>
<p>12 Percutaneous endoscopic sigmoidopexy for sigmoid volvulus: A case report (S状結腸捻転に対する内視鏡下S状結腸固定術) 査読有</p>	<p>共著</p>	<p>2015.1</p>	<p>International Journal of Surgery Case Reports 17 (2015) 19-22</p>	<p>Eisaku Ito, Hironori Ohdaira, Norihiko Suzuki, Masashi Yoshida, Yutaka Suzuki (共著: 特定の担当パートはなし) Sigmoid volvulus often recurs and it is controversial whether preventive surgery should be performed in recurrent cases, especially in elderly and high-risk cases. Herein, we report a case of successful endoscopic sigmoidopexy using fixation to the abdominal wall. (S状結腸捻転は高齢者かつハイリスク患者にみられ、繰り返す疾患である。内視鏡下腹壁へS状結腸固定することにより良好な結果を得られた症例を報告する)</p>
<p>13 当院における腹腔鏡補助下胃切除 (LADG) の経験 査読無</p>	<p>単著</p>	<p>2005.1</p>	<p>Tama Symposium Journal of Gastroenterology Vol. 19 (No. 1): 18-20, 2005</p>	<p>腹腔鏡補助下胃切除術4例を対象に、術前診断、手術手技、手術結果、病理組織検査、術後経過を検討した。術前診断はすべてCTで明らかなリンパ節腫大は認めず、D1+αで根治可能な症例であった。切除方法は幽門側胃切除で、郭清はD1+αが3例、再建は結腸前のRoux-en-Y法2例とBillroth I法2例であった。術中損傷は右胃大網動脈処理時に生じた膵損傷が1例、スネークリトラクターによる肝損傷が1例であった。病理組織検査結果は2例が進行癌であった。術後偶発症は膵液漏出が1例、退院後も外来にてしばらく洗浄が必要であった膵液漏出が1例、数日の絶食ですぐに改善した腸閉塞が1例であった。同時期に施行した早期胃癌の開腹手術8例と、出血量、手術時間、摘出リンパ節個数、鎮痛剤使用回数、排ガス確認日、術後1日目のWBCおよび術後の発熱期間を比較したところ、いずれの項目においても有意差はみられなかった</p>

<p>14 赤外線腹腔鏡システムを用いたテラーメイド胃癌治療 査読無</p>	<p>共著</p>	<p>2009. 2</p>	<p>リンパ学第32巻2号 Page91-96 2009</p>	<p>二村浩史, 高橋直人, 渡部篤史, 佐々木敏之, 小山友己, 矢野健太郎, 山下重雄, 志田敦男, 大平寛典, 篠原寿彦, 佐野芳史, 櫻村弘隆, 三森教雄, 柏木秀幸, 矢永勝彦 (共著: 特定の担当パートはなし) 2000年7月~2008年2月にcT1T2N0胃癌で赤外線観察sentinel node navigation surgery (SNNS)を施行した患者212人(開腹手術120人・腹腔鏡手術92人)を対象に、赤外線観察SNNSの現状とリンパ節転移状況および再発・予後について検討し、臨床応用できるか考察した。胃癌における赤外線観察SNNSは開腹、腹腔鏡下に拘わらずsentinel node (SN) 同定率がSNNS99. 5%、肉眼85. 8%、感度SNNS97. 1%、肉眼47. 1%とインドシアニンググリーン(ICG)肉眼観察に比べSN同定率、感度共に有意に良好な成績であった。赤外線観察SNNSにより内視鏡的粘膜切除術(EMR)・内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)後を含め開腹・腹腔鏡手術共にリンパ流域切除(LBD)で術中診断不可の微小転移リンパ節も郭清できると思われた。</p> <p>川崎 成郎, 岩崎 泰三, 筒井 麻衣, 野呂 拓史, 大平 寛典, 鈴木裕 (共著: 特定の担当パートはなし) 目的:半固形化栄養は胃食道逆流や誤嚥性肺炎の予防効果があるが、腹満感などの消化器症状がみられることがある。これらの消化器症状に対し、消化管運動機能改善剤が与える効果について検討した。 方法:総カロリーを225kcalに統一して液状食と半固形食を試験食として用いた。13C呼吸試験による胃排出能検査を消化管運動機能改善剤の併用の有無で施行した。 結果:消化管運動機能改善剤の併用によって半固形食の胃排出は促進された。液状食の胃排出に差はみられなかった。結論:消化管運動機能改善剤は半固形食の胃排出を促進する。</p>
<p>15 半固形化栄養に対する消化管運動機能改善剤の併用効果 健常者に13C呼吸試験を用いた検討 査読有</p>	<p>共著</p>	<p>2010. 9</p>	<p>静脈経腸栄養(1344-4980)25巻5号 Page1073-1077(2010. 09)</p>	<p>GISTに対する著者等の施設の外科治療結果と他施設からの報告を検討した結果、現時点での臨床又は病理学的特徴として、1)リンパ節転移の頻度は約10%前後、2)主な転移臓器は肝臓、3)原発、転移病変共にsurgical marginを確保できれば長期生存の可能性はある、4)過去に行われたadjuvant therapyの中に有効なものは見られない等があげられた。このことから、重要なポイントとしては、1)surgical marginを確保した切除を行う、2)腫瘍径が大きい症例では近傍リンパ節転移もありうる、3)腫瘍被膜の損傷を避ける、4)転移再発症例は可能であれば切除する等があげられる</p>
<p>16 GIST (gastrointestinal stromal tumor) の標準的手術療法 査読無</p>	<p>単著</p>	<p>2004. 2</p>	<p>臨床外科 Vol. 59 (No. 2) :153-156, 2004</p>	<p>畦倉薫, 山田和彦, 天岡望, 渡久地尚久, 永野秀樹, 大平寛典, 上野雅資, 松原敏樹, 太田博俊, 山口俊晴, 武藤徹一郎 (共著: 特定の担当パートはなし) 消化器外科手術アトラス(図説)</p>
<p>17 広範囲膜切除を伴う直腸局所切除術(BME直腸局所切除術) 査読無</p>	<p>共著</p>	<p>2002. 8</p>	<p>消化器外科(0387-2645)25巻9号 Page1373-1382(2002. 08)</p>	<p>柏木秀幸, 小村伸朗, 坪井一人, 川崎成郎, 矢野文章, 大平寛典, 石橋由朗, 矢永勝彦 (共著: 特定の担当パートはなし) 腹腔鏡下Heller-Dor法の導入により、手術例の増加がみられている。腹腔鏡下Heller-Dor法は、通過障害の改善とともに、Heller筋層切開術による術後の胃食道逆流の防止を目的としている。また、食道粘膜露出部を覆うことにより、安全性が高い。術中の偶発症、術後の合併症の発生率は低く、早期の退院が可能である。術前の拡張治療により、術中の食道粘膜損傷の増加の危険性はあるが、治療成績への影響は少ない。安全性は高く、長期成績も90%近くが良好で、アカラシアに対する第一選択治療として推奨される。特に若年者では、拡張治療が不良となるので、第一選択治療となる。術後に3. 3%に嚥下困難の持続が認められていたが、拡張治療が有用である。術後に4. 9%に逆流性食道炎が認められたが、プロトンポンプ阻害薬が有用である。治療抵抗例に対しては、再手術が必要となるが、腹腔鏡手術が用いられるようになってきている。</p>
<p>18 アカラシア アカラシアに対する第一選択治療としての腹腔鏡下Heller-Dor法 査読無</p>	<p>共著</p>	<p>2007. 10</p>	<p>消化器内視鏡(0915-3217)19巻10号 Page1491-1499(2007. 10)</p>	<p>鈴木裕, 大平寛典, 川崎成郎, 野呂拓史, 瀧澤玲央, 北島政樹 (共著: 特定の担当パートはなし) 食道切除後の食道・胃管吻合の問題点を要約すると、他の消化管吻合に比べて吻合部の血流が乏しい、胃管の長さに個体差があり頸部への挙上がむずかしい、吻合に習熟度が必要、良好な視野が得られにくい、などがある。これらの問題点を考慮した新しい術式、逆overlap吻合の手順とポイントを紹介する。</p>
<p>19 胸部食道切除後の器械吻合 逆overlap吻合 査読無</p>	<p>共著</p>	<p>2011. 6</p>	<p>手術(0037-4423)65巻7号 Page1037-1040(2011. 06)</p>	<p>山内栄五郎、熊野玲子、伊藤栄作、筒井信浩、大平寛典、鈴木裕 (共著: 特定の担当パートはなし) IVRの視点から勝仮性嚢胞、被包化壊死、感染性嚢壊死、主 膵管拡張型慢性膵炎、難治性停管皮膚瘻、脾性腹水などのドレナージについて述べる。膵炎に対するIVRのドレナージ療法はいずれも経皮経胃的穿刺ドレナージを行う点がポイントである。これによりドレナージ経路がたとえ尿管と交通していても、胃内腔へ膵液が流出することにより、膵管皮膚瘻のような併発症を生じることなく治癒させることが可能となる。</p>
<p>20 膵炎のインターベンション治療 査読無</p>	<p>共著</p>	<p>2015. 8</p>	<p>手術69巻9号 Page1355-1365(2015. 08)</p>	<p>(その他)</p>

教 育 研 究 業 績 書

平成 28 年 3 月 4 日

氏名

奥田 通子



研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
基礎医学, 内科系臨床医学, 外科系臨床医学	画像解剖, 画像診断学 (含放射線診断学), 食道外科学

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 嚥下障害Q & A	共著	平成13年 8月	医療ジャーナル社	異物の咽嚥や外傷などにより起こる嚥下障害の診断と治療に関して、日頃疑問になりやすいことや知っていて欲しい知識やポイントについてQ&A方式でQ01問解説した。嚥下障害に対する聴診のポイント、嚥下と呼吸の関係、誤嚥の原因、疾患別治療方針、薬物治療、リハビリテーションについて言及している。筆者は食道相の観察ポイントについて食道造影検査の実例を挙げながら解説した。Q20 食道相の観察ポイント、P59-61. 林 良寛、大前由紀雄、奥田逸子
2 症例で学ぶ画像診断 レーニング <腹部>	ト 共著	平成17年 7月	中外医学社	画像診断が重要なポイントとなる主要な疾患を選出し、疾患別にX線、CT、MRI、エコーなどの画像診断をQ&A形式で提示した。解答部分では、画像の解説、疾患の簡単なプロフィール、画像所見のポイントなどを示し、学習の手引きとなるような構成にしている。I. 食道、II. 胃・十二指腸、III. 小腸・結腸、IV. 肝、V. 胆、VI. 膵臓、VII. 脾臓、VIII. 腎、IX. 副腎、X. 前立腺、XI. 精巣、XII. 卵巣、XIII. 子宮、XIV. その他の14章からなる。III. 小腸・大腸、症例5-8, 10-13. P31-38, 41-46. 原 裕子、八巻信郎、奥田逸子
3 症状から引く胸部画像 診断 一流れがわかる 査・診断のコツ	共著 検	平成22年 8月	中山書店	最初に胸部単純写真の読影手順を解説し、所見の取り方を学ぶ。胸部単純写真の所見を踏まえ、次に行う胸部画像診断について解説した。単に胸部画像の読影法を学ぶのではなく、胸痛、咯血・血痰、乾性咳嗽、湿性咳嗽、急性・亜急性呼吸困難等の症状別に画像を提示し、その診断の過程を重視した。Section 1 胸部画像診断初めの一歩。奥田逸子、中島康雄、松岡 伸、藤川あつ子、八木橋国博
(学術論文) 1 食道癌の縦隔リンパ節 のCT診断 (査読付)	共著	平成 9年 6月	日本医学放射線学会雑誌 57(7):391-394	縦隔リンパ節転移を評価するため食道癌179人のCT画像所見を分析した。CTの陽性所見は長径10mm以上を転移リンパ節と診断した。郭清された7218個のリンパ節は最大断面で作成し、CT画像所見と比較した。CTによるリンパ節転移の感度は50%未満と低く、陽性的中率は不良であった。その原因として、小さな転移リンパ節と腫大した非転移リンパ節が挙げられた。大きさを診断基準にした食道癌の縦隔リンパ節転移のCT診断の精度は低い。奥田逸子、小久保 宇、古川珠見、黒崎敦子、宇田川晴司、鶴丸昌彦 筆頭著者として、画像解析を主眼におき論文を作成した。
2 バレット上皮 食道腺癌18例の消化管造 影像の検討 (査読付)	に 共著した	平成11年 2月	日本医学放射線学会雑誌 59(3):64- 71	バレット上皮から発生した食道腺癌のバリウム造影像を確認した。18症例の切除食道標本にバリウムを注入し、バレット上皮および食道癌を描出した。18例中12例と比較的高い頻度で食道裂孔ヘルニアを認めた。癌の周囲に見られるバレット上皮の造影像は微細顆粒状または網状を呈していた。食道裂孔ヘルニアを合併し、癌周囲に粗造な粘膜像を認めた場合、バレット上皮から発生した食道癌が示唆される。奥田逸子、星原芳雄、小久保宇、宇田川晴司、上野正紀、鶴丸昌彦 筆頭著者として、画像解析を主眼におき、全体を統括し論文を作成した。

<p>3 Genital beta 2 microglobulin amyloidoma in a long-term dialysis patient: a case report (長期透析患者における会陰部ベータ2 ミクログロブリンアミロイドーマ) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成18年 3月</p>	<p>Am J Kid Dis 48(3): E35-E39</p>	<p>会陰部の巨大なアミロイド腫瘍を持つ58歳の日本人女性の症例を報告した。多発性嚢胞腎疾患に続発する腎不全のため、長期血液透析療法が行われていた。下腹部膨満と下肢の浮腫があり、画像診断学的検査が施行され腫と直腸巨大の間には巨大腫瘍が発見された。腫瘍はMRIで低信号を呈し、CTではびまん性石灰化を認めた。生検によって免疫組織学的にベータ2 ミクログロブリンアミロイドの沈着であることが確認された。Okuda I, Ubara Y, Takaichi K, Kitajima I, Motoi N, Hara S, Koubo T 筆頭著者として、画像解析を主眼におき、全体を統括し論文を作成した。</p>
<p>4 Massive mucinous cystadenoma of the appendix with intussusception in an adult: Usefulness of reconstructed computed tomography images (腸重積を合併した虫垂粘液性嚢胞腺腫：再構成CT画像の有用性) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年 2月</p>	<p>Radiation Medicine 26(2): 88-91</p>	<p>腸重積症の原因になった巨大虫垂粘液性嚢胞腺腫の成人例を報告した。CT画像データを用いて作成された多断面再構成と最大値投影法の再構成画像画像によって、腫瘍の性状と腸重積の状態を正確に評価できた。CTの再構成画像は診断の際に有用な画像情報を提供する。Okuda I, Matsuda M, Noguchi H, Kokubo T 筆頭著者として、画像解析を主眼におき、全体を統括し論文を作成した。</p>
<p>5 Imaging Aid for Thoracic Surgery: multidetector-row computed tomography evaluation of the tracheobronchial structure and bronchial tube selection for one-lung anesthesia (胸部外科手術への画像診断学的支援：多列CT評価による片肺肺換気麻酔のための気管支チューブの選択) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年 7月</p>	<p>Gen Thorac Cardiovasc Surg 57(7):369-375</p>	<p>多列CT検査データを用い、胸部手術の片肺換気麻酔のために気管支管支形態を評価した。画像解析装置で100例の被験者の気管支管支の三次元画像を作成し、右主気管支の長さや径を計測した。主気管支長や径は体格に依存していなかった。右主気管支は従来の解剖学的報告より短く、それが麻酔時の挿管を困難にしていた。三次元画像は気管支管支の形態を明瞭に描出し、麻酔安全性に貢献することが示唆された。Okuda I, Yamase, Ogawa S, Udagawa H, Kohno T 筆頭著者として、画像解析を主眼におき論文を作成した</p>
<p>6 Magnetic resonance-thoracic ductography: imaging aid for thoracic surgery and thoracic duct depiction based on embryological considerations (胸管MRI検査：胸部手術の画像診断学的支援と発生学的考察に基づく胸管形態の分析) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21年12月</p>	<p>Gen Thorac Cardiovasc Surg 57(12): 640-646</p>	<p>胸管MRIの最適なプロトコルを提示し、発生学的考察に基づき胸管の解剖学的経路を分析しました。非担癌成人、食道癌および肺癌の術前の78例の被験者を登録した。大動脈右側走行・左静脈角開口の基本型は86%であった。14%に右静脈角開口や大動脈左側を走行する正常変異を認めた。蛇行や分岐などの変異は効率にみられた。胸管MRI検査は非侵襲的に胸管を描出し、胸管形態を明瞭に描出できた。本法は胸部手術の安全性に貢献する。Okuda I, Udagawa H, Takahashi J, Yamase H, Kohno T, Nakajima Y Okuda I, Udagawa H, Takahashi J, Yamase H, Kohno T, Nakajima Y 筆頭著者として、画像解析を主眼におき、全体を統括し論文を作成した。</p>
<p>7 A large calcified retroperitoneal mass in a patient with Chronic renal failure: liposarcoma with ossification (慢性腎不全患者における後腹膜巨大石灰化腫瘍：骨化を伴う脂肪肉腫) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成 22年 2月</p>	<p>Clin Exp Nephrol 14(2): 185-189</p>	<p>長期慢性腎不全の経過中、腹部に巨大石灰化腫瘍が発見された65歳日本人男性例を報告した。巨大石灰化腫瘍は外科的に切除され、病理組織学的に粘液型の高分化脂肪肉腫と診断された。透析患者では関節周囲に石灰化腫瘍がある場合は悪性腫瘍を考慮すべきである。Okuda I, Ubara Y, Okuda C, Fujii T, Suwabe T, Kokubo T, Nakajima Y, Hashimoto M 筆頭著者として、画像解析を主眼におき、全体を統括し論文を作成した。</p>
<p>8 Rectus sheath haematoma in a patient receiving haemodialysis (血液透析患者に発症した腹直筋鞘血腫) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成22年 8月</p>	<p>BMJ Case Reports, pii: bcr1220092527</p>	<p>激しい咳嗽後、重度の右下腹部痛のため救急搬送された65歳の透析患者を報告した。急性腹痛の原因検索ため腹部超音波検査とCTが施行され、腹直筋鞘血腫と診断された。患者は安静および鎮痛剤、血液透析中の抗凝固剤の中止後速やかに回復した。腹直筋鞘血腫は比較的まれであるが、下腹壁動脈の穿孔枝は解剖学的特徴として腹壁の緩い領域にあり、大きな血腫を生じることがある。正しい知識と診断は不必要な開腹手術の回避に貢献する。Takemoto F, Okuda I, Sawa N, Ho shino J, Hasegawa E, Sumida K, Yamanouchi M, Hayami N, Suwabe T, Nakamura M, Ubara Y, Takaichi K 画像診断学的な立場から論文の作成と考察について助言した。</p>

<p>9 Depiction of the thoracic duct by magnetic resonance imaging: comparison between magnetic resonance imaging and the anatomical literature (MRIによる胸管の描写: MRI画像所見と解剖学的知見との比較) (査読付)</p>	共著	平成23年 1月	Jpn J Radiol 29(1): 39-45	MRIで描出された胸管形態を分析し、文献的考察を行った。担癌あるいは非担癌成人の63症例の胸管MRI画像を解剖学的知見と対比した。胸管縦隔内では従来の解剖学成書に記載されているよりも左に位置していた、特に、動脈硬化があり下行大動脈が左方に偏移すると、胸管の左方偏移が顕著であった。生体における胸管の走行部位は解剖学的文献に記載されたものと異なっていることが判明した。Okuda J, Udagawa H, Hirata K, Nakajima Y 画像診断学的な立場から論文の作成と考察について助言した。
<p>10 A case of a fibroadenoma coexisting with an invasive lobular carcinoma in the breast (乳房内に浸潤性小葉癌に線維腺腫が共存した一例) (査読付)</p>	共著	平成23年10月	Breast Cancer 18(4):319-323	浸潤性小葉癌に線維腺腫が共存した乳房腫瘍の画像所見と病理学的所見を提示した。マンモグラフィおよびMRIの画像所見は悪性と良性の両方の性状を呈していたため、細針吸引が行われた。その結果、浸潤性小葉癌と共存線維腺腫が明らかになり、乳房温存手術が施行された。マンモグラフィで嚢腫状を呈する石灰化が描出されても、腫瘍の辺縁の性状に注意を払い診断する必要がある。Tajima S, Kanemaki Y, Kurihara Y, Okamoto K, Shimamoto H, Okazaki H, Okuda J, Kawahara F, Nakajima Y, Fukuda M, Maeda I 画像診断学的な立場から論文の作成と考察について助言した。
<p>11 Assessment of the structure of the thoracic duct using Magnetic resonance-thoracic ductography in idiopathic lymphedema (胸管MRI検査による特発性リンパ浮腫の胸管形態の評価) (査読付)</p>	共著	平成24年 3月	Annals of Plastic Surgery 68:300-302	特発性リンパ浮腫2症例について胸管MRI検査を行い、胸管の形態を評価した。胸管の形態異常が認められた。本結果から胸管奇形が特発性リンパ浮腫の原因であることを示唆され、特発性リンパ浮腫の病態解明の糸口となると考えられた。胸管の可視化は特発性リンパ浮腫に対し最適な治療法を選択する画像情報になりえる。Hara H, Koshima I, Okuda J, Narushima M, Mihara M, Todokoro T 画像診断学的な立場から論文の作成と考察について助言した。
<p>12 Using multi-detector row computed tomography to evaluate baggy eyelid (多列CT検査による目袋の評価) (査読付)</p>	共著	平成24年 4月	Aesth Plast Surg 36(2): 290-294	目袋は下眼瞼の加齢兆候である。多列CT検査で34例の下眼瞼を評価し、目袋の要因を分析した。加齢とともに眼輪筋は菲薄化伸展し、眼窩脂肪の膨出が増強していた。これらの変化は年齢と強い相関を認めた。多列CTは下眼瞼の詳細な画像解剖学的情報を提供し、抗加齢・美容医学に客観的なエビデンスを構築しうる。Okuda J, Irimoto M, Nakajima Y, Sakai S, Kazuaki H, Shirakabe Y 筆頭著者として、画像解析を主眼におき、全体を統括し論文を作成した。
<p>13 Idiopathic portal hypertension and lower limb lymphedema (発性門脈圧亢進症と下肢リンパ浮腫の合併) (査読付)</p>	共著	平成24年 6月	Lymphology 45(2):63-70	特発性門脈圧亢進症と下肢リンパ浮腫の合併例を報告した。若年時から蜂窩織炎と下肢浮腫、上腹部の静脈瘤を認めた。インドシアニングロブリンパシリングラフィにより下肢のリンパ管拡張とリンパ液の鬱滞、胸管MRI検査によって胸管形態異常が確認された。リンパ浮腫に対しリンパ静脈吻合術が行われ、下肢浮腫は軽減した。本症例の発症機序として、発生過程で、リンパ管の形態変異が起こったためと推測された。Hara H, Mihara M, Narushima M, Iida T, Todokoro T, Yamamoto T, Okuda J, Koshima I 画像診断学的な立場から論文の作成と考察について助言した。
<p>14 Presence of thoracic duct abnormalities in patients with primary lymphoedema of the extremities (下肢の原発性リンパ浮腫患者は胸管の形態異常が存在する) (査読付)</p>	共著	平成24年11月	Journal of Plastic, Reconstructive & Aesthetic Surgery 65:e305-10	原発性リンパ浮腫リンパ管奇形やリンパ管形成不全が原因とされるが、治療法は確立されていない。リンパ浮腫9症例を早期発症型と遅延発症型に分け既往歴と分析し、MRIで胸管形態を評価した。早期発症型は胸管形態の異常が多かった。遅延発症型では高率に浮腫発症の6か月前に外傷の既往を認めた。早期発症型と遅延発症型ではリンパ浮腫発症機序が異なることが推測された。Hara H, Mihara M, Okuda J, Hirota A, Narushima M, Iida T, Yamamoto T, Todokoro T, Koshima I 画像診断学的な立場から論文の作成と考察について助言した。
<p>15 Clinical features of cyst infection and hemorrhage in ADPKD: new diagnostic criteria (常染色体優性多発性嚢胞患者における嚢胞感染と出血の臨床的特徴:新しい診断基準) (査読付)</p>	共著	平成24年12月	Clinical and Experimental Nephrology 16:892-90	常染色体優性多発性嚢胞患者の嚢胞感染と嚢胞出血は頻繁かつ重篤な合併症で、診断と治療が困難である。本研究は嚢胞内出血や感染の臨床的特徴を明らかにするとともに、臨床所見およびCT・MRI画像所見を分析しそれらの診断基準を確立した。急性嚢胞内出血や感染症は症状、検査データ、CT・MRI所見から診断することが可能であった。とくに、感染嚢胞の局在診断には拡散強調画像が有用であった。Suwabe T, Ubara Y, Sumida K, Hayami N, Hiramatsu R, Yamanouchi M, Hasegawa E, Hoshino J, Sawa N, Saitoh S, Okuda J, Takaichi K 画像診断学的な立場から論文の作成と考察について助言した。

<p>(その他)</p> <p>1 Diagnostic localization of ectopic parathyroid lesions: Developmental consideration (異所性副甲状腺病変の局在性診断: 発生学的考察) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成22年10月</p>	<p>Jpn J Radiol 28(10):707-713</p>	<p>発生学的に副甲状腺は第3、4の咽頭嚢から発生する。副甲状腺病変は時に異所性に生じることがあり、頸動脈分岐部から大動脈弓下の広範囲に分布する。第3、4の咽頭嚢から胸腺や甲状腺、迷走神経なども発生し、異所性に迷入した副甲状腺はそれらの構造と関連していたことが推測された。副甲状腺の近傍から発生する既存構造物の胎生期の移動メカニズムを考慮した体系的診断は、精度が高い副甲状腺病変の局在性診断に貢献する。Okuda I, Nakajima Y, Miura D, Maruno H, Kohno T, Hirata K 筆頭著者として、画像解析を主眼におき、全体を統括し論文を作成した。</p>
<p>2 Imaging Anatomy of the Facial Superficial Structures and Imaging Descriptions of Facial Aging (顔面加齢に関与する表在性構造物の画像診断学的分析) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年 4月</p>	<p>Jpn J of Diagn Imaging 30(2):117-126</p>	<p>顔面の加齢性変化は皮膚の老化だけでなく、表情筋、皮下組織の支持力低下、皮下脂肪の萎縮、眼窩脂肪のヘルニアや重力による下垂など様々な変化が積み重なって生じる。表情筋、表在性筋膜、顔面韧带、脂肪などの皮下構造物を理解し、その加齢性変化を把握することが重要である。若年から老年の顔面CTおよびMRIを解析し、加齢に関与する顔面構造物を分析した。本解析結果は抗加齢に関わる美容外科医療に応用しうる。Okuda I, Nakajima Y, Kazuaki H, Irimoto M, Shirakabe Y 筆頭著者として、画像解析を主眼におき、全体を統括し論文を作成した。</p>

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 小櫃由樹生				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
血管外科学		大動脈疾患、閉塞性動脈疾患、静脈疾患		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1 末梢動脈・静脈・リンパ管の病気のupdate 末梢動脈疾患の外科治療	共著 小櫃由樹生 重松 宏	2013. 12.	日本医師会雑誌 142: 1965-1968	閉塞性動脈硬化症に対する血行再建術の適応、手技、術後管理、成績について概説
2 1から学ぶ閉塞性動脈硬化症ASOのリスクファクター	共著 小櫃由樹生 重松 宏	2012. 8.	血栓と循環 20: 170-171 メディカルレビュー社	ASOのリスクファクター(喫煙、糖尿病、高脂血症、高血圧、男性、年齢など)について概説
3 特集心血管疾患と炎症 炎症性動脈疾患に対する血管内治療	共著 小櫃由樹生 重松 宏	2012. 2.	Heart View メジカルビュー社 16: 192-197	炎症性動脈疾患に対する血管内治療の手技と成績を概説
4 専門医を目指すケース・メソッドアプローチ 循環器疾患急性大動脈解離	単著	2013. 11.	日本医事新報社 301-307,	急性大動脈解離の病態、診断、治療、成績について問題形式にて概説
5 血管炎 日本臨床(増刊号)わが国における大動脈手術の現況	単著 小櫃由樹生	2013. 2.	日本臨床社 644-647	わが国の大動脈瘤手術の現況と成績を概説
6 特集プロスタサイクリンup todate J-METHOD studyにおける日本人 閉塞性動脈硬化症の心血管イベントと病態進行の検討について	共著 小櫃由樹生 重松 宏	2010. 6.	血栓と循環 18:150-151 メディカルレビュー社	わが国の閉塞性動脈硬化症に対する薬物療法の成績の追跡調査報告
7 標準血管外科III 炎症性腹部大動脈瘤	単著	2011. 10.	株式会社メディカルトリビューン 149-152	炎症性腹部大動脈瘤の病態、診断、治療、成績について概説
8 標準血管外科III	編集	2011. 10.	株式会社メディカルトリビューン	重松宏監修, 太田敬, 小櫃由樹生編集
9 最新救急画像診断 急性大動脈解離/胸部大動脈瘤破裂	単著	2011. 7.	総合医学社 751-758	急性大動脈解離/胸部大動脈瘤破裂の画像診断を中心とした診断と治療を概説
10 特集 癌と血栓症 癌患者における下大静脈フィルター の適応 (学術論文)	共著 小櫃由樹生 重松 宏	2010. 12.	血栓と循環 4:298-302 メディカルレビュー社	癌患者に対する下大静脈フィルターの適応と成績について概説
1 New surgical drapes for observation of the lower extremities during abdominal aortic repair (査読付) (腹部大動脈手術用の新たなドレープの開発)	Obitsu et al	2010	Ann Vasc Dis 3:127-130	腹部大動脈瘤手術時の新たなドレープの開発と成績に関する検討 Obitsu Y, Shigematsu H, Satou K et al.
2 Long-term results of second stage endovascular aortic repair following total aortic arch replacement (査読付) (全弓部置換術後の2期的ステントグラフト内挿術の遠隔成績)	Obitsu et al	2010	Gen Thorac Cardiovasc Surg 58: 501-505	全弓部置換術後の2期的ステントグラフト治療は広範病変や重複大動脈瘤に有効である。 Obitsu Y, Koizumi N, Iida Y et al.:
3 Hybrid procedures combining conventional surgery and thoracic endovascular aortic repair for thoracic aortic aneurysms (査読付) (胸部大動脈瘤に対するハイブリッド治療の検討)	Obitsu et al	2011	Surg Today 41: 922-927	置換術とステントグラフト治療を組み合わせたハイブリッド手術は手術侵襲を軽減する有効な方法である Obitsu Y, Koizumi N, Takahashi S et al:

4 The education system to master endovascular aortic repair in Japan-The Japanese Committee for Stentgraft Management. (査読付) (日本におけるステントグラフト実施管理委員会による教育方法)	Obitsu et al	2010	Eur J Vasc Endovasc. Surg 39: S5-S9	日本におけるステントグラフト管理委員会の管理システムの概要と安全性に関する報告 Obitsu Y, Ishimaru S and Shigematsu H
5 Hybrid procedure for multiple aortic aneurysm; aortic replacement with transluminally placed endovascular grafting (査読付) (重複大動脈瘤に対するハイブリッド治療)	Obitsu et al	2008	Ann Vasc Dis 1:40-44	重複大動脈瘤に対するステントグラフトを用いたハイブリッド手術の方法と成績の検討 Obitsu Y., Koizumi N., Shigematsu H. et al.
6 心臓血管外科学の進歩 (査読付)	小櫃由樹生 重松 宏	2011	循環器専門医 19 : 309-312	第41回日本心臓血管外科学会の総括と講演内容の概説
7 重複大動脈瘤に対するハイブリッド治療 (査読付)	小櫃由樹生 他	2006	日血外会誌 15:1-4	重複大動脈瘤に対するステントグラフトを用いたハイブリッド手術の術式の工夫と成績の検討
8 急性期偽腔閉塞型大動脈解離の治療成績	小櫃由樹生 他	1998	日胸外会誌 46 : 689-694	偽腔閉塞型大動脈解離の治療法の選択と成績に関する検討
9 下肢静脈瘤における深部静脈弁不全の治療方針 (査読付)	小櫃由樹生 他	1997	静脈学 8 : 21-25	下肢静脈瘤における深部静脈弁不全に対する直達法による弁形成術の中期成績の報告
10 1次性下肢静脈瘤の治療方針 (査読付)	小櫃由樹生 他	1996	静脈学 7 : 229-234	1次性下肢静脈瘤に対する重症度に応じた手術選択とその成績についての検討
(その他)				
1				
2				
3				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 上原 燈紀子
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
内分泌代謝科		代謝疾患、甲状腺疾患、視床下部下垂体疾患、副腎及び関連疾患		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1. 系统性红斑狼疮合并肺部烟曲菌感染二例 (SLE患者のアスペルギウス肺炎の2例) (査読付)	共著	平成17年2月	中华风湿病学杂志	概要：アスペルギウス肺炎を発症したSLEの2症例について文献考察を加えて報告 ページ：2005(02)122 127-128ページ 分担：データ収集、解析 共著者名：周蕾, 玗路, <u>上原灯紀子</u>
2. 系统性狼疮合并肺部霉菌感染2例并文件复习 (SLE患者に真菌性肺炎を合併した2例と文献復習)	共著	平成17年2月	2005年全国首届深部霉菌感染学术会议论文集	概要：SLE患者に真菌性肺炎を合併した2例に文献的考察を加えて報告 ページ：2005 271-274ページ 分担：データ収集、解析 共著者；周蕾, 玗路, <u>上原灯紀子</u>
3. 狼疮样表现的间日疟一例 (SLE様症状を呈した3日熱マラリア感染の1例) (査読付)	共著	平成18年3月	中华风湿病学杂志	概要：SLE様症状を呈した3日熱マラリア感染の1例について文献的考察を加えて報告 ページ：2006(03)39 188-189ページ 分担：筆頭著者、データ収集、解析 共著者名： <u>上原灯紀子</u> , 魏蔚, 玗路
4. 以心肌损害为首发表现的复发性肌炎一例 (心筋障害を初発症状とした多発性筋炎の1例) (査読付)	共著	平成18年4月	天津医药2006年第04期	概要：心筋障害を初発症状とした多発性筋炎の1例について文献的考察を加えて報告 ページ：2006(04)39 235ページ 分担：筆頭著者、データ収集、解析 共著者： <u>上原灯紀子</u> , 周蕾, 玗路
5. 系统性红斑狼疮骨髓受累机制初步研究 (SLE患者の骨髓抑制機序の研究) (査読付)	共著	平成20年5月	中华血液病学杂志	概要：SLE患者の骨髓幹細胞を培養しその骨髓抑制機序について考察を加えて報告 ページ：2007(S1)59 35-36ページ 分担：筆頭著者、データ収集、解析 共著者；付蓉, 邵宗鸿, <u>上原灯紀子</u> , 玗路
(その他・学会発表) 1. サムスカの併用で尿量の増加を得て日常生活への復帰が可能となった慢性腎不全・心不全合併の3症例	—	平成26年8月	サムスカ研究会 熱海	内容：サムスカの併用で尿量の増加を得て日常生活への復帰が可能となった慢性腎不全・心不全合併の3症例について文献的考察を加えて発表 発表者： <u>上原燈紀子</u> 、重政朝彦、小野孝彦

2. 高齢発症の巣状糸球体硬化症ネフローゼ症候群の1例	—	平成26年9月	第28回京都腎セミナー 京都	内容：高齢発症の巣状糸球体硬化症ネフローゼ症候群の1例について文献的考察を加えて報告 発表者：上原燈紀子，鈴木雄一朗，矢嶋淳，白井博之，小野孝彦
3. 免疫抑制療法の変更をせずにフロセミド静注の追加により寛解を得た巣状糸球体硬化症の1例	—	平成26年9月	第49回静岡腎セミナー 静岡	内容：免疫抑制療法の変更をせずにフロセミド静注の追加により寛解を得た巣状糸球体硬化症の1例について文献的考察を加えて発表（奨励賞受賞） 発表者：上原燈紀子，矢嶋淳，小野孝彦
4. 経口ステロイド治療の経過中に血液透析とLDLアフェレーシスにより寛解した高齢発症の巣状糸球体硬化症ネフローゼ症候群の1例	—	平成26年10月	第44回静岡県腎不全研究会、静岡	内容：経口ステロイド治療の経過中に血液透析とLDLアフェレーシスにより寛解した高齢発症の巣状糸球体硬化症ネフローゼ症候群の1例について文献的考察を加えて発表 発表者：上原燈紀子，鈴木雄一朗，矢嶋淳，白井博之，小野孝彦
5. 免疫抑制療法の変更をせずにフロセミド静注の追加によりネフローゼ症候群の完全寛解をみた巣状糸球体硬化症の1例	—	平成26年11月	第224回内科学会東海地方会、名古屋	内容：免疫抑制療法の変更をせずにフロセミド静注の追加によりネフローゼ症候群の完全寛解をみた巣状糸球体硬化症の1例について文献的考察を含めて報告 発表者：上原燈紀子，矢嶋淳，小野孝彦
6. 認知障害を呈すること無く発症し、右前頭葉病変を主病巣としたAtaxic form of sporadic Creutzfeldt-Jakob diseaseの68歳男性例	—	平成26年11月	第221回日本神経学会関東・甲信越地方会、東京	内容：認知障害を呈すること無く発症し、右前頭葉病変を主病巣としたAtaxic form of sporadic Creutzfeldt-Jakob diseaseの1症例を文献的考察を加えて発表 発表者：上原燈紀子，鈴木雄一朗，梁成勲，永山富子，永山正雄
7. 健診の尿潜血指摘から急激に進展した、抗GBM型腎炎の1例	—	平成27年5月	第45回京都腎臓免疫研究会 京都	内容：健診の尿潜血指摘から急激に進展した、抗GBM型腎炎の1例について文献的考察を加えて発表 発表者：上原燈紀子，松田佳奈，矢嶋淳，白井博之，小野孝彦
8. 1ヶ月間で劇症型の経過をたどった抗GBM型腎炎の1例	—	平成27年10月	第45回日本腎臓学会東部学術大会、東京	内容：1ヶ月間で劇症型の経過をたどった抗GBM型腎炎の1例について文献的考察を加えて発表 発表者：上原燈紀子，松田佳奈，矢嶋淳，白井博之，小野孝彦
9. 間質性肺炎の経過中に腎機能が低下し血液透析・血漿交換を行った1例	—	平成28年3月	第52回静岡腎セミナー 静岡	内容：間質性肺炎の経過中に腎機能が低下し血液透析・血漿交換を行った1例について文献的考察を加えて発表 発表者：上原燈紀子，平戸佳奈，平馬誠之，矢嶋淳，白井博之，唐仁原全，小野孝彦
10. ネフローゼ症候群の抗凝固療法にXa阻害薬の有用性が示唆された2症例	—	平成28年4月	第113回日本内科学会総会・講演会医学生・研修医の日本内科学会ことはじめ、東京	内容：ネフローゼ症候群の抗凝固療法にXa阻害薬の有用性が示唆された2症例について文献的考察を加えて発表 発表者：上原燈紀子，山田齋毅，青柳左近，松田佳奈，平馬誠之，矢嶋淳，白井博之，小野孝彦
11. DPP4阻害薬と速効型インスリン分泌促進薬の長期併用療法の検討	—	平成28年5月	第60回日本糖尿病学会年次学術集会 京都	内容：当院における外来糖尿病症例を後向き研究で解析しDPP4阻害薬と速効型インスリン分泌促進薬の長期併用療法の検討した 発表者：上原燈紀子，金子真也，平馬誠之，山田佳彦
12. 間質性肺炎の経過中に腎機能低下し血液透析導入となったマクログロブリン血症の1例	—	平成28年6月	第61回日本透析医学会学術集会・総会 横浜	内容：間質性肺炎の経過中に腎機能低下し血液透析導入となったマクログロブリン血症の1例について文献的考察を加えて発表 発表者：上原燈紀子，平戸佳奈，平馬誠之，矢嶋淳，白井博之，唐仁原全，小野孝彦

<p>13. カナグリフロジンの使用中に ケトアシドーシスを呈した1例</p>	<p>—</p>	<p>平成28年10月</p>	<p>第90回 日本糖尿病学会中部地方会、名古屋</p>	<p>内容：カナグリフロジンの使用中に ケトアシドーシスを呈した1例について文献的考察を加えて発表 発表者：上原燈紀子、金子真也、平馬誠之、山田佳彦</p>
<p>14. 当院におけるカナグリフロジン使用中止症例の原因の検討</p>	<p>—</p>	<p>平成29年5月</p>	<p>第61回日本糖尿病学会年次学術集会、名古屋</p>	<p>内容：当院外来患者におけるカナグリフロジン使用中止症例の原因を後ろ向きに解析しその安全性などについて検討 発表者：上原燈紀子、金子真也、平馬誠之、山田佳彦</p>

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 小川 明子
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
乳癌免疫染色		次世代シーケンサー、DISH法、Gene protein assay		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
該当なし				
(学術論文)				
1. 呼吸ケアの危ない事例研究第7回 MRSA肺炎に対して適切な抗生物質投与がされなかった症例	共著	2007年7月	呼吸ケア メディカ出版	概要: 抗生剤は現代の医療において重要な役割を果たしており、感染症の治癒、患者の予後の改善に大きく寄与してきた。その一方で、抗生剤には、その使用に伴う有害事象や副作用が存在することから、抗生剤を適切な場面で適切に使用することが求められている。近年、そのような不適正な抗生剤使用に伴う有害事象として、薬剤耐性菌とそれに伴う感染症の増加が国際社会でも大きな課題の一つに挙げられるようになってきている。不適正な抗生剤治療が行われた一例を提示し、実臨床での課題と改善点を検討した。 掲載ページ: p35-44 担当: データ収集と解析 共著者: 尾崎孝平, 桑山明子, 土山安澄
2. 閉経後乳癌に対するアロマターゼ阻害剤による内分泌療法の完遂率と関節痛	共著	2010年5月	乳癌の臨床 第25巻 第2号 篠原出版社	概要: アロマターゼ阻害薬は閉経後ホルモン感受性乳癌の標準治療であるが、中断までの期間や副作用については報告されていても、実臨床で予定投与期間の5年が完遂されているかの報告がない。1998年~2003年に手術を行った原発性乳癌のうち術後ホルモン療法としてアロマターゼ阻害薬を使用した396例の検討を行った。 掲載ページ: p23-29 担当: データ収集と解析 共著者: 蒔田益次郎, 稲尾瞳子, 桑山明子, 井手佳美, 伊藤良則, 高橋俊二, 岩瀬拓士
3. 外来癌化学療法クリニカルパス実例集	共著	2011年6月	メディカルレビュー社	外来で可能な化学療法の48レジメンについて、実際に使用されている「医療者当日用パス」を掲載。さらに解説として、パス使用のポイント・看護師や薬剤師の役割を明記。化学療法チームにおいて、どのレジメンを導入するか、各スタッフがどのような役割をするかを説明した。そのうちの分子標的薬である3wHER療法を担当した。 掲載ページ: p36-38 共著: 伊藤良則、小林心、平良眞一郎、伊藤真由子、桑山明子、井上謙一他 監修: 畠清彦

4. 「切除困難例」への化学療法後の手術—根治切除はどこまで可能か 転移再発乳癌に対する外科手術の可能性	共著	2012年1月	臨床外科 67巻 1号	<p>概要：乳癌薬物療法の進歩によって進行再発乳癌の生存期間は着実に延長しているが、依然として治癒は望めない現状にある。肺・肝・胸壁再発などに対して散発的に外科治療が行われており、そのなかには少なくない長期生存例、治癒例がある。これまでの外科治療の報告をレビューし、再発乳癌に対する外科治療の意義と望ましい対象例の選択について考察し、Disease free interval (DFI) 3年以上、ER陽性で、薬物療法で制御され、完全切除が可能な症例などでは外科治療がよい選択肢となりうることを報告した。</p> <p>掲載ページ：p6-11 担当：データ収集と解析 共著者：吉本賢隆, 白川一男, 吉井淳, 井寺奈美, 桑山明子</p>
<p>(その他)</p> <p>1. Distortionを呈する非触知病変に対するステレオガイド下マンモトーム生検の検討</p> <p>2. 術前化学療法におけるリンパ節転移消失例の検討</p>	—	<p>2010年3月</p> <p>2011年9月</p>	<p>第19回日本乳癌画像研究会 兵庫県明石市</p> <p>第19回日本乳癌学会総会 宮城県仙台市</p>	<p>Distortionの原因となる病変は硬癌、浸潤性小葉癌、DCIS、硬化性腺症を主体とする乳腺症があげられる。これらは非触知で超音波検査では描出困難な例も多い。2007年10月～2008年12月にステレオガイド下マンモトーム生検を行った453例中Distortionを標的にしたものの20例。画像と病理を検討した。Distortionを呈する非触知病変は、超音波検査で所見に乏しくてもMRIで造影がみられた症例においてはステレオガイド下マンモトーム生検が有用であった。</p> <p>桑山明子, 五味直哉, 蒔田益次郎, 堀井理絵, 秋山太, 岩瀬拓士</p> <p>術前化学療法 (NAC) による原発巣の病理学的完全奏効 (pCR) やNAC後のリンパ節転移消失例も予後が改善すると報告されている。NAC後にリンパ節転移が消失する割合、原発巣とリンパ節転移の効果判定の相違、NAC後のリンパ節転移消失例の特徴を解析した。2006年1月～2009年12月までに乳癌と診断され、NAC前に腋窩リンパ節転移が細胞診もしくは組織診で証明され、NACを行った原発性乳癌165例。NACはアントラサイクリン系抗癌剤とタキサン系抗癌剤を使ったレジメンを用いた。解析の結果、NAC後にリンパ節転移が消失したのは、165例中45例 (27%) だった。これらの結果から原発巣とリンパ節転移の効果は一致せず、今回の検討では、原発巣でpCRが得られた症例の78%でリンパ節転移も消失するが、リンパ節転移が消失しても原発巣が残存する例が多く、HER2タイプやトリプルネガティブ、a2、核グレード3ではNAC後にリンパ節転移が消失する傾向にあることを報告した。</p> <p>桑山明子, 西村誠一郎, 宮城由美, 橋本梨花子, 岩崎玲子, 五味直哉, 蒔田益次郎, 高橋俊二, 伊藤良則, 堀井理絵, 秋山太, 岩瀬拓士</p>

<p>3. HER2/2+ (IHC法) 乳癌におけるDISH法再測定の有用性：FISH法との比較</p>	<p>—</p>	<p>2012年6月</p>	<p>第20回日本乳癌学会総会 熊本県熊本市</p>	<p>HER2遺伝子増幅/蛋白過剰発現は、乳癌の予後因子であり、分子標的薬トラスツマブの特異的ターゲットである。その発現状況は治療方針に直結するため、検査・判定方法が非常に重要である。従来のFISH法は、蛍光顕微鏡での観察が必要であり色素の退色がみられ再現性が低いなどの問題点が指摘されている。平成23年5月より本邦でのDISH法の保険収載が開始され、FISH法に代わる検出法として注目されている。FISH法とDISH法の判定値の異同およびDISH法の有用性について検討した。DISH法は退色がないこと、また形態学的評価も可能なことから癌細胞を確実に評価・選択しHER2/CEP17比を測定できることが、FISH法よりHER2/CEP17比が高い結果になったと考えられる。FISH法で増幅なしとされたIHC：2+乳癌の中にもトラスツマブの適応となる患者がいる可能性が示唆された。 桑山明子、井寺奈美、吉井淳、白川一男、吉本賢隆、加藤舞、長村義之、斎藤光江</p>
<p>4. 乳癌スクリーニングにTomosynthesisシステムを導入して：触診、超音波検査は省略できるか？ Focal Asymmetric Density (FAD)は？</p>	<p>—</p>	<p>2013年6月</p>	<p>第21回日本乳癌学会総会 静岡県浜松市</p>	<p>従来マンモグラフィはアナログ、2D (デジタル) で行われてきた。2011年米国のFDAにより2D-3D mammography (MMG) 撮影を行うTomosynthesisシステムが承認され、各国の臨床の現場に拡がり始めている。しかしこのシステムの乳癌検診における位置づけはまだ確定していない。NCCNガイドラインでは乳癌リスクの判定により、スクリーニングの仕方が示され、通常のリスクの40歳以上の女性では年に一度のMMG、触診が推奨されている。また日本などにおいては超音波検査を併用することが腫瘍の発見率を高めるのではないかと考えられている。このシステムによる2D-3D MMG撮影のみで、従来の検査法より精度を落とさずに、触診や超音波検査を省略した効率的な検診が行えるかどうかを検討した。この結果から2D-3D MMGのみによる検診システムは従来の触診、あるいは超音波検査を併用する検診に比較して精度を高め、なおかつ発見率を上げることが示唆された。 桑山明子、内田恵博、國松奈津子、白川一男、加地利雄、甲斐崎祥一、辻英一、多田敬一郎、小川利久</p>
<p>5. ハーセプチン+エリブリン療法に、後からペルツマブ (パージェタ) を上乗せしたところ著効を示した症例</p>	<p>—</p>	<p>2014年7月</p>	<p>第22回日本乳癌学会総会 大阪府大阪市</p>	<p>ハーセプチン+エリブリン療法でPD (Progression disease) となっても、後からペルツマブ (パージェタ) を上乗せしたところ著効を示した。また抗癌剤がビノレルピンやタキソールでも同様の効果がみられた。今後は抗癌剤とハーセプチン療法で効果がみられなくなった症例にもペルツマブ併用が奏功する可能性を認めた。 小川明子、内田恵博、木村聖美、白川一男、石橋祐子、多田敬一郎、小川利久</p>

6. Ki67の経時的変化	—	2015年7月	第23回日本乳癌学会総会 東京都千代田区	<p>現在の乳癌の治療は主にバイオマーカーであるER、PgR、HER2に基づいて行われている。Ki67は半減期60～90分の蛋白で、St GallenなどまではKi67がLuminal typeでn0症例のリスク分類に使われ、n0症例の術後の抗がん剤の適応の有無について検討されていた。また乳癌のすべてのタイプで、術前抗がん剤によりKi67の低下を見たものは予後が良いなどが発表されている。Ki67の染色性が経時的に変化するかどうかを検討する。受診時のCNBによるER、PgR、HER2、Ki67の免疫組織化学と手術後標本のそれらと比較検討した。30%に測定時期によりKi67が変動する現象が見られた。Ki67は測定時期により変動することがあることがある。抗がん剤を使うと減少する傾向が見られた。このようにKi67は変動するようで、摘出標本のKi67値だけで、治療方針を決めることには問題があると考えられた。</p> <p>小川明子、内田恵博、木村聖美、白川一男、石橋祐子、菊池弥寿子、西岡琴江、丹羽隆義、多田敬一郎、小川利久</p>
7. 同時両側性、異時両側性、同時片側性多重癌の各病巣のER、PgR、HER2の比較検討	—	2016年6月	第24回日本乳癌学会総会 東京都江東区	<p>同時両側性ではERの発現が高く、異時両側性ではER、PgR、HER2の発現が低いことが報告されている。当院で経験した同時両側性乳癌16例、異時両側性乳癌19例、同時性片側性多重癌15例を検討した。結果として、異時両側性、同時性片側性多重癌で、同時両側性に比較してHER2タイプ、TNCタイプの病変が多い傾向が見られた。</p> <p>小川明子、内田恵博、柳裕代、木村聖美、石橋祐子、菊池弥寿子、西岡琴江、丹羽隆義、多田敬一郎、小川利久</p>

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 奥仲 哲弥				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
外科系臨床医学、基礎医学		呼吸器外科学、呼吸病態学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1 Minimally invasive techniques in thoracic medicine and surgery (胸部外科内科疾患における最低侵襲治療)	共著	平成7年4月	Chepman & Hall Medical London	光線力学的治療 (PDT) により、59例、69病巣の早期肺癌を治療し、65.2%の根治を得た。中心型早期肺癌の根治療法としての可能性が示唆されたので、臨床第2相試験の必要性がある。またPDTの肺癌治療への応用として、進行肺がん応用が検討された。つまり進行がんの表装浸潤部を手術に先行してPDTを行い、手術の質を向上させる。24例に施行し、19例に効果を確認できた。 Photodynamic therapy in early tumors: Combined use of photodynamic therapy and surgery. Kato H, Okunaka T. (早期がんに対する光線力学的治療: 光線力学的治療と手術の合併治療: 加藤治文、奥仲哲弥) pp149-171
2 Comprehensive Textbook of Thoracic Oncology (胸部腫瘍学総合テキスト)	共著	平成8年4月	Williams & Wilkins Baltimore	早期中心型肺癌の蛍光画像診断をエキシマダイレーザー画像解析装置を開発して行った。21例注20例に対し癌の部位と一致した蛍光を感知できた。同装置を用いて光線力学的治療 (PDT) を行った症例は66例、76病巣で、根治率は66.7%であった。気管支鏡で腫瘍部位が同定できない早期肺癌の部位診断、根治治療の可能性がされた。今後PDTは中心型早期肺癌の治療戦略の第一選択となりうる。Endobronchial photodynamic therapy. Kato H, Okunaka T. (経気管支的光線力学的治療: 加藤治文、奥仲哲弥) pp947-964
3 肺癌 診断・治療の要点	共著	平成11年4月	篠原出版	気管支肺内病変の確定診断のためには、気管支鏡下の組織生検あるいは病巣の細胞摂取が必須である。直視下気管支鏡下組織生検、細胞診、X線透視下の経気管支肺生検、末梢病巣擦過細胞診、吸引細胞診、洗浄細胞診の安全で確実な方法を解説。末梢病変で診断がつきにくい場合に対し血管内視鏡を改良した細径気管支ファイバースコープを開発し診断率を向上させる試みを行っている。中心型進行肺癌の姑息的治療には高出力レーザー焼灼法、早期肺癌には光線力学的治療法が適応になることを紹介した。診断8章 気管支鏡 C. 組織診、細胞診 pp57-59、D. 細径ファイバースコープ pp60-62、治療6章 レーザー治療 pp123-126 奥仲哲弥
4 呼吸器疾患-最新医療と21世紀への展望-	共著	平成13年1月	先端医療技術研究所	光感受性物質は光線に暴露されると光エネルギーを吸収し、励起一重項状態に転移するが、これが基底状態に遷移する際に生じた活性酸素は細胞内呼吸に障害を与え細胞を変性、壊死に陥らせる。この原理を応用した光線力学的治療法により治療した早期肺癌は125例161病巣にのぼり、CR率は86.3%であった。この内腫瘍の末梢が確認され、腫瘍径が1cm以下の症例のCR率は98.9%と高い治癒率を獲得した。今後より腫瘍親和性が高く、光線過敏の少ない光感受性物質、並びにコンパクトで安価なレーザー装置の開発が望まれる。第7章 肺癌 レーザーによる光線力学的治療法 奥仲哲弥、加藤治文 pp200-204
5 肺癌診療ハンドブック	共著	平成13年4月	中外医学社	レーザー並びに内視鏡の開発の進歩は急速で、内視鏡的レーザー治療が中心型肺癌の治療法として確立されつつある。肺癌に対するレーザー治療の目的は早期がんの根治的治療と局所病変の改善のための治療に大別されるが、前者は高出力レーザーを用いた病巣焼灼法であり、後者は腫瘍親和性光感受性物質と低出力レーザーを用いた光線力学的治療 (PDT) である。高出力レーザーにはNd-YAGレーザーを用いることで気道を開大し、換気障害を改善させる。PDTは腫瘍径が1cm以下で病巣

6 インフォームドコンセントのための図解解説シリーズ 肺癌	共著	平成13年9月	医薬ジャーナル社	<p>が完全に気管支鏡で確認できる場合はほぼ100%の完全寛解が期待できる。第V章 レーザー治療 奥仲哲弥、加藤治文 pp131-135</p> <p>光線力学的治療 (PDT)とはがんに集まりやすく、しかも光と化学反応を起こす腫瘍親和性光感受性物質を投与し、出力の弱いレーザー光線を病巣に当てることにより、がんを選択的に壊滅させる方法である。適応となる肺癌は気管支鏡で観察できる範囲に局在し、腫瘍径1cm以下、浸潤の深さが5mmである。腫瘍親和性物質であるヘマトポルフィリン誘導体に毒性はほとんど確認されていないが、唯一の合併症に皮膚光過敏症があるため、投与後約2週間は直射日光を避ける必要がある。第8章 肺癌の治療 光線力学的治療 奥仲哲弥 pp30-32</p>
7 Bronchology and Bronchoesophagology:State of the Art (気管支学および気管食道学の最先端)	共著	平成13年4月	Elsevier Science B.V. Amsterdam, Netherlands	<p>フォトフリンを用いた光線力学的治療 (PDT) は多くの固形がんや管腔内に発生した腫瘍に対する効果的な治療法として確立している。過去10年285症例、338病巣の中心型肺癌をPDTによって治療したが、完全寛解率は50.3%であった。148病巣の早期肺癌に限った完全寛解率は85.9%に達し、48症例が最高228ヶ月無再発生存を獲得している。PDTは進行がんの手術前の合併療法あるいは早期中心型肺癌の根治療法になりえると結論づけた。The role of PDT for bronchogenic carcinoma. Okunaka T, Furukawa K, Usuda J, Kato H (肺癌に対する光線力学的治療法の役割 奥仲哲弥 古川欣也 臼田実男 加藤治文) pp131-137</p>
8 PDTハンドブック 光線力学的治療のアドバンステクニク	共著	平成14年9月	医学書院	<p>肺癌でも中心型肺癌はヘビースモーカーに多く発症し、呼吸機能が低下しており、失う肺のボリュームが多いことから肺機能を温存す治療法の選択が望まれる。光線力学的治療法は、腫瘍を選択的に壊滅に陥れ、また経気管支的に治療が可能である。1996年4月に保険採用され、早期中心型肺癌の標準的な治療法となった。閉塞を認める進行形肺癌の気道開口、縮小手術を目的とした術前療法、手術不能な末梢型小型肺癌の治療、胸膜播種症例における肺全摘後照射法などが今後期待される。肺癌に対するPDT 奥仲哲弥、島谷英明、加藤治文 pp11-26</p>
9 Applied Laser Medicine (レーザー医療の応用)	共著	平成15年4月	Springer, Berlin	<p>呼吸器領域におけるレーザーの適応疾患は1) 結核や外傷後の気道狭窄、2) 気道形成後の肉芽、3) 気道発生の良性腫瘍、4) 原発性あるいは転移性の気道悪性腫瘍、5) 手術不能の中心型早期肺癌である。気道狭窄解除にはNd-YAGレーザーによる焼灼が最も効果的であるが、穿孔の危険性があるため放射線腔内照射との比較検討が必要である。光線力学的療法は早期中心型肺癌、進行肺がんの気道狭窄、外科切除との合併療法が行われている。また胸水コントロールのために胸腔内レーザー照射や悪性胸膜中皮腫、胸膜のう胞への適応も試みられているが、パイロットスタディの域をでていないものも多い。Laser applications in plumonlogy and thoracic surgery. Okunaka T, Kato H (呼吸器内科、呼吸器外科におけるレーザーの応用 奥仲哲弥、加藤治文) pp600-614</p>
10 MDアンダーソンがんセンターに学ぶが癌診療 肺癌	共著	平成18年9月	Springer, Tokyo	<p>早期非小細胞肺癌 (TNM分類でI期、II期)と臨床的に診断された場合も遠隔転移を否定出来ないのので全身精査が必要である。系統的外科切除 (肺葉切除かそれ以上、縦隔リンパ節の完全郭清) は第一選択の標準治療法である。標準術式に耐えれない症例の場合も外科的きつ状切除が放射線療法より成績がよい。多くの早期患者が癌死する一番の原因が病期決定のバイアスであり、今後確実な病期決定の方法の開発が必要である。術後化学療法の必要性を評価するスタディ、無作為化比較試験を行うべきである。第6章 早期 (I期、II期) 非小細胞肺癌の治療 奥仲哲弥 pp65-75</p>
11 ポストゲノム時代の内視鏡学	共著	平成14年5月	中山書店	<p>腫瘍親和性光感受性物質の微弱な蛍光を感知して肉眼的にも局在が不明ながんの局在を同定する有力な診断法が光線力学的診断法 (PDD)である。エキシマダイレーザー蛍光画像解析装置を用いて早期肺癌の局在診断を行った。28例中27例において癌病巣に一致してPhotofrin特有の630nmと690nmの二峰性のピークを観察できた。また癌病巣は正常部位と比べ自家蛍光が減弱しているという原理に基づいた蛍光診断装置がLIFE Systemである。本装置の正診率は90%であり、気管支鏡に併用し</p>

12 癌の臨床 肺癌 診断・治療の最前線	共著	平成15年11月	篠原出版社	<p>て検査を行うことで中心型肺癌の診断率の向上が期待できる。第16章 Photodynamic Diagonosis (PDD) (光線力学的診断) 奥仲哲弥、池田徳彦、加藤治文 pp114-119</p> <p>PDTは全世界で4000例以上の症例に対して臨床応用されているが、肺癌症例が最も多く、低肺機能患者の早期中心型肺癌治療の第一選択肢になりつつある。PDTの長所として他の治療を妨げない点を鑑みるとPDTと放射線や化学療法との合併療法、手術とのcombinationが検討される。最近ではより腫瘍親和性が高く、光線過敏症の少なく、また組織透過性の高い長波長側のレーザー励起が可能な薬剤の開発が進み、日本で開発されたNPe6における第二相試験のCR率は82.9%と高率であった。VII 手術療法 PDTの役割 奥仲哲弥、加藤治文 pp271-280</p>
13 臨床研修イラストレイテッド 第6巻 呼吸器系マニュアル	共著	平成17年4月	羊土社	<p>気管支の微細な変化と病巣の浸潤範囲をより正確にとらえることができるのが、蛍光診断である。蛍光診断には自家蛍光内視鏡と光線力学的診断法がある。従来の内視鏡では困難な1) 早期肺癌の診断率の向上、2) 扁平上皮化性病巣の診断率の向上、3) 手術における客観的切除ラインの決定に寄与するなどを目的とする。また超音波気管支鏡は深達度診断に欠かせない。正確な診断の後光線力学的治療法を行うことで中心型早期肺癌のほぼ100%が治癒可能であるが、早期中心型肺癌の発見頻度は低く、特にヘビースモーカーなどのハイリスク群に対し喀痰細胞診の普及が望まれる。II章 各種検査の実際 蛍光気管支鏡 (肺癌の早期発見)、光線力学的治療 (PDT)、超音波内視鏡 奥仲哲弥 pp214-220</p>
14 外科病棟・手術室のリスクマネジメント	共著	平成16年2月	中外医学社	<p>リスクマネジメントのポイントは、1) 医療事故防止のための安全対策マニュアルの作成、2) 情報の記録と開示、3) 医療事故発生時の対応のマニュアル化、4) インシデント・アクシデントレポートの整備と分析、5) インフォームドコンセントの徹底と文書化、6) 医療従事者の啓蒙である。呼吸器外科手術は術後の合併症として、1) 術後肺炎、2) 遷延性肺癆、3) 術後気管支瘻、4) 間質性肺炎の急性増悪、5) 肺塞栓症、6) 肺水腫が重要で、未然に防ぐ処置は当然であるが、患者、患者家族と情報の共有が必要である。呼吸器外科とリスクマネジメント 奥仲哲弥、林和、加藤治文 pp98-109</p>
15 肺癌診察二頁の秘訣	共著	平成16年10月	金原出版	<p>気管支をはじめとする生体は450nm前後の波長光で励起すると、520nm波長前後の自家蛍光を発する。発がん課程によって内因性蛍光物質より発光する自家蛍光が減弱するため、癌病巣の自家蛍光は、正常部位の自家蛍光より優位に弱い。この特性を利用し、カドニウム・ヘリウムレーザーを励起光源とした蛍光内視鏡がLIFE systemとして広く臨床応用されている。自家蛍光における220例の癌および扁平上皮化生の正診率は92%であり、気管支鏡の66%を優位に上回った。蛍光診断による中心型早期肺癌の診断 奥仲哲弥 pp62-63</p>
16 癌と化学療法 update	共著	平成17年11月	中外医学社	<p>この2年間で術後補助化学療法の有効性が明らかになり、標準的治療戦略に転機が訪れた。現在進行中の臨床試験は90年代に出た抗がん剤の単独ないしは併用療法あるいはgefinitibなどの分子標的薬の有効性の検証が行われている。昨今の大規模臨床データから5年生存率で5~15%のsurvival benefitがあることが証明されつつある。今後は患者にとって確実な治療効果が期待されかつ毒性の少ない治療法の選択、開発を念頭にtranslational researchを組み込んだ臨床試験の蓄積が肝要である。非小細胞肺癌の術後adjuvant therapy 坪井正博、加藤治文、奥仲哲弥 pp408-414</p>
17 肺がんのすべて	共著	平成19年1月	文光堂	<p>機能温存を考慮に入れた経気管支鏡的治療は術後の機能低下が少なく、従来外科的治療しかできない疾患の非観血的治療を現実化してきた。経気管支鏡的治療のツールには高周波スネア、レーザー、ステント、brachytherapyがあるが、レーザーが最も頻用されている。肺がんに対するレーザー治療は、高出力レーザーによる腫瘍焼灼法とPDTに大別され、前者は進行肺がんの気道閉塞の改善に、後者は早期がんの根治療法として適応が確立されている。VI 治療方針の決定 中心型肺</p>

18 呼吸器専門医テキスト	共著	平成19年11月	南江堂	腫瘍に対するレーザーを用いた内視鏡治療 奥仲哲弥 pp188-190 高出力レーザーによる腫瘍焼灼法はNd-YAGレーザー焼灼法である。波長1064nmのレーザー光を40～50Wの出力で0.2秒の条件で照射する。PDTは腫瘍親和性感受性物質であるレザフィリン投与後4時間目にダイオードレーザーを用いて664nmのレーザー光を100J/cm ² 照射する。高周波スネアは300kHz～5MHzの周波数が用いられるが、近年ではアルゴンプラズマコアギュレーター (APC)が開発されレーザーの代用として使用されている。気管支内視鏡治療 (レーザー等) 奥仲哲弥 pp262-264
19 次世代光医療 レーザー技術の臨床への橋渡し	共著	平成22年11月	シーエムシー出版	光線力学的治療 (PDT)は肺癌、早期食道がん、早期胃がん、早期食道がんに認可されている。肺癌では早期肺癌で95%の奏効率を得ているが、その他、術前PDTによる縮小手術、気道狭窄改善、さらに小型末梢肺癌に対する経皮的レーザー照射などが試みられている。食道がんにおける適応はEMR困難な症例に対して良好な成績を残している。早期胃がんにおける適応は手術不能でがんがsm層まで達している症例である。早期子宮がんでは奏効率は95%を超え、妊孕性が保てるので適応症例は多いが、光過敏症の問題がのこる。その他脳腫瘍への適応が試みられている。光線力学療法 (PDT)の適応拡大と将来 奥仲哲弥、白田実男 pp125-134
20 肺癌診療Q&A 一つ上を行く診療の実践	共著	平成25年11月	中外医学社	平成15年から施行されている健康増進法第25条による「受動喫煙の健康被害防止」により社会情勢が変化したことが最もインパクトが強く、日本学術会議からの「脱たばこ社会の実現に向けた提言」などに成果がみられる。WHOは1989年以降5月31日を「世界禁煙デー」に制定した。学会でも、禁煙学術ネットワークが毎月22日を禁煙の日と制定した。ニコチン依存症に関するエピソード等、喫煙者の興味を持たせるために娯楽性を持たせて伝えることも重要である。肺癌の予防 社会的に禁煙を広めるには 奥仲哲弥 pp57-59
(学術論文)				
1 Hematoporphyrin derivative uptake by atheroma in atherosclerotic rabbits: The fluorescence from HpD demonstrated by an excimer dye laser (動脈硬化家兎におけるヘマトポルフィリン誘導体の取り込み: エキシマダイレーザーによるHpDの蛍光表示) (査読付)	共著	昭和62年7月	Photochemistry and Photobiology 46: 769-775	新しく開発したエキシマダイレーザー画層解析装置を用いて人工的に作成した動脈硬化家兎の血管内の画像並びに蛍光スペクトルを測定した。予めヘマトポルフィリン誘導体 (HpD)を投与した家兎の血管内のHpDの特異的な630nmの蛍光スペクトルを測定できた。蛍光強度を比較すると動脈効果粥状変化部位: 移行部: 正常部の比は10.4:5.0:1.0であった。上記の結果は蛍光診断が今後動脈硬化の早期発見に寄与すると考察した。Okunaka T, Kato H, Aizawa K, Hayata Y. (奥仲哲弥、加藤治文、會澤勝夫、早田義博) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。
2 Photodynamic therapy of esophageal carcinoma (食道がんに対する光線力学的療法) (査読付)	共著	平成2年4月	Surgical Endoscopy 4: 150-153	1982年から1989年の間、20例 (表層浸潤型: ES6例、深層浸潤型: AI14例)の食道がん患者をヘマトポルフィリン誘導体とアルゴンダイレーザーによって治療を行った。完全寛解CRをES6例中4例に獲得し平均生存期間は27ヶ月であった。AIグループにおいては6例の著効、残る8例でも部分寛解を得ることができた。また平均嚥下困難指数も4.0から2.8に改善した。光線力学的療法 (PDT)は早期肺癌の根治療法、進行食道がんの姑息となり得ると結論づけた。Okunaka T, Kato H, Konaka C, Eckhauser M (奥仲哲弥、加藤治文、小中千守、マークエックハウザー) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。
3 Photodynamic therapy for multiple primary bronchogenic carcinoma (多発肺癌に対する光線力学的治療) (査読付)	共著	平成3年4月	Cancer 68: 253-258	近年、肺癌診断治療の進歩に伴い多発肺癌症例の報告が増加している。我々の施設では1980年以来、肺癌145例に対し光線力学的療法 (PDT)を施行してきた。この内35例が早期中心型肺癌であり、13例が多発肺癌症例であった。3例はPDT単独で根治が得られ、残る10例は早期癌部位をPDTで進行がん部位を手術で治療している。平均生存期間は38ヶ月 (14から87ヶ月)でPDTは今後増加が予測される多発肺癌の有効な治療法になり得ると結論した。T. Okunaka T, H. Kato H, C. Konaka C, Hayata Y. (奥仲哲弥、加藤治文、小中千守、早田義博) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。
4 Detection of experimental atheroma in atherosclerotic rabbits: the fluorescence spectrum	共著	平成3年6月	Lasers in Medical Science 6: 7-13 64	10匹の日本白色家兎に対し高コレステロール食を与え、Fogartyのカテーテルで血管内皮を損傷させ、動脈硬化家兎を作成する。予めヘマトポルフィリン誘導体 (HpD)を静注し、488nmのアルゴン

<p>of HpD obtained in situ by angioscopic fluorescence spectrophotometry (動脈硬化家兎における実験的粥状硬化巣の検索: 血管内視鏡蛍光スペクトルメトリーによるHpDの蛍光スペクトラム測定 (査読付))</p>				<p>レーザーで血管内腔照射、optical mutichannel analyzerによって粥状硬化部位、肥厚部、正常部の蛍光診断を測定、比較した。正常部位からは610, 670の蛍光スペクトルが、また粥状硬化部と肥厚部からはHpDが結合した時に観察される630, 690nmの長波長側にシフトした蛍光スペクトルが観察された。また蛍光強度の比は正常: 粥状硬化部で1: 20であった。またvitorioで行った、各種のlipidsやphospholipidsの蛍光スペクトルを測定すると630, 690nmのHpDの蛍光ピークはcholesterolとsphingomyelinに認めた。Okunaka T, Aizawa K, Kato H, Hayata Y (奥仲哲弥、會澤勝夫、加藤治文、早田義博) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。</p>
<p>5 A Comparison between argon-dye and excimer dye laser for photodynamic effect in transplanted mouse tumor (アルゴンダイレーザーとエキシマダイレーザーの移植腫瘍に対する光線力学的効果の比較 (査読付))</p>	<p>共著</p>	<p>平成4年4月</p>	<p>Jpn J cancer Res 83: 226-231</p>	<p>担癌マウスを作成し、腫瘍親和性光感受性物質としてヘマトポルフィリン誘導体 (HpD) を5mg/kg投与した。連続波であるアルゴンダイレーザーと断続波であるエキシマダイレーザーの抗腫瘍効果を比較した。総エネルギー50J/cm²の歳のエキシマダイレーザー照射群の抗腫瘍効果は6mJ/pulseの場合、15mmに達し、1mJ/pulseの際も12mmであったが、アルゴンダイレーザー照射群 (200mW/cm²) では50J/cm²の場合の深達度は4mm、200J/cm²でも10mmでありエキシマレーザーが優位に勝った。断続波であるエキシマレーザーの半値幅は10ナノ秒であり、50000Wに相当するエネルギーが照射されること、衝撃波の効果が期待されることが要因と考察した。Okunaka T, H. Kato H, C. Konaka, C. Aizawa K, Hayata Y. (奥仲哲弥、加藤治文、會澤勝夫、早田義博) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。</p>
<p>6 Correlation between photodynamic efficacy of differing porphyrins and membrane partitioning behavior (種々のポルフィリンの膜分配係数と光線力学効果の関係) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成4年4月</p>	<p>Lasers Surg and Med, 12: 98-103</p>	<p>光感受性物質の膜浸透能力は化学構造式と物理的特性によって決定される。分配特性は薬剤の分配係数 (Kp) によって定量できる。13. 17-ditetraammonium protoporphyrin (PH1008), photofurinIIなど5種類のポルフィリンの分配係数 (Kp) を各種のポルフィリンをliposomeに吸着させレーザーにて分解させることで測定した。KpはPH1008, BPD-MA, Photofrin II, Hpの順で高く、これは光線力学的効果に比例した。膜に対するKpの測定は光感受性物質の光線力学的効果を判定する方法になりうることを示唆された。Okunaka T, Eckhauser ML, Kato H, Koehler KA. (奥仲哲弥、Eckhauser ML, 加藤治文、Koehler KA) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。</p>
<p>7 Primary lung cancer producing alpha-fetoprotein (α-フェトプロテイン産生肺がん) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成4年4月</p>	<p>Ann Thorac Surg. 53: 151-152</p>	<p>血清中のαフェトプロテイン (AFP) は肝細胞癌、yok sac腫瘍の腫瘍マーカーとして頻用されているが原発性肺癌におけるAFPが高値の報告は少ない。本症例は右上葉発生の大細胞がんで、術前の血清αフェトプロテイン値が9, 300ng/mLと高値であった。右上葉切除+リンパ節郭清+胸壁合併切除を行ったところ、術後の血清AFPは207ng/mLと著明に下がり、術後11ヶ月では正常範囲になった。肺実質は消化管や肝臓と発生学的に期限を同じくするためAFPは産生されても不思議ではない。実際24例ある報告の内肺扁平上皮癌におけるAFP高値症例はない。今後の分子生物学の進歩によりこのマーカーの特性の解明が望まれる。Okunaka T, Kato H, Konaka C, Furukawa K. (奥仲哲弥、加藤治文、小中千守、古川欣也) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。</p>
<p>8 Photodynamic therapy using a diode laser with mono-L-aspartyl chlorin e6 for implanted mouse tumor (マウス移植腫瘍に対するダイオードレーザーとNPe6を用いた光線力学的治療法) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成6年4月</p>	<p>Jpn J Cancer Res 85: 1165-1170</p>	<p>mono-L-aspartyl chlorin e6 (NPe6) を励起できる高出力ダイオードレーザー (664nm波長) を開発した。4週令のBALB/cマウスの皮下にMeth-A繊維肉腫を移植した検体を使用し、レーザー照射5時間前にNPe6を静注し治療効果を観察した。Npe-6の濃度は1. 25, 2. 5, 5. 0, 7. 5mg/kgの群で、レーザー照射のエネルギー密度は100mW/cm²、仕事量は0から150J/cm²とした。抗腫瘍効果はNPe6の濃度に比例したが、レーザーdoseは100J/cm²でプラトーに達した。腫瘍内の温度測定も行ったが、治療効果にhyperthermiaは関与していなかった。Katumi T, Aizawa K, Okunaka T, Kato H. (勝海東一郎、會澤勝夫、奥仲哲弥、加藤治文) データの測定・解析を行った。</p>
<p>9 Photodynamic therapy of lung cancer with bronchial artery infusion of photofrin (フォトフリンの気管支動脈注入法を用いた肺癌に対する光線力学的治療法) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成8年2月</p>	<p>Diagnostic and Therapeutic Endoscopy 2: 203-206</p>	<p>フォトフリンを用いた光線力学的治療法は早期肺癌の根治療法として確立しているが、合併症である皮膚光過敏症のために適応拡大が妨げられている。入院期間並びに光線過敏症を軽減するためにフォトフリンの気管支動脈注入を試みた。通常の約3分の1である0. 7mg/kgのフォトフリンを気管支動脈から腫瘍に直接到達できるように注入しPDTを施行した。5例の症例全てにおいて完全寛解が得られ、光過敏症の発現は0であった。フォトフリンの新しい投与方法として有効であると結論し</p>

10 Lung cancers treated with photodynamic therapy and surgery (肺癌に対する光線力学的治療と手術の合併療法 (査読付))	共著	平成11年5月	Diagnostic and Therapeutic Endoscopy 5: 155-160	た。Okunaka T, Kato H, Konaka C (奥仲哲弥、加藤治文、小中千守) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。 26名の肺癌症例に対し肺の切除範囲を縮小、あるいは手術の可能性を高める目的で手術前に光線力学的治療法 (PDT)を行った。手術はPDT後2から9週目に施行した。PDTによって本来の目的である、肺切除の範囲を縮小できた、あるいは手術不能例を手術可能症例に改善できた症例は26例中24例であった。T3症例 (癌の主気管支浸潤) の手術単独生存率は50.9%であるが、術前PDT症例の生存率は60.0%に向上した。術前PDTは進行肺がんのマネージメントに有効であると結論した。Okunaka T, T. Hiyoshi H, K. Furukawa K, Kato H. (奥仲哲弥、日吉利光、古川欣也、加藤治文) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。
11 Potential applications of photodynamic therapy (光線力学的治療の適応の将来) (査読付)	共著	平成11年10月	Rev Contemp Pharmacother 10: 59-68	光線力学的治療の適応疾患は我が国では早期肺癌、早期子宮頸がんなど数疾患に限られているが、PDTの非侵襲的特徴を活用し多くの疾患への応用が試みられている。欧米では各種進行がんに対するPDTの臨床試験が盛んに行われ、末梢肺癌の経皮的治療、胸腔・腹腔内腫瘍や胸腹水の治療、白血病や悪性リンパ腫などの血液疾患への応用も試みられている。良性疾患への試みとして、動脈硬化の抑制、網膜黄斑変性症、T-リンパ球の選択的不活化による免疫抑制効果を利用した関節リウマチ、HIVなどのウイルス疾患、難治性乾癬などへの応用も行われPDTの無限の可能性が期待できる。Okunaka T, Kato H (奥仲哲弥、加藤治文) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。
12 Increased cytotoxic effects of photodynamic therapy in IL-6 gene transfected cells via enhanced apoptosis (査読付)	共著	平成13年4月	Int J Cancer, 93:475-480	PDTによる酸化ストレス、炎症性変化により、様々な炎症性サイトカインの抗腫瘍効果への関与が報告されている。しかしIL-6、TNF- α などのサイトカインの殺細胞効果とPDTの直接的な関係は明らかではない。今回Lewis肺癌細胞株 (LLC) にIL-6を過剰発現させたLLC/IL-6細胞に新規腫瘍親和性物質であるタラポルフィンナトリウム (NPe6) を持ったPDTを施行し、PDTによるIL-6発現誘導はアポトーシスを誘導しやすくすることを証明した。Usuda J, Okunaka T, Furukawa K, Takaaki T, Kato H. (臼田実男、奥仲哲弥、古川欣也、土田敬明、加藤治文) データの測定・解析を行った。
13 Phase II clinical study of photodynamic therapy using mono-L-aspartyl chlorin e6 and diode laser for early stage superficial squamous cell carcinoma of the lung (mono-L-aspartyl chlorin e6とダイオードレーザーによる早期中心型肺癌に対するPDTの第二相試験) (査読付)	共著	平成15年4月	Lung Cancer 42:103-111	第2世代の腫瘍親和性光感受性物質であるmono-L-aspartyl chlorin e6 (NPe6)の早期肺癌に対する抗腫瘍効果と安全性を評価する為の第二相臨床試験を多施設共同研究で行った。対象は中心型早期肺癌で辺縁全体が観察でき、腫瘍径が2cmを超えないものとしたNPe6を40mg/m ² 静注後4時間目に100J/cm ² をダイオードレーザーを用いて照射した。光線過敏症は33例中28例で2週間以内に消失し、完全寛解は82.9%の症例で獲得された。本法が早期肺癌のPDTの標準方法になると考えられる。Kato H, Okunaka T, Kusunoki Y, Fukuoka M (加藤治文、奥仲哲弥、楠洋子、福岡正博) データの測定・解析を行った。
14 Photodynamic therapy for peripheral lung cancer (末梢肺癌に対する光線力学的治療法) (査読付)	共著	平成16年5月	Lung Cancer 43:77-82	中心型肺癌に対するPDTは標準治療として確立している。一方CT健診の普及に伴い末梢型早期肺癌症例が高頻度に発見されるようになった。末梢型肺癌で外科手術不能例に世界で第一例となった経皮的PDTを施行した。患者は局所麻酔下にCTガイドにより腫瘍に19ゲージの外筒針を留置しダイオードレーザーを150~600mW、200~800J照射した。ノミネートされた9名の患者の内7名に部分寛解が確認された。重篤な合併症は認めなかったが、2症例で気胸を認めた。腫瘍径1cm以下で手術、放射線療法が適応にならない症例に対し本法の可能性が示唆された。Okunaka T, Kato H, Tsutsui H, Ishizumi T, Ichinose S, Kuroiwa Y. (奥仲哲弥、加藤治文、筒井英光、石角太郎、一ノ瀬修二、黒岩ゆかり) 筆頭著者として、論文全般の執筆に関与した。
15 Locally recurrent central-type early stage lung cancer<1.0cm in diameter after complete remission by photodynamic therapy (光線力学的治療法で完全寛解を得られた長径1cm未満の早期中心型肺癌で再発を来した症例の検討) (査読付)	共著	平成17年6月	Chest 128 : 3269-3275	光線力学的治療法 (PDT)の長径1cm以下の中心型早期肺癌に対する完全寛解率 (CR率) はほぼ100%であるが再発をきたす症例を認める。93例、114病巣がフォローされており、長径1cm未満の症例のCR率、5年生存率はそれぞれ92.8%、57.9%であった。CR後に再発を認めたのは77病巣中9病巣であった。再発病巣の細胞変化を比較すると低度の化成を認めた場合の再発はレーザー照射した部分からであり、レーザーのかけ損ねが、高度の化成を認めた場合の再発は気管支の深部層

<p>16 Spectrometric characteristics and tumot-affinity of a novel photosensitizer: nomo-L-aspertyl aurochlorin e6 (Au-NPe6) (新規光感受性物質、Au-Npe6の蛍光スペクトルと腫瘍選択性) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年1月</p>	<p>Photodiagnosis and Photodynamic therapy 1 : 295-301</p>	<p>からの再発でレーザーの進達度が及ばなかった事が原因と考えられた。PDT後のフォローによる細胞変化を注視することの重要性が示唆された。Furukawa K, Kato H, <u>Okunaka T</u>, (古川欣也、加藤治文、奥仲哲弥) データの測定・解析を行った。 光線力学的診断治療法の弱点はレーザーの深達度の限界から表層浸潤型の腫瘍に限られることである。この弱点を補う目的で従来のNPe6の骨格の中心に金を組み込んだ新規光感受性物質Au-NPe6を開発した。中心の金はX線励起を可能にするため腫瘍が深部でも診断が可能になる可能性がある。人血清アルブミン存在下での吸収スペクトルをNPe6と同様の傾向をしめし、ヒトタンパク質に吸着する事が証明された。またマウス移植腫瘍における腫瘍：正常筋肉の集積量の比は2：1であり、Au-NPe6の可能性が示唆された。Ishizumi T, Aizawa K, Takaaki T, <u>Okunaka T</u>. (石角太郎、會澤勝夫、土田敬明、奥仲哲弥) データの測定・解析等を行った。</p>
<p>17 High expression of GADD-45α and VEGF induced tumor recurrence via upregulation of IL-2 after photodynamic therapy using NPe6 (IL-2過剰発現腫瘍に対しNPe6によるPDTを行いGADD-45αとVEGFを発現誘導させる) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年4月</p>	<p>Inteternational J. Oncology 32:397-403</p>	<p>NPe6とダイオードレーザーを用いたPDTは細胞死とともに炎症、免疫応答、微小血管侵襲を引き起こす。サイトカイン (IL-2)を過剰発現させたLuwis肺癌株を用いてNPe6-PDTにおける免疫応答、血管新生への影響を評価した。IL-2過剰発現Lewis肺癌担癌マウスの治癒率は16.6%で、過剰発現してない群の治癒率の66.7%と比べ優位に低かった。またNPe6-PDTによって、IL-2過剰発現Lewis担癌マウスのGADD-45αおよびVEGFの発現が誘導は発現誘導されていない群と比べ顕著に高かった。PDTによる細胞死は、GADD-45αの発現によって抑制され、腫瘍の再発はVEGFの発現によって引き起こされる事が証明された。よてIL-2阻害薬はNPe6-PDTの効果を促進すると結論した。Ohtani K, Usuda J, Ichinose, <u>Okunaka T</u>, Kato H. (大谷圭志、白田実男、一ノ瀬修二、奥仲哲弥、加藤治文) データの測定・解析等を行った。</p>
<p>18 Tailor-made approach to photodynamic therapy in the treatment of cancer based on Bcl-2 photodamage (Bcl-2 蛋白の photodamage有無による光線力学的個別化治療) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年5月</p>	<p>Inteternational J. Oncology 33:689-696</p>	<p>PhotofrinとLaserphyrinによる光線力学的療法の標的因子・抗腫瘍効果のメカニズムを明らかにするために従来構築したアポトーシス抑制蛋白であるBcl-2の様々な遺伝子変異株を細胞に遺伝子導入して、PDT後のBcl-2のphotodamageやアポトーシス、抗腫瘍効果に与える影響について検討した。Photofrin-PDTはBcl-2蛋白をphotodamageすることによって、アポトーシスを誘導・抗腫瘍効果を発揮することが明らかになった。一方、Laserphyrin-PDTではBcl-2のphotodamageは観察されず、Bcl-2の発現が抗腫瘍効果に耐性を示すことが明らかになった。Bcl-2の出現によって使用する光感受性物質を使い分ける必要性を示唆した。Usuda J, Hirata T, <u>Okunaka T</u>, Kato H, Ikeda N. (白田実男、平田剛、奥仲哲弥、加藤治文、池田徳彦) データの測定・解析等を行った。</p>
<p>19 Breast cancer resistant protein (BCRP) is a molecular determinant of the outcome of photodynamic therapy (PDT) for centrally located early lung cancer (乳がん耐性たんぱく (BCRP)は中心型肺癌の治療効果の分子決定因子である)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年7月</p>	<p>Lung Cancer 67:198-204</p>	<p>ポルフィリン系薬剤の細胞外の排出に関わるトランスporter蛋白BCRP/ABCG2とPDTに使用する腫瘍親和性光感受性物質との関係について検討し、BCRP/ABCG2がPDTの抗腫瘍効果を減弱させるのでは無いかと仮説した。ヒト表皮癌細胞A431とBCRP/ABCG2遺伝子を過剰発現させた細胞A431/BCRPを使用し、PhotofrinまたはLaserphyrinを用いてPDTを施行し、感受性試験を行った。Photofrin-PDTではA431/BCRP細胞は親株に対し耐性を示したが、Laserphyrin-PDTではA431/BCRP細胞と親株に差を認めなかった。臨床的に81例の中心型早期肺癌症例がBCRPが陽性で、Photofrin-PDTを行った症例では抗腫瘍効果が減弱していたのに対し、Laserphyrin-PDT症例では効果に差異を認めなかった。Usuda J, <u>Okunaka T</u>, Furukawa K, Kato H, Ikeda N. (白田実男、奥仲哲弥、古川欣也、加藤治文、池田徳彦) データの測定・解析等を行った。</p>
<p>20 New aspects of photodynamic therapy for cenral type early stage lung cancer (早期中心型肺癌に対するPDTの新局面) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成23年7月</p>	<p>Lasers Surg and Med, 43: 749-754</p>	<p>光線力学的治療法 (PDT) は中心型早期肺癌治療の第一選択肢になった。完全緩解 (CR) を獲得するには適応の選択、つまり腫瘍の表層進展度、深さの深達度が重要である。蛍光内視鏡、気管支エコーの開発はこれらの適応決定に大いに貢献している。腫瘍径が1cm未満のものはPDTの一番適応となるが、新規光感受性物質であるNPe6を使用した際は1cmを超えた病変でもCR率が低下しない。さらに光線力学的診断を行うことで再発を防ぐことにつながる。Ikeda N, Usuda J, <u>Okunaka T</u>, Kato H, Tsutsui H. (池田徳彦、白田実男、奥仲哲弥、加藤治文、筒井英光) データの測定・解析等を行った。</p>

ア クロの認定・冊の守を付した。				
(その他)				
1 禁煙バトルロワイヤル	共著	平成20年10月	集英社	集英社新書 ヘビースモーカーの太田光氏との対談を通じて喫煙者の依存性の問題、喫煙の害、禁煙の方法について議論する。
2 がん治療を受ける前に知っておきたい55のこと	共著	平成22年3月	エクスナレッジ社	病院選びから治療法、抗がん剤から緩和療法までがんと診断された時の手引書
3 たばこを吸っている人、吸っていた人が健康のためにできること	単著	平成23年4月	エクスナレッジ社	喫煙の害を説くと共にCOPDの啓蒙、肺年齢を取り戻すエクササイズを紹介
4 図解 がん治療を受ける前に知っておきたい55のこと	共著	平成24年7月	エクスナレッジ社	病院選びから治療法、抗がん剤から緩和療法までがんと診断された時の手引書の図解改定版
5 最高のがん治療を受ける方法	単著	平成25年4月	エクスナレッジ社	病院選びから、三大療法、治療費まで、がん診断治療の基本的知識を紹介
6 長生きしたけりゃ肺活しなさい	単著	平成26年8月	小学館	COPDの一般向け解説書 喫煙とCOPD、COPDにまつわる誤解の解明、今日から始められる「肺活」
7 「余命3ヶ月」と伝えるときの医者ホンネ	単著	平成27年4月	主婦と生活社	医療不信を解消するために患者さんに伝えたい医師の本音 病院を上手に活用するには
8 最期までげんきでいたいなら健康寿命より快樂寿命をのばしなさい	単著	平成28年9月	主婦と生活社	人生後半を幸せにするカギは脳内物質エンドルフィンにあった。 幸せホルモン「エンドルフィン」生活のすすめ

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 加藤 文彦
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
食道疾患の外科治療		食道癌、食道切除術、胸腔鏡手術		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特になし				
(学術論文) 1. 直腸癌腹膜播種に至った潰瘍性大腸炎の1例	共著	平成23年2月	静岡赤十字病院研究報	概要：潰瘍性大腸炎と診断されている症例。S状結腸から直腸に狭窄あり、腹腔鏡下大腸全摘術を施行した。切除検体からは狭窄部に癌が確認された。潰瘍性大腸炎の長期経過例には慎重なサーベイランスが必要であると考えられた。 分担：担当医として患者の診療にあたり、筆頭著者として過去の文献を検索し、考察し、執筆した。 著者：加藤 文彦, 古田 晋平, 岸田 憲弘, 土井 愛美, 齋藤 賢将, 玄 良三, 下島 礼子, 新谷 恒弘, 宮部 理香, 小林 秀昭, 白石 好, 稲葉 浩久, 中山 隆盛, 森 俊治, 磯部 潔, 宮田 潤一, 笠原 正男
2. 再燃F0食道静脈瘤出血にクリップ止血が有効であった1例	共著	平成25年12月	Progress of Digestive Endoscopy	概要：食道静脈瘤に対し治療歴のある症例。静脈瘤出血に対しクリップにて止血を行い良好な結果を得た。静脈瘤からの出血には通常EVLが用いられるが、治療痕部からの出血にはクリップによる止血が有用であると考えられた。分担：筆頭著者としてカルテから病歴を参照、過去の文献を検索し、考察し、執筆した。著者：加藤 文彦, 大森 泰, 中村 理恵子, 高橋 常浩, 和田 則仁, 川久保 博文, 竹内 裕也, 才川 義朗, 北川 雄光
3. Incidence of and risk factors for venous thromboembolism during surgical treatment for esophageal cancer: a single-institution study (食道癌周術期における静脈血栓塞栓症の発生率と危険因子)	共著	平成27年4月	Surgery Today	概要：食道癌に対し手術療法を行った153例をRetrospectiveに解析した。術前治療中を含め、周術期に13.7%の静脈血栓塞栓症が発生していた。Fibrinogen高値, CRP高値, 腺癌, 頸部郭清が発生リスクと考えられた。分担：筆頭著者として研究全体をデザインし、統括し、執筆した。 著者：Fumihiko Kato, Hiroya Takeuchi, Satoru Matsuda, Hirofumi Kawakubo, Tai Omori, Yuko Kitagawa
4. 茎捻転をきたした胃GISTの1例(査読あり)	共著	平成28年2月	日本臨床外科学会雑誌	概要：腹部巨大GISTに対し手術を行った症例。腫瘍は胃原発と考えられ、基部にて捻転していた。捻転を解除しつつ切除を行った。非常に稀な病態ではあるが、腹痛を伴う巨大胃GISTでは茎捻転も考慮すべきである。 分担：担当医として患者の診療にあたり、筆頭著者として過去の文献を検索し、考察し、執筆した。 著者：加藤 文彦, 永瀬 剛司, 山本 聖一郎, 赤坂 喜清, 中川 基人
5. 腫瘍核出術と肋間筋弁被覆にて食道切除を回避した食道神経鞘腫の1例(査読あり)	共著	平成29年3月	日本臨床外科学会雑誌	概要：気管分岐下に発生した食道神経鞘腫の1例。右開胸にて腫瘍核出術を施行し、食道筋層の欠損部に肋間筋弁を縫着することにより、食道切除を回避し、良好な結果を得た。有用な手術方法と考えられた。 分担：担当医として患者の診療にあたり、筆頭著者として過去の文献を検索し、考察し、執筆した。 著者：加藤 文彦, 山本 聖一郎, 金井 歳雄, 亀山 香織, 中川 基人

6. Endoscopic Transesophageal Drainage of Mediastinal Abscess caused by Anastomotic Leakage after Esophagectomy (食道切除後縫合不全による縦隔膿瘍に対し経瘻孔ドレナージが有効であった1例)	共著	平成29年12月	Clinics in Surgery	<p>概要：食道切除術後縫合不全にて縦隔に膿瘍を形成した1例。経皮的ドレナージは困難であり、経鼻経瘻孔的にドレナージを行い、良好な結果を得た。この方法は、外科的再介入の回避に役立つ、侵襲性が低く、安全で効果的な治療と考えられた。</p> <p>分担：担当医として患者の診療にあたり、筆頭著者として過去の文献を検索し、考察し、執筆した。</p> <p>著者：Fumihiko Kato, Kazuo Koyanagi, Jun Kanamori Hiroyuki Daiko</p>
7. Long-term outcome after resection for recurrent oesophageal cancer (再発食道癌に対する切除術の長期予後の検討)	共著	平成30年5月	Journal of Thoracic Disease	<p>概要：食道癌に対する食道切除術もしくは根治的放射線療法後に再発した患者で、再発病変の切除をうけた42例をRetrospectiveに解析した。腹部リンパ節再発、放射線照射野外のリンパ節再発、孤立性肺転移再発に対しては、切除により長期生存が得られる可能性が示唆された。</p> <p>分担：筆頭著者として研究全体をデザインし、統括し、執筆した。</p> <p>著者：Fumihiko Kato, Satoko Monma, Kazuo Koyanagi, Jun Kanamori, Hiroyuki Daiko, Hiroyasu Igaki, Yuji Tachimori</p>
8. Experimental and clinicopathological analysis of HOXB9 in gastric cancer (胃癌浸潤転移におけるHOXB9発現の実験的および臨床病理学的解析)	共著	平成31年3月	Oncology Letters	<p>概要：HOXB9は悪性腫瘍の悪性度と関連するとされている。58例の胃切除検体を用いてHOXB9の発現を評価した。HOXB9は、胃癌の進行およびリンパ行性転移と相関することが示唆された。</p> <p>分担：筆頭著者として研究全体をデザインし、統括し、実験を行い、執筆した。</p> <p>著者：Fumihiko Kato, Norihito Wada, Tetsu Hayashida, Kazumasa Fukuda, Rieko Nakamura, Tsunehiro Takahashi, Hirofumi Kawakubo, Hiroya Takeuchi, Yuko Kitagawa</p>
9. Esophagectomy for the patients with squamous cell carcinoma of the esophagus after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation (同種造血幹細胞移植後の食道扁平上皮癌患者に対する食道切除術)	共著	令和元年9月	International Journal of Clinical Oncology	<p>概要：同種造血幹細胞移植後の患者は食道扁平上皮癌に罹患しやすいと言われている。こういった患者10例の手術成績をRetrospectiveに解析した。術後に肺炎を合併しやすく、重篤化しやすかった。予防的に広域抗菌薬を投与することが有用であると示唆された。</p> <p>分担：筆頭著者として研究全体をデザインし、統括し、執筆した。</p> <p>著者：Fumihiko Kato, Hiroyuki Daiko, Jun Kanamori, Yoshihiro Inamoto, Takahiro Fukuda, Koji Hayashi, Yuji Tachimori, Kazuo Koyanagi</p>
(その他・学会発表) 1. 小腸イレウスに対する腹腔鏡手術の治療成績の検討	—	平成27年7月	第70回 日本消化器外科学会総会、浜松市	<p>概要：小腸イレウスに対し腹腔鏡手術を行った25例をRetrospectiveに解析した。開腹移行率は未だに高いが、経験を積むことにより低くすることができる。索状物を原因としたイレウスは腹腔鏡下に手術を完遂できることが多く、良い適応である。開腹へ移行したとしても、腹腔鏡操作により最小限の皮膚切開にとどめるメリットがある。</p> <p>著者：加藤 文彦, 山本 聖一郎, 金井 歳雄, 大西 達也, 小島 正之, 秋好 沢林, 葉 季久雄, 赤津 知孝, 永瀬 剛司, 中川 基人</p>
2. 高度進行胃癌に対する術前DCS療法の治療成績の検討	—	平成28年7月	第71回 日本消化器外科学会総会、徳島市	<p>概要：大型Type3, 4, 幽門狭窄, Bulkyリンパ節転移といった局所進行胃癌16例に対し、術前DCS療法を2コース施行し根治切除を行った。血液毒性は強かったが、手術は安全に可能であった。術前DCS療法の有用性が示唆された。</p> <p>著者：加藤 文彦, 藤井 琢, 大西 達也, 小島 正之, 葉 季久雄, 赤津 知孝, 山本 聖一郎, 亀山 香織, 中川 基人</p>

3. 高齢者食道癌手術における治療時年齢と予後の関係	—	平成29年6月	第71回 日本食道学会学術集会、軽井沢町	<p>概要：食道切除術を施行した70-84歳の胸部食道癌患者275例をRetrospectiveに解析した。75-79歳の高齢者は、非高齢者と比較して長期予後が同等であり、手術の妥当性が示された。80歳以上の高齢者は、術後の短期および長期成績が不良であり、慎重な手術適応の検討が必要である。</p> <p>著者：加藤 文彦, 小柳 和夫, 岩部 純, 日月 裕司</p>
4. 食道胃接合部腺癌の至適リンパ節郭清と術式選択 臨床的食道浸潤長からみたSiewert Type II食道胃接合部腺癌の治療戦略	—	平成29年7月	第72回 日本消化器外科学会総会、金沢市	<p>概要：術前治療なしに手術を行ったSiewert Type II食道胃接合部癌患者59例をRetrospectiveに解析した。臨床的食道浸潤長3cm以上の症例は、有意に頸部リンパ節および縦隔リンパ節転移の頻度が高く、予後が不良であった。こういった症例には術前化学療法といった集学的治療を検討する余地がある。</p> <p>著者：加藤 文彦, 小柳 和夫, 岩部 純, 井垣 弘康, 日月 裕司</p>
5. 肝硬変を合併した食道癌肉腫に対し二期分割手術を施行した1例	—	平成31年6月	第180回 日本胸部外科学会関東甲信越地方会、千代田区	<p>概要：Child-Pugh A肝硬変のある食道癌肉腫症例に対し、二期分割切除再建を行うことで良好な結果を得た。肝硬変患者は術後在院死亡のリスクが高く、手術を行う場合には二期分割、胸壁前再建が妥当と考えられた。</p> <p>著者：加藤 文彦, 松尾 健太郎, 星野 尚大, 山田 美鈴, 谷 紀幸, 林 浩二, 神徳 純一, 小柳 和夫</p>

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 片岡 幹統				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
消化器内視鏡、上部消化管、内視鏡治療		内視鏡止血術、ESD、胃粘膜下腫瘍、消化管出血、ヘリコバクターピロリ、抗血栓薬		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1 胃GISTの粘膜切開生検による新しい病理組織診断法	共著	2010年	消化器内科、50(2) : 108-114, 2010	上部消化管内視鏡で胃粘膜下腫瘍と診断され、粘膜切開生検にて病理組織学的にGISTと診断した9例(男7例・女2例・平均64.2歳)について報告した。腫瘍径は15~40mm(平均23.3mm)で、占拠部位はL2例、M2例、U5例。経過観察を希望した2例を除く7例に外科的切除術を施行し、切除標本の病理組織診断は生検病理診断とすべて一致し、免疫染色や組織学的悪性度も1例以外は一致した。以上、粘膜切開生検はGISTの診断・治療において有用であった。 片岡 幹統, 原田 明日香, 塚本 咲貴子, 立花 智津子, 立花 浩幸, 羽山 弥毅, 野中 雅也, 青木 貴哉, 八木 健二, 糸川 文英, 藤原 麻里, 福澤 誠克, 川上 浩平, 糸井 隆夫, 酒井 義浩, 森安 史典, 河合 隆, 山本 圭, 福澤 麻理
2 GroupIIIと診断した胃隆起性病変に対するEMR適応に関する検討	共著	2006年	「新薬と臨床」第55巻第8号 62-65	胃腺腫は異型上皮からなる隆起性病変と定義されている。従来、長期にわたり肉眼形態に変化はみられず、悪性化なまれと考えられていたが、経過観察中に癌化した胃腺腫の報告例も多く、いまだ明確な取り扱い基準は定められていないのが現状である。今回我々は1年以上の経過観察可能であった症例およびEMRを施行した症例を再評価し、胃腺腫の臨床的取り扱いについて検討した。 片岡幹統、河合隆、武井和夫、山岸哲也、青木貴哉、山本圭、大島敏裕、中村洋典、八木健二、宮崎郁子、高麻理、近藤麻里、福澤誠克、高垣信一、川上浩平、額賀健治、平良悟、糸井隆夫、森安史典、高木融、青木達哉、松林純、向井清
3 急性出血性直腸潰瘍の診断と治療	共著		臨床消化器内科 VOL.25 No.5 585-592 2010	急性出血性直腸潰瘍 (AHRU) と宿便性潰瘍は基礎疾患を有する高齢者に発症する大量血便をきたす疾患である。AHRUは長期臥床など直腸粘膜の血流低下で発症すると考えられ、下部直腸の歯状線近傍に発生する不整形潰瘍で輪状に分布するのが特徴である。宿便性潰瘍は便秘による便塊の腸管への機械的圧迫による血流低下が潰瘍形成のおもな原因と考えられる。両疾患も輸血をするような大量血便をきたすことがあり、早急で適切な治療を要する。 福澤 誠克, 野中 雅也, 片岡 幹統, 八木 健二, 山本 圭, 原田 明日香, 森安 史典
4 低用量アスピリン潰瘍に対する内視鏡止血の最前線	共著		消化器内視鏡(1267-1273)23巻7号 (2011.07)	低用量アスピリンは脳梗塞・心筋梗塞の二次予防に有効であり、現在では一次予防も含めて多くの患者が内服している。しかし、低用量アスピリンには消化管粘膜傷害を引き起こし消化管出血をきたすことがある。その初期治療の中心は内視鏡止血である。クリップ法、局注法、そしてESDの術中出血に用いる高周波止血鉗子のなかでもバイポーラ止血鉗子を用いた止血法を中心に、低用量アスピリン潰瘍出血に対する止血法について述べる。 片岡 幹統, 河合 隆, 福澤 誠克, 植松 淳一, 岸本 佳子, 辻 雄一郎, 竹内 眞美, 塚本 咲貴子, 杉本 弥子, 山本 圭, 羽山 弥毅, 野中 雅也, 青木 貴哉, 八木 健二, 藤原 麻里, 福澤 麻理, 川上 浩平, 酒井 義浩, 森安 史典

5 どうする？出血性消化性潰瘍に対する内視鏡止血のマネージメント	共著	消化器内視鏡(1849-1856)23巻11号 (2011. 11)	上部消化管出血は日常診療においてしばしば遭遇する病態である。その初期治療の中心は内視鏡による止血処置である。我々は非静脈瘤性上部消化管出血に対する内視鏡止血にバイポーラ止血鉗子を用いている。しかし、少数例ではあるが重度ショック状態や止血困難例が存在し、interventional radiologyや外科的治療に移行すべきか、内視鏡医の判断が重要となる。バイポーラ止血鉗子による止血法を中心に緊急内視鏡止血におけるマネージメントを含め述べた。 片岡 幹統、河合 隆、山本 圭、植松 淳一、岸本 佳子、辻 雄一郎、竹内 眞美、塚本 咲貴子、杉本 弥子、羽山 弥毅、野中 雅也、青木 貴哉、八木 健二、藤原 麻里、福澤 麻理、福澤 誠克、川上 浩平、酒井義浩、森安 史典
6 NSAIDs(低用量アスピリン)の上部消化管傷害 低用量アスピリン内服患者における上部消化管傷害の検討	共著	新薬と臨床(0559-8672)59巻8号 Page1326-1328(2010. 08)	低用量アスピリン(LDA)服用者の上部消化管粘膜傷害発生頻度について検討した。対象はLDA服用者101例。逆流性食道炎8例、全例H.P感染陰性であった。食道裂孔ヘルニアとHP感染陰性に有意な相関を認めた。LDA関連の深い胃・十二指腸潰瘍では胃潰瘍4例、LDA関連の浅い胃・十二指腸潰瘍では、胃潰瘍8例、十二指腸潰瘍は4例。それぞれ部位に有意差はなかった。深い、浅いを含めたLDA関連胃・十二指腸潰瘍は16例で、12例は浅い潰瘍であった。 山本 圭、河合 隆、杉本 弥子、羽山 弥毅、福澤 麻理、柳澤 京介、山岸 哲也、立花 智津子、立花 浩幸、青木 貴哉、野中 雅也、八木 健二、藤原 麻里、福澤 誠克、片岡 幹統、川上 浩平、酒井 義浩、森安 史典、渡辺 雅貴、山科 章
7 NERD、RE、Barrett食道に対する経鼻内視鏡とカプセル内視鏡	共著	消化器内視鏡(0915-3217)21巻8号 Page1213-1220(2009. 08)	GERD・Barrett食道の診断において、経鼻内視鏡の特徴を述べる。メリットは、①内視鏡検査中の心肺機能の負担が少ない②内視鏡観察と同時に食道蠕動運動機能を観察・定量が可能、デメリットは、①送気量が少なく、食道の伸展が弱くmucosal breakが観察しにくい、②解像度は劣るため、柵状血管、Barrett粘膜の観察能が劣る。したがって、画像強調観察(NBI、i-scan、FICE)を積極的に併用し、観察能をアップすることが重要である。 河合 隆、山本 圭、福澤 麻理、柳沢 京介、山岸 哲也、八木 健二、福澤 誠克、片岡 幹統、川上 浩平、酒井 義浩、森安 史典、高木 融、青木 達哉
8 経鼻内視鏡検査を用いた内視鏡的胃瘻造設の検討	共著	消化器医学(1348-7167)5巻Page57-66(2007. 10)	経鼻内視鏡を用いた胃瘻増設の安全性と有効性を報告した 河合 隆、山岸 哲也、原 弥子、湯川 郁子、八木 健二、片岡 幹統、川上 浩平、糸井 隆夫、森安 史典、逢坂 由昭、高木 融、青木 達哉、尾形 高士
9 著明な浮腫と肥厚を伴った胃粘膜	共著	消化器内視鏡(803-804)24巻5号(2012. 5)	本例は胃蜂窩織炎である。胃前庭部から胃体下部にかけて全周性に粘膜の著明な浮腫と肥厚を認めた。表面には白苔が付着し、易出血性であり一部に潰瘍を形成していたが、介在する粘膜は浮腫状であるもほぼ正常の表面粘膜構造をしている。狭窄をきたしているもののスコープの通過は容易であった。本疾患は胃癌(Type4)や胃悪性リンパ腫との鑑別が重要である。これまでは開腹術により診断される事も多かった。 片岡 幹統、河合 隆、岸本 佳子
10 内視鏡的咽喉頭手術(ELPS)における経鼻内視鏡の役割	共著	消化器内視鏡(0915-3217)26巻11号 Page1893-1898(2014. 11)	拡大内視鏡や各種画像強調システムの開発により、中下咽頭を含め、口腔内の表在癌が発見されるようになった。内視鏡治療の中心であるESDは広く普及して、胃、食道、大腸の表在癌の標準治療となっている。筆者らは口腔内表在癌に対しESDの技術を用い内視鏡切除を行っている。その際に経鼻内視鏡を用いて病変を把持し、自在にカウンタートラクションをかける工夫をしており、その有用性について報告した。 片岡 幹統、武井 ゆりあ、安斎 翔、白崎 友彬、藤井 崇、間瀬 一壽、鈴木 伸治、増淵 達夫、多田 雄一郎、三浦 弘規
(学術論文)			

<p>1 Clinical evaluation of emergency endoscopic hemostasis with bipolar forceps in non-variceal upper gastrointestinal bleeding (査読付) 非静脈瘤性上部消化管出血に対するバイポーラ止血鉗子による緊急内視鏡的止血術の臨床的検討</p>	共著	2010年	Digestive Endoscopy 22(2):151-155, 2010	<p>非静脈瘤性上部消化管出血に対する止血法として熱凝固法のなかでも、より低侵襲で安全なバイポーラ止血鉗子 (HemoStat-Y: PENTAX) による止血法について、その有用性と安全性を検討した。バイポーラ止血鉗子による止血術がなされた42例を対象とした。全体の一次止血率は90.4%であり、再出血率は0%であった。安全で偶発症のないバイポーラ止血鉗子による止血法は消化管出血において有効な新しい内視鏡止血手技であると考えられた。</p> <p>Mikinori Kataoka, Takashi Kawai, Kenji Yagi, Chizuko Tachibana, Hiroyuki Tachibana, Hiroko sugimoto, Yasutaka Hayama, Kei Yamamoto, Masaya Nonaka, Takaya Aoki, Toshihiro Oshima, Mari Fujiwara, Mari Fukuzawa, Masakatsu Fukuzawa, Kohei Kawakami, Yoshihiro Sakai, Fuminori Moriyasu</p>
<p>2 mucosal cutting biopsy technique for histologic diagnosis of suspected gastrointestinal stromal tumors of the stomach (査読付) 胃GISTの病理診断における粘膜切開生検</p>	共著	2012年	Digestive Endoscopy 2012 Nov 8. doi: 10.1111/j.1443-1661..	<p>18例の胃粘膜下腫瘍において、粘膜切開生検を行いその有用性を検討しました。我々は、腫瘍の大きさ、腫瘍部位を調べ、病理組織学的診断率や合併症を検討しました。</p> <p>結果は全例組織診断が可能でした (GIST13例、異所性2例、平滑筋腫3例)。外科的切除をしたGIST11例では術前後の病理組織学的診断は一致し、組織学的悪性度も90.9%一致しました。粘膜切開生検は胃粘膜下腫瘍において有用な病理組織診断法であると考えられた</p> <p>Mikinori Kataoka, *Takashi Kawai, Kenji Yagi, *Hiroko Sugimoto, Kei Yamamoto, Yasutaka Hayama, Masaya Nonaka, Takaya Aoki, Masakatsu Fukuzawa, *Mari Fukuzawa, Takao Itoi, Fuminori Moriyasu</p>
<p>3 Comparison of hemostasis using bipolar hemostatic forceps with hemostasis by endoscopic hemoclipping for non-variceal upper gastrointestinal bleeding in a prospective non-randomized trial (査読付) 前向き臨床比較試験による非静脈瘤性上部消化管出血に対するバイポーラ止血鉗子とクリップによる止血法の比較、</p>	共著	2013年	Surgical Endoscopy27: 3035-3038, 2013	<p>我々は非静脈瘤上部消化管出血に対するバイポーラ止血鉗子の安全性と有効性を報告しました。今回、クリップ法と比較することによりバイポーラ止血鉗子の有効性を評価しました。</p> <p>バイポーラ止血鉗子群とクリップ群に分け、止血成功率と止血時間および再発性出血率比較しました。止血成功率、止血時間ともバイポーラ群の成績が良く、再出血率も低くバイポーラ止血鉗子は、非静脈瘤性上部消化管出血においてクリップより有用であった。</p> <p>Mikinori Kataoka, Takashi Kawai, Yasutaka Hayama, Kei Yamamoto, Masaya Nonaka, Takaya Aoki, Kenji Yagi, Mari Fukuzawa, Masakatsu Fukuzawa, Fuminori Moriyasu</p>
<p>4 Clinicopathological characteristic and clinical handling of the patients with 2cm or less gastric GISTs (査読付) 2cm未満の胃GISTの臨床病理学的特徴とその取扱い</p>	共著	2013年	Splyngerplus2013, 2:469	<p>2cm以下の胃GIST患者の臨床病理学的特徴および臨床取り扱いを検討した。19人のGIST患者を2cm以下と2cm以上のグループI、IIとし、平均年齢、腫瘍サイズ、腫瘍部位、組織病理学的悪性度を比較した。平均年齢と腫瘍サイズは、グループIIが高く、性別、腫瘍部位に差はなかった。全例、組織学悪性度は超低リスク、低リスクであった。組織学的悪性度が超低リスクな2cm以下の胃GISTは、経過観察も許容されると考えられた。</p> <p>Mikinori Kataoka, Takashi Kawai, Hidekazu Ikemiyagi, Takashi Fujii, Mari Fukuzawa, Masakatsu Fukuzawa, Keisuke Kubota, Masashi Yoshida, Shinji Suzuki, Masaki Kitajima</p>
<p>5 Efficacy of short period, low dose oral prednisolone for the prevention of stricture after circumferential endoscopic submucosal dissection (ESD) for esophageal cancer (査読付) 食道がんに対する食道ESD後狭窄における短期間少量の経口ステロイド投与方法の有用性について</p>	共著	2015年	Endoscopy International Open2015; 03(02): E113-E117	<p>食道ESD後の狭窄予防において短期間少量PSL経口投与方法の有用性を検討した。食道ESDで亜全周、全周切除となった症例にステロイド30mg/日を経口投与方法を行い、10mg/weekで減量し21日間 (計420mg) 投与方法の結果、ステロイド投与方法しなかった症例に比べ明らかに狭窄予防に有用であった。既存の報告よりも短期間・少量のステロイド投与方法でも有効であり患者負担も少ないと考えられた。患者負担も少ないと考えられた。</p> <p>Mikinori Kataoka, Sho Anzai, Tomoaki Shirasaki, Hidekazu Ikemiyagi, Takashi Fujii, Kazuhisa Mabuchi, Shinji Suzuki, Masashi Yoshida, Takashi Kawai, Masaki Kitajima</p>

6 編内視鏡的粘膜切除 (EMR) 後潰瘍痕跡部の内視鏡的および組織学的形態の検討 (査読付)	共著	2006年	潰瘍Vol. 33-No. 2 192-195 (2006)	胃EMR後に潰瘍痕跡部が隆起し、遺残再発かどうか診断に苦慮することがある。EMR 後潰瘍痕跡の内視鏡的形態と病理組織学的形態について検討した。L領域の隆起型痕跡は腺窩上皮の過形成やL領域の蠕動運動、胆汁逆流の関与が示唆された。EMR後の隆起型痕跡はL領域に多いが遺残再発はなかった。隆起型痕跡を呈した遺残再発症例は2例ともU領域に認められた。U領域の隆起型痕跡は積極的に遺残再発を疑うべきと考えられた。
7 H. pylori除菌4年後に異時性早期胃癌を認めた1例 (査読付)	共著	2005年	Progress of Digestive Endoscopy VOL. 66 No. 2 54-55 (2005)	片岡 幹統 河合 隆 山岸 哲也 青木 貴哉 山本 圭 大島 敏裕 中村 洋典 八木 健二 宮崎 郁子 高 麻理 近藤 麻里 福澤 誠克 高垣 信一 川上 浩平 額 賀 健治 平良 悟 糸井 隆夫 森安 史典 高木 融 青木 達哉 症例は66歳、男性。1995年胃前庭部の2ヵ所の0-IIc病変 (tub1) に対し、内視鏡的粘膜切除術 (EMR) 施行した。1999年H. pylori (Hp) 除菌療法を行い成功するも、2004年 胃体上部後壁に背景粘膜に著明な腸上皮化生を伴う0-IIc病変 (tub1) 認めた。Hp除菌後も発癌の可能性を考え、定期的な内視鏡検査を要すると思われる。 片岡幹統, 河合 隆 川上浩平, 平良 悟, 糸井隆夫, 森安史典, 高木 融, 青木達哉
8 H. pylori陽性鳥肌胃炎除菌後に多発ポリープを認めた1例 (査読付)	共著	2006年	Progress of Digestive Endoscopy VOL. 68 No. 2 98-99 (2006)	平成11年、内視鏡検査で前庭部に鳥肌胃炎を認めた。生検で H. pylori (H.p) 陽性を指摘、除菌に成功した。除菌後も逆流性食道炎症状が強く平成13年9月よりプロトンポンプインヒビター (PPI) 長期投与していた。経過観察中に高ガストリン血症を認め、平成15年10月の内視鏡検査では鳥肌胃炎は消失していたが、胃体上部から穹窿部に多数の過形成性ポリープを認めた。PPI長期投与による高ガストリン血症が多発過形成性ポリープの原因と思われた。 片岡幹統 河合 隆 山岸哲也 八木健二 宮崎 郁子 高 麻理 近藤麻里 福澤誠克 高垣信一 川上浩平 額賀健治 平良 悟 糸井隆夫 森安史 高木 融 青木達哉
9 血清0157LPS抗体で診断された0157感染症の一例 (査読付)	共著	2003年	Journal of Colon Examination Vol. 20 No. 2 60-63 2003	症例は19歳、男性。主訴は血便。大腸内視鏡にてS状結腸から横行結腸に全周性に発赤認め、上行結腸および盲腸では著明な浮腫、びらんがみられ、腸管出血性大腸菌感染症 (EHEC) が疑われた。入院時の糞便培養では原因菌は同定されなかったが、第7病室に施行した血清0157LPS抗体が陽性であったことより0157感染症と診断した。入院時の糞便培養が陰性でも、臨床症状や大腸内視鏡で0157感染症が疑われた場合、血清抗体検査は診断に有用である。 片岡幹統、井川守人、原田容治
10 サイトメガロウイルス感染を合併したGVHD腸炎の一例 (査読付き)	共著	2006年	Journal of Colon Examination Vol. 23 No. 1 74-79 2006	症例は45歳、女性。ALLで同種骨髄移植を施行。移植後第100病日頃より、下痢出現しGVHD腸炎疑いで入院。PSL、免疫抑制剤投与も下痢症状改善なく下部消化管内視鏡を施行。直腸から下行結腸は易出血性粘膜、びらん、小潰瘍が散見。病理組織学的には、陰窩上皮のアポトーシスおよび核内封入体を認めCMV感染症を併発したGVHD腸炎と診断した。ガンシクロビルで症状改善した。治療方針の決定に内視鏡下大腸生検が有効であった。 青木 貴哉、山本 圭、福澤 誠克、中村 洋典、大島 敏裕、高 麻理、近藤 麻里、片岡 幹統、高垣 新一、西 正孝、川上 浩平、額賀 健治、平良 悟、河合 隆、宮岡 正明、松林 純、向井 清、森安 史典
11 内視鏡的大腸腫瘍摘除術における後出血の回避策と止血法に関する検討 (査読付)	共著	2006年	Journal of Colon Examination Vol. 23 No. 1 44-49, 2006	大腸腫瘍摘除術における後出血は腫瘍径とは相関せず、10mm前後の隆起型腫瘍で頻度が高かった。後出血は摘除後1~2日後の早期出血が41%、6~7日後の晩期出血が32%と2峰性を示した。後出血例は高血圧症、糖尿病治療例が54.5%と半数以上を占め、risk factorと考えられた。出血予防目的にクリップ処置を施した群と無処置の群との比較検討では後出血率に有意な差はなかった。クリップ縫縮は出血予防としては不確実であると考えられた。 平良 悟、大島 敏裕、青木 貴哉、高 麻理、片岡 幹統、福澤 誠克、宮岡 正明、森安 史典

12 20mm以上の大腸腫瘍性病変に対する内視鏡治療の経験 (査読付)	共著	2008年	Progress of Digestive Endoscopy Vol. 73-No. 2 92-96 (2008)	20mm以上の大腸腫瘍性病変に対して内視鏡治療を行い、3ヵ月以上経過観察しえたEMR/EPMR:215病変、ESD:23病変を対象とし治療成績を比較検討した。遺残・再発率はEPMR群と比べESD群で有意に低く、一括切除が可能だった症例では遺残・再発は認めなかった。EMR/EPMR群では27例に遺残・再発病変を認めた。治療時間はESD群で約4倍の時間を要した。ESDは術時間が長かったが、偶発症も認めず安全な治療手技と考えられた。 福澤 誠克, 平良 悟, 片岡 幹統, 竹下 理恵, 真鍋 智津子, 立花 浩幸, 柳澤 文彦, 野中 雅也, 羽山 弥毅, 山本 圭, 青木 貴哉, 八木 健二, 大島 敏裕, 福澤 麻理, 川上 浩平, 河合 隆, 酒井 義浩, 森安 史典
13 急性出血性直腸潰瘍にバイポーラ止血鉗子を用いた新しい止血法 (査読付)	共著	2009年	潰瘍 Vol. 36-No. 1 82-86 (2009)	緊急内視鏡止血術を施行した急性出血性直腸潰瘍(AHRU)15例を対象とし、バイポーラ止血鉗子を用いた止血法について検討した。内訳は男9例、女6例、11例にバイポーラ止血鉗子による止血を行ったところ、偶発症を認めることなく止血が得られた。バイポーラ止血鉗子は熱侵襲による穿孔の可能性が少なく熱凝固を繰り返すことができ、鉗子を押しあてて熱凝固ができ、AHRUに対しても安全な有用な止血法と考えられた。 野中 雅也, 片岡 幹統, 立花 浩幸, 真鍋 智津子, 柳澤 文彦, 竹下 理恵, 羽山 弥毅, 山本 圭, 青木 貴哉, 大島 敏裕, 高 麻理, 福澤 誠克, 川上 浩平, 八木 健二, 河合 隆, 天谷 祥隆, 酒井 義浩, 森安 史典
14 非静脈瘤性上部消化管出血における内視鏡診療ガイドライン (査読付)	共著	2015年	Gastroenterological Endoscopy (0387-1207)57巻8号 Page1648-1666 (2015. 08)	非静脈瘤性上部消化管出血における内視鏡診療ガイドラインを作成した。ピロリ菌由来の出血が減少傾向にある一方で、超高齢社会の到来とともに、アスピリンなどによる薬剤に起因するものが増加している。止血術の第一選択は内視鏡的止血術である。内視鏡止血術後には、酸分泌抑制剤の投与が推奨されている。本ガイドラインでは、上部消化管出血の評価と初期治療、内視鏡的止血法の選択、内視鏡的止血後の管理を記載した。 藤城 光弘, 井口 幹崇, 角嶋 直美, 加藤 元彦, 坂田 資尚, 布袋屋 修, 片岡 幹統, 島岡 俊治, 矢作 直久, 藤本 一眞
15 若年者の狭窄型虚血性小腸炎の1例 (査読付)	共著	2010年	Progress of Digestive Endoscopy (1348-9844) 76巻2号 Page86-87 (2010. 06)	症例は20歳男、繰り返す腸閉塞のため当院紹介入院された。経口のシングルバルーン小腸内視鏡で空腸に長径13cmの区域性の全周性潰瘍と肛門側に4cmの狭窄を認め、虚血性小腸炎が疑われた。小腸狭窄の診断で手術を施行し、空腸に4cmにわたる狭窄を認め、小腸部分切除術を施行した。病理組織学的所見では、潰瘍部の腸間膜動脈の内腔は狭窄しており、狭窄型虚血性小腸炎と診断した。 植松 淳一, 河合 隆, 山本 圭, 福澤 麻理, 山岸 哲也, 立花 浩幸, 羽山 弥毅, 野中 雅也, 八木 健二, 福澤 誠克, 片岡 幹統, 川上 浩平, 酒井 義浩, 森安 史典
16 胃小細胞癌に対し化学療法が奏効した1例 (査読付)	共著	2009年	Progress of Digestive Endoscopy (1348-9844) 75巻2号 Page76-77, 4 (2009. 12)	症例は76歳男性。食欲不振・嘔気・貧血を認め上部消化管内視鏡検査を施行したところ噴門直下に潰瘍を伴う隆起性病変を認め、免疫染色で小細胞癌と診断した。膈への浸潤を認めたため化学療法を施行し、TS-1/CDDP→CPT-11/CDDP→VP-16/CDDP→TXTとレジメンを変更しながら17ヵ月生存することができた1例を経験した。 杉本 弥子, 片岡 幹統, 河合 隆, 野中 雅也, 原田 明日香, 塚本 咲貴子, 立花 浩幸, 山本 圭, 羽山 弥毅, 八木 健二, 福澤 麻理, 藤原 麻里, 福澤 誠克, 川上 浩平, 酒井 義浩, 森安 史典
17 Helicobacter pylori infection and reflux esophagitis in young and middle-aged Japanese subjects (査読付) 日本の若年、中年層におけるピロリ菌感染と逆流性食道炎の関連	共著	2010年	J Gastroenterol Hepatol. 2010 May;25 Suppl 1:S80-5.	HP感染と逆流性食道炎 (RE) の関連を検討した。対象はHP抗体測定を受けた418人。平均年齢は39.2歳。内視鏡的にRE評価をした (ロサンゼルス分類: A、B、C、D)。HP感染率は33.7パーセント。年齢層は、感染率は20代で15.7%、30代で28.0%、40代34.3%、50代では69.1%でした。REの重症度は、HP陽性群より、HP陰性群において加齢とともに重症化した。REはHP菌陰性群で多く認められた。HP感染は、REの進行に影響を与えることが考えられた。 Kawai T, Yamamoto K, Fukuzawa M, Yamagishi T, Yagi K, Fukuzawa M, Kataoka M, Kawakami K, Itoi T, Sakai Y, Moriyasu F, Takagi Y, Aoki T.

18 Efficacy of low-dose proton pump inhibitor (PPI) in the eradication of Helicobacter pylori following combination PPI/AC therapy in Japan. (査読付) 低用量PPIのピロリ除菌の有効性の検討	共著	2007年	Hepatogastroenterology. 2007 Mar;54(74):649-54.	HP除菌レジメンはPPI+AMPC+CAM (PPI / AC) である。本研究では、様々な低用量PPIでの除菌率を検討した。135人を対象とし、7日間のPPI / ACレジメンにおいて低用量PPIを以下に無作為に分けた：(i) OPZ20 mg /日+ AC (OAC)。 (ii) LPZ30mg + AC (LAC)； (iii) RPZ10mg /日+ AC (RAC)。除菌率はそれぞれRPZ69.9%、LAC62.2%、OAC71.1%。有意差はなかった。PPI / AC療法において、低用量PPI除菌率60~70%と低かった。これまでの報告から高用量PPIでの除菌が必要と考えられた。Kawai T, Kawakami K, Mikinori K, Takei K, Itoi T, Moriyasu F, Takagi Y, Aoki T, Watanebe K, Matsumoto Y, Rimbara E, Noguchi N, Sasatsu M
19 Comparison of the effects on cardiopulmonary function ultrathin transnasal versus normal diameter transoral esophogastroduodenoscopy in Japan (査読付) 細径経鼻内視鏡検査の循環動態への影響の検討	共著	2007年	Hepatogastroenterology. 2007 Apr-May;54(75):770-4.	経鼻内視鏡における血行動態を比較した。対象は経鼻内視鏡60人、経口内視鏡は60人。酸素飽和度、心拍数、血圧を比較検討した。経鼻群において心拍数の増加は、酸素飽和度の低下も少なかった。心拍数増加および酸素飽和度の有意な減少を経口群で認めた。心拍数の×収縮期血圧は心筋酸素消費量と相関するが経口腔群で有意に増加したが、経鼻群には認めなかった。経鼻内視鏡は経口内視鏡より血行動態に対する影響が少ない。Kawai T, Miyazaki I, Yagi K, Kataoka M, Kawakami K, Yamagishi T, Sofuni A, Itoi T, Moriyasu F, Osaka Y, Takagi Y, Aoki T.
20 Tailored eradication therapy based on fecal Helicobacter pylori clarithromycin sensitivities. (査読付) クラリスロマイシン感受性に基づいたテーラーメイドヘリコバクターピロリ除菌について	共著	2008年	J Gastroenterol Hepatol. 2008 Dec;23 Suppl 2:S171-4	クラリスロマイシン (CAM) の感受性に応じてテーラーメイド (TM) を治療の有用性を検討した。HP陽性患者70人をランダムにTM群と対照群に分けた。TM群では、CAM感受性株は、PPI / AC療法、CAM耐性株はPPI / AM (メトロニダゾール) 療法、対照群は全例PPI / AC療法。除菌率はTM群では94.3%、対照群では71.4%。TM群ではCAM耐性株に対する除菌率は100%。CAM耐性ピロリ菌株増加が予想される日本では、CAMの感受性に応じた除菌療法が有用である。Kawai T, Yamagishi T, Yagi K, Kataoka M, Kawakami K, Sofuni A, Itoi T, Sakai Y, Moriyasu F, Osaka Y, Takagi Y, Aoki T, Rimbara E, Noguchi N, Sasatsu M.
21 Narrow-band imaging on screening of esophageal lesions using an ultrathin transnasal endoscopy (査読付) 細径経鼻内視鏡によるNBI食道病変スクリーニング	共著	2012年	J Gastroenterol Hepatol. 2012 Apr;27 Suppl 3:34-9.	経鼻内視鏡検査で食道疾患の白色光 (WL) とNBIの診断能を比較した。対象はスクリーニング目的の105人。WL、NBIとルゴール染色を用いた。5mm以上のルゴール不染を疾患と定義、WL対NBIの検出率を比較した。感度、特異度、陽性予測値、陰性予測値、診断一致率はWL対NBIでそれぞれ19.6%対60.8、98.1%対96.2%、90.9%対93.9%、55.4%対71.4%、59.2%対78.6%であり食道疾患の診断能はNBIが有用であった。Kawai T, Takagi Y, Yamamoto K, Hayama Y, Fukuzawa M, Yagi K, Fukuzawa M, Kataoka M, Kawakami K, Itoi T, Moriyasu F, Matsubayashi J, Nagao T
22 Guidelines for endoscopic managements of non-variceal upper gastrointestinal bleeding (査読付) 非静脈瘤性上部消化管出血における内視鏡診療ガイドライン	共著	2016年	Dig Endosc. 2016 Feb 22. doi: 10.1111/den.12639. Epub ahead of print]	非静脈瘤性上部消化管出血における内視鏡診療ガイドラインを作成した。ピロリ菌由来の出血が減少傾向にある一方で、超高齢社会の到来とともに、アスピリンなどによる薬剤に起因するものが増加している。止血術の第一選択は内視鏡的止血術である。内視鏡止血術後には、酸分泌抑制剤の投与が推奨されている。本ガイドラインでは、上部消化管出血の評価と初期治療、内視鏡的止血法の選択、内視鏡的止血後の管理を記載した。Fujishiro M, Iguchi M, Kakushima N, Kato M, Sakata Y, Hoteya S, Kataoka M, Shimaoka S, Yahagi N, Fujimoto K

23 虫垂に発症した消化管重複症の1例 (査読付)	共著		Progress of Digestive Endoscopy (1348-9844) 83巻1号 Page164-165, 14(2013. 12)	67歳男。CSで虫垂開口部に15mm大、弾性硬な粘膜下腫瘍を認め、超音波内視鏡で粘膜下層あるいは筋層より連続する15mmの内部均一な粘膜下腫瘍であった。造影CTでは盲腸底部に造影効果に乏しい腫瘍を認めた。切除標本で盲腸粘膜下に10mm大の嚢胞状構造物を認め、嚢胞の盲腸への開口部は虫垂開口部とやや異なっていた。嚢胞性病変は病理組織学的に虫垂と類似しており、大腸粘膜と粘膜筋板より構成されていた。不完全な重複虫垂と考えた。 藤井 崇, 片岡 幹統, 安斎 翔, 白崎 友彬, 池宮城 秀和, 間瀬 一壽, 鈴木 伸治, 岡田 章祐, 加藤 亜裕, 出口 倫明, 似鳥 修弘, 北島 政樹, 相田 真介, 長村 義之
24 ESDにて病理診断した胃炎症性類線維ポリープ(IFP)の1例 (査読付)	共著		Progress of Digestive Endoscopy (1348-9844) 83巻1号 Page110-111, 7(2013. 12)	67歳女。7年前に上部消化管内視鏡で前庭部に径10mm大の双頭状の粘膜下腫瘍を指摘。腫瘍径が20mmに増大し、形状変化もきたしたため当科紹介となった。超音波内視鏡では粘膜固有層深層～粘膜下層浅層に病変を認めIFPが疑われた。しかし、IFPの特徴とされる陰茎龟头様の形状ではないことや、形状変化と増大傾向を認めており悪性腫瘍も否定できないことから、ESDで病変を一括切除し、病理組織所見からIFPと診断した。 池宮城 秀和, 片岡 幹統, 鈴木 伸治, 安斎 翔, 白崎 友彬, 間瀬 一壽, 藤井 崇, 田中 啓, 齋藤 慶幸, 黒田 純子, 久保田 啓介, 吉田 昌, 北島 政樹, 森 一郎, 長村 義之, 渡辺 守
25 術前に造影CTならびに小腸内視鏡にて診断された原発性空腸癌の1例 (査読付)	共著		Progress of Digestive Endoscopy (1348-9844) 82巻1号 Page172-173, 14(2013. 06)	50代女。腹部造影CTで上部空腸に造影効果のある腫瘍性病変と周囲リンパ節の腫大を認めた。経口的な小腸内視鏡を施行したところ、CTで認められた部位と一致する上部空腸に輪状狭窄型の腫瘍が認められ、生検所見は腺癌であった。小腸造影では、同部位はapple-core様の全周性狭窄像を呈し、口側腸管の拡張を認めた。これらの所見から原発性空腸癌と診断し、十二指腸空腸部分切除+リンパ節郭清術を施行した。 竹内 啓人, 片岡 幹統, 植松 淳一, 池宮城 秀和, 藤井 崇, 田中 啓, 山田 幸太, 鈴木 伸治, 堀部 俊哉, 岡田 章祐, 小島 正之, 首村 智久, 杉浦 芳章, 別宮 好文, 北島 政樹
26 胃粘膜下腫瘍様の特異な内視鏡像を呈したG-CSF産生胃癌の1例 (査読付)	共著		Progress of Digestive Endoscopy (1348-9844) 82巻1号 Page146-147, 11(2013. 06)	68歳男。食思不振と体重減少にて受診した。著明な白血球高値と血清G-CSF値は高値を認めた。骨髓生検は顆粒球系の増殖が著明な過形成骨髓であり悪性所見はなかった。上部消化管内視鏡では、体上部小彎前壁から穹窿部に粘膜下腫瘍様腫瘍を認め、腹部造影CTで胃小彎から肝左葉にかけ、境界不明瞭な不整形な腫瘍を認めた。胃周囲のリンパ節腫大、肝内に多発転移性腫瘍を認めた。G-CSF産生胃癌、多発肝転移とリンパ節転移、Stage VIと診断した。 植松 淳一, 片岡 幹統, 竹内 啓人, 池宮城 秀和, 藤井 崇, 田中 啓, 山田 幸太, 鈴木 伸治, 堀部 俊哉, 岡田 章祐, 黒田 純子, 久保田 啓介, 吉田 昌, 別宮 好文, 北島 政樹
27 粘膜切開生検にて胃GISTと診断しLECSにて切除した1例 (査読付)	共著		Progress of Digestive Endoscopy (1348-9844) 81巻2号 Page140-141, 14(2012. 12)	70歳女性。4年前より近医にて胃SMTの経過観察中であった。今回、腫瘍径の増大を認めたため、精査目的に著者らの施設へ紹介となった。所見では上部消化管内視鏡で胃体中部小彎前壁寄りに約20mm大の内腔発育型様の胃SMTが認められた。そこで、粘膜切開生検を行ったところ、本症例は病理組織学的に胃GISTと診断され、治療として腹腔鏡・内視鏡合同胃局所切除術が施行された。その結果、術後6ヵ月経過で再発はみられていない 藤井 崇, 片岡 幹統, 竹内 啓人, 植松 淳一, 池宮城 秀和, 田中 啓, 山田 幸太, 鈴木 伸治, 堀部 俊哉, 岡田 章祐, 黒田 純子, 久保田 啓介, 吉田 昌, 別宮 好文, 北島 政樹
28 高用量PPIが有効であった逆流性食道炎の1例	共著		Progress of Digestive Endoscopy (1348-9844) 80巻2号 Page74-75, 3(2012. 06)	79歳女。主訴は吐血。胸焼けに対してLansoprazole15mg/day内服中。上部消化管出血を疑い内視鏡検査を施行。切歯列31cmから食道・胃粘膜接合部にかけて全周性の白苔とびらんおよび湧出性出血、軽度狭窄を認めた。逆流性食道炎(LA分類Grade D)による重度の粘膜傷害と診断してRabeprazole40mg/dayの分割投与に変更したところ、症状は速やかに改善した。Rabeprazole40mg/day分割投与に変更することで良好な結果が得られた。 池宮城 秀和, 片岡 幹統, 植松 淳一, 安藤 真弓, 藤井 崇, 田中 啓, 釜本 寛之, 堀部 俊哉, 岡田 章祐, 出口 倫明, 加藤 亜裕, 小島 正之, 似鳥 修弘, 吉田 昌, 別宮 好文
(その他) 1 2 3 :				

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 梶村 いちげ				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
内科系臨床医学		小児科学、胎児・新生児医学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1 Imaging of aortico-left ventricular tunnel by three-dimensional echocardiography (査読付) (3Dエコーによる大動脈左室トンネルの描出)	共著	2010年9月	J Echocardiogr., 8(3)	左室大動脈トンネルの症例を3Dエコーにて解析。 分担: 共著者とともに解析に尽力した。 Tazawa S, Yasukochi S, Takigiku K, <u>Kajimura I</u> , Takei K, Inoue N, Nakano Y, Harada Y, Sakamoto T, Umezu K
2 Transcription profiles of the ductus arteriosus in Brown-Norway rats with irregular elastic fiber formation. (査読付) (不規則弾性線維配列を示すブランノルウェーラット動脈管の転写プロファイル)	共著	2014年3月	Circ J. 78(5)	動脈管開存を高頻度で示すBN ratのDNA micro array解析により、弾性線維に関わる遺伝子が動脈管閉鎖遅延に影響している可能性が示された。 分担: 実験の一部を共同で行った。 Hsieh YT, Liu NM, Ohmori E, Yokota T, <u>Kajimura I</u> , Akaike T, Ohshima T, Goda N, Minamisawa S.
3 Magnetocardiograms early detection of pulmonary arterial hypertension using inverse problem analysis in rat model. (ラットモデルにおける逆問題分析を用いた心磁図による肺高血圧症早期検出)	共著	2015年8月	Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc, 4475-4478	ラット肺高血圧症モデルでMCGで初期の変化を検出できることを示した。 分担: モデルの作成、肺高血圧のエコー評価等を行った。 Yasuda S, Higano S, Ishiyama A, Ono Y, <u>Kajimura I</u> , Minamisawa S.
4 Lipopolysaccharide Delays Closure of the Rat Ductus Arteriosus by Induction of Inducible Nitric Oxide Synthase But Not Prostaglandin E2. (査読付) (リポ多糖はプロスタグランジンE2ではなく、誘導型一酸化窒素合成酵素を介して動脈管閉鎖遅延を惹起する)	共著	2016年1月	Circulation Journal, 80(3)	LPSで誘発された動脈管開存はNOに関連していることを実験的に示した。 分担: 共著者の指導のもと、実験のほとんどを担当。 <u>Kajimura I</u> , Akaike T, Minamisawa S.
5 Low Cardiac Output Leads Hepatic Fibrosis in Right Heart Failure Model Rats. (査読付) (右室不全モデルラットにおいて、低心拍出が肝繊維化を惹起する)	共著	2016年2月	PLoS One 11(2)	右心室不全モデルラットを用いて低心拍出が肝臓の線維化に関連している可能性を示した。 分担: エコー、real time PCRなどの実験の指導を行った。 Fujimoto Y, Urashima T, Shimura D, Ito R, Kawachi S, <u>Kajimura I</u> , Akaike T, Kusakari Y, Fujiwara M, Ogawa K, Goda N, Ida H, Minamisawa S.

6 Pyruvate dehydrogenase activation precedes the down-regulation of fatty acid oxidation in monocrotaline-induced myocardial toxicity in mice. (査読付) (モノクロタリン誘発心毒性マウスにおいて、ピルビン酸脱水素酵素活性が脂肪酸酸化の下方制御に先行する)	共著	2019年3月	Heart Vessels, 34(3)	MCTで誘発されたマウスの心筋障害モデルにおいて、ピルビン酸脱水素酵素が脂肪酸酸化の下方制御に先立っていることを示した。 分担：マウスモデルのエコー評価などを行った。 Nakai G, Shimura D, Uesugi K, <u>Kajimura I</u> , Jiao Q, Kusakari Y, Soga T, Goda N, Minamisawa S.
7 Transcriptional profiles in the chicken ductus arteriosus during hatching. (査読付) (孵化時鶏動脈管の転写プロファイル)	共著	2019年3月	PLoS One, 21:14(3)	長い動脈管を左右に持つニワトリにおけるDNA micro array解析を行った。 分担：実験補助を行った。 Akaike T, Shinjo S, Ohmori E, <u>Kajimura I</u> , Goda N, Minamisawa S
(その他) (学会発表) 1 Virtual surgical anatomy by transpericardial real time three dimensional echocardiography. 経心膜リアルタイム3Dエコーによる外科的解剖の可視化	—	2008年5月	The Second Asia-Pacific Congress of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery. Korea, Jeju-do,	経胸壁リアルタイム心エコーは診断に有用ではあるが、解像度には限界がある。そこで術中に経心膜リアルタイム3Dエコーを志向することでより解像度の高い画像が得られ、術前、術中、術後の評価により有用である。 <u>Ichige Kajimura</u> , Satoshi Yasukochi, Kiyohiro Takigiku, Satoshi Matsuzaki, Kouta Takei, Yorikazu Harada, Shunji Uchita, Gengi Satomi.
2 インターベンション(CI)の肺静脈ステント再狭窄に対する影響.	—	2009年1月	第20回日本Pediatric Interventional Cardiology研究会. 東京	肺静脈狭窄に対し肺静脈ステントの留置後、再度ステント内狭窄を経験することは多く、その頻度や間隔、インターベンションの及ぼす影響などにつき検討した。 <u>梶村いちげ</u> , 安河内聡, 瀧間浄宏, 武井黄太, 井上奈緒, 中野祐介, 田澤星一, 原田順和, 坂本貴彦, 梅津健太郎, 松下弘
3 間質性肺炎(IP)を合併し、Epoprostenol (PGI2) 持続静注により急速な症状悪化を来した NorwoodおよびBidirectional Glenn (BDG) 術後の一例	—	2009年2月	第16回日本小児肺循環研究会. 東京都	Norwood, BDG術後の肺高血圧症治療に難渋していた症例にPGI2持続静注療法を施行し急速に状態悪化し、精査により間質性肺炎の合併が判明したので報告した。 <u>梶村いちげ</u> , 安河内聡, 瀧間浄宏, 武井黄太, 井上奈緒, 中野祐介, 田澤星一, 原田順和, 坂本貴彦, 梅津健太郎, 松下弘
4 Fontan術後の慢性肝機能障害に関する検討.	—	2009年7月	第45回日本小児循環器学会. 神戸	Fontan術後のCVPの上昇は必然であるが、遠隔期の慢性肝機能障害について、評価、指標やリスクファクターに関し検討した。 <u>梶村いちげ</u> , 安河内聡, 瀧間浄宏, 武井黄太, 井上奈緒, 田澤星一, 中野祐介, 原田順和, 坂本貴彦, 梅津健太郎.
5 SCN5Aに変異を認めた乳児期発症徐脈頻脈症候群の一例	—	2009年11月	第14回日本小児心電学研究会 横浜	治療に難渋し、遺伝子検査にてSCN5A変異を認め、乳児期発症の徐脈頻脈症候群を経験したので報告した。 <u>梶村いちげ</u> , 竹内大二, 吉真孝, 清水美妃子, 豊原啓子, 稲井慶, 富松宏文, 山村英司, 中西敏雄, 西澤勉, 古谷道子, 松岡留美子, 平松健司.

6 動脈管開存症に対するAmplatzer閉鎖栓の使用経験.	—	2010年1月	第21回日本Pediatric Interventional Cardiology (JPIC) 学会学術集会. 静岡	動脈管に対するAmplatzer閉鎖栓を用いた治療が新たに認められ、症例を経験したので報告した。 梶村いちげ, 吉眞孝, 井上智弘, 稲井憲人, 清水美妃子, 竹内大二, 稲井慶, 山村英司, 富松宏文, 中西敏雄.
7 新生児期に留置した心外膜ペースメーカーリード(PM lead)が拡張障害を引き起こした多脾症候群の一例.	—	2010年5月	第21回日本心エコー図学会学術集会. 札幌	心エコー評価にて診断した新生児期に留置した心外膜ペースメーカーリードが拡張障害をきたした症例の報告。 梶村いちげ, 吉眞孝, 稲井憲人, 清水美妃子, 竹内大二, 稲井慶, 豊原啓子, 篠原徳子, 山村英司, 富松宏文, 中西敏雄, 岡村達, 平松健司
8 Technical Difficulty in Transcatheter Closure of Atrial Septal Defect(ASD) Assessed by Transesophageal Echocardiography(TEE). 心房中隔欠損症のカテーテル治療における経食道エコーによる評価の技術的困難さ.	—	2011年8月	第75回日本循環器学会学術集会. 横浜.	心房中隔欠損症のカテーテル治療は、経食道エコーによる評価下に施行されるが、開胸手術下の直視と異なり、その評価には技術的困難さが伴う。経食道エコーの技術的困難さについて検討した。 Ichige Kajimura, Eriko Shimada, Hirofumi Tomimatsu, Hideshi Yamamura, ToshioNakanishi.
9 ラット動脈管リモデリングにおけるprostaglandin E2- Nuclear Factor kappa B経路の活性化	—	2012年7月	第48回日本小児循環器学会総会・学術集会. 京都	動脈管閉鎖の機序は未だ明らかにされていない。動脈管閉鎖の過程において、プロスタグランジン E2の低下が血管収縮を引き起こすことが以前の研究で示されており、プロスタグランジンE2-NFκB経路の活性化がラット動脈管リモデリングに関与している可能性を検討した。 梶村いちげ, 横山詩子, 石川義弘, 南沢享
10 Nuclear factor kappa B inhibition promotes closure of the rat ductus arteriosus. NFκB阻害がラット動脈管閉鎖を促進する。	—	2014年4月	Experimental biology. USA, San Diego	動脈管閉鎖の機序は未だ明らかにされていない。未熟児動脈管において感染を併発することで動脈管の再開通を臨床的に認めることから、炎症時に上昇するNFκBに着目し、この産生を抑制することで動脈管閉鎖が促進されるか検討した。 Ichige Kajimura, Toru Akaike, Utako Yokoyama, Yoshihiro Ishikawa, and Susumu Minamisawa. Nuclear factor kappa B inhibition promotes closure of the rat ductus arteriosus. Eeperimental biology. USA, San Diego, 2014/04 /26-30
その他学会発表19件				

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 木内 達				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
呼吸生理		睡眠時無呼吸症候群		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特になし				
(学術論文) 1 シェーグレン症候群に合併したサルコイドーシスの1例(第151回 日本呼吸器内視鏡学会関東支部会)	共著	2015年1月	気管支学37巻1号 p. 118	シェーグレン症候群の患者の経過観察中にCT肺野所見からサルコイドーシスの診断に至った一例報告 分担: 症例の担当医 高橋 由希子, 和田 暁彦, 木内 達, 山本 美暁, 佐藤 祐, 岡本 翔一, 阪下 健太郎, 北園 美弥子, 村田 研吾, 高森 幹雄
2 在宅ケア中に生じた気道異物の1例(第151回 日本呼吸器内視鏡学会関東支部会)	共著	2015年1月	気管支学37巻1号 p. 122-123	在宅人工呼吸器管理中の患者の受診時に気道内異物を認めた。同シリコンカテーテルを5年間洗浄して使っていたというエピソードがあり教訓的症例として提示した 分担: 症例の担当医 岡本 翔一, 和田 暁彦, 木内 達, 高橋 由希子, 横須賀 響子, 山本 美暁, 佐藤 祐, 阪下 健太郎, 北園 美弥子, 村田 研吾, 高森 幹雄
(その他・学会発表) 1 春日部市立病院におけるクリゾチニブの使用経験	—	2013年11月	第54回日本肺癌学会総会(東京都千代田区)	クリゾチニブはALK陽性肺癌に対して抗腫瘍効果を認めた薬剤であるが、(当時は)開始時期に関して明確な使用コンセンサスがなく、3例の使用経験を報告した。 木内達, 木曾原朗, 森田暁壮, 増田貴史, かん秋明, 関恵理奈, 後藤正志, 田川公平, 青山克彦
2 蜂窩織炎を契機に診断されたニューモシスチス肺炎合併Good症候群の一例	—	2018年9月	第231回日本呼吸器学会関東地方会(東京都新宿区)	Good症候群は胸腺腫に免疫不全を合併する稀な疾患である。Good症候群に腋窩潰瘍、PCP、誤嚥性肺炎、口腔カンジダなど多様な感染症を合併した一例を経験したため報告した。 木内 達、川崎 剛、栗山 彩花、小柳 悠、斎藤 合、佐藤 峻、鹿野 幸平、永田 淳、日野 葵、平澤 康孝、西村 倫太郎、杉浦 寿彦、岩澤 俊一郎、重田 文子、寺田 二郎、島田 薫、立石 順久、織田 成人、巽 浩一郎
3 両側膿胸を合併した侵襲性肺炎球菌感染症の一例	—	2019年7月	第235回日本呼吸器学会関東地方会(東京都千代田区)	肺炎球菌感染症+菌血症+両側膿胸を併発し、抗菌薬加療と両側ドレナージにより加療し軽快退院した症例の報告を行った。 木内 達、川崎 剛、栗山 彩花、小柳 悠、斎藤 合、佐藤 峻、鹿野 幸平、永田 淳、日野 葵、平澤 康孝、西村 倫太郎、杉浦 寿彦、岩澤 俊一郎、重田 文子、寺田 二郎、田邊 信宏、巽 浩一郎

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 木村 俊郎
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学分野 外科系臨床医学 小児外科学		小児消化器疾患学		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特になし				
(学術論文) 1 リンパ節転移を伴った十二指腸原発gangliocytic paragangliomaの1例(査読付)	共著	平成27年6月	日本消化器外科学会雑誌, 48(12):984-992	十二指腸乳頭部腫瘍に対して膵頭十二指腸切除術を施行. 病理組織検査ではリンパ節転移を伴うgangliocytic paragangliomaの診断となり, 極めて稀な事例であったため, 文献学的考察を加え報告した. 分担: 学会発表, 執筆 木村俊郎, 豊木嘉一,
2 小児鼠径ヘルニアに対する手術術式の検討ー腹腔鏡下手術(LPEC)と従来法の比較ー	共著	平成29年6月	日本小児外科学会雑誌, 53(4):905-910	小児における腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術を導入し, 従来法と比較検討. 腹腔鏡手術の安全性と有用性を明らかにした. 分担: 研究全体のデザイン, 結果の検討, 執筆 木村俊郎, 須貝道博,
3 A case of Biliary Atresia showing cystic dilatation of the common bile duct (査読付) (和訳: 総胆管の嚢胞状拡張を伴った胆道閉鎖症の1例)	共著	平成30年7月	Journal of Pediatric Surgery Case reports, 38:16-18	胎児期に肝門部嚢胞性病変を指摘された場合, 先天性胆道拡張症と胆道閉鎖症が鑑別に挙げられるが, 出生後の精査によっても確定診断が困難なことが多い. 胆道拡張症との鑑別が困難であった胆道閉鎖症の1例を経験し報告した. 分担: 主治医として症例を経験, 執筆 Toshiro Kimura, Takeshi Hirabayashi,
4 Retinoic acid-inducible gene-1 and CXCL10 are involved in biliary atresia (査読付) (和訳: RIG-IとCXCL10は胆道閉鎖症の発生に関与する)	共著	令和元年11月	Hirosaki Med. J., 69: 86-94	診断・治療が遅れると胆汁うっ滞性肝硬変から不可逆的な肝不全に至る難病である胆道閉鎖症とウイルス感染の関連性を明らかにするため, ウイルスセンサーであるRIG-Iとその下流因子とのCXCL10の免疫組織学的検討を行い, 胆道閉鎖症の手術標本においてRIG-IとCXCL10が発現することを見出した. 分担: 研究全体のデザイン, 実験および結果の検討, 執筆 Toshiro Kimura, Tadaatsu Imaizumi,
(その他) 1 小児鼠径ヘルニアに対する腹腔鏡下経皮的腹膜外ヘルニア閉鎖術施行症例の検討	—	平成28年4月	第116回日本外科学会定期学術集会, 大阪市, 大阪府	小児における腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術を導入し, 従来法と比較検討. 腹腔鏡手術の安全性と有用性を明らかにした. 木村俊郎, 須貝道博,

2 小児悪性腫瘍に対する組織生検術の有用性の検討	—	平成29年4月	第117回日本外科学会定期学術集会、横浜市、神奈川県	手術を施行した小児悪性腫瘍症例の疾患、手術術式、合併症、化学療法開始までの期間などを比較検討した。診断精度が高い点と、生検により確定診断が得られた後に迅速に化学放射線療法に移行できる点で、腫瘍生検の有用性は非常に高いと考えられた。 木村俊郎，平林健，
3 当院における小児急性虫垂炎に対する治療方針	—	令和1年5月	第56回日本小児外科学会学術集会、久留米市、福岡県	小児における待機的な腹腔鏡下虫垂切除の有用性を検討した。緊急手術や開腹手術の手術症例と比較して術後合併症なども少なく安全で有用性の高い治療方針であることが明らかになった。 木村俊郎，豊木嘉一，
4 当院で経験した非閉塞性腸管虚血症 (NOMI) 10例の検討	—	令和1年10月	第11回日本Acute Care Surgery学会，国頭郡、沖縄県	非閉塞性腸管虚血症の経験症例を比較・検討した。救命率向上のためには早期診断と早期治療が重要であり，疑った時点で速やかに治療を開始することと，症状増悪時などには速やかに手術移行を選択することが重要であることが明らかとなった。 木村俊郎，豊木嘉一，

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 清田 康弘				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学分野 整形外科学		四肢機能再建学、小児運動器学、運動器外傷学、骨・軟骨代謝学、スポーツ医学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特になし				
(学術論文) 1. Adaptation process for standing postural control in individuals with hemiparesis (査読付) 片麻痺患者の立位保持姿勢の獲得過程	共著	平成23年5月	Disability and Rehabilitation, 33 (25-26) :2567-73	脳梗塞患者が発症後に初めて立位姿勢を取る際の重心の位置と下肢筋力の活動量を、床反力計と表面筋電図を使用して調べた。症例数は9例でそれぞれ5回計測を行なった。最初は身体の中心に重心を保とうとするが、回数を重ねるごとに健側に重心が移動し、姿勢の不安定性は改善され、健側下肢の筋活動量も低下した。片麻痺患者のリハビリを計画する際にはこの学習過程を考慮する必要があると考える。 役割：筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した 著者：Yasuhiro Kivota, Kimitaka Hase, Hayato Nagashima, Tomoko Obara & Meigen Liu
2. A2 pulleyが原因であったばね指の一例 (査読付)	共著	平成26年6月	静岡整形外科医学雑誌, 7巻 1号 31-33	A1 pulleyにおけるばね指として手術加療を行い、術後にA2 pulleyが原因であるとの診断に至った一例を経験し、ばね指の診断においてはA1 pulley以外にA2 pulleyでの狭窄が原因であることを鑑別に挙げる必要があると考えた。 役割：筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した 著者：清田 康弘, 丹治 敦, 井上 貴文, 野尻 翔, 藤井 武, 山下 太郎, 菊池 謙太郎, 奥山 邦昌
3. 内視鏡下椎間板ヘルニア摘出術(MED)後に発生したepiduralgasの1例 (査読付)	共著	平成27年3月	臨床整形外科, 50巻 12号 1239-1243	Epidural gasによる神経根の圧迫を生じた症例を経験した。Epidural gasは, vacuum phenomenonにより生じた椎間板内gasが, 手術操作によって硬膜外に脱出することで形成される。その発症を防ぐため, 椎間板ヘルニアの手術時には, 椎間gasの十分な排出が必要である。治療は保存的加療が第一選択だが, 保存的加療が奏功しない場合, 手術による排出を考慮する必要がある。 役割：筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した 著者：清田 康弘, 奥山 邦昌, 谷 英明, 中島 由加里, 名倉 重樹, 山下 太郎, 古川 満, 菊池 謙太郎
4. Pucker sign in a distal radial fracture (査読付) 橈骨遠位端骨折におけるパッカーサイン	共著	平成28年3月	Pediatrics International, 58 (12) :1345	パッカーサインは上腕骨顆上骨折の重症例において、認めるサインである。橈骨遠位端骨折におけるパッカーサインについては、過去に報告がない。本症例は橈骨遠位端骨折におけるパッカーサインの最初の報告で、上腕骨顆上骨折の場合と同様に重症を示唆する所見であるため、慎重に治療方針を決める必要がある。 役割：主治医として症例を提供し、論文作成の指導を行なった 著者：Osamu Nomura, Yasuhiro Kivota, Motoki Yasudal and Nobuaki Inoue

<p>5. Clavicle fracture at the suture hole after acromioclavicular joint reconstruction using a suture-button: a case report (査読付) スーチャーボタンを使用した肩鎖関節再建後のスーチャーホールでの鎖骨骨折: 症例報告</p>	<p>共著</p>	<p>令和1年7月</p>	<p>BMC Musculoskeletal Disorders, 20 (1) :333</p>	<p>肩鎖関節脱臼に対する、スーチャーボタンを使用した靭帯再建術は簡便な手術法として選択されてきた。しかし、その合併症については十分には理解されていない。肩鎖関節脱臼に対する靭帯再建術後に、スーチャーホールで骨折を生じた症例を経験し、スーチャーホールの拡大を防ぐことが重要であると考えた。 役割: 論文作成の指導を行なった 著者: Doji Inoue, Ryogo Furuhashi, Kazuya Kaneda, Yoshihiro Ritsuno, Aki Kono, Yasuhiro Kiyota, Hideo Morioka and Hiroshi Arino</p>
<p>6. Posterosuperior shoulder dislocation due to the rupture of deltoid posterior fibers: a case report (査読付) 三角筋後部線維の損傷が原因となった肩関節後上方脱臼: 症例報告</p>	<p>共著</p>	<p>令和1年7月</p>	<p>BMC Musculoskeletal Disorders, 20 (1) :345</p>	<p>三角筋損傷に伴って生じる肩関節上方脱臼についての報告は少ない。広範囲腱板断裂と、三角筋後部線維の損傷を伴って生じた、肩関節後上方脱臼の症例を経験した。肩関節後上方脱臼は過去に報告がなく、最初の報告である。 役割: 論文作成の指導を行なった 著者: Ryogo Furuhashi, Yasuhiro Kiyota, Taiki Ikeda, Masaaki Takahashi, Hideo Morioka and Hiroshi Arino</p>
<p>7. 手指に発生した腱鞘巨細胞腫のMRI上の大きさと術中所見での骨病変および腱鞘内浸潤の有無との関係 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>令和1年8月</p>	<p>日本手外科学会雑誌 36巻4号556-559</p>	<p>腱鞘巨細胞腫は周囲組織への浸潤を起こすことがあるが、術前MRIでその存在を正確に把握することは困難である。本研究は、手指に発生した腱鞘巨細胞腫のMRI上の大きさと術中所見での骨病変および腱鞘内浸潤の有無との関係を検討することを目的とした。当院で治療した手指発生の腱鞘巨細胞腫14例を対象とした。術中所見で、骨病変は7例に認め、有意に腫瘍サイズが大きかった。腱鞘内浸潤は10例に認め、有意に腫瘍サイズが大きかったが、小さい腫瘍でも腱鞘内に浸潤する症例を認めた。MRIの感度は、骨病変は低く、腱鞘内浸潤は高いことから、術前MRIで骨病変は腫瘍の大きさから、腱鞘内浸潤は注意深い読影から推測し、取り残しをしないように、十分に術前計画を立てておく必要があると考える。 役割: 筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した 著者: 清田康弘, 有野浩司, 河野亜紀, 堀内孝一, 鎌田雄策</p>
<p>8. 橈骨遠位端関節内骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後の橈骨手根関節と手根中央関節の屈伸可動域の経時的変化 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>令和1年9月</p>	<p>日本手外科学会雑誌 36巻4号411-414</p>	<p>当院で掌側ロッキングプレートを用いて手術を行った橈骨遠位端関節内骨折55例を対象とした。術後6週, 3ヵ月, 6ヵ月, 1年で手関節最大伸展位と最大屈曲位で単純X線側面像を撮影し、橈骨月状骨角, 有頭骨月状骨角を計測し、健側と比較した。術後3ヵ月まではいずれの角度も健側より有意に小さかったが、術後1年では最大屈曲時の橈骨月状骨角だけが健側より有意に小さかった。本研究の結果、橈骨遠位端関節内骨折術後の手関節屈伸可動域をさらに改善するためには橈骨手根関節を屈曲させる訓練を重点的に行うことが有効である可能性が示唆された 役割: 筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した 著者: 清田康弘, 西脇正夫, 寺坂幸倫, 稲葉尚人, 別所祐貴, 堀内行雄</p>
<p>9. Dorsal subscapularis approach for the surgical drainage of subscapularis intramuscular abscess: a case report (査読付) 肩甲下筋内膿瘍に対する肩甲下筋後方からのアプローチによる外科的ドレナージ: 症例報告</p>	<p>共著</p>	<p>令和1年10月</p>	<p>BMC Musculoskeletal Disorders, 20 (1) :445</p>	<p>肩甲下筋腱内膿瘍の報告は少ない。肩甲下筋腱膿瘍に対して、肩甲下筋と肩甲骨の間からアプローチしてドレナージを行い、良好な治療成績を得た症例を報告した。このアプローチ法は過去に報告がなく、初めての報告である。 役割: 論文作成の指導を行なった 著者: Ryogo Furuhashi, Doji Inoue, Yasuhiro Kiyota, Hideo Morioka and Hiroshi Arino</p>

<p>10. Surgical treatment for recurrent inferior shoulder dislocation with greater tuberosity fracture and rotator cuff tear: a case report (査読付) 大結節骨折と腱板損傷を伴う反復性肩関節下方脱臼に対する手術治療 : 症例報告</p>	共著	令和1年10月	JSES Open Access, 3 (4) :357-360	<p>肩関節下方脱臼の報告は少ない。上腕骨大結節骨折と腱板損傷を伴うことは知られているが、治療法についての報告はほとんど認めない。反復性肩関節下方脱臼症例に対して、上腕骨大結節骨折の整復固定術と腱板修復を施行した症例を経験し、良好な肩関節の安定性を得た症例を報告した。 役割：論文作成の指導を行なった Ryogo Furuhata, MD, Yasuhiro Kiyota, MD, Noboru Matsumura, MD, PhD, Akira Yoshiyama, MD, PhD, Hideo Morioka, MD, PhD, Hiroshi Arino, MD, PhD</p>
<p>11. Acute progressive bilateral carpal tunnel syndrome associated with remitting seronegative symmetrical synovitis with pitting edema syndrome: A case report (査読付) RS3PE症候群に伴い急性に両側手根管症候群を生じた一例 : 症例報告</p>	共著	令和1年11月	Journal of Orthopaedic Surgery, 28 (1)	<p>RS3PE症候群に伴って、急性に発症した手根管症候群を経験した。制御不能な疼痛を伴ったため、緊急で手根開放術を施行した。その後、ステロイドの内服加療を行い、治癒した。RS3PE症候群による屈筋腱鞘の滑膜炎で生じた浸出液が手根管内に貯留し、正中神経を圧迫したと考えた。 役割：論文作成の指導を行なった Kentaro Okuma, Ryogo Furuhata, Yasuhiro Kiyota, Aki Kono, Teppei Hayashi, Yusaku Kamata and Hideo Morioka</p>
<p>12. Normal values and ranges of the lateral capitello-humeral angle in healthy children (査読付) 健康小児におけるlateral capitello-humeral angleの基準値</p>	共著	令和2年8月	Journal of Pediatric Orthopaedics B. 2020 Aug 18 doi: 10.1097	<p>小児の肘関節側面像の指標は様々なものがあり、統一されていない。かつ、計測法が曖昧であるという問題点がある。近年、lateral capitello-humeral angleが提唱された。本研究では168名の健康小児の肘関節単純X線側面像を使用して、lateral capitello-humeral angleの基準値を調査した。 役割：筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した Yasuhiro Kiyota, Taku Suzuki, Naoto Inaba, Masao Nishiwaki, Hiroo Kimura, Noboru Matsumura, Kazuki Sato, Masaya Nakamura, Morio Matsumoto, Takuji Iwamoto</p>
<p>13. Smoking cessation increases levels of osteocalcin and uncarboxylated osteocalcin in human sera (査読付) 禁煙によりヒト血清中のオステオカルシンおよび低カルボキシル化オステオカルシンの濃度は上昇する</p>	共著	令和2年8月	Sci Rep. 2020 Oct 8;10(1):16845	<p>喫煙が骨折や骨粗鬆症のリスクとなることは知られているが、禁煙が骨代謝に対してどのような効果をもたらすのかということは十分には分かっていない。 1つ目の研究では、閉経後女性において、喫煙者の方が非喫煙者よりも骨密度が低い結果であった。2つ目の研究では禁煙治療後に、骨形成マーカーである、オステオカルシンと低カルボキシル化オステオカルシン(ucOC)の血中濃度が上昇していた。動物実験では、マウスへのニコチン投与により骨密度が低下し、破骨細胞数が有意に増加した。また、ニコチン休薬によりTRACP5bが低下するとともに、骨密度が有意に上昇することが分かった。 役割：筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した Yasuhiro Kiyota, Hiroyasu Muramatsu, Yuiko Sato, Tami Kobayashi, Kana Miyamoto, Takuji Iwamoto, Morio Matsumoto, Masaya Nakamura, Hiroki Tateno, Kazuki Sato and Takeshi Miyamoto</p>
<p>(その他) (学会発表) 1 橈骨遠位端関節内骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後の橈骨手根関節と手根中央関節の屈伸可動域の経時的変化</p>	—	平成30年4月	第61回日本手外科学会学術集会、新宿区	<p>掌側ロッキングプレート固定後の橈骨遠位端関節内骨折55例に対し、術後6週、3か月、6か月、1年で手関節最大伸展/屈曲位で単純X線側面像を撮影し、月状骨の橈骨に対する伸展/屈曲角、有頭骨の月状骨に対する伸展/屈曲角を健側と比較した。いずれも経時的に改善したが、月状骨屈曲角だけは術後1年でも健側より小さく、術後可動域の改善のためには橈骨手根関節を屈曲させる訓練を重点的に行うことが有効である可能性が示唆された。 共同演者：清田康弘、西脇正夫、寺坂幸倫、稲葉尚人、別所祐貴、堀内行雄</p>

<p>2 The operative outcome of distal humerus fractures in our hospital 当院における上腕骨遠位端骨折の手術治療成績</p>	—	平成31年2月	第31回日本肘関節学会学術集会、小樽	<p>当院で上腕骨遠位端骨折に対してOrthogonal plate固定を施行した、60歳以上の高齢者15例を対象とし、AO分類骨折型でType A9例とType C6例に分けて検討を行った。Type A骨折では、滑車の大きさと屈伸アークの間に有意に強い正の相関を認め、滑車に挿入したスクリューの本数とレントゲン側面像での矯正損失との間には負の相関を認めた。Type A骨折では腕尺関節の安定性が重要であり、安定性が得られるように、プレートやスクリューの位置を決定することが大切であると考えられた。 共同演者: <u>清田康弘</u>, 河野亜紀, 堀内孝一, 有野浩司</p>
<p>3 手指に発生した腱鞘巨細胞腫の大きさと進展範囲の関係</p>	—	平成31年4月	第62回日本手外科学会学術集会、札幌	<p>手指に発生した腱鞘巨細胞腫14例について、腫瘍の大きさと進展範囲との関係を検討した。腫瘍最大面積を含むMRI水平断像での、腫瘍の占拠率、骨全周に対する占拠範囲、屈筋腱全周に対する占拠範囲を計測すると、骨病変(P<0.01)、腱鞘内浸潤(P<0.05)を認める症例はいずれも有意に大きい結果であった。大きい腫瘍は進展範囲が広いという結果であり、手術の際は取り残さないように十分に注意をする必要がある。 共同演者: <u>清田康弘</u>, 有野浩司, 河野亜紀, 古旗了伍, 堀内孝一</p>
<p>4 年齢、性別、左右が等分散な健常日本人小児集団におけるLateral capitelloumeral angleの正常値の調査</p>	—	令和2年2月	第32回日本肘関節学会学術集会、奈良	<p>年齢、性、左右が均等な母集団における健常日本人小児のLCHAを調査した。LCHAは平均47.1(27-63)°であった。性別では男児は45.1°, 女児は49.1°であった。年齢によっては女児が男児に比べ有意に大きかった左右別では右肘は47.9°, 左肘は46.4°で左右差は認めなかった。LCHAと年齢との間には正の相関があった。女児の成長が早いことが、LCHAの男女差の要因と考えられた。本研究は、日本人小児LCHAの正常値を測定し、今後、肘関節疾患の単純X線側面像評価の一助となると思われる。 <u>清田 康弘</u>, 鈴木 拓, 稲葉 尚人, 西脇 正夫, 木村 洋朗, 佐藤和毅, 岩本 卓士</p>
<p>5 成人肘頭骨折に対するTension band wiring法の成績不良因子の検討</p>	—	令和2年4月	第62回日本手外科学会学術集会、新潟	<p>成人肘頭骨折に対してTension band wiring法を施行した98例98肘の成績不良因子を検討することを目的とした。術後、遷延治癒または偽関節を生じた症例と再手術が必要であった症例を成績不良例とし、その要因を検討した。結果、肘頭骨折のTBW法においては、ワイヤーのバックアウトをさせないように注意を要するが、それ以上に近位骨片のカットアウトやS-wireの逸脱をさせない手技が大切であることが示唆された。 共同演者: <u>清田康弘</u>, 鎌田雄策, 河野亜紀, 古旗了伍, 木村洋朗, 鈴木拓, 松村昇, 岩本卓士</p>

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 久保 仁
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系-医歯薬学-8206-神経内科学		臨床神経生理学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 特集 脳機能の解明に迫る！脳機能イメージングから分かる脳の働き	共著	平成15年11月	地域保健研究会 月刊地域保健 34(10)	生きている人の脳の形や働きを傷つけずに見る脳機能イメージングについて、特にNIRS(近赤外分光法)を用いたイメージングについて、自験例も含めて概説した。 担当：脳神経細胞の活動を探るNIRS 久保仁、穂積昭則、他
2. 神経内科学テキスト 改訂第3版	共著	平成23年4月	南江堂	神経筋疾患の検査法の一つである、筋生検・神経生検について概説した。 担当：筋生検・神経生検 江藤文夫、飯島節(編集)、久保仁、他
3. 特集：回復期で知っておきたい！ここが分かれ道!!症状から引く検査値と画像	共著	令和2年7月	全日本病院出版会 Monthly Book MEDICAL REHABILITATION No. 250 2020年7月増刊号	回復期リハビリテーション病棟において遭遇する可能性のあるめまいについて、特に後遺症を残したり生命を脅かす疾患を見逃さないことに重点を置いて概説した。 担当：回復期リハビリテーション病棟におけるめまい 川手信行(編集)、久保仁、他
(学術論文) 1. Clinical use of multishot diffusion EPI for neurological patients (神経疾患における multishot diffusion EPIの臨床応用)	共著	平成10年2月	Excerpta Medica, Brain Topography Today: Proceedings of the III Pan-Pacific Congress on Brain Topography (BTOPPS)	当時発達してきていた拡散強調画像を用いて、神経疾患における錐体路の評価の試みを報告した。筋萎縮性側索硬化症(ALS)においては、正常例に比し、錐体路の描出が不良の傾向があった。 分担：主治医として症例を提供した 著者：Yoshihiko Kogaら(編集)、Jin Kubo

2. 痴呆患者におけるニコチン ¹ の効果判定-Perfusion Echo Planar Imaging, Proton Magnetic Spectroscopyを用いた検討 (査読付)	共著	平成12年 1月	神経治療学, 17, 51-55, 2000	<p>ニコチンの痴呆に対する効果を評価するため、perfusion EPI, 1H-MRSを用い、投与前後の変化を検討した。投与により、自発性の低下や抑うつ状態など痴呆にともなう精神症状が改善した。改訂長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R), Mini-Mental State Examination(MMSE)ではそれぞれ改善傾向を認めたが、有意差はみられなかった。perfusion EPIでは全ての領域でrelative cerebral blood volume(r-CBV)およびpeak値が有意に増加し、脳血流の改善が示唆された。1H-MRSでは、N-アセチル、アスパラギン酸(NAA)の相対的な増加を認め、脳機能、代謝の改善が示された。これらの結果は、perfusion EPI, 1H-MRSは脳内代謝や脳機能の改善を客観的に表す有用な検査法であると思われた。</p> <p>分担：症例の提供や検査立ち合いとして、神経心理検査やMRSのデータ収集・解析に協力した。</p> <p>著者：石原哲也、平田幸一、久保仁ら</p>
3. 聴性中潜時反応・事象関連電位を用いたaniracetamの効果の検討 (査読付)	共著	平成12年 4月	日本薬物脳波学会雑誌 2(1) : 62-64, 2000	<p>血管性痴呆患者に対するaniracetamの効果、聴性中潜時反応(MLR)・事象関連電位(ERP) topographyを用いて検討した。血管性痴呆患者10名を対象。aniracetam投与後、HDS-Rスコアが上昇した。MLRではP1振幅の増高を認めた。ERPにおいてもP300の潜時短縮・振幅増大等の結果が認められた。以上の結果は、aniracetamが網様体上行投射系を賦活し、情報処理障害の初期部分の改善に引き続き高次脳機能を改善させたと考えられた。</p> <p>分担：筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した</p> <p>著者：久保仁、平田幸一、穂積昭則ら</p>
4. Brainstem function in rapid eye movement sleep behavior disorder: The evaluation of brainstem function by proton MR spectroscopy (1H-MRS) (REM睡眠行動異常症における脳幹機能：プロトンMRスペクトロスコピーを用いた脳幹機能評価) (査読付)	共著	平成12年 6月	Psychiatry and Clinical Neurosciences 2000, 350-351	<p>REM睡眠行動異常(RBD)における脳幹を1H-MRSで評価した。コリン/クレアチン比の増加を認めた。この変化は、脳幹の神経細胞が細胞膜レベルで機能障害を持っていることを示唆した。さらに、1H-MRSが本疾患における脳幹神経細胞機能の非侵襲的評価法となり、特発性RBDと二次性RBDの鑑別に有用となる可能性があることを示唆した。</p> <p>分担：症例の提供や検査立ち合いとして、MRSのデータ収集に協力した。</p> <p>著者：Masayuki Miyamoto, Jin Kubo, et al.</p>
5. Chronic Nicotine Administration for Treatment of Dementia A Study Using Event-related Potentials and Midlatency Responses in Dementia (認知症治療目的のニコチン慢性投与-認知症における事象関連電位と聴性中潜時反応を用いた検討) (査読付)	共著	平成12年 7月	Dpkkyo Journal of Medical Sciences, 27(2) : 365-372, 2000	<p>ニコチンパッチ製剤による経皮投与が認知症患者に与える影響について、事象関連電位(ERP)と聴性中潜時反応(MLR)を用いて評価した。痴呆患者は頭皮の潜時、振幅、電場に異常なERPを示した。MLRにおけるP1の振幅の低下と電場異常は、一部の認知症患者でも見られた。患者のこれらの異常なERPおよびMLRは、ニコチンの投与後に、特にERPのP300潜時およびMLRのP1振幅が改善された。</p> <p>分担：筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した</p> <p>著者：Jin Kubo, Koichi Hirata, et al.</p>

6. MRIで結果を追い得た間欠型一酸化炭素中毒の2例（査読付）	共著	平成14年 5月	Journal of Japanese Congress on Neurological Emergencies, 15, 122-125:2002	MRIで経過を追い得た間欠型一酸化炭素中毒の2症例を報告した。曝露直後の意識レベルは同程度であったにも拘わらず、曝露短時間例においては、病巣は基底核に限局し、症状の改善傾向が明らかであった。曝露長時間例においては、基底核部に加え、び慢性の大脳白質病変が認められ、症状が長期にわたり遷延した。間欠型一酸化炭素中毒の神経症状は、CO曝露時間に関連している可能性があると考えられた 分担：筆頭著者として研究全体をデザイン、統括した 著者：久保仁、大友哲、美原盤ら
（その他）学会発表 1. 14歳で進行性の神経症状にて発症し、NPC1遺伝子変異を認めた1症例（口演）	—	平成28年5月	第57回日本神経学会学術大会 共催セミナー プレミアムイブニングセミナー ニーマン・ピック病C型の早期発見へのポイントを学ぶ-眼球運動障害、精神症状、嚥下障害からの気づき-（神戸）	14歳で進行性の神経症状にて発症し、NPC1遺伝子変異を認めた1症例を報告した。要点を後述する。①希少疾患である、②判明した遺伝子異常が世界初である、③希少疾患ではあるが症状を軽減あるいは進行を抑制する可能性のある薬剤が臨床現場で使用可能になっており、早期発見が重要である。 発表者：久保仁 共同演者：Shakespear Norshalena、山本悌司、片山宗一、衛藤義勝ら
2. The therapeutic use of repetitive transcranial magnetic stimulation (rTMS) combined with rehabilitation in Southern TOHOKU Daini Hospital（口演、英語） 南東北第二病院における反復性経頭蓋磁気刺激とリハビリテーションを併用した治療	—	平成30年10月	The 4th Koriyama-Taipei International Symposium (New Taipei City, Taiwan)	（当時の勤務先である）南東北第二病院における、脳卒中症例に対する反復性経頭蓋磁気刺激とリハビリテーションを組み合わせた治療について、自験例も提示しながら英語で概説した。特に片麻痺で出現する痙縮に対する治療についてプレゼンテーションし、関連するポツリヌス治療についても触れた。 発表者：久保仁（単独発表）

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 小山 一憲				
研 究 分 野			研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
生物系医師歯薬学内科学臨床医学代謝学8207 糖尿病、内分泌に関する実務			糖尿病、経口糖尿病薬	
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 なし				
(学術論文) 1. メタボリックシンドロームに2型糖尿病を合併した外来患者の食生活の現状(第一報)	共著	2012. 09	医療66巻9号482-489	宮本 佳世子, 田中 寛, 桑原 節子, 尾藤 誠司, 小山 一憲, 山口 直人 METS合併2型糖尿病患者の栄養食事指導の効果について多施設共同で縦断的研究調査を行った。対象は7施設の外来患者130名に、共通の栄養評価シートを用いて調査を行った。BMIが30以上で飲酒が週4-7回の群はアルコール摂取エネルギー量が最も多く、夕食の摂取量が少なかった。女性BMI30以上では、炭水化物の摂取量が多く、BMI25未満ではエネルギー摂取量は少ないが間食が多かった。飲酒と食べ方に着目した指導を行い、効果的な指導方法を確立すべきである。
2. 大規模臨床研究のエビデンス単著—日本人糖尿病患者における心疾患、脳卒中の発症率について	単著	2012. 03	糖尿病レクチャー2巻4号645-648	糖尿病患者では、心血管イベントの発症率は3~5倍に上昇する。時代の変化とともに、心筋梗塞の発症率は上昇し、脳梗塞の発症率は減少し横ばいとなった。危険因子は、冠動脈疾患ではLDLコレステロール、年齢、中性脂肪、HbA1c、C-ペプチドであり、脳卒中では収縮期血圧である。
3. 経口血糖降下薬のレシピ シックデイへの対策	単著	2006. 09	薬局57巻9号2771-2774	糖尿病患者が治療中に発熱、下痢、嘔吐、食欲不振のため食事ができないときをシックデイと呼ぶ。血糖コントロールが良好な場合でも、著しい高血糖やケトアシドーシスに陥ることがある。シックデイへの対策は、日頃より患者と医療スタッフとのコミュニケーションを良好に保ち、適切で迅速な処置が行えるようすることである。一般的な対処法に加えて、経口血糖降下薬の用量調節やインスリンの使用法についても述べる。

4. 1型糖尿病患者の治療および食生活の実態と食事療法実践意識	共著	2005. 03	糖尿病48巻3号 189-195	石橋 理恵子丸山 千寿子, 田中利枝, 南昌江, 島田 朗, 内潟安子, 黒田 暁生, 横野 浩一, 筒井 理裕, 目黒 周, 小山一 憲: 外来1型糖尿病患者の治療と食生活の実態を健常者と比較し明らかにした. 望ましい食生活習慣が形成されていたが, 食事ストレスを感じているものが多かった. 食事療法実践意識について4群で比較したところ, 「している」群は他群とよりカロリーに配慮し, 野菜摂取量, 海藻, 果物, 低脂肪乳類摂取が多かった. 食事療法実践意識によって, HbA1cや低血糖回数に差はなかった. 食事療法の教育内容を再検討し, ストレス軽減に配慮した栄養教育方法を展開する必要がある
5. 政策医療ネットワーク施設における内分泌疾患診療の標準化に関する研究	共著	2005. 01	医療59巻1号 8-12	臨床共同研究「政策医療ネットワークを用いた内分泌・代謝性疾患データバンクの構築と遺伝子検索に関する研究」において得られた入院患者データベースを分析した. ネットワークに参画する国立病院・療養所23施設における過去3年間の内分泌代謝疾患入院患者を調査し, データバンクを構築した. 分析により, ネットワーク施設における内分泌代謝性疾患診療の現状が明らかとなった
6. 2型糖尿病患者に対するピオグリタゾン15mg連日投与と隔日投与の有効性と安全性の比較検討	単著	2003. 09	Progress in Medicine 23 巻9号2417-2421	2型糖尿病患者にピオグリタゾン15mg連日と, 15mg隔日投与の有効性と安全性の比較検討したところ. 女性では連日投与とほぼ同等の血糖降下作用を認めたが, 男性では隔日投与では有意な血糖降下は認めなかった. 隔日投与では浮腫の発生頻度は連日投与と比べて極めて少なく, より安全な投与方法と考えられた. 体重は男性では有意な変化は認められなかったが, 女性では有意な増加が認められた 2型糖尿病患者にピオグリタゾン15mg連日と, 15mg隔日投与の有効性と安全性の比較検討したところ. 女性では連日投与とほぼ同等の血糖降下作用を認めたが, 男性では隔日投与では有意な血糖降下は認めなかった. 隔日投与では浮腫の発生頻度は連日投与と比べて極めて少なく, より安全な投与方法と考えられた. 体重は男性では有意な変化は認められなかったが, 女性では有意な増加が認められ
7. ケトアシドーシス, ショック後にmeralgia parestheticaと発汗障害を呈した糖尿病の1例	共著	2001. 12	糖尿病 44巻12号 Page955-958	29歳男. 口渇, 嘔気, 嘔吐, 腹痛が出現し, 糖尿病性ケトアシドーシスによる昏睡, ショックで救急搬送となった. 速効型インスリン, 生理的食塩水, ドパミン輸液を行い, 血圧上昇, 利尿を認め, 意識を回復, 血糖値も改善した. 前額部の発汗過多, 両側の外側大腿皮神経領域の感覚障害が出現したが, 1ヵ月後, 食事療法のみで, 血糖コントロール良好となり, 発汗異常および右大腿部の感覚障害は次第に軽快し, 左腓骨神経の運動神経伝導速度も改善した

8. 食事療法にてコントロール不十分な2型糖尿病でのナテグリニドの臨床効果の検討	共著	2001. 04	新薬と臨牀 50巻4号419-423	入院患者14名を対象としてナテグリニド投与前後において、血糖値の日内変動の変化を検討した。朝食後2時間値、昼食後2時間値、夕食前血糖値を有意に低下させ有用であった。外来患者41名を対象としてナテグリニド投与1ヵ月前より投与5ヵ月後迄の空腹時血糖値、A1c、1, 5-AGを測定し検討した。空腹時血糖値、HbA1c、1, 5-AGとも投与1ヵ月後から有意な改善を認め、その効果は5ヵ月後まで持続した。副作用として低血糖と胃部不快感をそれぞれ1例ずつ認めたが、重篤な副作用は認めなかった
9. VMH破壊ラットとZDF (fa/fa)ラットでのレプチンの膵ラ島への末梢作用の比較検討	共著	2000. 08	Diabetes Frontier 11巻4号 574	小山 一憲、島袋 充生、丸山 博：VMHにおいて、レプチン過剰発現にても、食餌量及び体重に変化なく、中枢作用は認められなかったが、膵ラ島へは直接的に作用し、TG含有量を減少させることが示唆された。この作用は食餌量の増加により減弱する。白色脂肪組織への作用は、レプチン過剰発現にても変化が認められないため、主に視床下部を介するものと考えられた
10. 糖尿病性足壊疽にて切断した1例	共著	2000. 05	診療と新薬37巻5号678-680	阿部 浩子、小山 一憲：50歳男。糖尿病性神経障害を背景にした壊疽の1例。抗生剤や末梢循環改善剤等の内科的保存療法にて改善なく、右下肢切断に至った。長期間糖尿病を放置しコントロール状態が悪く、左第4趾切断後もfoot careが不十分であり、受傷の原因及び進行にも自覚が乏しかったことが病態の悪化をもたらしたと考えられた
11. 多毛、月経異常、肥満を伴った糖尿病にトログリタゾンが有用であった1例.	共著	2000. 05	医療54巻5号235-238	小山 一憲、斎藤 康洋、青木 誠：18歳女。高血糖と月経不順を主訴に来院。肥満、多毛と男性ホルモン高値を認めた。副腎、卵巣に異常所見は認められず、多嚢胞性卵巣症候群(PCOS)と診断されなかったが、PCOSと同様の内分泌代謝異常を有していた。インスリン抵抗性による高インスリン血症にて男性ホルモン産生過剰となり、治療にトログリタゾンが有効であった
12. 中高年者におけるMultiple risk factor syndromeとその危険因子の検討	共著	2000. 02	大和証券ヘルス財団研究業績集 23号 40-45	小山 一憲、広瀬 寛：中高年男でβ3-ARの遺伝子多型は、正常型118名、Trp64Argのヘテロ変異53名、ホモ変異7名。3群間で年齢、血圧、BMI、FPG、血清脂質、尿酸、インスリン、レプチンに有意差はなかった。FABPの遺伝子多型AA、AT、TTの3群で、中高年男で各々45、103、30名、TT群の頻度は16.8%、T-allele frequencyは0.46。TT群ではFPGが有意に高値、HOMA-R、SBPが高値傾向。男2型糖尿病患者では、TT群やT-alleleの頻度は健常人と同程度。年齢・糖尿病罹病期間やBMIに有意差を認めず、レプチンはTT群で高値傾向であった。FPG、HbA1c、血清脂質、Insulin、PAI-1濃度にも有意差を認めなかった。中高年男でFABP2のAla54Thr多型が血糖高値に関与することが示唆された。

13. 膵ホルモン分泌における細胞内情報伝達機構の解明 α2受容体と膵ホルモン分泌 小山 一憲	単著	1994. 01	慶應医学71巻1号33-45	膵ラ島α2受容体を介するinsulin分泌抑制およびglucagon分泌促進において、cAMPの役割と細胞内アラキドン酸カスケードの役割を検討する目的で、ラット摘出膵灌流にて実験し、以下の成績を得た。1) IBMX刺激によるcAMP上昇下においても、clonidineによるα2受容体刺激にてinsulin分泌は抑制され、この抑制はIAPにて部分的に解除された。2) 膵α細胞のα2受容体刺激でのglucagon分泌促進は、IAPに影響されなかった。3) α2受容体を介するglucagon分泌がmepacrine, ASAおよびcaffeic acidのいずれにおいても抑制さ
14. 甲状腺原発悪性リンパ腫の4症例	共著	1995. 12	静岡赤十字病院研究報15巻1号131-136	小沢 裕理, 小山 一憲, 塩崎 裕士: 全例女で58, 64, 71, 56歳と比較的高齢で、急速な甲状腺腫大を認め、3例に嘔声、2例に呼吸困難を認めた。3例は臨床病期IIEで、2例に縦隔浸潤、3例に頸部リンパ節転移を認めた。1例はIEであった。生検又は術後病理標本より悪性リンパ腫と診断され、橋本病の合併が認められた。全例非ホジキン型B細胞性リンパ腫diffuse typeであった。2例で腫瘍摘出術を施行し、全例にCHOP療法と放射線照射を行い経過良好で再発を認めていない
15. 糖尿病患者での尿中トランスフェリン測定の意義.	共著	1994. 12	静岡赤十字病院研究報15巻1号e131-136	小山 一憲, 佐藤 長人, 岩橋 宏美: 尿中TfとAlbは高い正の相関を認めた。Tf 1mg/g, Cr以上を陽性とした検討では、TfはAlbより早期に検出される例が多くみられた。しかし、Alb 20mg/g, Crに相当するTfを、計算上から求めた1. 5mg/g, Crに仮定すると、早期腎症の診断にはTfとAlbはほぼ同程度の有用度になると思われた。以上より、Tfの測定は早期糖尿病腎症の診断に有用であることが示唆され、腎症進行の管理にも有用であることが示唆された
16. 心因性多飲による水中毒に横紋筋融解症を併発した1症例	共著	1993. 12	静岡赤十字病院研究報13巻1号73-77	
17. 高浸透圧性非ケトン性糖尿病昏睡に横紋筋融解症を併発した1症例	共著	1992. 12	静岡赤十字病院研究報 12巻1号48-51	小山 一憲, 岩橋 宏美, 岡本 晋: 66歳男, 全身倦怠感と食欲不振にて来院した。血糖値736 mg/dl, 尿ケトン体陰性より、高浸透圧性非ケトン性糖尿病昏睡と診断した。入院時より高CPK血症(1, 217 IU/l)および高Myoglobin血症(500 ng/dl以上)を認めたが、横紋筋融解が原因と考えられた。輸液およびinsulin治療にて軽快し、経口血糖降下剤にて血糖コントロール良好となり退院した
18. 高血圧を伴う糖尿病患者における非選択性β遮断剤Nadolol投与の降圧効果および糖, 脂質代謝への影響	共著	1989. 1	臨牀と研究66巻10号3325-3328	

19. 人間ドックにおける肝障害の解析	共著	1995. 1	健康医学10巻2号 126-131	寺田 総一郎, 森下 鉄夫, <u>小山一憲</u> : 平成4年度人間ドック受診者2, 291名を対象に, 肝障害を中心に解析した. 700名に肝障害が認められた. 脂肪肝がそのうち最も多く, 212名, 次にアルコール性肝障害患者が93名にみられた. 又, HBs抗原陽性者は, 17名, 検索可能だった抗HCV抗体陽性者は17名認められた. HBs抗原陽性例では, 肝障害の認められない healthy carrierは, 14例, 抗HCV抗体陽性例では観察されず, 有意にHBs抗原陽性例に healthy carrier症例が多かった (p<0. 001)
20. 劇症1型糖尿病に心膜炎・心筋炎を合併した1例	共著	2008. 12	Diabetes Frontier19巻6号 815-822	黒澤 聡子, 三浦 奈穂子, 加畑 宏樹, <u>小山一憲</u> : 28歳女性, 感冒様症状 (微熱, 倦怠感) の後, 嘔気, 嘔吐, 口渇感, 多尿が出現. 他院受診し胃腸炎と診断され帰宅したが, 嘔吐が持続し腹痛も出現したため, 救急外来を受診した. 糖尿病性ケトアシドーシスと診断され治療開始, 諸検査の結果, 劇症1型糖尿病であった. また心筋逸脱酵素の上昇, 心電図でST上昇, 心エコーで壁運動のびまん性の低下を認め, 心膜炎・心筋炎と診断された. 劇症1型糖尿病の発症にウイルスの関与が示唆された.
21. 抗IA-2抗体陽性の1型糖尿病の1例	共著	2008. 04	Diabetes Frontier 19巻2 号229-235	三浦 奈穂子, 須藤 聡子, 岩本 正照, <u>小山一憲</u> : 15歳, 男性, 10 k g の体重減少, 口渇, 多飲・多尿にて来院. 高血糖 700mg/dl と A1c 高値 12. 4%, 尿ケトン 2+, 抗GAD抗体陰性, 抗IA-2抗体陽性にて, 急性発症 1型糖尿病と診断された. インスリン強化療法を導入されたが, 内因性インスリンは枯渇しており, 血糖値は不安定であった. 抗IA-2抗体は若年発症でより高率に陽性となり, 抗IA-2抗体陽性糖尿病の病態には, インスリン分泌能低下が顕著でインスリン投与量が多いという特徴を有す
(総説) 1. 糖尿病の現況と治療	単著	2014. 12	有病者歯科医療. 23巻4号 252-264	2型糖尿病は進行性にインスリン分泌が低下する. インスリン抵抗性は, 動脈硬化を進行させ, 心血管疾患のリスクを高める. 良好な血糖コントロールの維持は, 糖尿病の進行を防ぎ, 合併症の発症と進展予防に重要である. 欧米ではメトホルミンが第一選択だが, わが国ではインスリン分泌低下型多いので, 薬の選択は個々の症例によって異なる. 多種多様な薬剤を組み合わせ, 個々の症例に合わせたきめの細かい治療が求められている.
2. 糖尿病の足病変 糖尿病足 壊疽を防ぐために	単著	2004. 07	感染防止 14巻4号1-8	糖尿病足病変の原因には, 神経性 (末梢神経障害と自律神経障

<p>3. 糖尿病性合併症 糖尿病に合併する横紋筋融解症</p>	<p>共著</p>	<p>1997. 1</p>	<p>日本臨床 55巻増刊 糖尿病(1) 1016-1020</p>	<p>害) と血管性がある。神経性では、知覚障害のため温痛覚が低下しているために、総称に気づきにくく、また火傷を引き起こしやすいため、容易に悪化する。また位置覚の低下によりバランスが悪くなり、足に過度の荷重がかかり、潰瘍や、胼胝などを形成しやすい。動脈硬化により血流低下を伴うことが多いため、治癒を妨げ、切断に至ることが多い、足切断を防止する最も有効な手段は、教育とフットケアである。</p> <p>小山 一憲, 丸山 博, 猿田 享男: 高血糖高浸透圧症候群や糖尿病ケトアシドーシスなど重症な糖尿病状態では、横紋筋融解症を起こすことがあり、高CK血症やミオグロビン尿を呈する。心電図異常を伴うことが多く心筋梗塞との鑑別を要する。高血糖、高度の脱水、電解質異常、pHの異常などが原因と考えられている。十分な輸液、インスリン治療、電解質の補正で、通常軽快することが多いが、希に筋力低下を起こす事があり、また急性腎不全に至る場合もある。従って、尿量に注意しながら輸液を行い、尿量が確保できない場合は透析が必要になることも</p>
<p>4. 新しい糖尿病診断基準と国際標準化HbA1cの運用について</p>	<p>共著</p>	<p>2010. 12</p>	<p>糖尿病53巻12号1-2</p>	<p>小泉 順二、吉岡 成人、伊藤 博史、五十嵐 雅彦、松井 淳、及川 眞一、島田 朗、寺内 康夫、石原 寿光、<u>小山 一憲</u>、佐藤 麻子、戸邊 一之、稲垣 暢也、西理宏、今川 彰久、小川 渉、江本 政広、和田 淳、岸川 秀樹、吉成 元孝、日本糖尿病学会糖尿病診断基準に関する調査検討委員会</p> <p>2010年7月1日から新しい糖尿病診断基準を施行することを決定した。(I) HbA1cをより積極的に糖尿病の診断に取り入れ、糖尿病型の判定に新たにHbA1c値の基準を設ける。(II) 血糖とHbA1cの同日測定を推奨し、血糖値とHbA1c値の双方が糖尿病型であれば1回の検査で糖尿病と診断可能にして、より早期からの糖尿病の診断・治療を促す。</p> <p>(III) 現行のJDS値で表記されたHbA1c (JDS値) に0.4%を加えた、NGSP値に相当する国際標準化された新しいHbA1c (国際標準値) を以下に示す「運用の実際」に則り使用する</p>

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	佐藤 一道
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド			
生物系 医歯薬学分野 歯学 外科系歯学		口腔外科学一般、臨床腫瘍学、病態検査学			
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要	
(著書)					
1 医師・歯科医師のための口腔診療必携	共著	2010年10月	金原出版株式会社	放射線照射野の歯の取り扱いについて (P232 高戸 毅監修、 <u>佐藤一道</u>)	
2 口腔外科ハンドマニュアル	共著	2011年6月	クインテッセンス出版	初メス体験記 (P184-185 福田仁一 他、 <u>佐藤一道</u>)	
3 5疾病の口腔ケア	共著	2013年3月	医歯薬出版株式会社	がん患者での口腔ケアについて担当 (P50-51 藤本篤士 他、 <u>佐藤一道</u>)	
4 睡眠無呼吸症 広がるSASの診療-	共著	2013年11月	朝倉書店	睡眠外科療法について担当 (P189-193 塩見利明編、 <u>佐藤一道</u>)	
5 オーラルメディシンに基づいた次世代の歯科診療 かかりつけ歯科医にすぐに役立つ初診時のリスク評価	共著	2016年5月	クインテッセンス出版株式会社	口腔内を診る前に配慮すべき事項を解説 (P40-51 片倉 朗 他、 <u>佐藤一道</u>)	
6 臨床のヒント Q&A	共著	2017年6月	医歯薬出版株式会社	糖尿病患者の歯科治療を担当 (P213-215 東京歯科大学学会歯科学報編集部編、 <u>佐藤一道</u>)	
7 Q&A 歯科のくすりがわかる本 2020	共著	2020年5月	医歯薬出版株式会社	感染性心内膜炎の予防と治療に関して (P14 一戸達也編、 <u>佐藤一道</u>)	
(学術論文)					
1 Expression of β Catenin in Rat Oral Epithelial Dysplasia Induced by 4-Nitroquinoline 1-Oxide (査読付)【4NQO発癌ラットにおけるB-カテニンの発現について】	共著	2002年12月	Oral Oncology, 38: 772-778	口腔上皮性異形成の癌化能診断に関する基礎研究。 β カテニンと細胞増殖能に着目して評価した。(データの集積と解析、および本文執筆を担当した) <u>Kazumichi Sato</u> , Yuichiro Okazaki, Morio Tonogi, Yoichi Tanaka, Gen-yuki Yamane	
2 Evaluation of Epithelial Dysplasia at the Surgical Margins in Patients with Early Tongue Carcinoma (査読付)【初期舌癌患者の切除断端の上皮性異形成の評価】	共著	2007年6月	Asian Journal of Oral Maxillofacial Surgery, 19: 89-95	口腔癌周囲の上皮性異形成と上皮性異形成の断端再発に関する臨床研究。(データの集積と症例提供を担当した) Yuichiro Okazaki, <u>Kazumichi Sato</u> , Atsushi Takada, Shigeki Morisaki, Yutaka Watanabe, Yasuhiro Ozawa, Mitsuaki Morimoto, Morio Tonogi, Yoichi Tanaka, Gen-yuki Yamane	
3 Activation of PI3K-AKT Pathways in Oral Epithelial Dysplasia and Early Cancer of Tongue (査読付)【初期舌癌と上皮性異形成におけるPI3K-AKTの活性化】	共著	2009年8月	The Bulletin of Tokyo Dental College, 50: 125-133	DNAチップを用いた口腔上皮性異形成の癌化能診断に関する研究。(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Shinya Watanabe, <u>Kazumichi Sato</u> , Yuichiro Okazaki, Morio Tonogi, Yoichi Tanaka, Gen-yuki Yamane	

4 Feasibility of Bioavailability Testing by Simultaneous Determination of Serum Concentrations of Tegafur and 5-fluorouracil after TS-1 Oral or Tube Administration for Chemotherapy in Oral Cancer Patients (査読付) 【口腔癌患者におけるTS-1投与後のテガフルと5-FUの血清濃度測定による生物学的利用能評価の実現可能性について】	共著	2010年6月	Journal of Health Science, 56: 684-689	抗がん剤の血中、組織内濃度に関する実験的研究。特にTS-1の経口内服後の評価を行ったもの。(データの集積と症例提供を担当した) Mio Nakamoto, Hitoshi Ishigouoka, <u>Kazumichi Sato</u> , Tomohiro Yamauchi, Morio Tonogi, Gen-yuki Yamane, Yoichi Tanaka, Hideaki Ichiba, Takeshi Fukushima, Yosio Inoue
5 Effect of Maxillomandibular Advancement on Morphology of Velopharyngeal Space (査読付) 【上下顎骨前方移動術による咽頭スペースの形態学的効果】	共著	2011年3月	Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, 69: 877-884	顎骨の移動による上気道の変化に関する臨床研究。睡眠時無呼吸症候群の外科療法の奏功背景の解明に着目したもの。(データの集積と症例提供を担当した) Tetsushi Okushi, Morio Tonogi, Takehiro Arisaka, Sayuri Kobayashi, Yusuke Tsukamoto, Hitoshi Morishita, <u>Kazumichi Sato</u> , Chiemi Sano, Shintaro Chiba, Gen-yuki Yamane, Tsuneya Nakajima
6 Expression of cytokeratin 13 and 17 in tongue squamous cell carcinoma and epithelial dysplasia (査読付) 【舌癌と上皮性異形成におけるサイトケラチン13と17の発現について】	共著	2011年5月	Asian Journal of Oral Maxillofacial Surgery, 23: 53-58	口腔上皮性異形成の癌化能診断に関する臨床研究。特にサイトケラチン13と17に着目したもの。(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Sunaki Noguchi, <u>Kazumichi Sato</u> , Gou Yamamoto, Morio Tonogi, Yoichi Tanaka, Tetsuhiko Tachikawa, Gen-yuki Yamane
7 Visual stimuli associated with swallowing activate mirror neurons: an fMRI study (査読付) 【嚥下関連視覚刺激によるミラーニューロンの活性化: fMRIでの研究】	共著	2011年10月	Clinical Dentistry And Research, 35: 3-16	嚥下に関連した視覚を与え、ミラーニューロンの活性化をfMRで検討したもの。(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Yusuke Sanjo, Yutaka Watanabe, Takashi Ushioda, <u>Kazumichi Sato</u> , Morio Tonogi, Shin-ichi Abe, Gen-yuki Yamane
8 Evaluation of superficial oral squamous cell malignancy based on morphometry and immunoeexpression of cytokeratin 13 and cytokeratin17 (査読付) 【形態とサイトケラチン13と17による表層扁平上皮細胞の悪性化評価】	共著	2014年1月	Acta Cytologica, 58: 67-75	口腔細胞診の診断能力向上のための臨床研究 液状化検体細胞診試料を用い、サイトケラチン13と17に着目したもの。(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Mitsumasa Yamashina, <u>Kazumichi Sato</u> , Morio Tonogi, Yoichi Tanaka, Gen-Yuki Yamane, Akira Katakura
9 Mirror neurons activated during swallowing and finger movements: An fMRI study (査読付) 【嚥下、指運動時のミラーニューロンの活性化: fMRIでの研究】	共著	2014年4月	Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology, 26: 188-197	嚥下と指運動でのミラーニューロンの活性化をfMRで検討したもの。(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Motoi Ogura, Yutaka Watanabe, Yusuke Sanjo, Ayako Edahiro, <u>Kazumichi Sato</u> , Akira Katakura
10 Detecting signs of dysphagia in patients with Alzheimer's disease with oral feeding in daily life (査読付) 【経口摂取アルツハイマー患者の嚥下障害の検出】	共著	2014年7月	Geriatrics & Gerontology International, 14: 549-555	経口摂取を行なっているアルツハイマー病患者の嚥下障害を検出する方法に焦点をあてた調査 (研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Emiko Sato, Hirohiko Hirano, Yutaka Watanabe, Ayako Edahiro, <u>Kazumichi Sato</u> , Genyuki Yamane, Akira Katakura

11 The effect of oral appliances that advanced the mandible forward and limited mouth opening in patients with obstructive sleep apnea (査読付)【閉塞性睡眠時無呼吸患者の一体型下顎前方移動型口腔内装置の効果】	共著	2014年7月	Journal of Oral Rehabilitation, 41: 542-554	睡眠時無呼吸症候群に対する口腔内装置に関する診療ガイドライン作成のためのシステマチックレビュー論文。研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Kentaro Okuno, <u>Kazumichi Sato</u> , Takehiro Arisaka, Kyoko Hosohama, Motohiro Goto, Hitoshi Taga, Yasuhiro Sasao, Suguru Hamada
12 Examination of changes in the pharyngeal airway space under anterior traction of the mandible: Influence of detachment of the periosteum during orthognathic surgery (査読付)【顎矯正術における下顎前方移動時の上気道の変化：骨膜剥離の影響について】	共著	2014年10月	Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology, 26: 540-544	顎矯正手術における上気道の変化を、顎骨の骨膜剥離の有無に着目した評価したもの（研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Takehiro Arisaka, Chiemi Ito, <u>Kazumichi Sato</u> , Morio Tonogi, Gen-Yuki Yamane, Tsuneya Nakajima
13 Effects of professional oral health care on reducing the risk of chemotherapy-induced oral mucositis (査読付)【化学療法による口腔粘膜炎のリスク低下に関する専門的口腔ケアの効果】	共著	2014年11月	Supportive Care in Cancer, 22: 2935-2940	癌化学療法における専門的口腔ケアに関する臨床研究。（研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Hirokazu Saito, Yutaka Watanabe, <u>Kazumichi Sato</u> , Hiroaki Ikawa, Yoshifumi Yoshida, Akira Katakura, Shin Takayama, Michio Sato
14 Incidence and risk factors for colorectal neoplasia in patients with oral squamous cell carcinoma (査読付)【口腔扁平上皮癌患者の大腸がんリスクについて】	共著	2014年11月	Colorectal Disease, 16: 888-895	口腔扁平上皮癌患者における下部消化管病変の発生に関する臨床研究。（データの集積と症例提供を担当した) Hiroshi Kishikawa, <u>Kazumichi Sato</u> , Tomohiro Yamauchi, Akira Katakura, Shibahara Takahiko, Nobuo Takano, Jiro Nishida
15 Expression of cytokeratin 14 and 19 in process of oral carcinogenesis (査読付)【口腔の発癌過程におけるサイトケラチン14と19の発現について】	共著	2015年2月	The Bulletin of Tokyo Dental College, 56: 105-111	口腔上皮性異形成の癌化能診断に関する臨床研究。特にサイトケラチン14と19に着目したもの。（研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Kyoko Yoshida, <u>Kazumichi Sato</u> , Morio Tonogi, Yoichi Tanaka, Gen-yuki Yamane, Akira Katakura
16 Cytokeratin 13, cytokeratin 17, Ki-67 and p53 expression in upper layers of epithelial dysplasia surrounding tongue squamous cell carcinoma (査読付)【舌扁平上皮癌周囲の上皮性異形成の上層でのサイトケラチン13と17、Ki-67、p53の発現について】	共著	2015年4月	The Bulletin of Tokyo Dental College, 56: 223-231	口腔細胞診の診断能力向上を見据え、口腔扁平上皮癌周囲の上皮性異形成の上層の細胞の評価検討を行なったもの（研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Akiko Matsuhira, Sunaki Noguchi, <u>Kazumichi Sato</u> , Yoichi Tanaka, Gou Yamamoto, Kenji Mishima, Akira Katakura
17 Oral Cancer Chemoprevention: Current Status and Future Direction (口腔がんのChemopreventionに関する現状と今後)	共著	2016年2月	Journal of California Dental Association, 44: 101-111	口腔扁平上皮癌に関するChemopreventionにおける総論（データの集積と解析、および本文執筆を担当した) Diana V Messadi, <u>Kazumichi Sato</u>

18 An examination of factors related to aspiration and silent aspiration in older adults requiring long-term care in rural Japan (査読付)【日本の地方の長期療養高齢者での誤嚥、不顕性誤嚥に関する検討】	共著	2016年2月	Journal of Oral Rehabilitation, 43: 103-110	高齢者での誤嚥、不顕性誤嚥に関わる要因を検討したもの(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Katsuhiko Sakai, Hirohiko Hirano, Yutaka Watanabe, Haruka Tohara, Emiko Sato, <u>Kazumichi Sato</u> , Akira Katakura
19 Relative factors of late cervical lymph node metastasis in patients with stage I or II oral squamous cell carcinoma (査読付)【口腔扁平上皮癌早期症例の後発リンパ節転移の関連因子】	共著	2016年3月	Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology, 28: 156-1611	口腔扁平上皮癌早期症例の後発リンパ節転移の関連因子を解析したもの(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Yoshifumi Yoshida, <u>Kazumichi Sato</u> , Mira Kin, Taiki Suzuki, Hiroki Bessho, Yoichi Tanaka, Akira Katakura
20 Evaluating the Bethesda System for Liquid-based Oral Cytology (査読付)【口腔の液状化検体細胞診におけるベセスダシステムの評価】	共著	2016年4月	Japanes Journal of Oral Diagnosis / Oral Medicine, 29: 28-35	口腔細胞診でのベセスダ法の診断能を評価したもの(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Taiki Suzuki, Yoichi Tanaka, <u>Kazumichi Sato</u> , Akira Katakura
21 Expression of Cytokeration 13, 14, 17, and 19 in 4 nitroquinoline-1-oxide induced Oral Carcinogenesis in Rat (査読付)【4NQOラット発癌モデルにおけるサイトケラチン13、14、17、19の発現について】	共著	2016年4月	The Bulletin of Tokyo Dental College, 57: 241-251	発癌モデルでの癌化過程におけるサイトケラチンの発現について評価を行なったもの(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Tomoyoshi Saitoh, <u>Kazumichi Sato</u> , Morio Tonogi, Yoichi Tanaka, Gen-yuki Yamane
22 The effects of 2,3-dimercapto-1-propanesulfonic acid (DMPS) and meso-2,3-dimercaptosuccinic acid (DMSA) on the nephrotoxicity in the mouse during repeated cisplatin (CDDP) treatments (査読付)【シスプラチンの腎毒性に対するDMPSとDMSAの効果】	共著	2016年6月	Journal of Pharmacological Sciences, 134: 108-115	マウスを用いたシスプラチンの腎毒性減弱に関する研究(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Yuka Yajima, Mitsuru Kawaguchi, Masanobu Yoshikawa, Migiwa Okubo, Eri Tsukagoshi, <u>Kazumichi Sato</u> , Akira Katakura
23 Preliminary study of temporal change in free flap volume after tongue reconstruction (査読付)【舌再建後の遊離皮弁の変化について】	共著	2017年4月	The Bulletin of Tokyo Dental College, 58: 269-275	舌再建後の遊離皮弁の経時的な変化を検討したもの(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Taiki Suzuki, Ichiro Tanaka, Ryuta Osaka, Akira Baba, <u>Kazumichi Sato</u> , Tomohiro Yamauchi, Takeshi Nomura, Nobuo Takano
24 A study of new cytodiagnosis report format for liquid-based oral cytology in squamous cell carcinoma (査読付)【扁平上皮癌における口腔液状化検体細胞診に対する新規細胞診断法について】	共著	2018年6月	Japanes Journal of Oral Diagnosis / Oral Medicine, 31: 187-192	口腔扁平上皮癌の細胞診の新規診断方法について考察を行なったもの(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Taiki Suzuki, Takayoshi Kikuchi, Yoshifumi Yoshida, <u>Kazumichi Sato</u> , Nobuo Takano, Yoichi Tanaka, Takeshi Nomura
25 Screening of oral potentially malignant disorders with iodine vital staining for outpatients (査読付)【口腔前癌病変におけるヨード生体染色によるスクリーニングについて】	共著	2019年5月	Oral Science International, 16: 75-79, 2019	口腔前癌病変への評価として、口腔扁平上皮癌に応用されるヨード生体染色に焦点をあてたもの(研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Takayoshi Kikuchi, Taiki Suzuki, Takanori Sugiura, Oomura Yuusuke, <u>Kazumichi Sato</u> , Takeshi Nomura

26 The Efficacy of Device Designs (Mono-block or Bi-block) in Oral Appliance Therapy for Obstructive Sleep Apnea Patients: A Systematic Review and Meta-Analysis (査読付)【閉塞性睡眠時無呼吸に対する口腔内装置の一体型と分離型での効果に関するシステマティックレビュー】	共著	2019年9月	International Journal of Environmental Research and Public Health, 16: 3182	睡眠時無呼吸の口腔内装置の形態に関するシステマティックレビュー (研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Hiroyuki Ishiyama, Daichi Hasebe, <u>Kazumichi Sato</u> , Yuki Sakamoto, Akifumi Furuhashi, Eri Komori, Hidemichi Yuasa
27 The Most Effective Amount of Forward Movement for Oral Appliances for Obstructive Sleep Apnea: A Systematic Review. (査読付)【閉塞性睡眠時無呼吸に対する口腔内装置の前方移動量に関するシステマティックレビュー】	共著	2019年9月	International Journal of Environmental Research and Public Health, 16: 3248	睡眠時無呼吸の口腔内装置の前方移動量に関するシステマティックレビュー (研究遂行における指導とデータ解析に対する考察を担当した) Yuki Sakamoto, Akifumi Furuhashi, Eri Komori, Hiroyuki Ishiyama, Daichi Hasebe, <u>Kazumichi Sato</u> , Hidemichi Yuasa
28 Sjogren's Syndrome and ranula development (査読付)【シェーグレン症候群とラヌーラ】	共著	2019年9月	Oral Diseases, 25: 1664-1667	ガマ腫の発生にシェーグレン症候群が関わっていることを問題提示した報告 (データの集積と解析、および本文執筆を担当した) <u>Kazumichi Sato</u> , Yoshifumi Yoshida, Katsuhiko Sakai, Takeo Shibui, Kazuhiko Hashimoto, Akira Baba, Takeshi Nomura
29 Review of systematic reviews on mandibular advancement oral appliance for obstructive sleep apnea: The importance of long-term follow-up (査読付)【閉塞性睡眠時無呼吸に対する口腔内装置に関するシステマティックレビューに関するレビュー: 長期経過観察の重要性】	共著	2020年11月	Japanese Dental Science Review, 56: 32-37	長期経過観察の重要性に焦点をあてた閉塞性睡眠時無呼吸に対する口腔内装置に関するシステマティックレビューに関するレビュー (データの集積と解析、および本文執筆を担当した) <u>Kazumichi Sato</u> , Tsuneya Nakajima
(その他)				
1 フラップ手術時 (唇側側歯槽部、口蓋側埋伏歯、骨隆起) の切開・縫合	単著	2020年6月	日本歯科評論, 932: 44-48	基本的な手術手技の解説 (本文の執筆)
2 口腔・咽頭疾患におけるHPVの関与とワクチンの効果	単著	2021年4月	産科と婦人科, 88: 470-474	HPVと口腔疾患との関連に関する解説 (本文の執筆)
3 一般的な口腔粘膜疾患への対応	単著	2021年4月	デンタルダイヤモンド, 46: 107-111	口腔粘膜疾患に関する解説 (本文の執筆)
(その他) (学会発表)				
1 閉塞性睡眠時無呼吸の治療結果(アウトカム)に対する患者の価値観と意向	—	2020年11月	第19回日本睡眠歯科学会総会・学術集会(東京, Web開催)	睡眠時無呼吸の治療を受ける患者の治療目的を調査した報告 (吉田佳史, <u>佐藤一道</u> , 小松万純, 平賀智豊, 伊藤泰隆, 塚本裕介, 松浦信幸, 野村 武史, 飯村 慈朗, 中島 庸也)
2 閉塞性睡眠時無呼吸(OSA)に対する口腔内装置治療を行う最も有効な前方移動量の検討 システマティックレビュー	—	2020年11月	第19回日本睡眠歯科学会総会・学術集会(東京, Web開催)	OSAに対する口腔内装置の前方移動量に関するシステマティックレビュー報告 (坂本由紀, 古橋明文, 古森重里, 石山裕之, 長谷部大地, <u>佐藤一道</u> , 湯浅秀道)
3 閉塞性睡眠時無呼吸に対する口腔内装置療法における、装置の形態(一体型または分離型)に関する系統的レビューおよびメタ解析	—	2020年11月	第19回日本睡眠歯科学会総会・学術集会(東京, Web開催)	OSAに対する口腔内装置の形態に関するシステマティックレビュー報告 (石山裕之, 長谷部大地, <u>佐藤一道</u> , 坂本 由紀, 古橋明文, 古森重理, 湯浅秀道)

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 居積 晃希
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
医歯薬学		(2) 神経免疫病態学		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特になし				
(学術論文) 1 SIADHを伴い、脳内脱髄様病変を認めた抗NMDA受容体抗体陽性髄膜脳炎の1例(査読付)	共著	平成30年5月	臨床神経学, 2018;58:560-564	抗NMDA受容体脳炎においてSIADHを伴った報告は過去1例のみであるが、本例のように第三脳室周囲の異常信号やADH分泌亢進を呈した報告はない。抗NMDA受容体抗体の関連する自己免疫疾患の病態を考える上で興味深い。 分担：筆頭著者として研究全体のデザインと統括を行い、執筆した 著者：居積晃希、田川朝子、小川朋子、橋本律夫、大塚美恵子、加藤宏之
2 ホルミウムレーザー前立腺核出術で前立腺被膜穿孔を生じ、緊急気管挿管を要した1症例(査読付)	共著	令和元年11月	臨床麻酔, 2019;43:1517-1519	ホルミウムレーザー前立腺核出術(holmium laser enucleation of the prostate; HoLEP)は前立腺体積によらず適応が可能であり、安全性、有効性の面では他術式との比較で明らかに劣る点はなく現在施行例が増えている術式である。今回前立腺肥大に対するHoLEPによる前立腺被膜穿孔を経験したので報告した。 分担：筆頭著者として研究全体のデザインと統括を行い、執筆した 著者：居積晃希、有山淳、正木英世、坂本誠史、花崎元彦
(その他) 学会発表				
1 長期持続性心房細動に対するリズムコントロール治療が心不全コントロールに奏功した心筋症例	-	平成30年2月	第247回日本循環器学会 関東甲信越地方会、東京	慢性心不全の原因となりうる長期持続性AFに対して、積極的なリズムコントロール治療が奏功している症例を経験したので報告した。 居積晃希、福田浩二、佐竹宏之、武田守彦、高田剛史、齊藤 大樹、布田紗彩、兼光 伯法、柴信行
2 無菌性心内膜炎と無菌性疣贅を認め、経過中に脳梗塞と心筋梗塞を発症した血管ペーチェット病の一例	-	平成30年3月	第640回日本内科学会 関東地方会、東京	ペーチェット病による僧帽弁位非炎症性・疣贅性心内膜炎から多発脳塞栓症を発症した。無菌性疣贅の形成をきたしたペーチェット病の報告はなく、極めて稀であり報告した。 居積晃希、高田剛史、武田守彦、布田紗彩、齊藤大樹、佐竹洋之、福田浩二、兼光伯法、柴信行
3 海綿静脈洞部硬膜動静脈瘻コイル塞栓術後に進行性に外眼筋麻痺をきたした一例	-	平成30年6月	第222回日本神経学会九州地方会、佐賀市	硬膜動静脈瘻に対するコイル塞栓有害事象は5年以内の早期のものが知られる。本例のように治療後約20年に渡り遅発性に脳神経麻痺が併発したものはない。遅発性に生じうる機序として慢性虚血、炎症、血栓形成といった要因を想定し報告した。 居積晃希、稲水佐江子、松瀬大、山下謙一郎、山崎亮、吉良潤一
4 シェーグレン症候群による三叉神経障害と鑑別を要したFOSMN症候群の1例	-	平成31年2月	福岡神経免疫研究会、福岡市	FOSMN症候群は2006年にVucicらが提唱した顔面の痺れが頭頸部、上肢へと緩徐に拡大することを特徴とする疾患であるが本邦での報告例は少ない。文献的考察と合わせ本症の1例を報告した。 居積晃希、松下拓也、雑賀徹、渡邊充、山崎亮、吉良 潤一

4 シェーグレン症候群による三叉神経障害と鑑別を要したFOSMN症候群の1例	-	平成31年3月	第225回日本神経学会九州地方会、福岡市	FOSMN症候群は2006年にVucicらが提唱した顔面の痺れが頭頸部、上肢へと緩徐に拡大することを特徴とする疾患であるが本邦での報告例は少ない。文献的考察と合わせ本症の1例を報告した。 居積晃希、松下拓也、雑賀徹、渡邊充、山崎亮、吉良潤一
5 線維軟骨が塞栓源として疑われた脊髄梗塞（線維軟骨塞栓症）の一例	-	令和元年8月	第326回日本内科学会九州地方会、北九州市	本症例は発症時凝固系の亢進がなく、血管リスクの乏しい若年者であったことから、脊椎椎間板の線維軟骨を塞栓源とした脊髄梗塞（線維軟骨塞栓症）の可能性が考えられた。極めて稀な病態であり報告した。 居積晃希、松瀬大、田中弘二、今村裕佑、山崎亮、吉良潤一
6 首下がり症候群を呈した限局性筋炎の2症例	-	令和元年11月	第72回広島医学会総会、広島市	首下がり症候群はパーキンソン症候群などの中枢神経疾患から、頸椎異常、筋疾患と多岐にわたって報告されている。首下がり症状に対してステロイド療法が著効した限局性筋炎の2症例を報告した。 中澤祐未、居積晃希、雑賀徹、町田仁史、荒木武尚
7 経過観察にVSRADが有用で、メフロキン、ミルタザピン併用療法で臨床所見の改善を認めた多発性骨髄腫合併進行性多巣性白質脳症の一例	-	令和元年12月	第107回日本神経学会中国・四国地方会、岡山市	本症の予後は不良とされているが、本例のように発症早期ではメフロキン、ミルタザピンによる薬物療法が有効な可能性がある。また、脳MRI白質条件のVSRADで病巣部に一致した萎縮所見が見られたが、症状の進行に伴いVSRADでの萎縮所見の進行が見られ、本検査が経過観察に有用であると考えられた。 居積晃希、向井達也、雑賀徹、板垣充弘、荒木武尚

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 鈴木 裕
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
外科学、腫瘍学、内視鏡学		内視鏡手術、内視鏡補助下手術、ロボット補助下手術、PEG、医療経済		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 外科医のための術後疼痛管理	共著	1993年12月 31日	総合医学社	日本初の術後疼痛管理に照準を当てた医療者向けの著書である。本書は、疾患別の疼痛管理の基本的な考え方や実際の方法を丁寧に解説している。時代的に術後の疼痛を積極的に議論することはほとんどなかったが、後にERASなどの新しい管理法出現の先駆け的な書物と言える。特に、外科学が命を救うだけでなく、いかに苦痛を少なく効率的に治すかの直接的な方法論を示している。
2 おなかに小さな口	単著	2000年6月1 日	芳賀書店	日本の高齢化率が世界でトップになった時代を背景に、嚥下障害患者への栄養管理法や生と死をどう考えるかをテーマにした一般向けの書物である。筆者は、厚生労働省と胃ろうに関する全国調査を行い日本の高齢者医療の在るべき姿を一般国民の立場から議論することを提案している。出版後、NHKなどの密着取材が入り、ひとの死をどう受け止めるべきかななどの問題提起となった書物である。
3 胃ろうをめぐる一生命の医療と生活の医療	共著	2012年2月	中央公論新社	日本の高齢化とともに、ひとがどう生き、死ぬかといった、従来タブーとされた問題について議論している。日本の生命倫理の中枢をなす医療者対談形式で、具体的な症例を踏まえて論説し、将来の高齢者医療の在り方を議論している。
4 胃瘻の適応と倫理的問題	共著	2014年	Annual Review	今、日本は世界に類を見ない超高齢化を向かえて、栄養補充が必要な終末期認知症患者に積極的な延命治療、すなわち人工的水分栄養療法が必要か否かが議論されている。豊かな生と死は何なのか、日本人にこの難問が投げかけられている。高齢者に限っては、少なくとも従来の生存期間を伸ばすことが医学の絶対的なゴールではなくなっただろうが、逆に明らかに生の継続が可能で、ある程度の生活の質が期待できるにも関わらず、人為的に生を終わらせるというのも多くの問題を孕んでいる。今回、認知症患者の栄養管理の考え方について述べる。

<p>(学術論文) 1 胃全摘後骨障害と閉経の影響に関する実験的検討 (査読あり)</p>	<p>単著</p>	<p>1999年</p>	<p>慈恵医大誌 1999 ; 114 : 77-87.</p>	<p>胃切除後骨障害は、近年診断技術の進歩によって比較的頻度の高い障害であることが判明してきたが、その病態に関しては不明な点が少なくない。また、閉経後骨粗鬆症が社会問題化している状況を踏まえて、胃全摘と閉経が骨に及ぼす影響について実験的検討を行った。</p> <p>ウイスター系壮年雌性ラットを用いて、(1) 対照群、(2) 卵巣摘除群、(3) 胃全摘群、(4) 胃全摘+卵巣摘除群の各群を作成し0週、8週および16週飼後に犠牲死させ、血液生化学、骨塩量、骨形態・骨動態の組織学的検討を行った。胃全摘群と胃全摘+卵巣摘除群は、対象群と卵巣摘除群に比べて血清カルシウム値の低下とアルカリフォスファターゼ値の高値および25(OH)Dの低下、1,25(OH)2Dの上昇を認めた(p<0.01)。また、骨塩量、組織像の検討より、胃全摘群は骨軟化症を主体とした重度の骨障害を認め、さらに卵巣摘除が加わると骨軟化症と骨粗鬆症の混在した障害となり、程度も重症化していた。</p> <p>胃全摘後骨障害は、血清カルシウムおよびビタミンDの吸収障害に伴う骨軟化症を主体とした障害であり、卵巣摘除(閉経)が加わると、骨軟化症と骨粗鬆症の混在したより重度の骨障害へ移行することが示唆された。</p>
<p>2 胃ろう栄養の適応と問題点 (査読あり)</p>	<p>単著</p>	<p>2012年</p>	<p>日本老年医学会誌雑誌 2012;49 : 126-129</p>	<p>今、日本は世界に類を見ない超高齢化を迎えて、栄養補充が必要な終末期認知症患者に積極的な延命治療、すなわちAHNが必要か否かが議論されている。日本人にとって豊かな生と死は何なのか、日本人にこの難問が投げかけられている。高齢者に限っては、少なくとも従来生存期間を伸ばすことが医学の絶対的なゴールではない。しかし、長く生きられてQOLの向上も期待できるのに、最後の悲惨さを憂慮して、最初から生を放棄するのも短絡的と言わざるを得ない。</p> <p>社団法人日本老年医学会が実施主体となって、厚生労働省平成23年度老人保健健康増進等事業「高齢者の摂食嚥下障害に対する人工的な水分・栄養補給法の導入をめぐる意思決定プロセスの整備とガイドライン作成」は、日本人の生と死を真剣に考えようとしている。胃ろうを議論する時、従来の価値基準から脱皮した英断が日本人に求められている。</p>
<p>3 「胃瘻カテーテル交換後の腹膜炎」 医療係争事例から学ぶ (査読あり)</p>	<p>単著</p>	<p>2012年12月</p>	<p>日本医師会 2012.12</p>	<p>著者はNPO法人PDNの理事長を務めていることから、日本全国の胃ろうに関する問題点や事故の情報が頻繁に連絡されてくる。そのような関係から、胃瘻カテーテル交換後の腹膜炎の相談や苦情は多く経験している。この合併症は重篤な病態を惹起し、適切な対応が行なわれない場合には重篤な合併症から死に至らしめられることも少なくない。そこで、医療係争事例から医療者がどのような対応をすべきかを解説した。</p>
<p>4 胸部食道切除後の器械吻合—逆overlap吻合— (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2011年</p>	<p>手術 2011 65 (7) : 1037-1040</p>	<p>食道癌に対して食道切除後の再建法として頸部食道胃管吻合が一般的であるが、縫合不全発生率は消化管手術の吻合で最も頻度が高い。その原因は、胃管の血流が個々の症例の解剖的な位置関係によるものが多く血流障害が一定の確率で生じる、さらには嚥下による物理的な吻合部への影響などが影響している。そこで、筆者らは自動吻合器を用いて簡便に、そして吻合部への緊張の少ない手技を開発したので治療成績を加えて新しい吻合法の可能性について報告した。</p>

<p>5 周術期の絶飲食は必要か？ 特集：外科周術期管理の最前線－術後回復力強化プログラム－（査読あり）</p>	<p>単著</p>	<p>2015年</p>	<p>日外会誌 2015;116(4) : 228-231</p>	<p>従来の外科手術管理において、術前の経口補水や消化管吻合術後に早期経口栄養摂取を行うことは慣例的に禁忌とされ、その根拠として以下の2点が主張されていた。第一に、開腹手術後3～5日間は生理的に麻痺性イレウスの状態になるので消化管を使用することは危険であるという考え方、第二に消化管吻合部位を創傷治癒が完成するまで安静しておかないと吻合部の縫合不全を誘発する危険性の懸念の2点であった。ところが、ERASプロトコルの台頭により、従来の常識と全く異なり、逆に術前の経口補水や術後早期からの経口摂取を推奨し、さらには腸管運動を促進させるには経口摂取による刺激が最も効果的であるとした。また、ERASプロトコルによって術後合併症と術後在院日数は減少することが明らかとなってきた。現状では、大腸術後では術直後からの消化管使用に関する安全性は確保されているが、上部消化管に関しては現在検討中の段階である。</p>
<p>6 Bisphosphonate incadronate prevents total gastrectomy-induced osteopenia in rats（査読あり）</p>	<p>－</p>	<p>2004年</p>	<p>Bone35 2004;1346-1352.</p>	<p>Total gastrectomy (GX) leads to osteopenia. We examined the effects of bisphosphonate incadronate(INC), a potent inhibitor of bone resorption, on bone characteristics in rats that underwent total GX. EXPERIMENTAL DESIGN: Male Wistar rats were divided into four groups: (1) sham-operation (n=10); (2) total GX control (n=6); (3) total GX with 0.3 mg kg⁻¹ day⁻¹ oral administration of INC (n=7); and (4) total GX with 3.0 mg kg⁻¹ day⁻¹ oral administration of INC (n=7). RESULTS: Total GX significantly impaired bone mineral density; these effects were prevented by treatment with INC. Similarly, in GX control rats, morphometrical changes of femoral metaphysis stained with Villanueva's and Villanueva-Goldner's: bone volume, tissue volume, mineral apposition rate, labeled/bone surface, bone formation rate, osteoid volume, mineralization lag time as well as serum osteocalcin, and urinary deoxypyridinoline demonstrated simultaneous existence of both osteomalacia and osteopenia; these impairments were also prevented by INC. However, GX-induced decrease in serum levels of calcium as well as 25-hydroxyvitamin D/24,25-dihydroxyvitamin D and the increase in 1,25-dihydroxyvitamin D were not prevented by administration of INC. CONCLUSIONS:</p>

				<p>These results enhance the understanding of the unique pathophysiology of both osteomalacia and osteoporosis induced by total GX and suggest the possibility of using INC as preventive therapy for osteopenia in GX-treated patients.</p> <p>Male Wistar系雌ラットを用いて以下の群を作成しincadronate (INC)の骨への影響を観察した。</p> <p>(1) sham-operation (n=10); (2) total GX control (n=6); (3) total GX with 0.3 mg kg(-1) day(-1) oral administration of INC (n=7); (4) total GX with 3.0 mg kg(-1) day(-1) oral administration of INC (n=7).</p> <p>胃全摘ラットは、骨粗鬆症と骨軟化症を呈していた。Incadronate (INC)は、胃全摘ラットの骨量低下を予防する効果が認められた。</p>
<p>7 Hand-assisted laparoscopic and thoracoscopic surgery (HALTS) in radical esophagectomy with three-field lymphadenectomy for thoracic esophageal cancer (査読あり)</p>	—	2005年	EJSO. 2005;31:1166-1174.	<p>To prove the feasibility of hand-assisted laparoscopic and thoracoscopic surgery (HALTS) for radical esophagectomy with three-field lymphadenectomy to thoracic esophageal cancer.</p> <p>Esophagectomy with three-field lymphadenectomy was performed using HALTS in 19 patients with thoracic esophageal cancer without distant metastasis. Five patients had chemoradiotherapy prior to surgery. All operations were completed successfully without the need for open surgery. Mean surgical time was 476+/-58 min, and mean blood loss during surgery was 343+/-184 mL. All patients started tube feeding and were moved from the intensive care unit to the general surgery ward the day after surgery. Discharge occurred a median of 10 days after surgery. Fifteen patients could return to full time jobs from 8 to 62 days after surgery (median 22 days) and from 1 to 35 days after discharge (median 9 days). Other three could return to daily activities at home soon as well. No major complications occurred, except one anastomotic leak. In terms of lung function, %FEV(1) was not changed whereas %VC was reduced significantly 1 month after surgery. All but two recurrences have been healthy without a relapse for a mean of 289 days. These results suggest that HALTS may be a useful surgical technique to reduce the invasiveness of conventional</p>

				<p>radical esophagectomy with three-field lymphadenectomy for thoracic esophageal cancer.</p> <p>一般に食道癌の術後経過は、縫合不全や肺炎などの合併症発生率が高く、在院日数が延長するケースが多い。今回、われわれは、胸部食道癌に対して、鎖骨を挙上させて上縦郭を郭清する新しい手術を考案したのでその治療成績を検討した。</p> <p>術後合併症発生率は明らかに少なく、特に術後在院日数の短縮が図れた。本法は、食道癌手術の新しい術式になりえることが示唆された。</p>
8 Alendronate Improves Vitamin D-Resistant Osteopenia Triggered By Gastrectomy in Patients With Gastric Cancer Followed Long Term (査読あり)	—	2005年	J GASTROINTEST SURG. 2005;9:955-960.	<p>Gastrectomy/gastric bypass has been used for patients with gastric cancer, and its application is now expanding to treating patients with morbid obesity, the prevalence of which is increasing worldwide. It is well known that gastrectomy leads to osteopenia, but the underlying pathophysiology and optimum treatments for this disorder have not been delineated. We followed 13 patients who showed progressive osteopenia (bone mineral density T-score < -2.4 SD) after gastrectomy/gastric bypass due to gastric cancer and who were resistant to long-term treatment (mean, 6 years) of active vitamin D3 and prospectively studied the effects of alendronate, a bisphosphonate, on osteopenia-related parameters for 2 years. Oral administration of alendronate in addition to vitamin D3 led to remarkable improvement within 2 years, not only in clinical symptoms, such as radial bone fractures and lumbar pain, but also in parameters for osteopenia, including decreased bone mineral density of the lumbar spine (P<0.01), decreased concentrations of calcium (P<0.05), increased urine levels of deoxypyridinoline (P<0.01), increased serum levels of bone-specific alkaline phosphatase (P<0.01), increased serum levels of osteocalcin (P<0.01), and increased serum levels of intact parathyroid hormone (P<0.05), although body weight did not alter. These results suggest that bisphosphonate may</p>

				<p>improve osteopenia after gastrectomy/gastric bypass</p> <p>胃切除後の骨障害は、生命の維持に影響を及ぼすことは少ないが、生活の質の低下は著しく、とりわけ骨折による寝たきりになる問題は深刻である。今回、胃切除後ビタミンD3製剤抵抗性の明らかな骨塩量の低下した14人を対象にアレンドロネートの骨量に及ぼす影響について検討した。</p> <p>アレンドロネートは、胃切除後骨障害患者の骨塩量を増加させ、新しい治療薬になりえる事が示唆された。</p>
9 Covering the Percutaneous Endoscopic Gastrostomy (PEG) Tube Prevents Peristomal Infection (査読あり)	—	2006年	Word Surg 2006;30:1450-1458	<p>Because oropharyngeal bacteria can be brought through the abdominal wall during percutaneous endoscopic gastrostomy (PEG), peristomal infection is one of the most frequent complications in patients who undergo the procedure. This study aimed to determine whether covering the PEG tube with a sheath that could be detached in the stomach could help prevent peristomal infection.</p> <p>In three community hospitals in Japan, data from 449 patients with swallowing dysfunction were prospectively collected between March 2000 and February 2002 for non-covered PEG (n=206) and between March 2002 and February 2004 for covered PEG (n=243). After adjusting for hospital, age, gender, and underlying diseases, covering the PEG significantly reduced peristomal purulent infection compared with non-covered PEG (odds ratio: 0.05; 95% confidence interval: 0.02-0.13). Body temperature, white blood cell count, and C-reactive protein at day 3 after PEG placement, as well as duration of antibiotics usage, were significantly lower or shorter in patients treated with covered PEG than non-covered PEG. In spite of the same frequencies in the two groups of methicillin-resistant Staphylococcus aureus and Pseudomonas aeruginosa in oropharyngeal cultures before PEG placement, these organisms were detected significantly less frequently in peristomal lesions of patients who</p>

				<p>underwent covered PEG. Moreover, 28 patients treated with covered PEG received no antibiotic therapy, and 27 of them had no signs of peristomal infection.</p> <p>These results suggest that covering the PEG tube, with or without providing antibiotic therapy, may prevent peristomal infection in spite of the presence of oropharyngeal bacterial flora after percutaneous endoscopic gastrostomy.</p> <p>経皮内視鏡的胃瘻造設術は世界的に普及した術式であるが、minor complicationとしての創部感染は抗生物質などの治療に抵抗する合併症と言われている。今回、われわれは、従来通りにpull法で胃瘻造設を行う群と柔らかい素材のオーバーチューブを用いて胃瘻する2群間で創部感染発生率を検討した。</p> <p>オーバーチューブを介して造設した胃瘻造設術は、創部感染を予防することが示唆された。</p>
10 The sky blue method as a screening test to detect misplacement of percutaneous endoscopic gastrostomy tube at exchange (査読あり)	—	2009年	Inter med 2009;48(24):2077-81.	<p>Gastrectomy/gastric bypass has been used for patients with gastric cancer, and its application is now expanding to treating patients with morbid obesity, the prevalence of which is increasing worldwide. It is well known that gastrectomy leads to osteopenia, but the underlying pathophysiology and optimum treatments for this disorder have not been delineated. We followed 13 patients who showed progressive osteopenia (bone mineral density T-score<-2.4 SD) after gastrectomy/gastric bypass due to gastric cancer and who were resistant to long-term treatment (mean, 6 years) of active vitamin D3 and prospectively studied the effects of alendronate, a bisphosphonate, on osteopenia-related parameters for 2 years. Oral administration of alendronate in addition to vitamin D3 led to remarkable improvement within 2 years, not only in clinical symptoms, such as radial bone fractures and lumbar pain, but also in parameters for osteopenia, including decreased bone mineral density of the lumbar spine (P<0.01), decreased concentrations of calcium (P<0.05), increased urine levels of deoxypyridinoline (P<0.01), increased serum levels of bone-specific alkaline phosphatase</p>

				<p>(P<0.01), increased serum levels of osteocalcin (P<0.01), and increased serum levels of intact parathyroid hormone (P<0.05), although body weight did not alter. These results suggest that bisphosphonate may improve osteopenia after gastrectomy/gastric bypass</p> <p>. 胃瘻カテーテル交換における胃内留置確認法であるSky blue法の感度や特異度などを検討することによって本法の有用性を検討した。</p> <p>対象は、胃瘻カテーテル交換患者。研究デザインは多施設共同診断研究。評価は胃内留置の有無を内視鏡で確認し、Sky blue法の判断と比較し、Sensitivity、Specificity、Positive predictive value、Negative predictive valueについて95%信頼区間内とともに算出する。対象は961例（平均年齢：78.7歳±12.1歳、性別：男/女=390(40%)/571(60%)。誤挿入は4例、Sky blue法にて誤挿入疑いは58例であった。Sensitivity: 94% (95%CI: 92~ 95%)、Specificity: 100% (95%CI: 40~ 100%)、Positive Predictive Value: 100 % (95%CI: 100~ 100%)、Negative Predictive Value: 6% (95%CI: 2~ 16%)であった。</p> <p>Sky blue法は、技術的に平易で、特別な器材や技術を必要とせず、経費も安価で賄えることができることより、単に一交換確認方法の域に留まらず、医療費の適正使用や社会貢献の一環になる可能性が示唆された。</p>
11 New double-stapling technique for esophagojejunostomy and esophagogastrostomy in gastric cancer surgery, using a peroral intraluminal approach with a digital stapling system (査読あり)	—	2009年	2009;12(2):101-5. Epub 2009	The present study examined the clinical validity of modified gastrectomy for early gastric cancer, in terms of the results of sentinel node navigation surgery (SNNS), using infrared ray electronic endoscopy (IREE) plus indocyanine green (ICG) staining. ICGをtracerとし赤外線腹腔鏡を用いたSNNS併用の胃癌縮小手術の有用性の検討

<p>12 Primary gastric plasmacytoma refractory to Helicobacter pylori eradication therapy (査読あり)</p>	<p>—</p>	<p>2009年</p>	<p>Dig Endosc. 2009;21:37-9.</p>	<p>We described our experience with eradication therapy for a patient with H. pylori-positive gastric plasmacytoma. No general consensus has been established regarding the effects of H. pylori eradication therapy on plasmacytoma. Our patient was rare case and a few reports were seen in the english literatures.</p> <p>A 49-year-old woman underwent upper gastrointestinal endoscopic examination for epigastric discomfort, revealing giant folds on the greater curvature of the stomach. Histological examinations of biopsy specimens taken from giant folds showed signs of chronic inflammation, and Helicobacter pylori was also identified. She underwent first-step Helicobacter pylori eradication. On follow-up endoscopy, Helicobacter pylori was not identified. However, endoscopic findings were unchanged and repeated biopsies showed dense infiltration of atypical plasma cells. No proliferation of centrocyte-like cells was seen.</p> <p>Immunohistochemically, plasma cells were positive for κ-chain. Primary gastric plasmacytoma was diagnosed. Total gastrectomy was performed with splenectomy and regional lymph node dissection. The patient remains disease-free as of 6 years postoperatively.</p> <p>消化管原発の形質細胞腫はまれな疾患であり、胃原発は全体の5%程度とされる。MALT lymphomaとの鑑別が困難であるため、確定診断困難例でH. Pylori感染が陽性ならば除菌療法を先行させることもある。これまでの報告では、除菌によって腫瘍が消失した例、除菌にまったく反応しなかった例などがある。</p> <p>H. Pylori陽性の胃形質細胞腫症例に除菌治療を施行したが、十分な効果が得られず外科手術を施行した。H. Pylori陽性胃形質細胞腫の治療法の確立に向けた貴重な1例と考えられる。</p>
---	----------	--------------	----------------------------------	---

<p>13 Early postoperative enteral nutrition is useful for recovering gastrointestinal motility and maintaining the nutritional status (査読あり)</p>	<p>—</p>	<p>2009年</p>	<p>Surg Today. 2009;39:225-30.</p>	<p>The usefulness of enteral nutrition in postoperative nutritional management is known, but the effects on gastrointestinal motility and nutrition have not been elucidated. The purpose of this study was to compare the effects of enteral and parenteral nutrition soon after open abdominal surgery on gastrointestinal motility and nutritional status. Partial resection of rectum models were prepared to compare two types of nutrient administration: enteral nutrition; and total parenteral nutrition. Differences between the effects of nutrition types in terms of gastrointestinal motility and nutritional status were investigated. Enteral nutrition contributed to recovery of gastrointestinal motility and maintenance of nutritional status. Enteral nutrition should be initiated soon after surgery if the gastrointestinal tract is available.</p> <p>消化器術後管理において早期経腸栄養は経静脈栄養と比較して、感染性合併症の減少や入院期間の短縮が報告されている。消化管運動の回復過程や栄養状態をはじめとした消化管生理に関しては不明な点が多い。直腸術後の動物モデルを作成し、栄養投与経路を経腸栄養と中心静脈栄養とした。栄養投与経路の違いが消化管運動、栄養状態に与える影響について検討した。経腸栄養は消化管運動の回復と栄養状態の維持に寄与した。術後急性期においても、消化管を使用できるならば消化管を介した栄養を選択すべきである。</p>
--	----------	--------------	--	--

<p>14 Effects of Gelatinization of Enteral Nutritions on Human Gastric Emptying (査読あり)</p>	<p>—</p>	<p>2010年</p>	<p>Gastroenterology Research. 2010;3(3):106-111</p>	<p>Gastrointestinal side effects, particularly diarrhea, are still the main reasons for discontinuation of enteral nutrition. Gelatinization of liquid meal for the prevention of diarrhea has been reported as effective. The purpose of this study was to investigate the effects of gelatinization of liquid meal on gastric emptying.</p> <p>Ten healthy volunteers were studied two times, with 2-weeks interval between tests. The total calorific value were set at 225 kcal, and 3 test meals were prepared: liquid meal and 2 types of gelatinized meals. These 2 types of gelatinized meals are different viscosity. 13C-sodium acetate(100mg) was thoroughly mixed, and exhaled air was sampled. The results of gastric emptying were expressed as the time of peak excretion(Tmax), absorption were expressed as the area under the 13C02 curve up to Tmax(AUC-Tmax). At the same time, blood samples were collected to measure levels of blood glucose, insulin and gastrin.</p> <p>The mean value of Tmax were 52.0, 77.3 and 85.6 min. Compared to liquid meal, gastric emptying for gelatinized meals was significantly delayed The mean value of AUC-Tmax were 22.7, 28.7 and 33.7%dose, respectively, and no significant differences in absorption were seen. No significant differences existed in blood glucose, gastrin and insulin.</p> <p>Gelatinization of liquid meal delays gastric emptying. Gelatinized liquid meal may be useful for the management of diarrhea accompanied with enteral nutrition without influencing gastrointestinal hormone and blood glucose.</p> <p>臨床的に経腸栄養剤の使用時の逆流性食道炎や下痢などが問題となることがあり、半固形化が有効とされるが、消化管機能に与える影響に関しては不明な点が多い。13C呼吸試験法を用いて半固形化が消化管機能に与える影響について検討した。</p> <p>健常なボランティア10名に、13C標識化合物を混和した液状食と半固形食を試験食として胃排出能と吸収能を評価した。同時に、試験食摂取前と摂取後の血糖、インスリン、ガストリンの血中濃度を測定した。半固形食は胃排出が遅延した。吸収能、血糖、ガストリン、インスリンともに試験食の違いによる差はみられなかった。</p>
--	----------	--------------	---	--

<p>15 Survival of geriatric patients after percutaneous endoscopic gastrostomy in Japan (査読あり)</p>	<p>—</p>	<p>2010年</p>	<p>World J Gastroenterol 2010. 16:5084-5091</p>	<p>AIM: To examine the long term survival of geriatric patients treated with percutaneous endoscopic gastrostomy (PEG) in Japan. METHODS: We retrospectively included 46 Japanese community and tertiary hospitals to investigate 931 consecutive geriatric patients (≥ 65 years old) with swallowing difficulty and newly performed PEG between Jan 1st 2005 and Dec 31st 2008. We set death as an outcome and explored the associations among patient's characteristics at PEG using log-rank tests and Cox proportional hazard models. RESULTS: Nine hundred and thirty one patients were followed up for a median of 468 d. A total of 502 deaths were observed (mortality 53%). However, 99%, 95%, 88%, 75% and 66% of 931 patients survived more than 7, 30, 60 d, a half year and one year, respectively. In addition, 50% and 25% of the patients survived 753 and 1647 d, respectively. Eight deaths were considered as PEG-related, and were associated with lower serum albumin levels (P = 0.002). On the other hand, among 28 surviving patients (6.5%), PEG was removed. In a multivariate hazard model, older age [hazard ratio (HR), 1.02; 95% confidence interval (CI), 1.00-1.03; P = 0.009], higher C-reactive protein (HR, 1.04; 95% CI, 1.01-1.07; P = 0.005), and higher blood urea nitrogen (HR, 1.01; 95% CI, 1.00-1.02; P = 0.003) were significant poor prognostic factors, whereas higher albumin (HR, 0.67; 95% CI, 0.52-0.85; P = 0.001), female gender (HR, 0.60; 95% CI, 0.48-0.75; P < 0.001) and no previous history of ischemic heart disease (HR, 0.69; 95% CI, 0.54-0.88, P = 0.003) were markedly better prognostic factors. CONCLUSION: These results suggest that more than half of geriatric patients with PEG may survive longer than 2 years. The analysis elucidated prognostic factors. 日本の人口構成の急激な高齢化と在宅医療の推進から世界に類を見ない速度で胃ろうが普及している。民間の調査機関によると2007年度の新規造設件数は15万件、交換件数は45万件と報告されている。しかし、本邦における胃ろう造設後の治療アウトカムに関する詳細な検討はほとんどなく、胃ろうに関するエビデンスは人種も医療環境も異なる欧米人のデータに頼らざるを得ないのが現状である。このような状況の中で、日本における胃ろうの適応を構築するためには、わが国独自の治療アウトカムの検討が必須と考えられる。そこで、摂食・嚥下障害およびがん患者を対象に、生存期間と死亡疾患名および家族へのアンケート調査を施行し、疾患別（脳血管障害、神経難病、認知症、がん終末期）患者の胃ろうの適応ガイドラインの作成に向けた礎を構築する。502人の死亡が確認された（死亡率53%）、そのうち7日以内に10人が死亡（全死亡の2.0%）、30日以内に49人が死亡（全死亡の9.8%）、60日以内に105人が死亡（21%）、半年以内に216人が死亡（全死亡の43%）、1年以内に287人が死亡（全死亡の57%）していた。</p>
--	----------	--------------	---	---

<p>16 Laparoscopy-assisted Total Gastrectomy for Advanced Gastric Cancer With Carcinomatous Ascites After S1 Plus Cisplatin Chemotherapy (査読あり)</p>	<p>—</p>	<p>2010年</p>	<p>Surg Laparosc Endosc Percutan Tech 2010.12 20(6):e206-e210</p>	<p>We describe a new double-stapling technique for esophagojejunostomy and esophagogastrostomy, using a peroral intraluminal approach with a digital stapling system, a flexible shaft remote-control stapler - the Surg-ASSIST and Power Circular Stapler 21 mm (PCS). 胃癌胃全摘における経口digital stapling system (Surg-ASSIST and Power Circular Stapler) による食道空腸吻合を2例経験したので報告する。合併症なく経過は良好であった。</p>
<p>17 The effects of Percutaneous endoscopic gastrostomy on quality of llife in patients with Dementia (査読あり)</p>	<p>—</p>	<p>2012年</p>	<p>Gastroenterol research. 2012;7(5):311-323</p>	<p>To examine the effects of percutaneous endoscopic gastrostomy (PEG) on quality of life (QOL) in patients with dementia. We retrospectively included 53 Japanese community and tertiary hospitals to investigate the relationship between the newly developed PEG and consecutive dementia patients with swallowing difficulty between Jan 1st 2006 and Dec 31st 2008. We set improvements in 1) the level of independent living, 2) pneumonia, 3) peroral intake as outcome measures of QOL and explored the factors associated with these improvements. Till October 31st 2010, 1,353 patients with Alzheimer' s dementia (33.1%), vascular dementia (61.7%), dementia with Lewy body disease (2.0%), Pick disease (0.6%) and others were followed-up for a median of 847 days (mean 805 ± 542 days). A total of 509 deaths were observed (mortality 59%) in full-followed patients. After multivariate adjustments, improvement in the level of independent living was observed in milder dementia, or those who can live independently with someone, compared with advanced dementia, characterized by those who need care by someone: Odds Ratio (OR), 3.90, 95% confidence interval (95%CI), 1.59 - 9.39, P = 0.003. Similarly, improvement of peroral intake was noticed in milder dementia: OR, 2.69, 95%CI, 1.17 - 6.17, P = 0.02. Such significant associations were not observed in improvement of pneumonia. These results suggest that improvement of QOL after PEG insertion may be expected more in milder dementia than in advanced dementia.</p> <p>PEGに関する日本人の原疾患別、重症度別の詳細な検討はない。このような状況で、日本における認知症患者への胃ろうの適応ガイドラインを構築するためには、認知症患者の原疾患、重症度（進行度）別の治療アウトカムを検討する。特定非営利活動法人PEGドクターズネットワークの理事を務める104名の推薦する地域の中核病院50施設）において、2006年1月から008年12月までの期間中に胃ろうを施行した認知症患者を対象に以下の検討を行う。① 疾患名、② 認知症の重症度（進行）、③ 年齢（65歳以上）、④ 性別、⑤ 胃ろう施行日、⑥ 胃ろう造設時の状態、⑦ 2010年10月の時点での生存の有無、⑧ 術後30日以内の死亡率、⑨ 半年後と1年後の生存率、⑩ 生存期間、⑪ 死亡時の疾患名、⑫ QOL評価（嚥下機能の改善度、生活場所）多変量解析において、男性、高齢、BUN高値、アルブミン低値、糖尿病が予後不良因子として浮かび上がった。なお、本研究は厚生労働省の研究助成金を使用した。</p>

<p>18 A case of mediastinal goiter treated surgically using a clavicle-lifting technique (査読あり)</p>	<p>—</p>	<p>2015年</p>	<p>International Journal of Surgery Case Reports 2015; 16: 12-14</p>	<p>Introduction: Mediastinal goiter is a benign disease, which is defined as a goiter with the greater portion of its mass lying below the thoracic inlet. It is controversial whether the cervical approach is the best approach for all mediastinal goiter surgeries. Case Presentation: A 71-year-old woman presented with respiratory discomfort during exertion. Computed tomography (CT) revealed a mediastinal goiter extending to the arch of the aorta. Surgical resection was performed using a clavicle-lifting technique. The excised specimen was 13x10x5 cm in size and weighed 220 g. The pathological diagnosis was nodular goiter. Discussion: The clavicle-lifting technique is a simple and safe technique that involves lifting the clavicles with a pediatric extension retractor (Kent Retractor Set, Takasago Medical Industry, Tokyo, Japan). This is a good choice for surgery on upper mediastinal lesions such as mediastinal goiters as it obviates the need for a median sternotomy. Conclusion: Although further study is necessary, it appears that a transcervical approach using the clavicle-lifting technique may be an acceptable treatment for mediastinal goiters that extend to the aortic arch.</p> <p>症例は71歳, 女性. 主訴は労作時の呼吸苦で, CT上, 大動脈弓部に達する巨大縦隔内甲状腺腫を認めたため手術を行った. 鎖骨拳上法を用い切除可能であった. 摘出検体は大きさ13x10x5cm, 重さ220gで, 病理診断は結節性甲状腺腫であった. 今回, 縦隔内甲状腺腫に対し鎖骨拳上法を用い胸骨縦切開をせずに切除可能であった症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する.</p>
---	----------	--------------	--	---

<p>19 Percutaneous endoscopic sigmoidopexy for sigmoid volvulus (査読あり)</p>	<p>—</p>	<p>2015年</p>	<p>A case report. International Journal of Surgery Case Reports; 17: 19-22</p>	<p>Introduction: Sigmoid volvulus often recurs and it is controversial whether preventive surgery should be performed in recurrent cases, especially in elderly and high-risk cases. Herein, we report a case of successful endoscopic sigmoidopexy using fixation to the abdominal wall. Case presentation: The patient was an 86-year-old woman with multiple system atrophy, cerebral infarction, and disuse syndrome. She was admitted to our hospital with a recurrent sigmoid volvulus. Since surgery was considered high-risk, percutaneous endoscopic sigmoidopexy with fixation to the abdominal wall was indicated. Discussion: Percutaneous endoscopic sigmoidopexy was performed for this high-risk case with recurrent sigmoid volvulus. This procedure is advantageous in that suture removal is not necessary because the fixation sutures are buried subcutaneously. Reviewing the relevant literature, we believe that this is the first case of percutaneous endoscopic sigmoidopexy using abdominal wall fixation with buried sutures. Conclusion: Although further experience is necessary, percutaneous endoscopic sigmoidopexy may be an acceptable treatment for recurrent sigmoid volvulus in high-risk patients.</p> <p>症例は86歳、女性。多系統萎縮症、脳梗塞のため寝たきり。繰り返すS状結腸捻転に対し、胃壁固定具を用いpercutaneous endoscopic sigmoidopexyを行った。また、固定糸を皮下に埋没することにより抜糸が不要となり、固定の抜去時期を心配する必要がなかった。今回、繰り返すS状結腸捻転をもつ高リスク症例に対しpercutaneous endoscopic sigmoidopexyを行い、捻転予防を行った症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。</p>
--	----------	--------------	--	--

<p>20 Laparoscopic cholecystectomy using the PINPOINT Endoscopic Fluorescence Imaging System with intraoperative fluorescent imaging (査読あり)</p>	<p>—</p>	<p>2015年</p>	<p>a case report. International Journal of Surgery Case Reports</p>	<p>We report on a laparoscopic cholecystectomy using the bright field/color fluorescence laparoscope system PINPOINT (Novadaq, Mississauga, ON, Canada). The patient was a 43-year-old man who was diagnosed with cholecystolithiasis. Indocyanine green (ICG) was administered 18 hours prior to surgery, and we used only PINPOINT to perform the laparoscopic cholecystectomy. The advantage of this procedure is that it can be performed while viewing ICG fluorescence in the cystic duct. Since the gallbladder is imaged with this technique, it is also advantageous from the perspective of deciding at which layer to detach the gallbladder from the liver. The operative time was 92 minutes, and blood loss was 5ml. There were no perioperative complications.</p> <p>我々は明視野・カラーの蛍光腹腔鏡であるPINPOINT (Novadaq, Ontario, Canada) を使用して腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した。症例は胆嚢結石症と診断された43歳男性。術前18時間前にICGを投与し、胆嚢管をICG蛍光で確認しながら手術できる利点を利用して、腹腔鏡としてPINPOINTのみを使用して、腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した。PINPOINTを用いることにより、胆嚢が造影されるために、肝臓からの剥離に際し、剥離層の判断に有用であった。手術時間1時間32分、出血量は5mlであり、周術期合併症は認めなかった。</p>
<p>(その他)</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>3</p>				

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 高須賀 茂文				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
ジャーナリズム(特に新聞)に関する実務		マスメディア、英語、翻訳、ニュース、アジア		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1 「砂漠の不死鳥 アラファト」	共訳	平成4年8月	読売新聞社	米ジャーナリストのジョン・ワラクなどが書いたパレスチナ解放運動指導者、ヤセル・アラファト氏の伝記を外報部の一員として翻訳
2 「ブリタニカ国際年鑑」 2000年～2005年	共著	平成12年～17年	TBSブリタニカ	共同執筆者の1人としてアフガニスタン、カンボジア、タイ、ラオス、ミャンマー、パキスタンの項目を担当。
3 "From Marco Polo Bridge to Pearl Harbor: Who was responsible?"	共訳	平成18年12月	読売新聞社	読売新聞長期連載「戦争責任」の英訳。英字新聞部の一員として翻訳、校閲を担当。
(学術論文)				
1 特にありません。				
(その他)				
1 The Japan News 連載 「私の英語勉強法」	共著	平成24年～26年	The Japan News	連載担当者の一員として、三浦雄一郎、高野登、池谷裕二、竹田いさみ、板東真理子の回を担当。この連載は、その後、読売新聞より電子書籍化されている。
2 "Verification of Comfort Women"	共訳	平成26年	読売新聞社	読売新聞に掲載された従軍慰安婦関連記事を英訳。その後、電子書籍化される。
3 読売新聞掲載記事	単共著	平成2年～11年	読売新聞	外報部記者として多数の記事(日本語)を執筆
4 The Japan News掲載記事	単共著	平成12年～現在	The Japan News	読売新聞社が発行する日刊英字紙の編集、取材記者として多数の記事を執筆(英語)、英訳。

教 育 研 究 業 績 書

氏名 竹蓋 清高

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医師薬学 内科系臨床医学 小児科学		(1) 発達小児科学 (2) 成育医学 (5) 小児保健学 (6) 小児社会医学 (13) 小児循環器学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1 小児科レジデントマニュアル(第3版)	共著	平成27年4月	医学書院	小児科後期研修医, プライマリケア医向けに書かれたマニュアル。「小児の慢性腹痛の鑑別/メッケル憩室」及び「小児のけいれんの鑑別/小児マスターベーション」の症例を紹介している。 掲載ページ: 11, 231. 編集: 安次嶺 馨, 我那覇 仁 著者: <u>竹蓋清高</u> , 他
(学術論文)				
1 A novel de novo calmodulin mutation in a 6-year-old boy who experienced an aborted cardiac arrest. (査読付) 心停止蘇生後に診断に至った新規のカルモジュリン変異を認めた6歳男児	共著	平成28年9月	HeartRhythm Case Rep. 20巻3号(1):69-72.	心停止にて来院, 蘇生の際に心室頻拍を認めQT延長症候群が疑われた. 遺伝子検査を提出したところ新規のカルモジュリン変異であることが判明した. 掲載ページ: 69-72. 共著者: Takahashi K, Ishikawa T, Makita N, <u>Takefuta K</u> , Nabeshima T, Nakayashiro M.
2 Growing potential of small aortic valve with aortic coarctation or interrupted aortic arch after bilateral pulmonary artery banding. (査読付) 大動脈弓離断/大動脈縮窄に対する両側肺動脈絞扼術の大動脈弁が成長する見込み	共著	平成28年11月	Interact Cardiovasc Thorac Surg. 23巻5号:688-693.	大動脈弓離断/大動脈縮窄の患者10人を対象に, 両側肺動脈絞扼術を行うことで大動脈弁の成長が見込めるかどうかを後方視的に検討した. 大動脈弓離断A型, 大動脈縮窄の患者では大動脈弁の成長が見込まれることが明らかとなった. 掲載ページ: 688-693. 担当: 内容を批判的に吟味した. 共著者: Fuchigami T, Nishioka M, Akashige T, Higa S, Takahashi K, Nakayashiro M, Nabeshima T, Sashinami A, Sakurai K, <u>Takefuta K</u> , Nagata N.
3 心室中隔欠損の自然閉鎖後にstreptococcus pyogenesによる感染性心内膜炎を来した1例 (査読付)	共著	平成30年3月	沖縄県立南部医療センター・こども医療センター雑誌 (1882-2479) 11巻1号Page36-41	自然閉鎖した心室中隔欠損の周囲に, 感染性心内膜炎としては極めて稀な起因菌であるstreptococcus pyogenes感染を起こした症例を報告した. 担当: 内容を批判的に吟味した. 掲載ページ: Page36-41 共著者: 糸数 大吾, 竹蓋 清高, 桜井 研三, 差波 新, 鍋嶋 泰典, 高橋 一浩, 中矢代 真美
4 Oral kyuki-kyogai-to (KKT) for intestinal bleeding in Fontan-associated protein-losing enteropathy. (査読付) (Fontan術後の蛋白漏出胃腸症に伴う消化管出血に対し芎歸膠艾湯が奏効した1例)	共著	令和元年9月	Pediatric International 61巻9号:Page935-937.	Fontan術後の蛋白漏出胃腸症に伴い, 消化管出血を繰り返していた症例に芎歸膠艾湯が奏効した. 掲載ページ: 935-937. 担当: 内容を批判的に吟味した. 共著者: Takahashi K, Sakurai K, <u>Takefuta K</u> , Nakayashiro M.
(その他)				
1 拡張型心筋症を合併した糖尿病Ib型の乳児例	-	平成28年7月	第52回 日本小児循環器学会 総会・学術集会 東京	拡張型心筋症の遺伝子異常と, 糖原病の遺伝子異常を合併した症例について, 筆頭演者として発表した. 竹蓋 清高, 高橋 一浩, 桜井 研三, 差波 新, 鍋嶋 泰典, 中矢代 真美

2 Fontan術後成人期の門脈体循環シャントと高NH3血症を合併した2症例の血行動態	—	平成29年7月	第53回 日本小児循環器学会 総会・学術集会 浜松	Fontan術後遠隔期に、高アンモニア血症を契機に診断に至った門脈体循環シャントの2症例について、その血行動態を考察し、筆頭演者として報告した。 竹蓋 清高, 桜井 研三, 鍋嶋 泰典, 島袋 篤哉, 佐藤 誠一, 中矢代 真美
3 フォンタン術後肝腎症候群にアルブミンとピトレシン持続静注使用にて腎機能改善を示唆された1症例	—	平成29年7月	第53回 日本小児循環器学会 総会・学術集会 浜松	フォンタン術後に発症した肝腎症候群に対し、アルブミンとピトレシン持続静注使用にて腎機能改善を示唆された症例について、筆頭演者として発表した。(筆頭演者を急遽前日に変更した。) 中矢代 真美, 佐藤 誠一, 島袋 篤哉, 鍋嶋 泰典, 桜井 研三, 竹蓋 清高
4 血漿交換療法は川崎病後の巨大冠動脈瘤形成を軽減させるか?	—	平成29年7月	第53回 日本小児循環器学会 総会・学術集会 浜松	沖縄県立南部医療センターにおける川崎病の240症例の遠隔成績をまとめ、筆頭演者として発表した。 竹蓋 清高, 島袋 篤哉, 桜井 研三, 鍋嶋 泰典, 佐藤 誠一, 中矢代 真美
5 両側肺動脈絞扼術後の肺動脈狭窄に対する高耐圧バルーンYoroiの使用経験	—	平成30年1月	第29回 日本Pediatric Interventional Cardiology 学会 学術集会 さいたま	両側肺動脈絞扼術後の肺動脈狭窄に対し、高耐圧バルーンであるYoroiを用いて治療を行った2症例について、筆頭演者として報告した。 竹蓋 清高, 島袋 篤哉, 佐藤 誠一, 西畑 昌大, 塚原 正之, 内田 英利, 中矢代 真美
6 ファロー四徴に対する右室流出路形成術の遠隔成績	—	平成30年7月	第54回 日本小児循環器学会 総会・学術集会 札幌	沖縄県立南部医療センターにおける過去11年のファロー四徴の遠隔成績をまとめ、筆頭演者として発表した。 竹蓋 清高, 島袋 篤哉, 内田 英利, 塚原 正之, 佐藤 誠一, 中矢代 真美, 赤繁 徹, 瀧上 泰, 西岡 雅彦, 長田 信洋
7 沖縄におけるFontan術後成人患者の現状と課題	—	平成31年1月	第22回 日本成人先天性心疾患学会学術集会 岡山	Failing Fontanのシンポジウムセッションにて沖縄におけるFontan術後の15歳以上の40名を後方視的に検討し、筆頭演者として発表した。 竹蓋 清高, 島袋 篤哉, 佐藤 誠一, 西畑 昌大, 塚原 正之, 内田 英利, 中矢代 真美
8 フォンタン術後に合併した先天性門脈体循環シャントに対しバルーン閉塞下逆行性経静脈塞栓術 BRTO を施行した1例	—	令和元年6月	第55回 日本小児循環器学会 総会・学術集会 札幌	フォンタン術後の先天性門脈体循環シャントを来した患者に対しバルーン閉塞下逆行性経静脈塞栓術を施行した症例について、筆頭演者として発表した。 竹蓋 清高, 島袋 篤哉, 佐藤 誠一, 西畑 昌大, 内田 英利, 中矢代 真美

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 竹下 友一郎				
研 究 分 野			研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
呼吸器内科学			臨床呼吸器学	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1) Eosinophilic bronchiolitis successfully treated with mepolizumab (査読付) 好酸球性細気管支炎に対してメポリズマブが著効した一例	共著	2019年10月	The Journal of Allergy and Clinical Immunology : In Practice	概要：好酸球性細気管支炎は、ステロイド全身投与が著効する一方で、減量すると再燃すると言われている。メポリズマブはステロイド減量効果を発揮すると言われている。今回、難治性喘息及び副鼻腔炎合併の好酸球性細気管支炎に対して、集学的治療の中でメポリズマブ著効した一例を報告した。 分担：筆頭著者として研究全体のデザインを統括し、執筆した。 Takeshita Y, Nobuyama S, Kanetsuna Y, Tanaka A, Adachi M, Sato T, Tada Y Available online 31 October 2019
(その他・学会発表等) 1) 全身関節痛を主訴としたANCA関連腎炎・血管炎の1例	—	2014年11月	第224回 日本内科学会東海地方会、名古屋市	竹下友一郎 小野孝彦
2) 進行性両側失明で発症し髄膜血管病変を呈した神経梅毒の48歳男性例	—	2014年6月	第209回 日本神経学会関東・甲信越地方会、千代田区	竹下友一郎 梁成勲 永山富子 塩澤全司 永山正雄
3) ステロイド退薬で代謝失調を呈した薬剤性クッシング症候群の一例	—	2015年11月	第25回臨床内分泌代謝update、東京国際フォーラム	竹下友一郎 金子真也 平馬誠之 山田佳彦
4) Bronchial Thermoplasty治療中に抗酸球性細気管支炎を発症した好酸球性副鼻腔炎合併難治性気管支喘息の1例	—	2016年11月	第21回日本呼吸器内視鏡学会 呼吸器インターベンションセミナー、福山市	竹下友一郎 延山誠一 佐藤哲夫
5) 好酸球性副鼻腔炎合併難治性気管支喘息に併発した好酸球性細気管支炎の1例	—	2017年5月	第57回日本呼吸器学会学術講演会、東京	竹下友一郎 延山誠一 佐藤哲夫
6) Novel treatment of eosinophilic bronchitis with allergic fungal sinusitis using mepolizumab (アレルギー性副鼻腔炎合併の好酸球性細気管支炎に対してメポリズマブが著効した一例)	—	2017年9月	ERS International congress 2017, Milan	Yuichiro Takeshita Seiichi Nobuyama Tetsuo Satou
7) 好酸球性細気管支炎合併の重症気管支喘息に対する集学的治療 ～続報～	—	2017年10月	第22回日本呼吸器内視鏡学会 呼吸器インターベンションセミナー、熱海市	竹下友一郎 金綱友季子 延山誠一 佐藤哲夫

8)25年間介在した気道異物を硬性気管支鏡下に摘出した1例	—	2018年8月	第23回日本呼吸器内視鏡学会 呼吸器インターベンションセミナー、足柄下郡箱根町	竹下友一郎 延山誠一 佐藤哲夫
9)Novel treatment of eosinophilic bronchitis with allergic fungal sinusitis using mepolizumab- One year follow-up (アレルギー性副鼻腔炎合併の好酸球性細気管支炎に対してメボリズマブが著効した一例-1年後フォローアップ-)	—	2018年9月	ERS International congress 2018, Paris	Yuichiro Takeshita, S. Nobuyama, T. Satou
10)当院における進行・再発非小細胞肺癌に対するNivolumabの著効例	—	2018年9月	第113回日本肺癌学会中部支部学術集会、沼津市	竹下友一郎 金網友季子 延山誠一 鎌田捻子 吉田成利 佐藤哲夫

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 吉田 雅康
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
歯学		機能系基礎歯科類・外科系歯学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特になし				
(学術論文) 1歯科金属中の金が原因と考えられた口囲皮膚炎	共著	平成26年6月	日本口腔内科学会雑誌 2014 巻20 1 14-18	う蝕治療の際に作成する金属被覆冠を患者さんに使用したのちに口唇周囲の皮膚に炎症をきたした。経過から補綴処置した金属被覆冠による金属アレルギーを考え、皮膚パッチテスト・補綴物の一部を削合した金属分析を行った結果、金によるアレルギー反応と考えた。口腔内に装着された金属被覆冠をすべて所記したのち口腔周囲の皮膚炎が改善されたcase report. 分担：実患者さんのフォロー 松村真太郎 吉田雅康 井口直彦 野田康平 武田瞬 浮地賢一郎 片倉朗 高橋慎一
(その他 学会発表) 1若年者の歯間乳頭に発生した疣贅型黄色腫の1例	—	令和元年10月	第64回 日本口腔外科学会総会 札幌市	疣贅型黄色腫は口腔粘膜や生殖器に発生することが多い疾患である。好発年齢は50歳代とされており、若年者の歯肉に発現した疣贅性黄色腫の報告はまれである。今回、16歳、男性の左側下顎歯肉に発現した疣贅性黄色腫を経験したので報告した 吉田雅康 吉田成緒 加藤智弘
2蜂窩織炎を呈したPrader willi syndromeの一例	—	平成26年3月	第23回 日本有病者歯科医療学術大会 福岡市	Prader willi syndrome (PWS) は、15番染色体異常により筋緊張低下、性腺発育不全、知的障害、肥満の四徴候を有する症候群である。口腔領域では、エナメル質形成不全、口腔乾燥、齲蝕の主症状に加え口腔衛生管理の不良が特徴としてあげられる。肥満では重度2型糖尿病を合併していることも多い。 今回々は2型糖尿病を有するPWSの頬部蜂窩織炎の症例を経験したので文献的考察を加え報告した。吉田雅康 西山明宏 井口直彦 片倉朗
3急性期病院における脳卒中患者の経口摂取の検討	—	平成25年10月	第19回 日本摂食嚥下リハビリテーション学会 岡山市	急性期病院退院時の経口摂取の割合は50.0%～93.4%とされており、早期の摂食嚥下リハビリテーションが有効とする報告もあります。そこで、入院時の所見によって、退院時経口摂取の可否の推測が可能となれば、摂食・嚥下リハビリテーションの目標設定の一助となると思われる。急性期病院における脳卒中患者の退院時経口摂取可否の予測因子を検出する。吉田雅康 村上正治 佐藤絵美子 三條雄介 酒井克彦 渡辺裕 片山正輝 片倉朗

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 千葉 拓世				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学分野 外科系臨床医学 救急医学		救急医学、薬理学、臨床中毒学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. Medicina 目で見える診療基本手技	共著	平成20年12月	医学書院 Medicina 2008年12月号	救急手技>内科医に必要な救急処置>急性中毒の治療の項目の担当執筆を行った。中毒診療の一般的な流れ、注意すべき事項、施行すべき検査、そして治療法全般を総論として解説した。執筆および原稿の校正を行った。(2008年12月号担当章:急性中毒の治療) http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=32298 著者:千葉拓世、林寛之
2. あなたも名医!もう困らない救急・当直 Ver 1,2,3	共著	第1版平成21年4月 第2版平成24年4月 第3版平成29年8月	日本医事新報社	第4章 胸痛を第1-3版まで担当。救急を得意としない人にも分かりやすく胸痛の診療の流れとピットフォールを解説した。最近大きく流れが変わってきている胸痛のマネジメントをPERCルールやHEART scoreなど最新のエビデンスに基づいて解説した。執筆者として担当項目原稿の執筆および校正を行った。監修:林寛之、著者:千葉拓世、他
3. ER救急診療オンコール翻訳	共著	平成21年7月	丸善	Emergency Medicine oncallというLangeによる出版の翻訳を分担した。担当は第三編の外傷のうち顔面外傷、泌尿生殖器系の外傷、および第五編の中毒救急のうちアセトアミノフェン中毒、アルコール中毒、抗コリン薬中毒、ベンゾジアゼピン中毒に関する章であった。 監訳:箕輪良行、藤谷茂樹 著者:千葉拓世、他
4. レジデントノート 特訓! レジの穴 鑑別診断一本当にその診断でいいの?	共著	平成21年9月	羊土社 レジデントノート 2009年9月号	研修医向け雑誌において、救急外来でどのようなピットフォールがあるかを解説した。鑑別疾患を広く持つことの重要性、患者の訴えを丁寧に受け止めつつそのまま鵜呑みにしないことの重要性を例を挙げながら解説した。執筆者として担当項目の執筆、校正を行った。 2009年9月号935-940ページ 著者:千葉拓世 監修:林寛之
5. 救急医学 感染症の扱い方・抗菌薬の使い方	共著	平成22年1月	ヘルス出版 救急医学 2010年1月号	第11章他科コンサルトする感染症;その適応とタイミングを担当した。救急外来で診療することのある感染症のうちで迅速に他の科にコンサルトが必要な感染症を5例ほどあげて、それぞれの疾患での注意点、治療法について解説を行った。 著者:千葉拓世、林寛之、編集:岩田健太郎
6. 総合診療感染症マニュアル	共著	平成23年8月	医学書院	亀田総合病院総合内科・感染症内科が出版したマニュアル本で第4章救急外来の原則を担当した。 著者:千葉拓世、弥永真之、不動寺純明、監修:八重樫牧人、岩田健太郎監修

7. 亀田総合病院 KAMEDA-ER マニュアル改訂第2版	共著	平成23年11月	診断と治療社	亀田総合病院救急科が発行する救急マニュアルの第2版にて分担執筆を行った。IX 他科救急疾患 1 小児科救急疾患 2 耳鼻咽喉科救急疾患の章を分担した。 編集：葛西猛、著者：千葉拓世、他
8. ERエラーブック翻訳	共著	平成24年4月	MEDSi	Avoiding Cmmon Errors in Emergency MedicineというLWW社出版の本を日本語に分担翻訳した。276-297章までを担当した。 監訳：岩田充永 著者：千葉拓世、他
9. 今日の臨床サポート 熱射病、日射病、熱中症	共著	平成25年4月より 改訂2回	エルゼビアジャパン	今日の臨床サポートというエルゼビアジャパンが監修するオンラインテキストにおいて、熱射病、日射病、熱中症の項目を開始当初より担当した。最新のエビデンスに基づき、簡単に分かるように検査、治療、予防などの解説を行った。改訂版も担当している。 著者：千葉拓世 監修：志賀隆
10. 今日の臨床サポート 偽痙攣、偽意識障害	共著	平成25年4月より 改訂2回 平成31年2月より 交代	エルゼビアジャパン	今日の臨床サポートというエルゼビアジャパンが監修するオンラインテキストにおいて、偽痙攣・偽意識障害の項目を開始当初より担当した。最新のエビデンスに基づき、簡単に分かるように検査、治療、予防などの解説を行った。改訂版も2019年まで担当したが、2019年より担当者交代した。 著者：千葉拓世 監修：林寛之
11. 治療 中毒 x 地域	共著	平成30年2月	南山堂 雑誌「治療」2018 年2月号	雑誌「治療」において中毒の特集で分担執筆を行った。第7章交感神経賦活薬を担当して、覚せい剤、コカイン、危険ドラッグ中毒について一般論、注意点、検査、治療方法を解説した。 著者：千葉拓世 編集：志賀隆
12. 治療 中毒 x 地域	共著	平成30年2月	南山堂 雑誌「治療」2018 年2月号	雑誌「治療」において中毒の特集で分担執筆を行った。第8章を担当して、抗うつ薬、子精神薬、リチウムなどの中毒について一般論、注意点、検査、治療方法を解説した。 著者：千葉拓世 編集：志賀隆
(学術論文) 1. ER型救急医を目指す救急 後期研修医の職業・研修満 足度調査（査読付）	共著	平成22年11月	日本救急医学会雑誌 2010; 21: 889-898	若手救急医の団体であるEMallicanceにてアンケート調査を行い、職業満足度および研修満足度と関連のある因子を探った。職業満足度の低下は救急科から他科への転校を検討する要因となり得、それをあげるためにはストレス因子の低下が大切であることをしめした。また研修満足度を高める為には研修環境の改善が求められることも示した。 この論文において、コンセプトの立ち上げ、デザイン、アンケートの実際の収集、論文ドラフトの校正に関わった。 著者：萩原佑亮、長谷川耕平、渡瀬博子、千葉拓世

2. Emergency airway management in Japan: Interim analysis of a multicenter prospective observational study. (査読付) (日本における緊急気道管理: 多施設前向き観察の中間解析)	共著	平成24年4月	Resuscitation 2012Apr;83(4): 428-433	日本の10の救急施設における挿管について前向きにデータを集め、その実際を描写した。挿管に使用する薬剤やおよび初回挿管成功率はかなりのバラツキがあることを示し、今後の改善の余地があることを示した。 この論文において、企画立案、データ収集、各施設間の連携、論文の校正に関わった。 著者: 長谷川耕平、萩原佑亮、 <u>千葉拓世</u> 、渡瀬博子、Walls RM、Brown DF、Brown CA 3rd
3. Association Between Repeated Intubation Attempts and Adverse Events in Emergency departments: An Analysis of a Multicenter Prospective Observational Study (査読付) (救急外来における繰り返す挿管試技と合併症の関連: 多施設前向き観察研究の解析)	共著	平成24年12月	Ann Emerg Med 2012 Dec;60(6):749-754	日本の11の救急室での挿管を前向きに追跡し、繰り返しての挿管手技のトライと合併症に関連があるかをみた。繰り返しの挿管手技(挿管の失敗)は合併症との関連を認めた。 この論文において、企画立案、データ収集、各施設間の連携、論文の校正に関わった。 長谷川耕平、重光胤明、萩原佑亮、 <u>千葉拓世</u> 、渡瀬博子、Walls RM、Brown DF、Brown CA 3rd
4. Increased incidence of hypotension in elderly patients who underwent emergency airway management: an analysis of a multi-centre prospective observational study. (査読付) (救急外来における緊急気道管理は高齢者においてより低血圧の合併を高める: 多施設前向き観察研究の解析)	共著	平成25年4月	Int J Emerg Med 2013 Apr 24;6:12	日本の13の救急室での挿管を前向きに追跡してデータを解析。高齢者においてはより高い確率で挿管後に低血圧を認めており、注意喚起を促した。 この論文において、企画立案、データ収集、各施設間の連携、論文の校正に関わった。 長谷川耕平、萩原佑亮、今村太一、 <u>千葉拓世</u> 、渡瀬博子、Brown DF、Brown CA 3rd
5. Residency and career satisfaction among Anglo-American model emergency medicine residents in Japan (査読付) (日本におけるER型研修施設での研修医の研修満足度と職業満足度)	共著	平成25年12月	Acte Medicine and Surgery 2013 Dec 16;1(1):45-53.	若手救急医の団体であるEMallicanceにてアンケート調査を行い、職業満足度と研修満足度に関わる因子を探った。日本語で論文となっていた内容を英語論文として投稿した。 この論部において、コンセプトの立ち上げ、デザイン、アンケートの実際の収集、論文ドラフトの校正に関わった。 著者: 萩原 佑亮、長谷川 耕平、 <u>千葉 拓世</u> 、渡瀬 博子
6. Multicentre observational study of adults with asthma exacerbations: who are the frequent users of the emergency department in Japan? (査読付) (成人喘息の増悪に関する多施設観察研究: どんな患者が救急外来を頻回に受診するのか?)	共著	平成27年4月	BMJ open 2015 Apr 28;5(4):e007435.	日本の23の病院での救急外来を受診した喘息患者を過去に振り返ってデータを収集し、その中でどれほどで22%の患者が複数回救急を受診して、トータルでは48%お受診をしていることを示した。また、それら複数回救急を受診している患者では外来での管理がガイドライン通りではなく、喘息管理の改善が必要であることを示唆した。 この論文にてコンセプトの立ち上げとデザイン、実際のデータ収集、各病院間担当者との連携、および論文のドラフトの修正に関わった。 著者: 渡瀬博子、萩原佑亮、 <u>千葉拓世</u> 、長谷川耕平、Camargo CA Jr
7. Quality of care for acute asthma in emergency departments in Japan: a multicenter observational study (査読付) (日本の救急室における急性喘息の管理の質: 多施設観察研究)	共著	平成27年9月	J Allergy clin Immunol Pract 2013 Sep-Oct;1(5):509-515	日本の23の病院の救急外来を喘息で受診した患者のデータを後ろ向きにデータ採取し、救急外来での管理がガイドラインにどれほど準拠しているかを検証した。抗コリン薬の吸入、全身性ステロイドの投与、ピークフローの活用などの部分がまだ十分に使用されていないことを示した。 この論文にてコンセプトの立ち上げとデザイン、実際のデータ収集、各病院間担当者との連携、および論文のドラフトの修正に関わった。 著者: 長谷川耕平、 <u>千葉拓世</u> 、萩原佑亮、渡瀬博子、津川友介、Brown DF、Camargo CA Jr

8. Thoracic Spine Fracture in a Survivor of Out-of-Hospital Cardiac Arrest with Mechanical CPR (査読付) (病院外心肺停止から機械による胸骨圧迫を受けて生存した患者における胸椎骨折)	共著	平成28年12月	Prehosp Disaster Med 2016; 31(6):684-686.	機械的胸骨圧迫装置により蘇生された患者が椎体骨折を起こしていたことを報告するケースレポート。今まで生存した患者で同様の外傷が機械的胸骨圧迫装置の使用で報告されたことはなかった。こういった機会を使用するにあっ縦の注意喚起を行った。 実際の患者の診療を担当して、症例の病歴および経過をまとめる作業を行い、論文の最終的な構成に関わった。 著者：Robert Trevor Marshall, Hemang Kotecha, 千葉拓世, Joseph Tennyson
(その他・学会発表)				
1. ふぐ中毒の症例	—	平成19年2月	第57回日本救急医学会関東地方会、横浜市	日本救急医学会の関東地方会における症例発表。ふぐ中毒でICU管理された1例および軽症例であった同居家族2例の事案を発表した。 代用演者として症例の診療、まとめ、スライドの作成および発表を行った。 演者：千葉拓世 他
2. 溺水患者における肺炎の発生とそのリスクファクター	—	平成19年10月	第35回日本救急医学会総会、大阪市	単施設での過去の溺水症例を追跡し、肺炎発生のリスクファクターを分析した。 代表演者としてデータの収集、解析、発表を行った。 演者：千葉拓世 他
3. 救急気道管理に関する前向き研究：公立小浜病院における予備調査	—	平成22年8月	第38回日本救急医学会総会、東京	日本救急医学会総会にて気道管理に関する他施設前向きデータベース研究を始めるにあたり、小浜病院としてのデータを集めパイロット研究として発表した。 代表演者として研究案の立案、データ集積および解析、スライドの作成、発表を行った。 演者：千葉拓世、大森啓子、萩原佑亮、大淵尚、渡瀬博子、長谷川耕平
4. 救急外来における経過観察室の活用について	—	平成22年8月	第38回日本救急医学会総会、東京	救急外来の経過観察室を設けた後1年間のデータを振り返り、症例の解析を行った。 代表演者として研究の立案、データの集積および解析、スライド作成および発表を行った。 演者：千葉拓世、大森啓子、加藤の紀、長谷川耕平、萩原佑亮、渡瀬博子
5. Toxicus Maximus: Pediatric Edition (極限の中毒：小児バージョン)	—	平成29年9月	American College of Medical Toxicology National Journal Club, アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン	アメリカ中毒学会の全国版オンラインレクチャーにてゲストスピーカーとして小児の超大量中毒について発表し講演した。対象は全米の中毒センターおよび中毒フェローシップを持つ大学病院であった。 4人演者の演者の一人として小児の鉄剤の中毒の歴史的背景、法的要素、および医学的知識について解説をおこなった。 演者：千葉拓世、Rebecca Bruccoleri、Tim Erickson、Michele Burns
6. Three toddlers with Fentanyl exposure (幼児・小児におけるフェンタニル中毒)	—	平成29年12月	New England Regional Toxicology Meeting, アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン	ボストンで行われたアメリカ中毒学会のニューイングランド地方会にて、違法薬物フェンタニルで中毒になった症例を発表した。フェンタニルの定性分析はGC/MS法で行われたが、一般的な分析上の問題や一般的なフェンタニル中毒で予想される症状との乖離等について解説を行った。 演者：千葉拓世
7. Drug compounding: a case with severe adverse effect from compounded clonidine (薬剤調剤：クロニジンの調剤ミスによる重篤な合併症)	—	平成30年3月	New England Regional Toxicology Meeting, アメリカ合衆国マサチューセッツ州ウースター	マサチューセッツ州ウースターで行われたアメリカ中毒学会のニューイングランド地方会にて、薬局で調剤したクロニジンの調剤ミスで著明な中毒を起こした症例を発表し、過去に調剤エラーで起こった問題をまとめて発表した。 演者：千葉拓世

8. Prolonged psychosis from multiple substances ingestion including the novel psychoactive substances aminopropyl benzofuran (APB) and fluoromethamphetamine (FMA) (危険ドラッグAPBとFMA使用後の遷延する精神病症状)	—	平成30年4月	American College of Medical Toxicology, Annual Scientific Meeting 2018, アメリカ合衆国ワシントンDC	アメリカ中毒学会の総会にて、FMAとAPBという危険ドラッグを使用した後、1週間以上続く精神病症状が続いた症例を報告した。この症例では生体試料の分析でFMAとAPBがGC/MS法にて同定されたが、その他に患者さんが持ち込んだ薬物を分析にかけ、その他に多くの基幹薬物の分析と同定が行われた。危険ドラッグの危険性について改めて警鐘を鳴らした。 代表演者として症例の医学的管理、データ集積、解析結果の判定、発表資料の作成および発表を行った。 演者：千葉拓世、Rebecca Bruccoleri
9. Innocent victims of the opioid crisis: Fentanyl exposures in infants and toddlers. (オピオイド危機における思わぬ犠牲者：乳幼児のフェンタニル中毒)	—	平成30年4月	American College of Medical Toxicology, Annual Scientific Meeting 2018, アメリカ合衆国ワシントンDC	アメリカ中毒学会の総会にて、フェンタニルの中毒になった2歳以下の幼い子ども3名をまとめて発表した。成人のフェンタニル中毒がアメリカで蔓延するなか、小さな子どももその影響を受けており、フェンタニル中毒のリスクについて警告を発した。 代表演者として症例の診察、データ集積、分析結果の解説、発表資料の作成および発表に当たった。 演者：千葉拓世、Rebecca Bruccoleri, Michael Toce, Katherine O'Donnell, Michele Burns
10. Favism and Methohemoglobinemia (ファビズム (ソラ豆中毒) とメトヘモグロビン血症)	—	平成30年6月	New England Regional Toxicology Meeting, アメリカ合衆国メイン州ポートランド	メイン州ポートランドで行われたアメリカ中毒学会ニューイングランド地方会にて未診断のG6PD欠損症を持つ子どもがソラマメ入りのコロッケを食べた2日後にメトヘモグロビン血症、溶血発作にて来院した症例を呈示した。海外からの渡航者では出生時スクリーニングがなされておらず、G6PD欠損症が見逃されている可能性があること、そしてその溶血発作はメトヘモグロビン血症と非常の症状が似ていることを呈示し、診療上その危険視に注意をするように促した。 その他G6PD欠損症やその溶血発作について一般的な解説を行った。 代表演者として患者の診療、データ収集、発表資料の作成および発表を行った。 演者：千葉拓世
11. Prolonged Hypertension after Clonidine Overdose (クロニジン中毒後に遷延した高血圧)	—	平成30年12月	New England Regional Toxicology Meeting, アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン	マサチューセッツ州ボストンで行われたアメリカ中毒学会のニューイングランド地方会にて、クロニジンの大量内服御に想定しない高血圧を長時間来した症例を呈示した。クロニジンの中毒における血行動態(半減期)を繰り返し血中濃度を測定することによって測定した。 筆頭演者として症例の診療、データ収集、データ解析、発表資料の作成および発表を行った。
12. Pediatric Potpourri : Toxicology trends in Tots and Teens (小児に関する様々なトピック：幼児および青少年での中毒の傾向)	—	平成31年3月	American College of Medical Toxicology National Journal Club, アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン	アメリカ中毒学会の全国オンラインレクチャーでのスピーカーとして発表。ボタン電池の誤飲に対する新たな治療法を提案した論文を通じてボタン電池誤飲の社会的背景、統計、対応方法、合併症を講演した。 演者：Alex Barbuto, 千葉拓世、Michele Burns, Michael Chary
13. Prolonged psychosis after 4-bromo-2,5-Dimethoxyamphetamine use confirmed by GC-MS (DOB使用後(GC-MSにて確認済み)に遷延した精神病症状)	—	平成31年4月	American College of Medical Toxicology, Annual Scientific Meeting 2019, アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ	アメリカ中毒学会総会にて症例報告。DOBという珍しい危険ドラッグにより長期間精神病症状が続いた症例を発表した。危険ドラッグを長期間使用していたわけではなく、本人もDOBを使用しているという認識がなく、こういった薬剤による危険性を改めて指摘した。 演者として症例の診療、データ収集、プレゼンテーション資料の作成および発表にあたった。
14. Prolonged hypertension, decreased ejection fraction, and pulmonary edema after clonidine ingestion (クロニジン中毒後の遷延した高血圧、心収縮能低下、肺水腫)	—	平成31年4月	American College of Medical Toxicology, Annual Scientific Meeting 2019, アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ	アメリカ中毒学会総会にて症例報告。クロニジンの超大量内服によって予想外の高血圧を来した症例を通じてクロニジンの中毒域における血行動態を分析し発表した。 演者として症例の診療、データ収集と分析、発表資料の作成および発表を行った。

15. ボストンにおける中毒コントロールセンターの取り組み (シンポジウム)	—	令和1年7月	第41回日本中毒学会総会、川越市	日本中毒学会総会でのシンポジウムでの発表。ボストンの中毒コントロールセンターにおける取り組みを日本との対比も含めて紹介した。ボストンでは日本の中毒センターに比べて病院からの相談がより多いことを示し、日本の中毒センターでこれから改善できることがあるのではということを示唆した。 演者としてデータの収集、プレゼンテーション資料の作成、発表を行った。 演者：千葉拓世、志賀隆
16. 米国におけるオピオイド蔓延の隠れた犠牲者	—	令和1年7月	第41回日本中毒学会総会、川越市	日本中毒学会総会での発表。アメリカで経験したフェンタニル中毒の症例をさらにまとめて症例シリーズとして発表した。日本においては麻薬中毒が起こることはあまり多くないが、2才未満の小児は周囲にあるものによって中毒になる可能性があることを注意喚起した。 演者として症例の診療、データの集積、プレゼンテーション資料の作成と発表を行った。 演者：千葉拓世、志賀隆
17. リーガルハイの予期せぬ結末	—	令和1年7月	第41回日本中毒学会総会、川越市	日本中毒学会総会での発表。アメリカで経験した危険ドラッグの中毒の症例シリーズで遷延する精神病症状がリスクであることを改めて紹介した。救急現場での対応として精神病症状が続く場合にこういった薬剤の可能性を検討するように注意喚起した。 演者として症例の診療、データの集積、プレゼンテーション資料の作成と発表を行った。 演者：千葉拓世、志賀隆
18. 未だに無くならないフェンフルラミン・フェンテルミン中毒	—	令和1年7月	第41回日本中毒学会総会、川越市	日本中毒学会総会での発表。オンラインでダイエット薬品を購入しセロトニン症候群になった症例を紹介し、そのリスクについて改めて注意を促した。 演者として症例の診療、データの集積、プレゼンテーション資料の作成と発表を行った。 演者：千葉拓世、志賀隆
19. 中毒診療に強い救急医を育てる：初期研修医および後期研修医教育の検討 (シンポジウム「不断前進、中毒診療」)	—	令和1年10月3日	第47回日本救急医学会総会、東京	日本救急医学会総会での発表。アメリカでの臨床中毒フェロシップを通じて感じたこと、学んだことを通じて日本の救急医の中毒診療のレベルアップ、教育の向上にどのように寄与できるか論じた。 筆頭演者として発表の構想まとめ、発表資料の作成および発表を行った。 演者：千葉拓世、志賀隆
20. 水銀中毒：多数患者発生時の対応	—	令和1年10月3日	第47回日本救急医学会総会、東京	日本救急医学会総会での発表。水銀中毒が起こり多数傷病者が巻き込まれた事案を通じて中毒専門とする医師がどのように貢献できるかを検討して発表した。 筆頭演者として患者の医学的管理、データの収集、発表資料のまとめ、発表を行った。 演者：千葉拓世、志賀隆
21. 救急医かつ中毒専門医なんてどうですか？ (ワークショップ「救急医の新たなアカデミックキャリア」)	—	令和1年10月2日	第47回日本救急医学会総会、東京	日本救急医学会総会での発表。今後救急医がアカデミックキャリアを積む上で中毒の専門医を一つのキャリアパスとして提案し、若手救急医の一つの道として提唱した。 筆頭演者として発表の構想まとめ、発表資料の作成および発表を行った。 演者：千葉拓世、志賀隆
22. クロニジン過量内服におけるToxicokineticsの測定	—	令和1年10月3日	第47回日本救急医学会総会、東京	日本救急医学会総会での発表。クロニジンの超大量内服で予想外の高血圧が遷延した症例を経験した。この症例で血中濃度を頻回に測定して中毒域での薬物血行動態を測定して発表した。 筆頭演者として症例の医学的管理、データの収集および解析、発表資料の作成と発表を行った。 演者：千葉拓世、志賀隆

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	津島 健司
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド			
内科系臨床医学		呼吸器内科学、肺損傷、間質性肺炎、細胞免疫、薬剤性肺炎			
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要	
(著書) 1 最新ARDSのすべて	共著	2010年9月	医歯薬出版株式会社	日本での、統計学的な検討は千葉大学からのもので有り、海外のものが疫学では主となっていることを提示した。全ICU入室患者中、在室中に7.1%の患者が急性肺損傷(ALI)の診断基準を満たし、人工呼吸器装着患者の16.1%にALIが認められ、ALI患者の54%がその診断から3日以内にARDSに移行する。 ・日本の報告では、1993年のARDS発症頻度はICU入室患者の1.8%であった ARDSの疫学の項を担当執筆 津島健司、久保恵嗣 13-18.	
2 最新ARDSのすべて	共著	2010年9月	医歯薬出版株式会社	急性呼吸促迫症候群(ARDS)を発症した患者に対する治療は確立されたものがなく、唯一は低容量人工呼吸器管理のみである。発症早期より、呼吸器管理の下、直接型肺損傷、間接型肺損傷によらずエンドトキシン吸着を施行することで、酸素化の改善を認め、予後の改善を示すことを自験例を元に紹介した。PMX-DHP療法の項を担当執筆 津島健司、小泉知展 319-322.	
(学術論文) 1 Molecular cloning and functional expression of a human peroxisomal acyl-coenzyme A oxidase. 「(査読付)」 ヒトペルオキシゾームアシルCoA酵素の分子クローニングと役割	共著	1994年2月	Biochem Biophys Res Commun. 198: 1113-1118	医学生基礎研究の一環として4年を費やし、ヒト peroxisomal acyl-coenzyme A oxidaseのクローニングと塩基配列の解析を行った。生物の進化に合わせて、その発現がどのように異なるか、その機能解析を行った。cDNAは3083塩基で661のアミノ酸で構成された。ペルオキシゾームの標的シグナルであるthe carboxyl-terminal sequence (Ser-Lys-Leu) を持っていた。ラットとは83%の相同性があり、ヒトの皮膚線維芽細胞に多量に発現し、カタラーゼ活性を持っていた。一方、正常なペルオキシゾームを持たない Zellweger症候群の患者では発現は少なかった。peroxisomal acyl-coenzyme A oxidaseの遺伝子配列を電気泳動を用いて解析した。また、生物進化の過程での発現をウエスタンで蛋白発現を確認した。 Aoyama T, <u>Tsushima K</u> , Souri M, Kamijo T, Suzuki Y, Shimozawa N, Orii T, Hashimoto T.	
2 Roles of P-selectin in inflammation, neointimal formation, and vascular remodeling in balloon-injured rat carotid arteries. 「(査読付)」ラット内径動脈バルーン障害モデルを用いた炎症、新生血管形成、血管リモデリングにおけるP-セレクチンの役割	共著	2000年10月	Circulation. 102:1710-1717	P-セレクチンは、活性化した血小板や内皮細胞への好中球の接着を促進する因子で、冠動脈拡張後の再狭窄などと関連する。ラットのバルーン急性期障害モデルで、P-セレクチンは、障害で露出した部位を覆う血小板表面や外膜周囲の微小血管血管内皮細胞上に発現され、P-セレクチンに対する抗体でその発現や炎症性細胞の浸潤が抑制された。この抗P-セレクチン抗体は、内膜新生や外膜周囲の血管内の炎症を抑制することで血管再狭窄を抑制しうる結果を認めた。すべての病理標本作製および免疫染色を担当した。 Hayashi S, Watanabe N, Nakazawa K, Suzuki J, <u>Tsushima K</u> , Tamatani T, Sakamoto S, Isobe M.	

3 Hypersensitivity pneumonitis induced by spores of <i>Lyophyllum Aggregatum</i> . 「(査読付)」 ブナシメジ胞子(<i>Lyophyllum Aggregatum</i>)による過敏性肺炎	共著	2001年10月	Chest. 120:1085-1093	ブナシメジ栽培従事者に発症するびまん性すりガラス影の原因が、ブナシメジによる胞子であることをブナシメジ胞子を利用したリンパ球刺激試験を利用して、確定した。また、その臨床病態は、感冒と見間違ふほどの軽度のものであり、胸部CTを施行することで、肺野にすりガラス影を指摘できた。気管支肺胞洗浄液では、リンパ球優位な総細胞数の上昇をしめし、リンパ球サブセットであるCD4/CD8比は1以下を示した。これは、日本で過敏性肺炎の70%ほどをしめる夏型過敏性肺炎と同様の所見であった。患者の診察と診断、血液、画像サンプルの収集、研究の方向性、執筆、投稿を行った。 <u>Tsushima K</u> , Fujimoto K, Yamazaki Y, Takamizawa A, Amari T, Koizumi T, Kubo K.
4 Direct hemoperfusion using a polymyxin B immobilized column improves acute respiratory distress syndrome. 「(査読付)」急性呼吸促進症候群に対するポリミキシンBカラムを使用した血液浄化治療	共著	2002年	J Clin Apheresis. 17:97-102	急性呼吸促進症候群(ARDS)に対して、エンドトキシン吸着カラムを使用する体外循環を行うことで、患者の予後の改善が見られることを示した。発症後、可及的速やかに、エンドトキシン吸着を2時間施行し、その結果、血圧の上昇、脈拍数の低下、さらには、酸素可能な改善をしめた。また、その背景疾患として、敗血症性ARDSだけではなく、直接型ARDSに対しても有効性を示す結果となった。患者の選定、表題治療の導入、治療および入院管理、データの収集、執筆、投稿を行った。 <u>Tsushima K</u> , Kubo K, Koizumi T, Yamamoto H, Fujimoto K, Hora K, Kan-nou Y.
5 Chemotherapy for advanced thymic carcinoma clinical response to cisplatin, doxorubicin, vincristine, and cyclophosphamide (ADOC Chemotherapy). 「(査読付)」進行性胸腺癌に対するシスプラチン、ドキソルビシン、ビンクリスチン、サイクロフォスファミドによる化学療法	共著	2002年6月	Am J Clin Oncol. 25:266-268.	進行性胸腺癌に対して、シスプラチン、ドキソルビシン、ビンクリスチン、サイクロフォスファミドによる化学療法を行い、その治療効果を評価した。患者の選定、表題治療の導入、治療および入院管理を行った。 Koizumi T, Takabayashi Y, Yamagishi S, <u>Tsushima K</u> , Takamizawa A, Tsukadaira A, Yamamoto H, Yamazaki Y, Yamaguchi S, Fujimoto K, Kubo K, Hirose Y, Hirayama J, Saegusa H.
6 Phase I trial of Bi-weekly paclitaxel and gemcitabine as second-line therapy for patients with non-small-cell lung cancer previously treated with platinum-based chemotherapy. 「(査読付)」白金製剤を使用した経験のある非小細胞肺癌に対する2週間隔パクリタキセル、ジェムシタビンによる第1相試験	共著	2004年	Medical Oncology. 21:133-138.	白金製剤を使用した経験のある非小細胞肺癌に対する2週間隔パクリタキセル、ジェムシタビンによる第1相試験であり、PS0-2の75歳以下に対して毒性を調べるため、その容量を確定する試験を行った。パクリタキセル 150 mg/m ² 、ジェムシタビン 1000 mg/m ² が最大容量となった。患者の選定、表題治療の導入、治療および入院管理を行った。 Koizumi T, Yoshiike F, Inou H, Hatayama O, Sasabayashi M, <u>Tsushima K</u> , Yamamoto H, Hayasaka M, Kubo K.
7 JTE-607, a cytokine release blocker, attenuates acid aspiration-induced lung injury in rats. 「(査読付)」JTE-607、サイトカイン放出抑制薬はラット塩酸肺障害を改善する	共著	2004年3月	Eur J Pharmacology. 488:231-238.	JTE-607 (サイトカイン放出抑制薬はラット塩酸肺障害において、その薬剤を投与していない群に比べ、肺損傷からの回復が早く、JTE-607は肺損傷に有効な薬剤の可能性がある。動物実験の手伝い、論文作成援助。 Jian MY, Koizumi T, <u>Tsushima K</u> , Kubo K.
8 Effect of ONO1714, a specific inducible nitric oxide synthase inhibitor, on lung lymph filtration and gas exchange during endotoxemia in unanesthetized sheep. 「(査読付)」無麻酔綿羊を敗血症下に置きONO-1714 (特異的iNOS阻害薬)を投与してのリンパ流量および参加の検討	共著	2004年7月	Anesthesiology. 101:59-65.	無麻酔綿羊に6匹はエンドトキシン投与、7匹はエンドトキシン投与間にONO-1714を投与し、平均肺動脈圧、心係数、左房圧、体血圧、肺リンパ流量を5時間後まで測定した。ONO-1714は肺循環には影響を与えず、エンドトキシン投与により肺血管抵抗の上昇などがもたらされた。ONO-1714はこの肺循環を改善し、肺リンパ流量を低下させた。さらに、酸素化の改善効果も示した。動物実験の手伝い、論文作成援助。 Koizumi T, Ogasawara H, Yamamoto H, <u>Tsushima K</u> , Ruan Z, Jian MY, Fujimoto K, Kubo K.

9 Effects of Granulocyte Colony Stimulating Factor (G-CSF) and Neutrophil Elastase Inhibitor (ONO-5046) on Acid-Induced Lung Injury in Rats. 「(査読付)」ラット塩酸肺障害に対する顆粒球増殖因子とONO-5046 (好中球エラスターゼ阻害薬) の効果	共著	2004年12月	Inflammation. 28:327-336.	ラット塩酸肺損傷において、顆粒球増殖因子とONO-5046 (好中球エラスターゼ阻害薬) による効果を検討した。5時間後の肺胞洗浄液と肺組織を評価対象とし、その2剤を投与していない群に比べ、肺損傷からの回復が早く、有効な薬物治療の可能性があった。 動物実験の手伝い、論文作成援助。 Jian MY, Koizumi T, <u>Tsushima K</u> , Kubo K.
10 Activated protein C attenuates acid-aspiration lung injury in rats. 「(査読付)」活性化プロテインCはラット塩酸肺障害モデルを改善する	共著	2005年	Pulm Pharmacol Ther. 18:291-296.	ラット塩酸肺損傷において、活性化プロテインCによる効果を検討した。5時間後の肺胞洗浄液と肺組織を評価対象とし、その薬剤を投与していない群に比べ、肺損傷からの回復が早く、有効な薬物治療の可能性があった 動物実験の手伝い、論文作成援助。 Jian MY, Koizumi T, <u>Tsushima K</u> , Fujimoto K, Kubo K.
11 HLA class II DPB1, DQA1, DQB1, and DRB1 genotypic associations with occupational allergic cough to Bunashimeji mushroom. 「(査読付)」職業性アレルギー性咳嗽に関連するHLAクラスII DPB1, DQA1, DQB1, and DRB1ゲノタイプ	共著	2005年5月	Tissue Antigens. 65:459-466	ブナシメジ栽培従事者の2/3がアレルギー様の呼吸器症状を来すのに対し、1/3は全くの無症状である。アレルギー反応のある従事者はCD4陽性、Th2/Th1比増加を示し、アレルギー反応のある従事者とHLA class IIアレルであるDPB1, DQA1, DQB1とDRB1の関連性を調査した。結果、アレルギーのないDQA1*0103, DQB1*0601, and DRB1*0803の頻度はアレルギーのある従事者にて高い頻度であった。(DQA1*0103: 57 vs 25%, DQB1*0601: 49 vs 14%, and DRB1*0803: 29 vs 0%)。特に、DRB1*0803は、各施設ごとのアレルギーのある従事者ではアレル発現頻度は低下していた。 遺伝子解析用の収集した血液サンプルの提供と論文内容確認作業。 Suzuki K, Tanaka H, Sahara H, Tanaka N, Tamura Y, Naruse T, Inoko H, <u>Tsushima K</u> , Kubo K, Abe S, Sato N.
12 Hypersensitivity pneumonitis due to Bunashimeji mushrooms in the mushroom industry. 「(査読付)」キノコ工場におけるブナシメジによる過敏性肺炎	共著	2005年7月	Int Arch Allergy Immu. 137:241-248	ブナシメジ栽培従事者にその胞子が原因で過敏性肺炎を発症するという既報を元に、実際のブナシメジ栽培2工場の従業員を対象にその発症割合、自覚症状の有無、リンパ球刺激試験陽性の有無を確認した。前もって診断されていない114名の従業者に対し、ブナシメジ胞子によるリンパ球刺激試験をスクリーニングとして行い、陽性患者をノミネートし、KL-6, SP-D, SP-Aのいずれかが上昇している方を対象に、さらなる精査として胸部CT、気管支鏡検査、および肺機能検査を行った。この結果、4名が確定診断にいたり、すべての方が、ブナシメジを袋に詰める作業の方であった。また、胸部CTやリンパ球刺激試験だけでなく、KL-6, SP-D という間質性肺炎マーカーもスクリーニングとして有用であった。 キノコ工場に赴き、従業員からの問診、採血を行い、発症している方の選定、精査の呼びかけ、検査、データの収集、執筆、投稿を行った。 <u>Tsushima K</u> , Fujimoto K, Wakamatsu T, Kawakami S, Koizumi T, Kubo K.
13 Risk factors for Hospital-required bacteremia. 「(査読付)」院内帰結賞のリスク因子	共著	2005年11月	Intern Med. 44:1157-1162.	306名の入院患者を後方視的に観察し、年齢、CRP、生化学検査、中心静脈カテーテルの有無、尿カテーテルの有無をしらべた。67名が血液培養陽性で、年齢、好中球、血小板、総タンパク、アルブミン、コリンエステラーゼが血液培養陽性患者と陰性患者で有意差が出た。画商状態と鼠蹊部寄りのCVカテーテル留置は血液培養陽性の高いリスクで、多変量解析でも尿カテーテル留置とCVカテーテル留置はリスクファクターとなった。 患者の選定、治療および入院管理さらに論文の指導を行った。 Yoshida T, <u>Tsushima K</u> , Tsuchiya A, Nishikawa N, Shirahata K, Kaneko K, Ito K, Kawakami H, Takagawa S, Suzuki T, Kubo K, Ikeda S.

14 Relationship between Calcium-Activated Chloride Channel 1 and MUC5AC in Goblet Cell Hyperplasia Induced by Interleukin-13 in Human Bronchial Epithelial Cells. 「(査読付)」ヒト気道上皮細胞のIL13誘導杯細胞過形成におけるMUC5ACとカルシウムチャンネル1 (CLCA1)の関係	共著	2006年2月	Respiration. 73:347-359.	ヒト気道上皮細胞に対してIL13刺激を加え、14日21日目にCLCA1とMAC5AUのmRNAとタンパクの発現と同じく、気道上皮細胞、杯細胞過形成を助長した。クロライドチャンネル阻害薬はCLCA1、MUC5AUタンパクとmRNA発現量、杯細胞過形成細胞数を抑制した。IL-13 receptor alpha(1)抗体もその細胞数を抑制した。 実験の評価、論文推敲。 Yasuo M, Fujimoto K, Tanabe T, Yaegashi H, <u>Tsushima K</u> , Takasuna K, Koike T, Yamaya M, Nikaido T.
15 Comparison of bronchoscopic diagnosis for peripheral pulmonary nodule under fluoroscopic guidance with CT guidance. 「(査読付)」肺末梢結節に対するCTガイド気管支鏡の診断精度の比較	共著	2006年4月	Respir Med. 100:737-745	肺野の微小結節に対する気管支鏡検査で、通常の透視を使用した群とリアルタイムに画像を見られるCTを用いた場合の診断精度の違いを検討した。82例のCTによる群と78例の通常透視の群において、診断精度は62.2%と52.6%であり、腫瘍径が、15mm以下になるとリアルタイムCT下での気管支鏡検査の診断精度が有意差を持って上昇したが、10mm以下では、診断精度はそれほど上がらないため、施行するならばCT下での気管支鏡検査を推奨する結果となった。 胸部CTで肺末梢に結節を認めた際に、診断目的にCTガイド下ないしは透視下で気管支鏡をすべて施行、その病理結果を解析し、診断精度を解析、その結果を執筆、投稿。 <u>Tsushima K</u> , Sone S, Hanaoka T, Takayama F, Honda H, Kubo K.
16 Polymyxin B immobilized column is effective for hydrochloric acid-induced lung injury in rats. 「(査読付)」ラット塩酸肺障害モデルに対するポリミキシンBカラムの有効性	共著	2006年5月	Eur J Pharmacol. 535:270-279	ラットの塩酸肺腫モデルに対して、エンドトキシン吸着療法(PMX)は効果を認めるかの検討を行った。塩酸ないしは水を気管内に投与したラットに対して30分、120ml/分の血液循環流量で体外循環を行った。塩酸群をPMX+、PMX-に、水投与群も同様に分けた。体外循環後、1、3時間に採血、血圧、血ガス、肺胞洗浄を行い、PMX+塩酸群は塩酸だけの群より肺実質の炎症が改善し、炎症性サイトカイン産生も低下していた。血圧や酸素化能の改善もPMX+塩酸群は塩酸投与群より有意差を持って示した。 実験アイデアの作成、ラットモデル実験の遂行、データ回収、データの測定、執筆、投稿。 <u>Tsushima K</u> , Koizumi T, Yoshikawa S, Obata T, Kubo K.
17 Usefulness of preoperative endobronchial ultrasound for airway invasion by mass around trachea: esophageal cancer and thyroid cancer. 「(査読付)」気管周囲への食道がん、甲状腺がんの浸潤に関して術前気管エコーの有効性	共著	2006年5月	Respiration. 73:651-657.	気管へ浸潤が疑われる食道癌、甲状腺癌患者において、気管エコー、胸部CT、胸部MRIを施行し、その有効性を独立して評価した。54名を評価し、17名は精査の結果手術は中止となり、それ以外の頰榮検討において、気管エコーは胸部CTに比べて、有意差をもってその正確性が得られた。 治療プロトコルの作成、実際の患者治療、画像、採血評価、執筆、投稿。 Wakamatsu T, <u>Tsushima K</u> , Yasuo M, Yamazaki Y, Yoshikawa S, Koide N, Fujimori M, Koizumi K.
18 Clinical differences in the Global Initiative for Chronic Obstructive Lung Disease Stage 0. 「(査読付)」慢性閉塞性肺疾患ステージ0の臨床的検討	共著	2006年8月	Respir Med. 100:1360-1367	低線量CTと肺機能検査を利用して、慢性閉塞性肺疾患の分類であるstage 0と健常者の比較検討を行った。気腫の程度は、胸部CTの特定3スライスを使用して評価した。1359人の男性と888人の女性に、検査は施行され、1076人の男性と107人の女性が喫煙の既往を認めた。呼吸器症状のある722人のうち、71人がstage 0に含まれた。正常者の多くは、気流制限を示した。喫煙と気腫の程度は、stage 0でたかく、気流制限も強く表れた。特に、タバコを吸うstage 0の方がすわないstage 0より強く表れた。 検診データからの患者抽出、胸部CT読影と解析、検査結果の解析、論文執筆と投稿。 <u>Tsushima K</u> , Sone S, Yoshikawa S, Furuya S, Yasuo M, Suzuki T, Yamazaki Y, Koizumi T, Fujimoto K, Kubo K.

19 Endobronchial argon plasma coagulation for the management of post-intubation tracheal stenosis. 「(査読付)」気管挿管後の狭窄に対する気管支鏡によるアルゴンプラズマ焼灼	共著	2006年9月	Respirology. 11:659-662.	気管支鏡を使用して、気管狭窄をきたした2症例の検討をおこない、アルゴンプラズマ凝固は、副作用や合併症なく行える簡便な方法であった。 気管支鏡検査の手技、治療評価、論文推敲。 Yasuo M, Tanabe T, <u>Tsushima K</u> , Nakamura M, Kanda S, Komatsu Y, Tamazaki S, Ito M, Furuya S, Yoshikawa S, Kubo K, Kawakami S, Yamazaki Y.
20 Therapeutic effects for hypersensitivity pneumonitis induced by Japanese mushroom (Bunashimeji). 「(査読付)」ブナシメジによる過敏性肺炎の治療	共著	2006年10月	Am J Ind Med. 49:826-835	ブナシメジによる過敏性肺炎22症例の臨床経過を、完全回避群、マスク着用群、マスク+プレドニン内服群の間でKL-6、SP-D、胸部CT、気管支鏡検査を治療前後で行ない、評価した。完全回避群は、リンパ球刺激試験の値も低下した。マスク着用群は、KL-6、SP-Dだけでなく、画像的にすりガラス影の改善効果も乏しく、プレドニンを内服することでそれらが著明に低下した。仕事を継続するのであれば、早期からのプレドニンの内服が治療として推奨される。治療プロトコルの作成、実際の患者治療、画像、採血評価、執筆、投稿。 <u>Tsushima K</u> , Furuya S, Yoshikawa S, Yasuo M, Yamazaki Y, Koizumi T, Fujimoto K, Kubo K.
21 Relationship between sleep-disordered breathing and lifestyle-related illnesses in subjects who have undergone health-screening. 「(査読付)」検診施行した対象者の睡眠関連呼吸障害と生活習慣病との関連	共著	2006年	Intern Med. 45:891-896.	207名の検診対象者の睡眠呼吸障害をアプノモニターにて低呼吸と無呼吸を検討し、body mass index (BMI)、高血圧、脂質異常、肝機能異常、脂肪肝、糖代謝異常の関連を検討した。29%が睡眠呼吸異常を示し、政情の睡眠呼吸に比べ、BMI、高血圧、高コレステロール血症、空腹時血糖、HbA1cは有意に高値であった。高血圧、高脂血症、耐糖能異常の頻度は肥満のない正常のAHI群、呼吸異常のある群に比べて高血圧の頻度だけが高かった。 研究テーマの発案検討、治療評価、論文推敲。 Okada M, Takamizawa A, <u>Tsushima K</u> , Urushihata K, Fujimoto K, Kubo K.
22 Usefulness of bronchoscopic microsampling to detect the pathogenic bacteria of respiratory infection. 「(査読付)」気道感染の起因菌を同定するための気管支鏡下マイクロサンプリングの有用性	共著	2007年2月	Chest. 131:474-479.	気管支鏡下にマイクロサンプリングを肺炎部分から行い、細菌群菌量を直接測定した。肺炎球菌、インフルエンザ菌、非結核性好酸菌などの定量的な同定が可能であった。 研究発案、気管支鏡検査による検体採取及び論文推敲。 Sasabayashi M, Yamazaki Y, <u>Tsushima K</u> , Hatayama O, Okabe T.
23 Effects of PMX-DHP Treatment for Patients With Directly Induced Acute Respiratory Distress Syndrome. 「(査読付)」急性呼吸促進症候群患者に対するポリミキシンB治療の効果	共著	2007年4月	Ther Apher Dial. 11:138-145	エンドトキシン吸着療法は、敗血症性急性呼吸促進症候群 (ARDS)に有効であるが、直接型ARDSに対しても有効であるかを検討した。38名の直接型ARDS患者に対してエンドトキシン吸着を2時間2日連日行い、治療前後での血圧、脈拍、PF比、好中球や単球の表面マーカーを測定した。30日時点での生存21例、死亡17例で比較検討し、APACHE II、SOFA、肺障害スコアに差は認めず、生存群では、PF比、脈拍、収縮期血圧の改善を認めた。死亡群では、生存群に比べ、エンドトキシン吸着の施行が有意差を持って遅れていた。 患者の選定、表題治療の導入、治療および入院管理、採血データの収集、執筆、投稿を行った。 <u>Tsushima K</u> , Kubo K, Yoshikawa S, Koizumi T, Yasuo M, Furuya S, Hora K.
24 CT findings of early-stage small cell lung cancer in a low-dose CT screening programme. 「(査読付)」低線量CTスクリーニングにおける早期小細胞肺癌のCT所見	共著	2007年5月	Lung Cancer, 56:207-15.	5名の小細胞肺癌患者の最初及び継時的なCT画像を確認した。前例喫煙男性で4人が手術が施行され3人が生存していた。小さなのがった形やないしは多形型は小細胞肺癌の潜行型としてみられ、不整形な形をした結節(vermiform, pinecone-like or tandem-like nodular lesions)はより進行した状態であった。 胸部CT画像の読影。 Sone S, Nakayama T, Honda T, <u>Tsushima K</u> , Li F, Haniuda M, Takahashi Y, Hanaoka T, Takayama F, Koizumi T, Kubo K, Yamada T, Kondo R, Fushimi H, Suzuki T.

<p>25 Bronchoscopy-guided radiofrequency ablation as a potential novel therapeutic tool. 「(査読付)」新規治療法としての気管支鏡ガイドによる高周波アブレーション</p>	<p>共著</p>	<p>2007年6月</p>	<p>Eur Respir J. 29:1193-1200</p>	<p>綿羊を利用して、経気管支鏡的にラジオ波が安全に行えるかを検討し、内部から冷却水が環流できるタイプのカテーテルとないものでどちらが有効か検討した。冷却環流ができないものは、カテーテル先の燃焼効果が強く、出血の合併リスクが高く不向きと判断した。内部冷却環流可能なカテーテルでさらなる検討を行い、最終的に30Wの出力、環流速度を30~40mL/分で、15秒間焼灼、チップの先端温度は50度を目標とすることが最適な治療条件となった。 実験アイデアの作成、綿羊に対して実際に気管支鏡でアブレーション手技を行い、その後の解剖、病理検討、高周波装置のデータ解析、執筆、投稿。さらに、業者とアブレーション開発と特許申請。 <u>Tsushima K</u>, Koizumi T, Tanabe T, Nakagawa R, Yoshikawa S, Yasuo M, Kubo K.</p>
<p>26 Second-line chemotherapy of platinum compound plus CPT-11 following ADOC chemotherapy in advanced thymic carcinoma: analysis of seven cases. 「(査読付)」進行胸腺癌7例におけるADOC治療後の白金製剤+CPT11のセカンドライン治療</p>	<p>共著</p>	<p>2007年7-8月</p>	<p>Anticancer Res. 27:3005-3008.</p>	<p>進行胸腺癌7例におけるADOC治療後の白金製剤+CPT11のセカンドライン治療を後方視的に確認した。部分寛解は2名に認め、ほかの2名は腫瘍の明甘肅省を認めた。 入院患者に対する化学療法施行とその管理を行う Kanda S, Koizumi T, Komatsu Y, Yoshikawa S, Okada M, Hatayama O, Yasuo M, <u>Tsushima K</u>, Urushihata K, Kubo K, Sasabayashi M, Takamizawa A.</p>
<p>27 Long-term follow-up study of a population-based 1996-1998 mass screening programme for lung cancer using mobile low-dose spiral computed tomography. 「(査読付)」移動型低線量スパイラルCTを使用した肺がん検診の長期フォロー</p>	<p>共著</p>	<p>2007年12月</p>	<p>Lung Cancer. 58:329-341.</p>	<p>5480人の検診から合計13037回の低線量胸部CTを施行した。63人の肺癌を発見した。57人が肺癌の手術を行い、50人がその後生存した。10年生存率は83.1%であり、過大なる診断は13%であった。野口分類A、Bで術後病期がIAであるBAC、すりガラス結節を伴う非喫煙者腺がん患者は予後良好で、充実性で野口分類C、Dである喫煙者腺がん患者は予後が良くなかった。 胸部CTスクリーニング所見の読影 Sone S, Nakayama T, Honda T, <u>Tsushima K</u>, Li F, Haniuda M, Takahashi Y, Suzuki T, Yamanda T, Kondo R, Hanaoka T, Takayama F, Kubo K, Fushimi H.</p>
<p>28 Hypersensitivity pneumonitis caused by Penicillium citrinum, not enoki spores. 「(査読付)」えのき胞子ではなくペニシリウムにより引き起こされた過敏性肺炎</p>	<p>共著</p>	<p>2007年12月</p>	<p>Am J Ind Med. 50:1010-1017.</p>	<p>この年、エノキ栽培従事者の中で過敏性肺炎がアウトブレイクし、その原因がペニシリウムであることを突き止め、その周辺のエノキ栽培従事者の血液サンプルで沈降抗体法でほかに発症例がないかをスクリーニングした。58人のエノキ栽培従事者のうち、スクリーニング基準を満たす9人のうち4人が間質性肺炎マーカーの上昇と沈降抗体陽性であった。 研究発案、患者サンプルの収集、現地への立ち入り検査及び論文推敲 Yoshikawa S, <u>Tsushima K</u>, Yasuo M, Fujimoto K, Kubo K, Kumagai T, Yamazaki Y.</p>
<p>29 Cardiovascular responses to high-frequency oscillatory ventilation during acute lung injury in sheep. 「(査読付)」綿羊を用いた肺損傷モデルでの高頻度振動換気療法の心血管反応</p>	<p>共著</p>	<p>2007年</p>	<p>J Anesth. 21:340-347.</p>	<p>11匹の麻酔下の綿羊に新血管評価のカテーテルを挿入した状態でオレイン酸を静脈内投与した。通常の人工呼吸器管理を行ったあとに高頻度振動換気による呼吸管理を行い、平均肺動脈圧、左心房圧、肺動脈楔入圧、体血圧、心係数、血液ガスの変化を測定した。高頻度換気療法へ変更後、肺循環に影響を与えずに血液ガスは改善を示した。 羊を用いた動物実験施行の実働及び論文推敲 Nakagawa R, Koizumi T, Ono K, <u>Tsushima K</u>, Yoshikawa S, Kubo K, Otagiri T.</p>

<p>30 Modulation of mucus production by interleukin-13 receptor alpha(2) in the human airway epithelium. 「(査読付)」ヒト気道上皮細胞におけるIL13レセプターα2による粘液産生調節</p>	<p>共著</p>	<p>2008年1月</p>	<p>Clin Exp Allergy. 38:122-134.</p>	<p>IL13による杯細胞過形成と粘液産生に関してIL-13Ralpha(2)の役割を検討した。IL13刺激により杯細胞数は増え、MUC5AC蛋白とmRNA発現が認められた。21日目には正常に戻った。IL-13Ralpha(2)は7日目で上昇し、21日まで高いレベルで維持された。上清中の可溶性IL-13Ralpha(2)蛋白は14日、21日でも上昇し、抗IL-13Ralpha(1)抗体とrecombinant IL-13Ralpha(2)の投与は杯細胞数、PAS陽性細胞数、MUC5AU陽性細胞数を減らした。IL13による誘導された上清中MUC5AC濃度は抗IL-13Ralpha(1)抗体とrecombinant IL-13Ralpha(2)投与により減少した。IL-13-induced signal transducer and activator of transcription (STAT)活性は抗IL-13Ralpha(1)抗体やrecombinant IL-13Ralpha(2)により抑制された。実験遂行に当たりカンファレンス、相談、そして論文推敲。 Tanabe T, Fujimoto K, Yasuo M, <u>Tsushima K</u>, Yoshida K, Ise H, Yamaya M.</p>
<p>31 Cisplatin and weekly docetaxel with concurrent thoracic radiotherapy for locally advanced stage III non-small-cell lung cancer. 「(査読付)」局所進行非小細胞肺癌に対する胸部放射線同時併用シスプラチン+週ごとのドセタキセル治療</p>	<p>共著</p>	<p>2008年5月</p>	<p>Cancer Chemother Pharmacol. 63:1091-1096.</p>	<p>75歳以下の局所進行非小細胞肺癌stage III34例において胸部放射線同時照射(60Gy)併用シスプラチン+週ごとのドセタキセル治療を行った。完全寛解は1例、部分寛解は20例であった。OSは61.8%であった。平均生存は26.4ヶ月、3年生存率は41.2%であった。入院患者の化学療法施行と患者状態管理。 Nakamura M, Koizumi T, Hayasaka M, Yasuo M, <u>Tsushima K</u>, Kubo K, Gomi K, Shikama N.</p>
<p>32 Airway inflammation in employees involved in cultivating Japanese mushrooms (bunashimeji). 「(査読付)」ブナシメジ栽培従事者の気道炎症</p>	<p>共著</p>	<p>2008年6月</p>	<p>Respirology. 13:546-552</p>	<p>胞子の慢性吸入は咳嗽や喀痰の原因となるため、胞子に対して過敏反応のある方とない方を抽出し、誘発喀痰と胸部CT所見を比較した。胞子刺激で、炎症性サイトカインなどが発現するかをヒト気道上皮細胞(NHBE)を用いて、胞子刺激を行った。胞子過敏反応群は14名はCTで所見がなく、9名で画像的な異常を示した。15名の胞子過敏反応群と5名の胞子に対する過敏性がない群で喀痰などの症状を認めた。誘発喀痰の好中球数は、画像的に異常のある過敏反応群で画像が正常の群に比べ有意に高かった。胞子刺激9日目に、NHBEよりIL-8、ENA-78の上昇を認めた。研究対象患者の抽出、気道上皮細胞の培養と刺激実験、サンプルの収集とデータ解析、執筆と投稿。 <u>Tsushima K</u>, Yasuo M, Tanabe T, Yoshikawa S, Yamazaki Y, Kubo K.</p>
<p>33 Effects of High-Frequency Oscillatory Ventilation on Oleic Acid-Induced Lung Injury in Sheep. 「(査読付)」綿羊を用いた塩酸肺損傷における高周波振動換気療法の効果</p>	<p>共著</p>	<p>2008年7-8月</p>	<p>Lung. 186:225-232.</p>	<p>13匹の麻酔下の綿羊に肺リンパ流の測定カニューレと肺循環カテーテルを留置し、6匹には通常人工呼吸器管理、7匹には高周波振動換気的人工呼吸器をつけた。オレイン酸投与して4時間観察した。その後、気管支肺胞洗浄と肺乾湿比を測定した。高周波振動換気はオレイン酸投与後2-4時間、酸素化の改善を認め、肺血流や体血流の改善を認めた。高周波振動換気は、肺リンパ流量、肺乾湿比を減らし、肺胞洗浄液中の好中球の割合も通常換気に比べ低下させた。羊を用いた動物実験施行の実働及び論文推敲。 Nakagawa R, Koizumi T, Ono K, Yoshikawa S, <u>Tsushima K</u>, Otagiri T.</p>

34 Radiological diagnosis of small pulmonary nodules detected on low-dose screening computed tomography. 「(査読付)」低線量スクリーニングCTにおける肺微小結節の画像的診断	共著	2008年11月	Respirology. 13:817-824	胸部CT検診は、早期診断に有用ではあるが、胸部CT検診では、擬陽性の肺野結節が多く同定される。肺野結節を画像所見により4つに分類：negative, semi-negative, positive and semi-positiveとし、初回の薄HRCT画像と併せて、その後のフォローCTに関しての検討を分類ごとに行いフォローの方針を決定した。低線量CTで1年間に275の結節が指摘され、84名がpositive、99名がsemi-positiveに分類、そのうち、13の結節だけが、初回の薄HRCTで異常なしとなった。初回の薄HRCTを組み合わせることでより精度高く鑑別ができ、フォロー間隔の決定にも寄与できた。検診にこられたすべての方の画像をチェックし、結節を認める患者を選定、そこから精査のためのHRCTへと進めた。さらに、そこでの画像評価を行い、実際のスクリーニング結果を収集し、執筆、投稿。 Tsushima K, Sone S, Hanaoka T, Kubo K.
35 L-Carbocysteine reduces neutrophil elastase-induced mucin production. 「(査読付)」Lカルボシステインは好中球エラスターゼ誘導の無質産生を抑制する	共著	2009年6月	Respir Physiol Neurobiol. 167:214-216.	ヒト好中球エラスターゼ (HNE)はCOPD患者の気道分泌の粘液産生を誘導する。NCI-H292細胞を使用し、HNE投与におけるL-カルボシステインの役割を検討した。上清中のMUC5AC mRNA 産生と活性酸素の産生を指標とした。HNEは細胞上清中にMUC5AC蛋白とmRNA産生を亢進させた。L-カルボシステインはHNEによって誘導された活性酸素の産生を抑制した。研究テーマに関しての内容追加や課題提示、論文推敲。 Yasuo M, Fujimoto K, Imamura H, Ushiki A, Kanda S, Tsushima K, Kubo H, Yamaya M, Kubo K.
36 Pulmonary involvement of autoimmune pancreatitis. 「(査読付)」自己免疫性膵炎の肺合併症例の検討	共著	2009年8月	Eur J Clin Invest. 39:714-722	自己免疫性膵炎患者と肺サルコイドーシス(サ症)の肺野病変は類似している。19名の自己免疫性膵炎患者と8名の肺サ症の臨床的な違いを検討した。血清IgG4は自己免疫性膵炎で認められ、17名で肺門リンパ節腫脹、8名が肺野に結節を認めた。自己免疫性膵炎の肺胞洗浄液中IgG4は肺サ症と比べて有意に上昇し、肺組織学的検討では、肥厚した間質および肺胞腔内にリンパ球とIgG4陽性形質細胞の浸潤を認めた。19名の自己免疫性膵炎患者の臨床データの収集と対象となる8名の肺サルコイドーシス患者の抽出および臨床データの収集、執筆、投稿。 Tsushima K, Tanabe T, Yamamoto H, Koizumi T, Kawa S, Hamano H, Honda T, Uehara T, Kawakami S, Kubo K.
37 Increased isoprostane levels in oleic acid-induced lung injury. 「(査読付)」オレイン酸誘導肺損傷におけるイソプロスタノールレベルの増加	共著	2009年10月	Biochem Biophys Res Commun. 388:297-300.	オレイン酸投与肺障害を起こした15匹の麻酔下綿羊の肺リンパと血液サンプルのイソプロスタノールを測定した。血清中、肺リンパ液のイソプロスタノールはオレイン酸投与2時間でピークとなり、4時間で低下した。血清と肺リンパのイソプロスタノールの上昇は、酸素化の悪化と同調していた。活性酸素が酸素化の悪化とこの肺脂肪塞栓肺損傷モデルにおいては関連している可能性があった。動物実験の実働とサンプル供与の架け橋。 Ono K, Koizumi T, Tsushima K, Yoshikawa S, Yokoyama T, Nakagawa R, Obata T.
38 CD4+CD25+Foxp3+ Tregs resolve experimental lung injury in mice and are present in humans with acute lung injury. 「(査読付)」CD4+CD25+Foxp3+制御性Tリンパ球はマウス肺損傷において修復に関与し、ヒト肺損傷でもその細胞は存在している	共著	2009年10月	J Clin Invest. 119:2898-2913	急性肺損傷の修復課程の研究は未だ進んでいないため、マウスのエンドトキシン(LPS)肺損傷モデルを用いてリンパ球がその一役をこなしていることを検討した。LPSを気道内に注入すると、野生型マウスではCD4+CD25+Foxp3+ Tリンパ球が肺内に認められるが、Rag-1ノックアウトマウスでは、その細胞がないため修復が遅延する。CD4+CD25+Foxp3+ Tリンパ球をRag-1ノックアウトマウスに気管内投与後24時間で補っておくと野生型マウス同様に修復が認められた。これは、CD4+CD25+Foxp3+ Tリンパ球がTGF-βの産生抑制することに関連があるとin vitroでの研究で示した。動物実験モデルの作成、実験遂行、サンプル収集、サンプル測定を行った。 D'Alessio FR, Tsushima K, Aggarwal NR, West EE, Willett MH, Britos MF, Pipeling MR, Brower RG, Tuder RM, McDyer JF, King LS.

39 HRCT features of small peripheral lung carcinomas detected in a low-dose CT screening program. 「(査読付)」低線量CTスクリーニングにより拾える末梢小型肺癌のHRCT所見	共著	2010年1月	Acad Radiol. 17:75-83.	10 atypical adenomatous hyperplasias (AAH)と1996年から1998年の50症例の肺癌を2007年まで観察した。10 AAHのCT値は-500 HU以下で、大きさは14mmまでであり、全例生存した。BACのCT値はAAHより低く、-350 HUで全例生存した。22名の腺癌症例-450 HU以下で6名は内部のCT値はより低かった。AAH, BAC, 腺癌, 扁平上皮癌は一般的に多型で、小細胞肺癌は円形であった。平均の2倍量となる時間は AAH, BAC, ADC, SCC, SCLCで1278, 557, 466, 212, and 103日であった。 胸部CT所見の読影のみ Sone S, Matsumoto T, Honda T, <u>Tsushima K</u> , Takayama F, Hanaoka T, Kondo R, Haniuda M.
40 Polymyxin B-immobilized fiber column hemoperfusion treatment for drug-induced severe respiratory failure: report of three cases. 「(査読付)」3症例の薬剤性肺炎に対するエンドトキシン吸着療法の検討	共著	2010年1月	Intern Med. 49:59-64.	薬剤による急性呼吸不全に対してエンドトキシン吸着療法を施行した。これらの治療により2症例は救命でき、1症例は死亡した。しかし、エンドトキシン吸着中はPF比は明らかな改善を示した。 論文推敲 Yokoyama T, <u>Tsushima K</u> , Yamamoto H, Ito M, Agatsuma T, Kozumi T, Kubo K.
41 Exogenous surfactant instillation attenuates inflammatory response to acid-induced lung injury in rat. 「(査読付)」外因性サーファクタント投与は塩酸肺損傷に対する炎症反応の改善する	共著	2010年2月	Pulm Pharmacol Ther. 23:43-47.	塩酸肺損傷ラットに対して、体外からのサーファクタント補充療法の意義を検討した。塩酸投与後30分してからサーファクタント補充を行った。ほかの群は2時間後にさらに補充を行った。肺胞洗浄液中の総細胞数、好中球数、412nmの吸光度指数、好中球エラストアーゼ、アルブミン濃度、CINC1濃度は、サーファクタント補充により改善した。肺乾湿比と酸素分圧もまたサーファクタント補充で改善したが、追加投与においては改善効果は認めなかった。 動物実験の補助及び論文推敲 Jian MY, Koizumi T, <u>Tsushima K</u> , Yokoyama T, Kubo K, Baba A.
42 Moderate oxygen augments lipopolysaccharide-induced lung injury in mice. 「(査読付)」中等度酸素はマウスにおけるLPS損傷を助長する	共著	2010年3月	Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol. 298:L371-381.	中等度の酸素投与が肺障害を助長するかを検討した。低濃度のエンドトキシンをマウスの気管内投与し、そこへ60%酸素投与を行うことで、エンドトキシンだけ、ないしは酸素投与だけの状態よりも好中球浸潤は強くなり、その群ではT制御性リンパ球は減少した。抗体を用いて好中球を減少させると、炎症は改善した。 動物実験モデルの作成、実験遂行、サンプル収集、サンプル測定を行った。 Aggarwal NR, D' Alessio FR, <u>Tsushima K</u> , Files DC, Damarla M, Sidhaye VK, Fraig MM, Polotsky VY, King LS.
43 Comparative study of three different catheters for CT imaging-bronchoscopy-guided radiofrequency ablation as a potential and novel interventional therapy for lung cancer. 「(査読付)」肺癌におけるCT透視下気管支鏡を用いて3種類のアブレーションカテーテルの比較試験	共著	2010年4月	Chest. 137:890-897.	T1N0M0の病理学的に診断のついている10名の非小細胞肺癌患者に対して、3種類のアブレーションカテーテルを使用して、手術後の焼灼部位の測定を行った。カテーテルは、20Wで環流速度は50mL/minを統一し、アブレーション時間は30秒で5-mm cylindrical active tip (n=3)、アブレーション時間40秒でelectrode with an 8-mm active tip with four beads (n=3)、アブレーション時間50秒で electrode with a 10-mm active tip with five beads (n=4)でおこなった。10mmtipが一番大きく焼灼され、その部位は、アブレーション時間とチップの大きさに依存した。 アブレーション施行のための気管支鏡術者及び患者フォロー、論文推敲 Tanabe T, Koizumi T, <u>Tsushima K</u> , Ito M, Kanda S, Kobayashi T, Yasuo M, Yamazaki Y, Kubo K, Honda T, Kondo R, Yoshida K.

<p>44 Regulatory T cell-mediated resolution of lung injury: Identification of potential target genes via expression profiling. 「(査読付)」制御性Tリンパ球は肺障害を改善する、expression profilingを通してその遺伝子の同定</p>	<p>共著</p>	<p>2010年4月</p>	<p>Physiol Genomics. 41:109-19.</p>	<p>肺損傷動物モデルにおける遺伝子発現の研究は、急性期の変化に関するデータはあるが、回復期のデータに関する情報は少ない。野生型マウスとリンパ球系の欠損を作成したRag1欠損マウスでその遺伝子群の変化を確認した。両マウスにエンドトキシンを軌道内投与を行い、4日目と10日目の遺伝子発現の変化を確認すると、102の遺伝子で変化が見られた。制御性Tリンパ球をRag1欠損マウスに投与すると野生型と同様の炎症からの回復を認め、102の遺伝子のうち、7遺伝子は形式上変動し、19の遺伝子が野生型と同じ反応を示した。この19遺伝子が、制御性Tリンパ球が修復に関与する遺伝子の可能性がある。 動物実験モデルの作成、実験遂行、サンプル収集、サンプル測定を行った。 Aggarwal NR, D'Alessio FR, <u>Tsushima K</u>, Sidhaye VK, Cheadle C, Grigoryev DN, Barnes KC, King LS.</p>
<p>45 Identification of occult parenchymal disease such as emphysema or airway disease using screening computed tomography. 「(査読付)」スクリーニングCTを使用して潜在性気腫や気道病変の同定</p>	<p>共著</p>	<p>2010年4月</p>	<p>COPD. 7:117-125</p>	<p>低線量胸部CTを用いてlow attenuation area (LAA)とvisual scoreの測定で、診断されていない慢性閉塞性肺疾患(COPD)を同定可能かを検討した。特定の3スライスを用いて、LAAとvisual scoreを測定し、2247名のうち、48名がCOPDと診断された。そのうち17名に画像的な異常を指摘できなかった。COPDと診断された31名がvisual score陽性、27名がLAA%が30以上であり、17名のvisual score陰性のうちの9名がLAA%が30以上を示した。喫煙者のvisual scoreのそれは、非喫煙者に比べ有意に高かった。 検診を受けたすべての方の低線量CTの読影とLAAの解析、visual scoreの解析、データ収集と解析、執筆と投稿。 <u>Tsushima K</u>, Sone S, Fujimoto K, Kubo K, Morita S, Takegami M, Fukuhara S.</p>
<p>46 Pulmonary nodules: Preliminary experience with semiautomated volumetric evaluation by CT stratum. 「(査読付)」肺結節を半自動でボリュームを計測するCT解析装置</p>	<p>共著</p>	<p>2010年7月</p>	<p>Acad Radiol. 17:900-911.</p>	<p>肺結節を半自動でボリュームを計測するCT解析装置で画像フォローした。腫瘍の2倍量になる速度をROIを用いて、半自動的に計測した。 胸部CT所見の計測のみ Sone S, <u>Tsushima K</u>, Yoshida K, Hamanaka K, Hanaoka T, Kondo R.</p>
<p>47 Effects of a synthetic protease inhibitor (gabexate mesilate) and a neutrophil elastase inhibitor (sivelestat sodium) on acid-induced lung injury in rats. 「(査読付)」塩酸肺損傷ラットモデルにおけるプロテアーゼ阻害薬と好中球エラスターゼ阻害薬の効果</p>	<p>共著</p>	<p>2010年9月</p>	<p>Eur J Pharmacol. 641:220-225.</p>	<p>塩酸肺損傷ラットモデルを用いて、プロテアーゼ阻害薬と好中球エラスターゼ阻害薬の同時投与の効果に関して検討した。塩酸と余語5時間で気管支肺胞洗浄を回収し、好中球数、吸光度、アルブミン、CINC1を測定した。プロテアーゼ阻害薬ないしは好中球エラスターゼ阻害薬単剤でも、乾漆比、アルブミン、吸光度は改善し、その両薬剤の同時投与によつての相乗相加効果は認めなかった。 研究費獲得、動物実験の補助および論文推敲 Yoshikawa S, <u>Tsushima K</u>, Koizumi T, Kubo K.</p>
<p>48 Comparison of acid-induced inflammatory responses in the rat lung during high frequency oscillatory and conventional mechanical ventilation. 「(査読付)」高周波振動換気装置と通常の人工呼吸器管理のラットをもちいた塩酸誘導炎症の比較</p>	<p>共著</p>	<p>2010年10月</p>	<p>Inflamm Res. 59:931-937.</p>	<p>麻酔下のラットに塩酸を投与して肺損傷を惹起し、通常人工呼吸器管理と高周波振動換気装置を用いて比較した。高周波振動換気装置では肺胞洗浄液中の好中球浸潤、TNFα濃度の改善を認め、高周波振動換気装置中は、TNFα mRNA発現を低下させ、SP-A mRNA発現を増加させた。 動物実験の補助及び論文推敲 Jian MY, Koizumi T, Yokoyama T, <u>Tsushima K</u>, Kubo K.</p>

<p>49 The radiological patterns of interstitial change at an early phase: over a 4-year follow-up. 「(査読付)」初期間質性変化の画像パターン: 4年間のフォロー</p>	<p>共著</p>	<p>2010年11月</p>	<p>Respir Med. 104:1712-1721</p>	<p>ごく軽度の間質影のパターンを示す症例がスクリーニングCTでは散見される。タバコの影響がその画像の変化に影響を与えるか、検診患者の低線量胸部CT所見を経時的に追跡した。スクリーニングで間質影を認めた際には、薄スライス胸部CTでの精査と、KL-6, SP-A, SP-Dの採血、肺機能を追加した。3079人のうち80人に間質影を認め、7名は蜂巣肺、14名が気腫合併肺線維症を認めた。喫煙歴や間質性肺炎マーカーは画像に間質影のある方で有意に上昇した。73名の間質影のある方のうち32名は4年間で画像的な悪化を認めた。18人の間質影のある現喫煙者は陰影の悪化を認めた。 検診を受けたすべての方の低線量CTの間質影の有無確認、異常を認める方の手紙連絡と胸部HRCTによるさらなる精査、肺機能、採血結果解析、4年間のデータ収集と解析、執筆と投稿。 Tsushima K, Sone S, Yoshikawa S, Yokoyama T, Suzuki T, Kubo K.</p>
<p>50 Iodine-123 metaiodobenzylguanidine scintigraphic assessment of pulmonary vascular status in patients with chronic obstructive pulmonary disease. 「(査読付)」塩酸肺損傷ラットモデルにおけるプロテアーゼ阻害薬と好中球エラスターゼ阻害薬の効果</p>	<p>共著</p>	<p>2010年11月</p>	<p>Respirology. 15:1215-1219.</p>	<p>19名のCOPD患者に¹²³I-MIBGシンチグラフィを施行した。本研究では、運動負荷に伴う¹²³I-MIBGと肺動脈圧に関連があるかを検討した。運動はエルゴメータを使用した。¹²³I-MIBGの取り込みは肺機能および安静時の肺動脈圧との結果とは関連がなく、運動時の肺動脈圧の増加の割合と¹²³I-MIBGの取り込みは相関があった。 入院患者の管理とデータ解析、論文推敲 Koizumi T, Urushihata K, Hanaoka M, Tsushima K, Fujimoto K, Fujii T, Kubo K.</p>
<p>51 acute lung injury review. 「(査読付)」急性肺損傷</p>	<p>共著</p>	<p>2010年</p>	<p>Intern Med. 48:621-630</p>	<p>2010年当時の急性肺損傷に対するエビデンスのある治療法解説と今後の治療に関する概要説明。 reviewの依頼に対してその原稿作成。 Tsushima K, King LS, Aggarwal NR, De Gorordo A, D'Alessio FR, Kubo K.</p>
<p>52 Elevated IgG4 Levels in Patients Demonstrating Sarcoidosis-Like Radiologic Findings. 「(査読付)」サルコイドーシス様の画像所見を示している患者のIgG4レベル</p>	<p>共著</p>	<p>2011年5月</p>	<p>Medicine (Baltimore). 90:194-200</p>	<p>IgG4関連疾患の胸部画像パターンは肺サルコイドーシス(サ症)に類似するパターンのあるものがある。胸部CTで、肺野病変ないしは肺門リンパ節腫脹がある肺サ症として精査された中に、IgG4関連疾患が隠れているかを検討した。診断方法として、肺胞洗浄液中(BAL)のIgGサブクラスの測定とIgG4免疫染色による組織学的な検討を行った。49名の診断確定肺サ症、44名の疑い症例のうち、6名の疑い症例を含む8例で血清IgG4が上昇していた。1例の疑い症例はIgG4関連疾患疑いとなった。血清IgG4上昇の疑い症例はBAL中のIgG4は上昇していた。残り7名の4年間の経時的変化で、2例はCastleman病、1例はIgG4関連疾患へと進展した。 画像的に肺サルコイドーシスに類似する患者を後方視的に検索し、その肺胞洗浄液のIgG分画の測定、臨床背景の探索、経過フォローを行い、その哀愁診断の確定などの結果を執筆、投稿。 Tsushima K, Yokoyama T, Kawa S, Hamano H, Tanabe T, Koizumi T, Hond3.a T, Kawakami S, Kubo K.</p>
<p>53 Clarithromycin Inhibits Interleukin-13-Induced Goblet Cell Hyperplasia in Human Airway Cells. 「(査読付)」クラリスロマイシンはヒト気道上皮細胞でのIL13による杯細胞誘導を抑制する</p>	<p>共著</p>	<p>2011年11月</p>	<p>Am J Respir Cell Mol Biol. 45:1075-1083.</p>	<p>人気道上皮細胞を用いてIL13により誘導された杯細胞過形成や粘液産生に対するクラリスロマイシンの効果に関して検討した。IL-13はPAS陽性細胞、MUC5AC陽性細胞数を有意に上昇させた。クラリスロマイシンは容量依存的にMUC5AC遺伝子発現量や上清中のMUC5AC量を改善させた。クラリスロマイシンは IL-13 receptor janus kinase signal transducers, activators of transcription6 (STAT6), そしてepidermal growth factor receptor mitogen-activated protein kinase signaling の発現に影響を与えた。そして、クラリスロマイシンによるこれらの発現の抑制はNFkBを介する杯細胞の減少につながった。 動物実験の補助、定期的なカンファレンス、及び論文推敲 Tanabe T, Kanoh S, Tsushima K, Yamazaki Y, Kubo K, Rubin BK.</p>

<p>54 Potential benefits of early continuous positive pressure ventilation in patients with rapidly progressive interstitial pneumonia. 「査読付」急速進行性の間質性肺炎患者に対する早期非侵襲人工呼吸器の有用性</p>	<p>共著</p>	<p>2012年2月</p>	<p>Respirology. 17:315-321.</p>	<p>急速進行性間質性肺炎に対して、非侵襲的人工呼吸器(NIV)管理をおこない、30日生存割合で効果を検討した。38名の患者に対してNIVを導入した。生存群では、NIVの導入前のPF比が高く、導入までの時間も有意差を持って短かった。血清KL-6やLDHは死亡群で高く、多変量解析ではNIV早期導入が30日生存に寄与することが分かった。さらに、PF比とKL-6とLDHが生存への予測因子となることが分かった。 研究立案、入院における人工呼吸器管理の実際、患者のフォロー Yokoyama T, <u>Tsushima K</u>, Yamamoto H, Koizumi T, Kubo K.</p>
<p>55 A phase II trial of erlotinib in patients with EGFR wild-type advanced non-small-cell lung cancer. 「査読付」EGFR遺伝子変異のない進行型非小細胞肺癌患者のエロロチニブの第2相試験</p>	<p>共著</p>	<p>2012年5月</p>	<p>Cancer Chemother Pharmacol. 69:1241-1246.</p>	<p>EGFR遺伝子変異のない病期ⅢないしはⅣあるいは術後再発の進行型非小細胞肺癌患者に対してエロロチニブを投与した。31名がこの研究に参加し、うち21名が肺腺癌、9名が肺扁平上皮癌、1名が肺大細胞癌であった。1名は完全寛解、4名は部分寛解、8名は変化なしであった。奏効率は17.2%で、病勢コントロール率は44.8%であった。80.6%に発疹を生じた。2名が間質性肺炎を発症したが救命できた。無増悪生存期間は2.1か月、生存期間は7.7か月であった。 研究立案、入院における化学療法施行、患者のフォロー Kobayashi T, Koizumi T, Agatsuma T, Yasuo M, <u>Tsushima K</u>, Kubo K, Eda S, Kuraishi H, Koyama S, Hachiya T, Ohura N.</p>
<p>56 Resolution of experimental lung injury by monocyte-derived inducible nitric oxide synthase. 「査読付」単球由来誘導型一酸化窒素合成酵素による実験的肺損傷の修復</p>	<p>共著</p>	<p>2012年9月</p>	<p>J Immunol. 189:2234-2245</p>	<p>急性肺損傷の修復課程の研究は未だ進んでいないため、マウスのエンドトキシン(LPS)肺損傷モデルを用いて野生型マウスではinducible NO synthase (iNOS)がLPS気管内投与後4日目に発現ピークを迎えることに着目し、iNOSノックアウトマウスでは、野生型に比べて、修復が明らかに遅延することを発見した。そこに、野生型の単球を移植すると修復は正常に服した。さらに、この修復が上皮系iNOSではなく、骨髄系iNOSによるものであることをキメラマウスに対するCD86抗体による抑制試験を用いて示した。 実験アイデアの作成、実際の動物実験施行、データの収集、解析。 <u>Tsushima K</u>, D'Alessio FR, Aggarwal NR, Mock JR, Eto Y, Garibaldi BT, Files DC, Avalos CR, Rodriguez JV, Waickman AT, Reddy SP, Pearse DB, Sidhaye VK, Hassoun PM, Crow MT, King LS.</p>
<p>57 Increased interleukin-8 in epithelial lining fluid of collapsed lungs during one-lung ventilation for thoracotomy. 「査読付」外科手術の際の片肺換気では虚脱肺では気道被覆液においてIL8が増加する</p>	<p>共著</p>	<p>2012年12月</p>	<p>Inflammation. 35:1844-1850.</p>	<p>気管支鏡を介したマイクロサンプリングを用いて、片肺換気中の虚脱肺での炎症性サイトカインなどの変化を確認した。血清アルブミンと気道被覆液のIL8を測定した。気道被覆液中のアルブミンとIL8は片肺換気後30分と両肺換気に戻す前で上昇した。両肺換気に戻す前のIL8の量は、片肺換気の時間に相関した。しかし、研究中に術後肺障害をきたすことはなかった。 研究立案、その遂行、外科との架け橋、論文推敲 Komatsu Y, Yamamoto H, <u>Tsushima K</u>, Furuya S, Yoshikawa S, Yasuo M, Kubo K, Yamazaki Y, Hasegawa J, Eguchi T, Kondo R, Yoshida K, Koizumi T.</p>
<p>58 Histological types and localizations of lung cancers in patients with combined pulmonary fibrosis and emphysema. 「査読付」気腫合併肺線維症患者における肺癌の組織系と発生部位に関して</p>	<p>共著</p>	<p>2013年3月</p>	<p>Thoracic Cancer. 4:354-360.</p>	<p>気腫合併肺線維症患者は、肺癌を合併する頻度が高い。そこで、我々は、その組織型と発生部位に関して画像的に検討した。274名の肺癌患者を胸部CT画像所見による分けた。146名が正常、14名が線維化あり、78名が気腫あり、36名が気腫合併肺線維症であり、気腫合併肺線維症では肺扁平上皮癌の割合が正常群に比べて有意に高く、末梢での発生が正常群、線維化群、気腫軍に比べて有意に高かった。末梢での兵ペイ上皮癌の発生頻度は、正常群や気腫群に比べて有意に高かった。 研究立案、画像診断およびデータ集積、論文推敲 Fujiwara A, <u>Tsushima K</u>, Sugiyama S, Yamaguchi K, Soeda S, Togashi Y, Kono Y, Kasagi S, Setoguchi Y.</p>

59 Clinical characteristics classified by the serum KL-6 level in patients with organizing pneumonia. 「査読付」器質化肺炎患者の血清KL-6による臨床分類	共著	2013年5月	Sarcoidosis Vasc Diffuse Lung Dis. 30:43-51.	器質化肺炎患者においてはKL-6が上昇している群と正常の群に分かれている。この2群を比較すると、画像などを含めた臨床的なデータには有意差が認められなかったが、診断後1ヶ月でKL-6が高い群はブレドニンによる治療を必要とした。 研究立案、データ集積、論文推敲 Yamaguchi K, <u>Tsushima K</u> , Kurita N, Fujiwara A, Soeda S, Yamaguchi A, Sugiyama S, Togashi Y, Kono Y, Kasagi S, Setoguchi Y.
60 The utility of galactomannan antigen in the bronchial washing and serum for diagnosing pulmonary aspergillosis. 「査読付」肺アスペルギルス症の診断のための血清および気管支洗浄液中のガラクトマンナン抗原の有用性	共著	2013年7月	Respir Med. 107:1094-1100.	アレルギー性肺アスペルギルス症、侵襲性肺アスペルギルス症、肺アスペルギルス症に対して血清および気管支洗浄液中のガラクトマンナンを測定した。その診断的価値は、気管支洗浄液のガラクトマンナンは肺アスペルギルス症の患者に有効であった。 研究立案、データ集積、論文推敲 Kono Y, <u>Tsushima K</u> , Yamaguchi K, Kurita N, Soeda S, Fujiwara A, Sugiyama S, Togashi Y, Kasagi S, To M, To Y, Setoguchi Y.
61 The Concept Study of Recombinant Human Soluble Thrombomodulin in Patients with Acute Respiratory Distress Syndrome. 「査読付」急性呼吸促進症候群に対するヒト可溶性トロンボモジュリン製剤の概念研究	共著	2013年11月	Int J Clin Med. 4:488-495.	17名の人工呼吸器管理を有するARDS患者に対してトロンボモジュリンを投与し、凝固系の変動、酸素化、HMG1を確認した。11名が投与後28日の時点で生存し、酸素化は投与後5日目から生存群で改善し、TATは投与後7日目で生存群と死亡群で有意差がついた。HMG1は、死亡群では、投与後5日目まで上昇する傾向であり、トロンボモジュリン投与は、酸素化、炎症性メディエータと凝固活性に影響を与える可能性を示した。 研究立案、患者管理、データ集積、論文作成 <u>Tsushima K</u> , Yokoyama T, Koizumi T, Kubo K, Tatsumi K.
62 Immunological priming requires regulatory T cells and IL-10-producing macrophages to accelerate resolution from severe lung inflammation. 「査読付」免疫的にプライミングを受けた制御性Tリンパ球とIL10産生マクロファージは重症な肺障害の修復を促進する	共著	2014年5月	J Immunol. 192:4453-4464	プライミングという現象は、免疫の活性を肺内でもたらし、修復に役をになっている可能性があることを発見した。プライミングとしてエンドトキシン(LPS)を用いると、インターロイキン(IL)-10の産生が亢進し、高濃度LPS肺障害や緑膿菌肺障害からの修復が認められることを示した。また、肺マクロファージや修復に関与する制御性Tリンパ球を肺内から消失させるとIL-10の産生はなくなり、その修復は遅延することが明らかとなった。したがって、上記の2つの細胞がIL-10産生に関与し、修復を制御している可能性を示唆した。 実験アイデアの作成、実際の動物実験施行、データの収集、解析。 <u>Tsushima K</u> , Aggarwal NR, Eto Y, Tripathi A, Mandke P, Mock JR, Garibaldi BT, Singer BD, Sidhaye VK, Horton MR, King LS, D'Alessio FR.
63 The potential efficacy of noninvasive ventilation with administration of a neutrophil elastase inhibitor for acute respiratory distress syndrome. 「査読付」急性呼吸促進症候群に対する非侵襲的人工呼吸器と好中球エラスターゼ阻害薬の効果	共著	2014年6月	J Crit Care. 29:420-425	非侵襲的人工呼吸器(NIV)と好中球エラスターゼ阻害薬の治療が急性呼吸促進症候群(ARDS)治療に有効であるかを検討した。47名のARDS患者が登録され、37名が侵襲的人工呼吸器管理を回避できた。mildの8名, 17 moderateの17名, severeの10名のARDS患者さんがNIV後28日時点で生存した。PF 150未満で分けると、PF比が150以上の患者群でPF比と肺障害スコアが劇的に改善した。mildとmoderateのARDS患者に好中球エラスターゼ阻害薬を使用すると生存率の有意な改善を認めた。 研究プロトコルの作成、多施設のデータ収集とその解析、その結果を執筆、投稿。 <u>Tsushima K</u> , Yokoyama T, Matsumura T, Koizumi T, Kubo K, Tatsumi K; Acute Lung Injury Group in Nagano.

64 Home-based pulmonary rehabilitation in patients with inoperable or residual chronic thromboembolic pulmonary hypertension: a preliminary study. 「(査読付)」手術不能および血栓残存の慢性血栓性肺高血圧症患者における在宅リハビリテーション	共著	2014年11月	Respir Investig. 52:357-364.	平均肺動脈圧が47である手術不能および血栓残存の慢性血栓性肺高血圧症患者に対して12週間の在宅リハビリテーションプログラム（筋力トレーニング、呼吸トレーニング、歩行）を実施し、6分歩行試験で評価した。SGRQ、6分歩行、4頭筋力は改善し、合併症なくすべての患者はリハビリプログラムを推蔽できた。 入院患者管理および論文推蔽。 Inagaki T, Terada J, Tanabe N, Kawata N, Kasai H, Sugiura T, Shigeta A, Asano Y, Murata A, <u>Tsushima K</u> , Tada Y, Sakao S, Tatsumi K.
65 Non-invasive mechanical ventilation and neutrophil elastase inhibitor: A new potential approaching to acute hypoxemic failure. 「(査読付)」非侵襲的人工呼吸器管理と好中球エラスターゼ阻害薬	共著	2014年12月	J Crit Care. 29:1124-1125.	非侵襲的人工呼吸器(NIV)と好中球エラスターゼ阻害薬の治療が急性呼吸促進症候群(ARDS)治療に有効であることに対してのほかのデータを等で補填。 査読者などからの質問返答。 <u>Tsushima K</u> , Tatsumi K.
66 Thrombomodulin for acute exacerbations of idiopathic pulmonary fibrosis: A proof of concept study. 「(査読付)」特発性間質性肺炎急性増悪に対するトロンボモジュリン治療	共著	2014年12月	Pulm Pharmacol Ther. 29:233-240,	特発性肺線維症(IPF)の急性増悪は予後不良な疾患であり、有効な治療法は確立されていない。その症例にたいして、播種性血管内凝固症候群の治療薬であるトロンボモジュリン(rhTM)を投与し、効果を検討した。11人の急性増悪IPF患者、21人の肺炎合併IPF、16名のIPF患者のうち急性増悪患者で凝固能の異常を認めた。20例の急性増悪IPF患者にrhTMを投与したところ、28日死亡は35%であり、生存群と死亡群に分けると、生存群では酸素化能の改善が早期より認められ、炎症性サイトカインの低下も認められた。 ノミネート患者すべての治療、その治療経過などのデータ収集、解析、その執筆、投稿。 <u>Tsushima K</u> , Yamaguchi K, Kono Y, Yokoyama T, Kubo K, Matsumura T, Ichimura Y, Abe M, Terada J, Tatsumi K.
67 Bronchoscopy-Guided Cooled Radiofrequency Ablation as a Novel Intervention Therapy for Peripheral Lung Cancer. 「(査読付)」末梢型肺癌に対する気管支鏡下灌流式アブレーション治療	共著	2015年5月	Respiration. 90:47-55.	末梢型肺癌に対して、気管支鏡下で環流式アブレーションを行い、焼灼効果を、20例、合計28回行い、その腫瘍の大きさの評価を行った。11例は腫瘍縮小効果を示し、8例は変化がない状態を維持した。局所コントロールは82.6%であった。生存中央値は35ヶ月、5年生存率は61.5%であった。3名に発熱と胸痛の副作用を生じた。研究プロトコルの立案、実際の治療、カテーテルの特許申請、論文の内容確認、投稿。 Koizumi T, <u>Tsushima K</u> , Tanabe T, Agatsuma T, Yokoyama T, Ito M, Kanda S, Kobayashi T, Yasuo M.
68 Estimation using the impulse oscillation system in patients with pulmonary sarcoidosis. 「(査読付)」肺サルコイドーシス患者のオシレーション検査の評価	共著	2015年7月	Sarcoidosis Vasc Diffuse Lung Dis. 32:144-150.	肺サルコイドーシス患者における、オシレーションの評価を行った。オシレーションは末梢気道の病変をより簡便に確認することが可能であるため、明らかな気道病変がわからない肺サルコイドーシス患者でそれが早期に発見可能であるかを検討した。その結果、気道病変が胸部CT上、明らかではない群においても早期に同定可能であった。 研究プロトコルの立案、実際の治療、論文の内容確認、投稿。 Suzuki T, <u>Tsushima K</u> , Kawata N, Matsumura T, Matsuura Y, Ichimura Y, Terada J, Sakao S, Tada Y, Tanabe N, Tatsumi K.

69 Efficacy of thrombomodulin for acute exacerbation of idiopathic pulmonary fibrosis and non-specific interstitial pneumonia: A non-randomized prospective study. 「(査読付)」特発性間質性肺炎および非特異的間質性肺炎急性増悪に対するトロンボモジュリンの効果	共著	2015年10月	Drug Des Dev Ther. 9:5755-5762	特発性肺線維症 (IPF) と非特異的間質性肺炎 (NSIP) 急性増悪患者にトロンボモジュリン (rhTM) を使用し、その有効性を検討した。16人のIPF患者と6人のNSIP患者に対し、はじめの1年間はrhTMを全例投与、翌1年間は投与しないという前向きプロトコルで行った。90日生存は、通常の治療に加えてrhTM投与群で有意差をもって上昇し、90日時点での生存予測の単変量解析では、呼吸数とrhTM投与、多変量解析ではrhTM投与が残る結果となった。研究プロトコルの立案、実際の治療、論文の内容確認、投稿。 Abe M, <u>Tsushima K</u> , Matsumura T, Ishiwata T, Ichimura Y, Ikari J, Terada J, Tada Y, Sakao S, Tanabe N, Tatsumi K.
70 Prevalence and responsiveness to treatment of lung abnormalities on chest computed tomography in patients with microscopic polyangiitis—a multicenter, longitudinal, retrospective study of 150 hospital-based consecutive Japanese patients. 「(査読付)」多発性血管炎患者の胸部CTにおける肺野異常の治療への反応性	共著	2016年5月	Arthritis Rheumatol. 68:713-723	多発性血管炎患者の治療前の胸部CT画像所見を確認し、治療後にどの病変に変化を認めるかに関して画像による評価をください。また、治療前の画像を3群に分け、その臨床的なパラメータとの関連性を評価した。画像解析、評価、論文の内容確認、投稿。 Yamagata M, Ikeda K, <u>Tsushima K</u> , Iesato K, Abe M, Ito T, Kashiwakuma D, Kagami SI, Iwamoto I, Nakagomi D, Sugiyama T, Maruyama Y, Furuta S, Jayne D, Uno T, <u>tastumi K</u> , Nakajima H.
71 Immunological Priming Requires Regulatory T Cells and IL-10-Producing Macrophages To Accelerate Resolution from Severe Lung Inflammation. 「(査読付)」免疫的にプライミングを受けた制御性Tリンパ球とIL10産生マクロファージは重症な肺障害の修復を促進する	共著	2016年5月	J Immunol. 196:3963-3965.	プライミングという現象は、免疫の活性を肺内でもたらし、修復に一役をになっている可能性があることを発見した。プライミングとしてエンドトキシン (LPS) を用いると、インターロイキン (IL)-10の産生が亢進し、高濃度LPS肺障害や緑膿菌肺障害からの修復が認められることを示した。また、肺泡マクロファージや修復に関与する制御性Tリンパ球を肺内から消失させるとIL-10の産生はなくなり、その修復は遅延することが明らかとなった。したがって、上記の2つの細胞がIL-10産生に関与し、修復を制御している可能性を示唆した。実験アイデアの作成、実際の動物実験施行、データの収集、解析。 <u>Tsushima K</u> , Aggarwal NR, Eto Y, Tripathi A, Mandke P, Mock JR, Garibaldi BT, Singer BD, Sidhaye VK, Horton MR, King LS, D'Alessio FR.
72 End-tidal capnographic monitoring to detect apnea episodes during flexible bronchoscopy under sedation. 「(査読付)」気管支鏡検査の鎮静中、呼気CO2モニターは無呼吸を検知する	共著	2017年1月	BMC Pulm Med.17:7. doi: 10.1186/s12890-016-0361-7.	気管支鏡検査の際には、患者の負担を減らすために鎮静薬を使用する。そのために、呼吸が抑制することがあるが、これは、通常の酸素飽和度や呼吸のモニタリングでは、検知しにくい。そこで呼気CO2をモニターし、その変動をみることで無呼吸をより簡便に同定することができる子をと示した。研究プロトコルの立案、実際の検査、論文の内容確認、投稿。 Ishiwata T, <u>Tsushima T</u> , Fujie M, Suzuki K, Hirota K, Abe M, Kawata N, Terada J, Tatsumi K.
(その他)				

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 遠山 哲夫				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 内科系臨床医学 皮膚科学		(1)皮膚診断学 (2)レーザー光生物学 (5)皮膚腫瘍学 (7)皮膚免疫・炎症学		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 血管腫・血管奇形臨床アトラス	共著	平成30年5月	南江堂	Angiokeratoma(被角血管腫)とVerrucous hemangioma(疣状血管腫)について疾患概念、疫学、臨床所見、検査所見、鑑別のポイント、治療法、予後について解説した。 編集: 大原國章, 神人正寿 著者: 遠山哲夫 担当部分 193-6
(学術論文) 1. Clinical significance of serum retinol binding protein-4 levels in patients with systemic sclerosis. (査読付) 全身性強皮症患者における血清レチノール結合タンパク-4値の臨床的意義について	共著	平成24年12月	J Eur Acad Dermatol Venereol	Retinol binding protein-4(RBP-4)はアディポサイトカインの一つであり、線維化、血管拡張、血管新生に関連している。全身性強皮症患者の血清RBP-4をELISAで測定し解析したところ、健常人と比較し、びまん性皮膚硬化型全身性強皮症患者(dcSSc)では血清RBP-4値が低下していたが、限局性皮膚硬化型全身性強皮症患者(lcSSc)では有意な差はみられなかった。dcSSc, lcSScともにレイノー現象を有する患者ではそうでない患者と比較し、有意に血清RBP-4値が低下していた。さらに血清RBP-4値と呼吸機能検査の%VC, %DLco値は正に相関し、推定右室圧は負に相関した。これらの結果はRBP-4が全身性強皮症の病態に何かしら関与していることを示唆している。 Toyama T, Asano Y, Takahashi T, Aozasa N, Akamata K, Noda S, Taniguchi T, Ichimura Y, Sumida H, Tamaki Z, Masui Y, Tada Y, Sugaya M, Sato S, Kadono T: 担当部分 27(3):337-44. 2013
2. Simultaneous downregulation of KLF5 and Fli1 is a key feature underlying systemic sclerosis. (査読付) KLF5とFli1の同時に抑制することが全身性強皮症の病態の重要な要素であることについて	共著	平成26年12月	Nat Commun	全身性強皮症の線維芽細胞においてKLF5の発現は低下していた。KLF5ヘテロノックアウトマウスではブレオマイシン投与によって皮膚の線維化がより強く誘導された。Fli1とKLF5を両方ノックダウンをするとCTGFの発現が上昇した。Fli1;Klf5のダブルヘテロノックアウトマウスは、全身性強皮症様の皮膚、肺の線維化、血管障害、B細胞の異常活性化、自己免疫産生を含む免疫異常を自然発症した。 Noda S, Asano Y, Nishimura S, Taniguchi T, Fujiu K, Manabe I, Nakamura K, Yamashita T, Saigusa R, Akamata K, Takahashi T, Ichimura Y, Toyama T, Tsuruta D, Trojanowska M, Nagai R, Sato S. 担当部分 5:5797.

<p>3. Progranulin Overproduction Due to Fli-1 Deficiency Contributes to the Resistance of Dermal Fibroblasts to Tumor Necrosis Factor in Systemic Sclerosis. (査読付)</p> <p>全身性強皮症におけるFli1欠乏によるプロフィラニュリンの産生増加が皮膚線維芽細胞のTNFに対する抵抗性に寄与していることについて</p>	共著	平成26年12月	Arthritis Rheumatol	<p>Progranulinは創傷治癒過程で活性化するTNF受容体のアンタゴニストで、線維芽細胞の活性化、血管新生、炎症を制御する。転写因子Fli1の低下が全身性強皮症の発症に関与していることが知られているが、Fli1のヘテロノックアウトマウスやブレオマイシン誘発強皮症モデルマウスの皮膚線維芽細胞においてprogranulinの発現が亢進していた。TNFα投与によって強皮症皮膚線維芽細胞のI型コラーゲン産生は減少しないが、progranulinの発現をノックダウンするとTNFαの抗線維化作用が発揮され、I型コラーゲンの産生が低下した。全身性強皮症患者の血清ではとりわけ早期の炎症を伴うびまん皮膚硬化型の全身性強皮症の皮膚にてprogranulinが上昇しており、C-reactive protein値と正の相関を示した。</p> <p>Ichimura Y, Asano Y, Akamata K, Noda S, Taniguchi T, Takahashi T, <u>Toyama T</u>, Tada Y, Sugaya M, Sato S, Kadono T. 担当部分 67(12):3245-55.</p>
<p>4. Amelioration of tissue fibrosis by toll-like receptor 4 knockout in murine models of systemic sclerosis. (査読付)</p> <p>Toll様受容体4の欠損が強皮症モデルマウスにおける線維化を改善させることについて</p>	共著	平成27年1月	Arthritis Rheumatol	<p>TLR4ノックアウトマウスを用いたブレオマイシン誘発強皮症モデルマウスと、TLR4$^{-/-}$;TSK/+マウスを作成した。ブレオマイシン投与による皮膚と肺の線維化は野生型マウスと比較し、TLRノックアウトマウスにおいて減弱していた。炎症細胞浸潤や炎症性サイトカインの発現もTLR4の欠失により低下していた。In vitroではLPSで刺激をかけた皮膚線維芽細胞、血管内皮細胞、T細胞、B細胞、マクロファージにおいて、TLR4のノックダウンでIL-6の産生が優位に低下していた。さらにB細胞の活性化とTh2/Th17の反応も低下していた。加えてTSK/+マウスにおいてもTLR4のノックアウトで皮下の線維化が抑制された。以上より、TLR-4が全身性強皮症の治療ターゲットになる可能性があることが示唆された。</p> <p>Takahashi T, Asano Y, Ichimura Y, <u>Toyama T</u>, Taniguchi T, Noda S, Akamata K, Tada Y, Sugaya M, Kadono T, Sato S. 担当部分 67(1):254-65</p>
<p>5. Fibrosis, vascular activation, and immune abnormalities resembling systemic sclerosis in bleomycin-treated Fli-1-haploinsufficient mice. (査読付)</p> <p>ブレオマイシンを投与したFli1ヘテロノックアウトマウスにおける全身性強皮症と類似した線維化、血管障害、免疫異常が生じることについて</p>	共著	平成27年2月	Arthritis Rheumatol	<p>Fli1は全身性強皮症の皮膚で発現が低下している。Fli1ヘテロノックアウトマウスを作成しブレオマイシンを投与したところ、野生型マウスと比較し、より強い線維化が誘導された。このマウスでは皮膚線維芽細胞において$\alpha v \beta 3/5$インテグリンの発現が亢進しており、TGF-βの活性化が起こることが示唆された。またFli1の欠損は内皮間葉転換を誘導し、さらにTh2/Th17優位の炎症反応がより強く引き起こされた。またFli1ヘテロノックアウトマウスにおいてマクロファージはM2型により分化しやすいことが示された。以上より、Fli1の発現低下は、全身性強皮症様の病態を引き起こすことが示された。</p> <p>Taniguchi T, Asano Y, Akamata K, Noda S, Takahashi T, Ichimura Y, <u>Toyama T</u>, Trojanowska M, Sato S. 担当部分 67(2):517-26.</p>

<p>6. Endothelin receptor blockade ameliorates vascular fragility in endothelial cell-specific Fli1-knockout mice by increasing Fli1 DNA binding ability. (査読付) 血管内皮特異的Fli1欠失マウスにおいてエンドセリン受容体拮抗薬がFli1のDNAへの結合性を回復させることで血管の脆弱性を改善することについて</p>	共著	平成27年6月	Arthritis Rheumatol	<p>全身性強皮症の血管障害モデルである血管内皮細胞特異的Fli1ノックアウトマウスを用いて、エンドセリン受容体拮抗薬であるボセンタンを投与したところ、血管内皮細胞のFli1の発現を亢進させ、血管透過性の異常亢進や異常血管構造などの血管障害を改善していることがわかった。ヒト血管内皮細胞において、エンドセリン1はc-Abl/PKCδを活性化させ、Fli1の抑制性リン酸化を促すことが示され、Fli1の標的遺伝子の発現が低下していることが示された。一方で、ボセンタンの投与で、これらの遺伝子発現が回復していた。これらのことよりボセンタンが全身性強皮症の血管障害を改善する機序の一端が示された。 Akamata K, Asano Y, Yamashita T, Noda S, Taniguchi T, Takahashi T, Ichimura Y, <u>Toyama T</u>, Trojanowska M, Sato S. 担当部分 67(5):1335-44.</p>
<p>7. Multifaceted contribution of the TLR4-activated IRF5 transcription factor in systemic sclerosis. (査読付) Toll様レセプター4によって活性化された転写因子IRF5の全身性強皮症への寄与の検討</p>	共著	平成27年12月	Proc Natl Acad Sci U S A	<p>IRF5は全身性強皮症の疾患感受性遺伝子であるが、比較的軽症な臨床症状に関連している。我々はIRF5ノックアウトマウスを用いて、ブレオマイシン誘発強皮症モデルマウスを作成した。野生型マウスと比較して、皮膚、肺の線維化が軽度であった。さらに線維芽細胞の活性化、内皮間葉転換、血管障害、Th2/Th17優位の免疫応答、B細胞の活性化、炎症細胞浸潤といった、全身性強皮症に関連する病態反応がすべて減弱していた。また全身性強皮症の皮膚ではTLR4とIRF5が高発現していたことから、TLR4-IRF5 pathwayが全身性強皮症の病態形成に関与している可能性が示唆された。 Saigusa R, Asano Y, Taniguchi T, Yamashita T, Ichimura Y, Takahashi T, <u>Toyama T</u>, Yoshizaki A, Sugawara K, Tsuruta D, Taniguchi T, Sato S. 担当部分 112(49):15136-41.</p>
<p>8. Tamibarotene Ameliorates Bleomycin-Induced Dermal Fibrosis by Modulating Phenotypes of Fibroblasts, Endothelial Cells, and Immune Cells. (査読付) ブレオマイシン誘発強皮症モデルマウスの皮膚の線維化に対してタミバロテンが線維芽細胞、血管内皮細胞、免疫細胞を調節する結果、抗線維化作用を示すことについて</p>	共著	平成28年2月	J Invest Dermatol	<p>合成レチノイドであるタミバロテンは強皮症モデルマウスであるブレオマイシン投与マウスとtight skin 1マウスの両方で皮膚、皮下の線維化を改善させた。マウス皮膚においてTGFβ1、CTGFといった組織の線維化に関連するタンパク質の発現を抑制した。さらにタミバロテンは所属リンパ節のエフェクターT細胞の割合を減少させる一方、ナイーブT細胞の割合を増加させた。さらに内皮間葉転換、血管内皮細胞におけるICAM-1の発現、マクロファージ、マスト細胞、リンパ球の血管周囲への浸潤、M2マクロファージへの分化といったBLMによって引き起こされる病態をタミバロテンが改善することが示された。 <u>Toyama T</u>, Asano Y, Akamata K, Noda S, Taniguchi T, Takahashi T, Ichimura Y, Shudo K, Sato S, Kadono T. 担当部分 136(2):387-98.</p>
<p>9. Epithelial Fli1 deficiency drives systemic autoimmunity and fibrosis: Possible roles in scleroderma. (査読付) 上皮細胞におけるFli1欠損が自己免疫と線維化を誘導することが強皮症の発症に関与している可能性についての検討</p>	共著	平成29年2月	J Exp Med	<p>全身性強皮症の病態における表皮の役割を調べるためにケラチン14を発現している細胞特異的にFli1をノックアウトするマウスを作成したところ、皮膚と食道の線維化が見られた。さらにTh2, Th17細胞、B細胞の異常活性化を伴う自己免疫を発症し、CD3陽性のT細胞をRag1^{-/-}マウスに移入したところ、肺の線維化が誘導された。胸腺髄質上皮細胞においてもFli1が発現しており、その発現低下が胸腺の萎縮を伴い、直接的にAIREの発現を低下させることを示した。 Takahashi T, Asano Y, Sugawara K, Yamashita T, Nakamura K, Saigusa R, Ichimura Y, <u>Toyama T</u>, Taniguchi T, Akamata K, Noda S, Yoshizaki A, Tsuruta D, Trojanowska M, Sato S. 担当部分 214(4):1129-51.</p>

<p>10. Glycyrrhizin Ameliorates Fibrosis, Vasculopathy, and Inflammation in Animal Models of Systemic Sclerosis. (査読付) 全身性強皮症モデルマウスにおいてグリチルリチンが線維化、血管障害、炎症を改善する</p>	共著	平成29年4月	J Invest Dermatol	<p>グリチルリチンは慢性肝疾患や皮膚そう痒症で使われる薬剤であるが、炎症や血管障害や線維化を調節する作用があると言われている。グリチルリチンはブレオマイシン誘導強皮症モデルマウスでトロンボスポンディン1やTGFβレセプターの発現を抑制し、TGFβシグナリングを阻害することで、皮膚線維化を抑制した。さらにブレオマイシンによって誘導されるTh2優位の免疫反応、M2マクロファージの浸潤や内皮間葉転換をグリチルリチンが正常化させた。加えて、グリチルリチンは血管内皮細胞特異的Fli1ノックアウトマウスの血管透過性の異常を改善した。これらのことよりグリチルリチンは全身性強皮症の血管障害、皮膚硬化、免疫異常を改善する可能性が示唆された。 Yamashita T, Asano Y, Taniguchi T, Nakamura K, Saigusa R, Miura S, <u>Toyama T</u>, Takahashi T, Ichimura Y, Yoshizaki A, Trojanowska M, Sato S. 担当部分 137(3):631-40.</p>
<p>11. Ethosuximide-induced lupus-scleroderma syndrome with disease-specific autoantibodies. (査読付) エトスクシミドによって誘発されたループス-強皮症候群についての報告</p>	共著	平成29年4月	Eur J Dermatol	<p>エトスクシミドによって誘発されたlupus-scleroderma syndromeの報告である。8歳女児。エトスクシミドの投与を開始されたすぐ後より、紅斑、関節痛、口内炎、発熱といったエリテマトーデス様の症状とレイノー現象、手指の浮腫性硬化、皮膚硬化、指尖部潰瘍、爪上皮出血点といった強皮症の症状が出現し、抗トポイソメラーゼI抗体および抗dsDNA、抗ssDNA抗体が陽性となった。エトスクシミドを中止のみで、症状はすみやかに改善し、特異抗体の抗体価も徐々に低下し、最終的には基準値以下となった。一般的に薬剤性ループスと異なり、環境要因による強皮症関連疾患は原因除去後も持続することが多く、本症例の経過は極めて珍しい。 <u>Toyama T</u>, Asano Y, Taniguchi T, Takahashi T, Ichimura Y, Tamaki Z, Kagami S, Mitsui H, Sato S. 担当部分 27(2):196-7.</p>
<p>12. The impact of transcription factor Fli1 deficiency on the regulation of angiogenesis. (査読付) Fli1欠失の血管新生における影響に対する影響について</p>	共著	平成29年10月	Exp Dermatol.	<p>Etsファミリーの一つである転写因子Fli1は全身性強皮症の血管障害に関連していると言われている。スクラッチアッセイ、transwellアッセイにおいてsiRNAでFLI1をダウンレギュレートしたヒト血管内皮細胞はより高い遊走能を示した。BrdUアッセイではより高い増殖能を示し、FACSでアポトーシス細胞が減少し、細胞の生存性は高まっていることが示された。一方で、マトリゲル上でのtube formationはFli1の欠失で明らかに低下していた。このことから、Fli1の欠失は血管内皮細胞の過剰な増殖による閉塞性血管障害と、微小血管が壊れる事により生じる破壊性血管障害の両方に関与していることが示唆された。 <u>Toyama T</u>, Asano Y, Miyagawa T, Nakamura K, Hirabayashi M, Yamashita T, Saigusa R, Miura S, Ichimura Y, Takahashi T, Taniguchi T, Yoshizaki A, Sato S. 担当部分 26(10):912-8.</p>

13. Therapeutic targeting of TAZ and YAP by dimethyl fumarate in systemic sclerosis fibrosis. (査読付) 全身性強皮症におけるTAZ/YAPのターゲットにしたフマル酸ジメチルの影響の検討	共著	平成30年1月	J Invest Dermatol	<p>フマル酸ジメチル(dimethyl fumarate, DMF)の全身性強皮症の皮膚線維化に対する影響を検討した。DMFはTGFβによって活性化される皮膚線維芽細胞による線維化を抑制した。また、DMFは、PI3 kinase/Akt pathwayを阻害すること、hippo pathwayのエフェクターであるTAZおよびYAPの核内移行を抑制することが示された。さらに、DMFはTGFβ/Akt pathwayによるGSK3βの抑制性リン酸化を阻害することで、GSK3βによるβTRCPを介するTAZタンパクの分解を促進することが明らかとなった。これらの結果と合致して、ヒトのびまん皮膚硬化型全身性強皮症の皮膚においてTAZ/YAPの発現が亢進していることを示した。さらに我々はブレオマイシン誘発強皮症モデルマウスにおいて、DMFが皮膚線維化を抑制する効果があることを示した。</p> <p>Toyama T, Looney AP, Haines P, Baker BM, Stawski L, Simms R, Szymaniak AD, Varelas X, Trojanowska M. Therapeutic targeting of TAZ and YAP by dimethyl fumarate in systemic sclerosis fibrosis. 担当部分 138(1):78-88.</p>
14. Fli1-haploinsufficient dermal fibroblasts promote skin-localized transdifferentiation of Th2-like regulatory T cells. (査読付) Fli1ヘテロ欠失皮膚線維芽細胞が皮膚限局的にT細胞をTh2様制御系T細胞への分化を誘導する	共著	平成30年2月	Arthritis Res Ther	<p>Fli1ヘテロノックアウトマウスを用いてブレオマイシン誘発強皮症モデルマウスを作成すると、野生型と比較して、Th2様、Th17様制御性T細胞がより多く皮膚に集積した。脾臓における細胞のレバトアには変化は特に差が見られなかった。Fli1ヘテロノックアウトマウスの皮膚線維芽細胞ではIL-33、IL-6の産生が亢進していた。野生型マウスの制御系T細胞をFli1ヘテロノックアウトマウスの皮膚線維芽細胞と共培養すると、IL-4産生細胞の割合が増加し、その効果は抗IL-33抗体によって中和された。同様にIL-17A産生細胞の割合も増加傾向であった。皮膚線維芽細胞におけるFli1欠損が免疫細胞と相互作用し、強皮症の病態に関与することが示唆された。</p> <p>Saigusa R, Asano Y, Taniguchi T, Hirabayashi M, Nakamura K, Miura S, Yamashita T, Takahashi T, Ichimura Y, Toyama T, Yoshizaki A, Trojanowska M, Sato S. 担当部分 20(1):23.</p>
15. CXCL13 produced by macrophages due to Fli1 deficiency may contribute to the development of tissue fibrosis, vasculopathy and immune activation in systemic sclerosis. (査読付) マクロファージからCXCL13の全身性強皮症の線維化、血管障害、免疫異常への影響についての検討	共著	平成30年9月	Exp Dermatol	<p>CXCL13は濾胞性T細胞やTh17細胞や制御系T細胞に対するケモカインである。Fli1ヘテロノックアウトマウスの腹腔内マクロファージにおいてCXCL13の発現が亢進していたのに対し、皮膚線維芽細胞、血管内皮細胞においてはFli1をノックダウンしてもCXCL13の発現に変化はなかった。全身性強皮症患者血清において、CXCL13値は健康人と比較し上昇しており、皮膚硬化のスコアと正の相関を持ち、呼吸機能検査とは負の相関を示した。強皮症患者間では、びまん皮膚硬化型、間質性肺疾患合併、肺高血圧合併、手指潰瘍・レイノー現象合併例において、より高頻度にCXCL13高値例がみられた。多変量解析において間質性肺疾患、手指潰瘍がCXCL13値と相関がみられた。</p> <p>Taniguchi T, Miyagawa T, Toyama S, Yamashita T, Nakamura K, Saigusa R, Ichimura Y, Takahashi T, Toyama T, Yoshizaki A, Sato S, Asano Y. 担当部分27(9):1030-7.</p>

<p>16. Progranulin overproduction due to constitutively activated c-Abl/PKC-δ/Fli1 pathway contributes to the resistance of dermal fibroblasts to the anti-fibrotic effect of tumor necrosis factor-α in localized scleroderma. (査読付) c-Abl/PKC δ /Fli1経路の恒常的活性化によるプログランニューリンの過剰産生が限局性強皮症の皮膚線維芽細胞に対してTNF α に対する反応抵抗性を付与することについての検討</p>	共著	平成30年11月	J Dermatol Sci	<p>Progranulin (PGRN) と TNF-α の発現は限局性強皮症の皮膚で、健康皮膚と比較し増加していた。限局性強皮症の皮膚線維芽細胞では TNF-α の抗線維化作用が減弱していた。PGRN を siRNA を用いてノックダウンすると、限局性強皮症の皮膚線維芽細胞においても TNF-α の抗線維化作用が回復した。C-Abl/PKC-δ /Fli1 pathway を阻害することで、PGRN の発現が有意に抑制された。また、限局性強皮症皮膚線維芽細胞において、C-Abl/PKC-δ /Fli1 pathway が恒常的に活性化し、Fli1 が抑制性のリン酸化を受け、蛋白量が低下していることが確認された。これらのことより、限局性強皮症において、PGRN の発現が上昇することにより、TNF-α の抗線維化作用が十分に発揮されていない可能性が示唆された。 Miyagawa T, Ichimura Y, Nakamura K, Hirabayashi M, Yamashita T, Saigusa R, Miura S, Takahashi T, <u>Tovama T</u>, Taniguchi T, Akamata K, Yoshizaki A, Sato S, Asano Y. 担当部分 92(2):207-14.</p>
<p>17. Prediction of therapeutic response before and during i.v. cyclophosphamide pulse therapy for interstitial lung disease in systemic sclerosis: A longitudinal observational study. (査読付) 全身性強皮症の間質性肺疾患に対するシクロフォスファミドパルスの反応性の予測因子についての検討</p>	共著	平成30年12月	J Dermatol	<p>全身性強皮症の間質性肺疾患に対するステロイド併用シクロフォスファミドパルスへの反応性を予測するパラメーターは現時点で確立されたものはない。32人の上記治療を受けた全身性強皮症患者を後方視的に解析した。治療による DLco の変化率をもとに14人の good responder (GR) と10人の poor responder (PR) を区別したところ、PR群では治療開始前の DLco が低く、血清 KL-6、SP-D、CRP が高値であった。KL-6値が持続的に2000 U/ml を超えていること、治療開始後 SP-D が急速に低下することはそれぞれ PR群、GR群に特徴的な所見であった。 Sumida H, Asano Y, Tamaki Z, Aozasa N, Taniguchi T, <u>Tovama T</u>, Takahashi T, Ichimura Y, Noda S, Akamata K, Saigusa R, Miyazaki M, Kuwano Y, Yanaba K, Yoshizaki A, Sato S. 担当部分 45(12):1425-33.</p>
<p>18. Increased expression of aquaporin-1 in dermal fibroblasts and dermal microvascular endothelial cells possibly contributes to skin fibrosis and edema in patients with systemic sclerosis. (査読付) 全身性強皮症の皮膚線維芽細胞と血管内皮細胞のアクアポリン1の発現上昇が病態に及ぼす影響についての検討</p>	共著	平成31年1月	J Dermatol Sci	<p>アクアポリン1 (AQP1) は細胞の水分を調節する水チャネルであり、炎症反応、血管新生、細胞外マトリックスのリモデリングなどに関与していると言われている。全身性強皮症の皮膚線維芽細胞、および血管内皮細胞において、AQP1 の発現が上昇しており、線維化と浮腫の程度と相関していた。TGF-β は皮膚線維芽細胞の AQP1 発現を上昇させた。また血管内皮細胞特異的 Fli1 ノックアウトマウスにおいて、血管内皮細胞の AQP1 の発現が亢進していた。ChIP アッセイにおいて、Fli1 が AQP1 のプロモーター領域に結合することが示された。さらに、強皮症皮膚線維芽細胞、Fli1 をノックダウンした血管内皮細胞において、遊走能は亢進していた。 Yamashita T, Asano Y, Saigusa R, Taniguchi T, Nakamura K, Miura S, <u>Tovama T</u>, Takahashi T, Ichimura Y, Hirabayashi M, Yoshizaki A, Miyagaki T, Sugaya M, Sato S. 担当部分 93(1):24-32.</p>

<p>19. Skin thickness score as a surrogate marker of organ involvements in systemic sclerosis: a retrospective observational study. (査読付) 全身性強皮症におけるないぞ病変の代替マーカーとしてのスキンスコアについての検討</p>	共著	令和元年5月	Arthritis Res Ther	<p>198人の日本人全身性強皮症患者について多重ロジスティック回帰解析したところ、スキンスコアであるmRSSが高いほど間質性肺疾患の合併率が上がり、拘束性障害、拡散障害ともにより高率にみられるという関連が示された。呼吸機能検査における%FVC、%DLcoはmRSSと負に相関することも合わせて示された。以上より、全身性強皮症のスキンスコアは間質性肺疾患の代理マーカーになりうる可能性が示唆された。 Matsuda KM, Yoshizaki A, Kuzumi A, Fukasawa T, Ebata S, Miura S, <u>Toyama T</u>, Yoshizaki A, Sumida H, Asano Y, Oba K, Sato S. 担当部分 21(1):129</p>
<p>20. Unique correlation profile of adiponectin and retinol-binding protein 4 in patients with systemic sclerosis. (査読付) 全身性強皮症におけるアディポネクチンとレチノール結合タンパク4の特徴的な相関についての検討</p>	共著	令和元年9月	J Dermatol	<p>全身性強皮症の患者血清でアディポサイトカイン同士の相関を調べたところ、アディポネクチンとRBP4に正の相関が見られた。両者の低下は全身性強皮症の間質性肺疾患の病勢が強いことを示すマーカーになりうる。痩せ型の高齢者において、血清アディポネクチン値が低い群、血清RBP4値が高い群のメタボリックシンドロームの罹患率が高い。乾癬患者においては、血清アディポネクチン値と血清RBP4値は負の相関をする、など他疾患においてはアディポネクチンとRBP4は負の相関をもつ。アディポネクチンとRBP4はともに産生細胞がadipose tissuesであり、全身性強皮症においてadipose tissuesが低下し、線維化が起こることと関係していることが示唆された。 Asano Y, Masui Y, <u>Toyama T</u>, Sato S. 担当部分 46(9):819-20.</p>
<p>(その他) 1. エトスクシミドによる薬剤誘発性lupus-scleroderma syndrome</p>	—	平成23年10月	第63回日本皮膚科学会西部支部学術大会 沖縄	<p>8歳女。受診5ヶ月前より欠伸発作に対してエトスクシミド内服開始された。1週間後、微熱、倦怠感が出現した。受診時1ヶ月前より手指の冷感、チアノーゼ、レイノー現象、ソーセージ様腫脹、口腔内アフタ、多関節痛が出現したため、受診2週間前に内服中止した。当科初診時、手指に腫脹、爪囲紅斑、チアノーゼがあり、複数の手指、足趾に爪上皮出血点、指尖部虫喰状癬痕、後爪郭部毛細血管拡張を認めた。関節痛は改善していたが、37度前半の微熱は持続していた。血液検査にて凝固異常なく、抗トポイソメラーゼI抗体、抗dsDNA抗体、抗ssDNA抗体が高力価で陽性であった。経過観察にて、自覚症状および皮膚症状は徐々に改善し、疾患特異的自己抗体の力価も改善した。エトスクシミドによる薬剤誘発性lupus-scleroderma syndromeは過去に1例しか報告がなく、稀少な症例と考えられた。遠山哲夫、浅野善英、谷口隆志、鑑慎司、三井浩、市村洋平、高橋岳浩、玉城善史郎、佐藤伸一</p>

<p>2. 鼻部sebaceous trichofolliculomaの1例</p>	<p>—</p>	<p>平成24年10月</p>	<p>第63回日本皮膚科学会中部支部学術大会 大阪</p>	<p>39歳男性。3歳時より鼻背部に腫瘍が出現し、徐々に増大した。20歳時に前医にて切除されたが、同部位より同じ性状の腫瘍が出現し、拡大してきた。当科受診時、左鼻背部に約33mm大、鼻尖部に約10mm大の弾性軟のカリフラワー状淡赤黄色腫瘍が認められ、左鼻腔内には左鼻前庭上方、鼻弁を含む部位に基部を持つ有茎性の腫瘍性病変が認められたため、切除術を施行した。摘出標本の病理組織所見では、鼻腔内腫瘍は、病変中央部の毛包漏斗部が拡張し、その壁から放射状に毛嚢が増殖し、一部未熟なものも混在していることから、trichofolliculomaと診断した。一方鼻背部腫瘍は拡張した毛包漏斗部が散在し、その壁には成熟した脂腺が放射状の増生をしていることから、folliculo-sebaceous cystic hamartomaが考えられたが、臨床的に鼻腔内病変と同一病変と考えられること、さらに臨床所見で軟毛が見られたことよりtrichofolliculomaの一亜型であるsebaceous trichofolliculomaと診断した。本症例を通じてこれら3疾患が同一スペクトラム上にある可能性が示唆された。遠山哲夫、門野岳史、増井友里、記村貴之、山田大資、住田隼一、鑑慎司、佐藤伸一、馬場信太郎、牛尾宗貴</p>
<p>3. 不全型ベーチェット病に合併したリウマチ結節</p>	<p>—</p>	<p>平成24年11月</p>	<p>日本皮膚科学会第845回東京地方会</p>	<p>70歳女。不全型ベーチェット病にて加療中、右手背に6mm大の弾性硬の紅色丘疹が複数出現したため、生検を施行した。病理組織所見では、真皮内に肉芽腫性病変がみられた。中心部には濃い好酸性の膠原線維の変性がみられ、周囲には組織球の不完全な環状に集簇していた。以上よりリウマチ結節と診断した。しかし精査したがRAの合併は認められなかった。ベーチェット病に合併するリウマチ結節は稀少な症例と考えられた。遠山哲夫、藤井ひかり、嶋津苗胤、浅野善英</p>
<p>4. A Possible Contribution Of Visfatin To The Resolution Of Skin Sclerosis In Patients With Diffuse Cutaneous Systemic Sclerosis Via A Direct Anti-Fibrotic Effect On Dermal Fibroblasts And Th1 Polarization Of The Immune Response.</p> <p>VisfatinがTh1反応を促進し、皮膚線維芽細胞に対して抗線維化作用を有することによりびまん皮膚型全身性強皮症の病態に関与している影響について</p>	<p>—</p>	<p>平成24年11月</p>	<p>American College of Rheumatology Annual Meeting 2012 Washington, DC</p>	<p>血清visfatin値は強皮症患者全体、健康人とでは差が見られなかったが、経過6年以上と長いびまん皮膚硬化型強皮症患者において血清visfatin値が上昇していた。そのため、visfatinがlate stageにおける皮膚硬化の自然軽快に寄与している可能性が考えられた。皮膚線維芽細胞においてvisfatinはI型コラーゲンの産生を抑制し、MMP1の産生を促進した。さらにvisfatinはIFN-gとLPS刺激によるTHP-1細胞のIL-12p70の産生を亢進させ、Th1反応を促進させることが示唆された。Tetsuo Toyama, Yoshihide Asano, Yuri Masui, Sayaka Shibata, Kaname Akamata, Shinji Noda, Naohiko Aozasa, Takashi Taniguchi, Takehiro Takahashi, Yohei Ichimura, Hayakazu Sumida, Koichi Yanaba, Takafumi Kadono, Shinichi Sato</p>
<p>5. 右第2趾に生じた verrucous hemangiomaの1例</p>	<p>—</p>	<p>平成25年5月</p>	<p>日本皮膚科学会第848回東京地方会</p>	<p>24歳男。5歳時より右足第2指に紅色丘疹が出現し、増大し、出血を繰り返していた。初診時、右足第2指背に11×15mm大の弾性やや軟で、表面の角化が著明な扁平隆起した暗紫紅色局面が見られた。臨床的にangiokeratomaを疑い、切除術を施行した。病理組織所見では、角層は著明な過角化で、乳頭状の表皮肥厚が見られた。真皮浅層は毛細血管の拡張があり、真皮深層から脂肪織にかけて結節状に毛細血管の増生が見られた。以上よりVerrucous hemangiomaと診断した。遠山哲夫、増井友里、三枝良輔、宮川卓也、記村貴之、山田大資、門野岳史</p>

5. プレオマイシン誘発強皮症モデルマウスの線維化と免疫異常の病態に対してレチノイドAm80が及ぼす影響についての検討	—	平成25年11月	第41回日本臨床免疫学会総会 山口	合成レチノイドであるAm80は強皮症モデルマウスであるプレオマイシン投与マウスとtight skin 1マウスの両方で皮膚、皮下の線維化を改善させた。マウス皮膚においてTGF β 1、CTGFといった組織の線維化に関連するタンパク質の発現を抑制した。さらにAm80は所属リンパ節のエフェクターT細胞の割合を減少させる一方、ナイーブT細胞の割合を増加させた。さらに内皮間葉転換、血管内皮細胞におけるICAM-1の発現、マクロファージ、マスト細胞、リンパ球の血管周囲への浸潤、M2マクロファージへの分化といったBLMによって引き起こされる病態をAm80が改善することが示された。遠山哲夫、浅野善英、高橋岳浩、市村洋平、谷口隆志、野田真史、赤股要、門野岳史、佐藤伸一
6. プレオマイシン誘発強皮症モデルマウスの線維化と免疫異常の病態に対してレチノイドAm80が及ぼす影響についての検討	—	平成26年1月	厚生労働省「強皮症における病因解明と根治的治療法の開発」研究班2013年度班会議 第17回強皮症研究会議	Am80は急性前骨髄球性白血病治療薬として承認されている合成レチノイドで、近年ループス腎炎や血管炎など各種膠原病に対する有用性が臨床試験や動物実験により示唆されている。今回我々はAm80が全身性強皮症の病態に及ぼす影響について、プレオマイシン誘発強皮症モデルマウス、および培養強皮症皮膚線維芽細胞および、TGF- β 刺激で活性化された培養正常ヒト皮膚線維芽細胞を用いて検討した。遠山哲夫、浅野善英、高橋岳浩、市村洋平、谷口隆志、野田真史、赤股要、門野岳史、佐藤伸一
7. Buccal musculomucosal flapにより再建した左下口唇有棘細胞癌の1例	—	平成26年9月	日本皮膚科学会第856回東京地方会	80歳男。C型肝炎の既往があり、初診2年前より口唇の扁平苔癬の加療を近医で受けていた。7か月前より左下口唇に白色結節が出現し、徐々に拡大した。生検にて有棘細胞癌であったため、当院紹介受診した。初診時、左下口唇に21×17mm大の厚い鱗屑を付し浸潤を伴う白色局面が存在した。腫瘍は一部口輪筋を含めて切除し、左頬粘膜からのbuccal musculomucosal flapにより下口唇を再建した。遠山哲夫、増井友里、記村貴之、山田大資、鑑慎司、門野岳史
8. プレオマイシン誘発強皮症モデルマウスの線維化と免疫異常の病態に対してRhoキナーゼ阻害薬fasudilが及ぼす影響についての検討	—	平成26年9月	第42回日本臨床免疫学会総会 東京	全身性強皮症は血管障害と皮膚および内臓諸臓器の線維化を特徴とする原因不明の膠原病で、その発症には免疫異常の関与が示唆されている。fasudilはくも膜下出血術後の脳血管攣縮による脳虚血症状の改善薬として承認されているRhoキナーゼ阻害薬で、膠原病や血管障害に対する有用性が臨床試験や動物実験により示唆されている。今回我々はfasudilが全身性強皮症の病態に及ぼす影響について、プレオマイシン(BLM)誘発強皮症モデルマウスを用いて検討した。fasudilはBLM刺激により誘導される真皮の肥厚およびI型コラーゲン蛋白の発現を有意に抑制した。また、病変部皮膚におけるI型コラーゲン遺伝子のmRNAの発現量を有意に抑制し、MMP13遺伝子のmRNAの発現量を有意に亢進させた。更に、fasudilは病変部皮膚においてCTGF、IL-4、IL-6、VCAM-1、MCP-1遺伝子のmRNAの発現量を有意に抑制した。またintegrin \cdot V、 \cdot 3、 \cdot 5遺伝子の発現量を有意に低下させ、局所的なTGF- β の活性化を抑制することが示唆された。一方、培養強皮症皮膚線維芽細胞およびTGF- β 刺激で活性化された培養正常ヒト皮膚線維芽細胞において、fasudilはI型コラーゲン遺伝子の発現を有意に抑制し、MMP1遺伝子の発現を有意に亢進させた。以上の結果より、fasudilは皮膚線維芽細胞に対する直接的作用と、各種成長因子、細胞接着因子、サイトカイン、ケモカインの発現調節を介した間接的作用により、皮膚において抗線維化作用を示すことが明らかとなった。遠山哲夫、浅野善英、中村洸樹、山下尚志、三枝良輔、高橋岳浩、市村洋平、谷口隆志、門野岳史、佐藤伸一

<p>9. Am80 Ameliorates Bleomycin-Induced Dermal Fibrosis By Suppressing the Pro-Fibrotic Phenotype of Fibroblasts, Endothelial Cells, and Immune Cells. Am80が線維芽細胞、血管内皮細胞、免疫細胞を調節することで、ブレオマイシン誘発強皮症モデルマウスの皮膚線維化を完全させることについての検討</p>	-	平成26年11月	American College of Rheumatology Annual Meeting 2014 Boston.	合成レチノイドであるAm80は強皮症モデルマウスであるブレオマイシン投与マウスとtight skin 1マウスの両方で皮膚、皮下の線維化を改善させた。マウス皮膚においてTGFβ1、CTGFといった組織の線維化に関連するタンパク質の発現を抑制した。さらにAm80は所属リンパ節のエフェクターT細胞の割合を減少させる一方、ナイーブT細胞の割合を増加させた。さらに内皮間葉転換、血管内皮細胞におけるICAM-1の発現、マクロファージ、マスト細胞、リンパ球の血管周囲への浸潤、M2マクロファージへの分化といったBLMによって引き起こされる病態をAm80が改善することが示された。Tetsuo Tovama, Yoshihide Asano, Takehiro Takahashi, Ryosuke Saigusa, Yohei Ichimura, Takashi Taniguchi, Shinji Noda, Kaname Akamata, Shinichi Sato, Takafumi Kadono, Koichi Shudo
<p>10. Fasudil ameliorates fibrosis, vasculopathy, and immune abnormalities in animal models of systemic sclerosis ファスジルが全身性強皮症モデルマウスにおいて線維化、免疫異常、血管病変を改善させることについての検討</p>	-	平成26年11月	日本研究皮膚科学会 第39回年次学術大会・総会 大阪	全身性強皮症は血管障害と皮膚および内臓諸臓器の線維化を特徴とする原因不明の膠原病で、その発症には免疫異常の関与が示唆されている。fasudilはくも膜下出血術後の脳血管攣縮による脳虚血症状の改善薬として承認されている。Rhoキナーゼ阻害薬で、膠原病や血管障害に対する有用性が臨床試験や動物実験により示唆されている。今回我々はfasudilが全身性強皮症の病態に及ぼす影響について、ブレオマイシン(BLM)誘発強皮症モデルマウスを用いて検討した。fasudilはBLM刺激により誘導される真皮の肥厚およびI型コラーゲン蛋白の発現を有意に抑制した。また、病変部皮膚におけるI型コラーゲン遺伝子のmRNAの発現量を有意に抑制し、MMP13遺伝子のmRNAの発現量を有意に亢進させた。更に、fasudilは病変部皮膚においてCTGF、IL-4、IL-6、VCAM-1、MCP-1遺伝子のmRNAの発現量を有意に抑制した。またintegrin・V _α 3、5遺伝子の発現量を有意に低下させ、局所的なTGF-βの活性化を抑制することが示唆された。一方、培養強皮症皮膚線維芽細胞およびTGF-β刺激で活性化された培養正常ヒト皮膚線維芽細胞において、fasudilはI型コラーゲン遺伝子の発現を有意に抑制し、MMP13遺伝子の発現を有意に亢進させた。以上の結果より、fasudilは皮膚線維芽細胞に対する直接的作用と、各種成長因子、細胞接着因子、サイトカイン、ケモカインの発現調節を介した間接的作用により、皮膚において抗線維化作用を示すことが明らかとなった。Tetsuo Tovama, Yoshihide Asano, Kouki Nakamura, Takashi Yamashita, Ryosuke Saigusa, Takehiro Takahashi, Yohei Ichimura, Takashi Taniguchi, Ayumi Yoshizaki, Maria Trojanowska, Shinichi Sato, Takafumi Kadono
<p>11. 再燃時免疫グロブリン大量静注療法が奏効した抗Jo-1抗体陽性皮膚筋炎</p>	-	平成26年12月	第438回日本皮膚科学会京滋地方会 宮地良樹教授 退職記念地方会 京都	62歳男。抗Jo-1抗体陽性の皮膚筋炎に対し、プレドニゾン内服とアザチオプリン内服併用にて加療中、血清CK値の上昇がみられた。MRIにて大腿、体幹の近位筋群にSTIRで高信号が見られ、皮膚筋炎の再燃と判断した。自覚症状もなく病勢が比較的穏やかであったこと、またステロイド糖尿病の増悪の可能性を考慮し、プレドニゾンを増量せず、免疫グロブリン大量静注療法を施行し、寛解導入した。タクロリムス内服併用で寛解を維持できており、再燃は見られていない。皮膚筋炎再燃時、ステロイド増量せずに免疫グロブリン大量静注療法を施行するという治療の選択肢の有用性を示唆する症例であったため、ここに報告した。遠山哲夫 浅野善英、吉崎歩、玉城善史郎、増井友里、山下尚志、丸陽美、佐藤伸一

<p>12. プレオマイシン誘発強皮症モデルマウスの線維化と炎症・免疫異常、血管内皮特異的Fli1欠失マウスの血管障害に対してRhoキナーゼ阻害薬ファスジルが及ぼす影響についての検討</p>	<p>—</p>	<p>平成27年1月</p>	<p>厚生労働省「強皮症・皮膚線維化疾患の診断基準・重症度分類・ガイドライン作成事業」研究班2014年度班会議 厚生労働省「強皮症の病態解明および革新的医薬品開発の研究」研究班2014年度班会議 第18回強皮症研究会議</p>	<p>ファスジルはくも膜下出血術後の脳虚血症状の改善薬として承認されているRhoキナーゼ阻害薬で、膠原病や血管障害に対する有用性が動物実験により示唆されている。今回我々はファスジルが強皮症の病態に及ぼす影響について、プレオマイシン誘発強皮症モデルマウス、血管内皮細胞特異的Fli1欠失マウスを用いて検討し、ファスジルが強皮症の線維化、免疫異常、血管障害に及ぼす影響について興味深い知見を得たので報告する。遠山哲夫、浅野善英、谷口隆志、高橋岳浩、市村洋平、三枝良輔、山下尚志、中村洗樹、門野岳史、Maria Trojanowska、佐藤伸一</p>
<p>13. Am80 ameliorates fibrosis, inflammation, and vasculopathy in animal models of systemic sclerosis - a potential candidate treatment Am80の強皮症モデルマウスの線維化、炎症、血管異常を改善させる一新規治療法の可能性の検討</p>	<p>—</p>	<p>平成27年12月</p>	<p>日本研究皮膚科学会 第40回年次学術大会・総会 岡山</p>	<p>合成レチノイドであるAm80は強皮症モデルマウスであるプレオマイシン投与マウスとtight skin 1マウスの両方で皮膚、皮下の線維化を改善させた。マウス皮膚においてTGFβ1、CTGFといった組織の線維化に関連するタンパク質の発現を抑制した。さらにAm80は所属リンパ節のエフェクターT細胞の割合を減少させる一方、ナイーブT細胞の割合を増加させた。さらに内皮間葉転換、血管内皮細胞におけるICAM-1の発現、マクロファージ、マスト細胞、リンパ球の血管周囲への浸潤、M2マクロファージへの分化といったBLMによって引き起こされる病態をAm80が改善することが示された。Tetsuo Toyama, Yoshihide Asano1, Kouki Nakamura1, Takashi Yamashita1, Ryosuke Saigusai, Takehiro Takahashi1, Yohei Ichimura1, Takashi Taniguchi1, Ayumi Yoshizaki1, Maria Trojanowska, Shinichi Sato</p>
<p>14. 左上腕皮下腫瘍を呈した木村病の1例</p>	<p>—</p>	<p>平成28年2月</p>	<p>第373回日本皮膚科学会岩手地方会学術大会 赤坂俊英教授退任記念学会</p>	<p>28歳男。9年前から左上腕に皮下腫瘍が出現し徐々に増大してきた。初診時、左上腕内側に境界不明瞭な約10 cm大の、弾性軟で正常皮膚色の皮下腫瘍が見られた。血液検査では、好酸球数増多が見られ、血清IgE値は高値であった。病理組織所見では、皮下脂肪織にリンパ濾胞が見られ、その周囲には著明な好酸球浸潤と血管の増生が見られた。以上より木村病と診断した。上腕の皮下腫瘍を呈する木村病は稀少な症例と考えられた。遠山哲夫 吉村順子 佐藤伸一</p>
<p>15. Linear childhood DLEの一例</p>	<p>—</p>	<p>平成31年4月</p>	<p>臨床皮膚科医会総会 高知</p>	<p>7歳男児。初診の約3年前より右上腕に皮疹を自覚した。以降改善なく、線状に増数してきたため近医を受診し、精査加療目的で当院を紹介受診した。初診時、皮疹は右肩から右前腕にかけて、母指頭大から米粒大の鱗屑を固着する軽度萎縮を伴う紅斑が線状にBlaschko線に沿うように配列していた。血液検査では、抗体ss-DNA抗体が陽性を示したが、抗核抗体、抗ds-DNA抗体は陰性であった。右上腕の萎縮性紅斑からの皮膚生検では、真皮表皮境界部にリンパ球主体の炎症細胞浸潤があり、個細胞壊死、組織学的色素失調を伴う液状変性の所見が認められ、真皮にムチンの沈着が見られた。以上の所見より、linear childhood DLEと診断した。線状に配列する小児のDLEは比較的稀であるが、全身性エリテマトーデスへの移行のリスクがあり注意を要する。遠山哲夫 浅野善英 宮川卓也 佐藤伸一</p>

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 富永(清水) 奈保美				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
内科系臨床医学 神経内科学		臨床神経形態学、神経病態免疫学、神経機能画像学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 脳卒中看護とリハビリテーション (第1版)	共著	2013.12月	総合医学社	1章. 脳卒中の基礎知識 Q2. 脳卒中のリスクファクターを教えてください 概要: 脳卒中には脳梗塞と脳出血が含まれる。リスクとしては高血圧や糖尿病、脂質異常症、などの生活習慣病に加え、心房細動や睡眠時無呼吸症候群などが列挙される。また、それぞれの検査方法としては血液検査や心電図、超音波検査などの生理検査でリスクを評価することができる。 掲載ページ: 4-5項 (監修) 塩川芳昭、(著者) 富永奈保美、西山和利
2 レジデントのための脳卒中診療のコツ	共著	2014.1月	文光堂	概要: 脳卒中の診断における血液検査は補助診断の一つに過ぎないが、脳卒中は全身疾患の1つの表現型であることを念頭に治療を行う必要がある。高血圧や糖尿病、脂質異常症等の動脈硬化に加え、心房細動や睡眠時無呼吸症候群などのリスクは血液検査が有用である。また、心原性脳塞栓では、BNPや凝固関連の血液検査が有用である。非典型的な脳卒中に遭遇したら、診断確定のために入念な血液検査が必要である。 II. 脳卒中の診断でこれだけは知っておこう 3. 脳卒中に有用な血液検査オーダー 掲載ページ: 32-37項 (編集) 阿部康二、(著者) 富永奈保美、西山和利
3 最新臨床脳卒中学(下)-最新の診断と治療-(日本臨牀2014年増刊号),	共著	2014.1月	日本臨床社	XIII. 脳梗塞概論 3 脳梗塞の症候学. 概要: 脳梗塞の急性期治療には2000年代に入り、tissue plasminogen activator(tPA)静注療法や血管内治療などが本格的に始まり、長足の進歩がみられる分野である。超急性期治療を生かすためにも脳梗塞の診断には迅速さと正確さが求められる。脳卒中において、頻度の高い症状として、片側の麻痺、感覚障害、言語障害、片側の失明、めまい、失調があげられる。脳卒中のうち脳梗塞の代表的な神経所見について理解を深め、早期診断、早期治療に役立てたい。 掲載ページ: 17-22項 (著者) 富永奈保美、西山和利
4 神経症候障害学-病態とエビデンスに基づく治療と理学療法 (第1版), 脊髄小脳変性症	共著	2016.6月	文光堂、	脊髄小脳変性症 概要: 脊髄小脳変性症 (spinocerebellar degeneration:SCD) は小脳性の運動失調症状を主症状として呈する疾患の総称である。SCDは神経難病疾患の1つであり、公費対象になっている。我が国ではSCDの患者は全国で約2万人いると推定されており孤発性と遺伝性に大別される。遺伝性は約30%であり、特に優性遺伝が9割近くを占めている。非遺伝性のなかでは多系統萎縮症がもっとも多く、皮質性小脳萎縮症は30%程度である。脊髄小脳変性症の概念および分類、各疾患の特徴について列挙する。 掲載ページ: 196-204 (著者) 富永奈保美、西山和利

<p>(学術論文)</p> <p>1 Biphasic neurovascular changes in prolonged migraine aura in familial hemiplegic migraine type (査読付) (長期の家族性片麻痺性片頭痛type 2における二相性神経血管変化について)</p>	<p>共著</p>	<p>2015.3月</p>	<p>J Neurol Neurosurg Psychiatry. 86:344-353</p>	<p>概要：p. H916Lを保有する家族性片麻痺性片頭痛 (FHM) の3人の患者において、精神症状を含む多彩な前駆症状を呈し、かつその前兆が24時間以上遷延する片麻痺性片頭痛 (HMPA) のtype2について、頭痛初期から頭部MRI及び脳血流SPECTで経緯を追っていき、急性期における脳血流 (CBF) の二相性変化を示すことを報告した。また、同時にこの家系の遺伝子検査施行し、ATP1A2遺伝子の突然変異であることを報告した。 掲載ページ：344-353 担当 (役割)：データ収集と解析 共著者：Iizuka T, <u>Tominaga N</u>, Kaneko J, Sato M, Akutsu T, Hamada J, Sakai F, Nishiyama K.</p>
<p>2 Abnormal myocardial scintigraphy in a GTP cyclohydrolase 1 mutation carrier with Parkinson's disease. (査読付) (パーキンソン病のGTPシクロヒドローラーゼ1突然変異キャリアにおける非特異的な心筋シンチグラフィについて)</p>	<p>共著</p>	<p>2016.3月</p>	<p>Mov Disord. 31:</p>	<p>概要：幻覚幻視及び不随意運動を認めパーキンソン病と診断され、内服加療されていたが、L-dopaの効果が乏しく、家族歴に瀬川病があったことから、再精査を行った。MIBG心筋シンチではH/m比の低下を認めず、遺伝子検査にてGTPシクロヒドローラーゼ1突然変異を認め、瀬川病と診断した。掲載ページ：422-423 担当 (役割)：データ収集と解析 共著者：Someko H, Hanajima R, Tsutsumi R, <u>Tominaga N</u>, Nomura Y, Hoshino K, Nishiyama K. Abnormal myocardial scintigraphy in a GTP cyclohydrolase 1 mutation carrier with Parkinson's disease.</p>
<p>3 Association of Progressive Cerebellar Atrophy With Long-term Outcome in Patients With Anti-N-Methyl-d-Aspartate Receptor Encephalitis. (査読付) (抗N-メチル-d-アスパラギン酸受容体脳炎患者における進行性小脳萎縮と長期転帰との関連について)</p>	<p>共著</p>	<p>2016.6月</p>	<p>JAMA Neurol. 73:</p>	<p>概要：抗N-メチル-d-アスパラギン酸受容体 (NMDAR) 脳炎は、一部の患者は可逆性びまん性脳萎縮 (DCA) を発症するが、進行性の脳および小脳萎縮の長期的な臨床的重要性は不明である。15人の患者の臨床転帰について追跡期間中央値68か月 (範囲、10~179か月) 後に評価した。フォローアップMRIにより、5人の患者 (33%) でDCAが明らかになり、2人 (13%) で進行性の小脳萎縮と関連していた。小脳萎縮は長期転帰不良と関連していたが、小脳萎縮を伴わないDCA、可逆的である可能性があり、臨床転帰不良と直接的な関連はなかったが、対照的に小脳萎縮は不可逆的であった。 掲載ページ：706-713 担当 (役割)：データ収集と解析 共著者：Iizuka T, Kaneko J, <u>Tominaga N</u>, Someko H, Nakamura M, Ishima D, Kitamura E, Masuda R, Oguni E, Yanagisawa T, Kanazawa N, Dalmau J, Nishiyama K.</p>
<p>4 Autoimmune brachial amyotrophic diplegia and sensory neuropathy with Sjogren's syndrome: A case report. (査読付) (シェーグレン症候群を伴う自己免疫性上腕筋萎縮性両麻痺および感覚神経障害を呈した症例について)</p>	<p>共著</p>	<p>2016.6月</p>	<p>J Neurol Sci. 368:</p>	<p>概要：シェーグレン症候群と診断され、無治療で経過観察されていたが2か月前から徐々に四肢の筋力低下を呈し進行した。電気生理検査を施行し、複合筋活動電位 (CMAP) の低下は認めず、感覚神経活動電位 (SNAP) の低下のみを認めた。筋萎縮は四肢遠位筋優位であり、進行増悪し血漿交換療法や免疫グロブリン療法を施行し、症状の進行は停止した。ALS様の進行性の筋力低下だったが、免疫療法が奏功した。掲載ページ：1-3 担当 (役割)：筆頭著者につき、データ収集及び総括を行った。 共著者：<u>Tominaga N</u>, Iizuka T, Kaneko J, Nagai M, Hara A, Onozawa Y, Kanazawa N, Nishiyama K.</p>

<p>5 Cryptogenic NORSE: Its distinctive clinical features and response to immunotherapy. <i>Neurol Neuroimmunol Neuroinflamm.</i> (査読付) (C-NORSE: 特徴的臨床像と免疫療法反応性について)</p>	<p>共著</p>	<p>2017.9月</p>	<p><i>Neurol Neuroimmunol Neuroinflamm.</i> 4:e396</p>	<p>概要: 潜在性に発症する難治性てんかん重積症 (C-NORSE) の特徴的な臨床的特徴と、初期の臨床評価に基づくC-NORSEスコアを報告する。C-NORSEの11人の患者は、てんかん重積状態の前に発熱が頻繁に見られ、治療を受けた10人の患者のうち2人だけが一次免疫療法に反応し、IVシクロホスファミドで治療された5人の患者のうち4人が治療に反応した。NMDAREの32人の患者と比較して、C-NORSEの患者は、てんかん重積状態、換気サポート、および対称脳MRI異常があり、不随意運動の頻度が少なかった。C-NORSEスコアは、NMDARE患者よりもC-NORSE患者の方が高かった。C-NORSEの患者は、NMDAREの患者とは異なるさまざまな臨床免疫学的特徴を有しており、C-NORSEスコアは、それらを区別するのに役立つ場合がある。 掲載ページ: :706-713 担当 (役割): データ収集と解析 共著者: Iizuka T, Kanazawa N, Kaneko J, <u>Tominaga N</u>, Nonoda Y, Hara A, Onozawa Y, Asari H, Hata T, Kaneko J, Yoshida K, Sugiura Y, Ugawa Y, Watanabe M, Tomita H, Kosakai A, Kaneko A, Ishima D, Kitamura E, Nishiyama K.</p>
<p>6 Pitfalls in clinical diagnosis of anti-NMDA receptor encephalitis. (査読付) (抗NMDA受容体脳炎の臨床診断における落とし穴について)</p>	<p>共著</p>	<p>2018.1月</p>	<p><i>J Neurol.</i> 265</p>	<p>概要: 抗N-メチル-D-アスパラギン酸受容体 (NMDAR) 脳炎の臨床診断における落とし穴を報告する。神経細胞表面抗原に対する自己抗体の検査を受けた臨床的に自己免疫性神経障害が疑われる221人の患者の臨床情報を後方視的に検討した。41人の患者が抗NMDARの可能性の診断基準を満たしたが、最終診断が異なる症例がいた。可能性のある基準は有効だが、特に50歳以上の患者、または孤立性てんかん症候群、非定型脱髄症候群、またはHSE後の患者の抗NMDAR脳炎を診断するには、臨床表現型の多様性を考慮に入れる必要がある。掲載ページ: :586-596 担当 (役割): データ収集と解析 共著者: Kaneko A, Kaneko J, <u>Tominaga N</u>, Kanazawa N, Hattori K, Ugawa Y, Moriya A, Kuzume D, Ishima D, Kitamura E, Nishiyama K, Iizuka T.</p>
<p>7 Practical issues in measuring autoantibodies to neuronal cell-surface antigens in autoimmune neurological disorders: 190 cases. (査読付) (自己免疫性神経障害における神経細胞表面抗原に対する自己抗体の測定における実際的な問題: 190例の検討)</p>	<p>共著</p>	<p>2018.7月</p>	<p><i>J Neurol Sci.</i> 390:26-32</p>	<p>概要: 自己免疫性神経障害における神経細胞表面抗原に対する自己抗体の測定における実際的な問題: 190例の検討について さまざまな自己免疫神経障害 (AND) における神経細胞表面抗原 (NSA) に対する自己抗体の測定における実際的な問題に対処することを目的として調査した。後方視的に190例で、抗体検出率 (ADR) と抗体表現型の関連性を評価した。NSA抗体は、「抗NMDAR脳炎の可能性」で最も頻繁に同定され、次に「明確なALE」、「AEの可能性」、「SPSD」が続いたが、SADでは同定されなかった。NMDAR、LGI1およびGlyRは臨床表現型と関連していた。細胞表面抗原は、個々の表現型に基づいて決定する必要がある。 掲載ページ26-32 担当 (役割): データ収集と解析 共著者: Kaneko J, Kanazawa N, <u>Tominaga N</u>, Kaneko A, Suga H, Usui R, Ishima D, Kitamura E, Akutsu T, Yoshida K, Nishiyama K, Iizuka T.</p>

<p>8 Prodromal headache in anti-NMDAR encephalitis: An epiphenomenon of NMDAR autoimmunity. (査読付) (抗NMDAR脳炎における前駆症状の頭痛：NMDAR自己免疫のエピフェノメノン)</p>	<p>共著</p>	<p>2018.6月</p>	<p>Brain Behav. 8:</p>	<p>概要：抗NMDA受容体（NMDAR）脳炎における前駆性頭痛の性質を調査すること。頭痛はしばしば発熱と髄液細胞増多症を伴って発症したが、すぐに精神症状が発現した。これはクロスリンキング及び内在化によってシナプスNMDARの減少を引き起こし、「解離性麻酔」を模倣した状態を引き起こす抗体媒介メカニズムに関する現在の知識に基づいて、前駆性頭痛は自己抗体の直接的な影響ではなく髄膜炎によって引き起こされる可能性が高いと推測した。頭痛後の精神行動の変化は、診断の重要な手がかりとなる。掲載ページ：:e01012 担当（役割）：筆頭著者として研究デザイン及び総括 共著者：Tominaga N, Kanazawa N, Kaneko A, Kaneko J, Kitamura E, Nakagawa H, Nishiyama K, Iizuka T. Prodromal headache in anti-NMDAR encephalitis: An epiphenomenon of NMDAR autoimmunity.</p>
<p>9 Anti-HMGCR myopathy following acute Epstein-Barr virus infection. (査読付) (急性EBウイルス感染後の抗HMGCRミオパチーについて)</p>	<p>共著</p>	<p>2020.5月</p>	<p>Muscle Nerve. 61</p>	<p>概要：近年、様々な筋炎特異的抗体が明らかになってきている。脂質異常症の治療に用いられるスタチン製剤は、副作用として筋痛やクレアチンキナーゼ（CK）などの筋原性酵素の上昇をきたすことが知られている。また、スタチン製剤中止後も筋力低下やCK高値の持続を認める症例もある。今回は、スタチン製剤誘導筋炎の自己抗体として注目されている抗3-hydroxy-3-methylglutaryl-coenzyme A reductase（HMGCR）抗体陽性の壊死性ミオパチーを経験したが、スタチンの内服歴は認めなかった。抗HMGCR抗体は、筋炎特異的自己抗体であり、発症機序として、ウイルス感染、外傷等の環境要因による筋障害がHMGCRの過剰な発現を亢進することが起因するといわれている。しかし、EBウイルス感染後に壊死性ミオパチーを発症した報告はこれまでになく、非常に貴重な症例を経験した。掲載ページ：:E5-E8 担当（役割）：データ収集と解析 共著者：Shimizu T, Kondo Y, Kanazawa N, Kaneko A, Tominaga N, Nagai M, Iizuka T, Nishino I, Nishiyama K.</p>
<p>10 Differential effects of thyrotropin releasing hormone (TRH) on motor execution and motor adaptation process in patients with spinocerebellar degeneration (査読付) (脊髄小脳変性症患者の運動実行および運動適応プロセスに対する甲状腺刺激ホルモン放出ホルモン（TRH）の異なる効果について)</p>	<p>共著</p>	<p>2020.5月</p>	<p>J Neurol Sci. 2020;415:116927</p>	<p>概要：脊髄小脳変性症患者の運動実行および運動適応プロセスに対する甲状腺刺激ホルモン放出ホルモン（TRH）の異なる効果 TRHは、プリズム適応タスクのベースライン到達パフォーマンスを含む臨床小脳性運動失調に異なった影響を及ぼしたが、TRHはプリズム適応の学習プロセスに影響を与えなかった。さまざまな小脳機能的側面が、感覚運動適応と単純な運動実行（臨床的に評価された小脳性運動失調）の学習プロセスの根底にある可能性がある。掲載ページ:116927 担当（役割）：症例の主治医を担った 共著者：Shimizu T, Tsutsumi R, Shimizu K, Tominaga N, Nagai M, Ugawa Y, Nishiyama K, Hanajima R.</p>
<p>(その他)</p>				

1 抗グリシン受容体抗体関連疾患の臨床スペクトラム	共著	2013. 5月	臨床神経学, 53	概要：2008 年以降、抗グリシン受容体 (GlyR) 抗体陽性例が報告されている。経験した28 例について検討した。内訳は PERM17 例、典型的 Stiff-person 症候群 (SPS) 5 例、SPS 亜型 5 例、視神経萎縮 1 例。9 例に抗 GAD 抗体をみとめ、甲状腺炎 5 例、糖尿病 3 例、胸腺腫 3 例、アジソン病 2 例を随伴していた。免疫療法あるいは胸腺腫摘出術を受けた 21 例は改善したが、免疫療法を受けなかった 6 例中 2 例は死亡あるいは心停止にいたった。本抗体は脳幹および脊髄の GlyR を抑制し、 α 運動ニューロンの過剰発火と各種入力刺激に対する過剰反応を誘発させていると推測する。 掲載ページ：1063-1066 (著者) 飯塚高浩、 <u>富永奈保美</u> 、金子淳太郎
2 脳血管障害 1) 急性期への対応.	共著	2013. 8月	日本内科学会雑誌, 102:1923-1929	概要：脳血管障害急性期の治療は大きな変革期を迎えている。本邦では2005年に発症後3時間以内の脳梗塞急性期に対するrt-PA静注療法が認可されたが、これは単なる1つの治療法の域を越え、脳卒中急性期診療体制全体に大きな影響をもたらした。rt-PA静注療法の解禁からの月日の積み重ねはその治療限界をも明らかにしつつある。しかし未だに脳卒中診療にあたる医療機関や医療スタッフの数は限られており、脳卒中に長けた医師の育成は急務である。掲載ページ：1923-1929 (著者) <u>富永奈保美</u> 、西山和利
3【特集：救命救急に必要な水電解質の知識】脳卒中と電解質異常.	共著	2014. 7月	腎と透析 77:49-52,	概要：脳卒中には脳梗塞と脳出血がある。そのなかで画像検査とは別に、血液検査で電解質異常を呈することがある。低ナトリウム血症や低カルシウム血症は意識障害を呈することがあり、さらには脳梗塞のリスクになりえる。また、低カリウム血症や高カリウム血症では不整脈を引き起こし、塞栓症を発症するリスクが高くなる。また腎機能障害でも意識障害や脳梗塞のリスクを呈し、低栄養などでも脳出血のリスクになるため、意識障害や麻痺を呈する救急患者を診察する際には上記のようなdataを確認し、治療にあたる必要がある。掲載ページ49-52 (著者) <u>富永奈保美</u> 、西山和利
4【特集：脳卒中EBMカタログI】tPA ECASS I/II/III.	共著	2014. 10月	Clinical Neuroscience. 32:366-367.	概要：脳梗塞の急性期治療には2000年代に入り、tissue plasminogen activator (tPA) 静注療法や血管内治療などが本格的に始まり、長足の進歩がみられる分野である。超急性期治療を生かすためにも脳梗塞の診断には迅速さと正確さが求められる。脳卒中において、頻度の高い症状として、片側の麻痺、感覚障害、言語障害、片側の失明、めまい、失調があげられる。脳卒中のうち脳梗塞の代表的な神経所見について理解を深め、早期診断、早期治療に役立つ。(著者) <u>富永奈保美</u> 、西山和利
5【心疾患・COPD・神経疾患の緩和ケア】神経変性疾患におけるおもな症状とその対応.	共著	2017. 6月	緩和ケア	概要：神経変性疾患は現代の医療においては治療困難とされている。特に筋萎縮性側索硬化症は完治困難な疾患の一つであり、経過により必要なケアや対処を早期から介入していくことがQOL向上すなわち緩和ケアとして重要である。予後不良因子として、球麻痺発症、早期の頸部筋力低下、呼吸筋障害、低栄養、高齢発症などがあげられ、特に球麻痺発症例では発症からの生存期間が短い傾向があり、独立した予後不良因子としてあげられており、呼吸苦に対して少量のオピオイドが苦痛緩和に効果的である。掲載ページ：138-142項 (著者) <u>富永奈保美</u> 、荻野美恵子
(学会発表等)				

1 散在性脳微小出血と多発性脳血管拡張から脳血管炎と初期に診断した心臓粘液腫の一例：診断上の pit fall.	—	2013年4月	第11回東京 Stroke フロントニア、東京	散在性脳微小出血と多発性脳血管拡張から脳血管炎と初期に診断した心臓粘液腫の一例：診断上の pit fallについて研究会で発表 富永奈保美
2 遷延性前兆を伴う片麻痺性片頭痛重積発作における脳循環代謝の二相性変化 (第2報)	—	2013年5月	第54回日本神経学会学術大会、東京	遷延性前兆を伴う片麻痺性片頭痛重積発作における脳循環代謝の二相性変化について統報の報告 富永奈保美, 飯塚高浩, 笠倉至言, 金子淳太郎, 濱田潤一, 西山和利, 坂井文彦
3 Prodromal headache in anti-NMDAR encephalitis: An epiphenomenon of NMDAR autoimmunity. (査読付) (抗NMDAR脳炎における前駆症状の頭痛：NMDAR自己免疫のエピフェノメノン)	—	2018年11月	第46回日本頭痛学会学術大会、神戸	Prodromal headache in anti-NMDAR encephalitis: An epiphenomenon of NMDAR autoimmunity. (査読付) (抗NMDAR脳炎における前駆症状の頭痛：NMDAR自己免疫のエピフェノメノンについて、イブニングセミナーで報告 富永奈保美

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	長瀬 清亮
研 究 分 野			研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 総合生物分野 腫瘍学 腫瘍治療学			肺癌、化学療法、集学的治療、臨床試験		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要	
(著書) 1 血液・腫瘍科 vol. 49 No. 3 特集 「T細胞リンパ腫に関する最近の研究成果」 話題 進行期非小細胞肺癌に対するdocetaxel、cisplatin併用療法とvindesine、cisplatin併用療法のランダム化第Ⅲ相試験 p272-277 査読なし	共著	平成16年9月	科学評論社 長瀬清亮、久保田馨	未治療Ⅳ期非小細胞肺癌患者に対してDOC+CDDP療法(DC群)とVDS+CDDP(VC群)療法の第Ⅲ相比較試験を行ったが、この試験成績を中心にⅣ期非小細胞肺癌患者の化学療法について概説する。主要評価項目の全生存期間は、DC群11.3か月、VC群9.6か月で有意にDC群が良好であった(p=0.014)。奏効率(DC群/VC群=37.1/21.2%、p=0.0035)、QOL身体面(p=0.02)でいずれもDC群が有意に良好であった。これによりDOC+CDDP療法はⅣ期非小細胞肺癌の初回治療における標準レジメンの1つとみなされる。	
2 肺癌診療マニュアル 5章 肺癌の治療 D. 臓器機能低下例および末梢神経障害のある患者における抗癌剤の選択 p167-173 査読なし	共著	平成18年10月	中外医学社 長瀬清亮、後藤功一	肺癌の化学療法は各臓器機能が十分保たれている患者が対象となる。しかしそうでないケースもあり、抗癌剤の選択や投与量の修正が必要も、明確な規準やガイドラインはない。そこで腎・肝・肺・心機能低下のある肺癌患者に対して、抗癌剤の選択、投与量の修正の基本的な考え方を示した。今後、様々な臓器機能低下や合併症を有する肺癌患者に対する、より安全で効果的な化学療法の規準やガイドラインが作成されることが望まれる。現時点では、肺癌化学療法に十分な知識と経験を持つ専門の医師が、細心の注意を払い治療を行うことが何よりも重要である。	
3 肺癌治療を安全に行うた 第8章 抗生剤テスト p281-282 査読なし	共著	平成18年4月	中外医学社 長瀬清亮、久保田馨	抗菌剤静脈投与前の微量の抗菌剤を用いた皮内反応の意義、有用性については十分な検証がなされていない。当科では1994年から皮内反応は行っていないが以下のことを申し合わせた。1) 既往歴の十分な問診。抗菌剤アレルギー歴は必ず確認。アレルギーを起こした特定の薬剤の投与は行わない。2) 抗菌剤アレルギー歴を有する患者には皮内反応を行う。3) 抗菌剤投与開始後は患者の状態を注意深く観察する。皮内反応を中止も実際には特に問題はなかった。抗菌剤投与に際しては、十分な問診とアレルギー発生時の素早い対応を徹底することが望まれる。	
4 呼吸器科 vol. 12 No. 4 特集「中皮腫の現況と動向」 話題2 光干渉断層法(光エコー) p344-350 査読なし	共著	平成19年10月	科学評論社 長瀬清亮、坪井正博、加藤治文ら	光干渉断層法(OCT)は光計測分野の先端技術であり、分解能は超音波診断装置より高く、内視鏡下で用いるOCT用細径プローブの開発に伴い、呼吸器領域でも臨床応用を目指している。正常気管気管支は気管支粘膜、粘膜下組織が層構造として、周囲の血管、肺泡構造も確認できる。中枢型肺癌は粘膜及び粘膜下組織が肥厚、層構造が消失し、腫瘍の内部構造は不均一となる。OCTは病理切片の顕微鏡像と同等な画質を得ることが期待され、OCT画像で組織学的診断を行うこと(optical biopsy)が目標であるが、その実現には更なるOCTのハード面での改善が不可欠である。	
5 ナーシングケアQ & A 「肺がんケアQ & A」 第2章 17 化学療法時の患	共著	平成20年1月	総合医学社 長瀬清亮	抗がん剤の副作用を十分理解したうえで、バイタルサインや化学療法開始前との症状の変化を中心に観察することが重要である。副作用は1か月以内に出現するものがほとんどであるが、なかには数日から数年	

<p>者指導と看護</p> <p>化学療法後の観察ポイントと看護の要点について教えて？いつまで観察する必要がありますか？ p210-211 査読なし</p>				<p>このころのものが、ほかにはなかなか見つからず後に現れるものまであり、長期にわたる観察が必要である。頻度が高く重要なものを中心に、副作用について十分に理解することが大切である。さらに患者さんの訴えに耳を傾け、わずかな変化にも気づくことができるよう丁寧にアセスメントをすることを心がける。</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1 Detection of unsuspected distant metastases and/or regional nodes by FDG-PET in LD-SCLC scan in apparent limited-disease small-cell lung cancer.</p> <p>限局型小細胞肺癌におけるFDG-PETによる予期せぬ遠隔転移の指摘 査読あり</p>	共著	平成19年9月	<p>Lung Cancer; 57 : 328-333</p> <p>Niho S, <u>Nagase S</u>, Nishiwaki Y et al.</p>	<p>限局型小細胞肺癌のステージングにFDG-PET追加の有用性を検討した。63例を対象とし、そのうち6例でFDG-PETでのみ遠隔転移が指摘され、5例が確定した(8%、95%CI:3-18%)。またCTで肺門・縦隔リンパ節転移陰性と判断された症例のうち、対側肺門リンパ節の3例を含む9例(14%)にリンパ節転移が指摘された。FDG-PETにより8%の症例で治療方針が変更となった。限局型小細胞肺癌の初回ステージングにはFDG-PETを用いることが推奨される。</p>
<p>2 Individual adjuvant chemotherapy for surgically resected lung cancer and roles of biomarkers.</p> <p>切除された肺癌に対する個別化の術後補助化学療法とバイオマーカー 査読あり</p>	共著	平成21年6月	<p>Ann Thorac Cardiovasc Surg 15 : 144-149</p> <p>Ikeda N, <u>Nagase S</u>, Ohira T.</p>	<p>完全切除後病理病期II-IIIA期の非小細胞肺癌に対して、シスプラチンベースの術後補助療法の有用性が確認されている。5つの試験のメタ解析であるLACEは5年生存率で4.2%の上乗せ効果を示している。一方で術後補助療法のベネフィットのある患者の同定は重要である。手術標本によるトランスレショナルリサーチが盛んに行われており、個別化治療がますます広がり、術後補助療法のベネフィットのある患者のバイオマーカーの確立が望まれる。</p>
<p>3 Randomised, phase III trial of epoetin- b to treat chemotherapy-induced anaemia according to the EU regulation.</p> <p>化学療法に伴う貧血に対するエポエチンβの第III相比較試験 査読あり</p>	共著	平成23年9月	<p>Br J Cancer; 105:1267-1272</p> <p>Fujisaka Y, <u>Nagase S</u>, Saijo N et al.</p>	<p>エリスロポエチン刺激剤はがん化学療法による貧血(CIA)に対する輸血を減少させる効果がある。しかし腫瘍の増大を来す、血栓塞栓症が1.6倍に増加するとの報告もある。本試験では186例のCIA患者を対象としてEPOあるいはプラセボに割り付け、12週間にわたり毎週投与した。主要評価項目である輸血を受ける、あるいはHb<8.0g/dlとなった患者割合はEPO群/プラセボ群=10.0/56.4%(p<0.001)でありEPO群が有意に低かった。血栓塞栓症は両群1.1%で差はなく、QOL、1年生存割合も同等であった。EPOの毎週投与は有用であった。</p>
<p>4 最近の非小細胞肺癌ガイドラインに基づいたアンケート調査の結果 査読あり</p>	共著	平成23年2月	<p>癌と化学療法; 38: 225-231</p> <p>竹田雄一郎、<u>長瀬清亮</u>、池田徳彦ら</p>	<p>新宿区の病院勤務する肺癌診療担当医師を対象に、IIIB/IV期非小細胞肺癌の日常診療における治療選択のアンケート調査を行った。2010年3月に7病院12診療科28人から回答が得られた。EGFR遺伝子変異陽性例で初回治療からEGFR-TKIの選択が行われるなど最近ガイドラインに取り込まれた内容にも対応しており、世界標準に準じた選択がほぼ行われていた。一方で二次、三次治療でも白金製剤と第3世代抗癌剤の2剤併用を選択する傾向、三次治療では細胞障害性薬剤の単剤使用が選択される傾向があった。</p>
<p>5 Histology and smoking status predict survival of patients with advanced non-small-cell lung cancer. Results of West Japan Oncology Group (WJOG) Study 3906L</p> <p>進行非小細胞肺癌における予後と組織型、喫煙状況の関連WJOG3906L 査読あり</p>	共著	平成25年6月	<p>J Thorac Oncol; 8 : 753-758</p> <p>Kogure Y, <u>Nagase S</u>, Nakagawa K et al.</p>	<p>2004-2005年にWJOG参加40施設でIIIB/IV期非小細胞肺癌で、初回の抗癌剤治療を受けた2542名の生存期間と喫煙状況が調査された。生存期間中央値は非喫煙者腺癌で593日、これは喫煙者腺癌(384日)、非喫煙者非腺癌(374日)、喫煙者非腺癌(319日)より有意に長かった(p<0.001)。腺癌においては、pack-yearsが多いことと禁煙からの期間が短いことが生存期間の短さと有意に関係したが、非腺癌ではそうではなかった。腺癌は予後良好と関係し、喫煙状況だけは腺癌の予後と関係していた。</p>
<p>6 Multiplex genomic profiling of non-small cell lung cancers from the</p>	共著	平成26年4月	<p>Oncotarget; 30 ; 5 : 2293-2304</p> <p>Okamoto I, <u>Nagase S</u>,</p>	<p>進行非小細胞肺癌に対する第III相比較試験であるLETS試験に登録症例のFFPE腫瘍標本を集め、Sequenom MassARRAY platformを用いて遺伝子解析を行った。</p>

<p>LEIS phase III trial of first-line S-1/carboplatin versus paclitaxel/carboplatin: results of a West Japan Oncology Group study.</p>			<p>Nishio K et al.</p>	<p>いし遺伝子解析を行った。Somatic mutationが認められたものは非扁平上皮癌の48%、扁平上皮癌の45%で、EGFR (17%)、TP53 (11%)、STK11 (9.8%)、MET (7.6%)、KRAS (6.2%)であった。FusionはALK (2.5%)、ROS1 (2.1%)、RET (0.4%)であった。本研究は第III相試験に参加した患者の腫瘍標本を用いたMultiplex診断の最初の報告である。</p>
<p>非小細胞肺癌初回治療におけるカルボプラチン/エスワンとカルボプラチン/パクリタキセルの第III相比較試験、LEISのマルチプレックス遺伝子解析 査読あり</p>	<p>共著</p>	<p>平成26年10月</p>	<p>Lancet Oncol; 15:1236-1244 Seto T, Nagase S, Yamamoto N et al.</p>	<p>EGFR遺伝子変異陽性非小細胞肺癌に対してはEGFR-TKI単剤が標準治療である。本研究は1次治療としてのエルロチニブ単剤とエルロチニブ+ベバシズマブ併用を比較したランダム化第II相試験である。154例が登録され各群77例を割り付けた。主要評価項目のPFSは併用群が16.0か月、単剤群が9.7か月 (HR 0.54, 95%CI:0.36-0.79, p=0.0015) であり有意に併用群で良好であった。重篤な有害事象の発現率は両群で同程度であった。エルロチニブ+ベバシズマブ併用療法はEGFR遺伝子変異陽性非小細胞肺癌に対して新たな1次治療として有望である。</p>
<p>7 Erlotinib alone or with bevacizumab as first-line therapy in patients with advanced non-squamous non-small-cell lung cancer harbouring EGFR mutations (J025567): an open-label, randomised, multicentre, phase 2 study.</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年11月</p>	<p>Clin Lung Cancer; Nov;16(6):e213-221 Kudo Y, Nagase S, Ikeda N et al.</p>	<p>EGFR遺伝子変異の有無は予後予測の重要な因子であるが、術後再発後の予後予測因子であるかは明らかにされていない。そこで本研究では、術後再発を来した肺癌のEGFR遺伝子変異状況と術後病理病期の関係について、連続198例を対象に後方視的に検討した。術後再発後3年生存率はEGFR陽性/陰性/不明=68.6/51.7/27.0%、術後病理I-II/III期=52.5/29.3%であった。EGFR遺伝子変異陽性患者において、術後病理I-II期はIII期に比べ術後再発後の生存がより長かった。</p>
<p>EGFR陽性非扁平上皮非小細胞肺癌の初回治療におけるエルロチニブとエルロチニブ+ベバシズマブの無作為化第II相試験 (J025567試験) 査読あり</p>				
<p>8 Prognostic Factors for Survival After Recurrence in Patients With Completely Resected Lung Adenocarcinoma: Important Roles of Epidermal Growth Factor Receptor Mutation Status and the Current Staging System.</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年11月</p>	<p>Clin Lung Cancer; Nov;16(6):e213-221 Kudo Y, Nagase S, Ikeda N et al.</p>	<p>EGFR遺伝子変異の有無は予後予測の重要な因子であるが、術後再発後の予後予測因子であるかは明らかにされていない。そこで本研究では、術後再発を来した肺癌のEGFR遺伝子変異状況と術後病理病期の関係について、連続198例を対象に後方視的に検討した。術後再発後3年生存率はEGFR陽性/陰性/不明=68.6/51.7/27.0%、術後病理I-II/III期=52.5/29.3%であった。EGFR遺伝子変異陽性患者において、術後病理I-II期はIII期に比べ術後再発後の生存がより長かった。</p>
<p>完全切除後の肺癌再発後の予後 -EGFR遺伝子変異とステージング- 査読あり</p>				
<p>9 Nedaplatin plus docetaxel versus cisplatin plus docetaxel for advanced or relapsed squamous cell carcinoma of the lung (WJOG5208L): a randomised, open-label, phase 3 trial.</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年12月</p>	<p>Lancet Oncol; 16:1630-1638 Shukuya T, Nagase S, Yamamoto N et al. West Japan Oncology Group</p>	<p>未治療進行肺扁平上皮癌において、シスプラチン+ドセタキセル併用療法 (標準治療群、シスプラチン群) とネダプラチン+ドセタキセル併用療法 (試験治療群、ネダプラチン群) を比較する第III相試験を実施した。355例が登録され、主要評価項目である全生存期間はネダプラチン群/シスプラチン群=13.6/11.4か月 (HR 0.81, 95%CI: 0.65-1.02, p=0.037) で、有意にネダプラチン群が良好であった。ネダプラチン+ドセタキセル併用療法は進行肺扁平上皮癌に対して新たな治療レジメンになり得る。</p>
<p>進行肺扁平上皮癌に対するドセタキセル+ネダプラチン併用療法とドセタキセル+シスプラチン併用療法の比較第III相試験 (WJOG5208L) 査読あり</p>				
<p>(報告発表) 1 Correlation of Optical Coherence Tomography Imaging with the Efficacy of Photodynamic Therapy in the Central Type Early Stage Lung Cancers.</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年4月1日</p>	<p>15th World Congress for Bronchology Tokyo Nagase S, Tsuboi M, Kato H et al.</p>	<p>中心型早期肺癌はPDTで根治可能であるが、OCT所見とPDTの効果との関連性を後方視的に検討した。OCTで異常所見がみられない、または上皮層の肥厚のみの病変は全てCR導入かつ持続していた。上皮層が肥厚、層構造が消失している病変のうち14%はCRが得られない、あるいは再発した。OCT所見が正常であったり上皮層の肥厚のみの症例はPDTで根治することが予測できるかもしれない。それ以外の場合はCRに導入できなかったり、再発したりする可能性があり、注意深く経過観察をする必要があると考えられた。</p>
<p>中心型早期肺癌におけるPDTの効果とOCT画像の関係</p>				
<p>2 局所進行非小細胞肺癌に対するビノレルピン+カルボプラチン併用化学療法と同時胸部放射線治療の有効性、安全性の第II相試験</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年11月12日</p>	<p>第50回肺癌学会総会 京王プラザ 長瀬清亮、高橋典明、</p>	<p>局所進行非小細胞肺癌に対するビノレルピン+カルボプラチン併用化学療法と同時胸部放射線治療の有効性、安全性の第II相試験結果を報告した。相対照群との比較で</p>

胸肺がんの最新治療の第11回大会			池田徳彦ら	<p>経過を報告した。低倍照野で能く切除不能III期非小細胞肺癌43例が登録された。奏効割合は53.3%であった。主なGrade3以上の有害事象は好中球減少61%、貧血4.9%、血小板減少100%、発熱性好中球減少、肺臓炎がそれぞれ2.4%であった。放射線肺臓炎による治療関連死を1例認めた。局所進行非小細胞肺癌に対してビノレルビン+カルボプラチン併用化学療法と同時胸部放射線治療は1つの治療選択肢となり得る。</p>
3 肺癌の外来化学療法におけるシスプラチン一括投与の取り組みと安全性の確認	共著	平成21年11月13日	第50回肺癌学会総会 京王プラザ 長瀬清亮、内田修、 池田徳彦ら	<p>外来化学療法センターでのシスプラチン一括投与の安全性について検討した。外来で60mg/m²以上のシスプラチン一括投与を行った42例（外来治療群）と全コースを入院で実施した43例（入院治療群）の肺癌患者を対象とした。患者背景に両群差はみられなかった。外来治療群で有意に多い有害事象はなく、白血球減少、食欲不振、クレアチニン上昇はむしろ入院治療群で有意に多かった。緊急入院の割合、シスプラチン減量の有無も両群に有意な差はなかった。外来でのシスプラチン一括投与も、症例を適切に選択すれば安全に実施可能である。</p>
4 カルボプラチン（CBDCA）ベースの術後補助化学療法は果たして生存に寄与するのか？	共著	平成22年11月4日	第51回肺癌学会総会 広島国際会議場 長瀬清亮、内田修、 池田徳彦ら	<p>非小細胞肺癌術後にCBDCAベースの補助化学療法が有効であるかを後方視的に検討した。完全切除された非小細胞肺癌術後IB-III期でCBDCAベースの術後補助化学療法を受けた134例を対象とした。中期的な有効性の指標としての2y-RFS/2y-OS=55/77%であった。IB期だけでは2y-RFS/2y-OS=68/78%であり、同病期の他の大規模比較試験のCBDCAベースに比べてやや低かった。中期的な有効性としてIB-III期ではベネフィットがあるもIB期は十分でない可能性が示唆された。</p>
5 未治療進行非小細胞肺癌に対するCBDCA/S-1とCBDCA/PACの第III相試験（WJTOG3605）	共著	平成23年10月27日	第49回日本癌治療学会 名古屋国際会議場 長瀬清亮、池田徳彦、 中川和彦ら	<p>化学療法未施行のIIIB/IV期の非小細胞肺癌564例を対象に、CBDCA/S-1（試験群：SC）のCBDCA/PAC（対象群：PC）に対する非劣性を検証する第III相比較試験を実施した。OS中央値はSC群/PC群=15.2/13.1か月、HR 0.956、95%CI:0.793-1.151で非劣性が示された。扁平上皮癌のサブセット解析で、OS中央値はSC群/PC群=14.0/10.6か月、HR 0.713、95% CI:0.476-1.068とSC群で良好な傾向であった。SC群は進行非小細胞肺癌の初回治療の選択肢となりうることを示され、特に扁平上皮癌に対する効果が期待された。</p>
6 非扁平上皮非小細胞肺癌（Non-Sq）に対するPEM維持療法を含むCBDCA/PEM（PC）療法の生存に関する有効性の検討	共著	平成24年11月9日	第53回肺癌学会総会 長瀬清亮、内田修、 池田徳彦ら	<p>未治療進行非扁平上皮非小細胞肺癌でPEM維持療法を含むCBDCA/PEM療法（PC群）を行った24例の有効性を後方視的に検討する。異なる時期のCDDP/GEM（GP群）12例、CBDCA/PTX（TC群）16例をcontrolとした。PFSはPC群/GP群/TC群=8.2/3.4/4.8か月で、いずれもPC群で有意に良好であった。1y-OS、MSTはPC群/GP群/TC群=72/50/50%、13.4/10.2/12.0か月で差はなかった。非扁平上皮非小細胞肺癌でPC療法は他のプラチナ併用レジメンよりPFSが良好である可能性が示唆された。</p>
7 75歳以上の高齢者非小細胞肺癌に対するCBDCA併用療法が有効な集団の検討	共著	平成25年11月21日	第54回日本肺癌学会 ホテルニューオータニ 長瀬清亮、茜部久美、 池田徳彦ら	<p>高齢者非小細胞肺癌（NSCLC）の化学療法でカルボプラチン併用療法と非プラチナ単剤療法の効果の違いを後方視的に検討した。75歳以上でEGFR遺伝子変異陰性/不明のNSCLC 105例を対象とした。PFSは併用群で有意に良好も、OSに差はなかった。併用群が有意に有効な集団は、PFSは79歳以下、男性、PS0、IIIB/IV期、OSはIIIB/IV期であった。高齢者NSCLCのうち、79歳以下、男性、PS0、IIIB/IV期の症例はカルボプラチン併用療法が有効である可能性が示唆された。</p>
8 扁平上皮癌を除く非小細胞肺癌	共著	平成25年11月22日	第54回日本肺癌学会	<p>新宿区4病院において非扁平上皮非小細胞肺癌</p>

<p>9 腫瘍に対するBevacizumab治療のコホート調査(STOG 1001)</p>			<p>ホテルニューオータニ 長瀬清亮、竹田雄一郎、池田徳彦ら</p>	<p>癌に対して実臨床におけるBev併用化学療法の有効性、安全性について検討した。本研究参加施設においてBev治療が予定され調査同意が得られた102例を対象とした。ORR 40%、PFS 321日、OS未到達であった。Grade 3以上のBev関連有害事象は高血圧28%、尿蛋白5%、血栓塞栓症5%、血痰1%であり、治療関連死亡はみられなかった。Bev併用化学療法は非扁平上皮非小細胞肺癌に対して実臨床下においても臨床試験成績と同等以上に有効で安全に投与可能であった。</p>
<p>9 シスプラチン併用肺癌化学療法におけるNK-1受容体拮抗薬を含む制吐療法の有効性の検討</p>	共著	平成26年7月17日	<p>第12回日本臨床腫瘍学会 福岡国際会議場 長瀬清亮、古本秀行、池田徳彦ら</p>	<p>シスプラチン併用肺癌化学療法（CDDP併用療法）におけるNK1を含む制吐療法の有効性を検討した。連続485例を対象とし、NK1/5HT3の組み合わせでA群NK1(-)/PALO(-)、B群APR/PALO(-)、C群APR/PALO、D群FOS/PALOの4群で比較した。全期Complete Response率はC、D群が有意に良好で遅発期も同様であった。CDDPのRDI中央値はD群のみが有意に良好であった。CDDP併用療法でNK1を含む制吐療法は遅発期、全期の嘔吐抑制効果が良好であった。</p>
<p>10 シスプラチン併用肺癌化学療法でアプレピタントとホスアプレピタントの制吐効果の比較</p>	共著	平成26年8月29日	<p>第52回日本癌治療学会 パシフィコ横浜 長瀬清亮、古本秀行、池田徳彦ら</p>	<p>CDDP併用肺癌化学療法におけるAPRとFOSの有効性を比較検討した。NK1、PALO、DEXの3剤併用療法を行った279例を対象とした。Complete Response率、Complete Control率、Total Control率は全て両群に差はみられなかった。CDDPのRDI中央値はFOS群が有意に良好であった。CDDP併用療法においてAPRとFOSの嘔吐抑制効果はほぼ同等であったが、FOSはCDDPのRDI中央値が有意に良好であり、治療効果が向上することが期待される。</p>
<p>11 EGFR-TKI中止時期の医師による違いに関する検討</p>	共著	平成26年11月14日	<p>第55回日本肺癌学会 京都国際会議場 長瀬清亮、名和公敏、池田徳彦ら</p>	<p>実臨床のEGFR-TKI単剤治療（TKI）で各医師の増悪中止時期の違いと局所治療併用の実態を明らかにする目的で後方視的に検討した。TKI開始後に増悪確認し治療終了した非小細胞肺癌で、開始前後の画像評価が可能であった252例、医師は10回以上のClinical PDを判断した8名を対象とした。実臨床でのTKIはRECIST PD後の医師による中止時期は異なり、経験数が多い医師ほど継続する傾向があったが、いずれの医師もEGFR遺伝子変異状況で継続に差はなかった。</p>
<p>12 カルボプラチン併用肺癌化学療法におけるアプレピタントを含む制吐療法の有効性</p>	共著	平成27年7月17日	<p>第13回日本臨床腫瘍学会 ホテルさっぽろ芸文館 長瀬清亮、工藤勇人、池田徳彦ら</p>	<p>カルボプラチン併用肺癌化学療法におけるアプレピタントを含む制吐療法の有効性を検討した。CBDCA AUC5以上の初回化学療法を行った肺癌患者のうち、2剤併用群（5HT3+DEX）187例、3剤併用群（5HT3+DEX+APR）151例を対象とした。CBDCA併用療法時は、APRを含む3剤併用療法はComplete Response率、Complete Control率よりもTotal Control率を改善する可能性が示唆された。</p>
<p>13 肺癌患者のプラチナ誘発性悪心・嘔吐に対するアプレピタントを加えた制吐療法の効果</p>	共著	平成27年10月31日	<p>第53回日本癌治療学会 京都国際会議場 長瀬清亮、工藤勇人、池田徳彦ら</p>	<p>肺癌患者のプラチナ誘発性悪心・嘔吐に対するアプレピタント（APR）追加の制吐療法の有効性をCDDPとCBDCAに分けて検討した。CDDP（60mg/m2以上）またはCBDCA（AUC5以上）を含む化学療法を行った肺癌患者で、5-HT3、DEX併用（2剤群）あるいはAPR追加（3剤群）した制吐療法を行った555例を対象とした。プラチナ誘発性悪心・嘔吐に対して、特に遅発期、全期のAPR追加による改善傾向が認められた。全期Total Controlのリスク因子、APR追加効果がある集団はCDDPとCBDCAで異なっていた。</p>
<p>14 クリゾチニブ不応例にアレクチニブを投与したALK陽性肺癌の3例を経験したので、アレクチニブの有効性について検討した。</p>	共著	平成27年11月26日	<p>第56回日本肺癌学会 パシフィコ横浜</p>	<p>クリゾチニブ不応例にアレクチニブを投与したALK陽性肺癌の3例を経験したので、アレクチニブの有効性について検討した。</p>

<p>性肺癌の3例</p> <p>15 非扁平上皮非小細胞肺癌のプラチナ併用療法後SD例に対するペメトレキセド継続維持療法の有用性</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年11月28日</p>	<p>長瀬清亮、工藤勇人、池田徳彦ら</p> <p>第56回日本肺癌学会 パシフィコ横浜</p> <p>長瀬清亮、工藤勇人、池田徳彦ら</p>	<p>レクナニフの有効性と安全性を後方視的に検討した。全例アレクチニブで病勢コントロールが得られ、PFSはそれぞれ151日、204日(治療中)、85日(治療中)であった。有害事象はGrade 2嘔気、Grade 1食欲低下、味覚異常でありクリゾチニブに比べて概ね軽微であった。3例ともアレクチニブの減量および休薬はなかった。</p> <p>非扁平上皮非小細胞肺癌において、プラチナ併用療法(導入療法)後SD例に対するペメトレキセド継続維持療法(CMT)の有用性を明らかにするために後方視的に解析した。PFS中央値、OS中央値はいずれもCMT実施例が未実施例に比べて有意に良好であった。また縮小傾向のSDだけでなく増大傾向のSDであってもCMT実施例がPFS、OSそれぞれ良好な傾向がみられた。なおSDの縮小率と生存の相関はなかった。</p>
<p>(その他)</p> <p>1 2 3 :</p>				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 林 真一郎
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
呼吸器内科学		気管支喘息・慢性閉塞性肺疾患・肺がん		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 Interstitial Pneumonia of Unknown Etiology 「特発性間質性肺線維症：病因」	共著	1989	東京大学出版、東京	p225-234 Idiopathic pulmonary fibrosis: pathogenesis Harasawa M, Fukuchi Y, Morinari H編 Shigematsu N, Hayashi S, Kamikawaji N, Oghino H, Yagawa K, Sasazuki T著 特発性肺線維症の成り立ちについての総説。本人が文章の原稿を作成し、重松教授が校閲、指導。
2 炎症・免疫とマクロサイト'up to date シリーズ 2	共著	1999	医薬ジャーナル社、大阪	p181-187 癌とマクロサイト' 2. 血管新生阻害と抗腫瘍効果 工藤翔二他編 八並 淳、林真一郎著 14員環マクロサイトの抗炎症作用に着いての総説、八並が実験を行った結果をまとめ、林が監修
3 救急医学 救急患者の初期対応と以後の治療方針	共著	2002	新興医学出版社、東京	p144-148 呼吸器急性疾患について 瀧健司他編 林真一郎著 呼吸器急性疾患に対する救急治療方針についての総説
4 Immunomodulators as Promising Therapeutic Agents Against Infectious Diseases 「敗血症における抗サイトカイン療法」	共著	2004	Research Signpost, Kerala, India	p155-168 Anti-cytokine therapy in sepsis Kawakami K, Stevens DA編 Hayashi S, Fukuno Y, Fujisawa N著 敗血症に対する分子学的治療法についての総説。本人が主たる文章を執筆
5 2009 今日の治療指針—私はこう治療している	共著	2009	医学書院、東京	P240-241 膿胸 山口徹他編 林真一郎著 膿胸の治療方針についての総説
6 別冊日本臨床 呼吸器症候群(第2版) その他の呼吸器疾患を含めてIII	共著	2009	日本臨床社、大阪	P355-359 膿胸 工藤翔二他編 林真一郎著 膿胸の治療方針についての総説
7 2011 今日の治療指針—私はこう治療している	共著	2011	医学書院、東京	P306 肺胞蛋白症 山口徹他編 林真一郎著 肺胞蛋白症の治療方針についての総説
総説				
1) 結核症診断の進歩	共著	1983	Medical Technology 11: 1070-1071	林真一郎、重松信昭 結核の新規検査法についての総説。重松教授の指導の下、筆頭著者として、全体の執筆を行った。
2) 呼吸器のレントゲン像 4 網状陰影を主体とする緑膿菌肺炎例	共著	1983	総合臨床 32: 2395-2397	林真一郎、重松信昭 肺炎症例の特徴的レントゲン所見についての解説。重松教授の指導の下、筆頭著者として、全体の執筆を行った。
3) 呼吸器のレントゲン像 9 緑膿菌による慢性気道感染症：tram lineの著明な一例	共著	1984	総合臨床 33: 623-627	林真一郎、村西寿一、重松信昭 気道感染症の特徴的レントゲン所見についての解説。重松教授の指導の下、筆頭著者として、全体の執筆を行った。

4)肺線維症	共著	1984	呼吸 3: 976-981	重松信昭、池田東吾、 <u>林真一郎</u> 、広瀬宣之、山内紘一 他2名 肺線維症についての総説、中心となる活性酸素測定の実務と症例のまとめをおこなった。
5)びまん性間質性肺線維症	共著	1985	肺と心 32: 60-70	<u>林真一郎</u> 、広瀬宣之、松葉健一、桑野和善、原直彦 他3名 特発性肺線維症についての総説。題材となる免疫複合体の測定、データの集計、解析および論文の執筆を行った。
6)構造と機能その相関(1)	共著	1985	日本胸部疾患学会雑誌 23: 1251-1254	松葉健一、桑野和善、 <u>林真一郎</u> 、白日高歩 COPDの構造変化と機能障害の関連性についての総説。データ作成の補助を行った。
7)膠原病の肺病変	共著	1987	肺と心 34: 191-195	宮崎正之、 <u>林真一郎</u> 、重松信昭 膠原病に合併する間質性肺障害についての総説。臨床データの整理を行った。
8)呼吸器疾患と遺伝子解析	共著	1990	呼吸 9: 1168-1174	重松信昭、 <u>林真一郎</u> 、台丸尚子、笹月健彦、藤田昌樹 他4名 サルコイドーシスの病変とHLAの相関についての総説。データの作成を行った。
9)薬物による間質性肺炎	共著	1990	日本臨床 48: 562-568	重松信昭、永田忍彦、村西寿一、 <u>林真一郎</u> 、犬塚 悟 薬剤性肺臓炎についての総説。症例データを提供した。
10)感染症の現状と対策：呼吸器感染症		1997	Medicament News 1555: 6-9	<u>林真一郎</u> 新興感染症を含む感染症についての総説全体の執筆を行った。
11)ANCA関連血管炎と肺疾患	共著	1998	分子呼吸器病 2: 107-113	中原快明、 <u>林真一郎</u> 、長澤浩平 ANCA関連血管炎に伴う肺病変についての総説 全体を監修
12)Polymyxin B固定化繊維カラムを用いた血液浄化と持続式血液濾過法	共著	1999	化学療法領域 15: 1773-1780	<u>林真一郎</u> 、酒見隆信、池田祐次 敗血症性ショックに対するPMX血液浄化法の効果についての総説。全体の執筆を行った。
13)Fourteen-membered ring macrolides as anti-angiogenic compounds 「14員環マクロライドの血管新生抑制作用」	共著	2001	Anticancer Res 21: 4253-4258	Yatsunami J, <u>Havashi S</u> マクロライドの腫瘍血管新生抑制作用についての総説。監修を行った。
14)市中肺炎クリティカルパスの利用法と有用性	共著	2002	治療学 36: 173-176	青木洋介、 <u>林真一郎</u> 、小柳孝太郎、加藤収 肺炎クリニカルパスについての総説。監修を行った。
15)クリニカルパスの上手な作り方と使い方	共著	2002	診断と治療 90: 2181-2187	青木洋介、山本巻一、崔 承彦、福岡麻美、 <u>林真一郎</u> 肺炎を中心とするクリニカルパス作成についての総説。監修を行った。
16)市中肺炎：予後からみた重症度分類と入院・外来治療の目安	共著	2003	Medicina 40: 1994-1998	青木洋介、福岡麻美、 <u>林真一郎</u> 肺炎治療管理についての総説。監修を行った。
17)膠原病性間質性肺炎3多発筋炎・皮膚筋炎	共著	2006	治療学 40: 1181-1184	<u>林真一郎</u> 、田中将英、小林弘美、福野裕次、長澤浩平 多発筋炎、皮膚筋炎に伴う間質性肺炎についての総説。全体の執筆を行った。
18)早期肺がんの新しい予後因子としてのMyc標的遺伝子mina53	共著	2006	がん分子標的治療 4: 38-41	末岡尚子、小宮一利、 <u>林真一郎</u> 、末岡栄三朗、常岡誠 mina53遺伝子の役割についての総説。監修を行った。
19)がん化学療法における投薬過誤と有害事象発生の予防	共著	2006	医薬ジャーナル 42: 124-135	持永早希子、松永尚、江本晶子、平野和裕、他8名 (<u>林真一郎</u> 本人第11位) 癌化学療法薬剤調整の問題点についての検討。監修を行った。
20)肺癌術前リンパ節転移診断における、コンベックス走査式超音波気管支鏡ガイド下生検(EBUS-TBNA)の実際	共著	2007	肺癌 47: 207-214	中島崇裕、安福和弘、栗本典明、坂 英雄、他15名 (<u>林真一郎</u> 本人第13位) 学会内視鏡所見委員会委員として、原案の検討に関わった。

21)気管支ビデオスコープを使用する蛍光気管支内視鏡画像について	共著	2007	肺癌 47: 215-221	中島崇裕、渋谷潔、本多英俊、今村文生、他15名(林真一郎本人第10位) 学会内視鏡所見委員会委員として、原案の検討に関わった。
22)人工呼吸管理の基礎知識	単著	2010	達人ナース31(1): 2-7	林真一郎 人工呼吸管理についての総説。全体の執筆を行った。
23)各種トラブルとその対処	共著	2010	達人ナース31(2): 123-127	安部友範、林真一郎 人工呼吸管理中の問題事項への対処法についての総説。監修を行った。
24)各種トラブルとその対処(2)	単著	2010	達人ナース31(3): 49-53	林真一郎 人工呼吸管理中の問題事項への対処法についての総説。全体の執筆を行った。
25)人工呼吸器管理中の看護気管チューブと気道管理	共著	2010	達人ナース31(4): 77-81	宮崎恵美子、内田順子、林真一郎 人工呼吸管理中の気道管理方法についての総説。監修をおこなった。
26)さまざまな合併症により管理に難渋した慢性呼吸不全急性増悪の1例	共著	2010	達人ナース31(5): 86-91	林真一郎、山田友子 人工呼吸管理中の問題事項への対処法についての事例を提示しての総説。全体の執筆を行った。
27)アシネトバクターバウマニーによる重症市中肺炎・呼吸不全の治療	共著	2010	達人ナース31(6): 116-120	林真一郎、柿野千穂、小林直美 実例を通じての人工呼吸管理方法の解説。全体の執筆を行った。
28)もう苦手なんて言わない!モニタリングに生かす血液ガス判読 編 林真一郎	共著	2011	達人ナース32(3): 3-42	林真一郎、田中將英、直塚博行、高橋浩一郎、加藤剛 血液ガス測定の生理学的基礎から実際の解釈までのそれぞれの項目について分担で執筆をした。林は動脈血ガスの生理学的基礎について執筆するとともに、全体の編集を担当した。
原著論文 1)Abolishment of inhibitory effects of3'-deazaadenosine on superoxide generation of guinea pig phagocytes by pre-exposure to phorbol myristate acetate (査読付) 「モルモット貪食細胞からの活性酸素産生に対する3'-デアザアデノシンの抑制効果は、細胞をPMAへ予め曝露することによって回復される」	共著	1986	FEBS Letters 201: 287-290	Yagawa K, Nakanishi M, <u>Havashi S</u> , Kaku M, Ichinose Y 他4名 マクロファージ活性酸素産生系についての研究。データ処理を担当した。
2)呼吸器感染症に対するPyridonecarboxylic Acid系合成経口抗菌剤 Enoxacinの臨床的検討 (査読付)	共著	1986	新薬と臨床 35: 2349-2354	林真一郎、広瀬宣之、池田東吾、重松信昭 Enoxacinの抗菌効果および副作用についての検討。症例の集積と論文の執筆に携わった。
3)Restoration of Fc receptor-mediated desensitization of superoxide generation in human PMN by PMA (査読付) 「Fc受容体を介するヒト好中球活性酸素産生の脱感作はPMAによって回復される」	共著	1987	Int J Immunopharmacol 9: 497-501	Yagawa K, <u>Havashi S</u> , Nakanishi M, Asoh H, 他4名 好中球の活性酸素産生細胞内分子機構についての研究。データ処理を担当した。
4)Small airways disease in patients without chronic air-flow limitation (査読付) 「慢性気流制限を伴わない患者の細気道病変」	共著	1987	Am Rev Respir Dis 136: 1106-1111	Matsuba K, Shirakusa T, Kuwano K, <u>Havashi S</u> , Shigematsu N COPDに至らない気道病変の解析。データ解析を担当した。

5) Superoxide assay monocyte adherence test for the detection of cell-mediated immunity in cancer patients (査読付) 「がん患者における細胞性免疫を評価するための付着単球活性酸素試験」	共著	1987	Oncology 44: 142-144	Yagawa K, Kaku M, Ichinose Y, <u>Hayashi S</u> , Nakanishi M他2名 活性酸素産生を指標とした免疫状態評価法についての検討。データ処理を担当した。
6) Expression of Fc receptors is suppressed in alveolar macrophages from patients with sarcoidosis (査読付) 「サルコイドーシス患者の肺胞マクロファージではFc受容体の発現が抑制されている」	共著	1988	Clin Exp Immunol 73: 495-499	<u>Hayashi S</u> , Yagawa K, Nakanishi M, Ogata K, Maruyama M, Shigematsu N(学位論文) サルコイドーシス患者の肺胞マクロファージを解析。Fc受容体が減少していることから、類上皮細胞への分化との関連があるのではないかととの結論に至った。測定全般と全体の執筆を担当した。
7) Thrombosis-inducing activity found in plasma from two patients with advanced lung cancer (査読付) 「2名の進行肺がん患者の血漿中に血栓症惹起活性があることを見いだした」	共著	1989	Oncology 46: 251-254	Maruyama M, Yagawa K, Kinjo M, Ogata K, Nakanishi M, <u>Hayashi S</u> , Shigematsu N 肺がん患者の末梢血血漿中に凝固活性化因子が含まれていることを、Bioassayを用いて示した。血栓症惹起活性の測定を担当した。
8) Presence of thrombosis-inducing activity in plasma from patients with lung cancer (査読付) 「肺がん患者血漿中に血栓症惹起活性が存在する」	共著	1989	Am Rev Respir Dis 140: 778-781	Maruyama M, Yagawa K, <u>Hayashi S</u> , Kinjo M, Nakanishi M 他6名 肺がん患者の血漿中に血栓症惹起活性が存在することを多数患者で測定した。血栓症惹起活性の測定を担当した。
9) The in vivo and in vitro use of monoclonal antibody for the detection of phagocytic cells in guinea pigs 「in vivoおよびin vitroでのモルモット貪食細胞の確認の為にモノクローナル抗体の応用」	共著	1990	Hybridoma 9: 443-451	Nakanishi M, Yagawa K, Aida Y, <u>Hayashi S</u> , Ichinose Y, Yoshida M データの解析を担当した。
10) BOPPが疑われた症例におけるTBLB階段切片標本の有用性 (査読付)	共著	1990	気管支学 12: 482-488	宮川洋介、永田忍彦、宮崎浩行、古藤 洋、平野裕志 他5名(林 真一郎本人第7位) 器質性肺炎の組織診断の為に、サイズの小さい気管支肺生検標本から連続切片を作成し、数枚おきに染色評価することで、診断有用性が上昇することを報告した。症例の提供を行った。
11) Thrombosis-inducing activity in plasma of patients with acute respiratory tract infection disappears after treatment (査読付) 「急性気道感染症患者における血漿中の血栓症惹起活性は患者治療後に消失する」	共著	1991	Respiration 58: 176-180	Ogata K, Yagawa K, <u>Hayashi S</u> , Ogino H, Miyagawa Y 他3名 気道感染症急性期患者の血漿中に血栓症惹起活性が存在することを報告。血栓症惹起活性の測定を担当した。
12) Plasma thrombosis-inducing activity in 120 patients with primary lung cancer (査読付) 「120名の原発性肺がん患者における血栓症惹起活性の検討」	共著	1991	Oncology 48: 297-300	Nakanishi M, Yagawa K, <u>Hayashi S</u> , Ogino H, Ogata K 他8名 肺がん患者の血漿中に血栓症惹起活性が存在し、特に進行期患者で増加することを報告した。血栓症惹起活性の測定を担当した。

13) Appearance of thrombosis-inducing activity in the plasma of patients undergoing pulmonary resection (査読付) 「血漿中の血栓症惹起活性は肺切除術後に出現する」	共著	1991	Chest 100: 693-697	Ichinose Y, Hara N, Ohta M, <u>Havashi S</u> , Yagawa K 肺切除術後1週間目を中心に患者血漿中に血栓症惹起因子が出現することを明らかにした。血栓症惹起活性の測定を担当した。
14) Adverse effect of chronic tonsillitis on clinical course of sarcoidosis (査読付) 「サルコイドーシスの臨床経過へ及ぼす慢性扁桃腺炎の悪影響」	共著	1991	Sarcoidosis 8: 120-124	Ikeda T, Daimaru N, Inutsuka S, <u>Havashi S</u> , Shigematsu N サルコイドーシスに慢性扁桃腺を合併した患者でサルコイドーシス病態が遷延することを報告した。症例の集積を担当した。
15) Adverse effect of chronic tonsillitis on clinical course of sarcoidosis in relation to HLA distribution (査読付) 「サルコイドーシスの臨床経過の慢性扁桃腺炎の悪影響はHLAと関連する」	共著	1992	Chest 101: 758-762	Ikeda T, <u>Havashi S</u> , Kamikawaji N, Sasazuki T, Shigematsu N サルコイドーシス臨床経過への慢性扁桃腺炎の悪影響はHLADRタイプと関連があることを報告した。症例の集積を担当した。
16) Herpes zoster in patients with sarcoidosis (査読付) 「サルコイドーシス患者における帯状疱疹」	共著	1992	Respiration 59: 94-96	Miyagawa Y, Miyazaki M, Inutsuka S, <u>Havashi S</u> , Yagawa K, Ikeda T サルコイドーシス患者で帯状疱疹の発症頻度が増加することを報告した。症例の集積を担当した。
17) Thrombosis-inducing activity- a factor which appears in plasma of patients with allergic asthma during attack (査読付) 「血栓症惹起活性は喘息患者の発作中に出現する」	共著	1993	Int J Arch of Allergy Immunol 102: 414-416	Nakanishi M, Takayama M, Ishii H, Oghino H, Kawasaki M 他3名 (本人第6位) 喘息患者では非発作期には認められないものの、発作期に血漿中に血栓症惹起活性が出現することを報告した。血栓症惹起活性の測定を担当した。
18) A synthetic peptide which specifically inhibits heat-treated interleukin-8 binding and chemotaxis for neutrophils (査読付) 「好中球に対する熱処理IL8の結合とそれによる好中球の遊走活性を特異的に抑制する合成ペプチドについての報告」	共著	1993	Agents Actions 40: 200-208	Miller EJ, Kurdowska A, Nagao S, <u>Havashi S</u> , Atkinson MAL, Cohen AB IL-8を模した合成ペプチドが熱処理したIL-8に対する好中球の遊走を抑制することを報告した。データ処理を担当した。
19) Association of thrombosis-inducing activity (TIA) with fatal hypercoagulable complications in patients with lung cancer (査読付) 「血栓症惹起活性は肺がん患者の致死的過凝固合併症と関連する」	共著	1994	Chest 105: 1683-1686	Ogino H, <u>Havashi S</u> , Kawasaki M, Nakanishi M, Hara N 肺がん患者で血漿中に血栓症惹起活性を発現するものはDICを含め致死的な血液凝固亢進症を合併する頻度が高かった。データのとりまとめと全体の構想を担当した。
20) Tyrosine-specific protein kinase participates in the pathogenesis of acute immune complex alveolitis in rats (査読付) 「ラットにおける免疫複合体誘導性肺隔炎におけるチロシンキナーゼの役割」	共著	1994	Respiration 61: 19-22	Nomoto Y, Miyagawa Y, Shiraishi T, Hirano H, Kawasaki M 他6名 (本人第9位) ラットに免疫複合体を投与して生じる肺炎症に対し新規チロシンキナーゼ阻害薬を用いて、抑制効果を検討した。動物実験の実施を担当した。

21)Synthetic hexa-and hepta peptides which inhibit interleukin-8 from binding to and activating human blood neutrophils (査読付) 「IL-8のヒト末梢血好中球への結合とそれによる好中球の活性化をおさえる合成ペプチドについて」	共著	1995	J Immunol 154: 814-824	Havashi S, Kurdowska A, Miller EJ, Arbright ME, Girten BE, Cohen AB 6および7アミノ酸からなるペプチドがIL-8受容体阻害作用を有することを明らかにした。主たる測定および論文全般の執筆をおこなった。
22)High yields of interleukin-8 production by a synthetic gene expressed in Escherichia coli and purified with a single antibody affinity column (査読付) 「大腸菌に発現した合成遺伝子によるIL-8の大量産生と抗体親和性カラムによる1段階精製法」	共著	1995	Protein Expression and Purification 6: 357-362	Miller EJ, Cohen AB, Carr FK, Havashi S, Chiu CY 他2名 合成ヒトIL-8の大量調製法についての報告。データの整理と監修をおこなった。
23)肺血栓塞栓症における胸部造影CTの診断的有用性について (査読付)	共著	1997	日本胸部疾患学会雑誌 35: 300-305	中原快明、河島通博、藤沢伸光、内藤恵子、赤司祥子、林真一郎 肺動脈血栓塞栓症症例群の胸部造影CT所見を検討し、造影欠損像が診断に有用であるとの結論に至った。全体の監修をおこなった。
24)A synthetic peptide inhibitor for α-chemokines inhibits the growth of melanoma cell lines (査読付) 「CXCケモカインに対する合成ペプチド性阻害剤は黒色腫細胞の発育を抑制する」	共著	1997	J Clin Invest 99: 2581-2587	Havashi S, Kurdowska A, Cohen AB, Stevens MD, Fujisawa N, Miller EJ 著者らが見いだしたCXCケモカイン阻害性ペプチドがCXCケモカインによる悪性黒色腫細胞のAutostimulationを抑制し、増殖を抑制することを見いだした。測定全般と論文の執筆を担当した。
25)Interleukin-8 participates in angiogenesis in non-small cell, but not small cell carcinoma of the lung (査読付) 「肺原発非小細胞癌の微小血管新生にIL-8は寄与している」	共著	1997	Cancer Lett 120:101-108	Yatsunami J, Tsuruta N, Ogata K, Wakamatsu K, 他5名 (林真一郎本人第9位) IL-8阻害が非小細胞肺癌が腫瘍周辺に引き起こす血管新生に対し、抑制的に作用することを報告した。全般の監修を行った。
26)Clarithromycin is a potent inhibitor of tumor induced angiogenesis (査読付) 「クラリスロマイシンは腫瘍誘発血管新生の阻害物質である」	共著	1997	Res Exp Med 197: 189-197	Yatsunami J, Tsuruta N, Wakamatsu K, Takayama K, Nakanishi Y, Hara N, Havashi S 腫瘍細胞による血管新生がクラリスロマイシンで阻害されることを見いだした。全般の監修を行った。
27)Necrotizing fasciitis caused by Vibrio vulnificus, differs from that caused by Streptococcal infection (査読付) 「Vibrio vulnificusによって生じた壊死性筋膜炎と溶連菌によって引き起こされた壊死性筋膜炎の違い」	共著	1998	J Infection 36: 313-316	Fujisawa N, Yamada H, Kohda H, Tadano J, Havashi S ビブリオ菌により引き起こされる壊死性筋膜炎は連鎖球菌によって生じるものこととなり、夏期に多く、肝機能障害患者が生魚を摂取することによって発症するリスクが高まることを報告した。英文への転換に主要な役割をはたした。

28) Staphylococcal enterotoxin A-induced injury of human lung endothelial cells and IL-8 accumulation are mediated by TNF- α (査読付) 「ブドウ球菌Enterotoxin-Aによるヒト肺血管内皮細胞傷害はTNFによって仲介されている」	共著	1998	J Immunol 161: 5627-5632	Fujisawa N, <u>Havashi S</u> , Kurdowska A, Noble J, Naitoh K, Miller E グラム陽性球菌の代表であるブドウ球菌の血管内皮細胞傷害機序について検討を行い、グラム陰性桿菌とはことなる経路で、TNFによって仲介されていることを見いだした。実験計画の遂行にあたり、相談、指導にあたった。
29) Inhibition of tumor angiogenesis by roxithromycin, a 14-membered ring macrolide antibiotic (査読付) 「14員環マクロライド、ロキシシロマイシン、による腫瘍血管新生抑制」	共著	1998	Cancer Lett 131: 137-143	Yatsunami J, Tsuruta N, Hara N, <u>Havashi S</u> クラリスロマイシンのみでは無く、同様の14員環マクロライドであるロキシシロマイシンにも血管新生抑制効果があることが判明した。この作用は16員環マクロライドには無く、マクロライドの構造のうち特定の構造と作用の連関があることが判明した。全体の監修をおこなった。
30) A synthetic peptide inhibitor for α -chemokines inhibits the tumor growth and pulmonary metastasis of human melanoma cells in nude mice. (査読付) 「CXCケモカイン抑制合成ペプチドはヌードマウスにおけるヒト黒色腫の成長と転移を阻害する」	共著	1999	Melanoma Research 9: 105-114	Fujisawa N, <u>Havashi S</u> , Miller EJ CXCケモカイン受容体阻害ペプチドの黒色腫細胞増殖阻害作用は生体内でも発揮されることを報告した。実験遂行に当たっての、相談、指導をおこなった。
31) エリスロマイシンによる calcineurin非依存性シグナル伝達を解する遺伝子転写因子NFkBの抑制、FK506との比較 (査読付)	共著	1999	Jap J Antibiot 52: 19-21	青木洋介、福野裕次、八並 淳、林 真一郎 エリスロマイシンがNFkBを介した転写を抑制することを介して、炎症を制御する可能性について報告。全体の監修をおこなった。
32) Inhibition of GRO α -induced human endothelial cell proliferation by the α -chemokine inhibitor Antileukinate (査読付) 「CXCケモカイン阻害物質 AntileukinateによるGRO α の抑制を介した血管内皮細胞増殖抑制」	共著	1999	Cytokine 11: 231-238	Fujisawa N, <u>Havashi S</u> , Kurdowska A, Carr FK, Miller EJ これまで筆者らが扱ってきたペプチド性CXCケモカイン阻害薬をAntileukinateと命名。GRO α による血管内皮細胞増殖を抑制することを報告した。研究計画および結果解釈についての相談をおこなった。
33) Roxithromycinのマウスメラノーマに対する血管新生阻害・抗腫瘍効果(TNP-470との比較、抗癌剤との併用)についての検討 (査読付)	共著	1999	Jap J Antibiot 52: 63-66	八並 淳、福野裕次、永田正喜、藤澤伸光、河島通博、内藤恵子、青木洋介、林 真一郎 14員環マクロライドであるロキシシロマイシンがマウス黒色腫細胞の生体内での発育を抑制した。研究実施の監修を行った。
34) Inhibitory effects of roxithromycin on tumor angiogenesis, growth and metastasis of mouse B16 melanoma cells (査読付) 「マウスB16黒色腫細胞の血管新生、成長、転移に及ぼすロキシシロマイシンの効果」	共著	1999	Clin Exp Metastasis 17: 119-124	Yatsunami J, Tsuruta N, Fukuno Y, Kawashima M, Taniguchi S, <u>Havashi S</u> 14員環マクロライドであるロキシシロマイシンのマウス黒色腫細胞の成長に与える抑制効果について検討した。研究実施の監修を行った。

35) Roxithromycin and clarithromycin, 14-membered ring macrolides potentiate the antitumor activity of cytotoxic agents against mouse B16 melanoma cells (査読付) 「14員環マクロライドであるロキシシロマイシンとクラリスロマイシンは細胞傷害性物質によるマウスB16黒色腫細胞の抗腫瘍効果を増強する」	共著	1999	Cancer Lett 147: 17-24	Yatsunami J, Tsuruta N, Tominaga M, Nagata M, Kawashima M, Taniguchi S, <u>Havashi S</u> 14員環マクロライドであるロキシシロマイシンとクラリスロマイシンがマウス黒色腫細胞への化学療法治療効果を増強することについて検討した。研究実施の監修を行った。
36) Antiangiogenic and antitumor effects of 14-membered ring macrolides on mouse B16 melanoma cells (査読付) 「14員環マクロライドのマウスB16黒色腫細胞に対する抗血管新生および抗腫瘍効果」	共著	1999	Clin Exp Metastasis 17: 359-369	Yatsunami J, Fukuno Y, Nagata M, Tominaga M, Tsuruta N, Kawashima M, Taniguchi S, <u>Havashi S</u> クラリスロマイシンおよびロキシシロマイシンが黒色腫細胞株移植によるin vivoでの血管新生と成長を抑制することを明らかにした。研究実施の監修をおこなった。
37) Current practice of management of bacteremic sepsis: a study in a tertiary care teaching hospital in Japan. (査読付) 「敗血症管理の実地臨床: 日本の3次教育病院における検討」	共著	2000	Intern Med 39: 901-909	Aoki Y, Fukuoka M, Kusaba K, Tanabe I, Nagasawa Z, Tominaga M, <u>Havashi S</u> , Tadano J, Nagasawa K. 佐賀大学附属病院を対象にして、敗血症管理の問題点についての検討を行った。全体の監修をおこなった。
38) α -chemokine growth factors for adenocarcinomas; a synthetic peptide inhibitor for α -chemokines inhibits the growth of adenocarcinoma cell lines (査読付) 「腺がんに対するCXCケモカイン成長因子の検討: 合成CXCケモカイン阻害物質は腺がん細胞の成長を阻害する」	共著	2000	J Cancer Res Clin Oncol 126: 19-26	Fujisawa N, Sakao Y, <u>Havashi S</u> , Hadden WA, Harmon CL, Miller EJ CXCケモカイン阻害物質を投与することによってin vivoでマウスに移植された肺がん細胞株の増殖を抑制することを報告。研究実施の全般にわたりアドバイスを与えた。
39) Bronchial artery embolization for hemoptysis due to benign diseases; immediate and long-term results (査読付) 「良性疾患による咯血に対する気管支動脈塞栓術の中・長期的効果」	共著	2000	Cardiovascular Interventional Radiol 23: 351-357	Kato A, Kudo S, Matsumoto K, Fukahori T, Shimizu T, Uchino A, <u>Havashi S</u> 気管支拡張症などの気道疾患からの気道出血に対し気管支動脈塞栓術を実施し、止血を行った。この止血効果は一部症例では数年で効力を無くし、再度の気管支動脈塞栓術を必要とした。症例の提供を統括。
40) Antiangiogenic and antitumor effects of tranilast on mouse lung carcinoma cells (査読付) 「トラニラストのマウス肺がん細胞に対する抗血管新生および抗腫瘍効果」	共著	2000	Int J Oncol 17: 1151-1156	Yatsunami J, Aoki S, Fukuno Y, Kikuchi Y, Kawashima M, <u>Havashi S</u> 抗アレルギー薬トラニラストが肺がん細胞株による血管新生と腫瘍細胞のin vivoでの成長を抑制した。研究全体の統括をおこなった。
41) 気管支喘息高度発作の危険因子: 10年間にわたる当科入院症例の検討 (査読付)	共著	2000	日本胸部臨床 59□ 709-716	河島通博、福野裕次、八並淳、青木洋介、林真一郎 佐賀大学呼吸器内科における気管支喘息高度発作例についての後方視的検討。全体の記載を監修した。

42)細菌性肺炎に対する pazufloxacin注射薬の用量検討試験 (査読付)	共著	2000	日本化学療法学会雑誌 48: 417-432	島田馨、平賀洋明、大道光秀、貫和敏弘、他62名 (林 真一郎本人第59位) キノロン系抗菌薬Pazufloxacinの臨床試験結果のまとめ。症例の提供を担当。
43)Human MD-2 confers on mouse toll-like receptor 4 species-specific lipopolysaccharide recognition (査読付) 「マウスTLR4の種特異的LPS認識にヒトMD2が介在する」	共著	2001	Int Immunol 13: 1595-1599	Akashi S, Nagai Y, Ogata H, Oikawa M, Fukase K, 他6名 (Hvashi S,本人第9位) TLR 4によるLPS認識機構におけるMD2の役割についての解析。臨床的な意味づけを含め、論文作成の討議に寄与した。
44)Increased interleukin-5 levels in bronchoalveolar lavage fluid is a major factor for eosinophil accumulation in acute eosinophilic pneumonia (査読付) 「気管支肺胞洗浄液中に増加したIL-5は急性好酸球性肺炎の主要な好酸球集積因子である」	共著	2001	Respiration 68: 389-395	Nakahara Y, <u>Havashi S</u> , Fukuno Y, Kawashima M, Yatsunami J 急性好酸球性肺炎患者より採取した気管支肺胞洗浄液の好酸球遊走活性を測定し、IL-5が主要な役割を担っていることを報告した。全体の企画と監修を行った。
45)佐賀県総合保健協会における肺がん検診の現状と読影技術に関する精度管理の試み (査読付)	共著	2002	肺癌 42: 817-822	藤澤伸光、林真一郎、太田善郎、工藤 祥 肺癌検診の読影状態の評価の為に癌登録データとつきあわせて、どの程度の特異度、感度があるかを推定した。実施について指導と論文執筆の監修をおこなった。
46)Inhibitory effects of 14-membered ring macrolide antibiotics on bleomycin-induced acute lung injury (査読付) 「14員環マクロライドのブレオマイシン誘発性急性肺障害抑制効果」	共著	2002	Lung 180: 73-89	Kawashima M, Yatsunami J, Fukuno Y, Nagata M, Tominaga M, <u>Havashi S</u> クラリスロマイシンおよびロキシシロマイシンがブレオマイシン経気道的投与による急性肺障害を抑制したことを報告。筆頭著者河島通博の学位論文であり、指導教官として実施計画および論文作成の指導を行った。
47)Antileukinate, a hexapeptide inhibitor of CXC-chemokine receptor, suppresses bleomycin-induced acute lung injury in mice (査読付) 「ペプチド性CXCケモカイン受容体阻害薬Antileukinateのブレオマイシン誘発性急性肺障害抑制効果」	共著	2003	Lung 180: 339-348	<u>Havashi S</u> , Yatsunami J, Fukuno Y, Kawashima M, Miller EJ CXCケモカイン受容体阻害性ペプチドを投与することでブレオマイシン誘発性肺障害が抑制された。研究の実施および論文執筆を担当した。
48)Chemokine receptor inhibitor, Antileukinate, suppressed ovalbumin-induced eosinophilic inflammation in the airway (査読付) 「ケモカイン受容体阻害薬Antileukinateは卵白アルブミンによって誘導された気道炎症を抑制する」	共著	2003	Cytokine 22: 116-125	Fukuno Y, <u>Havashi S</u> , Fujisawa N, Yatsunami J, Tominaga M, Aoki Y, Miller EJ ケモカイン受容体阻害薬AntileukinateはCCR3も阻害する。その結果卵白アルブミンによる気道好酸球モデルにおいても抑制効果を発揮する。筆頭著者福野裕次の学位論文であり、指導教官として研究の立案および論文執筆の指導を行った。
49)Alteration of expression or phosphorylation status of tob, a novel tumor suppressor gene product, is an early event in lung cancer (査読付) 「新規腫瘍抑制遺伝子産生物質Tobのリン酸化状態の変化は肺がんの早期に生じる」	共著	2003	Cancer Lett 202: 71-79	Iwanaga K, Sueoka N, Sato A, Sakuragi T, Sakao Y, 他 8 名 (<u>Havashi S</u> ,本人第11位) 臨床採取肺がん組織におけるTobの発現とリン酸化状態の解析を行い、病状と照合して解析した。全体を監修。

50)Detection and discrimination of preneoplastic and early stages of lung adenocarcinoma using hnRNP B1 combined with the cell cycle-related markers p16, cyclin D1, and Ki-67 (査読付) 「hnRNP B1、P16、cyclin D1およびKi67を用いた肺腺がんにおける早期肺がんと前癌病変の鑑別」	共著	2003	Lung Cancer 40: 45-53.	Tominaga M, Sueoka N, Irie K, Iwanaga K, Tokunaga O, <u>Havashi S</u> , Nakachi K, Sueoka E. 早期肺胞上皮癌と腺腫様過形成組織におけるhnRNP B1等の発現を免疫組織学的に検討した。全体を監修した。
51)Heterogeneous nuclear ribonucleoprotein B1 protein impairs DNA repair mediated through the inhibition of DNA-dependent protein kinase activity (査読付) 「hnRNP B1はDNA依存性プロテインキナーゼ活性抑制を介してDNA修復を阻害する」	共著	2005	Biochem Biophys Res Comm 333: 888-895	Iwanaga K, Sueoka N, Sato A, <u>Havashi S</u> , Sueoka E. 転写調節因子hnRNP B1の役割について解析を行った。全体を監修した。
52)Detection of plasma hnRNP B1 mRNA, a new cancer biomarker, in lung cancer patients by quantitative real-time polymerase chain reaction (査読付) 「肺がん患者における定量的RT PCRを用いた血漿hnRNP B1 mRNAの測定」	共著	2005	Lung Cancer 48: 77-83	Sueoka E, Sueoka N, Iwanaga K, Sato A, Suga K, <u>Havashi S</u> , Nagasawa K, Nakachi K. 肺がん患者血漿を用いたhnRNP B1解析と臨床病態との照合により癌進展におけるhnRNP B1の役割を推定した。全体を監修した。
53)Development of microscopic polyangiitis in patients with chronic airway disease (査読付) 「慢性気道疾患を有する患者における顕微鏡的血管炎の発生について」	共著	2005	Lung 183: 273-281	Takahashi K, <u>Havashi S</u> , Ushiyama O, Sueoka N, Fukuoka M, Nagasawa K 顕微鏡的血管炎患者の後方視的解析を行ったところ、気管支拡張症を合併する1群が存在することを発見。気管支拡張症合併群の特徴を検討した。実施計画および論文執筆の指導を行った。
54) α -chemokine receptor blockade reduces high morbidity group box 1 protein induced lung inflammation and injury and improves survival in sepsis (査読付) 「CXCケモカイン受容体の阻害は敗血症モデルにおいてHMGB1誘導性肺障害を抑制し、予後を改善する」	共著	2005	Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol 289: L583-590	Lin X, Yan H, Sakuragi T, Hu M, Mantell LL, <u>Havashi S</u> , 他4名 マウス盲腸結紮敗血症モデルを用いてCXCケモカイン受容体阻害薬Antileukinateの効果を検討。重要な晚期媒介物質であるHMGB1を介した抑制を引き起こすことを報告。考察の議論を指導した。
55)Hsp90 inhibitors cause G2/M arrest associated with the reduction of Cdc25C and Cdc2 in lung cancer cell lines (査読付) 「Hsp90阻害物質は肺がん細胞株においてCdc25cとCdc 2の減少を介してG2/M細胞周期停止を誘導する」	共著	2006	J Cancer Res Clin Oncol 132: 150-158	Senju M, Sueoka N, Sato A, Iwanaga K, 他6名 (<u>Havashi S</u> 本人第9位) Hsp90の細胞増殖への役割を検討した。筆頭著者千住恵の学位論文であり、指導教官として全体の監修を行った。
56)がん化学療法における医療過誤予防へのFailure Mode and Effects Analysis (FMEA)の応用 (査読付)	共著	2006	医療薬学 32: 1050-1058	持永早希子、松永尚、江本晶子、平野和裕、他8名 (<u>林 真一郎</u> 本人第11位) がん薬物療法調剤過程における過誤要因の検討。全体の監修を行った。

57)High expression of Toll-like receptor 4 on CD14+ monocytes in acute infectious diseases (査読付) 「急性感染性疾患においてCD14陽性単球にはTLR4が高発現する」	共著	2007	Scand J Infect Dis 39: 577-583	Haruta Y, Koarada S, Tada Y, Mitamura M, Ohta A, Fukuoka M, <u>Havashi S</u> , Nagasawa K. 急性感染症におけるTLR4の発現について解析。症例の供給を行った。
58)Mutation profile of EGFR gene detected by denaturing high-performance liquid chromatography in Japanese lung cancer patients (査読付) 「日本人肺がん患者における変性HPLCを用いたEGFR遺伝子変異の検出」	共著	2007	J Cancer Res Clin Oncol 133: 93-102	Sueoka N, Sato A, Eguchi H, Komiya K, 他6名 (<u>Havashi S</u> , 本人第8位) 新規高感度解析法を用いたEGF受容体遺伝子変異の検討。全体の監修を行った。
59)LAMP法を用いた Mycobacterium pneumoniae と Legionella spp. による呼吸器感染症の迅速診断試薬の評価 (査読付)	共著	2007	医学と薬学 58: 565-571	山口恵三、館田一博、中森祥隆、柴山明義、他16名 (<u>林真一郎</u> 本人第13位) LAMP法PCRによる迅速診断検査の臨床的評価。レジオネラおよびマイコプラズマの迅速診断において優れた成績を収めた。臨床試験グループの施設責任者として臨床試験を進めた。
60)既治療非小細胞肺癌患者に対するCPT11、シスプラチン併用療法のパイロット的検討 (査読付)	共著	2008	がんと化学療法 46: 25-30	田中綾、荒金尚子、小宮和利、川浦太、福野裕次、 <u>林真一郎</u> 非小細胞肺癌に対するシスプラチン、CPT11併用療法の効果と安全性の検討。全体の監修を行った。
61)Exon 19 of EGFR mutation in relation to the CA-repeat polymorphism in intron 1 (査読付) 「EGFRイントロン1のCAリピートの多型とエクソン19の変異の関連性」	共著	2008	Cancer Sci 99: 1180-1187	Sueoka-Aragane N, Imai K, Komiya K, Sato A, Tomimasu R, Hisatomi T, Sakuragi T, Mitsuoka M, <u>Havashi S</u> , Nakachi K, Sueoka E EGF受容体変異のなかでチロシンキナーゼ阻害薬高感受性とリンクするエクソン19の欠失の有無と多部位遺伝子多型との関連性を調べ、イントロン1のCAリピートが短い個体で、腫瘍発育が速く、エクソン19欠失の頻度が高いことが分かった。全体の監修を行った。
62)High-resolution computed tomography characterization of interstitial lung diseases in polymyositis / dermatomyositis (査読付) 「多発筋炎、皮膚筋炎における間質性肺病変の高分解能CT所見の特徴」	共著	2008	J Rheumatol 35: 260-269	<u>Havashi S</u> , Tanaka M, Kobayashi H, Nakazono T, 他7名 多発筋炎、皮膚筋炎患者に合併する間質性肺病変の所見を患者予後との関連で解析した。研究の計画立案、実施の統括、論文の執筆を担当した。
63)Establishment of a new method, transcription-reverse transcription concerted reaction, for detection of plasma hnRNP B1 mRNA, a biomarker of lung cancer (査読付) 「肺がん分子マーカー血漿hnRNP B1の転写・逆転写反応を用いた検出方法の検討」	共著	2008	J Cancer Res Clin Oncol 134:1191-1197	Sato A, Sueoka-Aragane N, Saitoh J, Komiya K, Hisatomi T, Tomimasu R, <u>Havashi S</u> , Sueoka E 血漿を材料としたhnRNP B1 mRNA検出法の検討。TRCを用い迅速かつ有効に検出できる事を報告した。全体の監修を行った。
64)成人気管支喘息におけるイーザー・アズマ・プログラム (EAP) の有用性について (査読付)	共著	2009	呼吸 28: 1131-1136	豊島秀夫、松本紫朗、栃木隆男、松本強、門田淳一、 <u>林真一郎</u> 、興梠博次、河野茂、相澤久道 気管支ぜんそく患者に対し問診票を指標とした治療プログラム (EAP) を実施し、コントロールが改善する事を検証した。施設担当者として、症例の集積に当たった。

65)Expression of Mina53, a novel c-Myc target gene, is a favorable prognostic marker in early stage lung cancer. (査読付) 「新規cMyc標的遺伝子Mina53の発現は早期肺がんの予後良好マーカーである。」	共著	2010	Lung Cancer 69: 232-238	Komiya K, Sueoka-Aragane N, Sato A, Hisatomi T, Sakuragi T, Mitsuoka M, Sato T, <u>Havashi S</u> , Izumi H, Tsuneoka M, Sueoka E. Mina53の過剰発現と予後との関連を解析した。全体を監修した。
66)Mina53, a novel c-Myc target gene, is frequently expressed in lung cancers and exerts oncogenic property in NIH/3T3 cells. (査読付) 「新規cMyc標的遺伝子Mina53はしばしば肺がん組織に発現しており、NIH/3T3肺がん細胞株で腫瘍遺伝子として作用する」	共著	2010	J Cancer Res Clin Oncol 136: 465-473	Komiya K, Sueoka-Aragane N, Sato A, 他8名 (本人第8位) cMycが関わらずMina53に影響を受ける機序が発癌に関係していることを報告した。全体を監修した。
67)Expression of the GA733 gene family and its relationship to prognosis in pulmonary adenocarcinoma (査読付) 「肺腺がんにおけるGA733遺伝子属の発現と予後との関係」	共著	2010	Virchows Arch 457: 69-76	Kobayashi H, Minami Y, Anami Y, 他7名 (<u>Havashi S</u> , 本人第9位) GA733遺伝子に関連する2つの物質の発現が肺腺がんの予後に異なった影響を与えることを報告した。筆頭筆頭著者小林弘美の学位論文であり、直接の指導は筑波大学の野口教授が担当した。筆者は小林の研究相談を担当した。
68)地域在住女性高齢者における呼吸筋力が呼吸機能、身体機能、歩行能力に及ぼす影響 (査読付)	共著	2010	健康支援 12: 17-21	堀江淳、村田伸、村田潤、太田尾浩、溝田勝彦、宮崎純哉、 <u>林真一郎</u> 、堀川悦夫 高齢女性を対象としたフィールド研究の結果、吸気筋力が身体機能に関連することを報告した。全体の監修を行った。
69)GINAガイドラインに準拠した喘息治療の有用性調査 (査読付)	共著	2010	呼吸 29: 1021-1028	栃木隆男、林真一郎、松本紫朗、藤田次郎、門田淳一、河野茂、相澤久道 ガイドラインに沿った喘息治療を行うことで喘息コントロール状況が改善しうることおよび問題点について報告を行った。症例の集積を担当した。
70)A fully integrated and automated detection system for single nucleotide polymorphisms of UGT1A1 and CYP2C19 (査読付) 「UGT1A1とCYP2C19の塩基多型の自動解析装置」	共著	2011	Oncol Res 19:111-114	Ureshino N, Aragane N, Nakamura T, Ide M, Mochinaga S, Fukushima N, <u>Havashi S</u> , Sueoka E, Kimura S. SNP自動解析装置アイデンシーを用いた薬剤代謝関連遺伝子変異の解析系の樹立についての報告。全体の監修を行った。
71)A fully integrated, automated and rapid detection system for KRAS mutations (査読付) 「KRAS変異の自動迅速解析装置」	共著	2011	Oncol Rep 26:609-13.	Ureshino N, Sueoka-Aragane N, Nakamura T, 他8名 (<u>Havashi S</u> , 本人第9位) SNP自動解析装置アイデンシーを用いた腫瘍遺伝子KRAS変異の解析系の樹立についての報告。全体の監修を行った。
72)A non-invasive system for monitoring resistance to EGFR tyrosine kinase inhibitors with plasma DNA (査読付) 「血漿DNAによるEGF受容体チロシンキナーゼ阻害薬抵抗性の非侵襲的評価法」	共著	2011	J Thorac Oncol 6:1639-48	Nakamura T, Sueoka-Aragane N, Iwanaka K, 他9名 (<u>Havashi S</u> , 本人第8位) 血漿DNAの解析によるEGF受容体T790M変異の検出方法の確立と実用性の検討。全体の監修を行った。

73) Factors delaying the detection of chronic obstructive pulmonary disease in the general elderly population (査読付) 「一般高齢者における慢性閉塞性肺疾患発見遅れの要因」	共著	2011	Respir Care, 56: 1143-50.	Horie J, Murata S, <u>Havashi S</u> , Murata J, Mizota K, Horikawa E 比較的body能力が保たれている患者でCOPDの発見が遅れる場合がある。COPDスクリーニングとしては身体活動試験よりもスパイロメトリーを用いることが、より適切であると考えられる。堀江淳学位論文。主指導教官は堀川教授。症例の集積と結果解析についての指導をおこなった。
74) The influence of restrictive ventilation impairment on physical function and activities of home-bound elderly persons. (査読付) 「在宅高齢者の身体活動性に及ぼす拘束性換気障害の影響」	共著	2011	Int J Gerontol 5: 69-74	Horie J, Murata S, <u>Havashi S</u> , 他4名 肺活量の減少が高齢者の身体活動性に大きな負の影響を及ぼすことを報告した。全体の監修を行った。
75) 男性慢性閉塞性肺疾患患者の病期におけるバランス能力の差異に関する検討 (査読付)	共著	2011	理学療法科学 26: 215-9	堀江淳、阿波邦彦 他7名 (本人第9位) COPD患者を用いたフィールド研究。患者のバランス能力は早期から障害されるが、病態の進行と共に重篤となる。症例集積への寄与と全体の監修を行った。
76) Application of a highly sensitive detection system for epidermal growth factor receptor mutations in plasma DNA. (査読付) 「血漿DNAを用いた高感度EGF受容体変異検出法の検討」	共著	2012	J Thorac Oncol. 7:1369-81.	Nakamura T, Sueoka-Aragane N, Iwanaga K, Sato A, Komiya K, Kobayashi N, <u>Havashi S</u> , Hosomi T, Hirai M, Sueoka E, Kimura S. 血漿DNAを用いたEGF受容体感受性変異の解析を確立した。全体の監修を行った。
77) 30秒間椅子立ち上がりテストは慢性閉塞性肺疾患患者の運動耐容能を反映するか? (査読付)	共著	2012	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 22: 221-226.	白仁田 秀一, 堀江 淳, 直塚 博行, 高川 晃敏, 阿波 邦彦, 今泉 潤紀, 田中 将英, 渡辺 尚, 林 真一郎 30秒椅子立ち上がり試験と運動耐容能試験の関連を検討し、30秒椅子立ち上がり試験が簡便な運動耐容能検査として有効であることを示した。研究全体の指導を行った。
78) Markers that can Reflect Asthmatic Activity before and after Reduction of Inhaled Corticosteroids: A Pilot Study. (査読付) 「吸入ステロイド減量前後の喘息活動性を反映する因子の解析」	共著	2013	Biomark Insights. 8:97-105.	Kato G, Takahashi K, Izuhara K, Komiya K, Kimura S, <u>Havashi S</u> 吸入ステロイドの減量前後で喘息各種指標の変化を検討した。増悪群と安定群の比較で、増悪と呼気NO、血清中ペリオスチン濃度の関与を明らかにした。全体と指導と監修を行った。
79) β 2 adrenergic agonist attenuates house dust mite-induced allergic airway inflammation through dendritic cells. (査読付) 「 β 2交感神経作動薬はダニ抗原による気道炎症を樹状細胞を介して制御する」	共著	2014	BMC Immunol. 15:39.	Kato G, Takahashi K, Tashiro H, Kurata K, Shirai H, Kimura S, <u>Havashi S</u> ダニ抗原点鼻好酸球形気道炎症マウスモデルにおいて長時間作動型 β 2刺激薬が樹状細胞に作用して、感作を抑制することを明らかにした。加藤剛の学位論文。指導教官として、全体の企画と監修を行った。

80)Usefulness of plasma HGF level for monitoring acquired resistance to EGFR tyrosine kinase inhibitors in non-small cell lung cancer. (査読付) 「非小細胞肺癌におけるEGF受容体チロシンキナーゼ阻害薬の獲得抵抗性を評価する際の血漿HGF濃度の有用性」	共著	2015	Oncol Rep. 33:391-6.	Umeguchi H, Sueoka-Aragane N, Kobayashi N, Nakamura T, Sato A, Takeda Y, <u>Havashi S</u> , Sueoka E, Kimura S. EGF受容体チロシンキナーゼ阻害薬の耐性獲得には受容体のT790M変異以外にHGFの過剰発現が寄与していることが分かっている。臨床検体でHGF濃度を測定することが獲得耐性の評価に有用であることを報告した。全体の監修を行った。
81)Interleukin-33 from monocytes recruited to the lung contributes to house dust mite-induced airway inflammation in a mouse model. (査読付) 「単球由来のIL33はダニ抗原由来の気道炎症の発症に寄与する」	共著	2016	PLoS One. 11: e0157571.	Tashiro H, Takahashi K, <u>Havashi S</u> , Kato G, Kurata K, Kimura S, Sueoka-Aragane N. ダニ抗原点鼻マウス好酸球性炎症モデルで肺IL33の由来を検討。肺に流入してきた幼若単球が供給源であることを報告した。田代宏樹の学位論文。指導教官として全体の企画と実施を指導した。
82)Reduced Chest and Abdominal Wall Mobility and Their Relationship to Lung Function, Respiratory Muscle Strength, and Exercise Tolerance in Subjects With COPD. (査読付) 「慢性閉塞性肺疾患患者における胸腹壁可動性と肺機能・呼吸筋力・運動耐容能の関連性」	共著	2016	Respir Care. 61:1472-1480.	Kaneko H, Shiranita S, Horie J, <u>Havashi S</u> . COPD患者において胸壁、腹壁の可動性が運動耐容能と関連している。論文執筆のコンサルトを行った。
83)The usefulness of monomeric periostin as a biomarker for idiopathic pulmonary fibrosis. (査読付) 「特発性肺線維症におけるペリオスチンモノマーのバイオマーカーとしての意義」	共著	2017	PLoS One. 12:e0174547	Ohta S, Okamoto M, Fujimoto K, Sakamoto N, Takahashi K, Yamamoto H, Kushima H, Ishii H, Akasaka K, Ono J, Kamei A, Azuma Y, Matsumoto H, Yamaguchi Y, Aihara M, Johkoh T, Kawaguchi A, Ichiki M, Sagara H, Kadota JI, Hanaoka M, <u>Havashi S</u> , Kohno S, Hoshino T, Izuhara K 特発性肺線維症患者末梢血中のペリオスチンモノマー量は病勢と関連していた。多施設共同研究において症例及びサンプルの提供を行った。
症例報告 1)金剤肺臓炎経過後、D-penicillamineによる遷延性肺好酸球増多症を発症した1例 (査読付)	共著	1985	日本胸部疾患学会雑誌 23: 479-482	林真一郎、広瀬宣之、池田東吾、重松信昭 抗リウマチ薬Dペニシラミンによる慢性好酸球性肺炎症例の報告。スクリーニングのための白血球遊走阻止試験の有用性を合わせて報告した。症例のまとめと執筆全体を担当した。
2)移動する浸潤影を呈し、経気管支肺生検にて器質化肺炎を伴う閉塞性細気管支炎 (BOOP) の所見を認めたマイコプラズマ感染症の1例 (査読付)	共著	1989	気管支学 11: 466-470	宮川洋介、平野裕志、丸山正夫、村西寿一、 <u>林真一郎</u> 他3名 マイコプラズマ感染症に関連した器質化肺炎例の報告。症例の臨床管理を共同で担当した。
3)気管・気管支アミロイドーシスの一例：本邦報告例13例の臨床像の検討を含めて (査読付)	共著	1990	気管支学 12: 105-109	宮川洋介、神武直子、永田忍彦、 <u>林真一郎</u> 、矢川克郎 他4名 気道アミロイドーシス症例の報告。症例の臨床管理を共同で担当した。
4)循環免疫複合体の経過を長期間観察し得た特発性間質性肺炎の1剖検例 (査読付)	共著	1990	日本胸部臨床 49: 600-604	宮川洋介、永田忍彦、 <u>林真一郎</u> 、麻生博史、矢川克郎 他2名 特発性肺線維症症例管理において免疫複合体測定が有用であった症例の報告。症例の臨床管理を共同で担当した。

5)Hypercoagulopathy induced by chemotherapy in a patient with lung cancer. A possible role for a factor with thrombosis-inducing activity (TIA) (査読付) 「肺がん患者化学療法で誘発された血液凝固亢進症：血栓形成惹起因子の役割について」	共著	1992	Chest 101: 277-278	Havashi S, Ogino H, Ogata K, Yagawa K 肺がん患者血漿中に血液凝固を惹起する因子があることを見いだした。同因子が陽性であり、化学療法後に凝固亢進性合併症を生じた患者の1例報告。症例のまとめと論文執筆を担当した。
6)臨床経過に伴い末梢血中血栓誘発因子の消長を認めた1肺癌症例 (査読付)	共著	1992	日本胸部疾患学会雑誌 30: 1724-1727	林真一郎、荻野英夫、野元吉二、川崎雅之、宮川洋介 他5名 肺がん患者血漿中に血液凝固を惹起する因子があることを見いだした。同因子が臨床経過に従い出没した患者の1例報告。症例のまとめと論文執筆を担当した。
7)A case of pulmonary tuberculosis with bilateral hilar lymphadenopathy diagnosed by sputum culture subsequent to open thoracic biopsy (査読付) 「両側肺門部リンパ節腫脹を呈し開胸肺生検後の喀痰検査で診断された肺結核症の1例」	共著	1992	Respiration 59: 247-249	Miyagawa Y, Mitsuyama T, Havashi S, Nagata N, Yagawa K, Shigematsu N BHLで受診し肺結核症と診断された症例の1例報告。論文考察へ参加した。
8)A case of steroid responsive organizing pneumonia in a patient with rheumatoid arthritis showing migratory infiltration and normal glucose levels in pleural effusions (査読付) 「移動性陰影を呈しステロイドに反応した関節リウマチに合併した器質化肺炎の1例」	共著	1993	Br J Rheumatol 32: 829-831	Miyagawa Y, Nagata N, Nakanishi M, Aizawa H, Satake M, Havashi S, Yagawa K 関節リウマチに合併した器質化肺炎の1例報告。論文考察へ参加した。
9)下咽頭癌に合併した多発性筋炎、間質性肺炎が下咽頭癌の治療により軽快した1例 (査読付)	共著	1996	日本胸部臨床 55: 483-486	河島通博、林真一郎、中野盛夫、上坂 宏、進武幹 悪性腫瘍に合併した筋炎症候群が癌の治療後コントロールされた1例の報告。全体の監修を行った。
10)イソフルレン麻酔、インプロテレンール持続点滴による気管支喘息重積発作の1救命例 (査読付)	共著	1997	日本胸部疾患学会雑誌 35: 536-540	中原快明、島田 健、藤沢伸光、河島通博、内藤恵子、林真一郎 全身麻酔を要した重症喘息症例救命例の1例報告。全体の監修を行った。
11)縦隔原発絨毛癌の一例 (査読付)	共著	1997	日本胸部疾患学会雑誌 35: 1020-1024	中原快明、福山浩二、永田正喜、松原伸一、富永正樹、内藤恵子、林真一郎 若年男性絨毛上皮癌の1例報告。全体の監修を行った。
12)アセトアミノフェンによる薬剤誘起性肺臓炎の2例 (査読付)	共著	1997	日本胸部疾患学会雑誌 35: 974-979	赤司祥子、富永正樹、内藤恵子、藤沢伸光、中原快明、日浦研哉、林真一郎 アセトアミノフェンによる薬剤性肺臓炎が生じることについて報告した。全体の監修を行った。
13)アスベスト暴露歴を有し剥離性間質性肺炎および種々の自己免疫異常を認めた1症例 (査読付)	共著	1998	日本呼吸器病学会雑誌 36: 717-721	青木洋介、福岡麻美、内藤恵子、甲佐和宏、河島通博、林真一郎 剥離性間質性肺炎の1例についての報告。全体の監修を行った。

14) 重度の低酸素血症を認めた急性細気管支炎型マイコプラズマ感染症の1例 (査読付)	共著	1998	感染症学会雑誌 72: 1080-1083	青木洋介、甲佐和宏、福野裕次、藤澤伸光、内藤恵子、 <u>林真一郎</u> 、長澤浩平 重症マイコプラズマ感染症についての1例報告。全体の監修を行った。
15) 血液浄化療法併用にて救命し得た重症Legionella Micdadei肺炎の1例 (査読付)	共著	1998	日本呼吸器病学会雑誌 36: 886-890	松原紳一、赤司幸子、内藤恵子、中原快明、 <u>林真一郎</u> 重症レジオネラ肺炎をPCXにて救命しえた例の1例報告。症例の管理、まとめおよび論文執筆の指導を行った。
16) HIV-associated eosinophilic pustular folliculitis: successful treatment of a Japanese patient with UVB phototherapy (査読付) 「HIV関連好酸球性毛嚢炎にたいしUVB光線療法が有効であった本邦症例」	共著	1998	J Dermatol 25: 178-14	Misago N, Narisawa Y, Matsubara S, <u>Havashi S</u> HIV感染症に合併した好酸球性皮膚炎に対する紫外線療法が奏効例の報告。症例の管理を担当した。
17) 気管支動脈塞栓術後に急性の代謝性アシドーシスを繰り返してDICに至った1症例 (査読付)	共著	1999	気管支学 21: 471-476	河島通博、千住 恵、永田正喜、富永正樹、青木洋介、 <u>林真一郎</u> 気管支動脈塞栓術を実施後に四肢血流障害による代謝性アシドーシスを来した1例の報告。全体の監修を行った。
18) 結核性胸膜炎の経過中に粟粒結核、対側結核性胸膜炎に進展した多剤耐性結核の1例 (査読付)	共著	1999	日本胸部臨床 58: 824-828	成松 彩、八並 淳、青木茂久、永田正喜、富永正樹、河島通博、青木洋介、 <u>林真一郎</u> 多剤耐性結核で全身播種が合併した1例の報告。全体の監修を行った。
19) 低ガンマグロブリン血症を合併した胸腺腫 (Good症候群) の1例 (査読付)	共著	1999	日本胸部臨床 58: 939-944	富永正樹、内藤恵子、松原伸一、中原快明、青木洋介、 <u>林真一郎</u> 胸腺腫に免疫グロブリン低下を伴った1例についての報告。全体の監修を行った。
20) 肺結核より急性肺傷害をきたした3症例 (査読付)	共著	2000	感染症学会雑誌 74: 541-546	富永正樹、甲佐和宏、永田正喜、青木洋介、 <u>林真一郎</u> 急性肺障害合併肺結核例の3例報告。全体の監修を行った。
21) 抗EJ抗体の測定が診断・治療に有用であった間質性肺炎の1例 (査読付)	共著	2000	日本胸部臨床 59: 121-125	山下友子、河島通博、永田正喜、青木洋介、 <u>林真一郎</u> 非特異性間質性肺炎でEJ抗体の増減が治療経過と相関した1例の報告。全体の監修を行った。
22) 結節性硬化症に合併したmicronodular pneumocyte hyperplasia - lymphangiomyomatosisの1例 (査読付)	共著	2001	日本呼吸器学会雑誌 39: 277-280	河島通博、小林弘美、富永正樹、八並 淳、 <u>林真一郎</u> リンパ脈管筋腫症とMNPH合併例の1例報告。全体の監修を行った。
23) 背部痛を初発症状としたdesmoplastic malignant pleural mesotheliomaの1例 (査読付)	共著	2001	日本呼吸器学会雑誌 39: 347-350	富永正樹、田中将英、福岡麻美、河島通博、八並 淳、中原快明、青木洋介、 <u>林真一郎</u> 画像にて腫瘍を認めにくく、背部痛が遷延することによってようやく診断できた繊維形成性中皮腫の1例報告。全体の監修を行った。
24) Legionnaires' disease associated with habitual drinking of hot spring water (査読付) 「温泉水の習慣的飲水と関連したレジオネラ症」	共著	2001	Intern Med 40: 1064-1067	Tominaga M, Aoki Y, Haraguti S, Fukuoka M, <u>Havashi S</u> , Tamesada M, Tabuti E, Nagasawa K. 肺レジオネラ症の1例報告。全体の監修を行った。

25)Pyogenic vertebral osteomyelitis caused by <i>Prevotella intermedia</i> (査読付) 「 <i>Prevotella intermedia</i> によって生じた化膿性脊椎炎の1例」	共著	2002	J Infect Chemother 8: 182-184	Fukuoka M, Aita K, Aoki Y, <u>Havashi S</u> , Satoh T, Hotokebuchi T, Nagasawa K. ブドウ球菌以外による化膿性脊椎炎の1例報告。全体の監修を行った。
26)右下肢擦過傷から菌血症および多臓器障害を呈したA群連鎖球菌感染症の1例 (査読付)	共著	2002	感染症学会雑誌 76: 958-962	福岡麻美、富永正樹、青木洋介、 <u>林真一郎</u> 、長澤浩平 重症A群連鎖球菌感染症の1例報告。全体の監修を行った。
27)Pulmonary colonization by <i>Chrysosporium zonatum</i> associated with allergic inflammation in immunocompetent subject (査読付) 「免疫不全のない個体に生じた <i>Chrysosporium zonatum</i> によるアレルギー性病態」	共著	2002	J Clin Microbiol 40: 1113-1115	<u>Havashi S</u> , Naitoh K, Matsubara S, Nakahara Y, Nagasawa Z, Tanabe I, Kusaba K, Tadano J, Nishimura K, Sigler L クリソスポリウムによるABPMの1例報告。症例の担当、解析、と論文の執筆を行った。
28)喘息として治療されていた気管原発のadenoid cystic carcinomaの1例 (査読付)	共著	2002	日本胸部臨床 61: 460-465	小林弘美、富永正樹、瀬戸葉子、福岡麻美、他5名 (<u>林真一郎</u> 本人第9位) 気道原発腺様嚢胞癌の診断遅延要因についての報告。全体の解析を行った。
29)子宮筋腫術後10年目に胸部異常陰影で発見された良性転移性平滑筋腫の1例 (査読付)	共著	2005	肺癌 44: 773-775	小宮一利、末岡尚子、中村朝美、桜木徹、坂尾幸則、 <u>林真一郎</u> 良性転移性平滑筋腫についての1例報告。全体の監修を行った。
30)気管支肺胞洗浄液RANTES高値を示した慢性骨髄単球性白血病合併肺病変の1例 (査読付)	共著	2005	日本胸部臨床 64: 754-760	田中将英、小宮一利、福野裕次、福岡麻美、末岡尚子、 <u>林真一郎</u> 慢性骨髄単球性白血病に特異な遷延性肺病変を合併した1例の報告。症例の解析、全体の監修を行った。
31)Pulmonary infarction as the initial manifestation of Takayasu's arteritis (査読付) 「肺梗塞を初発症状として発症した高安動脈炎の1例」	共著	2006	Intern Med 45: 725-728	Nakamura T, <u>Havashi S</u> , Fukuoka M, Sueoka N, Nagasawa K. 肺梗塞にて来院、原因が高安動脈炎であることが判明した1例の報告。全体の監修を行った。
32)肺膿瘍の経過中に認められた感染性肺動脈仮性動脈瘤の1例 (査読付)	共著	2007	日本呼吸器学会雑誌 45: 627-630	小林弘美、清川真貴子、福岡麻美、田中将英、福野裕次、荒金尚子、 <u>林真一郎</u> 肺膿瘍に仮性動脈瘤を合併した1例の報告。症例の考察と全体の監修を行った。
33)近位気管支狭窄および著明な右室の拡大を伴ったサルコイドーシスの1例 (査読付)	共著	2008	日本呼吸器学会雑誌 46: 25-30	小林弘美、琴岡憲彦、田尾朋子、川浦太、田中将英、福野裕次、荒金尚子、中原快明、 <u>林真一郎</u> 特異な心臓合併症を伴ったサルコイドーシスについての1例報告。症例の考察と全体の監修を行った。
34)Disseminated infection by <i>Bipolaris spicifera</i> in an immunocompetent subject (査読付) 「免疫正常者に発症した播種性 <i>Bipolaris spicifera</i> 感染症の1例」	共著	2008	Medical Mycology 46: 361-365	Kobayashi H, Sano A, Aragane N, Fukuoka M, Tanaka M, Kawaura F, Fukuno Y, Matsuishi E, <u>Havashi S</u> 全身播種性黒色真菌症の1例報告。症例の解析と執筆の直接指導を行った。

35)フッ化水素ガス吸入によると推測された急性呼吸窮迫症候群 (ARDS) の1例 (査読付)	共著	2009	日本呼吸器学会雑誌 47: 991-995	川浦 太, 福岡 麻美, 荒金 尚子, 林 真一郎 フッ化水素ガスによる肺障害の1例報告。症例の解析と執筆の直接指導を行った。
36)Magnetic resonance imaging features of spontaneously regressed thymoma: report of 2 cases (査読付) 「自然縮小した胸腺腫2例のMRI画像の特徴」	共著	2009	Jap Soc Thoracic Radiol 24: 62-65	Nakazono T, Yamaguchi K, Egashira R, Satoh T, Yamasaki F, Mitsuoka M, <u>Hayashi S</u> , Kudo S. 胸腺腫自然退縮例の2例報告。症例を担当した。
37)ステロイドが有効であった特発性線維性縦隔炎の1例 (査読付)	共著	2011	日本呼吸器学会雑誌 49:822-6	加藤剛, 高橋浩一郎, 安部友範, 柿野千穂, 松尾綾子, 小林直美, 小宮一利, 荒金尚子, 林真一郎 特発性線維性縦隔炎1例報告。症例の解析と執筆の直接指導を行った。
38)Disseminated Nocardiosis caused by Nocardia concava with acute respiratory failure and central nervous system involvement treated with linezolid. (査読付) 「リネゾリドで治療された、呼吸不全と中枢神経病変を伴ったNocardia concavaによる播種性ノカルジア症」	共著	2012	Intern Med. 51:3281-5.	Kobayashi N, Sueoka-Aragane N, Naganobu N, Umeguchi H, Kusaba K, Nagasawa Z, Yazawa K, Gono T, Kimura S, <u>Hayashi S</u> . 播種性ノカルジア症の1例報告。全体の監修を行った。
39)非結核性抗酸菌症 (Non-Tuberculosis Mycobacteria : NTM) を契機に発見された右上葉肺腺癌の一例 (査読付)	共著	2019	臨床と研究 96: 839-842	小宮景介, 桑原元尚, 山本聡, 林真一郎, 川浦太, 松尾綾子, 杉原甫 肺癌症例の1例報告。全体の監修を行った。

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	原田 竜彦
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド			
外科系臨床医学・神経科学・生物科学		耳鼻咽喉科学・神経生理学・生物物理学			
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要	
(著書)					
1 新生児聴覚スクリーニング早期発見・早期教育のすべて (加我 君孝編)	共著	2005	金原出版	スクリーニングの機器と原理 (p7-11) において新生児聴覚スクリーニングに用いられる自動ABRおよびOAEの機器について解説した。	
2 新生児聴覚スクリーニング検査とフォローアップのためのマニュアル	共著	2004	神奈川県衛生部地域保健課	精密聴力検査について(p10-13)を担当し、新生児聴覚スクリーニングで陽性判定となったのちにいかにして精密検査を行うべきかについてその概要を示した。	
3 耳鼻咽喉科薬物療法マニュアル (神崎 仁/小川 郁編)	共著	2003	金原出版	軟膏(p95-101)を担当し、耳鼻咽喉科領域において用いられる軟膏剤の概要を提示し、その使用適応について解説した。	
4 CLIENT21 No. 10 感覚器(本庄 巖編)	共著	2000	中山書店	耳音響放射 (p95-102) を分担執筆。耳音響放射の種類、測定法、その生理的意義と病態診断ならびにその他の臨床応用など多岐にわたり説明。	
5 Recent developments in Auditory Mechanics. (Wada H, Takasaka T, Ikeda K et. al. eds.) 訳: 聴覚メカニクスの最近の進歩	共著	2000	World Scientific Publishing (Singapore)	宮城県・蔵王で行われた聴覚研究に関する国際会議の内容をまとめたObservation of the phase-nonlinearity in the basilar membrane vibration using DPOAE phase measurement (p395-401) を執筆。	
6 聴覚情報処理とその異常 (神崎 仁編)	共著	1996	メジカルビュー	聴性誘発反応のうち、臨床で頻繁に用いられる聴性脳幹反応より潜時が長くより中枢の機能を反映する聴性中間反応 (MLR) p134-139について分担執筆	

(学術論文)				
1 Efficacy of a vibrotactile neurofeedback training in stance and gait conditions for the treatment of balance deficits: a double-blind, placebo-controlled multicenter study (査読付) 訳: 平衡障害の治療のための起立と歩行における振動触覚刺激による神経フィードバックトレーニングの有効性	共著	2013	Otol Neurotol 32(9):1492-1499, 2013	共著者 Basta D, Rossi-Izquierdo M, Soto-Varela A, Greters ME, Bittar RS, Steinhagen-Thiessen E, Eckardt R, Harada T, Goto F, Ogawa K, Ernst Aにより独自開発機器Vertigardを用いた平衡機能評価の自施設も参加した国際共同研究の報告
2 検査結果をどう読むか・耳音響放射	単著	2013	JOHNS Vol. 29 No. 9 1479-1481	耳音響放射検査について測定結果波形の評価方法を中心に未経験者を念頭に解説した内容である。
3 Stimulus Frequency OAEを用いた蝸牛遠心性線維と耳小骨筋反射の閾値比較	単著	2012	日本音響学会聴覚研究会資料Vol. 42 :265-268	反対側雑音に対する聴覚の抑制的反射には耳小骨筋反射とオリーブ蝸牛束反射があるが、これまで鑑別の難しかった両者について耳音響放射のひとつである
4 Effects of multi-frequency random phase tone to stimulus frequency otoacoustic emission: 訳多周波数ランダム位相音のstimulus frequency otoacoustic emissionへの影響	単著	2012	日本音響学会聴覚研究会資料Vol. 41 :205-208,	Stimulus Frequency OAEが同側雑音によりどのように変化するかについて測定した報告である。

5 Suppression法を用いた Stimulus Frequency OAEの測定 (査読付)	単著	2011	Audiology Japan 54 (3) p208-213	耳音響放射のひとつでまだ臨床ではあまり活用されていない、単一周波数の刺激音に対して同時発生するStimulus Frequency OAEについて測定手法のひとつであるSuppression法を用いて測定した内容である。
5 Physical and physiological effects on otoacoustic emissions in hypobaric hypoxia (査読付) : 訳 低圧低酸素環境の耳音響放射への物理的生理学的影響	共著	2011	ORL72(4) :225-32	Ide R, Harada T, Kanzaki S, Saito H, Hoshikawa M, Kawahara T, Ogawa Kの共著で、低圧低酸素環境下で蝸牛機能を反映する耳音響放射がいかに変化するかを測定した論文である。筆頭著者の学位論文につながる研究で、自身が計画立案と論文執筆について全面的に支援した。
6 目で見る耳の検査・耳音響放射検査	単著	2011	JOHNS Vol. 27 No. 5 703-706	耳音響放射の測定法や結果評価方法について視覚的資料をふんだんに用いてわかりやすく解説した
7 Stimulus Frequency Otoacoustic Emissionの測定	単著	2010	日本音響学会聴覚研究会資料Vol. 38 :313-316	耳音響放射のひとつでまだ臨床ではあまり活用されていない、単一周波数の刺激音に対して同時発生するStimulus Frequency OAEについて測定手法のひとつであるSuppression法を用いて測定した内容である。
8 低周波音刺激に伴う歪成分耳音響放射の音圧変動の観察(査読付)	共著	2009	Audiology Japan 52 (1) p66-73, 2009	原田童彦 中市健志 館野誠 神崎仁の共著で蝸牛内リンパ水腫の推定検査として期待されている低周波数の音響で周期的に外耳に加減圧した際に耳音響放射の周期的変動を正常者で確認し報告した。
9 自分でやろう聴覚検査・耳音響放射検査	単著	2008	JOHNS 24(5) p749-752	耳音響放射測定の初心者に対してわかりやすく解説した・
10 カルマンフィルタを用いたDPOAEの時間変動の測定 (査読付)	共著	2006	Audiology Japan Vol. 49 (4) 388-394	原田童彦・神崎仁の共著で耳音響放射のひとつである歪成分耳音響放射 (DPOAE)時間変動測定法として適応フィルタであるカルマンフィルタを用いる方法を提案した内容である
11 Eccrine poroma in the external auditory canal(査読付) 訳: 外耳道のエクリン汗孔腫	共著	2003	Otolaryngol Head Neck Surg. 128(3) p439-40	Harada T, Miyamoto T, Takahashi M, Tsutsumi Yの共著で外耳道に発生した珍しい皮脂腺由来の良性腫瘍Eccrin Poromaの1例報告である
12 Recurrent extrusion of cochlear implant at an interval of 5 years.(査読付) 訳: 5年間に反復した人工内耳の排出	共著	2003	Otology and Neurotology. 24(1) p83-85	Harada T, Ishida K, Endo M, Takahashi M, Sakai Mの共著で人工内耳埋め込み術後繰り返し埋め込み機器の排出が生じた1例について報告しこの対応について考察した。
13 人工内耳のための聴覚検査	単著	2003	臨床検査 47(10) p1129-1135	人工内耳埋め込み手術に際して必要な検査について解説した

14 Effect of changes in stimulus level on phases of distortion product otoacoustic emissions (査読付) 訳: 歪成分耳音響放射の位相に対する刺激音圧の影響	共著	2001	Hearing Research 152 p152-158	Harada T, Ogawa K, Inoue Y, Kanzakiの共著で歪成分耳音響放射の周波数比と音圧比を様々に変えて、測定されたt _a 。耳音響放射の位相を詳細に測定することで歪成分耳音響放射の発生機序を考察した。
15 Measurement of DPOAE latency using inverse FFT analysis. 訳: 逆FFT解析を用いた歪成分耳音響放射の潜時測定	共著	1999	Proc. Sendai Ear Symposium 7 p113-114	Harada T, Ogawa K, Inoue Y, Kanzaki J. 周波数比を変えた歪成分耳音響放射の音圧および位相から周波数から時間への変換法である逆FFT変換を用いて発生潜時計算を行った。
16 DPOAE位相情報の活用法 (査読付)	共著	1999	Audiology Japan 42 p94-99	原田童彦 井上泰宏 小川郁 神崎仁の共著で歪成分耳音響放射の周波数比と音圧比を様々に変えて、測定されたt _a 。耳音響放射の位相を詳細に測定することで歪成分耳音響放射の発生機序を考察した。
(これ以前のは割愛した)				
(その他)				
1				
2				
3				
:				

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	福澤 龍二
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド			
人体病理学 小児科学		分子病態診断学 成育医学 診断病理学 発達病理学			
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要	
(著書)					
1. Wilms腫瘍と奇形症候群	共著	1996. 4	東京文光堂 病理診断と分子生物学遺伝学	WT1遺伝子の変異を持つ奇形症候群とWilms腫瘍の関連について解説。Wilms 腫瘍に関連する奇形症候群について概説。 共著者：秦順一, 菊池春人, 赤坂喜清, 福澤龍二, 高田礼子 担当部分：「3. Wilms 腫瘍とWT1遺伝子の変異, (p194-196)」	
2. 先天性膝病変 Beckwith-Wiedemann症候群	単著	2011. 7	日本臨床社 膝症候群	先天性膝疾患の臨床像と遺伝子異常について解説。	
3. 胎盤臍帯を理解する	単著	2015. 1	治療と診断社 小児科診療	胎盤の病理学的検索法および胎児および母体の臨床症状とその診断法について記載。	
(学術論文)					
(原著論文)					
1. 気管切開児に対するエリスロマイシン長期少量の使用経験 (査読付)	共著	1995. 4	小児感染免疫, 8:15-19	気管切開児に対するエリスロマイシン長期少量の使用経験についての報告。 著者：阿座上志郎, 保田由起治, 福澤龍二, 綾美咲, 番場正博。 担当部分：抽出不能 (患者の担当医として, エリスロマイシン投薬を担当した。)	
2. 外傷性肝膿瘍の1男児例 (査読付)	共著	1995. 7	小児感染免疫, 7:232-236	外傷性肝膿瘍の男児を症例報告し, 肝膿瘍発症の原因を考察した。 著者：福澤龍二, 小林俊夫, 綾美咲, 阿座上志郎, 番場正博。 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文すべてを記載。	
3. Do intronic mutations affecting splicing of WT1 exon 9 cause Frasier syndrome? (査読付) 和文タイトル：WT1遺伝子のイントロンの変異は, エクソン9のスプライシングの異常を起し, Frasier症候群を発症させるか?	共著	1998. 1	Journal of Medical Genetics, 35(1):45-8	性の分化異常と腎不全を伴う患者のWT1遺伝子の変異の検索を行い, 従来生来的なWT1遺伝子の変異によって発症するとされたDrash症候群とは臨床経過の異なるFrasier症候群を引き起こすことを報告した。このスプライシングの異常により, WT1蛋白自体には, 異常は起きないが, WT1蛋白の4つのisoformの発現レベルに不均衡が生じていることが, Frasier症候群発症の分子メカニズムであることを報告した。 著者：Kikuchi H, Takata A, Akasaka Y, Fukuzawa R, Yoneyama H, Kurosawa Y, Honda M, Kamiyama Y, Hata J. 担当部分：症例の性腺の病理組織像の解析 (Table 1, p45)。	
4. High frequency of inactivation of the imprinted H19 gene in "sporadic" hepatoblastoma (査読付) 和文タイトル：散発性の肝芽腫におけるインプリンティング遺伝子H19の高頻度の不活性化	共著	1999. 7	International Journal of Cancer, 82(4):490-7	散発性の肝芽腫において, H19遺伝子とIGF2遺伝子のインプリンティングの異常を調べ, H19は, Wilms 腫瘍だけでなく, 肝芽腫でも不活性化されていることが示され, 胎児性腫瘍に共通の新しいタイプの癌抑制遺伝子 (imprinted tumor-suppressor gene) であることが示唆された。 著者：Fukuzawa R, Umezawa A, Ochi K, Urano F, Ikeda H, Hata J. 担当部分：筆頭著者として論文のすべてを記載。	

5. 肝芽腫におけるH19およびIGF2の異常 (査読付)	単著	1999. 11	慶應医学, 76:493-502	小児肝臓腫瘍 (肝芽腫) の遺伝子刷り込み (ゲノムインプリンティング) の異常と腫瘍化のメカニズムと新知見を報告した。 著者: <u>福澤龍二</u> 。 担当部分: 単著であり, 論文をすべて記載。
6. Digynic triploid infant surviving for 46 days (査読付) 父親由来の三倍体の染色体を持つ乳児の46日の生存例	共著	1999. 12	American Journal of Medical Genetics, 87(4):306-10	染色体異常 (69,XXX) におけるトリプロイド染色体の両親の由来を解析。 著者: Hasegawa T, Harada N, Ikeda K, Ishii T, Hokuto I, Kasai K, Tanaka M, <u>Fukuzawa R</u> , Niikawa N, Matsuo N. 担当部分: 患者の全身像の写真と病理所見 (Patient, Fig1, 307)。
7. Specific bisulfite modification of CTG triplet repeats of the androgen receptor gene, a gene associated with the triplet repeat disease X-linked spinal and bulbar muscular atrophy (Kennedy disease) (査読付) 和文タイトル: 伴性遺伝性脊髄筋麻痺に関連したアンドロゲン遺伝子のCTGトリプレットリピートのメチル化	共著	2000. 2	Neuroscience Research Communication, 28:1-10	伴性遺伝性の神経筋麻痺疾患におけるアンドロゲン受容体遺伝子のメチル化 (パイサルファイト法による) と染色体の構造異常を報告した。 著者: Ochi K, Nozaki K, Tanaka F, Kato F, <u>Fukuzawa R</u> , Sobue G, Fukuuchi Y, Toyama Y, Hata J, Umezawa A. 担当部分: コントロールのサンプルの解析 (Patients, Table 1, p2, 3)。
8. Long-term peritoneal dialysis is a risk factor of sclerosing encapsulating peritonitis for children (査読付) 和文タイトル: 長期透析は, 小児患者に対する硬化性被嚢胞性腹膜炎発症の危険因子である	共著	2000. 7	Peritoneal Dialysis International, 20(4):445-51	腎不全患者の腹膜透析による腹膜硬化症の段階的な進行度を示す病理組織像とその発症リスクについて検討を加え報告した。 著者: Araki Y, Hataya H, Tanaka Y, <u>Fukuzawa R</u> , Ikeda M, Kawamura K, Honda M. 担当部分: 腹膜の病理組織画像のその説明 (Fig 1, 2, p441)。
9. Constitutional WT1 mutations correlate with clinical features in children with progressive nephropathy (査読付) 和文タイトル: 生来的なWT1遺伝子の変異は, 進行性腎症を伴う小児の臨床像に関連する	共著	2000. 9	Journal of Medical Genetics, 37(9):698-701	先天性のWT1遺伝子異常症の患者について, WT1遺伝子の変異様式と患者の腎障害の程度に関連を示した。 著者: Takata A, Kikuchi H, <u>Fukuzawa R</u> , Ito S, Honda M, Hata J. 担当部分: 症例の腎臓の病理学的解析 (Table 1, p699)。
10. A novel imprinted gene, KCNQ1DN, within the WT2 critical region of human chromosome 11p15.5 and its reduced expression in Wilms' tumors (査読付) (和文タイトル 新しいインプリンティング遺伝子KCNQ1DNは, 染色体11p15.5内に位置し, その発現はWilms腫瘍で低下している)	共著	2000. 11	Journal of Biochemistry, 128(5):847-53	11番染色体15.5領域に, 新しいゲノムインプリンティング遺伝子 (KCNQ1DN) を発見し報告した。 著者: Xin Z, Soejima H, Higashimoto K, Yatsuki H, Zhu X, Satoh Y, Masaki Z, Kaneko Y, Jinno Y, <u>Fukuzawa R</u> , Hata JI, Mukai T. 担当部分: 抽出不能 (担当した症例の遺伝子解析結果のデータを責任研究者に提出。データ全体の報告であり, 個々のデータには論文が触れていないため。)

11. Nesidioblastosis and mixed hamartoma of the liver in Beckwith-Wiedemann syndrome: case study including analysis of H19 methylation and insulin-like growth factor 2 genotyping and imprinting (査読付) 和文タイトル: Beckwith-Wiedemann症候群におけるネシディオプラストーシスと混合性肝過誤腫 H19のメチル化とIGF2のインプリンティングの解析	共著	2001. 7	Pediatric and Developmental Pathology, 4(4):381-90	Beckwith-Wiedemann症候群における臓器(脾臓, 肝臓)の形成異常におけるインプリンティング遺伝子(H19, IGF2)の役割を明らかにした。 著者: Fukuzawa R, Umezawa A, Morikawa Y, Kim KC, Nagai T, Hata J. 担当部分: 筆頭著者として論文をすべて記載。
12. A novel WT1 gene mutation associated with Wilms' tumor and congenital male genitourinary malformation (査読付) 和文タイトル: Wilms腫瘍と男性生殖器奇形に関連した新規のWT1遺伝子の変異	共著	2001. 9	Pediatric Research, 50(3):337-44	WT1遺伝子の異常でおこる奇形症候群について、遺伝子変異様式と臨床症状との関連を明らかにした。 著者: Sakamoto J, Takata A, Fukuzawa R, Kikuchi H, Sugiyama M, Kanamori Y, Hashizume K, Hata JI. 担当部分: Wilms腫瘍の病理組織, 免疫染色, および遺伝子多形解析の図の説明と結果および考察 (Fig 3, 4 p340-341)。
13. Pulmonary epithelial cell maturation in hyperplastic lungs associated with fetal tracheal agenesis (査読付) 和文タイトル: 気管無形成に伴う過形成肺における肺上皮の成熟	共著	2001. 12	Journal of Pediatric Surgery, 36(12):1845-8	気管閉鎖症に必発する過形成肺の成熟度を形態学的に評価した論文。 著者: Mori K, Ikeda K, Hayashida S, Tokieda K, Ishimoto H, Fujii Y, Fukuzawa R, Kitano Y. 担当部分: 気管閉鎖症の病理学および電顕的解析およびその説明 (Fig 2, 3, p1846-8147)。
14. Beckwith-Wiedemann Syndrome, Pancreatoblastoma, and the Wnt signaling pathway (査読付) 和文タイトル: Beckwith-Wiedemann症候群, 膵芽腫, とWNTシグナル経路	共著	2002. 1	American Journal of Pathology, 160(4):1541-2	Beckwith-Wiedemann症候群に合併した膵芽腫におけるWNTシグナルの異常(β -catenin遺伝子の変異と同蛋白の核内蓄積)を報告。 著者: Kerr NJ, Fukuzawa R, Reeve AE, Sullivan MJ. 担当部分: 論文をすべて執筆 (1541-2)。
15. Expression of mitogen-activated protein kinases in human renal dysplasia (査読付) 和文タイトル: ヒト腎異形成におけるMAPキナーゼの発現)	共著	2002. 3	Kidney International, 61(3):899-906	異形成性嚢胞腎においてMitogen activated protein kinases (MAPKs) 関連分子の発現と局在を免疫組織学的に検索した研究。正常胎児腎と異形成性嚢胞腎のMAPKs関連蛋白の局在を比較した結果, p38とERKは異形成性の腺管の上皮の増殖や嚢胞形成に関与し, JNKの発現の低下は, 腎臓の発達障害に関与することが示唆された。異形成性嚢胞腎の発生の分子メカニズムとして, MAPKsの発現の異常が関与していることを報告した。 著者: Omori S, Fukuzawa R, Hida M, Awazu M. 担当部分: 異形成性嚢胞腎のすべての症例の収集と病理学的解析 (Methods, specimens, p900)
16. Embryonal hyperplasia of Bowman's capsular epithelium in patients with WT1 mutations (査読付) 和文タイトル: WT1遺伝子の異常に関連するボウマン嚢上皮胎児性過形成	共著	2003. 1	Pediatric Nephrology, 18(1):9-13	先天性のWT1遺伝子の異常を持つ腎不全の患者では, WT1遺伝子の異常に関連して, 終末腎では糸球体上皮細胞の再生が過形成性的におこる特殊な病理像を呈することを報告した。 著者: Fukuzawa R, Eccles MR, Ikeda M, Hata J. 担当部分: 筆頭著者および責任著者としてすべて論文を記載。

17. アデノウイルス肺炎の2剖検例 (査読付)	共著	2003. 6	日本小児呼吸器疾患学会雑誌, 14:11-15	病理解剖で明らかになった乳児アデノウイルス肺炎の報告。 著者：酒井忠和, 長秀男, 安倍隆, 山下行雄, 御宿百合子, 中尾歩, 麻生泰二, 後藤美和, 武内可尚, 福澤龍二, 杉浦仁 担当部分：抽出不能 (報告例の担当病理医師として, 患者を解剖しアデノウイルスを同定した)。
18. Beckwith-Wiedemann syndrome-associated hepatoblastoma: Wnt signal activation occurs later in tumorigenesis in patients with 11p15.5 uniparental disomy (査読付) 和文タイトル：父親片親性ダイソミーのBeckwith-Wiedemann syndromeに関連した肝芽腫の発症メカニズム	共著	2003. 7	Pediatric and Developmental Pathology, 6(4):299-306	肝芽腫を発症した奇形症候群の解析から, インプリンティング遺伝子 (H19, IGF2)の異常だけでは, 腫瘍化に至らず, 二次的にWNTシグナルの異常が起こり, 腫瘍化が起こることを示唆した。 著者：Fukuzawa R, Hata J, Hayashi Y, Ikeda H, Reeve AE. 担当部分：筆頭著者および責任著者としてすべて論文を記載。
19. Epigenetic differences between Wilms' tumours in white and east-Asian children (査読付) 和文タイトル：西洋とアジアにおけるWilms腫瘍の発症機構の相違	共著	2004. 2	Lancet, 363(9407):446-51	Wilms 腫瘍を発症した患児5000例の疫学的データを基に, 1) Wilms 腫瘍の発症メカニズムは, 前癌性病変のタイプに基づいて大きく二つに分類できること, 2) 二つの前癌性病変の発症頻度には, 西洋人と東洋人で差があり, このことにより東洋人の Wilms 腫瘍の発症頻度が少ないことを説明できることを報告した。また, その人種間の相違の分子メカニズムとして, H19 遺伝子のメチル化の異常が起こる頻度の差にあることを報告した。本研究は, 遺伝子に起こるメチル化の異常が, 人種間で腫瘍の発症頻度の差を説明する分子基盤となることを示した。 著者：Fukuzawa R, Breslow NE, Morison IM, Dwyer P, Kusafuka T, Kobayashi Y, BecroftDM, Beckwith JB, Perlman EJ, Reeve AE. 担当部分：筆頭著者として論文をすべて執筆。
20. Myogenesis in Wilms' tumors is associated with mutations of the WT1 gene and activation of Bcl-2 and the Wnt signaling pathway (査読付) 和文タイトル：Wilms 腫瘍における筋肉の発症は, WT1 の異常とBcl-2の発現, Wnt シグナルの活性化と関連する	共著	2004. 9	Pediatric and Developmental Pathology, 7:125-137	WT1 遺伝子に変異を認めるWilms 腫瘍の分子病理学的特徴を調べるために, β catenin 遺伝子の変異解析とその発現を免疫組織学的検索した研究。WT1 遺伝子に変異を認めるWilms 腫瘍では, 1) 75%の腫瘍に, β catenin 遺伝子の変異を伴うこと, 2) これらの腫瘍の組織学的特徴として, 横紋筋への分化が見られることを報告した。また, WT1 に変異を有する Wilms 腫瘍は, β catenin 遺伝子の変異が無くても, 腫瘍細胞の核内に β catenin 蛋白の集積を認め, WNT シグナルが活性化していることを報告した。 著者：Fukuzawa R, Heathcott RW, Sano M, Morison IM, Yun K, Reeve AE. 担当部分：筆頭著者および責任著者としてすべて論文を記載。
21. Imprinting, expression, and localisation of DLK1 in Wilms tumours (査読付) 和文タイトル：Wilms 腫瘍におけるDLK1遺伝子のインプリンティング, 発現とその局在	共著	2005. 2	Journal of Clinical Pathology, 58(2):145-50	Wilms 腫瘍において, IGF2のインプリンティングの異常とDLK1のインプリンティングの異常の関連を調べた最初の論文である。同時に, ヒト胎児組織と Wilms 腫瘍における DLK1の局在も検索した。Wilms 腫瘍における IGF2のインプリンティングの異常は, DLK1のインプリンティングの異常と関連していなかった。インプリンティングの異常のメカニズムは, ゲノム全体で共有されたメカニズムではなく, ゲノム局所で個々に制御されていることが示唆された。 著者：Fukuzawa R, Heathcott RW, Morison IM, Reeve AE. 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて記載。

<p>22. Destabilized adhesion in the gastric proliferative zone and c-Src kinase activation mark the development of early diffuse gastric cancer (査読付) 和文タイトル：びまん性胃癌は、胃底腺頸部細胞の接着能の不安定化とSrcの発現により発症する</p>	<p>共著</p>	<p>2007. 3</p>	<p>Cancer Research, 67(6):2480-9</p>	<p>E-cadherin遺伝子の胚細胞変異を持つ患者の胃癌の前癌性病変と前癌性病変から発症した腫瘍の分子病理学的検索から、1) 胃癌の起源は、胃底腺組織の頸細胞と考えられること、2) 癌化の初期にE-cadherinを中心とした接着分子が順次、不活性化すること、3) 癌細胞の進展には、c-src遺伝子の活性化が重要であることを報告した。この論文では、胃癌の前癌性病変から癌へ進展する分子モデルを示した。 著者：Humar B, Fukuzawa R, Blair V, Dumbier A, More H, Charlton A, Yang HK, Kim WH, Reeve AE, Martin I, Guilford P. 担当部分：胃癌病理組織の解析、免疫染色の写真と説明 (Fig 1-5, 2481-2486)。</p>
<p>23. Genome wide expression profiling identifies genes associated with colorectal liver metastasis (査読付) 和文タイトル：発現プロファイルによる大腸癌の転移に関連した遺伝子群の同定</p>	<p>共著</p>	<p>2007. 9</p>	<p>Oncology Reports, 17(6):1541-9</p>	<p>肝臓に転移した大腸癌と原発の大腸癌の組織の遺伝子発現をマイクロアレイ (発現プロファイル) を用いて比較し、転移する腫瘍で高発現している遺伝子を同定した。同定した遺伝子は、転移に関与するする遺伝子と考えられた。 著者：Lin HM, Chatterjee A, Lin YH, Anjomshoaa A, Fukuzawa R, McCall JL, Reeve AE. 担当部分：研究に必要な76例の原発および転移性肝臓腫瘍の組織像を検索・解析した (material and method p2480)。</p>
<p>24. Sequential WT1 and CTNBN1 mutations and alterations of beta-catenin localisation in intralobar nephrogenic rests and associated Wilms tumours (査読付) 和文タイトル：Wilms 腫瘍におけるWT1およびβ catenin 遺伝子の多段階的な変異</p>	<p>共著</p>	<p>2007. 9</p>	<p>Journal of Clinical Pathology, 60(9):1013-6</p>	<p>Wilms 腫瘍において、WT1 と β catenin 遺伝子の変異が起きるタイミングを検索するために、腎臓の正常部と腫瘍とともに、前癌性病変を解析した最初の論文。WT1 の変異は、腫瘍化の早期に起こり、β catenin の変異は、腫瘍化の後期に起こることを報告した。 著者：Fukuzawa R, Heathcott RW, More HE, Reeve AE. 担当部分：筆頭および責任著者として、研究計画および論文すべてのページを記載 (p1013-6)。</p>
<p>25. Mcl-1, an anti-apoptotic Bcl-2 family member, essentially overlaps with insulin-producing cells in neonatal nesidioblastosis (査読付) 和文タイトル：新生児のネシディオプラストーシスにおけるインスリン分泌細胞は、抗アポトーシス関連蛋白Mcl-1と共発現する</p>	<p>共著</p>	<p>2008. 4</p>	<p>Virchows Archives, 452(4):469-70</p>	<p>Mcl-1蛋白の膵臓の分化における役割を新生児の膵臓疾患で調べた論文。 著者：Sano M, Hayashi E, Murakami H, Kishimoto H, Fukuzawa R, Nemoto N. 担当部分：図を除く論文をすべて執筆 (p469-70)。</p>
<p>26. Wilms tumour histology is determined by distinct types of precursor lesions and not epigenetic changes (査読付) 和文タイトル：Wilms 腫瘍の組織像は、エピジェノタイプではなく、前駆病変のタイプによって決定される</p>	<p>共著</p>	<p>2008. 8</p>	<p>Journal of Pathology, 215(4):377-387</p>	<p>Wilms 腫瘍では、奇形症候群との関連から、先天性に見られる遺伝子異常のタイプ (WT1, IGF2) によって、腫瘍の組織型が決定すると考えられて来た。本研究では、Wilms 腫瘍の病理組織型は先天性の遺伝子異常のタイプによって決定されるのではなく、腫瘍の前駆細胞型によって決まることを報告した。 著者：Fukuzawa R, Anaka MR, Heathcott RW, McNoe LA, Morison IM, Perlman EJ, Reeve AE. 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて記載 (p377-387)。</p>

<p>27. Reduced expression of a gene proliferation signature is associated with enhanced malignancy in colon cancer (査読付) 和文タイトル：大腸癌の悪性度は、細胞の増殖に関連する遺伝子群発現と逆相関する</p>	<p>共著</p>	<p>2008. 9</p>	<p>British Journal of Cancer, 99 (6):966-73</p>	<p>大腸癌の遺伝子発現プロファイル解析により、細胞の増殖を促進する遺伝子群の発現の低下が、大腸癌の進展や予後に関連することを示した。 著者：Anjomshoaa A, Lin YH, Black MA, McCall JL, Humar B, Song S, <u>Fukuzawa R</u>, Yoon HS, Holzmann B, Friederichs J, van Rij A, Thompson-Fawcett M, Reeve AE. 担当部分：Immunohistochemical analysis (p967)とその結果(p970)。この他、研究対象となった大腸癌症例すべての組織像を解析。この結果をもとにした研究であるため、一部抽出不能。</p>
<p>28. Germline mutations in WTX cause a sclerosing skeletal dysplasia but do not predispose to tumorigenesis (査読付) 和文タイトル：WTX 遺伝子の生来的な変異は、骨硬化症を起すが、腫瘍を発症しない</p>	<p>共著</p>	<p>2009. 1</p>	<p>Nature Genetics, 41(1):95-100</p>	<p>新規に同定された癌抑制遺伝子WTXが、骨奇形症候群 (Osteopathia Striata with Cranial Sclerosis) の胚細胞レベルで変異していることを発見し、同疾患の責任遺伝子であることを初めて報告した。 著者：Jenkins ZA, van Koglenberg M, Morgan Y, Jeffs A, <u>Fukuzawa R</u>, Pearl E, Thaller C, Hing AV, Porteous ME, Garcia-Minaur S, Bohring A, Lacombe D, Stewart F, Fiskerstrand T, Bindoff L, Berland S, Ades LC, Tchan M, David A, Wilson LC, Hennelam RC, Donnai D, Mansour S, Corimer-Daire V, Robertson SP. 担当部分：Table (p96), Methods (p100), Supplementary data Table 2 and Figure 4 (online)</p>
<p>29. Canonical WNT signalling determines lineage specificity in Wilms tumour (査読付) 和文タイトル：WNTシグナルは、Wilms腫瘍の起原の特異性を決定する</p>	<p>共著</p>	<p>2009. 2</p>	<p>Oncogene, 28(8):1063-75</p>	<p>Wilms 腫瘍における臓器形成のプログラムと腫瘍化のプログラムを遺伝子発現プロファイルを用いて明らかにした。腎臓発生プログラムと中胚葉系への多分化能を有するプログラムを分子的に同定した。多分化能を持つ腫瘍では、WNTシグナルを活性化する β cateninや WTX 遺伝子も変異しており、Wilms 腫瘍では、その分化能に応じて特異的なシグナル経路が活性化されていることを示した。 著者：<u>Fukuzawa R</u>, Anaka MR, Weeks RJ, Morison IM, Reeve AE. 担当部分：筆頭および責任著者として、研究計画および論文すべてページ記載 (p1063-75)。</p>
<p>30. Increased levels of active c-Src distinguish invasive from in situ lobular lesions (査読付) 和文タイトル：活性型 Src の発現が、浸潤性と初期乳癌 (小葉癌) の鑑別する</p>	<p>共著</p>	<p>2009. 7</p>	<p>Breast Cancer Research, 11(4):R45</p>	<p>乳癌 (小葉癌) の初期から浸潤癌に至る多段階的な進展過程に起こる分子レベルの変化 (E-cadherin遺伝子のメチル化, c-Srcタンパクの発現) を明らかにした。 著者：Zou D, Yoon HS, Amjomshaa A, Perez D, <u>Fukuzawa R</u>, Guilford P, Humar B. 担当部分：E-cadherinとSrcタンパクの免疫染色とその図説明と結果 (Fig 2, 4, 5, 6, p4-8)。</p>
<p>31. PAX3 is expressed in the stromal compartment of the developing kidney and in Wilms tumors with myogenic phenotype (査読付) 和文タイトル：PAX3遺伝子は、胎児腎臓の間質と横紋筋の発生を伴うWilms腫瘍で発現している</p>	<p>共著</p>	<p>2009. 9</p>	<p>Pediatric and Developmental Pathology, 12(5):347-54</p>	<p>筋肉の発生を決定するPAX3遺伝子の腎臓と小児腎臓腫瘍 (Wilms腫瘍) での発現を検討した研究で、同遺伝子の発現が、腎臓腫瘍に横紋筋の発生を引き起こすことを示した。 著者：Hueber PA, <u>Fukuzawa R</u>, Elkares R, Chu L, Blumentkrantz M, He SJ, Anaka MR, Reeve AE, Eccles M, Jabado N, Iglesias DM, Goodyer P. 担当部分：PAX3免疫染色の方法と結果とその説明 (Fig 3, p350-352)。</p>

32. 新型インフルエンザ罹患により鑄型気管支炎を発症した3症例	共著	2010. 7	東京小児科医学会報, 29:98-100	新型インフルエンザ罹患により発症した鑄型気管支炎を教育的に提示した論文。 著者：荒井洋実, 寺野千香子, 町田奈都子, 斉藤雄弥, 長佳美, 公家里依, 佐々木真利, 玉目琢也, 石立誠人, 坂井智行, 有安大典, 宮川知士, 寺川敏郎, 三浦大, 三山佐保子, 長谷川行洋, <u>福澤龍二</u> 。 担当部分：抽出不能（報告例の担当病理医師として、鑄型気管支炎の診断した。論文全体の執筆指導）。
33. 副腎皮質癌の5例の検討 (査読付)	共著	2010. 10	日本臨床細胞学会雑誌, 49: 254-261	小児の副腎皮質癌5症例を細胞学的に検討した。 著者：設楽保江, 庄野幸恵, 岩田忠成, <u>福澤龍二</u> , 森川征彦 担当部分：photo 2-5, table 5 (p255-261)。
34. WTX mutation can occur both early and late in the pathogenesis of Wilms tumour (査読付) 和文タイトル：WTX遺伝子の変異葉, 腫瘍発症の早期にも, 後期にも起こる	共著	2010. 11	Journal of Medical Genetics, 47(11):791-4	Wilms腫瘍の発症において, WTX遺伝子の変異がおこるタイミングを調べ, 同遺伝子の腫瘍化における役割を明らかにした。 著者：Fukuzawa R, Holman SK, Chow CW, Savarirayan R, Reeve AE, Robertson SP. 担当部分：筆頭著者として, 研究計画および論文すべてのページを記載 (p791-4)。
35. Three children associated with plastic bronchitis with 2009 H1N1 influenza virus infection (査読付) 和文タイトル：2009H1N1インフルエンザウイルス感染に伴って発症した鑄型肺炎3症例	共著	2011. 1	Pediatric Infectious Diseases Journal, 30(1):80-2	2009年度に流行したH1N1インフルエンザウイルス感染症の重症肺合併症に関する世界初の報告。 著者：Terano C, Miura M, <u>Fukuzawa R</u> , Saito Y, Arai H, Sasaki M, Ariyasu D, Hasegawa Y. 担当部分：責任著者として, 論文すべてのページを記載 (p80-82)。
36. Heterozygous C-propeptide mutations in COL1A1: osteogenesis imperfecta type IIC and dense bone variant (査読付) 和文タイトル：骨形成不全症におけるコラーゲン1型1アルファ1のCペプチドのヘテロの変異	共著	2011. 9	American Journal of Medical Genetics A, 2011;155A(9):2269-73	骨形成不全症の一亜型において, 新しい遺伝子変異とその骨の病理組織像を報告した。 著者：Takagi M, Hori N, Chinen Y, Kurosawa K, Tanaka Y, Oku K, Sakata H, <u>Fukuzawa R</u> , Nishimura G, Spranger J, Hasegawa T. 担当部分：骨の異常の病理組織画像 (Fig 2, p2271)の作成と解説の記載。
37. PAX8 mutation disturbing thyroid follicular growth (査読付) 和文タイトル：PAX8遺伝子の変異は, 甲状腺の濾胞の発育を障害する	共著	2011. 12	Journal of Clinical Endocrinology and Metabolism, 96(12):E2039-44	PAX8遺伝子の正常と変異型を持つ細胞がモザイクに存在する症例の家族内での変異遺伝子の浸透と遺伝子変異が引き起こす甲状腺組織の病理学的変化を始めて報告した。 著者：Narumi S, Yoshida A, Muroya K, Asakura Y, Adachi M, <u>Fukuzawa R</u> , Kameyama K, Hasegawa T 担当部分：甲状腺の病理組織画像 (Fig 2, p2042)の作成と解説の記載。
38. A novel mutation in LEPRE1 that eliminates only the KDELER-retrieval sequence causes non-lethal osteogenesis imperfecta (査読付) 和文タイトル：LEPRE1遺伝子内でKDELERレトリバル配列を除いた変異は, 非致死性の骨形成不全症を引き起こす	共著	2012. 5	PLoS One, 7(5):e36809	骨形成不全症の新しい遺伝子変異と骨の病理組織像を報告した。 著者：Takagi M, Hori N, Chinen Y, Kurosawa K, Tanaka Y, Oku K, Sakata H, <u>Fukuzawa R</u> , Nishimura G, Spranger J, Hasegawa T. 担当部分：骨の異常に関する組織画像 (Fig 1, p3)の作成と解説の記載。

39. 嚢胞性肺疾患：特に気管支閉鎖症の診断に留意し、1歳までに手術する理由について（査読付）	共著	2012. 6	日本小児呼吸器疾患学会雑誌, 23(1): 77-82	嚢胞性肺疾患の手術に関して、特に気管支閉鎖症の診断に留意し、1歳までに手術することを喚起した論文 著者：広部誠一, 新井真理, 東間未来, 小森広嗣, 鎌形正一郎, 石立誠人, 宮川知士, <u>福澤龍二</u> 担当部分：抽出不能（提示症例の病理診断を担当し、個々の症例の具体的な所見については言及していないため）。
40. Global demethylation in loss of imprinting subtype of Wilms tumor（査読付） 和文タイトル：IGF2の刷り込みに異常のあるWilms腫瘍におけるグローバルな脱メチル化	共著	2013. 2	Genes Chromosomes and Cancer, 52(2):174-84,	Wilms腫瘍の遺伝子のメチル化の異常について、遺伝子をゲノムワイドに検索し、特定の遺伝子異常を持つ腫瘍グループに特殊なメチル化パターンがあることを見いだした。 著者：Ludgate JL, Le Mee G, <u>Fukuzawa R</u> , Rodger EJ, Weeks RJ, Reeve AE, Morison IM. 担当部分：症例すべての病理組織像と遺伝子の変異 (p176 sample selection)。
41. Association of variance in anatomical elements of myocardial bridge with atherosclerosis（査読付） 和文タイトル：心臓の冠状動脈の粥状硬化症と心筋の顕微鏡的な微細構造との関連	共著	2013. 3	Atherosclerosis, 227(1):153-8	心臓の冠状動脈の粥状硬化症と心筋の顕微鏡的な微細構造との関連を明らかにした。 著者：Iuchi A, Ishikawa Y, Akishima-Fukasawa Y, <u>Fukuzawa R</u> , Akasaka Y, Ishii T. 担当部分：共同研究者として、組織標本の一部を検索し結果を提出。このため担当部分抽出不能。
42. A report of two novel NR5A1 mutation families: possible clinical phenotypes of symptoms of anxiety and/or depression（査読付） 和文タイトル：NR5A1の新しい変異を家族例：精神症状との関連	共著	2013. 6	Clinical Endocrinology, 78(6):957-65	NR5A1遺伝子の異常は、性腺の発達不全を起こすことが知られているが、本研究により同遺伝子と精神障害との関連を初めて明らかにした。 著者：Suwanai A, Ishi I T, Haruna H, Yamataka A, Narumi S, <u>Fukuzawa R</u> , Ogata Y, Hasegawa T. 担当部分：性腺の組織検索の方法 (Gonadal pathology), 結果 (histopathology), 考察を執筆。性腺の組織画像 (Fig 1) とその説明を作成 (p958-65)。
43. Characteristic testicular histology is useful for the identification of NR5A1 gene mutations in prepubertal 46,XY patients（査読付） 和文タイトル：性分化異常の患者の精巣の病理所見は、NR5A1遺伝子の異常の同定に有用である	共著	2013. 8	Hormone Research in Paediatrics, 80(2):119-28	性の分化異常を示す患者の精巣の組織像とNR5A1遺伝子の変異に強い関連があることを見い出し、精巣の病理所見から本疾患の診断が可能であることを報告した。 著者：Nishina-Uchida N, <u>Fukuzawa R</u> , Numakura C, Suwanai AS, Hasegawa T, Hasegawa Y. 担当部分：責任著者として、研究計画および論文のすべてを記載 (p119-28)。
44. 心肺停止で発見された心臓線維腫の1例（査読付）	共著	2013. 10	日本小児科学会雑誌, 117(10): 1630-5	稀な心臓腫瘍の病理像と心停止の関連についての考察した。 著者：波多野恵, 福島直哉, 斎藤美香, 玉目琢也, 横山晶一郎, 大木寛生, 三浦大, 澁谷和彦, <u>福澤龍二</u> , 河野達夫. 担当部分：病理所見 (p1631-33), 図4とその説明 (p1634)。

<p>45. Homozygous deletion of DIS3L2 exon 9 due to non-allelic homologous recombination between LINE-1s in a Japanese patient with Perlman syndrome (査読付) 和文タイトル：日本人のPerlman 症候群の患者に見られたDIS3L2遺伝子のホモ欠失</p>	共著	2013. 11	European Journal of Human Genetics, 21(11):1316-9	日本で初めて見つかったPerlman症候群のDIS3L2遺伝子の異常の報告。 著者：Higashimoto K, Maeda T, Okada J, Ohtsuka Y, Sasaki K, Hirose A, Nomiyama M, Takayanagi T, <u>Fukuzawa R</u> , Yatsuki H, Koide K, Nishioka K, Joh K, Watanabe Y, Yoshiura K, Soejima H. 担当部分：抽出不能。本例の病理解剖学的にPerlman 症候群と診断した。
<p>46. Bilateral intralobar sequestration of the lung: pathologic and radiologic findings (査読付) 和文タイトル：両側性葉内肺分画症：放射線学および病理学的所見</p>	共著	2014. 1	Pediatric and Developmental Pathology, 17(1)55-8	世界で3例目の稀な肺奇形の報告。その発症メカニズムについて病理学的に考察した。 著者： <u>Fukuzawa R</u> , Komori K, Kohno T, Hirobe S, Miyauchi J. 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて執筆(p55)。
<p>47. 気管支閉鎖症に関連した肺嚢胞性病変の病理学的解析 -特にCCAMとの関連性について- (査読付)</p>	共著	2014. 10	日本小児外科学会誌, 50(6)：999-1004	気管支閉鎖に関連して見られた肺嚢胞性病変の多くは、先天性嚢胞性腺腫様奇形であるが、気管支閉鎖の起こる時期によって、嚢胞の組織病理学的特徴が異なることを報告した。 著者：小森広嗣, 東間未来, 下島直樹, 山本裕輝, 緒方さつき, 狩野元宏, 石立誠人, 宮川知士, 福澤龍二, 広部誠一. 担当部分：病理 図1-4とその説明 (p1000-1002)
<p>48. Membranoproliferative glomerulonephritis and C3 glomerulonephritis: frequency, clinical features, and outcome in children (査読付) 和文タイトル 小児期の膜性増殖性腎炎とC3腎炎の頻度, 臨床像, 予後</p>	共著	2015. 4	Nephrology, 20(4):286-92	C3糸球体腎炎は、膜性増殖性糸球体腎炎のおよそ半数を占めると考えられる。また、C3糸球体腎炎は、膜性増殖性糸球体腎炎よりも免疫療法に対して、抵抗性であると考えられた。 著者：Okuda Y, Ishikura K, Hamada R, Harada R, Sakai T, Hamasaki Y, Hataya H, <u>Fukuzawa R</u> , Ogata K, Honda M. 担当部分：病理組織作成および蛍光染色 (Fig 1, p289)。
<p>49. Identification of X monosomy cells from a gonad of mixed gonadal dysgenesis with a 46,XY karyotype (査読付) 和文タイトル：核型46XYの混合性性腺形成異常の性腺からの45Xモノソミー細胞の同定</p>	共著	2015. 4	Medicine, 94(14):e720	通常のリンパ球の核型検査では分からない染色体の異常を、蛍光染色法による染色体の核型の標識および多重蛍光染色法で同定する方法を開発した。共著者：Nishina-Uchida N, <u>Fukuzawa R</u> , Hasegawa Y, Morison IM 担当部分：Corresponding author (責任著者)として、論文のすべてのページを執筆。
<p>50. SAMD9 mutations cause a novel multisystem disorder, MIRAGE syndrome, and are associated with loss of chromosome 7 (査読付) 和文タイトル：SAMD9変異は新規の多系統器官の異常 ミラージュ症候群を引き起こし、7番染色体の欠失と関連する</p>	共著	2016. 7	Nature Genetics, Jul;48(7):792-7.	性腺および副腎の低形成を特徴的の症状とする新規疾患 (MIRAGE症候群)においてSAMD9遺伝子の変異に変異が起きていることおよびその発症メカニズムを報告した。 共著者：Narumi S, Amano N, Ishii T, Katsumata N, Muroya K, Adachi M, Toyoshima K, Tanaka Y, <u>Fukuzawa R</u> , Miyako K, Kinjo S, Ohga S, Ihara K, Inoue H, Kinjo T, Hara T, Kohno M, Yamada S, Urano H, Kitagawa Y, Tsugawa K, Higa A, Miyawaki M, Okutani T, Kizaki Z, Hamada H, Kihara M, Shiga K, Yamaguchi T, Kenmochi M, Kitajima H, Fukami M, Shimizu A, Kudoh J, Shibata S, Okano H, Miyake N, Matsumoto N, Hasegawa T. 担当部分：本症候群の病理診断および形態学的な特徴づけ, SAMD9の免疫染色を行った (Figure 2C, DおよびSupplementary Fig 5)

51. Gonadal macrophage infiltration in congenital lipoid adrenal hyperplasia (査読付) 和文タイトル：先天性副腎皮質過形成の性腺におけるマクロファージの浸潤	共著	2016. 8	European Journal of Endocrinology Aug;175(2):127-32.	先天性副腎皮質過形成に見られる性腺の腫大の原因のとして、脂肪を含有した組織球の集族が関与していることを明らかにした論文。 共著者：Ishii T, <u>Fukuzawa R</u> , Sato T, Muroya K, Adachi M, Ihara K, Igaki J, Hasegawa Y, Sato S, Mitsui T, Hasegawa T. 担当部分：先天性副腎皮質過形成の患者7人すべての精巣および卵巣の病理診断 (Table 1) および免疫ならびに蛍光染色によるステロイド産生細胞は脂肪を含有した組織球の区別を示す図を作成し、これに関する説明とディスカッションの記載 (Figure 1, 2)。
52. Pathological classification of human iPSC-derived neural stem/progenitor cells towards safety assessment of transplantation therapy for CNS diseases (査読付) 和文タイトル：iPS細胞由来ヒト神経幹細胞移植の病理学的分類：中枢神経疾患への移植治療の安全性に向けて	共著	2016. 9	Molecular Brain Sep 19;9(1):85.	脊髄損傷モデルマウスにおけるヒトiPS細胞由来の神経幹細胞の移植後の病理組織像について分類した最初の論文。 共著者：Sugai K*, <u>Fukuzawa R*</u> , Shofuda T*, Fukusumi H, Kawabata S, Nishiyama Y, Higuchi Y, Kawai K, Isoda M, Kanematsu D, Hashimoto-Tamaoki T, Kohyama J, Iwanami A, Suemizu H, Ikeda E, Matsumoto M, Kanemura Y, Nakamura M, Okano H. *筆頭著者三人 担当部分：移植したiPS細胞の病理分類 (Table 1, 2 および Figure 4, 5) と図の作成およびこれらに関する説明とディスカッションの記載。
53. The Distribution and Cellular Lineages of XX and XY Cells in Gonads Associated with Ovotesticular Disorder of Sexual Development (査読付) 和文タイトル：真性半陰陽の性腺におけるXX細胞とXY細胞の分布とリネージ	共著	2016. 10	Sexual Development 10(4):185-190.	XXとXY染色体を持つ真性半陰陽 (Ovotesticular Disorder of Sexual Development) の性腺組織に性染色体の分布に逆の現象(精巣内にXX染色体を持つ細胞、卵巣内にXY染色体を持つ細胞)が起きていることをはじめて明らかにした。 共著者：Nishina-Uchida N, <u>Fukuzawa R</u> , Ishii T, Anaka MR, Hasegawa T, Hasegawa Y. 担当部分：Corresponding author (責任著者) として、論文のすべてのページを執筆。
The developmental programme for genesis of the entire kidney is recapitulated in Wilms tumour (査読付き) 和文タイトル Wilms腫瘍は、腎臓発生のプログラムを再現する	共著	2017. 1	PLoS One, 17:12(10):e:0186333	Wilms腫瘍の発現プロファイル解析と蛍光免疫染色 (多重染色) から、同腫瘍は腎臓の発生のプログラムを再現していることをはじめて明らかにした。 <u>Fukuzawa R</u> , Anaka MR, Morison IM, Reeve AE. 担当部分：Corresponding author (責任著者) として、すべての実験および論文を執筆。
総説				
1. Wilms腫瘍とWT1遺伝子	共著	1996. 4	小児科診療, 58:175-181	Wilms 腫瘍におけるWT1遺伝子変異について概説。 著者：秦順一, 菊池春人, 米山浩志, <u>福澤龍二</u> , 赤坂喜清. 担当部分：「Wilms 腫瘍を発症する奇形症候群」 (p176-177)。
2. Wilms腫瘍とおよび同腫瘍を伴う奇形症候群とWT1遺伝子の異常	共著	1996. 4	小児科, 7:309-314	Wilms 腫瘍に関連する奇形症候群とWT1遺伝子変異について概説。 著者：秦順一, 菊池春人, 赤坂喜清, <u>福澤龍二</u> , 高田礼子. 担当部分：「I. Wilms 腫瘍と染色体異常, 奇形症候群」 (p309-310) 「II. WT1遺伝子の構造と機能および発現パターン」 (p310-311)。
3. 小児腫瘍 (胎児性腫瘍) における imprinted tumor-suppressor gene H19	共著	1996. 7	病理と臨床, 14:935-940	小児腫瘍にみられる遺伝子刷り込み (ゲノムインプリンティング) の異常と腫瘍化のメカニズムを解説。 著者： <u>福澤龍二</u> , 菊池春人, 秦順一. 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて執筆。

4. WT1遺伝子と Wilms腫瘍 および奇形症候群	共著	1998. 7	現代医療, 30:105-109	Wilms 腫瘍に関連する奇形症候群についてWT1遺伝子の異常を中心に概説。 著者：秦順一, 菊池春人, 高田礼子, <u>福澤龍二</u> , 坂元純。 担当部分：「WT1遺伝子の構造と機能および発現パターン」 (p106)。
5. Wilms腫瘍と奇形症候群	共著	2000. 5	病理と臨床, 17:450-455	Wilms 腫瘍に関連する奇形症候群について概説。 著者：秦順一, 高田礼子, <u>福澤龍二</u> , 坂元純, 菊池春人。 担当部分：「WT1変異とWilms 腫瘍発症のメカニズム」 (p452)
6. Wilms腫瘍と奇形症候群	共著	2000. 7	日本臨床, 58:1419-25	Wilms 腫瘍に関連する奇形症候群について概説。 著者：秦順一, <u>福澤龍二</u> , 高田礼子, 菊池春人。 担当部分：「H19, IGF2 (WT2)とWilms 腫瘍」および図6 (p1423-1424)
7. Insulin-like growth factor-II imprinting in cancer (査読付) 和文タイトル：癌におけるインスリン様成長因子IIの遺伝子刷り込み(インプリンティング)	共著	2002. 6	Lancet, 359(9323):2050-1	IGF2遺伝子のインプリンティングの異常と癌の解説。著者：Reeve AE, Becroft DM, Morison IM, <u>Fukuzawa R</u> 。 担当部分：Table作成 (p2050)。
8. 嚢胞性腎疾患におけるMAPキナーゼ	共著	2002. 8	発達腎研究会誌, 10:62-65	MAPキナーゼの腎臓の発生における役割と奇形発症のメカニズムについて解説。 著者：大森さゆ, 飛弾麻里子, <u>福澤龍二</u> , 高橋久英, 粟津緑。 担当部分：実験方法(p62)および結果のまとめ表1 (p63)
9. Molecular pathology and epidemiology of nephrogenic rests and Wilms tumors (査読付) 和文タイトル：Wilms腫瘍とその前駆病変の分子病理学と疫学	共著	2007. 9	Journal of Pediatric Hematology Oncology, 29(9):589-94	IGF2遺伝子のインプリンティング (ゲノム刷り込み) の異常発症の分子メカニズムを詳説。IGF2のインプリンティングの異常と腫瘍の組織型との関連およびその疫学について解説。 著者： <u>Fukuzawa R</u> , Reeve AE。 担当部分：筆頭著者として論文をすべて執筆。
10. 急性虫垂炎 -腹部超音波検査所見と虫垂病理所見の関連について-	共著	2012. 5	小児外科, 44:416-420	急性虫垂炎の腹部超音波検査所見と虫垂病理所見の関連について解説。 著者：宇戸啓一, 鎌形正一郎, 広部誠一, 新井真理, 東間未来, 小森広嗣, 大野道暢, 柴田涼平, <u>福澤龍二</u> 。 担当部分：病理組織所見の画像, 説明, 結果についての記述 (図 2, p418)
症例報告				
1. 無菌性髄膜炎に伴った片側性小児視神経炎の1例	共著	1994. 3	臨床眼科, 48:396-7	脳炎後に視神経障害を伴った患者の報告。 著者：田中香紀, 村形敦, <u>福澤龍二</u> 。 担当部分：抽出不能 (患者の担当医として, 脳波, 神経学的検査を担当した)。
2. 造血像の極めて乏しかった双胎間輸血症候群供血児の1剖検例	共著	1997. 1	神奈川こども医療センター医学誌, 26:64-5	非典型的な双胎間輸血症候群供血児の1剖検例の報告。 著者： <u>福澤龍二</u> , 秦順一。 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて執筆。

3. Beckwith-Wiedemann 症候群に合併したMixed hamartoma of the liverの1例	共著	1998. 5	小児がん, 35:58	Beckwith-Wiedemann 症候群における良性肝臓腫瘍の報告。 著者：福澤龍二, 森川征彦, 秦順一。 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて記載。
4. Variability of platyspondylic lethal chondrodysplasia: another case report (査読付) 和文タイトル：扁平脊椎性致死性軟骨異形成の多様性について	共著	1998. 7	Clinical Dysmorphology, 7(3):195-200	骨軟骨形成異常（扁平脊椎性致死性軟骨異形成）の病理組織像を中心にした症例報告。 著者：Nishimura G, Iwasawa T, Fukuzawa R, Hirabayashi Y, Ito T. 担当部分：骨の病理組織像とその解説 (p195)。
5. 脾臓 Epithelial cyst の1例	共著	1999. 5	小児がん, 36:664	稀な脾臓の嚢胞の1例報告。 著者：福澤龍二, 森川征彦, 岡一郎, 林夙, 秦順一。 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて記載。
6. 気管支原発 Mucoepidermoid carcinoma の1女児例	共著	2001. 5	小児がん, 38:104	気管支に発症した稀な粘液性類表皮癌の1例報告。 著者：福澤龍二, 森川征彦, 羽藤晋, 林夙, 秦順一。 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて記載。
7. 若年性乳腺線維腺腫の1女児例	共著	2001. 5	小児がん, 38:108	若年性乳腺線維腺腫の1例報告。 著者：福澤龍二, 森川征彦, 広部誠一, 林夙, 秦順一。 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて記載。
8. リンパ節転移を認めた気管支原発Mucoepidermoid carcinomaの1女児例	共著	2001. 5	小児がん, 38:271	リンパ節転移を認めた気管支原発粘液性類表皮癌の1女児例の報告。 著者：福澤龍二, 森川征彦, 鎌形正一郎, 林夙, 秦順一。 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて記載。
9. 小児肝細胞癌の一例	共著	2001. 5	小児がん, 38:99	若年性肝細胞癌の1例報告 著者：岸本宏志, 小川恵弘, 福澤龍二, 秦順一 担当部分：遺伝子解析の図 (p99)。
10. A necropsy case of Denys-Drash syndrome with a WT1 mutation in exon 7 (査読付) 和文タイトル：WT1遺伝子のエクソン7に変異を伴うDenys-Drash症候群の解剖例	共著	2002. 8	Journal of Medical Genetics, 39(8):e48.	稀なWT1遺伝子の変異を持つDenys-Drash症候群の貴重な解剖例の報告。 著者：Fukuzawa R, Sakamoto J, Heathcott RW, Hata JI. 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて執筆。
11. Autopsy case of Osteodysplastic primordial dwarfism (査読付) 和文タイトル：骨異形成性原発性小人症の解剖例	共著	2002. 11	American Journal of Medical Genetics, 113(1):93-6.	骨異形成性原発性小人症の初めての解剖例の報告。 著者：Fukuzawa R, Sato S, Sullivan MJ, Nishimura G, Hasegawa T, Matsuo N. 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて記載。
12. Acinic cell carcinoma in an African Hedgehog (査読付) 和文タイトル：ハリネズミに発症した腺房細胞癌	共著	2004. 3	Veterinarian Clinical Pathology, 33(1):39-42	ハリネズミの眼腫瘍の病理組織で、初の腺房細胞癌の症例。 著者：Fukuzawa R, Fukuzawa K, Abe H, Nagai T, Kameyama K. 担当部分：筆頭著者として論文をすべて執筆。

13. 腹壁破裂をともなう新生児に見られた paraumbilical band	単著	2011. 7	神奈川こども医療センター医学誌, 40:233	腹壁破裂を伴う新生児に見られたparaumbilical bandの病理組織所見についての報告。 著者：福澤龍二。 担当部分：単独であり論文のすべてを記載。
14. 2009 H1N1インフルエンザウイルスに関連した鋳型気管支炎の1例	単著	2011. 7	神奈川こども医療センター医学誌, 40:233	2009 H1N1インフルエンザウイルスに関連して見られた気管支鋳型のミクロ所見についての報告。 著者：福澤龍二。 担当部分：単独であり論文のすべてを執筆。
15. Histology of a paraumbilical band in a neonate with gastroschisis (査読付) 和文タイトル：腹壁破裂を伴った新生児に見られた傍臍帯带状組織の病理	共著	2011. 11	Pediatric and Developmental Pathology, 14(6):493-5	腹壁破裂の新生児症例の腹部の病理組織から、腹壁破裂の発症機序を考察した論文。 著者：Fukuzawa R, Toma M, Nomura A. 担当部分：筆頭著者および責任著者として論文をすべて執筆 (p493-5)。
16. Multifocal skin lesions and melena with thrombocytopenia in an infant (査読付) 和文タイトル：多巣性皮膚病変と下血に血小板減少を伴った乳児	共著	2012. 3	Journal of Pediatrics, 160(3):524-524	極めて稀な血小板減少性リンパ管拡張症の症例報告。著者：Takahashi H, Nagatoshi Y, Kato M, Koh K, Kishimoto H, Kawai M, Fukuzawa R, Hanada R. 担当部分：病理組織の免疫染色とその説明 (Fig 1B, p524)
17. A gastric duplication cyst of the pancreas associated with a bifid tail causing pancreatitis (査読付) 和文タイトル：二分葉した膵尾部に関連した胃重複嚢胞に発症した膵炎	共著	2013. 10	Journal of Pediatric Surgery Case Reports, 1:368-372	膵臓内に発生した腸管重複症と膵炎を合併した症例の報告。腸管重複症と膵炎を起こすメカニズムと膵臓の形成異常について文献的に考察した。 著者：Komori K, Hirobe S, Toma M, Nishimura G, Fukuzawa R. 担当部分：責任著者として論文をすべて執筆 (p368-372)。
18. Intramural tracheal bronchogenic cyst: a case report (査読付) 和文タイトル：気管壁内の気管支原性嚢胞	共著	2014. 5	Springer plus, 23(3):262	気管内気管支原性嚢胞の症例報告。 著者：Ohba G, Toma M, Komori K, Hirobe S, Fukuzawa R. 担当部分：気管内気管支原性嚢胞の病理組織像 (Fig 5, p4/5)。
19. Neonatal necrotizing fasciitis of the scrotum caused by Streptococcus agalactiae (査読付) 和文タイトル：B群溶連菌が原因となった陰嚢の壊死性筋膜炎	共著	2015. 4	Pediatric International, 57(2):e56-8	B群溶連菌が原因となった壊死性筋膜炎の症例報告。 著者：Kuroda J, Inoue N, Satoh H, Fukuzawa R, Terakawa T, Hasegawa Y. 担当部分：病理組織診断に関する記述 (p56-57)。
20. 肋骨への直接浸潤を示した後縦隔原発神経芽腫の1例	共著	2016. 10	日本小児血液・がん学会雑誌 53(3): 281-285	胸壁原発のAskin腫瘍が疑われ治療が開始されたが病理診断で神経芽腫と診断された症例の報告。 著者：山本裕輝, 小森広嗣, 森禎三郎, 小林完, 馬場優治, 緒方さつき, 下島直樹, 斎藤雄弥, 湯坐有希, 金子 隆, 福澤龍二, 廣部誠一。 担当部分：病理診断をよびその組織写真 (図2) の作成とその説明、要旨、考察を記載。
21. A case of transient neonatal diabetes due to a novel mutation in ABCC8 (査読付) 和文タイトル ABCC8遺伝子の変異による一過性新生児糖尿病の1例	共著	2016. 10	Clinical Pediatric Endocrinology, 25 (4), 139-141	一過性新生児糖尿病の家系に集積して見られたABCC8遺伝子の新しい変異を報告した。 著者：Takagi M, Takeda R, Yagi H, Ariyasu D, Fukuzawa R, Hasegawa T. 担当部分：同遺伝子の変異と本疾患の発症についての考察を共同で行った。

22. Novel heterozygous mutation in the extracellular domain of FGFR1 associated with Hartsfield syndrome 和文タイトル：FGFR1遺伝子の新規変異に関連したハーツフィールド症候群	共著	2016. 10	Human Genome Variation 13:3:16034	Hartsfield症候群において、FGFR1遺伝子がコードする線維芽細胞成長因子レセプターの細胞外ドメインに見られた新しい遺伝子変異を報告した。 著者：Takagi M, Miyoshi T, Nagashima Y, Shibata N, Yagi H, <u>Fukuzawa R</u> , Hasegawa T. 担当部分：同遺伝子の変異部と本疾患の発症との関連について考察した。
23. A novel heterozygous intronic mutation in POU1F1 is associated with combined pituitary hormone deficiency 査読付) 和文タイトル：POU1F1遺伝子の変異に関連した複合型成長ホルモン欠損症の1例	共著	2016. 11	Endocrine Journal 27:64(2):229-234	複合型成長ホルモン欠損症に見られた POU1F1遺伝子のイントロン内の新規変異について報告した。 著者：Takagi M, Kamasaki H, Yagi H, <u>Fukuzawa R</u> , Narumi S, Hasegawa T. 担当部分：同遺伝子の変異様式と部位と本疾患の発症との関連について考察した。
24. A novel de novo germline mutation Glu40Lys in AKT3 causes megalencephaly with growth hormone deficiency 和文タイトル：巨脳症で成長ホルモンが欠損した症例に見られたAKT3遺伝子の新規変異の1例	共著	2017. 2	American Journal Medical Genetics A 173(4):1071-1076	巨脳症で成長ホルモンが欠損した症例に見られたAKT3遺伝子の新規変異が見られた最初の症例報告。 著者：Takagi M, Dobashi K, Nagahara K, Kato M, Nishimura G, <u>Fukuzawa R</u> , Narumi S, Hasegawa T. 担当部分：同遺伝子の変異様式と本疾患の発症との関連について考察した。
25. Syndromic disorder of sex development due to a novel hemizygous mutation in the carboxyl-terminal domain of ATRX. 査読付) 和文タイトル ATRX遺伝子の新しい遺伝子変異による症候性性分化異常	共著	2017. 4	Hum Genome Var. 13:4:17012	ATRX遺伝子の変異による性分化異常にちうて報告した論文。著者：Takagi M, Yagi H, <u>Fukuzawa R</u> , Narumi S, Hasegawa T.担当部分：同遺伝子の変異様式と本疾患の発症との関連について考察した。
26. A Novel Case of Somatic KCNJ5 Mutation in Pediatric-Onset Aldosterone-Producing Adenoma 査読付) 小児アルドステロン産生副腎皮質腺腫におけるKCNJ5遺伝子の新規変異	共著	2017. 7	J. Endocr Soc. 11:1(8):1056-1061.	極めて稀な小児のアルドステロン産生性副腎皮質腺腫におけるKCNJ5遺伝子の変異の報告 著者：Uchida N, Amano N, Yamaoka Y, Umetsu A, Sekine Y, Suzuki M, Watanabe J, Nishimoto K, Mukai K, <u>Fukuzawa R</u> , Hasegawa T, Ishii T. 担当部分：病理診断および免疫染色を行い、病理の写真の図を作成した。
Letter to the Editor 1. Reply to Dr. Sredni and colleagues (査読付) 和文タイトル：Dr Sredniへの返事	共著	2004. 11	Pediatric and Developmental Pathology, 7: 670	上記の原著論文34に関する質疑応答。 著者： <u>Fukuzawa R</u> , Heathcott RW, Sano M, Morison IM, Yun K, Reeve AE. 担当部分：筆頭著者として論文をすべて記載。
2. Correct usage of "loss of imprinting" (査読付) 和文タイトル：「インプリンティングの消失」という用語の正しい使い方	共著	2005. 10	American Journal of Medical Genetics, 138A:412	American Journal of Medical Genetics 編集部に対して、インプリンティング(ゲノム刷り込み)の解除という表現についての意見した論文。 著者： <u>Fukuzawa R</u> , Reeve AE, Morison IM. 担当部分：筆頭著者として論文をすべて記載。
招待講演 1. Beckwith-Wiedemann症候群に併発する肝芽腫発症におけるH19遺伝子のメチル化パターンの意義	一	1999. 10	大阪大学蛋白研セミナー「DNAメチル化とゲノムインプリンティング」シンポジウム	Beckwith-Wiedemann症候群に併発する肝芽腫発症におけるH19遺伝子の詳細なメチル化パターンを講演。 演者：梅澤明弘, <u>福澤龍二</u> , 秦順一. Beckwith-Wiedemann症候群に関連した肝芽腫と散発性肝芽腫のH19遺伝子およびIGF2遺伝子の刷り込みの異常とメチル化の異常の解析をすべて行った。

2. 転写因子と疾患 Wilms腫瘍の発症機序	—	2000. 4	第89回日本病理学会総会ワークショップ	WT1, IGF2, H19を初めとする遺伝子の異常とWilms腫瘍の発症機序について講演。 演者：福澤龍二, 高田礼子, 坂元純, 菊池春人, 梅澤明弘, 柴田理恵, 秦順一。 筆頭演者として講演内容すべてを担当。
3. The initiation and progression of hereditary gastric cancer (和文タイトル：遺伝性胃癌の初期発症と進行について)	—	2004. 4	The 17th International Symposium of Foundation for Promotion of Cancer Research	スキルス胃癌の発症のモデルについて講演。 演者：Guilford P, Humar B, More H, Fukuzawa R, Blair V, Martin I, Yang, H.K., Charlton A. 胃癌およびその前癌性病変の病理組織学的解析および免疫染色 (Ki67, c-Sr, Eカドヘリンなど)を行った。
4. Biology of Wilms tumours with IGF2 Loss of Imprinting (和文タイトル：IGF2遺伝子の刷り込み異常を伴ったWilms腫瘍の生物学的特徴)	—	2007. 8	The Pacific Associations of Paediatric Surgeons and Australia and New Zealand and Paediatric Pathologists Group Meeting	IGF2のインプリンティングの異常と腫瘍発症機構について講演。
5. ImprintingとBeckwith-Wiedemann症候群/Wilms腫瘍	—	2008. 10	第110回 臨床小児科研究会	インプリンティングのメカニズムとその異常 (Beckwith-Wiedemann症候群と腫瘍発症) について講演。
6. エクスパートに聞く診断の極意 病理医	—	2012. 9	第45回 日本小児呼吸器疾患学会	嚢胞性肺疾患の診断について病理専門医の立場から講演。
7. 胎児性腫瘍の起源と分子的特徴	—	2013. 2	第2回 東京バイオマーカー・イノベーション技術研究組合 研究フォーラム	臨床的, 病理的, 分子的な研究から見た胎児性腫瘍のがん幹細胞的な性質とそのマーカーについて講演。
8. 胎児性腫瘍にみる臓器発生のプログラム	—	2016. 3	山口大学医学部セミナー	胎児性腫瘍の遺伝子発現プロファイルから見た臓器発生のプログラムについて説明し, 胎児性腫瘍の定義と研究の意義を最近のiPS細胞の癌化と関連して解説。
9. 胎児性腫瘍の発症について Wims腫瘍をモデルにして	—	2016. 9	第22回 九州山口小児血液・腫瘍研究会	胎児性腫瘍の発症機構をWilms腫瘍をモデルとして, 臨床的, 病理学学的, 分子遺伝学的な観点から解説した。

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 細田 豊
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系生物学分子生物学／生物系生物学生物物理学／生物系医師薬学内科臨床医学精神神経科学		チャンネル／上皮膜／イオン輸送／神経伝達／遺伝子発現		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1 Substance P-evoked Cl ⁻ secretion in guinea pig distal colonic epithelia: interaction with PGE ₂ . モルモット大腸におけるサブスタンスPの塩素イオン分泌: プロスタグランジンE ₂ の関与 (査読付)	共著	平成14年8月	Am J Physiol Gastrointest Liver Physiol. 2002 Aug;283(2):G347-56.	筆頭著者として主に生理学的研究を行った。モルモット下部消化管においてサブスタンスPがカルシウムシグナルを介してクロライドイオン分泌を行うことを示した。 Hosoda Y, Karaki S, Shimoda Y, Kuwahara A.
2 Mode of action of ANG II on guinea-pig distal colon モルモット大腸におけるアンジオテンシンIIの作用 ion transport in guinea pig distal colon. (査読付)	共著	平成14年8月	m J Physiol Gastrointest Liver Physiol. 2002 Aug;283(2):G347-56.	筆頭著者として主に生理学的研究を行った。モルモット下部消化管におけるアンジオテンシンIIのクロライドイオン分泌の機序を明らかにした。 Hosoda Y, Winarto A, Iwanaga T, Kuwahara A.
3 Negative regulation of Ca ²⁺ influx during P2Y ₂ purinergic receptor activation is mediated by Gbetagamma-subunits. P2Y ₂ 受容体によるカルシウムイオン流入の負の調整はGβタンパク質を介している (査読付)	共著	平成22年1月	Cell Calcium. 2010 Jan;47(1):55-64.	筆頭著者に対してカルシウムイメージや細胞培養などの指導を行った。培養細胞においてアデノシンのP2Y ₂ 受容体のカルシウムシグナル伝達機構がGタンパク質βを介していることを示した。 Hu H1, O'Mullane LM, Cummins MM, Campbell CR, Hosoda Y, Poronnik P, Dinudom A, Cook DI.
(その他) (学会発表) 1 パニック障害の既往歴の無い広場恐怖に対する認知行動療法的アプローチ`12歳男児の症例`	—	平成23年11月	第52回日本児童青年精神医学会総会、徳島市	広場恐怖を有する12歳男児に対して認知行動療法と薬物療法による治療を行った経過をまとめ考察した。 細田豊、佐々木剛
2 THE GROUP PSYCHOTHERAPY FOR BIPOLAR DISORDER IN ASAHI GENERAL HOSPITAL, JAPAN 旭中央病院における双極性障害のグループ心理療法	—	平成26年10月	PRCP 2014 Scientific Meeting (Oct 5-7, 2014) Vancouver Canada	旭中央病院における双極性障害の疾患教育について報告 T. Sakamoto, A. Irokawa, K. Kanai, M. Siroma, Y. Hosoda, T. Aoki
3 アンチスティグマと地域移行;旭中央病院神経精神科・児童精神科での取り組みを通して	—	平成27年12月	第19回日本精神保健・予防学会学術集会、仙台市	旭中央病院における精神疾患の偏見をなくすための取り組みについて学会報告を行った。 木 勉、上木 康衣、木村允、井手本 啓太、高津 圭介、細田 豊、磯野 友厚、大塚 祐司、矢野 望

4. 青年期における日本語版摂食障害簡易スクリーニング検査SCOFFの有用性についての検討	—	平成30年6月	第115回日本精神神経学会 学術集会、新潟市	日本語版SCOFFの作成について発表を行った。細田豊、大溪俊幸、花澤寿、田中麻未、橋本佐、伊豫正臣、中里道子
---	---	---------	---------------------------	--

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	松本英司
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド			
分科：社会医学 脳ドック		細目：疫学・予防医学 栃木県における脳ドック受診者数、未破裂脳動脈瘤の発見率			
分科：社会医学 未破裂脳動脈瘤		細目：疫学・予防医学 未破裂脳動脈瘤の自然経過、未破裂脳動脈瘤の破裂率、			
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要	
(著書)					
1 2 3 :					
(学術論文)					
1.悪性gliomaに対するIFNβを用いた維持療法	共著	1998年4月	Neuro-oncology 8(1):43-44	松本英司、横田英典、宮田貴広、永井睦、橋本雅章、篠田宗次、増沢紀男 悪性グリオーマに対する維持療法としてIFN-β使用したが、これまで行ってきたPVA療法と比較して生存期間の有意な延長は認めず、維持療法としてはPVA療法と同様に限界があるものと考えられた。しかし全身に対する副作用を比較してみると、PVA療法を繰り返し施行するよりも、IFN-βによる維持療法の方が合併症は少なく、より患者に対する負担は軽いものと考えられた。今回IFN-βを投与した群は患者の絶対数が少なく検討を加えなかったが、今後症例を重ね、grade3とgrade4の悪性グリオーマを別々に検討しそれぞれの維持療法としてのPVA群とIFN-β群との間での生存期間の変化を観察したい。本人の担当部分を抽出できない理由：論文作成の全体を監修しているため。	
2.脳ドック受診状況と未破裂脳動脈瘤の有病率(査読付)	共著	2002年8月	脳神経外科30(8):829-836	松本英司、篠田宗次、増沢紀男、中村好一 栃木県26施設における1999年の脳ドックの総受診者は5222名で、全県民の0.26%であった。そのうち24施設では受診者4961名(男2928,女2033)、年齢は20~85歳で平均53.4歳(男52.6,女54.6)であった。未破裂脳動脈瘤(UCA)は143例(2.9%)に認め、男69例(2.4%)女74例(3.6%)と女で有病率が高かった。脳ドック施設別にUCA有病率を比較すると、磁場強度1.5TeslaのMR装置使用群では1.0Tesla以下使用群よりも有意にUCA有病率が高かった。更に、厚生省患者調査、人口動態統計をもとに全国のクモ膜下出血の有病率と栃木県内の脳ドックにおけるUCA有病率を比較すると、両者共に年齢と共に高くなることがわかった。本人の担当部分を抽出できない理由：論文作成の全体を監修しているため。	
3. Long-term Outcome of unruptured Cerebral Aneurysms (査読付) 未破裂脳動脈瘤の長期的予後	共著	2003年11月	Journal of Epidemiology 13(6):289-265	松本英司、増沢紀男、中村好一 1989~1998年に当脳外科に入院した未破裂脳動脈瘤患者156例を発見時の経過により分類し、死亡期待値を生命統計表の年齢別-性別特異的死亡率から計算し、標準死亡率と95%信頼限界を死亡期待値と観察値から計算した。標準死亡率は発見過程により分類した群間で差がみられた。未破裂脳動脈瘤の破裂の発生率は100人当り1.3で、年間の破裂発生率は既報より高かった。未破裂例の手術実施群の生存率は非実施例より高かった。本人の担当部分を抽出できない理由：論文作成の全体を監修しているため。	

4. 中枢神経原発悪性リンパ腫に対するMTX髄注療法とその注意点	共著	2005年12月	Neuro-oncology 15(2):26-30	<p>篠田宗次、布施仁智、松本英司、草鹿元、大森義男、鈴木尚、神田大、渡辺英寿 脳原発性悪性リンパ腫に対してMTX髄注療法を経験した。MTX髄注併用の全脳放射線療法の治療効果は、放射線療法単独よりも優位に効果的であった。しかしながら、高齢者の脳原発悪性リンパ腫では、MTX投与と全脳放射線照射を併用すると、白質脳症を合併する可能性があるため、全脳放射線照射の時期は、病変の再発時まで遅らせるのもひとつの方法と考えられた。</p>
5. 佐野厚生総合病院における脳卒中患者背景の実態-居住形態と脳卒中の関係 (査読付)	共著	2011年11月	脳神経外科 39 (11) : 1055-1059	<p>安納崇之、松本英司、渡辺英寿、中村好一 2007年12月～2010年11月に佐野厚生総合病院に入院した脳卒中患者877例を対象に、居住形態と患者背景などとの関係について検討した。独居群は131例(男69例、平均63.7歳、女62例、平均79.6歳)、非独居群は746例(男419例、平均70.7歳、女327例、平均74.7歳)であった。両群間で性別比に有意差はなかったが、年齢は独居群が男性で若く、女性は高齢であった。独居の割合は、2005年の国勢調査結果でみた佐野市内の独居率よりも高かった。病名は脳出血212例、脳梗塞591例、クモ膜下出血74例で、病名別の独居率に有意差はなく、受診手段、入院時Japan Coma Scaleも独居群と非独居群で有意差はなかった。脳卒中の危険因子となる基礎疾患(高血圧症、脂質代謝異常症、糖尿病、心疾患)および嗜好歴(喫煙、飲酒)を有する割合は、いずれの項目も両群間で有意差はなかったが、合併数は独居群平均2.59個、非独居群2.33個と独居群が多い傾向であった。</p>
6. 海綿静脈洞部アスペルギルス症の1例 (査読付)	共著	2013年10月	脳神経外科 41 (10) : 901-906	<p>長谷知美、栗田英治、松本英司、黒田一、橋本雅章、篠田宗次 62歳男。三叉神経痛と右眼痛、眼瞼下垂、複視を主訴に受診した。MRIで右海綿静脈洞部に拡散強調像で高信号、ガドリニウム造影T1強調像で不均一に造影される病変を認め、T2強調像で蝶形骨洞炎を認めた。CTAでは海綿静脈洞は描出されず、同部に石灰化を認めた。鑑別疾患として、髄膜腫、神経鞘腫、転移性脳腫瘍などの腫瘍性病変と、Tolosa-Hunt症候群、サルコイドーシスなどの炎症性病変を考え、病理診断目的で手術を行った。Zygomatic osteotomyを併用した右前頭側頭開頭を行い、視束管の開放と前床突起削除を追加し、extradural temporopolar approachで海綿静脈洞外側壁まで到達し、Parkinson's triangleから病変を摘出した。病変は弾性硬で、病理所見からアスペルギルス症と診断した。術後はvoriconazole 200mg×2回/日の点滴を2週間行い、その後同用量の内服薬に切り替えて継続した。三叉神経痛は術後まもなく改善し、他の症状も術後約1ヵ月で改善した。</p>
(その他) 1 2 3 :				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 坂本 昌也
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
医師薬学		エネルギー・糖質代謝異常		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 薬学生のための新臨床医学	共著	2009年4月	広川書店	概要: これまでの薬学教育に不足していた, 疾病に関する知識とその背景を、学生向けにわかりやすく解説。本書の内容は「症候とその治療」と「疾患と薬物」の2部で構成し, コアカリキュラムに準拠した。 分担: 症候および疾患とその治療, カルシウム代謝異常の項の執筆を行った。 掲載ページ: P498~501 編集: 市田公美、細山田真 著者: 坂本昌也、東條克能、他多数
2 薬学生のための新臨床医学(改訂2版)	共著	2015年9月	広川書店	概要: これまでの薬学教育に不足していた, 疾病に関する知識とその背景を、学生向けにわかりやすく解説。本書の内容は「症候とその治療」と「疾患と薬物」の2部で構成し, コアカリキュラムに準拠した。 分担: 症候および疾患とその治療, カルシウム代謝異常の項を前回に加えて最新のエビデンスを追加執筆を行った。 掲載ページ: P501~503 編集: 市田公美、細山田真 著者: 坂本昌也、東條克能、他多数
3 ACE阻害薬を使う深い理由	共著	2015年9月	メディカ出版	概要: 高血圧治療におけるACE阻害薬の有用性を認める熟達した臨床家はACE阻害薬に何を期待し注目しているのかを9の症例からその治療戦略を検討・概説。 分担: 腎機能が保たれた糖尿病合併高血圧に関してエビデンス並びにガイドラインの概説を行った。 掲載ページ: P49~57 編集: 吉村道博 著者: 坂本昌也、名越智古、他多数
4 リッピンコットシリーズ イラストレイテッド 統合臨床基礎医学	共著	2018年1月	丸善出版	概要: 基礎医学、臨床基礎医学から臨床医学への橋渡しとなる内容。臨床的課題の自学自習に役立つ臨床トピック、臨床応用、章末問題が充実させ、豊富なイラストと必須項目の明快な記載している。 分担: 内分泌系全班、特にホルモンと全身神経系に対する影響について翻訳概説した。 編集: 栗原 敏 掲載ページ: P383~384 著者: 坂本昌也、大橋 十也、他多数
(学術論文) 1 Leukemia inhibitory factor enhances survival of cardiomyocytes and induces regeneration of myocardium after myocardial infarction (査読付)Leukemia Inhibitory Factor (LIF)は心筋梗塞後の心筋細胞に対して心筋細胞を再生させ、心臓保護的に働く	共著	2003年8月	Circulation, 108(6):748-53 [IF 23.054]	概要: IL-6 familyであるLeukemia Inhibitory Factor (LIF)は心筋梗塞後の心筋細胞に対して炎症を抑えるまたアポトーシスを抑制する形で心臓保護的に働くことが解った。 分担: 主に動物実験(心筋梗塞モデルの作成)を担当した。 著者: Zou Y, Sakamoto M, et al.

2 Heat shock transcription factor 1 protects cardiomyocytes from ischemia/reperfusion injury (査読付) 熱ショック転写因子1は心筋虚血再灌流モデルにおいて心臓保護的に働く	共著	2003年12月	Circulation;108(24):3024-30. [IF 23.054]	概要：熱ショック転写因子1は心筋虚血再灌流モデルにおいて熱ショック蛋白70の発現を調節して心筋細胞に対して炎症を抑制した結果心臓保護的に働くことが解った。 分担：主に熱ショック蛋白の発現の有無においてwestern blottingを行い、その量の発現の検証を行った。 著者：Zou Y, <u>Sakamoto M</u> , et al.
3 Upregulation of heat shock transcription factor 1 plays a critical role in adaptive cardiac hypertrophy (査読付) 熱ショック転写因子1の上方制御は、生理的心肥大において重要な役割を果たす	共著	2006年12月	Circulation research, 99(12):1411-1418 [IF 15.211]	概要：同じ心肥大でも生理的心肥大と病的な心肥大は予後が異なるがその詳細は不明であった。今回、HSF-1が生理的心肥大のみにおいて心臓保護的な働き重要な役割を果たしている事が解った。 分担：筆頭著者として研究全体のデザインし、統括に関与し、執筆した。 著者： <u>Sakamoto M</u> , Minamino T, Komuro I et al.
4 Cardiac 12/15 lipoxygenase-induced inflammation is involved in heart failure (査読付) 心筋12-lipoxygenase (LOX)により引き起こされる炎症は心不全に含まれる	共著	2009年7月	J Exp Med 2009;206(7):1565-74. [IF 10.892]	概要：アラキドン酸カスケード経路の一つであり、脂質メディエーターの12-lipoxygenase (LOX)は炎症を介して心不全進行を増悪させる方向に働く事が解った。 分担：心不全モデルにおける12-LOXの発現の確認を最初の発見し、その量の検証を行った。著者：Kayama Y, <u>Sakamoto M</u> , et al.
5 Effects of candesartan in hypertensive patients with type 2 diabetes mellitus on inflammatory parameters and their relationship to pulse pressure (査読付) Candesartanは高血圧合併糖尿病患者において炎症系のパラメータを改善させ、それは脈圧と相関を認める	共著	2012年10月	Cardiovascular diabetology, 11:118. [IF 5.235]	概要：アンジオテンシン受容体拮抗薬の一つであるcandesartanは高血圧合併糖尿病患者において炎症系のパラメータを改善させる事を検証し、それは脈圧と相関を認める事を見出した。分担：筆頭著者として、研究をデザインし、結果の検証、執筆を行った。 著者： <u>Sakamoto M</u> , Suzuki H et al.
6 Arachidonate 12/15-lipoxygenase-induced inflammation and oxidative stress are involved in the development of diabetic cardiomyopathy (査読付) 12-lipoxygenase (LOX)は糖尿病性心筋症モデルにおいて、炎症と参加引き起こす事に関する	共著	2015年2月	Diabetes, 64(2):618-630. [IF 7.273]	概要：アラキドン酸カスケード経路の一つであり、脂質メディエーターの12/15-lipoxygenase (LOX)は酸化ストレスを介して糖尿病性心筋症に増悪に対して重要な役割を果たしていることが解った。 B分担：糖尿病心筋症モデル動物において12/15LOXの発現が上昇していることをはじめて発見し、その発現量を検証した。 著者：Suzuki H, <u>Sakamoto M</u> et al.
7 Glycemic variability in continuous glucose monitoring is inversely associated with baroreflex sensitivity in type 2 diabetes: a preliminary report (査読付) 2型糖尿病患者において血糖変動と圧受容器機能は負の相関を示す：予備調査報告	共著	2018年3月	Cardiovascular diabetology, 17(1):36. [IF 5.235]	概要：2型糖尿病患者において血糖変動は動脈硬化を進展させる事が知られていたが、我々は初めてタスクフォースモニターを用いて患者において圧受容器と相関している事を初めて報告した。 分担：責任著者として研究をデザイン・統括し、論文校正を行った。 著者：Matsutani D, <u>Sakamoto M</u> et al.
8 Effect of canagliflozin on left ventricular diastolic function in patients with type 2 diabetes. 2型糖尿病患者におけるカナグリフロジンの左室拡張能に対する影響	共著	2018年5月	Cardiovascular diabetology, 17(1):73. [IF 5.235]	概要：SGLT-2阻害薬であるcanagliflozinは2型糖尿病患者に3ヶ月投与する事によって、心臓収縮能は変化しないものの、拡張能障害を改善させることが解った。 分担：責任著者として研究をデザイン・統括し、論文校正を行った。 著者：Matsutani D, <u>Sakamoto M</u> et al.
9 Type 2 Diabetes and Glycemic Variability: Various Parameters in Clinical Practice (査読付) 実臨床における2型糖尿病患者の様々な血糖変動指標	単著	2018年10月	J Clin Med Res. 10(10):737-742.	概要：2型糖尿病患者において臨床時間軸を違えた様々な血糖変動の指標があり、それらに対するエビデンスも様々である事を概説し、今後の臨床応用に関する方向について概説した。 分担：単著・筆頭著者として論文全体をまとめた。 著者： <u>Sakamoto M</u> .

<p>10 Seasonal Variations in the Achievement of Guideline Targets for HbA1c, Blood Pressure, and Cholesterol Among Patients With Type 2 Diabetes: A Nationwide Population-Based Study (ABC Study: JDDM49) (査読付) 2型糖尿病患者における血糖・血圧・脂質値の季節別ガイドライン遵守率：国内広範囲における研究 (ABC研究：JDDM49)</p>	<p>共著</p>	<p>2019年5月</p>	<p>DiabetesCare:42(5):816-823. [IF 15.27]</p>	<p>概要：2型糖尿病患者において各種学会がガイドラインを作成しているが、そのガイドライン達成率の詳細は不明であった。我々は血糖・血圧・脂質全て冬に低く、夏に高い事がわかった。また日本人においては血圧の達成率は著しく低いことがわかった。 分担：筆頭著者として研究全体のデザインと解析を行った。 著者：Sakamoto M, Nishikawa M et al.</p>
<p>業績集計 原著：欧文31 原著：和文1 症例報告：欧文5 症例報告：和文1 学会プロシーディングス：欧文7 総説：欧文3 総説：和文14 著書：和文6 報告書：和文4 その他：和文5</p>				
<p>H-Index 14</p>		<p>2020年3月1日現在</p>		

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 宮宗 秀伸
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
総合系 環境学分野 環境解析学		(A) 雄性生殖器系 (B) 成人病胎児期起源説 (C) 環境ホルモン (D) Early life stress (E) 環境影響		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 Sperm Cell Research in the 21st Century: Historical Discoveries to New Horizons (21世紀の精子研究:新しい展望に向けての歴史的発見)	共著	2012年8月	Adthree Publishing Co., Ltd.	本著では、男性の配偶子である精子に対する環境化学物質、特にデカブロモジフェニルエーテルによる毒性影響を概説した。 Chapter III: Environmental Impacts 「New point for evaluation of environmental pollutants including endocrine disrupting chemicals and polybrominated diphenyl ethers (PBDEs) on male reproductive system. (生後早期のデカブロモジフェニルエーテルへの低濃度曝露はマウスセルトリ細胞におけるアンドロゲン受容体と甲状腺ホルモン受容体の発現量およびスプライシングバリエントの発現に影響をおよぼす)」 編集: Masaaki Morisawa、 著者: Mori C, <u>Miyaso H</u> , Nakamura N, Matsuno Y and Todaka E
2 産婦人科臨床1 生殖生理	共著	2019年4月	中山書店	本著では、男性の配偶子である精子について、生殖幹細胞からの分化、成熟、および受精能獲得について、基礎から最新の知見までを取りまとめた。 5章 配偶子の機能と分子機構 「精子形成と分化、受精能獲得」 専門編集: 大須賀穰、総編集: 藤井知行、著者: 伊藤正裕、 <u>宮宗秀伸</u>
(学術論文) 1 Identification of a cis-acting element for the regulation of SMN exon 7 splicing. (査読付) (SMN遺伝子エキソン7の選択的スプライシングを制御するシクアクション領域の同定)	共著	2002年6月	J Biol Chem. 28:277(26):23271-7.	脊髄性筋萎縮症はsurvival motor neuron (SMN)が原因遺伝子であり、機能型のスプライシングバリエントSMN1の減少と機能欠損型のSMN2の増加によって引き起こされる。本研究では、機能欠損型のスプライシングバリエントSMN2の発現を亢進する、SMN遺伝子上のエンハンサー領域の存在を明らかにした。 分担: Miyajima H, <u>Miyaso H</u> , Okumura M, Kurisu J, Imaizumi K. 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。
2 A possible role of the key enzymes of the glyoxylate and gluconeogenesis pathways for fruit-body formation of the wood-rotting basidiomycete Flammulina velutipes (査読付) (エノキタケにおけるグリオキシル経路および糖新生経路における鍵酵素の役割について)	共著	2002年8月	Mycoscience. Volume 43, Issue 4, Pages 327-332	本研究ではエノキタケをモデルとして、これまで不明であった菌類のグリオキシル経路および糖新生経路における代謝酵素を同定し、その機能の一端を明らかにした。 分担: Yoon J, Munir E, <u>Miyaso H</u> , Hattori T, Terashita T, Shimada M 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。

3 An intronic splicing enhancer element in survival motor neuron (SMN) pre-mRNA. (査読付) (SMN遺伝子プレmRNAにおけるイントロンスプライシングエンハンサー領域)	共著	2003年5月	J Biol Chem. 2;278(18):15825-31	脊髄性筋萎縮症はsurvival motor neuron (SMN)が原因遺伝子であり、機能型のスプライシングバリエントSMN1の減少と機能欠損型のSMN2の増加によって引き起こされる。本研究では、機能型のスプライシングバリエントSMN1を亢進する、SMN遺伝子上のイントロンに位置しているエンハンサー領域の存在を明らかにした。分担：Miyaso H, Okumura M, Kondo S, Higashide S, Miyajima H, Imaizumi K. 担当(役割)：筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った。
4 千葉大学における肉眼解剖実習のホルムアルデヒド濃度に関する一考察 (査読付)	共著	2005年12月	臨床環境医学 14(2), 112-118	医学部の解剖実習に供される献体はホルマリン固定を施されており、学生は実習の際に献体から放散されるホルマリンに曝露される。本研究では千葉大学医学部における解剖実習中のホルマリン曝露の現状と改善について報告した。分担：大道公秀, 松野義晴, 小宮山政敏, 深田秀樹, 深田秀樹, 戸高恵美子, 戸高恵美子, 戸高恵美子, 太田昌彦, 宮宗秀伸, 門田朋子, 森千里 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。
5 千葉大学における人体骨標本の保管環境整備と医学研究の推進に向けて (査読付)	共著	2006年4月	千葉医学雑誌 82:117-120	千葉大学には古くから多数のヒト骨標本が保管されていた。最近、予算獲得により、これらの骨標本の保管状況が整備され、学生および関係者に対する教育研究環境がより充実してきたので、これを報告した。分担：松野義晴, 坂上和弘, 太田昌彦, 宮宗秀伸, 門田朋子, 小宮山政敏, 千葉胤道, 森千里 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。
6 Relationship between exposure to formaldehyde and immunoglobulin E (IgE) production during the gross anatomy laboratory (査読付) (解剖実習におけるホルムアルデヒド曝露とIgE産生の関係について)	共著	2006年10月	Journal of Health Science 52 642-647	医学部の解剖実習に供される献体はホルマリン固定を施されており、学生は実習の際に献体から放散されるホルマリンに曝露される。本研究はホルマリン曝露のバイオマーカー創出を目指し、解剖実習に参加した学生から検体(唾液)を採取し、ホルマリン曝露に対する唾液中のIgEの変動を調査した。分担：Kimihide Ohmichi, Masatoshi Komiyama, Masatoshi Komiyama, Yoshiharu Matsuno, Yoshiharu Matsuno, Yuji Sawabe, Hidenobu Miyaso, Hideki Fukata, Masayoshi Ohmichi, Tomoko Kadota, Fumio Nomura, Fumio Nomura, Chisato Mori 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。
7 Pilot study of a dissection table for gross anatomy laboratory equipped with a photocatalytic device that decomposes formaldehyde (査読付) (光触媒によるホルマリン分解装置を有した実習台の解剖実習における使用を目指したパイロット研究)	共著	2007年11月	J Occup Health. 49(6):499-503	医学部の解剖実習に供される献体はホルマリン固定を施される。本研究は献体から放散するホルマリンを光触媒により分解し、学生のホルマリン曝露を減少させるための解剖実習台の開発に取り組んだ。分担：Ohmichi K, Matsuno Y, Miyaso H, Yamamoto H, Toriuchi M, Shimane M, Mori C. 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。
8 Hsp90 regulates the Fanconi anemia DNA damage response pathway. (査読付) (Hsp90はファンconi貧血におけるDNA障害反応経路を制御する)	共著	2007年6月	Blood 109(11):5016-26	本研究は常染色体劣性遺伝病であるファンconi貧血について、DNAに障害を与えるパスウェイに、Hsp90が関わることを明らかにした。分担：Oda T, Hayano T, Miyaso H, Takahashi N, Yamashita T. 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。

9 肉眼解剖学における医学部の学習意欲の向上を目指しての試み;見学実習説明による教育効果 (査読付)	共著	2008年6月	解剖学雑誌 83(2): 45-50	医学部学生に対する解剖実習の教育効果向上のため、医学部学生にコメディカルの学生に対して解剖を指導する機会を与え、これによる医学部学生自身の教育効果を検証した。 分担:川城由紀子, 門田朋子, 松野義晴, 宮宗秀伸 , 小宮山政敏, 森千里 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。
10 肉眼解剖実習に提供される解剖体のCT画像撮影の試みと期待される教育効果 (査読付)	共著	2009年10月	千葉医学雑誌 85(5), 237-240	医学部学生に対する解剖実習の教育効果向上のため、医学部の解剖実習に供される献体についてCT撮影を施した。本研究では特にホルマリン固定を施された献体におけるCT撮影を行い、画像が教育に適用できる鮮明さを保っているか否かの評価が行われた。 分担:松野義晴, 山本正二, 宮宗秀伸 , 太田昌彦, 鈴木崇根, 小宮山政敏, 森千里 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。
11 Trial application of computed tomography (CT) to donated cadavers during human gross anatomy laboratories and anticipated educational effects (査読付) (解剖実習における献体に対するCT画像撮影の試験的適用と予想される教育効果について)	共著	2009年12月	Chiba Medical Journal 85 237-240	本研究は、医学部の解剖実習に供される献体についてCT撮影を施すことにより、その内部構造が明らかになることを示し、それによる医学部学生に対する教育効果の向上について検討した。 分担:Yoshiharu Matsuno, Seiji Yamamoto, Hideobu Miyaso , Masahiko Ohta, Takane Suzuki, Masatoshi Komiyama, Chisato Mori C 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。
12 The changes of cortactin p80/85 isoform profiles and tyrosine phosphorylation status during spermatogenesis in the mouse testis. (査読付) (マウス精巣の精子形成過程におけるコートアクチンのp80アイソフォーム、p85アイソフォーム、およびチロシンリン酸化状態の変動)	共著	2010年9・10月	J Androl. 31(5):507-18	本研究は、精巣において発現するアクチン接着因子コートアクチンタンパクの発現様式と、精巣精上皮サイクルの関連性を明らかにした。 分担: Miyaso H , Komiyama M, Matsuno Y, Naito M, Hirai S, Itoh M, Mori C 担当(役割): 筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った。
13 Postnatal exposure to low-dose decabromodiphenyl ether adversely affects mouse testes by increasing thryosine phosphorylation level of cortactin. (査読付) (生後早期のデカブロモジフェニルエーテルへの低濃度曝露はマウス精巣においてコートアクチンチロシンリン酸化による影響をおよぼす)	共著	2012年10月	J. Toxicol. Sci. 37: 987-999	本研究は、新生児期マウスに対して臭素系難燃剤の一つであるデカブロモジフェニルエーテルを投与した場合、思春期以降に精巣において発現するコートアクチンタンパクのチロシンリン酸化が亢進することを明らかにした。 分担: Miyaso H , Nakamura N, Matsuno Y, Kawashiro Y, Komiyama M and Mori C 担当(役割): 筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った。
14 Interpretation of multi-detector computed tomography images before dissection may allow detection of vascular anomalies: A postmortem study of anomalous origin of the right subclavian artery and the right vertebral artery. (査読付) (解剖前献体のCT画像撮影は血管の異常の検出を可能にする: 右鎖骨下動脈と右椎骨動脈の異常起始を同定した死後研究)	共著	2012年12月	Anat Sci Int. 87(4):238-44	本研究は、医学部の解剖実習に供される献体についてCT撮影を施すことにより、その内部構造が明らかになることを示し、それによる医学部学生に対する教育効果の向上について考察した。 分担:Sakamoto N, Miyaso H , Komiyama M, Sugata Y, Suzuki T, Kohno T, Iwase H, Hayakawa M, Inokuchi G, Mori C and Matsuno Y 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。

15 Cadmium exposure increases susceptibility to testicular autoimmunity in mice. (査読付) (カドミウムへの曝露はマウスにおいて、精巣自己免疫に対する感受性を増進する)	共著	2013年7月	J Appl Toxicol. 33(7):652-660	本研究は、カドミウムへの曝露がマウス精巣の自己免疫精巣炎に対する感受性を高めることを明らかにした。 分担: Kitaoka M, Hirai S, Terayama H, Naito M, Qu N, Hatayama N, Miyaso H , Matsuno Y, Komiyama M, Itoh M, Mori C. 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。
16 Effects on the local immunity in the testis by exposure to di-(2-ethylhexyl) phthalate (DEHP) in mice (査読付) (フタル酸ジエチルヘキシルへの曝露による精巣の局所免疫への影響)	共著	2013年10月	J Reprod Dev. 59(5):485-90	本研究は、フタル酸ジエチルヘキシルへの曝露が精巣の局所免疫に影響することを明らかにした。 分担: Kitaoka M, Hirai S, Terayama H, Naito M, Qu N, Hatayama N, Miyaso H , Matsuno Y, Komiyama M, Itoh M, Mori C. 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。
17 Changes in expression levels of oxidative stress-related genes in mouse epididymides by neonatal exposure to low-dose decabromodiphenyl ether (査読付) (生後早期のデカブロモジフェニルエーテルへの低濃度曝露によるマウス精巣上体における酸化ストレス関連遺伝子の発現レベルの変動)	共著	2013年12月	Reprod Med Biol 13:127-134	本研究は、新生児期マウスに対して臭素系難燃剤の一つであるデカブロモジフェニルエーテルを投与した場合、思春期以降に精巣上体において酸化ストレス関連遺伝子の発現異常が生じることを明らかにした。 分担: Nakamoto M, Miyaso H , Komiyama M, Matsuno Y, Mori C 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。
18 Neonatal exposure to diethylstilbestrol causes granulomatous orchitis via epididymal inflammation (査読付) (新生児期ジエチルスチルベストロール曝露は精巣上体炎による肉芽腫性精巣炎を引き起こす)	共著	2014年9月	Anat Sci Int. 89(4):215-23	本研究は、新生児期マウスに対して合成女性ホルモンの一つであるジエチルスチルベストロールを投与した場合、思春期以降に精巣上体および精巣上体炎が生じることを明らかにした。 分担: Miyaso H , Naito M, Hirai S, Matsuno Y, Komiyama M, Itoh M, Mori C 担当(役割): 筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った。
19 Early postnatal exposure to a low dose of decabromodiphenyl ether affects expression of androgen and thyroid hormone receptor-alpha and its splicing variants in mouse sertoli cells. (査読付) (生後早期のデカブロモジフェニルエーテルへの低濃度曝露はマウスセルトリ細胞におけるアンドロゲン受容体と甲状腺ホルモン受容体の発現量およびスプライシングバリエーションの発現に影響をおよぼす)	共著	2014年12月	PLoS One. 5:9(12):e114487.	本研究は、新生児期マウスに対して臭素系難燃剤の一つであるデカブロモジフェニルエーテルを投与した場合、思春期以降に精巣における甲状腺ホルモン受容体 α の選択的スプライシングに異常が生じることを明らかにした。 分担: Miyaso H , Nakamura N, Naito M, Hirai S, Matsuno Y, Itoh M, Mori C 担当(役割): 筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った。
20 Chiba study of Mother and Children's Health group. Chiba study of Mother and Children's Health (C-MACH): cohort study with omics analyses. (査読付) (母児の健康に関する千葉県における研究: オミクス解析によるコホート研究)	共著	2016年1月	BMJ Open. 29:6(1):e010531	本研究は、千葉県大学予防医学センターが実施しているヒト出生コホートについての報告を行った。 分担: Sakurai K, Miyaso H , Eguchi A, Matsuno Y, Yamamoto M, Todaka E, Fukuoka H, Hata A, Mori C. 担当(役割): 共著者としてデータ収集と解析を行った。

21 更年期女性における酸化ストレス状態に関する研究 (査読付)	共著	2016年3月	千葉県立保健医療大学紀要 7(1) 61 - 61	本研究は特に更年期女性を対象として血中酸化ストレスの増加に関する環境要因を解析した。 分担：川城由紀子, 石井邦子, 宮宗秀伸 , 松野義晴 担当 (役割) : 共著者としてデータ収集と解析を行った。
22 Levels of formaldehyde vapor released from embalmed cadavers in each dissection stage. (査読付) (解剖の各段階において献体から放散されるホルマリンのレベルについて)	共著	2016年8月	Environ Sci Pollut Res Int. 23(16):16176-82	本研究は、医学部の解剖実習に供されるホルマリン固定を施された献体からのホルマリンの放散を調べ、皮膚の展開時にその放散量が有意に上昇することを明らかにした。 分担：Sugata Y, Miyaso H , Odaka Y, Komiyama M, Sakamoto N, Mori C, Matsuno Y. 担当 (役割) : 共著者としてデータ収集と解析を行った。
23 The effects of early postnatal exposure to a low dose of decabromodiphenyl ether (BDE-209) on serum metabolites in male mice. (査読付) (雄マウスにおける生後のBDE-209低濃度曝露の血清中代謝物における影響)	共著	2016年10月	J Toxicol Sci. 41(5):667-75	本研究は、新生児期マウスに対して臭素系難燃剤の一つであるデカブロモジフェニルエーテルを投与した場合、代謝系に異常が生じることを質量分析によって明らかにした。 分担：Eguchi A, Miyaso H , Mori C. 担当 (役割) : 共著者としてデータ収集と解析を行った。
24 A novel classification of musculocutaneous nerve variations: The relationship between the communicating branch and transposed innervation of the brachial flexors to the median nerve. (査読付) (筋皮神経の破格の新しい分類方法について：正中神経に対する上腕屈筋の交通枝と転置された神経支配の間の関係について)	共著	2016年10月	Ann Anat. S0940-9602(16)30158-3	本研究は、ヒト献体を用いて筋皮神経を評価し、その破格 (バリエーション) の発生機序と分類を考察した。 分担：Hayashi M, Shionoya K, Hayashi S, Hatayama N, Kawata S, Qu N, Hirai S, Miyaso H , Itoh M. 担当 (役割) : 共著者としてデータ収集と解析を行った。
25 低濃度の臭素系難燃剤曝露が引き起こす雄性生殖系への影響評価	共著	2016年12月	Endocrine Disrupter News Letter 19(3): 5-5	本研究はこれまでに解析してきた、臭素系難燃剤曝露による雄性生殖系への毒性影響を取りまとめて報告した。 分担： 宮宗秀伸 , 伊藤正裕, 森千里 担当 (役割) : 筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った。
26 中高年女性における酸化ストレスの関連要因の検証 (査読付)	共著	2017年3月	千葉県立保健医療大学紀要 8(1) 53 - 59	本研究は中高年女性を対象として血中酸化ストレスの増加に関する環境要因を解析した。 分担：川城由紀子, 宮宗秀伸 , 石井邦子, 松野義晴 担当 (役割) : 共著者としてデータ収集と解析を行った。
27 正常解剖実習におけるホルムアルデヒド濃度低減の検討	共著	2017年7月	形態科学 20(2) 117 - 119-119	医学部の解剖実習に供される献体はホルマリン固定を施されており、学生は実習の際に献体から放散されるホルマリンに曝露される。本研究ではホルマリン固定の献体についてアルコール置換処置などを施し、実習中の室内ホルマリン濃度を減少させることに成功したので、詳細を報告した。 分担：河田晋一, 林省吾, 曲寧, 李忠連, 宮宗秀伸 , 平井宗一, 永堀健太, 伊藤正裕 担当 (役割) : 共著者としてデータ収集と解析を行った。

<p>28 Associations between changes in the maternal gut microbiome and differentially methylated regions of diabetes-associated genes in fetuses: A pilot study from a birth cohort study. (査読付) (母体の腸内細菌叢の変動と出産後臍帯における糖尿病関連遺伝子のDNAメチル化変動領域メチル化レベルの変動の相関について)</p>	共著	2017年7月	J Diabetes Investig. 8(4):550-553	本研究は、妊娠中母体の腸内細菌叢の状態と出産後の臍帯における糖尿病関連遺伝子の differentially methylated region (DMR) におけるメチル化レベルの相関関係を明らかにした。 分担：Tachibana K, Sakurai K, Watanabe M, Miyaso H , Mori C 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。
<p>29 The methylation levels of the H19 differentially methylated region in human umbilical cords reflect newborn parameters and changes by maternal environmental factors during early pregnancy. (査読付) (ヒト臍帯におけるH19メチル化変動領域のメチル化レベルは新生児のパラメータを反映し、また妊娠初期の母体環境要因によって変動する)</p>	共著	2017年8月	Environ Res. 157:1-8.	本研究は、妊娠初期の母体の栄養状態によって、出産後の臍帯におけるH19遺伝子のメチル化レベルが変動することを明らかにした。 分担： Miyaso H , Sakurai K, Takase S, Eguchi A, Watanabe M, Fukuoka H, Mori C. 担当(役割)：筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った。
<p>30 脊椎由来の痛みに対するインターベンショナル治療 up to date 脊椎疾患に対するインターベンショナル治療の教育~遺体を用いたインターベンショナル治療のトレーニングの現状と展望(第1回タイ カダバーハンズオンセミナーを企画して)~</p>	共著	2017年12月	ペインクリニック 38(12) 1567 - 1575	筆者らは脊椎疾患に対するインターベンショナル治療について医師に対する卒後教育の一環として、献体を用いた外科講習会(サージカルトレーニング)を実施した。その現状と今後の展望を報告した。 分担：西山隆久, 安部洋一郎, 伊達久, 林省吾, 河田晋一, 宮宗秀伸 , 本間宙, 西木戸修, 木村信康, 村井邦彦, 伊藤正裕, 内野博之, 大瀬戸清茂 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。
<p>31 肘窩における皮静脈と皮神経の位置関係—皮静脈穿刺に適する部位の検討 (査読付)</p>	共著	2018年3月	千葉大学大学院看護学研究科紀要 (40) 1 - 8-8	本研究は医学部の解剖実習に供される献体について、肘窩における皮静脈と皮神経の位置関係のパターンを観察し、皮静脈への穿刺に対して低リスクである領域を改めて検証した。 分担：小宮山政敏, JIN Heling, 宮宗秀伸 , 松野義晴, 田中裕二 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。
<p>32 Using Artificial DNA Sequence to Suppress Non-specific Bindings in Crude Nuclear Extract During Surface Plasmon Resonance Assay. (査読付) (表面プラズモン共鳴アッセイにおける核抽出液において非特異的結合を抑制するための合成DNAの適用)</p>	共著	2018年9月	Tokai J Exp Clin Med 20:43(3):122-131	本研究は、ゲノムDNAと転写因子の結合実験に使用される合成DNA鑄型について、非特異的結合を減少させる方法を明らかにした。 分担：Li ZL, Nagahori K, Kawata S, Omotehara T, Ogawa Y, Miyaso H , Itoh M, Otsuki Y, Sakabe K. 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。

<p>33 Advanced cadaver-based educational seminar for trauma surgery using saturated salt solution-embalmed cadavers. (査読付) (飽和食塩水固定献体を用いた外傷に対するアドバンスド外科教育セミナー)</p>	共著	2019年1月	Acute Med Surg. 20;6(2):123-130	<p>本研究は、外傷に対する外科手術の卒後教育を実施するにあたり供されるヒト献体について、飽和食塩水による固定法の有効性を明らかにした。 分担：Homma H, Oda J, Sano H, Kawai K, Koizumi N, Uramoto H, Sato N, Mashiko K, Yasumatsu H, Ito M, Fukuhara T, Watanabe Y, Kim S, Hayashi S, Kawata S, Miyawaki M, Miyaso H, Itoh M. 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。</p>
<p>34 【痛みのインターベンショナル治療up to date】 診断的治療 脊椎疾患に対するインターベンショナル治療の教育 遺体を用いたインターベンショナル治療のトレーニングの現状と展望 カダバーハンズオンセミナーを企画して</p>	共著	2019年4月	ペインクリニック 40(別冊春) S47-S56	<p>筆者らは脊椎疾患に対するインターベンショナル治療について医師に対する卒後教育の一環として、献体を用いた外科講習会(サージカルトレーニング)を実施し、その教育効果を報告した。 分担：西山 隆久, 伊達 久, 安部 洋一郎, 林省吾, 河田 晋一, 宮宗 秀伸, 本間 宙, 西木戸修, 木村 信康, 村井 邦彦, 伊藤 正裕, 井関 雅子, 内野 博之, 大瀬戸 清茂 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。</p>
<p>35 DNA methylome of human neonatal umbilical cord: Enrichment of differentially methylated regions compared to umbilical cord blood DNA at transcription factor genes involved in body patterning and effects of maternal folate deficiency or children's sex. (査読付) (ヒト臍帯におけるDNAメチローム: ボディパターンに関わる転写因子遺伝子における臍帯血DNAに対するメチル化可変領域の充実について、また母体の葉酸摂取不足と児の性差における影響について)</p>	共著	2019年5月	PLoS One 7;14(5):e0214307.	<p>本研究は、臍帯血におけるゲノムDNAメチル化レベルと臍帯におけるそれを比較して、妊娠中の母体血中葉酸レベルによるメチル化状態の違いを明らかにした。 分担：Sakurai K, Shioda K, Eguchi A, Watanabe M, Miyaso H, Mori C, Shioda T. 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。</p>
<p>36 Evaluation of Yanagihara facial nerve grading system based on a muscle fiber analysis of human facial muscles. (査読付) (ヒト表情筋の筋線維解析におけるヤナギハラ顔面神経評価法の再評価)</p>	共著	2019年7月	Eur Arch Otorhinolaryngol. 276(7):2055-2060	<p>本研究は、表情筋の筋線維を詳細に評価することによって、顔面神経麻痺の評価に用いられるYanagihara methodについて、その有用性を改めて明らかにした。 分担：Sekikawa K, Moriyama H, Miyaso H, Osada T, Ueno R, Otsuka N, Itoh M. 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。</p>
<p>37 Spraying urea solution reduces formaldehyde levels during gross anatomy courses. (査読付) (尿素溶液噴霧は解剖実習におけるホルマリン濃度を減少させる)</p>	共著	2019年3月	Anat Sci Int. 94(2):209-215	<p>本研究は、医学部解剖実習に用いられるホルマリン固定を施した献体について、尿素をベースにした薬液で処理することによって、献体から揮発するホルマリンを減少させることが出来ることを明らかにした。 分担：Kawata S, Marutani E, Hirai S, Hatayama N, Omotehara T, Nagahori K, Li Z, Miyaso H, Pieroh P, Naito M, Itoh M. 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。</p>

<p>38 An Altered DNA Methylation Status in the Human Umbilical Cord Is Correlated with Maternal Exposure to Polychlorinated Biphenyls. (査読付) (ヒト臍帯におけるゲノムDNAメチル化状態は母体のポリ塩化ビフェニル曝露と関連する)</p> <p>39 Effects of phosphorylated estrogen receptor alpha on apoptosis in human endometrial epithelial cells. (査読付) (ヒト子宮内膜上皮細胞のアポトーシスにおけるリン酸化エストロゲン受容体アルファの影響)</p> <p>40 Neonatal maternal separation causes decreased numbers of Sertoli cell, spermatogenic cells, and sperm in mice. (査読付) (新生児期母児分離はマウスにおいてセルトリ細胞数、精子形成細胞数、成熟精子数の減少を引き起こす)</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2019年8月</p> <p>2020年5月</p> <p>2020年10月</p>	<p>Int J Environ Res Public Health 4:16(15)</p> <p>Anat Sci Int 95(2):240-250</p> <p>Toxicol Mech Methods. 2020 Oct 25:1-36.</p>	<p>本研究は、妊娠中女性の血液に含まれるポリ塩化ビフェニルの量によって、出産後の臍帯におけるゲノムDNAメチル化状態が変動することを明らかにした。 分担：Eguchi A, Nishizawa-Jotaki S, Tanabe H, Rahmutulla B, Watanabe M, <u>Miyaso H</u>, Todaka E, Sakurai K, Kaneda A, Mori C. 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。</p> <p>本研究は、月経周期をコントロールするため、子宮内膜細胞とコイル動脈におけるリン酸化プロテインキナーゼおよびリン酸化エストロゲン受容体αが共同的に働いていることを明らかにした。 分担：Uchida S, Saimi M, Li ZL, <u>Miyaso H</u>, Nagahori K, Kawata S, Omotehara T, Ogawa Y, Itoh M. 担当(役割)：共著者としてデータ収集と解析を行った。</p> <p>本研究は、マウスにおいて新生児期母児分離が、思春期以降にセルトリ細胞、精子形成細胞、成熟精子の数を減少させることを明らかにした。 分担：<u>Miyaso H</u>, Nagahori K, Takano K, Omotehara T, Kawata S, Li ZL, Kuramasu M, Xi W, Ogawa Y, Itoh M. 担当(役割)：担当(役割)：筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った。</p>
<p>(その他) 学会発表</p> <p>1 ヒトの環境化学物質曝露状況と実態把握のための小児コホート調査 (シンポジウム)</p> <p>2 Effect of postnatal exposure to decabromodiphenyl ether on expression of splicing variants of thyroid hormone α transcript and its splicing factors in mouse testes: environmental pollutants and splicing regulation (シンポジウム) マウス精巣の甲状腺ホルモン受容体α選択的スプライシングとスプライシングファクターに新生児期デカブロモジフェニルエーテル曝露がおよぼす影響～環境汚染物質とスプライシング制御～</p> <p>3 マウス精巣におけるデカブロモジフェニルエーテル曝露影響の新知見 —セルトリ細胞数および甲状腺ホルモン機能を中心に— (シンポジウム)</p>	<p>—</p> <p>—</p> <p>—</p>	<p>2011年10月</p> <p>2012年12月</p> <p>2012年12月</p>	<p>フォーラム2011 衛生薬学・環境トキシコロジー(金沢エクセルホテル東急：金沢市)</p> <p>第15回環境ホルモン学会(東京大学 東京 日本)</p> <p>第27回日本生殖免疫学会(大阪医科大学 大阪 日本)</p>	<p>本演題では、これまでヒトを対象として行われてきた環境化学物質曝露状況について、さらに今後実施予定である実態把握のための「小児コホート調査」について発表した。 共同発表者：<u>宮宗秀伸</u>，戸高恵美子，松野義晴，中岡宏子，花里真道，森 千里</p> <p>本演題では、マウス精巣の甲状腺ホルモン受容体α選択的スプライシングとスプライシングファクターに新生児期デカブロモジフェニルエーテル曝露がおよぼす影響について発表した。 共同発表者：<u>H. Miyaso</u>, M. Komiyama, Y. Matsuno and C. Mori</p> <p>本演題では、新生児期デカブロモジフェニルエーテル曝露がマウス精巣におよぼす影響について発表した。 共同発表者：<u>H. Miyaso</u>, N. Nakamura, Y. Matsuno, M. Komiyama, and C. Mori</p>

<p>4 Effect of exposure to decabromodiphenyl ether on alternative splicing of thyroid hormone receptor α transcript in mouse testis (シンポジウム) デカブロモジフェニルエーテル曝露の、マウス甲状腺ホルモン受容体αの選択的スプライシングにおよぼす影響</p>	-	2013年3月	第118回日本解剖学会 (サンポートホール高松・かがわ国際会議場 高松 香川)	本演題では、臭素系難燃剤の一つであるデカブロモジフェニルエーテル曝露が、マウス精巣における甲状腺ホルモン受容体 α の選択的スプライシングにおよぼす影響について発表した。 共同発表者： Hide Nobu Miyaso , Masatoshi Komiyama, Yoshiharu Matsuno, and Chisato Mori
<p>5 出生後栄養状態によって生じるマウス雄性生殖器系への影響 (シンポジウム)</p>	-	2016年12月	第24回精子形成・精巣毒性研究会 (東京都文京区)	本演題では、出生後低栄養がマウス雄性生殖器系におよぼす影響について発表した。 共同発表者： 宮宗 秀伸 、永堀 健太、林 省吾、曲 寧、李 忠連、倉升 美幸、河田 晋一、櫻井健一、森千里、伊藤正裕
<p>6 TESEの際に留意すべき精巣の組織環境 (シンポジウム)</p>	-	2017年6月	第36回日本アンドロロジー学会 (岡山)	本演題では、不妊症患者におけるTESEについて留意すべき事項を、男性生殖器系の基礎研究の視点から発表した。 共同発表者： 宮宗秀伸 、伊藤正裕
<p>7 The Effect of Neonatal Exposure to Lower Dose Decabromodiphenyl Ether on Transcript Level of DNA Methyltransferase 3 in Mouse Testes (シンポジウム) (新生児期低濃度デカブロモジフェニルエーテル曝露が、マウス精巣におけるDNAメチルトランスフェラーゼ3の転写レベルにおよぼす影響)</p>	-	2017年12月	第24回環境ホルモン学会 (兵庫県神戸市)	本演題では、新生児期低濃度デカブロモジフェニルエーテル曝露が、マウス精巣におけるDNAメチルトランスフェラーゼ3の転写レベルを長期的に変動させる現象について発表した。 共同発表者： Hide Nobu Miyaso , Kenta Nagahori, Takuya Omotehara, Shinich Kawata, Zhong-Lian Li, Miyuki Kuramasu, Yuki Ogawa, Chisato Mori, Masahiro Itoh
<p>8 新生児期の母児分離が引き起こすマウス雄性生殖器系への影響 (講演)</p>	-	2018年3月	第3回生殖系懇話会 (東京都武蔵野市)	本演題では、幼少期ストレスへの曝露がマウスの雄性生殖器系におよぼす影響について発表した。 共同発表者： 宮宗秀伸 永堀健太 表原拓也 河田晋一 李 忠連 倉升三幸 小川夕輝 伊藤正裕
<p>9 幼少期ストレスが幼若期マウス精巣のセルトリ細胞におよぼす影響 (学会賞候補演題)</p>	-	2019年6月	第38回日本アンドロロジー学会 (大阪)	本演題では、幼少期ストレスへの曝露が特にマウスの精巣におけるセルトリ細胞の分化成熟におよぼす影響について発表した。 単独発表
:				

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 亀田(萬納寺)英里				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
6403腫瘍治療学 7905医化学一般 8202消化器内科学		(2)化学療法(5)ドラッグデリバリー(7)遺伝子治療(13)免疫療法 (3)ゲノム医化学 (4)胆道学、膵臓学(5)消化器内視鏡学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) 膵癌の遺伝子異常	共著	平成27年10月	G. I. Research 23(5)	膵癌の癌化はKRAS, CDK11V2A, TP53, SMAD4の4つのドライバー遺伝子が癌の主要なシグナル遺伝子伝達経路においてキーとなり, 癌クローンが複雑に進化を遂げることで生じるとされている。主要4遺伝子が治療標的となりにくい遺伝子であることや, その他の遺伝子変異に関しては, 既知の重要なドライバー遺伝子変異が起こることがまれであることなどから, 膵癌におけるゲノムバイオマーカーに基づく個別化治療はいまだ実現されていない。膵癌領域においても, ゲノムの進化の観点から発癌のメカニズムの理解を深めることで病態モニタリング, 更なる治療標的の同定とその標的に応じた薬剤の開発・薬剤の選択など, 真の個別化治療の実現に向け今後も研究が進むことが期待される。 医学用語解説(450-451) 亀田英里, 前田 慎
2) リキッドバイオプシー (Liquid Biopsy)	共著	平成27年10月	G. I. Research 23(5)	リキッドバイオプシーは, 血中より血中循環腫瘍細胞(circulating tumor cells: CTCs)や, 無細胞の循環腫瘍由来DNA(circulating tumor DNA: ctDNA)といった新たな試料を採取する方法で, これにより生命予後予測, 治療効果判定, 遺伝子変異検索をおこなうことが可能である。血液を利用するため何度でもサンプリングが可能であり, 腫瘍の特異的变化を連続的に追跡することも可能である。現在臨床でおこなわれている画像診断のみでは, 正確な病期診断にも限界があり, ときに転移を伴った進行がんを早期がんとして診断する場合もある。今後CTCsやctDNAを高い感度で検出するシステムが開発されリキッドバイオプシーが臨床で標準化されるようになると, より確実な病期診断・治療の効果判定が可能となり, いまよりさらに個々の症例にとって最適な治療を選択できるようになるであろう。 医学用語解説(448-449) 亀田英里, 前田 慎
(学術論文) 1) EUS-FNAで確定診断し得た膵内副脾の1例(査読付)	共著	平成25年12月	Progress of Digestive Endoscopy Vol. 83 No. 1	膵尾部に発生する副脾は稀で, 画像所見もNETに類似しており, 手術が施行され, 術後に初めて診断されることが多い。超音波内視鏡下穿刺吸引組織診(EUS-FNA)を施行し, 病理組織学的に確定診断が得られ, 手術やその後の長期的な画像検査を回避することができた膵内副脾の症例を経験したので報告した。 分担: 担当医として症例を提供した 渡邊薫, 杉森一哉, 三箇克幸, 清水悠郎, 亀田英里, 三輪治生, 金子卓, 粉川敦史, 沼田和司, 田中克明, 前田慎

<p>2)超音波内視鏡下胆道ドレナージ (EUS-BD) の長期成績 (査読付) A54:A70</p>	<p>共著</p>	<p>平成26年7月</p>	<p>Progress of Digestive Endoscopy Vol. 84 No. 1</p>	<p>2010年8月～2013年10月までの切除不能悪性胆道狭窄例のうち、EUS-BDを施行した8例の長期成績について検討を行い報告した。処置に関連した偶発症は軽微な腹痛と気腹を1例ずつ認めた。生存期間は43～506日(平均178日)で、全例原病により死亡した。3例(37.5%)でステント機能不全を来し、その原因はいずれの症例も十二指腸側へのステント逸脱であった。ステント機能維持期間中央値は129日(95%信頼区間:74～184日)であった。ステントが逸脱した3例のうちreinterventionの適応があった2例では再穿刺を行うことなく瘻孔からステント再留置が可能であった。</p> <p>分担:担当医として症例を提供した</p> <p>三箇克幸, 杉森一哉, 戸塚雄一郎, 桑島拓史, 清水悠郎, 亀田英里, 三輪治生, 金子卓, 粉川敦史, 沼田和司, 田中克明, 前田慎</p>
<p>3)EUS-FNAが診断に有用であった胃癌吻合部再発の1例 (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>平成26年12月</p>	<p>Progress of Digestive Endoscopy Vol. 85 No. 1</p>	<p>胃癌術後の吻合部再発は、粘膜生検で診断に至ることが多いが、粘膜下を主座として再発する症例では確定診断が困難である。開腹生検などの侵襲的な診断法を回避し、超音波内視鏡下穿刺吸引術 (EUS-FNA) で確定診断に至り、有効な治療を迅速に導入できた胃癌術後吻合部再発の1例を経験したので報告した。</p> <p>分担:担当医として症例を提供した</p> <p>室橋光太, 三輪治生, 杉森一哉, 戸塚雄一郎, 石井ゆにば, 亀田英里, 石井寛裕, 金子卓, 大島貴, 粉川敦史, 沼田和司, 國崎主税, 田中克明, 前田慎</p>
<p>4)カバードメタルステント留置により截石に成功した肝内結石の1例 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年6月</p>	<p>Progress of Digestive Endoscopy Vol. 86 No. 1</p>	<p>膵頭十二指腸切除術後に合併した胆管空腸吻合部狭窄合併肝内結石例に対し、カバードメタルステント (covered metallic stent: CMS) の留置を行い、結石除去に成功した症例を経験したため報告した。</p> <p>分担:担当医として症例を提供した</p> <p>久保井頼子, 杉森一哉, 近藤新平, 久保敦義, 石井ゆにば, 亀田英里, 三輪治生, 石井寛裕, 金子卓, 粉川敦史, 沼田和司, 田中克明, 前田慎</p>
<p>5)APCで十二指腸ステントの切断を行い、胆管ステントを抜去した1例 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年12月</p>	<p>Progress of Digestive Endoscopy Vol. 87 No. 1 p. 154-155</p>	<p>アルゴンプラズマ凝固 (APC: argon plasma coagulation) を用いて十二指腸メタリックステント (MS) のトリミングを行うことで胆管MSの抜去に成功し、EUS-BDが可能となった症例を経験したので報告した。</p> <p>分担:担当医として症例を提供した</p> <p>苦瓜知佳, 杉森一哉, 杉森慎, 竹田彩子, 石井ゆにば, 合田賢弘, 入江邦泰, 亀田英里, 三輪治生, 石井寛裕, 金子卓, 粉川敦史, 沼田和司, 田中克明, 前田慎</p>

<p>6) Intestine-specific homeobox (ISX) induces intestinal metaplasia and cell proliferation to contribute to gastric carcinogenesis (Intestine-specific homeobox (ISX) は、腸の化生および細胞増殖を誘発し胃の発癌に関与する) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成28年2月</p>	<p>Journal of Gastroenterology volume 51, pages949-960</p>	<p>腸上皮化生と胃の発癌の開発におけるISXの役割についてヘリコバクター感染マウスとヒトの胃粘膜を用いて免疫組織化学研究を行ったところ、H. pylori感染によって誘発されるISX発現は、CDX1 / 2およびcyclinD1発現を介して腸上皮化生および胃粘膜の過剰増殖を引き起こし、胃の発癌に寄与する可能性があると考えられた。</p> <p>分担：共著者として研究デザイン、進行に参加した。</p> <p>Soichiro Sue, Wataru Shibata, <u>Eri Kameta</u>, Takeshi Sato, Yasuaki Ishii, Hiroaki Kaneko, Haruo Miwa, Tomohiko Sasaki, Toshihide Tamura, Masaaki Kondo, Shin Maeda</p>
<p>7) Diagnosis of pancreatic lesions collected by endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration using next-generation sequencing fine-needle aspiration using next-generation sequencing (EUS-FNA検体を用いた次世代シーケンサーによる膵腫瘍の遺伝子診断) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成28年11月</p>	<p>Oncol Lett. (3875-3887)</p>	<p>膵癌と診断された29例と非膵癌と診断された11例よりEUS-FNAにて検体を採取した後、抽出したDNAを次世代シーケンサーで解析したところ、KRAS変異は膵癌29例中28例で陽性(96%)で、11例の非膵癌症例は全例陰性であった(0%)。TP53の遺伝子変異に関しては膵癌症例の13例(44%)で陽性で、非膵癌症例では転移性膵腫瘍の1例でのみ陽性で、良性疾患に関しては全て陰性であった。また他の遺伝子に関しては、膵癌症例のうちSMAD4の変異が3例、CDKN2Aの変異が4例で認められた。さらにTP53変異と予後との関連を検討したところ、PS2以上で化学療法を2クール以上施行可能であったStageIVの膵癌症例では、TP53変異を有する症例で、有さない症例よりも生存率の低い傾向がみられた。この結果、EUS-FNAによる膵癌診断においてKRAS変異の有無が診断の一助となる可能性が示された。また、手術不能の進行膵癌においてもTP53の遺伝子変異が予後予測因子になりうることが示唆された。</p> <p>分担：筆頭著者として研究デザイン、統括した。</p> <p><u>Eri Kameta</u>, Kazuya Sugimori, Takashi Kaneko, Tomohiro Ishii, Haruo Miwa, Takeshi Sato, Yasuaki Ishii, Soichiro Sue, Tomohiko Sasaki, Yuki Yamashita, Wataru Shibata, Naomichi Matsumoto, Shin Maeda</p>
<p>8) c-Jun N-terminal kinase in pancreatic tumor stroma augments tumor development in mice (マウスの膵癌間質のc-Jun N-ターミナルキナーゼ (JNK)は腫瘍増殖を増強する) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年11月</p>	<p>Cancer Sci. 108(11): 2156-2165</p>	<p>マウスの膵癌間質におけるJNKの役割を探ることを目的としPtf1a Cre / +; Kras G12D / +; JNK1 - / - (Kras; JNK1 - / -) マウスを作成し、マウス膵癌細胞株 (mPC) を使って研究を行い、膵腫瘍間質でJNKの活性化を阻害することで、TAF (腫瘍関連線維芽細胞) からのCcl20分泌が増加し、抗腫瘍免疫が増強されることが予想され、CD8 + T細胞の蓄積を誘発する潜在的な治療標的になりうると考えられた。</p> <p>分担：共著者として研究デザイン、進行に参加した。</p> <p>Takeshi Sato, Wataru Shibata, Yohko Hikiba, Yoshihiro Kaneta, Nobumi Suzuki, Sozaburo Ihara, Yasuaki Ishii, Soichiro Sue, <u>Eri Kameta</u>, Makoto Sugimori, Hiroaki Yamada, Hiroaki Kaneko, Tomohiko Sasaki, Tomohiro Ishii, Toshihide Tamura, Masaaki Kondo, Shin Maeda</p>

<p>9) Helicobacter-induced gastric inflammation alters the properties of gastric tissue stem/progenitor cells (ヘリコバクターで誘発された胃の炎症により胃組織の幹/前駆細胞の特性が変化する) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年11月</p>	<p>BMC Gastroenterol 17, 145</p>	<p>3種類のマウスモデル (①ヘリコバクター・フェリス (H. felis) の長期感染、②H. felisの未感染、③MNU化学発がんモデル) を使用しオルガノイドを作成し、胃上皮層類似の3次元胃上皮細胞培養システムを利用し、H. felisの慢性的な感染後の上皮細胞の変化を検討したところ、胃の発癌の可能なメカニズムとして、H. felis感染による慢性炎症が組織幹/前駆細胞の数と幹細胞マーカーの発現を増加させることが示唆された。これらの発見は、慢性炎症が未分化状態へ分化の方向を変える可能性があることと、感染の消失により腸上皮化生または新たに再分化させる可能性があることが示唆された。</p> <p>分担：共著者として研究デザイン、進行に参加した。</p> <p>Wataru Shibata, Soichiro Sue, Sachiko Tsumura, Yasuaki Ishii, Takeshi Sato, <u>Eri Kameta</u>, Makoto Sugimori, Hiroaki Yamada, Hiroaki Kaneko, Tomohiko Sasaki, Tomohiro Ishii, Toshihide Tamura, Masaaki Kondo, Shin Maeda</p>
<p>10) Activation of Signal Transduction and Activator of Transcription 3 Signaling Contributes to Helicobacter-Associated Gastric Epithelial Proliferation and Inflammation (ヘリコバクター関連の胃上皮増殖と炎症に寄与するシグナル伝達の活性化と3つのシグナル伝達の活性化因子について) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年8月</p>	<p>Gastroenterol Res Pract. 2018</p>	<p>胃の炎症と発癌へのSTAT3の寄与を評価するために、野生型 (WT) と胃の上皮のStat3をノックアウト (Stat3Δgec) したマウスを使用し胃の炎症と発癌におけるSTAT3の役割とヘリコバクターで誘発される胃の表現型の分子機構を研究した。ヘリコバクター・フェリスに感染させたマウスの胃オルガノイドを処理し、IL-6 / STAT3シグナル伝達の役割をin vitroで評価したところ、炎症および粘膜炎は、Stat3ΔgecマウスよりもWTマウスでより重篤だった。STAT3シグナル伝達の活性化はヘリコバクター関連の胃の発癌において重要な役割を果たす可能性があると考えられた。</p> <p>分担：共著者として研究デザイン、進行に参加した。</p> <p>Yasuaki Ishii, Wataru Shibata, Makoto Sugimori, Yoshihiro Kaneta, Masatomo Kanno, Takeshi Sato, Soichiro Sue, <u>Eri Kameta</u>, Hiroaki Kaneko, Kuniyasu Irie, Tomohiko Sasaki, Masaaki Kondo, Shin Maeda</p>
<p>(その他) 学会発表 1) 悪性胆道狭窄に対するチューブステント胆管内留置法の現状</p>	<p>-</p>	<p>平成23年5月</p>	<p>消化器病学会 (東京)</p>	<p>当院における悪性胆道狭窄に対するTS胆管内留置の成績について報告した。対象は2007年1月から2011年1月の期間、悪性胆道狭窄例に対する長期間のドレナージを目的として施行した27例について、成績を検討した。6例 (22. 2%) でステント機能不全が発生し、その原因は5例がmigrationであり、1例が閉塞であった。挿入90日後の開通率は85. 7%、180日後は73. 4%で、従来法よりも開通期間が長く、予後不良な悪性胆道狭窄症例におけるTS留置法の第一選択となりえると考えた。</p> <p>金子卓1), 杉森一哉1), 手塚瞬1), <u>亀田英里1)</u>, 國司洋佑1), 粉川敦史2), 沼田和司1), 田中克明1), 前田慎3)</p>

2) 膵癌患者の消化管狭窄に対するself-expandable metallic stent留置の現状	-	平成26年1月	日本膵臓学会（北九州市）	<p>2005年12月から2013年12月まで膵癌による消化管狭窄に対しSEMS留置を行った39例を対象に現状を解析した。十二指腸狭窄は、SEMS留置前後での摂食状況は有意に改善した。偶発症は、ステント閉塞を5例、胆管閉塞を3例、出血を2例、敗血症を1例認めた。空腸狭窄は4例5か所に認められた。全例再建腸管でありR-Y後の挙上空腸狭窄に対してSEMS留置を施行した2例ではともに留置前後でのGOOSSでの改善を認め、R-Y後のY脚狭窄とChild変法後の挙上空腸狭窄に対してSEMS留置を行った3例では、全例で輸入脚症候群の改善を認めた。偶発症は全例で認めなかった。大腸狭窄は1例2か所に認めた。膵尾部癌の直接浸潤による脾彎曲部狭窄と腹膜播種による直腸狭窄で、SEMSを留置し症状は改善した。偶発症は認めなかった。</p> <p>金子卓1, 杉森一哉1, 亀田英里1, 三輪治生1, 沼田和司1, 田中克明1, 前田慎2</p>
3) EUS-FNA検体を用いた次世代シーケンサーによる膵腫瘍の遺伝子診断	-	平成27年10月	JDDW2015（東京）	<p>EUS-FNAによって採取され、病理学的に膵癌と診断された18例と非膵癌と診断された9例、合計27例次世代シーケンサーをもちいてシーケンスを行った。KRAS変異は膵癌18例中18例全例で陽性で（100%）、9例の非膵癌症例は全例陰性であった（0%）。KRASのアミノ酸置換に関しては、G12が17例、G13が0例、Q61が1例であった。またTP53の遺伝子変異に関しては膵癌症例の9例（50%）で陽性で、非膵癌症例では全例で陰性であった（0%）。なおTP53の遺伝子座変異に関しては、10例の膵癌症例中10箇所認められた。また他の遺伝子に関しては、膵癌症例のうちSMAD4の変異が3例、CDKN2Aの変異が2例で認められた。</p> <p>亀田英里、杉森一哉、前田慎</p>
4) Establishment of metastatic pancreatic cancer model that can monitor tumor burdens（腫瘍の増殖を追跡する転移性膵癌モデルの樹立）	-	平成28年5月	DDW2016（サンディエゴ）	<p>サイトメガロウイルススリフェラーゼベクターを移植した膵癌細胞を樹立し、これをマウスに移植することでマウスで膵癌の肝転移・腹膜播種モデルを作成した。さらに転移性膵癌モデルに塩酸ゲムシタピンを投与し、in vivo imaging system (IVIS) で腫瘍の増殖過程・治療経過を可視化することに成功した。</p> <p>分担：筆頭著者として研究デザイン、統括、発表した</p> <p>亀田英里、芝田渉、前田慎</p>
5) Trousseau症候群を発症した胆嚢扁平上皮癌の1例	-	平成28年5月	日本消化器病学会関東支部例会（東京）	<p>脳梗塞を契機に肺塞栓と胆嚢腫瘍を指摘。各種画像・病理診断の結果、胆嚢扁平上皮癌と診断。Trousseau症候群を発症した胆嚢扁平上皮癌という非常に稀な症例を経験したため、検査結果・治療経過を文献的考察を加え報告した。</p> <p>分担：担当医として症例を提供した</p> <p>井徳愛、石井寛裕、杉森慎、山田博昭、佐藤健、須江聡一郎、金子裕明、亀田英里、佐々木智彦、田村寿英、近藤正晃、芝田渉、前田慎</p>
6) 生体内における腫瘍の進展・治療過程のモニタリングを可能とする転移性膵癌モデルの樹立	-	平成28年10月	日本癌学会総会（横浜）	<p>腫瘍の進展を監視する膵癌のマウスモデルの確立を試みた。生後12ヶ月のPtf1a (cre / +) ; LSL-Kras (G12D / +) マウス (EPPK1細胞) の自然発生的な悪性腫瘍に由来する原発性膵臓癌細胞を確立し、EPPK1細胞をCMV-ルシフェラーゼベクターで移植した肝転移/腹膜播種モデルが確立した。腫瘍の増殖は、in vivoイメージングシステム (IVIS) を使用して観察した。肝転移モデルに関しては、脾注後2週間後に、腹膜播種モデルについては、腹腔内注入後1週間後より、IVISによって検出可能となった。</p> <p>亀田英里、前田慎</p>

7) EUS-FNA検体を用いた次世代シーケンサーによる膵腫瘍の遺伝子診断と予後との関連性の検討	-	平成28年11月	JDDW2016 (神戸)	<p>EUS-FNAによって採取され、病理学的に最終的に膵癌と診断された症例に関して次世代シーケンサーで解析を行った。StageIV症例12例について予後を追跡したところ、TP53に変異を認めた6例に関する生存率は、1か月で50%、3か月で17%、6か月で0%であったが、TP53に変異を認めなかった6例に関しては1か月で100%、3か月で83%、6か月で50%、12か月で50%と明らかに予後が良好であった。手術不能の進行膵癌においてTP53の遺伝子変異を有する症例は有さないものと比較し予後が悪いことが示唆された。</p> <p>亀田英里¹⁾、杉森一哉²⁾、佐藤健¹⁾、石井泰明¹⁾、須江聡一郎¹⁾、入江邦安²⁾、合田賢弘²⁾、三輪治生¹⁾、佐々木智彦¹⁾、石井寛裕²⁾、金子卓³⁾、芝田渉¹⁾、前田慎¹⁾</p>
8) Effectiveness of PD-L1 inhibition as a therapeutic option of cancer immunotherapy in pancreatic cancer (膵癌における癌免疫療法の治療選択肢としてのPD-L1阻害の有用性の検討)	-	平成29年5月	DDW2017 (シカゴ)	<p>PD-L1発現を抑制する阻害剤をスクリーニングし、膵癌の腫瘍増殖における効果を検討した。用いた96のプロテインキナーゼ阻害剤のうち6つで、コントロール群と比較して、PD-L1過剰発現細胞であるPanc1細胞におけるPD-L1タンパク発現の減少を示した。中でも特に、GSK-3阻害剤IX (6BIO) は、PD-L1mRNA/タンパク発現を強く阻害した。次に、in vivoでEPPK1-Luc細胞を用いて正常な免疫系を有するマウスにおける腹膜播種モデルを用いて6BIOの投与を行った。細胞の注射から1週間後、6BIOを週に2回2週間腹腔内に投与し、IVISを用いてルシフェラーゼ活性を指標として毎週腫瘍増殖を観察したところ、対照群と比較して6BIO投与群の腫瘍増殖が有意に阻害された。</p> <p>亀田英里、芝田渉、前田慎</p>

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 楊 夢 吟 (YANG, MENGHAN)				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
基礎医学、腫瘍学、ゲノム科学		(A)人体病理学、(B)実験病理学、(C)腫瘍生物学、 (D)ゲノム医科学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特になし				
(学術論文) 1Enhanced antitumor effects and improved immune status of dendritic cell and cytokine-induced killer cell infusion in advanced cancer patients. (DC-CIK細胞療法による進行癌の殺傷作用と免疫指標変化の評価) (査読付)	共著	2017年11月	Mol Clin Oncol. 2017 Nov;7(5):903-910	進行癌におけるDC-CIK養子細胞療法が患者さんのTリンパ細胞亜群を変わることが分かった。ヘルパーT細胞とキラーT細胞である群が有意的に多くなった一方制御性T細胞が有意的に少なくなった。それによる、免疫システムのバランス崩れを改善して全生存率OSが伸びたことを分かった。 担当(役割)：データ収集と分析を行った 図表を作った Chen F., <u>Yang M.H.</u>
2ゲノム研究の展開ならびにバイオバンク運営を目指した病理組織検体の適切な取扱い方法	共著	2019年10月	乳癌の臨床、第34巻、第5号(433(67)-439(73))	ゲノム研究に適して高い品質を保持するよう病理組織検体を適切に採取、保管、移送する方法についてを述べました。 担当(役割)：データ収集 金井弥栄、楊夢吟
(その他)学会発表 1胃癌におけるゲノムとエピゲノム異常の統合解析	-	2017年9月	第76回日本癌学会学術総会(横浜)	エピゲノムプロファイルを取得した胃癌例を全エクソームシーケンシングとSNPマイクロアレイ解析を行い、1塩基変異・欠失挿入型変異とコピー数異常を同定して、前癌段階で予後不良なエピゲノムプロファイルを示す症例では、ゲノム・エピゲノム異常が協調して上皮間葉転換を誘導し、低分化で予後不良な癌を形成すると考えられた。
2ゲノム・エピゲノム統合解析による胃発癌分子機構の解明	-	2018年6月	第107回日本病理学会総会(札幌)	ゲノム・エピゲノム解析を用いて、臨床病理学的に予後不良なエピゲノムクラスターは予後良好なクラスターに比してゲノムとエピゲノム変異が少なかったことを分かった。なお、組織学の低分化な癌が多く予後不良なクラスターに置いて上皮間葉転換関連分子の異常が集積していた。
3Integrated analysis of genetic and epigenetic alterations in gastric carcinomas (胃癌のゲノムとエピゲノム統合解析)	-	2019年4月	Annual Meeting of American Association of Cancer Research 2019 (Atlanta)	ゲノムとエピゲノム変異により胃発癌の分子機構を理解するために、胃癌部と非癌部のサンプルを用いてゲノムとエピゲノム解析を行った。エピゲノムの変異がより早期に起こったことがわかった。それと共にゲノムのドライバー遺伝子変異も起こったため、癌の発生と浸潤転移に至ることが分かった。

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 山口 学
研 究 分 野			研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文) 1 Isolation of miRNAs that target EGFR mRNA in human lung cancer	筆頭	2012	biochemical and biophysical research communications 420(2): 411-416 2012	EGFR遺伝子変異を持つ肺癌の治療法の確立のため、EGFRのmRNAに対し特異的に作用するmiRNAを解明した。
2 胸腔鏡で確定診断に至った壁側胸膜再発腎細胞癌の1例	筆頭	2013	気管支学 35(2): 215-219, 2013	症例報告
3 長期間経過観察されていた先天性気管支閉鎖症の1手術例	筆頭	2009	日本呼吸器外科学会雑誌 23(4): 31-34, 2009	症例報告
4 the role of airway stent placement in the management of trachemobronchial stenosis caused by inoperable advanced lung cancer	共著	2010	surgery today 40(4): 315-20. 2010	原著
5 肺腺癌細胞の分泌蛋白質群—外科的切除組織の培養上清に含まれる診断バイオマーカー候補の同定—	共著	2010	肺 癌 50(2): 141-150. 2010	原著
6 自家蛍光気管支鏡を用いた蛍光診断—その変遷と今後の展開	共著	2009	日本レーザー医学会誌 30(1): 31-36. 2009	原著
縦隔内胸管嚢胞の一切除例	共著	2007	日本呼吸器外科学会雑誌 21(7):	症例報告
気管支腔内に多発粘膜下結節を認めた肺原発MALTリンパ腫の1例	共著	2010	気管支学 32(2): 176-180. 2010	
肺胞タンパク症寛解後に発症した肺癌の一例	共著	2009	肺癌 49: 193-197	症例報告

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	山添 真治
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド			
生物系医歯薬学内科系臨床医学放射線科学		インターベンショナルラジオロジー, 画像診断学			
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項					
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要	
(著書) 1 特になし :					
(学術論文) 1. Diffusion-weighted imaging with relative signal intensity statistical thresholding for tumor delineation of prostate cancer (拡散強調画像の相対的信号 強度を用いた前立腺癌の描出 方法について) (査読付)	共著	平成24年4月	Magnetic Resonance in Medical Sciences11(1):1-8	前立腺癌の画像診断においてMRIのDWI、特に ADCmapの有用性が知られているが、artifactが強 くしばしば診断に苦慮することがあったため、 DWI画像そのものの信号強度を標準偏差にかけ描 出させる画像を作成し、病理標本と比較検討し た。これによりADCmapに頼らなくてもDWI b= 2000の画像の3SD画像を用いれば診断に有用であ ることが分かった。 Yamazoe S, Takahara T(Utrecht/NL), Shimizu K, Ouchi K, Takuji M, Harada J. 筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行っ た	
2. スtentグラフト挿入13カ 月後にstent脚の中核側 migrationをきたした腹部大 動脈・総腸骨動脈瘤の1例	共著	平成29年9月	日本血管外科学会雑誌 26(5):241-245	腹部大動脈瘤に対する治療においてEVARは有用で あることが証明されている。今回stentグラフト 挿入術後13か月にてstentグラフトの migrationにより瘤の増悪をきたしたため、再度 stentグラフトを再挿入することで治療し良好 な経過をたどったため報告した。 山添 真治, 原田 裕久, 庄司 高裕, 関本 康人, 最上 拓児 筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行っ た	
3. Convexity subarachnoid hemorrhage presented with loss of consciousness. (意識消失を主訴とした天蓋 部のくも膜下出血の1例)	共著	平成30年11月	Clinical Case Reports7(1):1-2	くも膜下出血をきたす場合頭痛がほぼ必発である ことが報告されているが、今回の症例は頭痛をき たすことなく意識消失のみ症状を呈した症例を経 験した。天蓋部のくも膜下出血の場合は意識消失 のみの症状を呈することがあり、意識消失の患者 を診療する際にはくも膜下出血も鑑別に挙げる必 要があると思われた。 Yamazoe S, Okuyama Y, Baba A, Yakabe H, Kobashi Y, Mogami T. 筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行っ た	
(その他) 学会発表 1. Somatostatin receptor scintigraphyを用いた膵内分 泌腫瘍診断の初期経験	—	平成30年11月	第58回日本核医学会学術 総会, 沖縄	膵内分泌腫瘍の診断においてSomatostatin receptor scintigraphyを用いて行ったため筆頭 演者として発表した。 山添真治, 小橋 優子, 瀬戸 由貴, 馬場 亮, 最 上 拓児	
2. CTフュージョン超音波ガイ ド下穿刺にて類骨骨腫の焼灼 術を施行した1例.	—	令和元年5月	第48回日本IVR学会総会, 福岡	類骨骨腫のアブレーション治療においてCTと超音 波画像のフュージョン画像を用いて行ったこと に関して筆頭演者として発表した。 山添真治, 増田耕一, 渡部 逸央, 穴澤卯圭, 矢ヶ部浩之, 小橋由紋子, 最上拓児.	
:					

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 若宮 富浩
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
医学		脳腫瘍学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. Microsurgical Anatomy and Surgery of the Posterior Cranial Fossa - Surgical Procedures Based on Anatomical Study. (微小解剖学と後頭蓋窩の外科解剖学に基づく手術手順)	共著	2015年1月	Springer	(Chapter 9) Matsushima T, <u>Wakamiya T</u> : The Retrosigmoid Lateral Suboccipital Approach: Basic Approach and Variations. 小脳橋角部への後頭下開頭手術のアプローチについて(後頭蓋窩の微小外科解剖と手術 松島俊夫著の英訳本)
(学術論文) 1. Tuberosus sclerosis complex associated with papillary serous carcinoma of the peritoneum, lymphangioma, and angiomyolipoma. (腹膜乳頭漿液腺癌、リンパ管血管筋腫瘍と血管筋脂肪腫を合併した結節性硬化症) 査読付	共著	2011年10月	Case Rep Pathol. 2011;2011:564260. doi:10.1155/2011/564260. Epub 2011 Oct 19.	<u>Wakamiya T</u> , Sugita Y, Hashiguchi M, Iwasaka T, Tokunaga O. 筆頭著者につき論文全体のデザインと統括を行った。50歳の結節性硬化症の女性に lymphangioma, angiomyolipoma と papillary serous carcinoma of the peritoneum (PSCP) を合併した症例を経験したので報告する。PSCPの細胞でEMA、サイトケラチン、プロゲステロン受容体の抗体で陽性の細胞がみられた。
2. An autopsy case of Alzheimer's disease presenting with corticobasal syndrome (皮質基底核症候群を呈したアルツハイマー病の剖検例) 査読付	共著	2013年10月	RinshoShinkeigaku. 2013;53(10):814-20.	Fujii N, <u>Wakamiya T</u> , Watanabe A, Furuya H, Sasaki K, Iwaki T. 剖検と考察を行った。臨床上皮質基底核変性症CBDと診断され、剖検にて初めてAlzheimer病(AD)と診断できた症例を経験したので報告する。発症時51歳の男性、全経過8年。物忘れ、失算、右手優位の失行(肢節運動失行、観念失行、構成失行)がみられた。画像上左側優位のびまん性脳萎縮がみられ、CBDと診断された。剖検にて左優位に大脳が萎縮していた。平野銀染色で老人斑が大脳皮質全体にわたって高頻度にみられた。
3. Elevated expression of fatty acid synthase and nuclear localization of carnitine palmitoyltransferase 1C are common among human gliomas. (FASNの発現の亢進とCPT1Cの核局在がヒトグリオーマでみられる) 査読付	共著	2014年10月	Neuropathology. 2014 Oct;34(5):465-74.	<u>Wakamiya T</u> , Suzuki SO, Hamasaki H, Honda H, Mizoguchi M, Yoshimoto K, Iwaki T. 筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った。gliomaにおける脂肪酸の代謝動態やCPT1cの機能解明の基盤とするために、免疫染色によりFASNとCPT1cの腫瘍細胞内における発現の局在を調べた。Glioma細胞株では、CPT1cは核と核周囲領域に、FASNは核周囲領域を含む細胞質に局在していた。外科標本では、IDH1変異の有無に関わらず、CPT1cが核に発現し、FASNが細胞質に発現していた。
4. Loss of hnRNPA1 in ALS spinal cord motor neurons with TDP-43-positive inclusions. (ALSでのTDP-43陽性封入体をもつ脊髄運動神経細胞でhnRNPA1の喪失) 査読付	共著	2015年2月	Neuropathology. 2015 Feb;35(1):37-43.	Honda H, Hamasaki H, <u>Wakamiya T</u> , Koyama S, Suzuki SO, Fujii N, Iwaki T. hnRNPA1に関して抗体の条件決めを行った。ALSの脊髄の運動ニューロンにおいて免疫染色でTDP-43とhnRNPA1の関係について検討を行った。skein-like inclusionをもつALSの運動ニューロンではhnRNPA1の核の染色性が低下していた。
(その他) (学会発表)				

1. 上錐体静脈梗塞の1例	2008年2月	第31回日本脳神経CI学会総会（東京）	若宮富浩 井上浩平 増岡淳 峯田寿裕 松島俊夫 症例は77歳の女性。頭痛、嘔気、ふらつきが出現し、数日の経過で歩行が困難となった。近医を受診し、頭部MRIで小脳腫瘍が疑われ、当院へ紹介された。入院時はTandem gateがややPoorだったが、その他神経学的に明らかな異状はみられなかった。 Gd造影MRIで右小脳半球深部から第4脳室を占拠するような造影部分がみられており、同病変は経過共に縮小していった。還流領域から上錐体静脈梗塞と診断した。
2. テモゾロミド耐性悪性グリオーマ動物モデルの作出	2011年5月	第29回日本脳腫瘍病理学会（東京）	若宮富浩 鈴木諭 森田愛子 岩城徹 ラットグリオーマ細胞株C6 細胞を培養上清中に500 μ Mの TMZ を7日 間添加することにより、培養上清中に浮遊してくる細胞分画(浮遊細胞)と、ほぼ増殖を停止したかに見える接着性の分画(接着細胞)を再現よく得られた。また両分画ともに TMZ 除去後に増殖能が確認できた。移植実験において、浮遊細胞、接着細胞はともにヒト glioblastoma 類似の悪性グリオーマを形成した。
3. 左側優位の萎縮を示し、皮質基底核症候群を示したAlzheimer病の剖検例	2012年6月	第31回日本脳腫瘍病理学会	若宮富浩 藤井直樹 佐々木健介 本田裕之 古谷博和 鈴木諭 岩城徹 臨床上皮質基底核変性症CBDと診断され、剖検にて始めてAlzheimer病(AD)と診断できた症例を経験したので報告する。発症時51歳の男性、全経過8年。物忘れ、失算、右手優位の失行(肢節運動失行、観念失行、構成失行)がみられた。画像上左側優位のびまん性脳萎縮がみられ、CBDと診断された。剖検にて左優位に大脳が萎縮していた。平野銀染色で老人斑が大脳皮質全体にわたって高頻度にみられた。
4. GliomanにおけるS100Pの免疫組織学的検討	2013年5月	第31回日本脳腫瘍病理学会（東京）	若宮富浩 鈴木諭 中原由紀子 本田裕之 松島俊夫 岩城徹 今回我々は非腫瘍性astrocyteと gliomaにおけるS100Pの発現に関して免疫組織学的に検討を行ったので報告する。Glioma 13例の生検標本においてS100P抗体を用いて免疫染色を行った。Gliomaではastrocytoma部分において、胞体や細胞突起に染色がみられたが、oligodendrogliomaの成分では染色がみられなかった。
5. Gliomaにおける脂肪酸代謝動態-CPT1cとFASNの細胞内局在に関する免疫組織学的検討	2014年5月	第32回日本脳腫瘍病理学会（徳島）	若宮富浩 鈴木諭 濱崎英臣 本田裕之 溝口昌広 吉本幸司 岩城徹 gliomaにおける脂肪酸の代謝動態やCPT1cの機能解明の基盤とするために、免疫染色によりFASNとCPT1cの腫瘍細胞内における発現の局在を調べた。Glioma細胞株では、CPT1cは核と核周囲領域に、FASNは核周囲領域を含む細胞質に局在していた。外科標本では、IDH1変異の有無に関わらず、CPT1cが核に発現し、FASNが細胞質に発現していた。
6. MedulloblastomaにおけるCPT1cとFASNの発現亢進	2015年5月	第33回日本脳腫瘍病理学会（高松）	若宮富浩 鈴木諭 本田裕之 溝口昌弘 吉本幸司 飯原弘二 中原由紀子 河島雅到 阿部竜也 岩城徹 medulloblastomaにおけるCPT1cとFASNの発現について検討を行った。Medulloblastoma外科標本13例のパラフィン包埋標本を用いて、CPT1cとFASNに対する免疫染色を行った。Gliomaと同様にmedulloblastomaの全症例で組織型に関わりなくCPT1cは主に核に発現し、FASNは主に細胞質に発現した
7. Coexpression of fatty acid synthase (FASN) and carnitine palmitoyltransferase 1C (CPT1c) in human gliomas ヒトグリオーマにおけるFASNとCPT1cの共発現について	2015年10月	第74回日本癌学会学術総会（名古屋）	若宮富浩 鈴木諭 本田裕之 岩城徹 溝口昌弘 吉本幸司 阿部竜也 gliomaにおける脂肪酸の代謝動態やCPT1cの機能解明の基盤とするために、免疫染色によりFASNとCPT1cの腫瘍細胞内における発現の局在を調べた。Glioma細胞株では、CPT1cは核と核周囲領域に、FASNは核周囲領域を含む細胞質に局在していた。外科標本では、IDH1変異の有無に関わらず、CPT1cが核に発現し、FASNが細胞質に発現していた。

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 吉澤 彰宏
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 生物学 医歯薬学分野		循環器内科学、ウイルス学、免疫学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1 Brain natriuretic peptide response is heterogeneous during beta-blocker therapy for congestive heart failure. (査読付) (脳性ナトリウム利尿ペプチドはうっ血性心不全に対するβ遮断薬療法中に異なった反応性を示す)	共著	平成16年8月	Journal of Cardiac Failure 2004;10:310-5.	慶應義塾大学病院循環器内科に入院した84名の慢性心不全患者(NYHA分類2度から4度、左室駆出率40%以下)がメトプロロール内服もしくはカルベジロール内服のβ遮断薬療法を受けた。左室拡張末期径・収縮末期径の減少、左室駆出率の増加が治療4週間後と16週間以降の双方において認められたが、BNP値は有意な変化が認められなかった。よって、BNP値は慢性心不全に対するβ遮断薬療法の有効性の鋭敏な指標にはならないことが示された。 Yoshizawa A, Yoshikawa T, Nakamura I, Satoh T, Moritani K, Suzuki M, Baba A, Iwanaga S, Mitamura H, Ogawa S. 本人は、筆頭著者として論文を執筆しただけでなく、病棟での実際の治療や診断も担当した。
2 Carvedilol exerts more potent antiadrenergic effect than metoprolol in heart failure. (査読付) (カルベジロールは心不全において、メトプロロールより強い抗アドレナリン効果をもたらす)	共著	平成17年10月	Cardiovascular Drugs and Therapy 2005;19:347-55.	慶應義塾大学病院循環器内科に入院した53名の慢性心不全患者(左室駆出率40%以下)を無作為にメトプロロール治療群とカルベジロール治療群に割り付け、運動中の抗アドレナリン作用を見ることで、どちらの薬剤がより効果的かを検討した。運動中のアドレナリン反応性の指標は、心拍数の増加分を血中ノルエピネフリン濃度の増加分で除した数値で表した。結果、カルベジロール治療群はメトプロロール治療群より、より強い抗アドレナリン作用を示すことが確認された。 Kohno T, Yoshikawa T, Yoshizawa A, Nakamura I, Anzai T, Satoh T, Ogawa S. 本人は、本症例の病棟での実際の治療や診断を担当した。その後の論文執筆を共同で担当した。
3 Successful treatment of recurrent intracardiac thrombus in Behçet's disease with immunosuppressive therapy (査読付) (ベーチェット病患者に認められた繰り返す心内血栓に対し免疫抑制剤治療が奏効した例)	共著	平成17年11月	Clinical and Experimental Rheumatology 2005;23:885-7.	この論文において、我々は46歳男性のベーチェット病患者で、右心房内に巨大血栓を認める症例を経験し報告した。心臓外科手術で血栓を除去した1か月後に血栓の再発を認めたが、プレドニゾン・シクロホスファミドを含む免疫抑制剤治療が、血栓の消失に対して奏功した。 Kaneko Y, Tanaka K, Yoshizawa A, Yasuoka H, Suwa A, Satoh T, Iwanaga S, Ogawa S, Ikeda Y, Hirakata M. 本人は、本症例の病棟での実際の治療や心エコーでの診断を担当した。その後の論文執筆を共同で担当した。
4 Effects of beta-blocker therapy on high sensitivity c-reactive protein, oxidative stress, and cardiac function in patients with congestive heart failure. (査読付) (うっ血性心不全患者における高感度C反応性タンパク、酸化ストレス、心機能に対するβ遮断薬の効果)	共著	平成19年6月	Journal of Cardiac Failure 2007;13:365-71	慶應義塾大学病院循環器内科に入院した52名の慢性心不全患者(左室駆出率40%以下)が無作為にメトプロロール治療群とカルベジロール治療群に割り付けられた。16週間の治療後に観察したところ、治療開始時のCRP高値群において、C反応性蛋白(CRP)の低下は、左室駆出率(LVEF)の増加と相関していることが確認された。とくにそれは、カルベジロール治療群において、認められた。この研究において、慢性心不全に対するβ遮断薬療法は炎症性マーカーの軽減に関連し、特にカルベジロールの抗酸化作用がその作用に寄与していると考えられた。 Nagatomo Y, Yoshikawa T, Kohno T, Yoshizawa A, Anzai T, Meguro T, Satoh T, Ogawa S. 本人は、本症例の病棟での実際の治療や診断を担当した。その後の論文執筆を共同で担当した。

<p>5 A pilot study on the role of autoantibody targeting the beta1-adrenergic receptor in the response to beta-blocker therapy for congestive heart failure. (査読付) (βアドレナリン受容体に対する自己抗体の役割とうっ血性心不全に対するβ遮断薬療法の反応性に関するパイロット研究)</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年4月</p>	<p>Journal of Cardiac Failure 2009;15:224-32</p>	<p>慶應義塾大学病院循環器内科に入院した82名の慢性心不全患者を無作為にメトプロロール治療群とカルベジロール治療群に割り付け、16週間の観察を行った。自己抗体は20症例に陽性であり、左室拡張末期径と左室収縮末期径、および左室駆出率の変化率は、自己抗体陽性例において、有意に大きかった。この研究では、慢性心不全に対するβ遮断薬療法は、β1アドレナリン受容体に対する自己抗体陽性例により有効であることが示唆された。 Nagatomo Y, Yoshikawa T, Kohno T, <u>Yoshizawa A</u>, Baba A, Anzai T, Meguro T, Satoh T, Ogawa S. 本人は、本症例の病棟での実際の治療や、心エコーによる診断を担当した。その後の論文執筆を共同で担当した。</p>
<p>6 Comparison of the effects of carvedilol and metoprolol on exercise ventilatory efficiency in patients with congestive heart failure. (査読付) (うっ血性患者の運動呼吸機能におけるカルベジロールとメトプロロールの効果の比較)</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年4月</p>	<p>Circulation Journal 2008;72:358-63.</p>	<p>慶應義塾大学病院循環器内科に入院した57名の慢性心不全患者（NYHA分類2度から3度、左室駆出率40%以下）を無作為にメトプロロール治療群とカルベジロール治療群に割り付けた。16週の治療後に換気量-二酸化炭素排泄量比（VE/VC02 slope）、左室駆出率（LVEF）、脳性ナトリウム利尿ペプチド（BNP）の変化を観察した。β遮断薬療法により、LVEF低値群もしくはBNP高値群においてはVE/VC02 slopeの改善が認められ、労作時呼吸困難が改選されることが確認された。またカルベジロール治療群はメトプロロール治療群より有効であることが示唆された。 Kataoka M, Satoh T, Yoshikawa T, Nakamura I, Kohno T, <u>Yoshizawa A</u>, Anzai T, Ogawa S. 本人は、本症例の病棟での実際の治療や診断を担当した。その後の論文執筆を共同で担当した。</p>
<p>7 Specific immunoadsorption therapy using a tryptophan column in patients with refractory heart failure due to dilated cardiomyopathy. (査読付) (拡張型心筋症により心不全を繰り返す患者におけるトリプトファンカラムを用いた免疫吸着療法)</p>	<p>共著</p>	<p>平成23年2月</p>	<p>Journal of Clinical Apheresis. 2011;26:1-8.</p>	<p>拡張型心筋症（DCM）患者の血中に認められる抗心筋抗体は心筋障害をもたらす、致死的不整脈を引き起こしうると考えられている。この論文では、IgG3サブクラスの免疫グロブリンを特異的に吸着するトリプトファンカラムを用いた免疫吸着療法（IA）を、EF18±2%の重症心不全を呈する16人のDCM患者に対して実施した。IA後にはBNP値の著明な低下と、6分間歩行能の著明な改善を認めた。短期的には、IAはDCMによる重症心不全患者の症状改善に有効であることが確認された。 Nagatomo Y, Baba A, Ito H, Naito K, <u>Yoshizawa A</u>, Kurita Y, Nakamura I, Monkawa T, Matsubara T, Wakabayashi Y, Ogawa S, Akaishi M, Yoshikawa T 本人は、本症例の病棟での実際の治療や、心エコーによる診断を担当した。その後の論文執筆を共同で担当した。</p>
<p>8 Detection of periodontal bacteria in thrombi of patients with acute myocardial infarction by polymerase chain reaction. (査読付) (急性心筋梗塞患者の血栓中の歯周病菌のPCRによる検出)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年2月</p>	<p>American Heart Journal 2012;163:164-7.</p>	<p>東京歯科大学市川総合病院に緊急カテーテル治療となったST上昇型急性心筋梗塞患者、連続81例を対象に、責任病変の血栓を吸引カテーテルで採取した。血栓からの歯周病菌の検出をPCR法により実施したところ、血栓検体の19.7%からAggregatibacter actinomycetemcomitansが、3.4%からPorphyromonas gingivalisが、2.3%からTreponema denticolaが検出された。この結果は、冠動脈閉塞を起こす動脈プラークに潜在的に存在し、プラークの炎症や不安定化に寄与している可能性がある。 Ohki T, Itabashi Y, Kohno T, <u>Yoshizawa A</u>, Nishikubo S, Watanabe S, Yamane G, Ishihara K. 本人は、同症例中25例前後を担当し、緊急カテーテル時の血栓収集とその後の治療に携わった。その後の論文執筆にも共同で参画した。</p>

<p>9 Autoimmunity against M₂ muscarinic acetylcholine receptor induces myocarditis and leads to a dilated cardiomyopathy-like phenotype. (査読付) (M₂ムスカリン性受容体に対する自己免疫は心筋炎を誘導し、拡張型心筋症様の表現型を呈する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年5月</p>	<p>European Journal of Immunology 2012;42:1152-63.</p>	<p>拡張型心筋症 (DCM) 患者の血中にはしばしば、抗心筋自己抗体が認められるが、その役割は不明である。本論文では心筋表面に強く発現するM₂ムスカリン性受容体 (M₂R) に対する自己免疫を誘導し、自己免疫性心筋炎を実験的にマウスで作成した。M₂Rノックアウトマウスに、同受容体タンパクを繰り返し皮下注射し、脾臓細胞をM₂R野生型マウスに移入したところ、心臓へのCD4⁺ 8T細胞の浸潤がみられ、心筋炎が誘導された。抗M₂R抗体は心筋細胞のCa²⁺トランジェントを変化させDCM様の心拡大をもたらすことが確認された。この手法が自己免疫性心筋炎モデルの1つになると考えられた。 <u>Yoshizawa A</u>, Nagai S, Baba Y, Yamada T, Matsui M, Tanaka H, Miyoshi S, Amagai M, Yoshikawa T, Fukuda K, Ogawa S, Koyasu S. 本人は、筆頭著者として論文すべての実験・解析と執筆に関わった。</p>
<p>10 Left atrial myxoma detected after an initial diagnosis of polymyalgia rheumatica. (査読付) (リウマチ性多発筋痛症の診断後に認められた左房粘液種)</p>	<p>共著</p>	<p>平成26年3月</p>	<p>Intern Medicine 2014;53:441-4.</p>	<p>リウマチ性多発筋痛症と診断され、東京歯科大学市川総合病院に入院し、グルココルチコイドによる治療中、左心房内に粘液種が認められた69歳の患者の報告である。本症例において、グルココルチコイド治療は、粘液種による症状を軽減してしまうため、診断の遅れにつながる可能性がある。 <u>Mano Y</u>, <u>Yoshizawa A</u>, Itabashi Y, Ohki T, Takahashi T, Mori M, Shin H, Tanaka Y. 本人は、本症例の病棟での実際の治療や、心エコーによる診断を担当した。その後の論文執筆を共同で担当した。</p>
<p>11 Role of non-electrocardiogram-gated contrast-enhanced computed tomography in the diagnosis of acute coronary syndrome. (査読付) (急性冠症候群における心電図非同期造影CTの役割)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年1月</p>	<p>Heart and Vessels 2015;30:1-8</p>	<p>東京歯科大学市川総合病院で、急性大動脈解離や急性肺血栓塞栓症を除外する目的のため、心電図非同期造影CTが実施された連続154例を対象に、左心室の造影遅延に関する解析が行われた。43例に造影遅延が認められ、そのうちの26例は急性心筋梗塞と診断された。造影遅延が認められなかった残りの111例からは、わずかに2例のみが緊急カテーテル治療を受けた。心電図非同期造影CTによる左心室造影遅延の所見は、急性冠症候群の診断や緊急カテーテル検査の決定に際しより多くの情報を与えることが明らかとなった。 <u>Mano Y</u>, Anzai T, <u>Yoshizawa A</u>, Itabashi Y, Ohki T. 本人は、登録症例のおよそ4分の1の患者の、救急診療や緊急カテーテル治療にあたり、その後の論文執筆を共同で担当した。</p>
<p>12 TCR-pMHC encounter differentially regulates transcriptomes of tissue-resident CD8 T cells. (査読付) (T細胞受容体とペプチドMHCとの会合により、組織常在性CD8T細胞のトランスクリプトームの制御は異なる)</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年1月</p>	<p>European Journal of Immunology 2018;48:128-150</p>	<p>この論文では、マウスのインフルエンザ感染後に現れる2つの免疫優勢エピトープ (NP366-374/DbとPA224-233/Db) 特異的なT細胞を用いて、肺組織常在性CD8T細胞のT細胞受容体 (TCR) とペプチドMHCの相互作用の役割をトランスクリプトーム解析で検討した。NP366-374 /Db特異的T細胞はエフェクター細胞に特徴的な遺伝子群をより多く発現するのに対して、PA224-233/Dbはメモリー細胞に特徴的な遺伝子群の発現をより多く示した。組織常在性T細胞におけるTCRと異なるペプチドMHCの相互作用は、CD8T細胞の機能や性質に遺伝子レベルで大きな相違をもたらすことが明らかとなった。 <u>Yoshizawa A</u>, Bi K, Keskin DB, Zhang G, Reinhold B, Reinherz EL. 本人は、筆頭著者として論文すべての実験・解析と執筆に関わった。</p>
<p>13 Regulation of thymocyte trafficking by Tagap, a GAP domain protein linked to human autoimmunity. (査読付) (GAPドメインタンパクのTagapによる胸腺細胞の移動の制御は、ヒトの自己免疫に関連している)</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年6月</p>	<p>Science Signaling 2018;11 (534)</p>	<p>この論文では、sema3E/plexinD1リガンド/受容体複合体によるTagapを介するシグナリングが、胸腺細胞の胸腺皮質へのインテグリンを介する接着を弱めることを示した。そしてそのシグナリングは胸腺細胞の胸腺髄質への移動を促進し、自己反応性細胞のネガティブセレクションをもたらす。TAGAP遺伝子の多様性が胸腺細胞の髄質への移動に変化を起こすことで自己免疫疾患のリスクを調節する。 <u>Duke-Cohan JS</u>, <u>Ishikawa Y</u>, <u>Yoshizawa A</u>, <u>Choi YI</u>, <u>Lee CN</u>, <u>Acuto O</u>, <u>Kissler S</u>, <u>Reinherz EL</u>. 本人は、当論文のFig. 4に関する実験・解析とそれに該当する本文を担当した。</p>

<p>14 The T Cell Antigen Receptor α Transmembrane Domain Coordinates Triggering through Regulation of Bilayer Immersion and CD3 Subunit Associations. (査読付) (T細胞受容体α細胞膜内貫通領域は細胞膜内への没入とCD3サブユニットの会合に協調して働く)</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年11月</p>	<p>Immunity 2018;49:829-841</p>	<p>T細胞受容体 (TCR) の細胞膜貫通領域のαサブユニットの2つのらせん構造が大きく動くことが、核磁気共鳴法 (NMR) を用いて確認された。TCRとペプチドMHCの会合する際の物理的な力は、T細胞の活性化をもたらすが、それはそれらの引き合う力によって生まれ、塩基の側鎖位置の変化はTCR複合体と細胞膜の形態を変化させ、TCRα β鎖とCD3分子の会合を弱くする。 Brazin KN, Mallis RJ, Boeszoermentyi A, Feng Y, <u>Yoshizawa A</u>, Reche PA, Kaur P, Bi K, Hussey RE, Duke-Cohan JS, Song L, Wagner G, Arthanari H, Lang MJ, Reinherz EL. 本人は、当論文のFig. 3に関する実験・解析それに該当する本文を担当した。</p>
<p>(その他) (総説) 1 不整脈の診断 症状・身体所見からわかること 2 心筋症 3 心不全 4 組織恒常性の維持にかかわる自然リンパ球の多様な制御機構</p>	<p>共著 共著 共著 共著</p>	<p>平成14年7月 平成14年10月 平成14年10月 令和元年5月</p>	<p>医学書院 Medicina 第39巻 第7号 日本医師会雑誌特別号 第128巻 第8号 日本医師会雑誌特別号 第128巻 第8号 羊土社 実験医学増刊 p108-113, Vol 37, No7, 2019</p>	<p>不整脈の症状の程度や性質は、疾患の重症度と必ずしも関連がない。不整脈による症状として最も頻度が多いものが動悸であり、詳細な問診と臨床症状の把握により、不整脈の種類を特定することが、ある程度可能である。不整脈の症状は動悸だけに限らず、めまいや失神も重要で、それが突然死の前兆となることもある。器質的心疾患や他の基礎疾患の存在を念頭に置くことも重要である。 <u>吉澤彰宏</u>、三田村秀雄 本人は、筆頭著者として全ての部分の執筆を担当した。 慢性心不全の一因となる心筋症 (拡張型心筋症、肥大型心筋症、拘束型心筋症、不整脈源性右室心筋症、左室緻密化障害) の診断につき、概説した。 <u>吉川勉</u>、<u>吉澤彰宏</u> 本人は、筆頭著者とともに共同執筆した。 心不全の病態生理、基礎疾患、各種診断法、治療、予後につき概説した。 <u>吉川勉</u>、<u>吉澤彰宏</u> 本人は、筆頭著者とともに共同執筆した。 自然免疫系において、ヘルパーT細胞サブセットのサイトカイン産生パターンを示す自然リンパ球 (innate lymphoid cell, ILC) が次々と報告されてきた。ILCは、その多くが組織常在型細胞 (tissue-resident cell) であり、組織の構成成分の一角をなす細胞集団と考えられ、組織の恒常性維持に深く関与することがわかってきた。この10年間ほどで蓄積されたILCに関連する新知見は、感染排除・炎症などの古典的な免疫機構にとどまらず、代謝、組織リモデリング・修復、神経内分泌系やサーカディアンリズムによる制御など多岐にわたる。それらの新しい知見につき概説した。 <u>吉澤彰宏</u>、<u>茂呂和世</u> 本人は、筆頭著者として、全てを執筆した。</p>

<p>(その他) (学会発表)</p> <p>1. Brain Natriuretic Peptide is a Predictor of Efficacy, but not a Sensitive Marker during Beta-Blocker Therapy for Congestive Heart Failure. (脳性ナトリウム利尿ペプチドはうっ血性心不全に対するβ遮断薬療法の効果を予測するが、鋭敏な指標にはならない)</p>	-	平成14年11月	American Heart Association Scientific Meeting, Chicago	<p>慶應義塾大学病院循環器内科に入院し、メトプロロール内服もしくはカルベジロール内服のβ遮断薬療法を受けた84名の慢性心不全患者 (NYHA分類2度から4度、左室駆出率40%以下) の4週間後 (early phase) と16-48週後 (late phase) の左室拡張末期径・収縮末期径、左室駆出率の変化について検討した。early phase, late phase双方において上記指標の改善が認められたが、BNP値には有意な変化が認められなかった。BNP値の変化は慢性心不全に対するβ遮断薬療法の有効性の鋭敏な指標にはならないことが示された。 Yoshizawa A, Yoshikawa T, Anzai T, Satoh T, Ogawa S. 本人は、筆頭著者として発表を行っただけでなく、病棟での実際の治療や診断も担当した。</p>
<p>2. Brain Natriuretic Peptide Predicts of Clinical Outcome during Beta-Blocker Therapy for Congestive Heart Failure. (脳性ナトリウム利尿ペプチドによるうっ血性心不全に対するβ遮断薬療法後の臨床転帰の予測)</p>	-	平成15年3月	第67回日本循環器学会学術総会, 福岡	<p>慶應義塾大学病院循環器内科に入院した84名の慢性心不全患者 (NYHA分類2度から4度、左室駆出率40%以下) がメトプロロール内服もしくはカルベジロール内服のβ遮断薬療法を受けた。左室拡張末期径・収縮末期径の減少、左室駆出率の増加が治療4週間後と16週間以降の双方において認められた。また治療開始時のBNP値によって区分した4群全てで、左心室機能の改善が認められたがBNP値に有意な変化は認められなかった。BNP値の変化は慢性心不全に対するβ遮断薬療法の有効性の鋭敏な指標にはならないことが示された。 Yoshizawa A, Yoshikawa T, Baba A, Moritani K, Suzuki M, Satoh T, Yokozuka H, Maruyama A, Mitamura H, Ogawa S. 本人は、筆頭著者として発表を行っただけでなく、病棟での実際の治療や診断も担当した。</p>
<p>3. Experimental autoimmune myocarditis and myocardial dysfunction induced by autoantibody against muscarinic acetylcholine receptor type 2 in mice. (2型ムスカリン性受容体に対する自己抗体によって誘導された実験的自己免疫心筋炎と心筋障害)</p>	-	平成15年12月	第33回日本免疫学会総会・学術集会, 福岡	<p>心筋表面に強く発現するM2ムスカリン性受容体 (M2R) に対する自己免疫性心筋炎を実験的にマウスで作成した。M2Rノックアウトマウスに、同受容体タンパクを繰り返し皮下注射し、脾臓細胞をM2R野生型マウスに移入したところ、心臓へのCD4⁺ 8T細胞の浸潤が認められ、その周囲の心筋壊死や心筋細胞の形態学的変化をもたらした。そして、そのレシピエントマウスの血中には高い抗体価を持つ抗M2R抗体が認められた。 Yoshizawa A, Nagai S, Yamada T, Yoshikawa T, Ogawa S, Koyasu S. 本人は、筆頭著者として発表を行った。実際の実験もすべて本人が行った。</p>
<p>4. BALB/c PI3K p85α deficient mice represent lung disease similar to pulmonary alveolar proteinosis. (PI3キナーゼp85αサブユニットを欠損したBALB/cマウスは肺胞蛋白症に類似した肺病変を示す)</p>	-	平成24年12月	第41回日本免疫学会総会・学術集会, 神戸	<p>BALB/c PI3K p85αサブユニット欠損マウスは無菌状態で肺に著しい炎症を起こす。サーファクタント蛋白が肺胞内に蓄積し、それを貪食した泡沫化マクロファージの著しい集積が認められた。この病理所見像は肺胞蛋白症に類似している。肺胞蛋白症では抗GM-CSF中和抗体が存在することから同マウスの活性化T細胞のGM-CSF産生量を検討したところ、野生型マウスと比較して産生量が著減していた。GM-CSFは肺胞マクロファージの貪食能、分解能に関わるため、PI3KがGM-CSFの産生を調節しているのなら、PI3K欠損がこの病変を惹起する可能性がある。 Yoshizawa A, Nagai S, Baba Y, Yamada T, Koyasu S. 本人は、筆頭著者として発表を行った。実際の実験もすべて本人が行った。</p>
<p>5. Autoimmunity against M2 muscarinic acetylcholine receptor alters Ca²⁺ homeostasis and leads to a dilated cardiomyopathy-like phenotype. (M2ムスカリン性受容体に対する自己免疫は、カルシウムイオン恒常性を変化させ、拡張型心筋症様の表現型をもたらす)</p>	-	平成25年3月	第77回日本循環器学会学術総会, 横浜	<p>心筋表面に強く発現するM2ムスカリン性受容体 (M2R) に対する自己免疫性心筋炎を実験的にマウスで作成した。心筋炎が誘導されたマウスから抽出された抗M2R抗体を、培養心筋細胞に添加したところ細胞カルシウム電流の振幅を低下させた。また心筋炎マウスの心臓は、左室拡張末期径の増加、左室収縮能の低下、活動電位持続時間の延長を示し、それらは拡張型心筋症の心臓に特徴的である。 Yoshizawa A, Nagai S, Baba Y, Yamada T, Matsui M, Tanaka H, Miyoshi S, Amagai M, Yoshikawa T, Fukuda K, Ogawa S, Koyasu S. 本人は、筆頭著者として発表を行い、全ての実験に携わった。</p>

教 育 研 究 業 績 書

氏名 ZHAO YANJIE

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
医療福祉系 医療福祉学分野 保健医療学		医療福祉学、医療福祉経営学、社会福祉学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1中国民政業界基準「 老年人能力評価」 (学術論文)	共著	平成25年8月	中華人民共和國民政部	中国高齢人口の激増に伴い、介護ニーズの 需要が大きくなっていた。中国民政部がア メリカ、日本、オーストラリア、イギリス など国の高齢者に対する介護認定方法を基 づき、「老年人能力評価」基準を作成し た。本基準は、中国高齢者の要介護認定の 基準を認定され、介護政策の研究とサービ ス提供体系の構築を参考標準として、認め られた。 共同制作のため、担当抽出は不可。

教育研究業績書

氏名 Le Tran Ngoan

研究分野		研究内容のキーワード		
応用保健科学、予防医学、ヘルスケア		がん疫学、労働衛生、医学、気候変動、保健		
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(book) 1 Reference book Title:Stomach cancer in Vietnam:Epidemiological characteristics and some related factors.	co-author	15/6/2011	Medical Publish House	Summary:Natural history of stomach cancer in the world and in Vietnam was reviewed.Stomach cancer incidence and mortality were presented.Related factors of occupation, BML, social economic status and its relation with stomach cancer were presented.The association between host factors of blood type, polymorphisms of GSTM1 and CYP1A1 with stomach cancer were stated.Environmental factors of diet, lifestyle, Helicobacter pylori infection and their role in developing stomach cancer were also examined and presented in the book.Book Editor; Nguyen Ngoc Bich.Authors:Nguyen Ngoc Bich, Le Tran Ngoan , Tran Hieu Hoc.I contribute to conduct a case-control study, data handle, data analysis and presentation and wrote and revised the book for the final version to print.
(academic paper) 1 Title:Water-pipe tobacco smoking and gastric cancer risk among Vietnamese men. Peer-reviewed	co-author	29/2/2016	PLOS ONE (Submitted manuscript)	Abstract: Background:The association of water-pipe tobacco (WPT) smoking with gastric cancer (GC) risk was suggested.Methods:A hospital-based case-control study was conducted.Results:The GC risk significantly decreased at the highest consumption group of citrus fruits (OR=0.6, 95%CI=0.4-0.8, P for trend = 0.002) although raw vegetable consumption was not associated with GC risk.Referring to never smokers, GC risk significantly increased in current WPT smokers (OR=1.8, 95%CI=1.3-2.4), and it was more evident in exclusively WPT smokers (OR=2.7, 95%CI=1.2-6.5).The GC risk tended to increase with daily frequency (P for trend = 0.144) and duration (P for trend = 0.154) of WPT smoking.The GC risk of those who started smoking WPT before the age of 25 was also high (OR=3.7, 95%CI=1.2-11).Neither cigarette smoking nor alcohol drinking was related to GC risk.Conclusion:The present findings revealed that WPT smoking increased GC risk in Vietnamese men. Authors: Hang T M Lai, Chihaya Koriyama, Shinkan Tokudome, Hoc H Tran, Long T Tran, Athira Nandakumar, Suminori Akiba and Ngoan T Le 1 (1Corresponding author).I am a principle investigator of the study in Vietnam.It was a joint project and cannot extract.

2 Peer-reviewed	co-author	3/12/2015	Environmental Health Perspectives (Accepted paper)	<p>Title:A Prospective Study of Meat Mutagens and Colorectal Cancer. Abstract:Backgrounds:Heterocyclic amines (HCAs) in cooked meats may play a role in colorectal cancer (CRC) development.Methods:Utilizing prospective data from 29,615 men in the Health Professional Follow-up Study and from 65,785 women in the Nurses' Health Study, we examined the association of intakes of the HCAs 2-amino-3,8-dimethylimidazo quinoxaline (MeIQx), 2-amino-1-methyl-6-phenylimidazo pyridine (PhIP), 2-amino-3,4,8-trimethylimidazo (DiMeIQx) and MDM with CRC risk.Estimates for both cohorts were pooled using random-effects meta-analysis.Results:Between 1996 and 2010, 418 male and 790 female CRC cases were identified.Meat mutagen intake was not statistically significantly associated with risk of CRC [highest vs. lowest quintile, pooled Hazard Ratio (HR) (95% Confidence Interval (CI) for MeIQx:1.12 (0.93-1.34), P for trend 0.23; PhIP:1.10 (0.90-1.33), P for trend 0.35; MDM:1.03 (0.86-1.24) P for trend 0.75] or subtypes of CRC defined by tumor location (proximal, distal or rectum).When analyzed by source of meat, PhIP from red, but not from white meat, was positively associated with proximal cancers [HR (95% CI) per standard deviation increase of log-transformed intake: for PhIP red meat, 1.11 (1.02-1.21), P for trend 0.02; for PhIP white meat, 1.00 (0.93-1.09), P for trend 0.90].Conclusions:Our findings did not provide evidence that higher intake of heterocyclic amines per se substantially increased risk of CRC.Our results for PhIP from red, but not from white meat, need to be confirmed in other studies.Authors:Ngoan Tran Lei, Fernanda Alessandra Silva Michels, Mingyang Song, Xuehong Zhang, Adam M. Bernstein,Edward Giovannucci, Charles S. Fuchs, Shuji Ogino, Andrew T. Chan, Rashmi Sinha, Walter Willett, Kana Wu. (ICorresponding author).I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>
3 Peer-reviewed	co-author	25/8/2015	PLOS ONE 10(8): e0135959. doi:10.1371/journal.pone.0135959. August 25, 2015	<p>Title:Processed and Unprocessed Red Meat and Risk of Colorectal Cancer:Analysis by Tumor Location and Modification by Time. Abstract:In combined cohorts, there were 2,731 CRC cases (1,151 proximal colon, 816 distal colon, and 589 rectum).In pooled analyses, processed red meat was positively associated with CRC risk (per 1 serving/day increase:HR = 1.15, 95% CI:1.01-1.32; P for trend 0.03) and particularly with distal colon cancer (per 1 serving/day increase; HR = 1.36; 95% CI:1.09-1.69; P for trend 0.006).Recent consumption of processed meat (within the past 4 years) was not associated with distal cancer.Unprocessed red meat was inversely associated with risk of distal colon cancer and a weak non-significant positive association between unprocessed red meat and proximal cancer was observed (per 1 serving/day increase: distal HR = 0.75; 95% CI:0.68-0.82; P for trend <0.001; proximal HR = 1.14, 95% CI:0.92-1.40; P for trend 0.22).Thus, in these two large cohorts of US health professionals, processed meat intake was positively associated with risk of CRC, particularly distal cancer, with little evidence that higher intake of unprocessed red meat substantially increased risk of CRC.Future studies, particularly those with sufficient sample size to assess associations by subsites across the colon are needed to confirm these findings and elucidate potentially distinct mechanisms underlying the relationship between processed meat and subtypes of unprocessed red meat with CRC.Authors:Adam M. Bernstein, Mingyang Song, Xuehong Zhang, An Pan, Molin Wang, Charles S. Fuchs, Le Tran Ngoan, Andrew T. Chan, Walter C. Willett, Shuji Ogino, Edward L. Giovannucci, and Kana Wu.It was a joint project and cannot extract.</p>

<p>4 Title:Evaluation of the Vietnamese A6 Mortality Reporting System:All Causes of Death. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>26/8/2015</p>	<p>Asia Pac J Public Health, 2015. 27:733-742</p>	<p>Abstract:There has been no systematic evaluation of Viet Nam' s A6 mortality reporting system. An evaluation was undertaken in 3 provinces in Viet Nam. Deaths identified in the A6 system were compared with deaths identified by an independent consensus panel to determine the percentage completeness of the A6 system. Verbal autopsies (VAs) were conducted for all identified deaths from the consensus panels, and the sensitivity and positive predictive value of the A6 system was assessed. The sensitivity of the A6 system varied depending on the cause of death, with the sensitivity of the system being excellent for injury (sensitivity = 75.4%), cancer (sensitivity = 66.9%), and circulatory diseases (sensitivity = 63.1%). The A6 mortality reporting system performs well in relation to its completeness and classification of 3 leading causes of Death-namely, circulatory disease, cancer, and injury. With further enhancements and ongoing support from government and donor agencies, the A6 system will be a valuable resource. Authors:Stevenson, M., Hung, D. V., Hoang, T. H., Mai Anh, L., Nguyen Thi Hong, T., and Ngoan, L. T. It was a joint project and cannot extract.</p>
<p>5 Title:Urinary 1-hydroxypyrene and 8-hydroxydeoxyguanosine levels among coke-oven workers for 2 consecutive days. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>16/1/2014</p>	<p>J Occup Health 2014; 56:178-185</p>	<p>Abstract: Objectives: This study evaluated the levels of exposure to polycyclic aromatic hydrocarbons (PAHs) and their relationship with oxidative DNA damage among Vietnamese coke-oven workers. Methods: We collected urine from 36 coke-oven workers (exposed group) at the beginning and end of the shift on 2 consecutive days. We also collected urine from 78 medical staff (control group). Information was collected by questionnaire about smoking status, drinking habit, and working position. Urinary 1-hydroxypyrene (1-OHP) and 8-hydroxydeoxyguanosine (8-OH-dG) were measured using HPLC. All statistical analyses were performed with SPSS version 19. Results: Urinary 1-OHP was significantly higher in the coke-oven workers than in the control group ($p < 0.05$). Top-oven workers had the highest levels of internal exposure to PAHs, followed by side-oven and then bottom-oven workers (5.41, 4.41 and 1.35 ng/mg creatinine, respectively, at the end of the shift on day 2). Urinary 8-OH-dG was significantly higher in top- and side-oven workers at the end of the shift on day 2 (4.63 and 5.88 ng/mg creatinine, respectively) than in the control group (3.85 ng/mg creatinine). Based on a multi-regression analysis, smoking status had a significant effect on urinary 8-OH-dG ($p = 0.049$). Urinary 1-OHP tended to have a positive correlation with urinary 8-OH-dG ($p = 0.070$). Conclusions: Vietnamese coke-oven workers were exposed to PAHs during their work shift. Urinary 1-OHP exceeded the recommended limit, and elevated oxidative DNA damage occurred in top- and side-oven workers on the second day of work. A tendency for positive correlation was found between urinary 1-OHP and urinary 8-OH-dG. Authors: Nguyen TTU, Kawanami S, Kawai K, Kasai H, Li YS, Inoue J, Ngoan LT, Horie S. It was a joint project and cannot extract.</p>

<p>6 Title: The etiologic role of human papillomavirus in penile cancers in penile cancers. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>2013/8/1</p>	<p>Br J Cancer 2013; 108:229-33.</p>	<p>Abstract: Background: We investigated the aetiologic role of human papillomavirus (HPV) in 120 penile squamous cell carcinomas (PSCCs) from Vietnam. Methods: Human papillomavirus DNA was detected by PCR using SP10 primers and a primer set targeting HPV-16 E6. The INNO-LiPA HPV genotyping kit was used to determine genotype. Human papillomavirus-16 viral load and physical status were determined by real-time PCR. P16INK4A protein expression was investigated by immunohistochemistry. Results: Human papillomavirus DNA was detected in 27 of 120 (23%) PSCCs. The most frequently detected genotype was HPV-16 (24 of 27 cases, 89%). In 16 of 18 (89%) HPV-16-positive cases, the HPV DNA was considered to be integrated into the host genome. The geometric mean of the HPV-16 viral load was 0.4 copies per cell. P16INK4A overexpression was significantly related to PSCCs infected with high-risk HPV (P=0.018) and HPV-16 copy numbers (P=0.001). Conclusion: Human papillomavirus-16 DNA integration and p16INK4A overexpression in high-risk HPV detected PSCCs suggested an aetiologic role of high-risk HPV in the development of PSCCs. Authors: Do HT, Koriyama C, Khan NA, Higashi M, Kato T, Ngoan LT, Matsushita S, Kanekura T. It was a joint project and cannot extract.</p>
<p>7 Title: All causes of mortality in Ha Noi City, Viet Nam. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/12/2012</p>	<p>Southeast Asian J. of Sciences 1:223-233. 2012</p>	<p>Abstract: A cross-sectional survey-based for all causes of mortality was performed for all 233 communes, and then identified eligible communes for both completeness and accuracy in the Hanoi city. Age-standardized mortality rates per 100,000 for all causes were 683.8 in male and 294 for female. For the 18 ICD-10 groups of diseases, age-standardized mortality rates per 100,000 for the five most common groups of diseases were 220.7, 140.2, 90.1, 41.4, and 19.4 for CVD, cancer, respiratory, injury, and infectious, respectively in males, and they were 105.0, 49.1, 43.1, 11.0, and 6.6 for CVD, cancer, respiratory, injury, and digestive, respectively in females. The proportion of deaths due to the three leading groups of CVD, cancer and injury was 60% in males and 54% in females. Authors: Ngoan LT, Truong LD, Linh LT, Chuong LH, Tuan N, Thuong NV, Hiep NX. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and</p>
<p>8 Title: Maternal and child mortality in Ha Noi City, Viet Nam. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/12/2012</p>	<p>Southeast Asian J. of Sciences 1: 234-243. 2012</p>	<p>Abstract: A cross-sectional survey-based for maternal, newborn and child mortality was performed for all 233 communes, and then identified eligible communes for both completeness and accuracy in the Hanoi city. Mortality rates were 1.29 per 1,000 live births for newborn and 4.38 per 100,000 live births during 2005-2010 for maternal mortality, U3MR 0.67 per 1,000 live births; and U5MR 0.44 per 1,000 live births. Rural districts had significantly increased risk of newborn and infant mortality. A decreased time trend of newborn and infant mortality has been detected between 2005-2006 and 2009-2010 in Hanoi city Authors: Ngoan LT, Truong LD, Linh LT, Chuong LH, Tuan N, Thuong NV, Hiep NX. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>

<p>9 Title: Evaluation of the Vietnamese A6 mortality reporting system: injury as a cause of death. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/2/2012</p>	<p>Inj. Prev 18:360-4. 2012.</p>	<p>Abstract:BACKGROUND: Despite the fact that the A6 mortality reporting system has been operating for almost 20 years in Vietnam, there has been no systematic evaluation of the system. This study assesses the completeness, sensitivity and positive predictive value of the system in relation to injury related mortality. METHODS: Evaluation of the A6 system was undertaken in three (geographically distributed) provinces in Vietnam. Deaths identified in the A6 system were compared with deaths identified by an independent consensus panel to determine the per cent completeness of the A6 system. Verbal autopsies (VA) were conducted for all identified deaths from the consensus panels, and the sensitivity and positive predictive value of the A6 system were assessed using the VAs as the reference. RESULTS: 5273 deaths were identified from the A6 system with a further 340 cases identified by the independent consensus panel (total n=5613). Injury related deaths accounted for 13.6% (n=763) of all deaths with an overall injury mortality rate of 55.3 per 100 000 person years. The per cent completeness of the A6 system in relation to injury deaths was 93.9% with a sensitivity of 75.4%, specificity of 98.4% and positive predictive value of 88.4%. CONCLUSIONS: The A6 mortality reporting system is embedded within the commune health system and is the lead mortality reporting system for the Ministry of Health. The system performs well in relation to its completeness and classification of injury related deaths. With further enhancements and ongoing support from government and donor agencies, the A6 system will be a valuable resource for identifying and planning preventive strategies targeting the leading causes of injury related deaths in Vietnam. Authors: Stevenson MR, Ngoan LT, Hung DV, Huong Tu NT, Mai AL, Ivers RQ, Huong HT. It was a joint project and cannot extract.</p>
<p>10 Title: Survey-based cancer mortality in the Lao PDR, 2007-08. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/6/2011</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 12:2495-8. 2011</p>	<p>Abstract:BACKGROUND: The Lao PDR is a landlocked country with 5,920,000 inhabitants for which very few epidemiological studies on cancer have been performed. The aim of the present study was to examine cancer mortality in 2007-2008. METHODS: A descriptive cancer epidemiology protocol was designed with a data collection form and guideline for both demographics and list of all deaths from all 757 local Health Centers of 17 provinces/cities. Five indicators, name, age, sex, date of death and the cause of death (ICD-10), were collected for each case. The age-specific cancer mortality rate and ASRs per 100,000 were estimated. RESULTS: There were 448 cancer cases reported from Health Centers within 7 of 17 provinces/cities. Number of person-years was 654,459 for the two-year period. Cancer mortality rates of all sites (ASR) were 116.7 and 97.2 per 100,000 in males and females, respectively. The five most common cancers causing mortality per 100,000 were liver (52.2), followed by colorectal (19.0), lung (17.3), stomach (6.9), and leukemia-lymphoma (7.2) in males and liver (28.4); followed by colorectal (19.0), lung (14.0), cervical uteri (9.2) and stomach (7.1) in females. CONCLUSIONS: Liver and colorectal cancers were the first and second most common, respectively, in both males and female Authors: Nguyen TL, Nguyen DC, Nguyen TH, Vu TT, Lai TMH, Le TL, Boupha B, Sengsounthone L, Sengngam K, Akiba S, Hoang TT, Le HC, Ngoan LT. It was a joint project and cannot extract.</p>

<p>11 Title: Cooking temperature, heat-generated carcinogens, and the risk of stomach and colorectal cancers. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/2/2009</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 10:83-6. 2009</p>	<p>Abstract:BACKGROUND:Food change due to cooking temperature and unrecognized heat-formed chemical carcinogens may impact on the risk of stomach and colo-rectal cancers.To test this hypothesis a case-control study was performed.METHODS:A total of 670 cases of stomach and colo-rectal cancers matched with 672 hospital controls for sex and +/-5 years age admitted to three hospitals in Hanoi city in the North Viet Nam from October 2006 to September 2007 were the subjects.Five levels of food change due to cooking temperature were based on food color; white, pale yellow, yellow, dark yellow, and burnt.We asked study subjects to themselves report which of these five colors was their preferable intake before the onset of disease.The present study included; fried fishes-meats-eggs-potato-tofu; grilled foods; roasted foods; sugar, bread, heated wheat, and biscuits.These were cooked at temperatures as high as from 165 to 240 degrees C, based on the literature.Adjusted estimation of odds ratio was conducted controlling for possible confounding factors using STATA 8.0.RESULTS:A high intake of roasted meats, bread and biscuit significantly increased the risk of cancer as much as OR= 1.63, 95%CI= 1.04-2.54; OR= 1.40, 95%CI= 1.03-1.90; OR= 1.60, 95%CI= 1.03-2.46 with probabilities for trend = 0.029, 0.035, and 0.037, respectively.For exposure among controls:529 (79%) were not exposed at all to roasted meats; 449 (67%) were not exposed at all to bread; and 494 (74%) were not exposed at all to biscuit.CONCLUSIONS:Observation of food change due to cooking temperature based on color is practically feasible for detecting associations with risk of developing cancer.Authors:Ngoan LT, Thu NT, Lua NT, Hang LT, Bich NN, Hieu NV, Quyet HV, Tai le T, Van do D, Khan NC, Mai le B, Tokudome S, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>
<p>12 Title:Cancer epidemiology in mainland South-East Asia - past, present and future. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>2008</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 11 Suppl 2: 67-80. 2008</p>	<p>Abstract:The countries of mainland South-East Asia, Myanmar, Thailand, Laos, Cambodia and Viet Nam, share a long history of interactions and many cultural similarities, as well as geographical contiguity.They therefore can be usefully examined as a group when considering measures for control of cancer and other non-communicable diseases.Liver cancer is consistently found at higher incidence than most other parts of Asia, with lung cancer as the other most important neoplasm in males.In females cervical and breast cancer about equally predominate, throughout.However, there are also major differences, particularly with regard to stomach and nasopharyngeal cancer, only found at relatively high incidence in Viet Nam.The present review was conducted to gather together registry data on cancer prevalence and epidemiological findings cited in PubMed in order to obtain as comprehensive picture as possible of the present status.It is hoped that future cooperation across the region will facilitate development of coordinated cancer control programs to reduce the burden.Authors:Moore MA, Attasara P, Khuhaprema T, Ngoan LT, Nguyen TH, Raingsey PP, Sriamporn S, Sriplung H, Srivanatanakul P, Bui DT, Wiangnon S, Sobue T. It was a joint project and cannot extract.</p>

<p>13 Title:Development of a semi-quantitative food frequency questionnaire for dietary studies-focus on vitamin C intake. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/9/2008</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 9:427-32. 2008</p>	<p>Abstract:Because these are beneficial factors acting against cancer development at many sites, the absence of food items selected by SQFFQ may result in a poor database regarding possible confounding factors.For futher clarification we then focused on vitamin C contributions of Vietnamese food and analyzed data of the National Nutritional Household Survey in 2000:7,686 households throughout the country (vitamin C intake status) and 158 households with 741 persons of the population of Hanoi city (individual food items contributing to vitamin C).Direct interview using a validated questionnaire with an album of current Vietnamese food items-recipes and weighing checks was conducted to obtain information regarding all types of food intake over the last 24-hours.Contribution analysis using the Nutritive Composition Table of Vietnamese Foods, revision 2000, and stepwise regression analysis was applied.Average intake adjusted by ages of vitamin C per person per day was estimated.In total, the study subjects were found to currently consume 184 food items.Average intake of vitamin C was 72.5 mg per person per day at the national level:57.9% from leafy vegetables, 33.4% from fresh fruits, and 6.4% from non-leafy vegetables.For vitamin C contribution, the highest 25 food items contributed to a cumulative 95.3% of vitamin C intake with a cumulative R2=0.99. Authors:Ngoan LT, Khan NC, Mai le B, Huong NT, Thu NT, Lua NT, Hang LT, Bich NN, Hieu NV, Quyet HV, Tai le T, Van do D, Moore MA, Tokudome S, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>
<p>14 Title:Gastric and colorectal cancer mortality in Viet Nam in the years 2005-2006. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/6/2008</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 9: 299-302. 2008</p>	<p>Abstract:METHODS:Both demographic data and lists of all deaths in 2005-06 were obtained from all 10,769 commune health stations in Viet Nam.Five indicators included name, age, sex, date of death and cause of death was collected for each case.We selected only communes having the list of deaths with clear cause for each case and crude mortality rate for all causes from 300-600/100,000 as published by the Ministry of Health for a reasonable accuracy and completeness.Obtained data for all causes, all cancers, stomach and colorectal cancer deaths as well as demographic information were processed using Excel software and exported to STATA 8.0 for estimation of world age-standardized cancer mortality rates per 100,000. RESULTS:Data were available for 1,246 gastric cases, (819 male and 427 female) with age-standardized mortality rates from 12.7 to 31.3 per 100,000 in males and from 5.9 to 10.3 per 100,000 in females in the 8 regions of the country.For colorectal cancers, 542 cases (268 male and 274 female) gave mortality rates from 4.0 to 11.3 per 100,000 in males and from 3.0 to 7.8 per 100,000 in females.DISCUSSION:Stomach cancer mortality in males in the region of North East in the North Viet Nam (2005-06) was higher than that in Japan (2002) (31.3 versus 28.7 per 100,000) while colorectal cancer in Viet Nam was lower.While prevalence of Helicobacter pylorus infection in Viet Nam was from 70-75% in both males and females, the stomach cancer rate in males was significantly higher than in females, 31.3 versus 6.8 per 100,000, suggesting an influence of other environmental risk factors.Whether protective factors are operating against colorectal cancer in Viet Nam now needs to be explored. Authors:Ngoan LT, Anh NT, Huong NT, Thu NT, Lua NT, Hang LT, Bich NN, Hieu NV, Quyet HV, Tai le T, Van do D, Khan NC, Mai le B, Tokudome S, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>

<p>15 Title:Cancer mortality pattern in Viet Nam. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/12/2007</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 8:535-8. 2007</p>	<p>Abstract:The aim of the present study was to examine cancer mortality pattern nationwide in Viet Nam.METHODS:Descriptive cancer epidemiology was designed for the present study.Both demographic data and list of all deaths during the two years period, 2005-06, were obtained from all 10,769 commune health stations.Five indicators included name, age, sex, date of death and cause of death was collected for each case.A guideline to report demographic data of each commune and information of each case who has been lived at least 6 months in their commune was prepared in the designed form and sent by express mail service to all the heads of 10,769 commune health stations throughout country.The data comprises all cancer mortality records at the commune-level for the period 2005-06.All obtained data of cancer deaths as well as demographic information was computed using Excel software.The Excel data was exported to STATA 8.0 for cancer analysis.Cancer case was coded following ICD-10.RESULTS:To date, 94.6% of the 10,769 communes (from the 638 of 671 districts within the 64 provinces) have forwarded the required data and we currently have approximately 93,719 cancer deaths for the 2 years period.Number of person-year was 76,726,873 in 2005 and 77,902,688 in 2006.Number of cancer deaths was 45,413 (29,189 males and 16,224 females) in 2005 and 48,306 (31,447 males and 16,859 females) in 2006.Male to female ratios were 1.8 and 1.9 in 2005 and 2006, respectively.Three most common cancer sites numbered of 61,079 (65% of all 93,719 cancer deaths) included 25,410 liver cancer; 22,209 lung cancer; and 13,460 stomach cancer.Among both males and females, liver cancer was ranked in the first most common (31.04% and 19.91%), followed by lung cancer (26.69% and 18.21%) and stomach (14.42% and 14.26%).Among females, cervix and other female genital cancers were ranked in the four most common (9.13%) and breast cancer was about 5.69%.Authors:Ngoan LT, Lua NT, Hang LT.I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>
<p>16 Title:Population-based cancer survival in sites in Viet Nam. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/11/2007</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 8:539-42. 2007.</p>	<p>Abstract:BACKGROUND:Very few population-based cancer survival studies have been performed in Viet Nam.The aim of the present study was to estimate observed and relative cancer survival rates in populations of Phu Tho, Hanoi and Hue city.METHODS:A retrospective-cohort study was performed for all 12 districts of Phu Tho province (semi-highland area in the north), eight districts of Hanoi city (Capital) and four districts of Hue city in central area).Seven indicators were collected for each case of cancer death: name, age, sex, date of the first diagnosis having cancer, date of death, the cause of death and full address.Two steps were done.Firstly, we collected name, age, sex, date of death, the cause of death and full address; secondly, we collected date of the first diagnosis having cancer by a household visit by trained interviewer.Survival time was calculated from the date of death minus the date of diagnosis for each case of cancer.Observed survival rates for 1-year, 2-years, 3-years, 4-years and 5-years were estimated by the form of survival number multiplied by 100 then corrected for the registered number of cancer cases.For relative survival rates, the observed survival rates were corrected for the general population survival rate.RESULTS:Males and females combined, for all cancer sites, 1-year, 2-year, 3-year, 4-year and 5-year observed and relative survival rates were 23.8%-23.9%, 8.5%-8.5%, 3.8%-3.8%, 2.6%-2.6%, 1.7%-1.7%, respectively.The highest one-year relative cancer survival rate was seen in the capital, Hanoi city (49.8%), followed by Hue city in the central area (24.7%), and the lowest in Phu Tho, north-semi-highland (21.8%).CONCLUSIONS:The better cancer survival in Hanoi than in Phu Tho province, as well as the results overall, point to a need for greater efforts in early detection and treatment, especially in rural areas.Authors:Ngoan LT, Long TT, Lua NT, Hang LT.I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>

<p>17 Title:Anti-smoking initiative and decline in incidence rates of lung cancer in Viet Nam. Peer-reviewed</p>	<p>single aut</p>	<p>15/9/2006</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 7:492-4</p>	<p>Abstract:Viet Nam had the highest reported male smoking prevalence rate (72.8-74.3%) in the world in the 1990s.Production of tobacco products was about 0.44 kg or 600 cigarettes per capita per year in 1994 for domestic use.Population-attributable risk per cent of lung cancer due to smoking was about 69.7%.Males in the south have a lower reported smoking prevalence rate (OR=0.7) and a significant lower incidence rate of lung cancer, age-standardized-incidence-rate per 100,000 (ASR) 33.1 vs 24.6 when compared to males in the north.Incidence rates of lung cancer significantly declined in Hanoi (ASR 34.9-33.1 and 6.3-5.8) and Ho Chi Minh City (ASR 24.6-23.7 and 6.8-5.6) between 1991-1997 and at the national level between 1990-2000 (ASR 30.4-30.1 and 6.7-6.6) in males and females, respectively.This decline in incidence rate of lung cancer resulted from the great achievements of the National Tobacco Control Program over about a 10-year period from 1989 to help people stop smoking.The present finding should stimulate further primary cancer prevention efforts in developing countries, including Viet Nam.It also suggests that the method applied to translate scientific evidence of smoking harm to people and into health policy, is a useful tool to drive people's attitude to stop smoking and remove its human carcinogens from our society. Author:Ngoan LT, 2006. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>
<p>18 Title:Cancer mortality in a Hanoi population, Viet Nam, 1996-2005. Peer-reviewed</p>	<p>single aut</p>	<p>15/3/2006</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 7:127-30.2006 J Cancer Prev 7:127-30.2006.</p>	<p>Abstract:BACKGROUND:Hitherto, cancer mortality data have not been available in Viet Nam, so that the real public health problem with this disease has yet to be addressed and recognized in the country with a population of over 80 million in South East Asia.The aim of the present pilot study was to examine cancer mortality in a commune population of Hanoi city, 1996-2005.METHODS:Cancer data was accessed from the database of the population-routine-based death registration performed by medical workers at commune health stations based on the guidelines of the Ministry of Health at Hanoi city.All deaths occurring in the community were registered.This registration process was monthly reviewed for each fatal case regarding the name, age, sex, address, occupation, date-place-cause of death, and information concerning to pre-death medical care during the study period from Jan. 1996 to Dec. 2005.The list of death and residents of the study population was carefully cross-checked with other information sources to avoid under- or over-registration.The world population structure was used to estimate age-standardized cancer mortality rates per 100,000, (ASR).RESULTS:During 60,770 person-years estimated from Jan. 1996 to Dec. 2005, 320 deaths and their causes were registered.Among them, 100 cancer cases of all sites (66 males and 34 females) were included.Cancer mortality rates were 222 and 109 (Crude), 353 and 115 (ASR), for males and females, respectively.For both genders combined, lung cancer was the most common, 27 cases, followed by liver, 26 cases and stomach, with 19.Proportion of death from cancer was about 31% of all causes.CONCLUSIONS:The present findings suggest that in Viet Nam, a developing country, cancer is indeed an important public health problem. Author:Ngoan LT. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>

<p>19 Title:Development of population-based cancer mortality registration in the North of Viet Nam. Peer-reviewed</p>	<p>single aut</p>	<p>15/9/2006</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 7:381-4. 2006.</p>	<p>Abstract:METHODS:Cancer data were accessed from the database of population-routine-based death registration performed by medical workers at commune health stations based on the guidelines of the Ministry of Health.All deaths occurring in the communities were registered and the registration process was monthly reviewed for each fatal case regarding the name, age, sex, address, occupation, date-place-cause of death, and information concerning to pre-death medical care during the study period from 1999 to 2005.The list of deaths and residents of the study population were carefully cross-checked with other information sources to avoid under or over registration.The study sites were Red River Delta areas and a high-mountain area.The world population structure was used to estimate age-standardized cancer mortality rates per 100,000 (ASR).RESULTS:During 4,330,620 person-years estimated during 1999 to 2005, 21,108 deaths were registered.The crude death rate from all causes was 487.4/100,000.Among them, 4,244 cancers in all sites (2,835 in males and 1,409 in females) were registered, giving mortality rates/100,000 of 134.6 and 63.3 (crude), and 155.7 and 54.3 (ASR), for males and females, respectively.The rate for the high-mountain area was only half (45.5) those in the Red River Delta (95.2-117.4).Male to female ratios were ranked from 2.2 to 3.1.Cancer accounted for about 20% of all causes of death.CONCLUSIONS:The present findings suggest that in Viet Nam, development of reliable population-based cancer mortality registration is feasible and practical.Author:Ngoan LT.I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>
<p>20 Title:A nonrandom migrant population: comparison of cancer incidence rates between it and the country of origin. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>2003/1/11</p>	<p>Int J Cancer 107:330-1; author reply 332. 2003.</p>	<p>Letter to the Editor.Authors:Ngoan LT, Yoshimura T. I prepared the paper</p>
<p>21 Title:Work, salt intake and the development of stomach cancer. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/4/2003</p>	<p>Med Hypotheses 60:552-6. 2003.</p>	<p>Abstract:An excess of stomach cancer among workers has been observed and it could be argued that men whose occupation involves heavy work eat more and are consequently exposed to a greater quantity of carcinogens in their food.Working under conditions of heat stress greatly increases a worker's salt excretion by as much as 0.1-15.0 g through sweating during one shift of work.Workers exposed to heat stress had consumed daily as much as from 13.0 to 38.0 g of salt, which is much higher than the safe level of 6 g/person/day recommended by the WHO, to keep a balance of salt in the body.Because salt strongly enhances and promotes chemical gastric carcinogenesis and Helicobacter pylori infection in both humans and animals, there is an association between work, salt intake, and the development of stomach cancer among workers in particular and in humans in general.Authors:Ngoan LT, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>

<p>22 Title:Grand challenges in global health and the practical prevention program?Asian focus on cancer prevention in females of the developing world . Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/5/2003</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 4:153-65. 2003.</p>	<p>Abstract:In response to the request for 'Breakthrough Questions' for 'Grand Challenges in Global Health' recently published in Nature, the Asian Pacific Organization for Cancer Prevention should focus its attention on what projects are of the highest priority for integration with its Practical Prevention Program (PPP).The most common female cancers in most of the countries of Asia are carcinoma of the breast, followed by the uterine cervix.While the incidences of breast adenocarcinomas are still generally lower than in the Western world they are rapidly increasing, and squamous cell carcinomas of the cervix are a major problem.Clearly there are many areas which would reward research.One factor which appears of major relevance in the mammary gland case is the diet, and particularly the phytoestrogens included in 'tofu', along with physical exercise.The age at which these could be operating needs to be elucidated, with reference to timing of menarche and menopause, and also breast mammographic density, another predictor of likelihood of neoplasia.In the cervix, the predominant influence is well established to be persistent infection with a high risk 'oncogenic' type of human papilloma virus (HPV).Vaccines therefore hold much promise, but a better understanding of the mechanisms underlying spontaneous clearance of both infection and cervical intraepithelial neoplasia (CIN) of different grades is also essential for optimal intervention.The roles of smoking and antioxidant intake in particular deserve emphasis.In Asia, with the considerable variation evident in both breast and cervical cancer incidence rates, as well as in cultural and other environmental factors, we are in a very favourable position to meet two specific challenges:1). elucidation of how diet in adolescence determines susceptibility to neoplasia of the mammary glands; and 2). determination of what governs persistence of HPV infection.Realisation of these pivotal research aims, with especial emphasis on the context of the PPP, is our shared goal.Authors:Moore MA, Tajima K, Anh PH, Aydemir G, Basu PS, Bhurgrri Y, Chen K, Gajalakshmi V, Hirose K, Jarrahi AM, Ngoan LT, Qiao YL, Shin HR, Sriamporn S, Srivatanakul P, Tokudome S, Yoo KY, Tsuda H. It was a joint project and cannot extract.</p>
<p>23 Title:Dietary factors and stomach cancer mortality. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>2002/10/4</p>	<p>Br J Cancer 87:37-42. 2002</p>	<p>Abstract:The present study examined the relationship between stomach cancer and the low intake of fresh fruit and vegetables and/or a high intake of fresh pickled, preserved or salted foods and frequent use of cooking oil.During 139 390 person - year of follow-up of over 13 000 subjects, 116 died from stomach cancer.Using a Cox proportional hazards - regression analysis of relative risk (RR, 95% CI) controlling for age, sex, smoking and other dietary factors, a significant decline was found with a high consumption of green and yellow vegetables (RR=0.4, 95% CI=0.2 - 0.9).Reductions of between 40 and 50% were also observed with a high consumption of fresh foods (fruit, cuttle fish, tofu, and potatoes), but these associations were not statistically significant.The risk was significantly increased by the high consumption of processed meat (RR=2.7, 95% CI=1.0-7.4) and by the frequent use of cooking oil (RR=4.0, 95% CI=1.3-11.8).The high consumption of pickled food and traditional soups also increased risk, but not significantly.The findings suggest that a diet high in salt and low in vitamins may be associated with an increase in stomach cancer.Authors:Ngoan LT, Mizoue T, Fujino Y, Tokui N, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript</p>

<p>24 Title:Estimates of cancer mortality in Hanoi and Ho Chi Minh City, Viet Nam in the 1990s. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>15/3/2002</p>	<p>J Epidemiol 12:179-87. 2002.</p>	<p>Abstract:As cancer mortality data is not available, a study regarding the real problem of cancer mortality is timely and urgent in Viet Nam. Therefore the aim of the present study was to calculate cancer mortality in the city of Hanoi and Ho Chi Minh. The correlation between cancer mortality to incidence ratios and relative survival probabilities for 23 cancer sites was estimated according to SEER (1973-97), then cancer mortality was calculated from the cancer incidence and cancer survival for 25 cancer sites in each city. Cancer mortality rate for all cancer sites except skin (ASR per 100,000) was 103.9 for males and 52.4 for females in Hanoi, and 93.7 for males and 60.7 for females in Ho Chi Minh. For males, the five most common cancer deaths were cancers of the lung, liver, stomach, colon/rectum, and nasopharynx in both Hanoi and Ho Chi Minh. For females, cancer death in the cervix was uncommon in Hanoi but the most common site in Ho Chi Minh (ASR 2.2 VS.14.2 per 100,000). The present findings are the first results of cancer mortality from Viet Nam and should be useful for further cancer control programs there. Authors:Ngoan LT, Mizoue T, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript.</p>
<p>25 Title:Pattern and Time Trends of Stomach Cancer in Asia from 1950-99. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>2002</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 3:47-54. 2002.</p>	<p>Abstract:Background:As there is a lack of data on stomach cancer disease in Asia, the aim of the present study was to examine patterns and time trends for this neoplasm in Asian countries. Methods:A descriptive study was designed to examine the cancer pattern and time trend and to calculate the annual change in mortality and incidence of stomach cancer at 5-year intervals. Data were derived from the WHO Mortality Database, and Cancer Incidence in Five Continents. Results:The highest rates of stomach cancer mortality and incidence (ASR) were observed in Japan, followed by the Republic of Korea, and China, the lowest rates being observed in Thailand. The highest to lowest ratios were 50 and 32 for mortality and 120 and 45 for incidence in males and females, respectively. A decreased trend of mortality was found in all 16 countries where mortality data was available, however, before the decrease, an increased trend was found in Japan in the 1950s and in Sri-Lanka in the 1950-60s. In spite of a significant decrease in mortality nationwide in Japan, an increased trend of stomach cancer incidence was found in Hiroshima (ASR + 7.4 in males and + 1.5 in females for each 5-year period). Discussion:There are very large geographical differences in risk factors of stomach cancer from country to country, and these risk factors are still highly prevalent in specific areas of Asia. Further ecological study with emphasis on host and environmental factors for stomach cancer in Asian countries are strongly recommended. Authors:Ngoan LT, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript</p>

<p>26 Title:Differences in Cancer Risks in the South and North of Viet Nam. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>2001</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 2:193-198.2001</p>	<p>Abstract:Background:As there are few available data regarding cancers in Viet Nam, the aim of the present study was to evaluate cancer risk ratios and geographical differences in cancer incidences between the south and north populations in the 1990s.Methods:Data for cancer incidences in Ho Chi Minh (HCM) and Hanoi were derived from published reports.The method for comparison of cancer incidence in two groups used in the present study was the Mantel-Haenszel test.Results:In HCM, all cancers were observed to be lower in males, (RR = 0.87, 95% CI = 0.83-0.91) but higher in females, (RR = 1.06, 95% CI = 1.01-1.12) than in Hanoi.For males, significantly higher incidences in HCM were observed for cancers of the oesophagus (RR = 1.66, 95% CI = 1.19-2.32), liver (RR = 1.22, 95% CI = 1.09-1.36), gall bladder (RR = 5.95, 95% CI = 2.49-14.23), and larynx (RR = 3.54, 95% CI = 2.26-5.55).In contrast, there were much lower incidences in HCM for cancers of the nasopharynx (RR = 0.5, 95% CI = 0.41-0.61), stomach (RR = 0.76, 95% CI = 0.67-0.86), and lung (RR = 0.7, 95% CI = 0.64-0.78).For females, breast cancer incidence was much lower (RR = 0.65, 95% CI = 0.57-0.73) but that of cervical cancer was significantly higher in HCM than in Hanoi, (RR = 3.94, 95% CI = 3.36-4.62), especially for the age group 55-64, (RR = 8.7, 95% CI = 5.9-13.3).Conclusion:The present findings show that cancer risk is quite different in the south and north populations within Viet Nam.Authors:Ngoan LT, Kaneko S, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript</p>
<p>27 Title:Estimate of the Incidence of Hepatocellular Carcinoma Among Carriers of HBsAg (+) in the General Population of Hanoi, Viet Nam from 1991-93. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>2001</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 2:309-314.2001.</p>	<p>Abstract:Background:The estimated number of carriers of HBsAg (+) in the world significantly increased from 120 to 350 million from the 1970s to the 1990s.Eighty per cent of liver cancers are estimated to be due to chronic HBV infection.However, only limited data are available regarding liver cancer rates among carriers of HBsAg (+).The aim of the present study was to estimate the incidence of liver cancer among carriers of HBsAg (+) in the general population of Hanoi City, Viet Nam.Method:Data were derived from published reports for incidence of liver cancer (population-based cancer registry), the risk of HBV infection for liver cancer (case-control study), and the prevalence of HBV infection (stratified random sampling of the general population) in the same population of Hanoi City.The Method of Indirect Estimation in a Case Control Study was used in this study.Results:Crude incidence rates per 100,000 were 114 and 37 for carriers of HBsAg (+) in males and females, respectively.The age-standardized incidence rate per 100,000 among carriers of HBsAg (+) for liver cancer was 166 in males and 58 in females, (ASR, world population).The annual incidence of liver cancer among carriers of HBsAg (+) was strongly correlated with increased age in both males and females: the estimated value sharply increased from 6 to 655 per 100,000 for persons aged 0-9 and 50+, respectively, in males.Similarly, the estimated incidence of liver cancer also sharply increased from 8 to 233 per 100,000 for the age groups 10-19 and 50+, respectively, in females.Conclusion:The present results indicate a high age-dependent incidence of liver cancer among carriers of HBsAg (+) in a general population.These results for Hanoi City, Viet Nam point to the magnitude of the problem and provide a basis for intervention.Authors:Ngoan LT, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript</p>

<p>28 Title:Liver Cancer in Viet Nam:Risk Estimates of Viral Infections and Dioxin Exposure in the South and North Populations. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>2001</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 2:199-202. 2001. Prev 2:199-202. 2001</p>	<p>Abstract:Risk factors forPLC due to viral infections and exposure to herbicides have not been available in south Viet Nam.The aim of this study was to clarify geographical differences in cancer incidence of PLC and its risk factors such as HBV and HCV infections and dioxin exposure between Ho Chi Minh (south) and Hanoi (north).Data for cancer incidence of PLC in Ho Chi Minh (1995-96) and Hanoi (1991-93) were used to calculate rate ratios for the two populations.Published reports on the association between HBV, HCV infections, dioxin (2,3,7,8-TCDD) exposed and HCC in Viet Nam were reviewed.Cancer incidence of PLC was found to be higher in HCM than in Hanoi for males (RR = 1.22, 95% CI = 1.09-1.36) and in females (RR = 1.21, 95% CI = 0.98-1.49).Risk factors for PLC due to viral infections were seen to be lower in HCM than in Hanoi for patients with HBV infection, (OR = 37.8, 95% CI = 11.6-121.4 VS.OR = 61.7, 95% CI = 30.0-128.0) and also for patients with HCV infection and HBsAg (-), (OR = 6.8, 95% CI = 2.1-22.1 VS.OR = 38.1, 95% CI = 2.8-1443.0).The risk of PLC due to exposure to herbicides was significantly increased for persons who suffered exposure for 10 years or more, OR = 8.8, 95% CI = 1.9-41 independent of HBV infection.Dioxin levels (2,3,7,8-TCDD) in blood samples from people living in the south were more than 2 times higher than in the north (32.6 VS.15.7 ppt.).Based on the present findings, it is suggested that high incidence of liver cancer in HCM could partly be explained by herbicide exposure. Authors:Ngoan LT, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript</p>
<p>29 Title:Parity and Illiteracy as Risk Factors of Cervical Cancers in Viet Nam. Peer-reviewed</p>	<p>co-author</p>	<p>2001</p>	<p>Asian Pac J Cancer Prev 2:203-206. 2001</p>	<p>Abstract:The aim of the present study was to examine the risk of cervical cancers with reference to multiparity and illiteracy in Ho Chi Minh City where this neoplasm is a very serious problem but no reports have documented its risk factors.The 5,034 cervical cancer cases treated from 1989-94 in the Central Oncology Clinic of Ho Chi Minh City were derived from published sources.The observed number of children born and the education level among cervical cancer cases were compared with those in the reference group, the general population based on the results of the national census in 1989 and the inter-census in 1994.Among cervical cancer patients, the number of children born was in a wide range from 1-20 children with the mean number being 6.6 children per patient.Most of the patients finished primary or some primary school (54.9%), followed by the illiteracy group (30.0%).Multiparity was found to increase the risk of cervical cancer (RR = 1.31, 95% CI = 1.30-1.32).Illiteracy was also found to be associated with an elevated risk (RR = 3.43, 95 % CI = 2.85-4.14).The significant increase in risk of cervical cancers linked to to multi parity and illiteracy is a very important finding in the south of Viet Nam, where cancer is a very serious problem and there is a lack of information on which to base primary and secondary prevention efforts. Authors:Ngoan LT, Yoshimura T. I prepared the paper: hypothesis, developed protocol, data analysis and presentation, wrote manuscript</p>
<p>(others) 1 2 3 :</p>				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 佐藤 公一
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学 内科系臨床医学		循環器内科学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1 消化管出血患者が受けていた抗血栓療法 の妥当性 (査読付)	共著	平成29年12月	心臓, 49(12): 10-16	抗血栓薬を内服していた消化管出血症例の特徴と施行されていた抗血栓療法および妥当性について調査した研究であり、消化管出血による緊急入院患者において、出血性リスクの増大にもかかわらず心血管疾患二次予防を目的としない抗血小板薬の投与が約2割の症例で施行されていたことを示した。 分担：第一著者として論文の作成にあたった。 Sato K, Namiuchi S, Ushigome R, Takii T, Sugie T, Kato A.
2 Clinical characteristics and long-term prognosis of contemporary patients with vasospastic angina Ethnic differences detected in an international comparative study. (査読付) (冠攣縮性狭心症患者の臨床像と長期予後の国際比較、明らかになった人種差)	共著	令和1年9月	International Journal of Cardiology, 291:13-18	欧米人と日本人の冠攣縮性狭心症患者の特徴と長期予後における人種差を多施設で前向きに検討した研究であり、冠攣縮性狭心症症例において欧米人症例と日本人症例とでは、男性の比率やその発作の好発時間に明確な差異があり、欧米人において冠攣縮発作による不安定狭心症や心臓死がより多く発生していたことを明らかにした。第一著者として論文作成にあたった。 分担：第一著者として論文の作成にあたった。 Koichi Sato, Jun Takahashi, Yuji Odaka, Akira Suda, Shozo Sueda, Hiroki Teragawa, Katsuhisa Ishii, Takahiko Kiyooka, Atsushi Hirayama, Tetsuya Sumiyoshi, Yasuhiko Tanabe, Kazuo Kimura, Koichi Kaikita, Peter Ong, Udo Sechtem, Paolo G. Camici, Juan Carlos Kaski, Filippo Crea, John F. Beltrame, Hiroaki Shimokawa
3 Coronary functional abnormalities in patients with angina and nonobstructive coronary artery disease (査読付) (狭窄病変を有さない胸痛患者における血管機能異常の評価)	共著	令和1年11月	Journal of the American College of Cardiology, 74(19):2350-2360	心臓表面を走る太い冠動脈の過収縮反応である冠攣縮性狭心症と冠微小血管の拡張障害の指標である微小血管抵抗指数の上昇の合併は長期予後の悪化と関連すること、また、冠攣縮性狭心症と微小血管抵抗指数上昇に共通した原因として共通する因子(Rhoキナーゼの活性化)が大きく関与していることを明らかにした。 分担：共著者としてデータ解析を行った。 Suda A, Takahashi J, Hao K, Kikuchi Y, Shindo T, Ikeda S, Sato K, Sugisawa J, Matsumoto Y, Miyata S, Sakata Y, Shimokawa H.

<p>4 Usefulness of intracoronary administration of fasudil, a selective Rho-kinase inhibitor, for PCI-related refractory myocardial ischemia. (査読付) (PCI関連no-reflowに対する選択的Rho-kinase阻害薬ファスジルの冠動脈注入の有効性)</p>	<p>共著</p>	<p>令和1年12月</p>	<p>International Journal of Cardiology, 297:8-13</p>	<p>経カテーテル的冠動脈血管形成術のステント留置の際に時折、引き起こされる冠動脈血流障害であるSlow flow現象に対して、通常は硝酸薬の冠動脈注入が施行されるが、まれに硝酸薬で改善されない場合がある。その際にRhoキナーゼ阻害剤であるファスジルを投与することで有意に血流障害を改善できたことを報告した。共著者としてデータ収集・解析をおこなった。分担：共著者としてデータ解析を行った。 Kikuchi Y, Takahashi J, Hao K, <u>Sato K</u>, Sugisawa J, Sato K, Tsuchiya S, Suda A, Shindo T, Ikeda S, Shiroto T, Matsumoto Y, Miyata S, Sakata Y, Shimokawa H.</p>
<p>5 Temporal trends in the prevalence and outcomes of geriatric patients with acute myocardial infarction in Japan -A report from with the Miyagi AMI Registry Study- (査読付) (日本における高齢心筋梗塞患者の現況—宮城心筋梗塞登録研究からの報告—)</p>	<p>共著</p>	<p>令和2年5月</p>	<p>Journal of Cardiology, 75(5):465-472.</p>	<p>宮城県において2005年から2016年の間に心筋梗塞症例は高齢化が進んでいる事、さらに心不全を合併した重症例が増えている事をしめた。さらに高齢者、重症例であっても侵襲的治療である経カテーテル冠動脈血行再建術が院内死亡改善に有用であることを示した。分担：第一著者として論文の作成にあたった。 <u>Koichi Sato</u>, Jun Takahashi, Kiyotaka Hao, Satoshi Miyata, Akira Suda, Tomohiko Shindo, Shohei Ikeda, Yoku Kikuchi, Takashi Shiroto, Yasuharu Matsumoto, Yasuhiko Sakata, Hiroaki Shimokawa.</p>
<p>(その他・学会発表)</p>	<p>-</p>	<p>平成29年8月</p>	<p>European Society of Cardiology Congress 2017 (Barcelona, Spain)</p>	<p><u>Sato K</u>, Namiuchi S, Sugie T, Takii T, Ushigome R, Kato A, Yoshida S, Shimokawa H.</p>
<p>2 Temporal trends and sex difference in the prevalence and outcomes of heart failure in geriatric patients with acute myocardial infarction. (急性心筋梗塞に合併した心不全症例の性差と近年の傾向—宮城心筋梗塞登録研究からの報告—)</p>	<p>-</p>	<p>平成29年9月</p>	<p>第8回国際性差医学会、仙台市</p>	<p><u>Sato K</u>, Takahashi J, Cui Y, Hao K, Miyata S, Sakata Y, Shimokawa H.</p>
<p>3 高齢急性心筋梗塞患者における来院時心不全合併の頻度と予後の経時的変化に関する検討 —宮城AMI登録研究— (優秀賞受賞)</p>	<p>-</p>	<p>平成29年10月</p>	<p>第21回日本心不全学会 学術集会 YIA審査講演 秋田市</p>	<p><u>佐藤公一</u>、高橋 潤、崔 元吉、羽尾清貴、宮田 敏、坂田泰彦、下川宏明</p>

<p>4 Temporal Trends in Emergency Care and Outcomes of Geriatric Patients With Acute Myocardial Infarction in Japan -A Report From the Miyagi AMI Registry Study (日本における高齢心筋梗塞症例に対する急性期治療の現況-宮城心筋梗塞登録研究からの報告-)</p>	-	平成29年11月	American Heart Association (AHA) Scientific Sessions (Anaheim, California, USA)	Sato K, Takahashi J, Cui Y, Hao K, Miyata S, Sakata Y, Shimokawa H.
<p>5 Temporal Trends in the Treatment and Outcomes of Heart Failure in Super-Old Patients with Acute Myocardial Infarction (超高齢急性心筋梗塞症例に合併した心不全の治療と予後の現況-宮城心筋梗塞登録研究からの報告-)</p>	-	平成30年3月	第82回日本循環器学会 学術集会 大阪市	Sato K, Hao K, Takahashi J, Cui Y, Shindo T, Ikeda S, Kikuchi Y, Matsumoto Y, Shiroto T, Sakata Y, Shimokawa H.
<p>6 Temporal trends in emergency care and outcomes of geriatric patients with acute myocardial infarction in Japan -report from the miyagi AMI registry- (日本における高齢心筋梗塞患者の有病率と予後の現況-宮城心筋梗塞登録研究からの報告-)</p>	-	平成30年8月	European Society of Cardiology Congress 2018 (Munich, Germany)	Sato K, Takahashi J, Hao K, Sakata Y, Shimokawa H.
<p>7 Sex differences in patients with non-ST-elevation myocardial infarction in Japan - A report from the Miyagi AMI registry (日本における非ST上昇型心筋梗塞症例の性差に関する検討-宮城心筋梗塞登録研究からの報告-)</p>	-	令和元年9月	The 9th Congress of the International Society for Gender Medicine (Vienna, Austria)	Sato K, Takahashi J, Hao K, Sakata Y, Shimokawa H.

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 杉本 一将
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医師薬学分野 内科系臨床医学		臨床心臓学、臨床血管学、虚血性心疾患		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 循環器看護ポケットナビ	共著	平成20年1月	中山書店	<p>日常臨床における検体検査の項目、略称、基準値、単位、検査意義についての図表を作成。また、心膜炎、心タンポナーデ、心原性ショックについての病態、検査と診断、治療、合併症、使用薬剤についての解説を作成した。</p> <p>3. 検査（62頁）検体検査 5. 疾患（110頁）心膜炎、心タンポナーデ、心原性ショック 住吉徹哉（監修）、杉本一将、井口信雄</p>
2 検査値を読む2013	共著	平成25年6月	南江堂	<p>臨床検査における高感度C反応性蛋白について、その基準値、測定法、検査意義、異常値を示す疾患、そのメカニズム、ピットフォール、異常値とその対策について文献とともに解説を行った。</p> <p>19章 炎症マーカー検査 高感度C反応性蛋白（1327頁） 杉本一将、小林欣夫</p>
3 Heart View 腎デナベーションの今	共著	平成27年5月	メジカルビュー社	<p>高血圧の治療の多くは薬剤で行われているものの一定数は反応性に乏しい患者の存在が指摘されている。このような患者では交感神経系活性の亢進が示唆されており、腎動脈周囲の交感神経を対象として経カテーテル的に高周波エネルギーを加えて破壊する腎デナベーション術が世界的に広まりつつある。ただ、新規技術のため、腎交感神経の除神経による悪影響については不明な点も多い。実施された臨床試験をもとにその合併症について解説した。 [治す]11（68頁） 荻尾七臣（企画・構成）、杉本一将、小林欣夫</p>
4 EBM 循環器疾患の治療	共著	平成27年5月	中外医学社	<p>虚血性心疾患に対するカテーテル治療は、冠動脈バイパス術に比べ低侵襲な治療法ではあるものの、以前はその高い再治療率が課題となってきた。近年、治療デバイスの変遷とともに初期成功率、再治療率が著明に改善されつつある。冠動脈病変の重症度によりいずれの治療が有効かについてはSYNTAXスコアが提唱されており、日常診療におけるその利用法・解釈についての解説を行った。</p> <p>I 虚血性心疾患B冠動脈疾患24.（119頁） 小室一成（監修）、杉本一将、小林欣夫</p>
(学術論文) 1 Early stent thrombosis because of stent dislodgement in a coronary artery aneurysm. (査読付) (冠動脈瘤内のステント脱落による早期ステント血栓症)	共著	平成21年9月	Circ J. 73(9):1759-61.	<p>ステント血栓症は、ステント留置術の中でも問題となる合併症であり、既存の報告ではステント拡張不全や血管解離に伴って発生することが多いとされていた。今回、冠動脈瘤内の壁に血栓が溶け落ちたためにステント脱落が起こり、冠血流を妨げてステント血栓症に至った一例を経験したので報告した。 分担：主治医として症例を経験し、考察を行って、筆頭著者として執筆した。 Sugimoto K, Kobayashi Y, Komuro I.</p>

2 Cost analysis of sirolimus-eluting stents in the Japanese health insurance system. (査読付) (シロリムス溶出ステントの医療経済効果)	共著	平成21年11月	Int Heart J. 50(6):723-30.	薬剤溶出性ステントであるシロリムス溶出ステントは、従来型金属ステントと比較して冠動脈ステント治療後の再狭窄や再治療率を下げる効果がある。一方、本邦における保険償還額は金属ステントと比べて高価であり、ステント治療後1年における両ステントのコスト比較を行った。 分担：筆頭著者として研究のデザインと統括を行い、執筆した。 Sugimoto K, Kobayashi Y, Kuroda N, Komuro I
3 Effects of stem cell mobilization by granulocyte colony-stimulating factor on endothelial function after sirolimus-eluting stent implantation: a double-blind, randomized, placebo-controlled clinical trial. (査読付) (シロリムス溶出ステント留置後のG-CSFでの幹細胞活性化による血管内皮機能改善効果)	共著	平成25年3月	Am Heart J. 165(3):408-14.	シロリムス溶出ステントは、冠動脈の再狭窄抑制効果が高い反面、血管内皮細胞障害を引き起こし、長期的には有害事象につながる可能性が示唆されている。G-CSFは血管内皮治癒に効果を示すことが期待され、注射を行った50名とプラセボの生食を注射した50名で治療1年後にアセチルコリンによる血管内皮機能の評価を実施した。ステント留置部位において、G-CSF群で血管内皮機能の改善を認め、これが有害事象軽減に寄与する可能性が示された。 分担：データ収集と解析を行った。 Iwata Y, Sugimoto K, Komuro I, Kobayashi Y.
4 Recovery of endothelial function after sirolimus-eluting stent implantation: a pilot study. (査読付) (シロリムス溶出ステント留置後の冠動脈内皮障害の回復についての検討)	共著	平成25年4月	Angiology. 64(3):211-5.	シロリムス溶出ステントは、シロリムスの作用により血管内膜の増生を抑制し、冠動脈の再狭窄を抑える効果があるもののその薬理作用により、血管内皮細胞を障害する可能性が示唆されている。ステント留置後1年未満、1年以上の患者群にわけ、血管内皮障害の回復過程の検討を行った。 分担：データ収集と解析を行った。 Kitahara H, Sugimoto K, Kobayashi Y.
5 Efficacy and safety of low-dose clopidogrel in Japanese patients after drug-eluting stent implantation: a randomized pilot trial. (査読付) (日本人における薬剤溶出ステント留置後の低用量クロピドグレル投与の有効性と安全性)	共著	平成26年1月	Heart Vessels. 29(1):1-6.	冠動脈ステント留置後のステント血栓症予防としてクロピドグレル75mgの内服を行っているが、欧米人と同量のため、過量となっている可能性がある。患者200人を対象に50mg投与と75mg投与に分け、2年経過を追ったところ、両群間で有効性・安全性に差はなく、50mg投与が有用である可能性が示された。 分担：データ収集と解析を行った。 Ohkubo K, Sugimoto K, Kobayashi Y.
6 Increased platelet inhibition after switching from maintenance clopidogrel to prasugrel in Japanese patients with stable coronary artery disease. (査読付) (日本人におけるクロピドグレルとprasugrelの血小板凝集能の比較)	共著	平成27年8月	Circ J. 79(11):2439-44.	ステント血栓症予防として抗血小板薬の作用は重要であるが、日本人において従来から用いられているクロピドグレルに不応を示す患者が多いことが問題とされている。新規薬剤であるprasugrelではこのようなことはなく、今回、血小板凝集能を測定することにより、prasugrelがクロピドグレルと比較してより血小板凝集能を抑制していることが示された。 分担：データ収集と解析を行った。 Nishi T, Sugimoto K, Hanaoka H, Kobayashi Y.
7 Relation of Lipid Content of Coronary Plaque to Level of Serum Uric Acid. (査読付) (血清尿酸値と冠動脈プラークの関係)	共著	平成27年11月	Am J Cardiol. 116(9):1346-50.	血清尿酸値が高いと急性心筋梗塞が起きやすいことはこれまで示唆されてきたが、心筋梗塞の一因である冠動脈プラークとの関係はよく分かっていなかった。今回、IB-IVUSというプラーク性状を評価できる血管内超音波機器を用いて、81人の急性冠症候群患者の冠動脈性状を解析したところ、血清尿酸値が6.4mg/dlを超える群で脂質プラークが多くなる傾向があることが示された。 分担：データ収集と解析を行った。 Saito Y, Sugimoto K, Kobayashi Y.

8 Protective effect of angiotensin II receptor blocker and calcium channel blocker on endothelial vasomotor function after everolimus-eluting stent implantation. (査読付) (オルメサルタンによる血管内皮機能改善作用の検討)	共著	平成28年3月	J Cardiol. 67(3):236-40.	薬剤溶出ステント留置後、冠動脈再狭窄反応は抑制されるものの、血管内皮障害が持続し、心血管有害事象の原因となることが懸念されている。アンギオテンシンII受容体拮抗薬であるオルメサルタンはこれを改善させることが期待され、40名の患者に低用量アセチルコリンを用いて血管内皮機能の解析を行ったが、オルメサルタンによる有意な改善は認めなかった。 分担：データ収集と解析を行った。 Aoki Y, <u>Sugimoto K</u> , Fujimoto Y, Kobayashi Y.
9 Intracoronary Acetylcholine Provocation Testing - Omission of the 20- μ g Dose Is Feasible in Patients Without Coronary Artery Spasm in the Other Coronary Artery. (査読付) (冠攣縮誘発試験で対側冠動脈に攣縮がない患者は20 μ g 負荷を省略可能)	共著	平成28年7月	Circ J. 80(8):1820-3.	日本循環器学会ガイドラインでは、冠攣縮誘発試験において、左右冠動脈ともにアセチルコリン20 μ gより負荷を漸増していくことが推奨されているが、249人の患者で検討したところ、対側冠動脈で攣縮反応を示さなかった患者は、20 μ gの負荷に反応を示さないことが多く、この投与量を省略出来る可能性が示された。 分担：データ収集と解析、校正を行った。 Saito Y, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
10 Combined use of ECMO and hemodialysis in the case of contrast-induced biphasic anaphylactic shock. (査読付) (遅発性造影剤アレルギーにより経皮的心肺補助装置ならびに血液透析を必要とした症例)	共著	平成28年9月	Am J Emerg Med. 34(9):1919. e1-2.	造影剤アレルギーの大部分は投与直後に発生し、心臓カテーテル治療において大きな問題となっているが、10%程度の患者では遅発性にも発生することが示唆されている。今回、遅発性造影剤アレルギーによりショック状態となり、経皮的な心肺補助装置と血液透析が必要とされた重篤な症例を経験したので報告した。 分担：データ収集と校正を行った。 Sugiura A, <u>Sugimoto K</u> , Oda S, Kobayashi Y.
11 Predictive value of coronary artery dilation response to nitrate for a positive intracoronary acetylcholine provocation test. (査読付) (硝酸薬による冠動脈拡張反応は冠攣縮性狭心症の予測因子となる)	共著	平成28年11月	Coron Artery Dis. 27(7):551-5.	冠攣縮性狭心症の診断を行うために、アセチルコリンによる誘発試験が必要となるが、煩雑となるため医療者・患者双方の負担が大きい。197人の患者の右冠動脈の血管反応を解析したところ、アセチルコリンで攣縮をきたす症例では、硝酸薬での血管拡張反応が大きいことが確認され、予測因子となることが示された。 分担：データ収集と解析、校正を行った。 Saito Y, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
12 Efficacy of combined administration of intracoronary papaverine plus intravenous adenosine 5'-triphosphate in assessment of fractional flow reserve. (査読付) (冠血流予備量比試験におけるアデノシンとパパペリン併用の有効性)	共著	平成28年12月	J Cardiol. 68(6):512-516.	冠動脈中等度狭窄病変における心筋虚血を評価する上で、冠血流予備量比の計測が行われているが、正確に測定するためには薬剤によって最大充血を得て計測することが必要である。アデノシンを用いることが標準とされているが、57病変について検討したところ、追加で塩酸パパペリンを冠動脈注入したほうが、より最大充血を得ることが出来、虚血評価にも有用である可能性があった。 分担：データ収集と解析を行った。 Nishi T, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
13 Comparison of 3-dimensional and 2-dimensional quantitative coronary angiography and intravascular ultrasound for functional assessment of coronary lesions. (査読付) (3次元定量的冠動脈造影による心筋虚血評価精度の検討)	共著	平成29年1月	J Cardiol. 69(1):280-286.	3次元定量的冠動脈造影の有用性を、標準解析である2次元定量的冠動脈造影と血管内超音波、冠血流予備量比を用いて中等度の冠動脈狭窄を有する40名の患者について解析を行ったところ、標準解析である2次元定量的冠動脈造影に比べて心筋虚血を検出出来る割合が高い可能性が示された。 分担：データ収集と解析を行った。 Nishi T, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
14 Very early tissue coverage after drug-eluting stent implantation: an optical coherence tomography study. (査読付) (光干渉断層像を用いた薬剤溶出ステント留置後の新生内膜被覆の観察)	共著	平成29年1月	Int J Cardiovasc Imaging. 33(1):25-30.	冠動脈ステント血栓症の一因として、被覆されていないステントストラットの存在が指摘されているが、薬剤溶出ステントが改良されたことにより、早期に薄い新生内膜が張り、ステント血栓症リスクが減少することが期待されている。血管内超音波と比べ微細な画像解析が可能な光干渉断層像を用いて、早期新生内膜の解析を行った。 分担：データ収集と解析を行った。 Takahara M, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.

15 Impact of chronic kidney disease on platelet inhibition of clopidogrel and prasugrel in Japanese patients. (査読付) (慢性腎臓病の日本人患者におけるクロピドグレルとプラスグレルの抗血小板効果の検討)	共著	平成29年5月	J Cardiol. 69(5):752-755.	冠動脈ステント血栓症予防として抗血小板薬効果が重要であるが、腎機能障害患者における薬理作用は良く知られていない。従来から用いられているクロピドグレル、新規薬剤であるプラスグレルについて解析を行ったところ、腎機能障害者ではクロピドグレルが十分に効いていない可能性が示唆された。 分担：データ収集と解析を行った。 Nishi T, <u>Sugimoto K</u> , Hanaoka H, Kobayashi Y.
16 Feasibility of omitting provocation test with 50 μg of acetylcholine in left coronary artery. (査読付) (左冠動脈でのアセチルコリン冠攣縮誘発試験における50 μg負荷を省略する検討)	共著	平成29年6月	Heart Vessels. 32(6):685-689.	冠攣縮性狭心症の診断において、アセチルコリンによる冠攣縮誘発試験がガイドラインに記載されているが、手技が煩雑のため医療者・患者双方に負担が重い。左冠動脈については、20 μg、50 μg、100 μgで段階的に負荷をかけるが、今回、20 μg負荷で反応を示さなかった患者については50 μgでも反応は乏しく、省略することが出来る可能性が示唆された。 分担：データ収集と解析、校正を行った。 Saito Y, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
17 Paroxysmal atrial fibrillation during intracoronary acetylcholine provocation test. (査読付) (アセチルコリンによる冠攣縮誘発試験中に生じる発作性心房細動)	共著	平成29年7月	Heart Vessels. 32(7):902-908.	冠攣縮性狭心症の診断にはアセチルコリン冠動脈注入による冠攣縮誘発試験が有用だが、時々、発作性心房細動を生じて抗不整脈薬を要する場合もある。377人の患者について解析したところ、8%に心房細動が発生した。大多数は右冠動脈に対しての検査中に生じ、心房細動の既往や低体重が独立した予測因子であることがわかった。 分担：データ収集と解析、校正を行った。 Saito Y, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
18 Relation between severity of myocardial bridge and vasospasm. (査読付) (冠動脈の心筋架橋と冠攣縮との関係)	共著	平成29年12月	Int J Cardiol. 248:34-38.	冠動脈の心筋架橋と冠攣縮反応の関係は良く知られておらず、392名の左前下行枝について検討を行った。心筋架橋長が長く、筋による収縮期圧迫が強い場合に冠攣縮誘発試験も陽性になりやすいことが示された。 分担：データ収集と解析、校正を行った。 Saito Y, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
19 Platelet inhibition after loading dose of prasugrel in patients with ST-elevation and non-ST-elevation acute coronary syndrome. (査読付) (急性冠症候群患者におけるプラスグレル効果発現時間の検討)	共著	平成30年7月	Cardiovasc Interv Ther. 33(3):239-246.	プラスグレルの初回投与から2時間後以降の抗血小板作用が報告されているが、2時間未満における情報はなく、急性冠症候群患者50名において、投与後30分、1時間、2時間、4時間の抗血小板作用について解析した。結果、2時間未満では効果が乏しいことがわかり、特にST上昇型心筋梗塞患者でより効果発現が遅れることが示された。 分担：データ収集と解析、校正を行った。 Wakabayashi S, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
20 Feasibility and safety of outpatient cardiac catheterization with intracoronary acetylcholine provocation test. (査読付) (外来患者におけるアセチルコリン冠攣縮誘発試験の実現可能性と安全性)	共著	平成30年8月	Heart Vessels. 33(8):846-852.	アセチルコリン冠攣縮誘発試験は、検査時に一時的ペースメーカーリードの挿入が必要となることや、不整脈リスクがあり、外来患者に実施することは少ない。201人の入院検査、122人の外来検査を比較したところ、予期せぬ合併症や入院はともに1%のみであり、外来検査でも安全性・実現可能性があるものと考えられた。 分担：データ収集と解析、校正を行った。 Saito Y, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
21 Usefulness of Renal Autotransplantation for Radiotherapy-induced Renovascular Hypertension. (査読付) (放射線治療後の腎血管性高血圧に対して自家腎移植が有効であった一例)	共著	令和1年7月	Intern Med. 58(13):1897-1899.	神経膠芽腫に対して2歳時に切除術を行い、放射線治療を実施したもののその影響で12歳時に腎動脈狭窄と腎血管性高血圧をきたし、19歳時に心不全を発症した若年女性。自家腎移植を行ったところコントロールが不良であった高血圧が改善し、術後4年でも心不全を発症せずに経過が良好な症例について報告を行った。 分担：主治医として症例を提供した。 Wakabayashi S, <u>Sugimoto K</u> , Kobayashi Y.
(その他) 学会発表				

1 Propionibacterium acnesを起因菌とした感染性心内膜炎を伴う大動脈弁閉鎖不全症の1例	—	平成18年12月	第202回日本循環器学会 関東甲信越地方会（東京）	起因菌不明の感染性心内膜炎に伴う大動脈弁閉鎖不全症に対し、術中検体を用いてPCR法により起因菌を同定し得た症例を経験したことを報告した。感染性心内膜炎の原因菌としては稀なアクネ菌（ニキビの原因菌であることが多い）が起因菌であることが同定された。 分担：筆頭演者として症例を報告した。 杉本一将、伊藤恵、高見澤格、住吉徹哉
2 Stent Expansion Between Sirolimus-Eluting Stent and Paclitaxel-Eluting Stent（シロリムス溶出ステントとパクリタキセル溶出ステントの拡張性能比較）	—	平成20年7月	第17回日本心血管インターベンション学会学術集会（名古屋）	冠動脈狭窄に対するステント拡張を行うにあたり、長期的成績を良好なものにする要因の一つに病変の初期拡張が挙げられる。薬剤溶出ステント2種において、拡張性能の比較検討を行った。 分担：筆頭演者として研究のデザインと統括を行い、発表した。 杉本一将、小林欣夫、小室一成
3 Cost-Effectiveness of Sirolimus-Eluting Stent（シロリムス溶出ステントの医療経済効果）	—	平成20年7月	第17回日本心血管インターベンション学会学術集会（名古屋）	薬剤溶出性ステントであるシロリムス溶出ステントは、従来型金属ステントと比較して冠動脈ステント治療後の再治療率を下げる効果があるが治療費用は高価であり、ステント治療後1年における両ステントのコスト比較を行った。 分担：筆頭演者として研究のデザインと統括を行い、発表した。 杉本一将、小林欣夫、小室一成
4 大動脈疾患を繰り返した大動脈解離の一例	—	平成24年12月	第226回日本循環器学会 関東甲信越地方会（東京）	42歳時に大動脈弁輪拡張症ならびに大動脈弁閉鎖不全症の診断を受け、Bentall変法による大動脈弁置換術ならびに上行大動脈置換術が行われた男性が56歳時、58歳時、70歳時にも冠動脈や大動脈疾患を繰り返した。血管壁の脆弱性を有する症例に対し、報告を行った。 分担：指導医として報告内容の統括を行った。 有里裕生、廣瀬雅教、杉本一将、小林欣夫

教 育 研 究 業 績 書

氏名 Maung Thein Htaik

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) (学術論文) (その他) 1 2				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 赤塚太朗
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学 内科系臨床医学		(7)皮膚免疫・炎症学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特になし				
(学術論文) 1 Decreased IL-10-producing regulatory B cells in patients with advanced mycosis fungoides. (査読付) (進行期菌状肉症の患者におけるIL-10産生制御性B細胞の減少)	共著	平成30年6月	European Journal of Dermatology. 2018 Jun 1;28(3):314-319	進行期の菌状肉症の患者の血液ではIL-10を産生する制御性B細胞を中心とした一部のB細胞は有意に低下する。また、これらの血液中のB細胞の濃度は一部の病勢マーカーと負の相関をもつ。このことから制御性B細胞と進行期の菌状肉症には密接な関係があると考えられる。 役割: 筆頭著者として執筆、実験を行った。 Akatsuka T, Miyagaki T, Nakajima R, Kamiyo H, Oka T, Takahashi N, Suga H, Yoshizaki A, Asano Y, Sugaya M, Sato S
(その他) (学会発表) 1 Coccygeal padの1例	—	平成26年10月	第78回日本皮膚科学会東部支部学術大会, 青森	仙骨部の腫瘍を主訴に来院した15歳男子。4cm×2.5cmの弾性軟で淡紅色の腫瘍。造影CTで増強効果を示さない表皮と連続した結節があり、骨X線にて尾てい骨の変形を認めたため、Coccygeal padと診断。切除術を行った。 役割: 筆頭発表者として手術に参加し、発表を行った。 共同発表者: 赤塚太朗、増井友里、宮川卓也、藤田秀樹、門野岳史、佐藤伸一
2 皮膚筋炎との鑑別を要した横紋筋融解症の一例	—	平成27年10月	第67回日本皮膚科学会西部支部学術大会, 長崎	83歳男性。発熱と顔面部部の紅斑を主訴に近医受診。下肢筋力低下から皮膚筋炎が疑われ、当院紹介受診となったが、入院時の検査でCKが17258U/Lと高値を認め、尿中ミオグロビンも97950ng/mlと著大な増加を認めたため、横紋筋融解症が考えられた。頬の紅斑に関しては圧痛を伴い、CRPも高値であったことから丹毒の合併が疑われた。 役割: 筆頭発表者として治療に参加し、発表を行った。 共同発表者: 赤塚太朗、吉崎歩、岡知徳、宮垣朝光、大日方夏美、三井浩、佐藤伸一
3 SLE患者に合併した大腿部の異所性乳房外Paget病の1例	—	平成28年6月	日本皮膚科学会第866回東京地方会城西地区, 東京	SLEとシェーグレン症候群の既往がある54歳女性。右大腿部に紅色局面を認めた。有棘細胞癌が当初は疑われたが、病理診断にて異所性乳房外Paget病と診断。 役割: 筆頭発表者として手術に参加し、発表を行った。 共同発表者: 赤塚太朗、丸陽美、木下幹雄、甲斐浩通
4 Decreased GPNMB expression in patients with psoriasis. (乾癬患者におけるGPNMBの発現の減少)	—	平成29年12月	日本研究皮膚科学会42nd JSID, 高知	GPNMBは皮膚を含めた体の様々な部位に発現するタンパクで、抗炎症作用をもつことが知られている。今回、我々は乾癬の患者の血清、皮膚検体におけるGPNMBが健常者より有意に低下していること、乾癬の治療により血清中のGPNMBが有意に上昇していることを確認した。また、表皮角化細胞において乾癬皮膚に過剰に発現することが知られているIL-17A、IFN- γ の刺激によってGPNMBが抑制されることが分かった。乾癬とGPNMBには密接な関係があると考えられる。 役割: 筆頭発表者として発表、実験を行った。 共同発表者: Taro AKATSUKA, Tomomitsu MIYAGAKI, Tomonori OKA, Hiraku SUGA, Ayumi YOSHIZAKI, Masahiro KAMATA, Yoshihide ASANO, Makoto SUGAYA, Shinichi SATO
5 Decreased keratinocyte GPNMB expression may augment the development of psoriasis lesion. (表皮角化細胞におけるGPNMBの減少によって起こりうる乾癬の増悪)	—	平成30年5月	International Investigative Dermatology IID2018, Orlando	GPNMBは皮膚を含めた体の様々な部位に発現するタンパクで、抗炎症作用をもち、T細胞を抑制することが知られている。今回、我々の研究により乾癬の患者のGPNMBの発現が健常者より有意に低下しており、治療により上昇すること、乾癬のモデルマウスにGPNMBを投与すると乾癬の症状が軽減すること、乾癬の皮膚に発現するサイトカインによってGPNMBの発現が抑制されること、GPNMBの投与によりではマクロファージに由来する炎症性サイトカインの分泌が抑制されることをわかった。このことから、GPNMBはマクロファージを抑制し、乾癬の炎症を抑える作用を持つが、乾癬においてはその発現が抑制され、乾癬の増悪を引き起こしている可能性が示唆された。 役割: 筆頭発表者として発表、実験を行った。 共同発表者: Taro AKATSUKA, Tomomitsu MIYAGAKI, Tomonori OKA, Hiraku SUGA, Ayumi YOSHIZAKI, Masahiro KAMATA, Yoshihide ASANO, Makoto SUGAYA, Shinichi SATO

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 井上 和明				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学 内科系臨床医学		急性肝不全 C型肝炎ウイルス 自然免疫		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. Advances in Second Messenger and Phosphoprotein Research: Biology and Medicine of Signal Transduction 24巻. Reversal response to norepinephrine in gastric fundus smooth muscle of diabetic rat. セカンドメッセンジャーとリントンパク質研究の進歩: シグナル伝達の生物学と医学24巻. 糖尿病ラットの胃底平滑筋におけるノルエピネフリンに対する逆反応 (査読付)	共著	1990.6	New York: Raven Press p554-5	レセプターの発現が病態により変化することを自らの実験データをもとに詳述した。特に生理学的薬理学的な機能の変化が起こることを実験的に述べた (役割): 病態モデルの作成、生理機能の変化の検討レセプターの発現の解析をおこない、そのコアの部分を統括して論文にした。 Inoue K, Sakai Y
2. Advances in Medicine and Biology Volume 46. Hepatic Encephalopathy. 医学および生物学の進歩. (査読付)	共著	2012.11	New York: Nova Science Publishers, 46巻 肝性脳症 p. 59-81	肝性脳症についてこれまで述べられてきたことをまとめたものである。今なお昏睡起因物質は不明であるが、その増悪に関与する因子とminimal HEと云われている軽度の肝性脳症の評価についても述べた。この点は治療上患者を重症化させないために重要である。 (役割): 筆頭筆者につき論文全体の構成を考え、肝性脳症についてのこれまでのエビデンスと自らの研究成果を踏まえて、内容を統括して論文を執筆した。 Inoue K,
3 Liver Failure: Etiologies, Neurological Complications and Emerging Therapies. Chapter 10. Overview of Artificial Liver Support Systems in the World and New Promising Methods 肝不全: 病因、神経学的合併症および新興療法 第10章世界の人工肝臓サポートシステムの概要と新しい有望な方法 (査読付)	共著	2013.9	Nova Science Publishers p. 159-176	これまで行われてきた人工肝補助療法について、歴史的な変遷を辿り、現在最も有効であると考えられているon-line HDFがなぜ行われる様になったかを、論理的に述べている。 (役割): 筆頭筆者につき論文全体の構成を考え、人工肝補助療法の中でもnon-biologicalのものを中心にこれまでのエビデンスと自らの研究成果を踏まえて、内容を統括して論文を執筆した。 Inoue K, Yoshiba M.
(学術論文) 1. Abnormality of smooth muscle functions in diabetic rats. 糖尿病ラットにおける平滑筋機能の異常 (査読付)	共著	1990.7	Eur J Pharmacol 担当ページ 550-551	糖尿病は様々の臓器に機能異常を引き起こす。我々はストレプトゾトシンでDMラットを作成し、DMモデルラットの胃の平滑筋の機能を検討した。胃底部においてはβアドレナリン受容体の数が減少し、その一方でCaチャンネルは増加した。またCa pumpのactivityも低下することより細胞内のCa濃度の上昇が起こり、過大な収縮が起きやすくなっていた。 Sakai Y, Inazu M, Honda H, Inoue K, Homma I (役割) 実験を施行して、他の研究者とディスカッションを行い、図表の作成を行った。

2. Rabbit immunization to induce experimental asthma -relationship between antigens and airway reactivity. 家兎感作による実験的気管支喘息 抗原と気道反応性の関係 (査読付)	共著	1991.1	Japanese Journal of Allergology 担当ページ 46-50	Japanese white rabbitを出生時からアルテルナリアかブタクサで感作し、特異的IgEを産生を産生する実験的喘息モデルを作成し、感作動物の気管平滑筋の収縮反応の特性をin vivoで非感作対照動物と比較した。アセチルコリン(Ach)に対する反応は感度も収縮力もアルテルナリア感作群で増加したが、ブタクサ群では感度のみ増加した。壁内神経叢の刺激は、神経伝達物質、特にAChの放出を促進し、気道過敏のメカニズムの一つと考えられた。 <u>Inoue K</u> , Sakai Y, Homma I. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。
3. Relations between contractile responses and β -adrenoceptors in gastric fundus of diabetic rats. 糖尿病ラットにおける収縮反応と胃底部 β アドレナリン受容体の関係 (査読付)	共著	1991.3	Life Sciences 担当ページ 1044-1046	ストレプトゾトシン(STZ)でラットを処理し糖尿病モデルを作成し、胃底部の平滑筋のノルアドレナリン(NA)に対する反応と β 受容体の性状を対照群と検討した。NAにより対照群の胃底部の平滑筋は弛緩し、DM群は収縮した。糖尿病群の収縮は、収縮はブゾジシンによりブロックされ、弛緩はプロプラノロールによってブロックされた。 β 受容体の数は、DM群で対照群より有意に少なかった。高血糖により受容体のINTERCONVERSIONが起こる可能性が示された。 Sakai Y, Inazu M, Aihara K, <u>Inoue K</u> , Homma I. (役割) 病態動物モデルの作成と受容体結合アッセイを行い、結果を共同研究者とディスカッションし図表を作成した。
4. An ubiquitous modulating function of rabbit tracheal epithelium: Degradation of tachykinins. 家兎気管上皮の普遍的調節機能：タキキニンの分解について (査読付)	共著	1992.2	Br J Pharmacol 担当ページ 393-399	ウサギの気管平滑筋の応答性における上皮の役割を調べるために、アセチルコリン(ACh)、KCl、5-ヒドロキシトリプタミン(5-HT)、ヒスタミン、サブスタンスP(SP)、ニューロキニンAに対する収縮反応(NKA)を測定した。検討の結果、ウサギ気管上皮がSPの不活性化により、直接および間接的にSP誘発収縮を調節する可能性が示され、この現象は哺乳類に普遍的である。 <u>Inoue K</u> , Sakai Y, Homma I. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。
5. Relations of contractile hyperreactivity to tachykinins in rabbit trachea. 家兎気管におけるタキキニンと収縮性過敏性の関係 (査読付)	共著	1992.7	Regulatory Peptides 担当ページ233-234	生下時からアルテルナリアで感作したウサギは実験的な喘息モデルであり、substance Pをはじめとするneuropeptideはcholine作動性および非コリン非アドレナリン作動性神経による気道の過大な収縮に関与することが示された。 Sakai Y, <u>Inoue K</u> , Homma I. (役割) 研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。
6. Change in responsiveness of airway and beta-adrenoceptor in guinea pigs. モルモットの気道の反応性と β アドレナリン受容体の変化について (査読付)	共著	1993.4	Japanese Journal of Allergology 担当ページ 558-561	アレルギー吸入チャレンジによりオバルブミン(OA)で感作されたモルモットは即時気道反応(IAR)直後に、メタコリンに対する気道反応性の有意な増加をもたらした。この気道過敏症におけるTxA2とPAFの関与を検討した。炎症細胞の浸潤がin vivoで認められない段階で、TxA2がAHに関与していることが示された。OA感作モルモットのIAR後のプロプラノロールに対する過敏性は、IAR後のベータアドレナリン受容体の機能の変化の可能性を示唆している。 Minoguchi K, Adachi M, Tokunaga H, Gonogami Y, Kouno Y, Kobayashi H, <u>Inoue K</u> , Sakai Y, Homma I, Takahashi T. (役割) 実験モデル動物の作成と管理を担当し、データの解釈について他の筆者とディスカッションを行った。

7. Recurrent fulminant hepatic failure in an HB carrier after intensive chemotherapy. 集中化学療法によるHBVキャリアの劇症肝不全の再発について。	共著	1993.9	Dig Dis Sci 担当ページ 1171-1172	56歳のHBキャリアの女性が、非ホジキンリンパ腫に対する2回の化学療法後にプレコア変異B型肝炎ウイルスの増殖を伴う劇症肝不全を発症した。患者はインターフェロンとシクロスポリンAで治療され救命された。顕著な肝再生が組織学的に認められ肝不全から回復した。ウイルス増殖の促進と過大な宿主の免疫応答が劇症化に関与していた。本例は今日のガイドライン作成の基礎となっている。 Yoshiba M, Sekiyama K, Iwabuchi S, Takatori M, Tanaka Y, Uchikoshi T, Okamoto H, <u>Inoue K</u> , Sugata F. (役割) HBVキャリアが化学療法後の重症化することの警鐘を鳴らす初めての論文である。本論文では症例の提供とウイルス量の定量を行った。
8. Genotype of hepatitis C virus in fulminant hepatitis C. C型肝炎ウイルスの遺伝子型と劇症肝炎との関係 (査読付)	共著	1994.1	Dig Dis Sci 担当ページ 221	慢性肝炎では一般にgenotype 1型が難治だが、劇症化例においてはgenotype 2型が多く、これはウイルスの広がりに関与している可能性が示された。肝細胞全体にウイルスが広がってから強い免疫応答が起こると、劇症化すると想定された。 Yoshiba M, Sekiyama K, <u>Inoue K</u> , Sugata F, Okamoto H. (役割) C型肝炎ウイルスによる劇症肝炎はその存在そのものが疑われていたが、症例がtherapeutic transfusionを受けていない時期の検体を集め、臨床経過を検討した。
9. Interferon for hepatitis A. インターフェロンとA型肝炎 (査読付)	共著	1994.1	Lancet 担当ページ288-289	A型肝炎は一般にself-limitingで重症化しないが、高齢者やDM合併症例での重症化が報告されており、劇症化を予防するためには、急性肝炎重症型の段階で、HAVはRNAウイルスの為にインターフェロンの投与は増殖抑制に有効である。 Yoshiba M, <u>Inoue K</u> , Sekiyama K. (役割) A型肝炎ウイルスはRNAウイルスであるので、インターフェロンが奏功する可能性がある。症例の管理と提供を行い、他の筆者と論文内容について議論を行った。
10. Prognostic value of hepatic volumetry in fulminant hepatic failure. 劇症型肝不全における肝容積測定の前後的価値 (査読付)	共著	1994.2	Dig Dis Sci 担当ページ240-244	腹部CTで計算された肝容積と予後の関係を分析するために劇症肝不全の19人の患者で検討を行った。すべての患者は、高性能膜を使用した血漿交換と血液透析濾過からなる人工肝臓補助療法を受けて、10人の患者が生存した。肝性昏睡発症後10~20日で656 ml以上の容積のある患者で生存率が有意に高かった。正確な予測を行うためには、肝性昏睡発症後10~20日まで肝臓の容積を連続的に測定する必要がある。 Sekiyama K, Yoshiba M, <u>Inoue K</u> , Sugata F. (役割) 筆頭筆者とディスカッションを行い論文の執筆を担当した。
11. A simple method for evaluating prothrombin time in severe liver disease. 重症肝疾患におけるプロトロンビン時間を評価するための簡易法	共著	1994.3	Am J Clin Pathology 担当ページ358-359	新しいプロトロンビン時間の簡易測定システムを、劇症肝炎および慢性肝不全などの重度の肝疾患で検討した。測定には一滴の新鮮な全血が必要である。この方法で決定されたプロトロンビン時間値と、従来の実験室の方法で決定されたプロトロンビン時間値の間には、良好な相関関係が観察された。 Dehara K, Yoshiba M, <u>Inoue K</u> , Sugata F. (役割) 重症患者を担当して、検体の収集と測定を担当した。
12. Contribution of hepatitis C virus to non-A, non-B fulminant hepatitis in Japan. 日本における非A非B型劇症肝炎へのC型肝炎ウイルスの寄与 (査読付)	共著	1994.4	Hepatology 担当ページ829-834	日本における非A、非B劇症肝炎へのC型肝炎ウイルスの寄与を評価するために、B型劇症肝炎の7人の患者、非A、非Bの13人の患者の間で10の主要な臨床的特徴を比較した。発症または発黄から昏睡までの期間はC型、および非A、非B型がB型より有意に長かった。血清トランスアミナーゼレベルはB型患者7人中6人で単一のピークを示したが、C型患者の全てと非A、非Bグループのほとんどで2つ以上のピークを形成した。 Yoshiba M, Dehara K, <u>Inoue K</u> , Okamoto H, Mayumi M. (役割) 成因不明の劇症肝炎例を解析しその臨床像を明らかにした。

<p>13. Interferon and cyclosporin A in the treatment of fulminant viral hepatitis. ウイルス性劇症肝炎の治療におけるインターフェロンとサイクロスポリンA (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>1995. 2</p>	<p>J Gastroenterol 担当ページ 68-72</p>	<p>劇症肝炎の予後は一般的に不良であり、欧米では治療は肝移植と考えられている。肝移植が容易にできない日本では、これらの難治性の劇症肝炎に内科集中治療が必須である。その結果 King's Collegeの移植クライテリアに合致する14人中8人が生存した。すべての生存者で、トランスアミナーゼレベルの低下、肝臓容積の増加、肝臓再生が観察された。インターフェロンとシクロスポリンAの組み合わせが重症化例に有効であることが示唆された。 Yoshiba M, Sekiyama K, <u>Inoue K</u>, Fujita R. (役割) 劇症肝炎の発症メカニズムに旺盛なウイルス増殖と強い免疫応答が関与していると考え、インターフェロン (抗ウイルス剤)、サイクロスポリン (免疫抑制剤) の組み合わせで治療を行った。患者の管理とデータ収集を行った。</p>
<p>14. Hepatitis GB virus C. GB-C肝炎ウイルス (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>1996. 1</p>	<p>N Engl J Med 担当ページ1392-1393</p>	<p>AlterはHGBV-Cが劇症肝炎の発症後に与えられた輸血で感染した単なるpassengerである可能性が高いと主張した。我々の検討では、劇症肝炎の発症前に受けた輸血は疾患に何らかの役割を果たしていたかもしれないが、劇症肝炎の発症後に受けた治療的輸血は、GBV-Cの伝播にほとんど寄与していなかったと考えられた。 Yoshiba M, <u>Inoue K</u>, Sekiyama K. (役割) 劇症肝炎は成因不明例が多く、新たにクローニングされたGBV-Cがその原因であるかどうかを検討するために、筆者はウイルスの定量とシーケンスの解析を行った。</p>
<p>15. Favorable effect of new artificial liver support on survival of patients with fulminant hepatic failure. 劇症肝不全患者の生存に対する新しい人工肝臓サポートの好ましい効果 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>1996. 11</p>	<p>Artificial Organs 担当ページ1169-1171</p>	<p>出血傾向と肝性昏睡は急性肝不全の二大症状である。これらの問題の克服に高性能膜を使用した血漿交換と血液透析濾過を組み合わせた人工肝臓補助システムを開発した。私たちは、67人の劇症肝炎患者のうち65人 (97.0%) を治療により、その意識を回復させた。55人 (80.9%) はこのシステムを適用し続けている限り意識は清明であった。私たちの人工肝臓補助システムにより67例中37例が救命され、肝移植と同等の高い救命率が示された。 Yoshiba M, <u>Inoue K</u>, Sekiyama K, Koh I. (役割) 人工肝補助療法の対象となった患者を担当しその臨床データを収集して統計的解析を行った。</p>
<p>16. Chronic hepatitis A with persistent viral replication. 持続的ウイルス増殖を伴った慢性A型肝炎 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>1996. 12</p>	<p>J Med Virol 担当ページ322-324</p>	<p>A型肝炎ウイルスは通常self-limitingな急性肝炎を引き起こすが、本例ではHAVが31ヶ月にわたり長期持続感染して、組織学的A3 F3と活動性が高く線維化の進行した慢性肝炎を呈し食道静脈瘤の形成も認められた。HAVの持続感染により肝硬変に発展する可能性が初めて示された。 <u>Inoue K</u>, Yoshiba M, Yotsuyanagi H, Otsuka T, Sekiyama K, and Fujita R. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>17. Acute hepatitis caused by sexual or household transmission of GBV-C. 性行為又は家庭内で伝播された急性GBV-C肝炎 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>1997. 12</p>	<p>J Hepatol 担当ページ1111</p>	<p>GBV-Cは血液で感染するウイルスであり、今日まで家庭内で感染したケースはなかった。患者は24歳の女性であり急性肝炎を発症しており、キャリアの夫は無症候性である。患者とキャリアの夫のNS3領域のシーケンスを比較したところ100%の相同性が認められた。GBV-Cはカップル間で急性肝炎の原因となる可能性のあるウイルスであることが示唆された。 Tanaka T, Takeuchi T, <u>Inoue K</u>, Tanaka S, Kohara M. (役割) 新たな肝炎ウイルスとして注目されたGBV-Cにつき、患者血清を収集してPCRによる定量とシーケンス解析を行った。</p>

<p>18. Clinical and molecular virological differences between fulminant hepatic failures following acute and chronic infection with hepatitis B virus. B型肝炎ウイルスの急性および慢性感染による劇症型肝炎不全の臨床的、分子ウイルス学的相違について (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>1998. 5</p>	<p>J Med Virol 担当ページ 35-41</p>	<p>HBVのキャリア発症と急性感染の劇症肝炎を臨床的、分子生物学的に検討した。トランスアミナーゼのピークは急性感染で高くかつ一峰性で、キャリア発症では多峰性であった。プレコアの変異は急性感染の91%で認められた一方で、キャリア発症例では62%で、キャリア発症でプレコア変異のないケースは全例でコアプロモーターの変異が認められた。HBVの急性感染による劇症肝炎も、キャリア発症の場合も増殖力の亢進と関係した。 <u>Inoue K</u>, Yoshiba M, Sekiyama K, Okamoto H, and Mayumi M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>19. Real-time detection system for quantification of hepatitis C virus genome. C型肝炎ウイルス遺伝子のリアルタイム検出系による定量システム (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>1999. 3</p>	<p>Gastroenterology 担当ページ 637-639</p>	<p>C型肝炎ウイルス感染の診断と治療の際、患者のウイルス量のモニタリングには、高感度で正確なC型肝炎ウイルス定量システムが不可欠である。C型肝炎ウイルスRNAをTaq man chemistryに基づいたリアルタイムシステムにより定量した。定量範囲は101~108コピーで感度はアンプリコモニターよりも10~100倍高かった。測定の再現性も高く感度、特異度ともに十分であった。この方法によりインターフェロン治療の正確な効果判定が可能となった。 Takeuchi T, Katsume A, Tanaka T, Abe A, <u>Inoue K</u>, Tsukiyama-Kohara K, Kawaguchi R, Tanaka S, Kohara M. (役割) スタンダードとなるHCV RNAのクローニングとin vitro transcriptionによるスタンダードの作成</p>
<p>20. Possible association between serum GB virus C RNA level and disease activity in fulminant hepatitis type G. G型劇症肝炎における血清GBウイルスC RNAレベルと疾患活動性との関連の可能性 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>1999. 5</p>	<p>J Hepatol 担当ページ801-806</p>	<p>GB V-Cが重篤な肝疾患を引き起こすか議論がある。新しく開発した定量的PCR法を用い、ウイルスレベルと劇症肝炎の活動性の間に相関があるか検討し、血清から分離されたウイルスゲノムのNS 3領域を、同一ウイルスかどうか確認するために複数時点でシーケンスを行い、配列を比較した。GBV-C RNAは患者のALTの血清レベルとほぼ相関し、NS3領域の配列解析により、臨床経過全体でウイルスは同一であった。 <u>Inoue K</u>, Yoshiba M, Sekiyama K, Kohara M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>21. Quantitation of hepatitis B virus genomic DNA by real-time detection PCR. リアルタイム検出PCRによるHBV ゲノムDNAの定量 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>1999. 9</p>	<p>J Clin Microbiol 担当ページ 2899-2902</p>	<p>血清中のHBV DNAの定量は、HBV増殖の有効なモニタリング方法である。Taq Man chemistryに基づくリアルタイムPCRにより、既存のシステムよりも感度が高く、正確で、再現性のあるアッセイシステムを開発した。このアッセイの検出限界は10 コピーで101~108コピーの間で線形標準曲線が得られ高い再現性を示した。このシステムは、特異度、感度ともに高く、今後の標準HBV定量法の優れた候補である。 Abe A, <u>Inoue K</u>, Tanaka T, Kato J, Kajiyama N, Kawaguchi R, Tanaka S, Yoshiba M, Kohara M. (役割) スタンダードの作成、プライマーの選定、および実験施行と論文作成の指導を行った。</p>
<p>22. TT virus infection in patients with fulminant hepatic failure. 劇症型肝炎不全におけるTTウイルス感染について (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2000. 12</p>	<p>Am J Gastroenterol 担当ページ3602-3604</p>	<p>TTウイルスと呼ばれる新しいDNAウイルスが1997年に発見された。TTウイルスが肝炎の原因であるかどうかははまだ不明である。TTウイルスは、成因不明の劇症肝不全で統計学的に有意に高い率で検出された。ロジスティック回帰分析でも、成因不明劇症肝不全に関連する独立変数としてTTウイルスは選択され病因に関与する可能性が示唆された。 Shibata M, Morizane T, Baba T, <u>Inoue K</u>, Sekiyama K, Yoshiba M, Mitamura K. (役割) 症例の提供と多変量解析の為のデータ袖手州とそのサポートを行った。</p>

<p>23. Simple quantitative assay of alpha fetoprotein mRNA in liver tissue using the real time detection PCR assay its application for clinical use. リアルタイム検出PCRアッセイを用いた肝組織中のアルファフェトプロテインmRNAの簡易な定量アッセイ系とその臨床応用 (査読付)</p>	共著	2001.5	Hepatology Research 担当ページ85-88	<p>非腫瘍性組織と比較して、肝癌組織ではAFPのmRNAが増加する。血中の有核細胞におけるAFP mRNAの検出は、HCCの治療効果と予後の評価に役立つ可能性がある。リアルタイムRT-PCRを用いてAFP mRNA定量しhouse keeping 遺伝子のGAPDHの定量結果と比較した。その結果HCC患者の血中AFP/GAPDH mRNAは正常人、他の癌腫より有意に高くかつ、組織においても肝がん患者の腫瘍部ではAFP /GAPDH mRNAが非癌部より100倍以上高かった。 Matsumura M, Ijichi M, Shiratori Y, Togo G, Hikiba Y, <u>Inoue K</u>, Kohara M, Omata M. (役割) リアルタイムPCRの条件設定と実験を指導し、論文化について実験結果の解釈をサポートした。</p>
<p>24. Accurate prediction of fulminant hepatic failure in severe acute viral hepatitis: Multicenter study. 急性重症ウイルス性肝炎における劇症化の正確な予知 (査読付)</p>	共著	2002.11	J Gastroenterol 担当ページ916-919	<p>劇症肝炎は昏睡発症後に予後不良となるケースが多い。急性肝炎の段階で劇症化を予知し治療介入する目的で、急性肝炎重症型から劇症化したケースと回復したケースを比較して劇症化予知式を作成した。その結果$Z = -0.89 + 1.74 \times (\text{原因}) + 0.056 \times (\text{総ビリルビン値}) - 0.014 \times (\text{コリンエステラーゼ値})$の判別式が得られた。前向き研究で特異性、感度、は十分に単純な識別方程式により劇症化を予測できる可能性が示された。 Yoshida M, Sekiyama K, <u>Inoue K</u>, Yamada M, Kako M, Nagai K, Takatori M, Iwabuchi S, Sumino Y, Tanaka K, Hakozaiki Y, Hasegawa K, and Shibuya A. (役割) データ収集と解析をサポートして、論文の執筆を行った。</p>
<p>25. Adenovirus-mediated gene transfer of interferon α improves dimethylnitrosamine-induced liver cirrhosis in rat model. アデノウイルスを用いたインターフェロンαの遺伝子導入は、ラットのジメチルニトロソアミンによる肝硬変モデルを改善する。(査読付)</p>	共著	2003.5	Gene Ther 担当ページ771-772	<p>インターフェロン(IFN) α はHCVの持続感染による肝硬変への進展抑制に有効であると示唆されている。IFN-α はインフルエンザ様症状を呈するため、有効量の投与は難しく血中の分解も急速で肝臓に到達する量は少量である。肝臓にオンサイトでIFN-α を発現させる目的で、IFN-α 遺伝子を発現するアデノウイルスベクターをLCモデルラットに静注した。皮下投与に比して十分なIFN-α が肝臓で検出され肝硬変モデルラットの病変の進展と生存率改善が示された。 Suzuki K, Aoki K, Ohnami S, Yoshida K, Kazui T, Kato N, <u>Inoue K</u>, Kohara M, Yoshida T. (役割) HCVとインターフェロンα のRNAをリアルタイムPCRで定量し、その結果を他の筆者とディスカッションした。</p>
<p>26. Combined Interferon α 2b and cyclosporine A in the treatment of chronic hepatitis C: controlled trial. C型慢性肝炎に対するインターフェロンα 2bとサイクロスポリンA併用療法の対照研究 (査読付)</p>	共著	2003.6	J Gastroenterol 担当ページ 567-572	<p>慢性C型肝炎患者の15%から20%だけがインターフェロン(IFN)単独療法でSVRを達成できる。本研究ではIFNとシクロスポリンA(CsA)の併用療法とIFN単独療法を有効性安全性の面で比較検討した。単独療法群より併用療法群でSVRは有意に高く、1b高ウイルスの患者では、SVRは、単独療法群 (1/21; P = 0.006) よりも併用療法群 (16/38) で著しく高く今後の有望な治療法である可能性が示された。 <u>Inoue K</u>, Sekiyama K, Yamada M, Watanabe T, Yasuda H, Yoshida M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>27. Adenovirus-mediated gene transfer of interferon α inhibits hepatitis C virus replication in hepatocytes. アデノウイルスを用いたインターフェロンαの遺伝子導入は肝細胞におけるC型肝炎ウイルスの複製を阻害する (査読付)</p>	共著	2003.8	Biochem Biophys Res Commun 担当ページ 815-817	<p>アデノウイルスベクターによる肝臓でのオンサイトIFN-α 産生は、ラット肝硬変モデルで予後を改善した。HCVに対する直接的抗ウイルス効果を検討する目的で、HCV陽性血清を接種したヒト肝細胞株PH5CH8にアデノウイルスベクターによるIFN発現は抗ウイルス効果を示し2, 5-ASを誘導することができた。この研究はHCV関連疾患にIFN-α 遺伝子治療の可能性を示唆している。 Suzuki K, Aoki K, Ohnami S, Yoshida K, Kazui T, Kato N, <u>Inoue K</u>, Kohara M, Yoshida T. (役割) HCVとインターフェロンα のRNAをリアルタイムPCRで定量し、その結果を他の筆者とディスカッションした。</p>

28. Localized giant inflammatory polyposis (filiform polyposis) with diverticula in ulcerative colitis. 潰瘍性大腸炎における憩室を伴う巨大炎症性ポリプの検討 (査読付)	共著	2003.9	J Gastroenterol 担当ページ 912-913	潰瘍性大腸炎 (UC) およびクローン病の患者の約10%から20%がさまざまな種類のポリープ状病変を伴っていることが報告されている。正しい診断のために、炎症性ポリープと偽ポリープの区別は重要である。今回の検討で、UCに多発性憩室を伴う限局性巨大炎症性ポリポーシス (糸状ポリポーシス) のまれな症例を検討した。 Tajiri T, Tate G, Mitsuya T, Endo Y, <u>Inoue K</u> , Yoshiba M, Kunimura T, Morohoshi T. (役割) UC, クローン病でポリープを合併している症例を提供した。
29. Activation of the CKI-cdk-Rb-E2F pathway in full genome hepatitis C virus expressing cells. C型肝炎ウイルスの全長ゲノム発現細胞におけるCKI-cdk-Rb-E2F経路の活性化 (査読付)	共著	2004.1	J Biol Chem 担当ページ14532-14535	HCVの持続感染は肝細胞癌の発生と強く関連している。発がんメカニズムを明らかにする目的で、ヒト肝細胞にウイルス粒子を放出するHCVゲノムのCre/loxP発現システムを確立した。複製可能な完全長HCV RNAを発現する肝細胞は44日の継代後に増殖能の亢進が認められ、一方すべてのウイルスタンパク質を発現する肝細胞は有意な変化を示さなかった。その機序としてCDK活性の増加、Rbの過剰リン酸化、E2F活性化が認められた。 Tsukiyama-Kohara K, Tone S, Maruyama I, <u>Inoue K</u> , Katsume A, Nuriya H, Ohmori H, Ohkawa J, Taira K, Hoshikawa Y, Shibasaki F, Reth M, Minatogawa Y, Kohara M. (役割) HCV RNAの発現をRT-PCRでの定量をWestern blotでご確認を担当した。
30. Virological significance of low-level hepatitis B virus infection in patients with hepatitis C liver disease. C型慢性肝炎患における低レベルHBV増殖のウイルス学的意義 (査読付)	共著	2004.2	J Med Virol 担当ページ 224-227	C型肝炎ウイルス感染患者に一部認められるHBs抗原陰性の低レベルのHBV感染の臨床的、ウイルス学的意義は依然として不明である。低レベルのHBV増殖の検出は慢性肝炎、肝硬変、肝がんと病変が進展するにつれて増加し、HBVはHBs抗原陽性の患者に比べて肝組織から1/1000~1/10000検出された。HCVは肝発癌initiationに重要であるが、HCCへの進行にHBV重感染が寄与する可能性が示された。 Tanaka T, <u>Inoue K</u> , Abe A, Nuriya H, Hayashi Y, Aoki Y, Kawaguchi R, Kubota K, Yoshiba M, Koike M, Tanaka S, Kohara M. (役割) 血中、肝組織中 (がん部、非がん部) のHCV RNA HBV DNA HBVのmRNA1のレベルをリアルタイムPCRで測定した。
31. Mucinous cystadenoma of the pancreas 17 years after excision of gallbladder because of choledochal cyst. 総胆管嚢胞による胆嚢摘出17年後の膵臓の粘液性嚢胞腺腫 (査読付)	共著	2004.2	J Gastroenterol 担当ページ 182-184	総胆管嚢胞のために胆嚢の切除を受けた56歳の女性は、上部腹部超音波検査によって膵臓の腫瘍性病変が特定されたが、増大がなかったため、手術は実施せず、血清腫瘍マーカーの上昇もなかった。その後Dupan-2が上昇し、精査の結果膵臓の体尾部に多房性嚢胞性腫瘍が認められた。胆嚢嚢胞に関連する膵臓の膵粘液嚢胞腺腫はこれまで報告がない。 Tajiri T, Tate G, Inagaki T, Kunimura T, <u>Inoue K</u> , Mitsuya T, Yoshiba M, Morohoshi T. (役割) 症例の提供を行い、光学顕微鏡レベルの病理像と画像の関連性を検討した。
32. Possible prevention of fulminant hepatic failure in four children with acute severe hepatitis. 4例の小児重症肝炎を劇症型肝不全に進展することを阻止する試み (査読付)	共著	2004.4	J Gastroenterol 担当ページ 399-400	小児の急性肝不全は、成因不明例が多く脳症の評価も難しく予後が不良である。我々は4例の成因不明の小児劇症肝炎に対して、成人で用いている劇症化予知式を用いて、早期に免疫抑制療法を主体とした治療介入することにより、内科的治療により救命することが可能であった。 Yoshiba M, Yamada M, <u>Inoue K</u> , Watanabe T, Kanesaka S, Isoyama K. (役割) 小児に重症肝炎の症例を担当で臨床データを集めて提供した。また既存ウイルスを否定するためにGBV-Cとハンタンウイルスの測定を行った (結果全て陰性)

<p>33. Histologic and immunohistochemical comparison of intraductal tubular carcinoma, intraductal papillary-mucinous carcinoma, and ductal adenocarcinoma of the pancreas. 膵管内管状癌、膵管内乳頭粘液性癌、膵臓の腺管癌の組織学的および免疫組織化学的比較。(査読付)</p>	共著	2004. 8	Pancreas 担当ページ117-119	膵管内管状腫瘍(ITC)と膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMC)の違いを分析するために、ITCの4症例、IPMCの6症例、および膵管腺がんの9症例の病理組織学的検討と免疫組織化学分析を実施した。IPMCおよびITCのPCNA-LIは低く、細胞異型も膵管癌と比較すると軽度で、IPMCが低悪性度の可能性が示された。 Tajiri T, Tate G, Kunimura T, <u>Inoue K</u> , Mitsuya T, Yoshiba M, Morohoshi T. (役割) 症例の提供と画像診断と病理診断の摺り合わせを行った。
<p>34. Osteopontin expression in proliferated bile ductules: the correlation with liver damage in fulminant hepatitis. 増殖胆管におけるオステオポンチン発現: 劇症肝炎における肝障害との相関(査読付)</p>	共著	2005. 1	Dig Dis Sci 担当ページ189-191	劇症肝炎の肝壊死の重症度を、炎症領域で増殖した胆管のオステオポンチン(OPN)発現を用いて急性型と亜急性型と比較検討した。急性型では、胆管の増殖細胞核抗原標識指数の値は非常に高かった。OPN発現は、肝硬変や正常肝胆管よりも急性型の増殖した胆管で高く、亜急性型の増殖胆管ではOPN発現が減少することが示された。OPNの発現は肝細胞破壊と再生の重要な指標で、その発現メカニズムは病態解明の点で重要である。 Tajiri T, Tate G, Kunimura T, Endo Y, <u>Inoue K</u> , Mitsuya T, Morohoshi T, Yoshiba M. (役割) 症例の提供と臨床経過と病理診断、特に免疫染色の意義について病理医と摺り合わせを行った。
<p>35. Interferon combined with cyclosporine treatment as an effective countermeasure against hepatitis C virus recurrence in liver transplant patients with end-stage hepatitis C virus related disease. 肝移植をおこなった末期C型肝炎ウイルス関連肝疾患におけるC型肝炎ウイルス再発に対する効果的な対策としてのインターフェロンとシクロスポリン併用療法(査読付)</p>	共著	2005. 3	Transpl Proc 担当ページ 1233-1234	C型肝炎ウイルス(HCV)は、移植レシピエントにおける最も一般的な原因である。移植後の再発性HCVでは病期の進行が加速される。シクロスポリンは免疫抑制薬であるだけでなく、抗HCV薬でもあり、慢性C型肝炎に対するインターフェロンとシクロスポリンの併用治療の有益であった。HCV関連の移植後の患者に対してこのシクロスポリンを使い抗ウイルス治療を行うことが望ましいと考えられる。 <u>Inoue K</u> , Yoshiba M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。
<p>36. Intraductal tubular neoplasms of the pancreas: histogenesis and differentiation. 膵管内の管状腫瘍: 組織発生と分化について(査読付)</p>	共著	2005. 3	Pancreas 担当ページ116-118	膵臓の膵管内新生物は、WHO分類に従い膵管内乳頭粘液産生腫瘍(IPMN)と呼ばれる。ここでは、膵管内管状癌(ITC)の形態学および免疫組織化学的特徴が膵管内乳頭粘液癌(IPMC)のそれとはかなり異なることを検討した。膵管内膵腫瘍は胃腸分化を伴うtypeと膵管分化を伴うtypeに分けられた。私たちのデータは、ITCは膵管上皮から直接発生し膵管分化を有することを示した。本検討はWHOおよびAFIPの膵臓腫瘍の分類の再検討の必要性を示唆している。 Tajiri T, Tate G, Inagaki T, Kunimura T, <u>Inoue K</u> , Mitsuya T, Yoshiba M, Morohoshi T. (役割) 症例の提供と画像診断と病理診断の摺り合わせを行った。
<p>37. Elevated cyclooxygenase-2 expression in patients with early gastric cancer in the gastric pylorus. 早期胃癌患者における幽門部のシクロオキシゲナーゼ-2発現上昇(査読付)</p>	共著	2005. 7	J Gastroenterol 担当ページ 691-693	手術後の十二指腸胃逆流は、胃癌のリスクを高める。胆汁逆流が手術を受けていない患者の胃癌の発症に影響を及ぼすかどうかを判断するため、胃幽門に由来する初期胃癌と他の場所から由来する胃癌のシクロオキシゲナーゼ-2(COX-2)免疫反応性を比較した。胆汁酸は、胃の発症に胆汁逆流がinitiatorの役割を果たし、ヒト胃細胞株でCOX-2発現を誘導した。 Yasuda H, Yamada M, Endo Y, <u>Inoue K</u> , Yoshiba M. (役割) 症例の提供と内視鏡と病理の結果の結果の摺り合わせを行った。

<p>38. Spatial and chronological differences in hepatitis B virus genotypes from patients with acute hepatitis B in Japan. 日本における急性B型肝炎患者のウイルス遺伝子型の空間的および時間的差異について (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2006.1</p>	<p>Hepatol Res 担当ページ 108-110</p>	<p>B型肝炎ウイルス (HBV) の遺伝子型を日本全国の485人の急性B型肝炎患者で検討した。92人がA、26人がBa、32人がBj、330人がC、5人がDであった。HBVは464人中5人の患者で持続感染した。遺伝子型Cは68%以上を占めるが、首都圏では34%が遺伝子型Aであった。遺伝子型Aは性感染により若い患者にまん延し、増加している。劇症化の結果は、遺伝子型Bjと関連した。 Sugauchi F, Orito E, Ohno T, Tanaka Y, Ozasa A, Kang JH, Toyoda J, Kuramitsu T, Suzuki K, Tanaka E, Akahane Y, Ichida T, Izumi N, <u>Inoue K</u>, Hoshino H, Iino S, Yotsuyanagi H, Kakumu S, Tomita E, Okanou T, Nishiguchi S, Murawaki Y, Hino K, Onji M, Yatsuhashi H, Sata M, Miyakawa Y, Ueda R, Mizokami M. (役割) 症例の提供とHBV genotypeの検討を行った。</p>
<p>39. Acute necrotizing esophagitis: role of nonsteroidal anti-inflammatory drugs. 急性壊死性食道炎：非ステロイド性抗炎症薬の役割 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2006.3</p>	<p>J Gastroenterol 担当ページ 194-195</p>	<p>急性壊死性食道炎 (ANE) は、上部消化管 (UGI) 出血の原因と考えられる希な疾患である。16人のANE患者の臨床的および内視鏡的所見と臨床経過の分析を3年間実施した。ANEは以前に報告されているよりも一般的で、上部消化管出血の鑑別診断に含める必要がある。ANEは、食道裂孔ヘルニアの高齢者やNSAIDを摂取している患者で、急性食道粘膜病変の特徴がある。 Yasuda H, Yamada M, Endo Y, <u>Inoue K</u>, Yoshiba M. (役割) 症例の提供と内視鏡診断と服薬の関係について検討を行った。</p>
<p>40. Possible association of vigorous hepatitis B virus replication with the development of fulminant hepatitis. 旺盛なB型肝炎ウイルス複製と劇症肝炎の発症との関連の可能性 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2006.4</p>	<p>J Gastroenterol 担当ページ 383-387</p>	<p>49歳の男性が劇症肝不全の発症を疑われ当院に紹介された。日本の透析クリニックで劇症B型肝炎が発生し、6人の患者のうち4人が死亡した。原因ウイルスの複製能力が、doubling timeから推察して非常に高かったと推察される。本症例報告は、複製能力の高いHBVが急速に広がり、これが劇症化に関連する臨床的な証明である。 <u>Inoue K</u>, Ogawa O, Yamada M, Watanabe T, Okamoto H, Yoshiba M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>41. Intracellular-diced dsRNA has enhanced efficacy for silencing HCV RNA and overcomes variation in the viral genotype. 細胞内でダイサーで切り出されたdsRNAは、HCV RNAをサイレンシングするのに有効で遺伝子型の違いを克服できる (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2006.6</p>	<p>Gene Ther. 担当ページ883-886</p>	<p>RNA干渉 (RNAi) は哺乳類細胞のウイルス複製の阻害に使用できるため、新しい抗ウイルス療法の有力な候補である。インターフェロン応答や細胞死を引き起こすことなく、RNAiはHCV RNAの複製とタンパク発現を効率的に抑制可能である。細胞内ダイサーにより切り出されたdsRNAは、RNAiを効率的に誘導しHCVの変異率が高くとも、HCV RNAをサイレンシングするための有力な治療戦略である。 Watanabe T, Sudoh M, Miyagishi M, Akashi H, Arai M, <u>Inoue K</u>, Taira K, Yoshiba M, Kohara M. (役割) ポスドクである筆頭筆者の指導教官として、研究の立案、施行、データ解析、論文文化をサポートした。</p>
<p>42. Severe steatosis resulted from anorexia nervosa leading to fatal hepatic failure. 神経性食欲不振による重度の脂肪肝は致命的な肝不全につながる。 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2006.7</p>	<p>J Gastroenterol 担当ページ 714-715</p>	<p>Anorexia Nervosaは、しばしば重症肝炎の原因になることが知られており、多くの場合は感染症を併発すると致死的であり、肝機能障害と免疫不全が背景に存在すると考えられる。本例は劇症化して感染症を併発したために致命的経過を辿った。 Sakaida M, Tanaka A, Ohta D, Takayanagi M, Kodama T, Suzuki K, <u>Inoue K</u>, Fujita Y, Maruyama M. (役割) 症例の提供と臨床経過の解析を行った。</p>

<p>43. Influence of genotypes and precore mutations on fulminant or chronic outcome of acute hepatitis B virus Infection. 急性B型肝炎ウイルス感染の劇症化、慢性化の転帰に及ぼす遺伝子型およびプレコア変異の影響 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2006.8</p>	<p>Hepatology 担当ページ 327-329</p>	<p>急性B型肝炎ウイルス (HBV) 感染の結果はさまざまであり、宿主およびウイルス因子の影響を受ける。1982年から2004年にかけて、急性HBV感染症の患者301人が日本で多施設横断研究に参加し、HBVの持続性はまれ (1%) でAeと関連していた。劇症肝炎は高頻度 (13%) であり、BjとHBeAgの欠如、ならびに急性HBV感染患者のプレコア変異による高い複製能力と関連していた。 Ozasa A, Tanaka Y, Orito E, Sugiyama M, Kang J-H, Hige S, Kuramitsu T, Suzuki K, Tanaka E, Okada S, Tokita H, Asahina Y, <u>Inoue K</u>, Kakumu S, Okanoue T, Murawaki Y, Hino K, Onji M, Yatsunashi H, Sakugawa H, Miyakawa Y, Ueda R, Mizokami M. (役割) 症例の提供と重症例の臨床経過、ウイルス量の変化の検討を行った。</p>
<p>44. Involvement of membrane-type bile acid receptor M-BAR/TGR5 in bile acid-induced activation of epidermal growth factor receptor and mitogen-activated protein kinases in gastric carcinoma cells. 胃癌細胞における上皮成長因子受容体およびマイトジェン活性化タンパク質キナーゼの胆汁酸誘発活性化における膜型胆汁酸受容体 M-BAR / TGR5 の関与 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2007.3</p>	<p>Biochem Biophys Res Commun 担当ページ155-157</p>	<p>胃腸管細胞の発癌に関与している胆汁酸は、細胞増殖とアポトーシスの原因となるシグナル伝達経路に影響を及ぼすという点で、腫瘍プロモーターと特性を共有する。本研究では、胆汁酸によるAGSヒト胃癌細胞の治療後にEGFR-ERK1 / 2が活性化されることを実証した。AGS細胞では、DCはM-BARおよびADAM / HB-EGF依存性メカニズムを介してEGFRをトランス活性化することが示唆された。 Yasuda H, Hirata S, <u>Inoue K</u>, Mashima H, Ohnishi H, Yoshida M. (役割) 症例の提供とシグナル伝達分子のリン酸化の測定を行った。</p>
<p>45. Influence of Hepatitis B virus genotypes and G1896A mutation of fulminant outcome of acute infection. B型肝炎ウイルスの遺伝子型と急性感染症の劇症の結果のG1896A変異の影響。(査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2007.3</p>	<p>Hepatology International 担当ページ 105</p>	<p>劇症肝炎にはgenotype Bjが関係し、また precoreのstop codonのある増殖力の強いクローンがHBVの急性感染による劇症化と関与することが明らかになった。またG1896Aの変異が劇症化と密接に関連し、これが増殖力の亢進と関連する可能性が示された。 Sugauchi F, Orito E, Tanaka Y, Kang J-H, Suzuki K, Tanaka E, Akahane Y, Ichida, T, Izumi N, <u>Inoue K</u>, Yotsuyanagi H, Kakumu S, Okanoue T, Nishiguchi S, Murawaki Y, Hino K, Onji M, Yatsunashi H, Sata M, Mizokami M. (役割) 症例の提供と臨床例全体の経過とウイルス変異の関連性の検討を行った。</p>
<p>46. Evaluation of a cyclophilin inhibitor in hepatitis C virus-infected chemically induced mice in vivo. C型肝炎ウイルスを感染させたヒト化肝臓キメラマウスを用いたシクロフィリン阻害剤の評価 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2007.4</p>	<p>Hepatology 担当ページ 921-928</p>	<p>シクロスポリンA (CsA) はHCVサブゲノムレプリコンの複製を阻害し、この効果はその免疫抑制作用によって媒介されないと考えられている。CsAに由来する新規非免疫抑制性シクロフィリン阻害剤であるDEBIO-025は、CsAよりもin vitroでHCV複製を強力に阻害する。DEBIO-025はCsAよりも忍容性が高く、その抗HCV効果はin vivoでPeg-IFNと組み合わせて相乗効果を示した。 <u>Inoue K</u>, Umehara T, Ruegg UT, Yasui F, Watanabe T, Yasuda H, Dumont JM, Scalfaro P, Yoshida M, Kohara M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>

<p>47. Full-length sequences of subgenotypes IIIA and IIIB hepatitis A virus isolates: Characterization of genotype III HAV genomes. HAVサブジェノタイプIIIAおよびIIIB 完全長配列解析による、遺伝子型III HAVゲノムの特徴について (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2007.6</p>	<p>Virus Res 担当ページ117-120</p>	<p>ヒトA型肝炎ウイルス (HAV) 株のゲノム不均一性の範囲を解明し、ゲノム全体での遺伝子型III HAV株の特性を明らかにするために、3つのサブジェノタイプIIIA分離株の完全長配列 (HA-JNG04-90F、HA-JNG08-92F、およびHAJ95-8F) および1つのIIIB分離株 (HAJ85-1F) を決定した。IIIAおよびIIIBの極端な5'末端配列は、よく保存されていた。ドメインIの小さなループの形成に關与するnt 20でのGの単一塩基欠失は、IIIAとIIIBの両方に特徴的であった。 Endo K, Takahashi M, Masuko K, <u>Inoue K</u>, Akahane Y, Okamoto H. (役割) A型肝炎の重症化例、劇症化例の検体を集め岡本教授と一緒にそのウイルス学的解析 (岡本グループ) と臨床症状・臨床像 (井上、赤羽) を行った。</p>
<p>48. Hepatitis C virus RNA kinetics in chimeric mice with human hepatocyte during antiviral therapy. ヒト化肝臓を有するキメラマウスにおける抗ウイルス療法中のC型肝炎ウイルスRNA動態 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2007.6</p>	<p>Hepatology 担当ページ 2049-2050</p>	<p>免疫抑制活性のないサイクロフィリンインヒビターのDEBIO-25は、ヒト化肝臓キメラマウスにHCVを感染させたあとIFNを併用すると、抗ウイルス作用は相乗効果を示した。抗ウイルス療法施行中のウイルスの減衰をIFNとDEBIO-25単独療法と併用で比較すると、この2剤の併用は相乗効果を示すことが明らかになった。 <u>Inoue K</u>, Watanabe T, Yasuda H, Yoshida M, Kohara M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>49. Liver target delivery of small interfering RNA to the HCV gene by lactosylated cationic liposome. ラクトシル化カチオンリポソームによる肝臓標的 drug delivery によるHCVにたいする低分子干渉RNAの導入 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2007.11</p>	<p>J Hepatol 担当ページ 745-747</p>	<p>RNA干渉は、抗ウイルス療法として有望な治療として可能性が見込まれる。以前、C型肝炎ウイルス (HCV) 指向性低分子干渉RNA (siRNA; siE) がHCVレプリコン細胞を使用してHCV複製を効率的に阻害することを報告した。今回の結果は、我々が開発したCL-LA5がsiRNAを肝臓に導く優れたリポソームであることを示している。したがって、CL-LA5は、肝疾患、特にC型肝炎を標的としたsiRNA療法に有用である。 Watanabe T, Umehara T, Yasui F, Nakagawa S, Yano J, Ohgi T, Sonoke S, Satoh K, <u>Inoue K</u>, Yoshida M, Kohara M. (役割) ポスドクである筆頭筆者の指導教官として、研究の立案、施行、データ解析、論文化をサポートした。</p>
<p>50. Efficacy of combination therapy with pegylated Interferon and Ribavirin in terms of gender, age, and body mass index in patients with chronic C belonging to serogroup 1 and with high viral load. セログループ1で抗ウイルス量の慢性C患者ウイルス肝炎患者に対するペグ化インターフェロンとリバビリンの併用療法の有効性について性別、年齢、BMIの検討 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2008.2</p>	<p>St. Marianna Med. J. 担当ページ 216-217</p>	<p>PEG-Ribによる抗ウイルス治療は約50%に有効であった。効きにくい因子として、女性、高齢、肥満が認められた。 Okuse C, Shibuya A, Itoh F, <u>Inoue K</u>, Ohkawa S, Komatsu T, Saito S, Shimizu H, Suzuki M, Sekiyama K, Takatsuka K, K Tanaka and Kanagawa Liver Study Group. (役割) 症例の提供と多変量解析のサポートを行い、研究のデザインとディスカッションの内容について議論を行った。</p>
<p>51. Predicting the success of endoscopic transpapillary gallbladder drainage for patients with acute cholecystitis during pretreatment evaluation. 急性胆嚢炎患者に対する内視鏡的経乳頭胆嚢ドレナージが成否を治療前に予知 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2008.8</p>	<p>Can J Gastroenterol 担当ページ682-684</p>	<p>内視鏡的経乳頭胆嚢ドレナージ (ETGBD) は急性胆嚢炎の効果的な治療法であると報告されている。しかし技術的困難のためより広範な適応が妨げられている。このような困難の発生を予測できる症例評価により、急性胆嚢炎の治療に対するETGBDの受け入れが増加するはずだ。胆嚢短軸の長さや壁厚の超音波検査は、急性胆嚢炎患者の治療前評価中のETGBD技術的困難の重要な予測因子として有用である。 Ogawa O, Yoshikumi H, Maruoka N, Hashimoto Y, Kishimoto Y, Tsunamasa W, Kuroki Y, Yasuda H, Endo Y, <u>Inoue K</u>, Yoshida M. (役割) 症例の提供と画像を解析を解析した。</p>

<p>52. Plasma exchange in combination with online-hemodiafiltration as a promising method for purifying the blood of fulminant hepatitis patients. 劇症肝炎患者の血液浄化の有望な方法としてのオンライン血液透析濾過と血漿交換の組み合わせ。(査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2008.11</p>	<p>Hepatology Research 担当ページ 46-51</p>	<p>劇症肝炎は、さまざまな病因によって引き起こされる難治性の疾患である。人工肝補助療法は、出血傾向、肝性昏睡、脳浮腫などの重篤な症状を抑制するために使用される対症療法である。オンライン血液透析濾過と組み合わせた血漿交換は、劇症肝炎患者の血液を浄化するための有望で効果的な方法である。 <u>Inoue K</u>, Kourin A, Watanabe, Yamada M, Yasuda H, Yoshiba M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>53. Upper Gastrointestinal Bleeding in Patients Receiving Dual Antiplatelet Therapy after Coronary Stenting. 冠動脈ステント留置後に二重抗血小板療法を受けている患者の上部消化管出血 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2009.1</p>	<p>Intern Med 担当ページ1726-1728</p>	<p>冠動脈性心臓病に対する薬物溶出ステント埋め込み後のデュアル抗血小板療法中に、上部消化管 (UGI) 出血のリスクと併用抗分泌薬の保護効果を調査した。胃酸分泌抑制薬の併用は、UGI 出血のリスク低下と関連していた。しかしPPIの使用は、二重抗血小板療法の効果の減弱に関与する危険性が示された。 Yasuda H, Yamada M, Sawada S, Endo Y, <u>Inoue K</u>, Asano F, Takeyama Y, Yoshiba M. (役割) 症例の提供と服薬のコンプライアンスを検討した。</p>
<p>54. Efficacy of Interferon β Combined With Cyclosporine Induction and Intensified Therapy for Retreatment of Chronic Hepatitis C. C型慢性肝炎再治療におけるインターフェロンβとシクロスポリンを組み合わせた導入および強化療法の有効性 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2009.1-2</p>	<p>Transplant Proc 担当ページ 246-249</p>	<p>C型肝炎ウイルス再感染は、肝移植後の大きな課題である。これらの患者に対する効果的な治療法はない。peg化-IFNリバビリン併用療法に失敗した慢性C型肝炎患者に対するIFNβの6分割投与とシクロスポリンAの4分割投与のSVRは59%であった。すべての副作用は可逆的であった。 <u>Inoue K</u>, Watanabe T, Yamada M, Yoshikumi H, Ogawa O, Yoshiba M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>55. Artificial Liver Support System Using Large Buffer Volumes Removes Significant Glutamine and Is an Ideal Bridge to Liver Transplantation. 大容量の緩衝液を使用した人工肝補助療法は、有意にグルタミンの除去が可能で肝臓移植への理想的な橋渡し療法である (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2009.1-2</p>	<p>Transplant Proc 担当ページ 259-261</p>	<p>劇症肝炎はさまざまな病因からなる難治性疾患である。人工肝補助療法は、脳浮腫などの劇症肝炎の重篤な症状を制御するために使用され、術後の神経障害を抑制する重要な治療である。総バッファ量と除去されたGlnの血漿等価量の間には有意な関係があり、大量の緩衝液を使用した血液透析濾過と組み合わせた血漿交換は、肝臓移植への有望で効果的なブリッジング方法である。 <u>Inoue K</u>, Kourin A, Watanabe T, Yamada M, Yoshiba M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>56. Case-control study for the identification of virological factors associated with fulminant hepatitis B. 劇症B型肝炎に関連するウイルス学的因子の同定のためのケースコントロール研究 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2009.7</p>	<p>Hepatology Res 担当ページ 649-651</p>	<p>宿主およびウイルス因子は劇症B型肝炎 (FHB) の発症に関与する可能性があるが、FHBの発症と関係するウイルス学的因子を解明するための症例対照研究はなかった。本研究により高HBV DNA レベル、遺伝子型B1 / B_j、遺伝子変異A1762T / G1764A、G1896A、G1899A、およびA2339G変異は有意に高頻度であった。 Kusakabe A, Tanaka Y, Mochida S, Nakayama N, <u>Inoue K</u>, Sata M, Isoda N, Kang J-H, Sumino Y, Yatsuhashi H, Takikawa Y, Kaneko S, Yamada G, Karino Y, Tanaka E, Kato J, Sakaida I, Izumi N, Sugauchi F, Nojiri S, Joh T, Miyakawa Y, Mizokami M. (役割) 症例の提供と遺伝子解析の一部であるウイルス量の定量とプレコア、コアプロモーターの解析を行った。</p>

<p>57. Hepatitis B virus reactivation in adjuvant chemotherapy for breast cancer. 乳癌の補助化学療法におけるB型肝炎ウイルスの再活性化 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2010.1</p>	<p>Breast Cancer 担当ページ 2-3</p>	<p>化学療法やコルチコステロイドの使用などの免疫抑制療法は、B型肝炎ウイルス (HBV) の再活性化を促進する可能性がある。これらのほとんどは、HBsAg 陽性の患者で発症する。コルチコステロイドを使用しない乳癌の化学療法中にHBsAg陰性患者のHBV再活性化の症例を経験し、化学療法を開始する前に、HBsAg、HBsAb、およびHBcAbを確認し、化学療法中に高感度PCR法で監視する必要が明らかにされた。 Ide Y, Ito Y, Takahashi S, Tokudome N, Kobayashi K, Sugihara T, Hattori M, Yokoyama M, Uchiyama A, <u>Inoue K</u>, Sakurai N, Hatake K. (役割) 筆頭筆者は私が指導した研修医であり、症例の臨床的ウイルス学的解析をサポートした。</p>
<p>58. Liver support systems as perioperative care in liver transplantation - historical perspective and recent progress in Japan. 肝移植における周術期ケアとしての肝補助療法-日本における歴史的展望と最近の進歩 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2010.9</p>	<p>Minerva Gastroenterol Dietol 担当ページ 345-353</p>	<p>Cochrane Hepato-Biliary Groupによる劇症肝不全 (PHF) に対する人工肝臓サポート (ALS) システムの有効性のメタ分析は、以前に開発されたすべてのALSシステムがPHFに対して生存率の改善という点で無効であることを示した。これは、PHFの唯一の治療法は肝移植であるという見解を支持している。しかし日本の人工肝補助療法は、肝機能が回復するか、肝移植が可能になるまで、患者を良好な状態に維持するための効果的治療法である。 <u>Inoue K</u>, Watanabe T, Hirasawa H, Yoshida M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>59. Detection of hepatitis B and C viruses in almost all hepatocytes by modified PCR-based in situ hybridization. 改良したPCRベースのin situハイブリダイゼーションによるほとんどすべての肝細胞でB型およびC型肝炎ウイルスを検出した (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2010.11</p>	<p>J Clin Microbiol 担当ページ 3843-3851</p>	<p>PCRベースのin situハイブリダイゼーション (PCR-ISH) を使用して、組織内の病原体の分布と細胞内の局在を明らかにすることは病態解明上重要である。新しいPCR-ISHメソッドを使用して、肝臓切片のHBVおよびHCVゲノム存在を視覚化することに成功した。本研究ではウイルスが慢性化の段階で肝臓全体に広がり、癌化するとウイルスは減少することを明らかにした。 Nuriya H, <u>Inoue K</u>, Tanaka T, Hayashi Y, Hishima T, Funata N, Kaji K, Hayashi S, Kaneko S, Kohara M. (役割) 筆頭筆者は私が指導した大学院生であり、実験の立案、施行、データ解析、論文文化のサポートを行った。</p>
<p>60. Japanese-style intensive medical care improves prognosis for acute liver failure and the perioperative management of liver transplantation. 日本式の集中治療は急性肝不全の予後と肝移植の周術期管理を改善する (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2010.12</p>	<p>Transplant Proc 担当ページ 4109-4112</p>	<p>急性肝不全に対する日本の集中治療は、高い救命率を可能としている。治療システムとして、基礎疾患の治療とともに人工肝補助療法は必須である。高性能膜を使用した大量血液透析濾過に血漿交換を組み合わせる方法を標準システムとした。大量のバッファーを用いるため、低分子量の有毒物質を効率的に除去し、重度の劇症肝炎患者の昏睡から回復させ、患者が移植を受けられる可能性を高めることが可能となった。 <u>Inoue K</u>, Watanabe T, Takahashi H, Yoshida M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>61. Reply to "Significance of a Single-Nucleotide Primer Mismatch in Hepatitis B Virus Real-Time PCR Diagnostic Assays". B型肝炎ウイルスのリアルタイムPCR診断におけるプライマーの一塩基ミスマッチの重要性」への返信。 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2011.12</p>	<p>J Clin Microbiol 担当ページ 4420</p>	<p>HBVに対するreal time PCR systemを以前構築したが、このときのプライマーとプローブの組み合わせは一部のHBVに対して反応が不十分であることが判明した。そこでuniversalな新しいプライマー・プローブsystemを構築し、ここに報告する。 <u>Inoue K</u>, Kohara M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>

<p>62. Factors predicting the appearance of neutropenia in patients with advanced pancreatic cancer undergoing gemcitabine therapy. ゲムシタピン療法を受けている進行性膵臓癌患者における好中球減少症の出現を予測する因子 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2012. 5</p>	<p>Hepatogastroenterology 担当ページ 895-897</p>	<p>好中球減少症の出現を予測する因子を、塩酸ゲムシタピン (GEM) 療法を受けている進行性膵臓癌患者で評価した。対象は切除不能な進行性膵臓と診断され、GEM療法を受けた92人の患者であった。治療前のWBC、CA19-9および肝転移は、GEM療法後の重度の好中球減少症の出現に関連することが示された。 Yoneyama K, Katsumoto E, Kurihara T, Kogo M, Ikegami A, Imawari M, Shimada K, Yoshikumi H, <u>Inoue K</u>, Kiuchi Y. (役割) 筆頭筆者は私が指導した大学院生であり、実験の立案、施行、データ解析、論文化のサポートを行った。</p>
<p>63. Impairment of interferon regulatory factor-3 activation by hepatitis C virus core protein basic amino acid region 1. C型肝炎ウイルスコアタンパク質塩基性アミノ酸領域1によるインターフェロン調節因子-3活性化障害 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2012.11</p>	<p>Biochem Biophys Res Commun 担当ページ494-499</p>	<p>I型インターフェロンの重要な転写因子であるインターフェロン制御因子3 (IRF-3) は、C型肝炎ウイルス (HCV) によってそのシグナルが阻害される。我々の研究は、HCVコアタンパク質の重要な領域である塩基性アミノ酸領域1 (BR1) がIRF-3の二量体化と、NDV感染およびポリ (I : C) によって誘導されるリン酸化を阻害し、IRF-3を妨害することを明らかにした。IRF-3経路の回復がHCV感染の効果的な治療法である可能性を示唆している。 <u>Inoue K</u>, Tsukiyama-Kohara K, Matsuda C, Yoneyama M, Fujita T, Kuge S, Yoshida M, Kohara M. (役割) 筆頭筆者につき研究全体のデザイン立案し研究を施行した。共同研究者とディスカッションを行い、内容を統括して論文を執筆した。</p>
<p>64. Targeted induction of interferon-λ in humanized chimeric mouse liver abrogates hepatotropic virus infection. ヒト化キメラマウスを標的に肝臓にインターフェロン-λを導入することは肝向性ウイルス感染を阻止する (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2013. 3</p>	<p>PLoS One 担当ページ 2-4</p>	<p>IFNの標的臓器に発現させることを、肝刺激性チオン性リボソームと合成二本鎖RNAアナログ、pIC (LIC-pIC) を含む複合体で動物を処理することにより誘導可能となった。LIC-pICによるIFN-λの強い誘導は、ヒト肝細胞のみで起こり、IFN-λがヒト肝ウイルス感染に対する防御において重要な役割を果たすことを示された。 Nakagawa S, Hirata Y, Kameyama T, Tokunaga Y, Nishito Y, Hirabayashi K, Yano J, Ochiya T, Tateno C, Tanaka Y, Mizokami M, Tsukiyama-Kohara K, <u>Inoue K</u>, Yoshida M, Takaoka A, Kohara M. (役割) 各種細胞にリボソームによるポリICの導入について担当した。</p>
<p>65. Neuroendocrine carcinoma arising in a hepatitis C virus-infected liver: Mechanism of the tumor development may be similar to that of development of pancreatic neuroendocrine cells. C型肝炎ウイルスに感染した肝臓に発生する神経内分泌腫瘍の腫瘍発生のメカニズムは、膵神経内分泌腫瘍の発生メカニズムと同様である (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2014. 2</p>	<p>Pathol Int 担当ページ 81-83</p>	<p>C型肝炎ウイルスに感染した62歳の日本人男性の肝硬変肝に発生した神経内分泌腫瘍 (NC) について検討を行った。腫瘍細胞は高いN/C比を示し、多くのロゼットを形成し、CD56、シナプトフィジン、HepPar1、膵臓および十二指腸のホメオボックス1を発現した。MIB1の発現は65%であった。この患者のNCは、膵神経内分泌細胞の発達に作用する同じメカニズムを介して形成された可能性があることを示している。 Masunaga A, <u>Inoue K</u>, Mizukami H, Hayashi T, Mitsuya T. (役割) 症例の提供と免疫染色の解釈についてディスカッションをおこない、論文化の方向性を検討した。</p>
<p>66. In vivo therapeutic potential of Dicer-hunting siRNAs targeting infectious hepatitis C virus. 感染性C型肝炎ウイルスを標的とするダイサーにより切り出されたsiRNAの探索はin vivo治療の可能性が (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2014. 4</p>	<p>Sci Rep (Scientific Reports) 担当ページ2-4</p>	<p>RNA干渉 (RNAi) に基づいた治療法の開発は、2つの大きな問題に直面している。強力な活性を持つsiRNA配列の選択と、標的臓器への効率的なデリバリーである。最適化された多機能エンベロープ型ナノデバイスでのdh-siRNAの製剤化は、in vivoのヒト肝細胞で進行中の感染性HCV複製を抑制した。本研究は新たな治療法の可能性を示した。 Watanabe T, Hatakeyama H, Matsuda-Yasui C, Sato Y, Sudoh M, Takagi A, Hirata Y, Ohtsuki T, Arai M, <u>Inoue K</u>, Harashima H, Kohara M. (役割) ポスドクである筆頭筆者の指導教官として、研究の立案、施行、データ解析、論文化をサポートした。</p>

<p>67. Resistance to cyclosporin A derives from mutations in hepatitis C virus nonstructural proteins. シクロスポリン誘導体に対する耐性は、C型肝炎ウイルス非構造タンパク質の変異に由来する (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2014. 5</p>	<p>Biochemical and Biophysical Research Communications 担当ページ56-60</p>	<p>シクロスポリンA (CsA) は、シクロフィリンを標的とする免疫抑制剤である。C型肝炎ウイルス (HCV) の複製はCsAによって抑制され、NS5AのD2303H、S2362G、およびE2414Kの変異は、D2292E変異によるCsAに対する耐性を増強した。これらの二重～四重変異体は、CsAに耐性を示した。これら4つの変異は、NIM811またはDebio-025に対して耐性を示したが、それぞれの変異に起因するIC50値の変化は、Debio-025処理細胞で最も低かった。 Arai M, Tsukiyama-Kohara K, Takagi A, Tobita Y, <u>Inoue K</u>, Kohara M. (役割) 実験を立案し本治療法のfounderとして様々な助言を行いながら論文化のサポートをした。</p>
<p>68. Inhibitory effects of Pycnogenol® on hepatitis C virus replication. C型肝炎ウイルス複製に対するピクノジェノール®の抑制効果 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2015. 1</p>	<p>Antiviral Res. 担当ページ 94-99</p>	<p>慢性C型肝炎ウイルス (HCV) 感染は、肝臓のリスクを高める。フランスのマツ抽出物であるピクノジェノール®は、抗酸化および抗ウイルス効果の報告がある。抗ウイルス活性は、主成分のプロシアニジンやタキシフォリンよりも高かった。ピクノジェノール治療により、HCVレプリコン細胞株の活性酸素種が用量依存的に減少した。ピクノジェノール®は、現在の抗ウイルス剤の有効性を改善し、薬剤耐性HCVの排除に有用な天然物である。 Ezzikouri S, Nishimura T, Kohara M, Benjelloun S, Kino Y, <u>Inoue K</u>, Matsumori A, Tsukiyama-Kohara K. (役割) ピクノジェノールのin vitroにおける抗ウイルス効果の検討につき、留学生である筆頭筆者を指導しin vivoにおける効果も勘案して指導教授 (Tsukiyama-Kohara K.) とディスカッションを行い論文の統括のサポートを行った。</p>
<p>69. Successful conservative treatment of emphysematous gastritis. 気腫性胃炎の保存的治療の成功例の検討 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2015. 1</p>	<p>Intern Med 担当ページ195-196</p>	<p>気腫性胃炎は、予後が悪い非常にまれな疾患である。気腫性胃炎が疑われる場合、予後を改善するために、迅速な画像診断 (CTを含む) および早期の適切な治療を提供することが重要だ。 Takano Y, Yamamura E, Gomi K, Tohata M, Endo T, Suzuki R, Hayashi M, Nakanishi T, Hanamura S, Asonuma K, Ino S, Kuroki Y, Maruoka N, Nagahama M, <u>Inoue K</u>, Takahashi H. (役割) 症例の提供と画像解析をおこなった。</p>
<p>70. Serum DHCR24 Auto-antibody as a new Biomarker for Progression of Hepatitis C. C型肝炎の進行の新しいバイオマーカーとしての血清自己抗体DHCR24 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2015. 4</p>	<p>EBioMedicine 担当ページ 605-608</p>	<p>C型肝炎ウイルス (HCV) 感染症の病期を特定して発癌による死亡率を下げるための新しいバイオマーカーが必要である。血清DHCR24 Abレベルは、健常者よりもCHC患者、CHCよりもLCC、HCC-CよりもLCCで有意に高かった (すべての患者でP<0.0001)。DHCR24自己抗体は、HCV関連肝疾患の潜在的な非侵襲性バイオマーカーであり、PIVKA-IIおよびAFP陰性HCCの診断に有用な可能性が示された。 Ezzikouri S, Kimura K, Sunagozaka H, Kaneko S, <u>Inoue K</u>, Nishimura T, Hishima T, Kohara M, Tsukiyama-Kohara K. (役割) 検体の提供とデータの解釈を中心に他の筆者とディスカッションを行い、測定については直接指導を行った。</p>
<p>71. Severe refractory Clostridium difficile infection with good response to fecal microbiota transplantation: 重症治療不応性ディフィシル腸炎に対して糞便移植は良好な治療反応性を示した (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2016. 1</p>	<p>Nihon Shokakibyō Gakkai Zasshi 担当ページ56-57</p>	<p>偽膜性腸炎と診断された49歳の女性が、治療目的で当院に移送された。彼女はバンコマイシン塩酸塩およびメトロニダゾールでの治療に対して反応が不良であったため、糞便微生物叢移植を受けた。翌日には治療効果が観察され、3日以内に下痢は消失した。4日後の大腸内視鏡検査で偽膜の消失が明らかになり、退院後1年以内に再発は報告されなかった。 Asonuma K, Kuroki Y, Ino S, Hanamura S, Takano Y, Yamamura E, Gomi K, Nagahama M, <u>Inoue K</u>, Takahashi H. (役割) 新規治療につき、その安全性の確認を中心に検討を行った。</p>

72. Distribution of core hospitals for patients with fulminant hepatitis and late onset hepatic failure in Japan. 日本における劇症肝炎および遅発性肝不全患者のための中核病院の分布 (査読付)	共著	2016.1	Hepatol Res. 担当ページ10-11	急性肝不全患者の早期診断および適切な治療(抗ウイルス療法、免疫抑制療法、抗凝固療法など)はFHまたはLOHFを発症する患者数を減少させる可能性がある。したがって臨床データを蓄積して分析し、劇症化予知、早期治療介入に関して前向き臨床試験を実施する必要がある。Fujiwara K, Yokosuka O, <u>Inoue K</u> , Yasui S, Abe R, Oda S, Arata S, Takikawa Y, Ido A, Mochida S, Tsubouchi H, Takikawa H (役割) 筆頭筆者とともにアンケートを行いデータ解析をして、ディスカッションをおこなった。
73. Life-threatening emphysematous liver abscess associated with poorly controlled diabetes mellitus コントロール不良の糖尿病に関連する生命にかかわる気腫性肝膿瘍について (査読付)	共著	2017.5	BMC Res Notes 担当ページ 117-119	気腫性肝膿瘍は、ガス形成を伴う肝膿瘍として定義される。死亡率は27%と非常に高く、迅速な集中治療が必要である。気腫性肝膿瘍は、コントロール不良の糖尿病患者にしばしば観察され、致死率は非常に高くなる。発熱と倦怠感を示すDM患者は注意してfollowする必要がある。Takano Y, Hayashi M, Niya F, Nakanishi T, Hanamura S, Asonuma K, Yamamura E, Gomi K, Kuroki Y, Maruoka N, <u>Inoue K</u> , Nagahama M. (役割) 症例の提供と画像と原因菌の解析
74. Safety, Tolerability, and Preliminary Efficacy of the Anti-Fibrotic Small Molecule PRI-724, a CBP/ β -Catenin Inhibitor, in Patients with Hepatitis C Virus-related Cirrhosis: A Single-Center, Open-Label, Dose Escalation Phase 1 Trial. C型肝炎ウイルス関連肝硬変患者におけるCBP/ β -カテニン阻害剤である抗線維化小分子PRI-724の安全性、忍容性、および予備的有効性: 単一施設、非盲検、用量漸増第1相試験 (査読付)	共著	2017.9	EBioMedicine 担当ページ 79-81	肝炎ウイルス排除に成功しても肝硬変に進展する症例もある。今日有効な抗線維化薬物療法は存在しない。HCV肝硬変患者におけるWntシグナル伝達の小分子モジュレーターであるPRI-724の安全性、忍容性、および抗線維化効果を評価した。この研究では、10週間または12週間にわたる静脈内投与が、HCV肝硬変患者に忍容性が高く、ヒトにおいても抗線維化作用の可能性あることを見いだした。Kimura K, Ikoma A, Shibakawa M, Shimoda S, Harada K, Saio M, Imamura J, Osawa Y, Kimura M, Nishikawa K, Okusaka T, Morita S, <u>Inoue K</u> , Kanto T, Todaka K, Nakanishi Y, Kohara M, Mizokami M. (役割) 本治験の安全性データをリアルタイムに検討し、治験継続の可否を判断した。
75. Nationwide survey for acute liver failure and late-onset hepatic failure in Japan. 日本における急性肝不全および遅発性肝不全の全国調査 (査読付)	共著	2018.1	J Gastroenterol 担当ページ 752-760	日本における急性肝不全(ALF)と遅発性肝不全(LOHF)の最近の状況を明らかにするために、全国調査を実施した。ALS、LOHFともに患者の年齢が高く、肝外の基礎疾患の割合が高いという特徴があった。肝炎ウイルス感染は最も頻度の高い病因であったが、この病因の患者の割合は以前の cohorts と比較して減少し、アルコールが増加した。ALFおよびLOHFの患者の転帰は近年改善されていない。Nakao M, Nakayama N, Uchida Y, Tomiya T, Ido A, Sakaida I, Yokosuka O, Takikawa Y, <u>Inoue K</u> , Genda T, Shimizu M, Terai S, Tsubouchi H, Takikawa H, Mochida S. (役割) 研究内容の立案と症例の提供
76. Proposed diagnostic criteria for acute-on-chronic liver failure in Japan. 日本におけるacute on chronic肝不全の診断基準案 (査読付)	共著	2018.3	Hepatol Res 担当ページ 219-221	日本で急性慢性肝不全(ACLF)の診断基準を確立するために、日本の難治性肝胆道疾患研究グループは、アジア太平洋肝臓研究協会(APASL)基準は日本人患者のスクリーニングに適し、肝・慢性肝不全研究会(EASL-Clif)コンソーシアムの基準は、患者の状態の重症度を分類するのに役立った。これらの新しい基準の有用性は、将来の大規模 cohorts で前向きに検証されるべきである。Mochida S, Nakayama N, Ido A, <u>Inoue K</u> , Genda T, Takikawa Y, Sakaida I, Terai S, Yokosuka O, Shimizu M, Takikawa H. (役割) 研究の立案と症例の検討、重症度判定基準について議論をおこなった。

<p>77. A multicenter pilot survey to clarify the clinical features of patients with acute-on-chronic liver failure in Japan. 日本におけるacute on chronic肝不全患者の臨床的特徴を明らかにするための多施設パイロット調査研究 (査読付)</p>	共著	2018.3	Hepatol Res 担当ページ 303-309	<p>日本で急性慢性肝不全 (ACLF) の診断基準を確立するために、急性代償不全を示す慢性肝疾患患者における海外基準の有用性を調べるために、多施設パイロット調査が実施された。APASL の定義は、ACLFの日本人患者のスクリーニングに適しており、EASL-Clifコンソーシアムの基準は結果の予測に有用であった。 Nakayama N, Uemura H, Uchida Y, Tomiya T, Ido A, <u>Inoue K</u>, Genda T, Takikawa Y, Sakaida I, Terai S, Yokosuka O, Shimizu M, Takikawa H, Mochida S. (役割) 症例を提供して先に検討した日本の診断基準案の有用性を明らかにした。</p>
<p>78. An intensive medical care network led to successful living-donor liver transplantation in late-onset hepatic failure with disseminated Staphylococcus aureus infection. 集中治療ネットワークは、播種性黄色ブドウ球菌感染症を伴う遅発性肝不全における生体肝移植の成功をもたらした (査読付)</p>	共著	2019.4	Hepatol Res 担当ページ 303-309	<p>治療ネットワークでは、肝臓専門医と移植外科医が協力して重度の感染を克服し、彼らの努力により移植が成功した。オンライン血液透析ろ過は、急性肝不全に不可欠な治療オプションである。感染制御は肝移植(LT)にとって重要であり、集中的な医療ネットワークが成功した生体ドナーLTをもたらした。 Kure R, Uehara N, <u>Inoue K</u>, Kogiso T, Kodama K, Tani ai M, Tokushige K, Nakano M, Egawa H, Yamamoto M. (役割) 症例の提供と論文化の指導と論文の執筆校正を行った。</p>
<p>79. Dotinurad: a clinical pharmacokinetic study of a novel, selective urate reabsorption inhibitor in subjects with hepatic impairment. ドチヌラド: 肝障害のある被験者における新規の選択的尿酸再吸収阻害剤の臨床薬物動態研究 (査読付)</p>	共著	2019.11	Clin Exp Nephrol 担当ページ 26-31	<p>ドチヌラドは、尿酸トランスポーター1 (URAT1) の阻害により血清尿酸レベルを低下させる、新規の尿酸塩再吸収阻害剤である。肝障害および正常な肝機能を有する被験者における薬物動態 (PK)、薬力学 (PD)、およびドチヌラドの安全性を肝予備能毎に比較した。この研究は、PK、PD、ドチヌラドの安全性に対する肝予備能は影響なく、ドチヌラドは肝機能障害のある患者に用量調整なしで使用できる可能性がある。 Kumagai Y, Sakaki M, Furihata K, Ito T, <u>Inoue K</u>, Yoshida T, Matsumoto S, Furuno K, Hagino A. (役割) 症例の提供と薬物動態のデータと安全性の確認</p>
<p>80. Intention-to-treat assessment of glecaprevir + pibrentasvir combination therapy for patients with chronic hepatitis C in the real world. リアルワールドにおける慢性C型肝炎患者に対するグレカプレビル+ピブレンタスビルの併用療法の治療効果の治療企図解析 (査読付)</p>	共著	2019.12	Hepatol Res 担当ページ 1365-1369	<p>実際の世界でC型肝炎ウイルス (HCV) に感染した患者に対するグレカプレビル+ピブレンタスビル (GLE / PIB) 療法の問題と有効性を評価した。Glecaprevir + pibrentasvirは、GT-1およびGT-2患者で顕著な抗HCV効果を示したが、GT-3b患者では十分な治療効果を示せなかった。この治療法は安全であるが、高齢者とドロップアウト患者を慎重に検討する必要がある。 Tamori A, <u>Inoue K</u>, Kagawa T, Takaguchi K, Nouse K, Iwasaki Y, Minami M, Hai H, Enomoto M, Kawada N. (役割) 症例の提供と統計解析と治療不応例の遺伝子解析</p>
<p>81. Pharmacokinetics and Safety of a Single Oral Dose of Peficitinib (ASP015K) in Japanese Subjects With Normal and Impaired Hepatic Function. 正常および肝機能障害の日本人被験者におけるペフィシチニブ (ASP015K) の単回経口投与の薬物動態および安全性 (査読付)</p>	共著	2019.12	Clin Pharmacol Drug Dev. (online) https://link.springer.com/article/10.1007/s40261-019-00873-7 担当ページ 2-6	<p>ペフィシチニブ (ASP015K) は、関節リウマチ (RA) の治療用に開発された新規ヤススキナーゼ阻害剤である。肝障害の重症度毎にPKを検討した。ペフィシチニブを1回投与では、軽度の肝障害の中では正常者と比較して変化がなかったが、中等度の肝障害のある被験者では曝露がほぼ2倍になった。中等度の肝機能障害を有するRA患者では、ペフィシチニブの投与量減少を考慮する必要がある。 Miyatake D, Shibata T, Toyoshima J, Kaneko Y, Oda K, Nishimura T, Katashima M, Sakaki M, <u>Inoue K</u>, Ito T, Uchida N, Furihata K, Urae A. (役割) Child-Pugh B, C患者における薬物動態の解析と安全性の確認</p>

<p>82. A prospective trial of vaccine to prevent hepatitis B virus reactivation after hematopoietic stem cell transplantation. 造血幹細胞移植後のB型肝炎ウイルスの再活性化を防ぐワクチンの前向き研究（査読付）</p>	共著	2020.2	<p>Bone Marrow Transplant. (online)https://doi.org.10.1038/s441409-020-0833-5 担当ページ 2-4</p>	<p>B型肝炎ウイルス（HBV）の再活性化は、すでに治癒したHBV既往感染患者の造血幹細胞移植（HSCT）後に頻繁に発生することが報告されている。HSCTを受けた46人の患者のうち6人がHBVの再活性化を示し、2年の累積再活性化率は22.2%であった。HBV再活性化に関連する要因として、免疫抑制薬の中止とHBsAbの力価が考えられる。本研究ではワクチンの安全性と有効性の基礎検討を行った。 Nishikawa K, Kimura K, Kanda Y, Sugiyama M, Kakihana K, Doki N, Ohashi K, Kwan Bae S, Takahashi K, Ishihara Y, Mizuno I, Onishi Y, Onozawa M, Onizuka M, Yamamoto M, Ishikawa T, <u>Inoue K</u>, Kusumoto S, Hashino S, Saito H, Kanto T, Sakamaki H, Mizokami M. (役割) 治験における安全性を担保し有効性を確認した。</p>
<p>(その他) (学会発表)</p> <p>1. Change in MELD score is a useful tool of Liver transplantation for patients with fulminant hepatic failure under ALS. MELDスコアの変化は人工肝補助療法下の患者の肝移植を考慮する上で有用である。</p> <p>2. Modified PCR-based in situ hybridization reveals accurate distribution of hepatitis B and C viruses. 改変したPCR法とin situ ハイブリダイゼーション法はHBVとHCVの正確な分布を明らかにする。</p> <p>3. Appropriate Liver Support Systems as Perioperative Care in Liver Transplantation Improves Survival. 周術期ケアとしての適切な人工肝補助は肝移植の生存率を改善する</p> <p>4. Sophisticated in situ PCR and immunohistochemistry is helpful to understand pathogenesis of chronic hepatitis and fulminant hepatitis. 改良したin situ PCRと免疫染色は慢性肝炎と劇症肝炎の病態を理解する上で有用である</p> <p>5. Online Hemodiafiltration Is a Promising Method To Give a Greater Chance of Undergoing Transplantation. オンライン血液透析濾過は肝移植を施行するチャンスをより大きくする</p>	-	<p>2011年2月</p> <p>2011年4月</p> <p>2011年6月</p> <p>2011年11月</p> <p>2012年5月</p>	<p>21st The Asian Pacific association for the study of the liver (Bangkok) 第21回アジア太平洋肝臓学会 (バンコク)</p> <p>The International Liver Congress 2011, 46th annual meeting of the European Association for the Study of the Liver (Berlin) 第46回欧州肝臓学会 (ベルリン)</p> <p>The 2011 Joint International Congresss of ILTS, ELITA, & LICAGE (Balencia) 2011年国際肝移植学会合同会議 (バレンシア)</p> <p>The 62nd Annual Meeting of the American Association for the Liver Diseases, (San Francisco) 第62回アメリカ肝臓病学会 (サンフランシスコ)</p> <p>ILTS 18th Annual International Congress (San Francisco) 第18回国際肝移植学会 (サンフランシスコ)</p>	<p>人工肝補助療法を施行すると殆どの患者は覚醒するが、MELD scoreの変化は移植適応を判断する上で有用である。 <u>Inoue K</u>, Yoshiba M.</p> <p>In situ PCRの方法を改良して、病理組織標本を観察すると、非がん部ではHCV HBVともに殆どの細胞に広がっていた、stagingの進展と伴に分布は変化した。 <u>Inoue K</u>, Nuriya H, Kohara M.</p> <p>日本では大量の緩衝液で血液を浄化する人工肝補助療法を施行している。このような方法で血液浄化を施行すれば、肝移植待機中の患者の予後を改善し移植の適応も拡大する。 <u>Inoue K</u>.</p> <p>新しく開発したin situ PCRの方法でHCV, HBVの遺伝子の肝臓の組織内の広がり、免疫染色で遺伝子発現を検討したところ慢性肝炎の段階ですべての肝細胞にHCV HBVの遺伝子は広がっていたが、遺伝子が発現されるのは一部であった。劇症肝炎でも遺伝子は全ての肝細胞で陽性であり、肝炎発症前の標本では遺伝子も強発現していた。 <u>Inoue K</u>, Yoshiba M, Kohara M.</p> <p>緩衝液をon-lineで供給する方法により、前希釈法を用いて大量に置換液を使用する血液透析濾過が以前より容易に施行可能となった。この方法は術前の管理を改善して移植のチャンスをこれまでよりあげることができる。 <u>Inoue K</u>, Yoshiba M.</p>

<p>6. Hepatitis C virus core protein basic amino acid region 1 is responsible for the impairment of IRF-3 activation. C型肝炎ウイルスコア蛋白塩基性アミノ酸領域IはIRF-3活性化障害の責任部位である</p>	-	2013年4月	<p>48th Annual Meeting of the Europeans Association for the Study of the Liver (Amsterdam) 第48回欧州肝臓学会 (アムステルダム)</p>	<p>RNAウイルス感染後の自然免疫の第一線としてIRF-3が活性化されインターフェロンβが誘導されるが、HCVコア蛋白の塩基性アミノ酸領域IがIRF-3の二量体化を抑制し、核移行を妨げることによりインターフェロンβの誘導を阻害している。 <u>Inoue K</u>, Kohara M.</p>
<p>8. Overview of artificial liver support system in the world and new promising methods in Japan. 世界の血液浄化療法の外観と日本の新たな有望な方法</p>	-	2016年2月	<p>25th Asian Pacific Association for the Study of the Liver (Tokyo) 第25回アジア太平洋肝臓学会 (東京)</p>	<p>これまで本邦ではnon-biologicalな方法として血液透析、交換輸血、チャコールによる吸着などの方法が血液浄化療法として用いられてきたが、何れの方法も不十分であった。物質の除去効率に優れたオンライン血液透析濾過は肝性昏睡に陥った殆どの患者を覚醒させることが可能である。 <u>Inoue K</u>, Yoshiba M.</p>
<p>9. Effective early interventions are essential to attain high survival rate. 有効な早期治療介入は高い救命率を達成する上で必須である。</p>	-	2016年2月	<p>25th Asian Pacific Association for the Study of the Liver (Tokyo) 第25回アジア太平洋肝臓学会 (東京)</p>	<p>急性肝不全の救命率を向上させるためには、急性肝炎重症型のうちに劇症化を予知して、早期に治療介入を行うことが重要である。 <u>Inoue K</u>.</p>
<p>10. Safety and efficacy of glecaprevir plus pibrentasvir combination therapy for patients with chronic hepatitis C virus in real world, multicenter study. C型慢性肝炎に対するグレカプレビル、ピブレンタスビル併用療法の実臨床における安全性と有効性の検討 多施設共同研究</p>	-	2018年10月	<p>The 69th Annual Meeting of the American Association for the Liver Diseases;2018; San Francisco, U.S.A. 第69回アメリカ肝臓学会 (サンフランシスコ)</p>	<p>グレカプレビルとピブレンタスビルの組み合わせによる治療の有効性と安全性をリアルワールドのデータで検証した。有効性安全性ともに優れた結果が得られた。 Tamori A, <u>Inoue K</u>, Iwasa M, Nouse K, Minami M, Kagawa T, Uchida S, Enomoto M, Kawada N.</p>
<p>11. Prospective multicenter study of glecaprevir plus pibrentasvir combination therapy for patients with chronic hepatitis C. C型慢性肝炎に対するグレカプレビル、ピブレンタスビル併用療法の多施設共同前向き研究</p>	-	2019年4月	<p>54th Annual Meeting of the Europeans Association for the Study of the Liver (Vienna) 第54回欧州肝臓学会 (ウィーン)</p>	<p>グレカプレビルとピブレンタスビルの組み合わせによる治療の前向き検討である。この組み合わせの治療では治療から脱落しなければまず持続的ウイルス陰性化が得られた。治療に反応しなかったのはP-32 deletionの1例であった。脱落の理由は有害事象以外であり、この点はさらに調査が必要である。 Tamori A, <u>Inoue K</u>, Iwasa M, Nouse K, Minami M, Kagawa T, Uchida S, Enomoto M, Kawada N.</p>
<p>12. The apheresis guidelines for digestive diseases 消化器病のアフェレシスガイドライン</p>	-	2019年10月	<p>The 12th World Congress of International Society for Apheresis Kyoto 第12回世界アフェレシス学会 (京都)</p>	<p>日本アフェレシス学会のガイドラインとして急性肝不全に対する血液浄化療法と腹水にたいする腹水濾過再静注法のガイドラインを作成した。急性肝不全に対する血液浄化はon-line血液透析濾過を標準化することでほぼコンセンサスが得られたが、CARTについては腹水全量除去濃縮がまず前提となり、それに適した施行法を選択すべきである。 <u>Inoue K</u>.</p>

<p>13. Overview of artificial liver support in Japan. 日本における人工肝補助療法の概観</p>	-	2019年10月	The 12th World Congress of International Society for Apheresis Kyoto 第12回世界アフェリシス学会 (京都)	<p>日本の血液浄化療法の歴史を概観し、中分子を除去できない血液透析で昏睡覚醒が得られず、小分子の除去効率の悪いチャコールで脳浮腫が起こり、血漿交換は自然回復例以外に効果がなかった。これらの臨床的教訓をもとに小分子から中分子まで除去可能な血液透析濾過が用いられるようになり、最も大量に緩衝液を用いることができるon-line血液透析濾過が現在本邦では標準療法となりつつある。 <u>Inoue K.</u></p>
<p>14. A case of acetaminophen injection-induced acute liver failure (coma type) アセトアミノフェン静注による急性肝不全の1例</p>	-	2020年2月	49th Critical Care Congress (Orland) 第49回クリティカルケア学会 (オーランド)	<p>欧米ではアセトアミノフェンの自殺目的の大量服用により急性肝不全は多いが、本例のように鎮痛目的で添付文通りに投与を行い急性肝不全を発症することは希である。本例では腹水により約1ヶ月食事摂取が不十分であり、肝臓内のグルタチオンの欠乏を来し、これが肝機能の増悪因子であった可能性がある。 Katsuki S, <u>Inoue K.</u></p>
<p>上記の他、 国際学会121件 国内学会808件</p>				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 柿沼 薫
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
外科系臨床医学		産科学、生殖医学、更年期医学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1) 妊娠中に子宮頸部上皮内腺癌と診断され生児を得た一例	共著	平成28年12月	栃木県産婦人科医報 (43巻・19-21頁)	柿沼薫、野中宏亮、田川実紀、今井賢、柿沼敏行、松田義雄、大和田倫孝
2) 妊娠16週で広汎子宮全摘出術が施行された子宮頸癌 I B1期の1例	共著	平成29年3月	栃木県母性衛生学会雑誌 (第43号・10-11頁)	柿沼薫、野中宏亮、田川実紀、今井賢、柿沼敏行、松田義雄、大和田倫孝
3) 急速に腫大する卵巣腫瘍に対してcytokeratin 7/20の免疫組織染色によりS状結腸癌卵巣転移と診断された1例	共著	平成29年3月	『産婦人科の実際』(66巻03号・369-373頁)	柿沼薫、大和田倫孝、田川実紀、今井賢、野中宏亮、柿沼敏行、岡田 真也、一瀬雅典
(その他・学会発表等) 1) 自宅で心肺停止をきたし家族により心臓マッサージが行われた羊水塞栓症の一例	—	平成26年2月	千葉県産婦人科医学会平成25年度冬期学術講演会、千葉	42歳0経妊、自宅で破水直後に心肺停止した。初期救命はできたがDIC・羊水塞栓のため永眠された。神経学的後遺症を回避するには病院間の搬送時間短縮など更なる努力が必要である。 木村(柿沼)薫、尾本 暁子、岡山 潤、真田 道夫、山地 沙知、井上 万里子、田中 宏一、長田 久夫、生水真紀夫
2) 胎盤部トロホプラスト腫瘍の2例	—	平成26年10月	第32回 日本絨毛性疾患研究会、京都	PSST I 期症例と肺限局で絨毛癌肺転移との鑑別が困難であった症例について病理学的検討を行った。 木村(柿沼)薫、碓井宏和、清川貴子、中谷行雄、生水真紀夫
3) 子宮体癌妊孕性温存療法開始早期に脱分化を認めた2例	—	平成26年10月	第128回 関東連合産科婦人科学会 総会・学術集会、長野	1A期子宮内膜高分化型類内膜腺癌に対する温存療法は比較的安全と認識されているが、脱分化により予後不良の転帰をとる可能性を十分説明する必要がある。 木村(柿沼)薫、三橋 暁、松岡歩、埴真輔、山本憲子、錦見恭子、植原貴史、楯真一、碓井宏和、清川 貴子、生水 真紀夫

4) 子宮体癌妊孕性温存療法開始早期に脱分化を認めた2例	—	平成26年12月	第1306回 千葉医学会例会生殖医学(産科婦人科)分科会、千葉	1A期子宮内膜高分化型類内膜腺癌に対する温存療法は比較的安全と認識されているが、脱分化により予後不良の転帰をとる可能性を十分説明する必要がある。 木村(柿沼) 薫, 三橋 暁, 松岡歩, 埴真輔, 山本憲子, 錦見恭子, 植原貴史, 楯真一, 碓井宏和, 清川 貴子, 生水 真紀夫
5) 血管内進展を認め、腺肉腫との鑑別が困難であったPolypoid endometriosisの一例	—	平成27年8月	第57回 日本婦人科腫瘍学会学術講演会、岩手	卵巣内膜症性囊腫核出術、子宮筋腫核出術の既往のある骨盤腹膜炎に対し、手術を行った。卵巣静脈内への進展もあり、Polypoid endometriosis、腺肉腫の鑑別が困難であった。 木村(柿沼) 薫, 錦見恭子, 神戸美千代, 石毛章代, 堀越琢郎, 松岡歩, 埴真輔, 植原貴史, 石川博士, 楯真一, 碓井宏和, 三橋暁, 生水真紀夫
6) 妊娠16週で広汎子宮全摘出術が施行された子宮頸癌 I B1期の1例	—	平成28年6月	栃木県母性衛生学会、栃木	妊娠初期に子宮頸部浸潤癌を発見し、広汎子宮全摘出術を施行した。 柿沼 薫, 野中 宏亮, 田川 実紀, 今井賢, 柿沼 敏行, 松田 義雄, 大和田 倫孝
7) 母児の予後不良に関与するリスク因子の年次推移—日本産婦人科学会周産期データベース90万症例の解析から—	—	平成28年7月	第52回日本周産期・新生児医学会学術集会、富山	13年間(2001~2013年)に国内約300施設で登録された871,885分娩について、日本産婦人科学会周産期データベース(JSOG-DB)を用いて後方視的に検討した。 柿沼薫 松田義雄 田川実紀 今井賢 野中宏亮 柿沼敏行 大和田倫孝 佐藤郁夫
8) 急速腫大卵巣腫瘍に対してサイトケラチン7/20の免疫組織化学染色によりS状結腸癌異時性卵巣転移と診断された1例	—	平成28年10月	第132回関東連合産科婦人科学会総会・学術集会、東京	S状結腸癌完全切除後1年で右卵巣が急速に腫大し、卵巣原発か他臓器からの転移かの診断にCK7/20の免疫組織化学染色が有用であった。 柿沼薫、大和田倫孝、田川実紀、今井賢、野中宏亮、柿沼敏行、岡田 真也、一瀬雅典
9) マイクロ波子宮内膜アブレーションが抗凝固療法中に大量性器出血を来した過多月経に奏効する(症例報告)	—	平成28年11月	第31回 日本女性医学学会学術集会、京都	抗凝固薬内服中の大量性器出血に対し、MEAを施行した。合併症により周術期リスクのある過多月経に対して有効な治療法になりうる。 柿沼薫、柿沼敏行、田川実紀、今井賢、野中宏亮、佐藤郁夫、松田義雄、大和田倫孝
10) 1.周産期予後に関与する妊娠前因子の重要度に関する検討—perinatal event score (PES)の導入—	—	平成29年4月	第69回日本産科婦人科学会学術講演会、広島	日本産婦人科学会周産期データベース(JSOG-DB)に登録された22週以降の単胎395,785分娩を用いて後方視的に検討した。PESを用いることにより、各因子の周産期死亡に寄与する重要度、妊娠前因子の重み付けが可能になった。 柿沼 薫, 松田 義雄, 田川 実紀, 今井賢, 野中 宏亮, 柿沼 敏行, 大和田 倫孝
11) 子宮鏡下子宮腔内病変切除術は不妊症に対して有効である	—	平成29年9月	第57回 日本産科婦人科内視鏡学会学術講演会、岡山	当院リプロダクションセンターにおいて、子宮鏡下内膜ポリープ/粘膜炎下筋腫切除術を施行後の妊娠率は51.4%であった。妊娠成立に寄与した可能性がある。 柿沼薫、柿沼敏行、田川実紀、坂本優香、今井賢、野中宏亮、田中宏一、佐藤郁夫、大和田倫孝、高見澤聡、柳田薫

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 葛西 貴広
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系、医歯薬学、内科学臨床医学		内科学一般、腎臓内科学、代謝学、感染症内科学、内分泌学		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特になし				
(学術論文) 1 Impact of Peritoneal Dialysis Catheter Insertion by a Nephrologist: Results of a Questionnaire Survey of Patients and Nurses. (内科医による腹膜透析カテーテル挿入に対する影響: 患者、看護師へのアンケート調査の結果) Adv Perit Dial. 2015;31:59-68. (査読済)	共著 Washida N, Aikawa K, Inoue S, Kasai T, Shinozuka K, Morimoto K, Hosoya K, Hayashi K, Itoh H.	平成27年4月	Advances in Peritoneal Dialysis .	概要 腹膜透析患者におけるダルボポエチンα (DA)とさらに長時間作用型のエポエチンβ ペゴル (CERA)の効果を評価した。DA投与下患者29人が登録された。登録後全例DAからCERAに投与変更され、12ヶ月間前向きに血清Hgb濃度、血圧、鉄代謝が検討された。腹膜透析患者において、CERAはDAより少ない投与量や投与回数で同等のHgbレベルを維持でき、鉄代謝の改善作用を認めた。また血圧上昇作用はDAよりCERAの方が少ない可能性が示唆された。 本研究において、主としてカテーテル挿入、アンケート含むデータ収集を行った。
2 Impact of Switching From Darbepoetin Alfa to Epoetin Beta Pegol on Iron Utilization and Blood Pressure in Peritoneal Dialysis Patients. (腹膜透析患者における長時間作用型ESA製剤の鉄代謝や血圧に与える影響) Ther Apher Dial. 2015 Oct;19(5):450-6. doi: 10.1111/1744-9987.12306. Epub 2015 May 5. (査読済)	共著 Washida N, Inoue S, Kasai T, Shinozuka K, Hosoya K, Morimoto K, Wakino S, Hayashi K, Itoh H.	平成27年10月	Ther Apher Dialysis	概要 腎代替療法の療法選択において、患者や看護師の腹膜透析における腎臓内科医によるカテーテル挿入に対する影響を評価した。末期腎不全患者120人に対して腎臓内科医による腹膜透析カテーテル挿入術が行われた。また72人の患者と53名の看護師に対するアンケート調査が行われた。結果として、腎臓内科医によるカテーテル挿入を採用してから、腹膜透析を選択される患者が増加した。また患者、看護師ともに内科医による手術に対する懸念はなく、患者、看護師、医師間意思疎通にも問題を生じなかった。 本研究において、主としてデータ収集を行った。
(その他・学会発表等) 1 小児の気管支異物摘出術の麻酔経験 市立釧路総合病院 葛西貴広 本間広則 阿部純子 樋口美沙子 村上真一 清水恵子 其田 一	—	平成23年1月	日本麻酔科学会北海道地方会 平成23年1月 札幌	概要 5歳男児。2ヶ月前より咳嗽あり近医を受診した。喘息との診断を受け、内服治療を受けた。症状改善しないため別の近医を受診し、胸部単純写真で気管支に異物を認めたため、当院耳鼻咽喉科紹介受診となった。手術経過 硬性気管支鏡にて異物除去開始するもSpO2に大きな変化見られなかった。手術開始から45分で無事終了した。術後経過 第6病日退院となった。 学会発表者として発表スライドの作成、手術中の麻酔管理を担当した。

<p>2 C型慢性肝炎のインターフェロン治療中に壊死性筋膜炎を来した1例 佐藤 隆(那須赤十字病院 内科), 室井 純子, 古川 歩生, 前田 一樹, 葛西 貴広, 町田 安孝, 石川 まゆ子, 近江 史人, 大原 千知, 新井 由季, 赤羽 正史, 崎尾 浩由, 矢野 秀樹, 小林 洋行, 池野 義彦, 阿久津 郁夫, 石井 直弘</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年9月</p>	<p>日赤医学(0387-1215)64巻1号 Page239(2012. 09)</p>	<p>概要 58歳、男性。200X年1月ごろ肩関節痛のため近医受診。HCV抗体陽性を指摘され当院紹介となった。C型慢性活動性肝炎と診断。pegインターフェロンα2b・リバビリン併用療法を開始した。両側上腕に発赤出現し、皮膚潰瘍形成するようになった。その後壊死性筋膜炎の診断でデブリードマンを施行し、10月4日に皮弁形成術(遷延皮弁術)施行。インターフェロン治療による皮膚潰瘍から壊死性筋膜炎を来した症例は少ないが、注意を要する。 病棟担当医として診療を行った。</p>
<p>3 妊娠により繰り返した肝障害の1例 室井 純子(那須赤十字病院 内科), 佐藤 隆, 古川 歩生, 前田 一樹, 葛西 貴広, 町田 安孝, 石川 まゆ子, 近江 史人, 大原 千知, 新井 由季, 赤羽 正史, 崎尾 浩由, 矢野 秀樹, 小林 洋行, 池野 義彦, 阿久津 郁夫</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年9月</p>	<p>日赤医学(0387-1215)64巻1号 Page238(2012. 09)</p>	<p>概要 38歳、女性。<第1子妊娠中の経過>産科的適応による帝王切開手術のために術前検査施行したところ、肝機能障害をみとめた。このため同日緊急帝王切開手術が行われ無事出産。分娩後は肝機能障害は改善し、エコー所見は肝血管腫のみであった。<第2子妊娠中の経過>比較的妊娠初期から肝機能障害が認められ、増悪傾向にあった。術前検査したところ肝機能障害を認めた。しかし子宮内胎児死亡と診断され緊急帝王切開が行われた。死産児には異常なかった。 病棟担当医として診療を行った。</p>
<p>4 繰り返す意識障害を主訴に診断された食道アカラシアの一例 那須赤十字病院 内科 葛西 貴広 中田 洋介 消化器内科 古川 歩生 室井 純子 佐藤 隆</p>	<p>—</p>	<p>平成25年1月</p>	<p>日本消化器学会関東地方会 平成25年1月 東京</p>	<p>概要 2002年頃より、週1回程度就寝中に咳および嘔気、嘔吐で覚醒するようになった。2012年8月24日、朝食後に失神し当院に救急搬送された。CT所見から食道アカラシアを疑い上部消化管各種検査を施行した。40mmバルーンにて再度拡張術を2回施行したところ、以後はつかえ感、夜間の嘔吐の出現は認めず、内視鏡検査でも改善を認めている。以降も経過は良好であり、第65病日に退院となった。 学会発表者として発表スライドの作成、病棟担当医として診療を行った。</p>
<p>5 腹膜透析による残腎機能保持がその後の透析離脱に寄与したと考えられた非定型溶血性尿毒症症候群(aHUS)の一例 葛西 貴広(川崎市立井田病院 内科), 小林 絵美, 浦井 秀徳, 海野 寛之, 宍戸 崇, 滝本 千恵, 半田 みち子, 安部 涼平, 宮川 義隆</p>	<p>—</p>	<p>平成26年3月</p>	<p>BRBネフロロジーカンファレンス 平成26年3月 東京</p>	<p>概要 20XX年1月中旬頃より労作時のふらつきを自覚した。2月1日に再度同院を受診した。貧血(Hb7.4)、ビリルビン(T.bil 2.7)上昇、血小板減少(7.6万)、腎機能障害(Cr6.8)を認め、TMA疑いと診断され同日緊急入院となった。血漿交換抵抗性のaHUSを疑われ補体eculizumab 1200mgの週1回投与を開始した。eculizumabにより3か月~1年で約80%が透析離脱可能という報告もあり、残腎機能保持のために、腹膜透析の導入の方針となり、一旦退院となった。経過良好であれば腹膜透析は交換回数を漸減し、eculizumabは2週毎の投与を継続する方針である。 学会発表者として発表スライドの作成、病棟担当医として診療を行った。</p>
<p>6 腹膜透析による残腎機能保持がその後の透析離脱に寄与したと考えられた非定型溶血性尿毒症症候群(aHUS)の一例 葛西 貴広(川崎市立井田病院 内科), 小林 絵美, 浦井 秀徳, 海野 寛之, 宍戸 崇, 滝本 千恵, 半田 みち子, 安部 涼平, 宮川 義隆</p>	<p>—</p>	<p>平成26年5月</p>	<p>日本透析医学会雑誌(1340-3451)47巻Suppl. 1 Page1007(2014. 05)</p>	<p>概要 20XX年1月中旬頃より労作時のふらつきを自覚した。2月1日に再度同院を受診した。貧血(Hb7.4)、ビリルビン(T.bil 2.7)上昇、血小板減少(7.6万)、腎機能障害(Cr6.8)を認め、TMA疑いと診断され同日緊急入院となった。血漿交換抵抗性のaHUSを疑われ補体eculizumab 1200mgの週1回投与を開始した。eculizumabにより3か月~1年で約80%が透析離脱可能という報告もあり、残腎機能保持のために、腹膜透析の導入の方針となり、一旦退院となった。経過良好であれば腹膜透析は交換回数を漸減し、eculizumabは2週毎の投与を継続する方針である。 学会発表者として発表スライドの作成、病棟担当医として診療を行った。</p>
<p>7 RPGNをきたした溶連菌感染に伴う半月体形成性糸球体腎炎 葛西 貴広(慶応義塾大学 医学部腎臓内分泌代謝内科), 徳山 博文, 脇野 修, 林 晃一, 伊藤 裕</p>	<p>—</p>	<p>平成26年8月</p>	<p>日本腎臓学会誌(0385-2385)56巻6号 Page875(2014. 08)</p>	<p>概要 39歳男性。幼少より扁桃炎を認めていた。X年5月21日に咽頭痛出現し、26日に紅斑、紅色丘疹が出現し溶連菌感染に伴う皮疹の診断を受けた。6月3日に腎機能障害、上肢の浮腫、両側の手指・手首・肘に関節痛が出現し、5日当科紹介受診。Cr 3.19mg/dl, 尿蛋白・尿潜血3+あり入院となった。ASO高値、咽頭より溶連菌検出され、PSAGNが最も疑われた。腎生検で、びまん性管内増殖性糸球体腎炎と半月体の形成を認めた。さらにNAPr1陽性であり溶連菌感染に伴うCresGNと考えられた。3日間ステロイドパルス後PSL 60mg/dayで投与開始した。治療後腎機能は著明に改善した。RPGNを呈したCresGNで、N A P r 1陽性であり溶連菌感染との関連が示唆された。 学会発表者として発表スライドの作成、病棟担当医として診療を行った。</p>

<p>8 多発性嚢胞腎を原疾患とする腹膜透析症例における副腎腫瘍検索に関する一考察 森本 耕吉(慶応義塾大学 医学部腎臓内分泌代謝内科), 宮下 和季, 鷺田 直輝, 井上 秀二, 中村 俊文, 葛西 貴広, 栗原 勲, 林 晃一, 伊藤 裕</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年4月</p>	<p>日本内分泌学会雑誌 (0029-0661) 91巻1号 Page363(2015. 04)</p>	<p>概要 多発性嚢胞腎を原疾患とする腹膜透析症例で原発性アルドステロン症を合併した一例を経験したので報告し、特に副腎腫瘍検索における磁気共鳴画像検査 (MRI) の有用性について考察する。41歳女性。34歳時に多発性嚢胞腎と診断された。腎機能は緩徐増悪傾向を呈し、41歳時に腎代替療法として腹膜透析を導入された。その後も高血圧は遷延し、原発性アルドステロン症と診断された。左副腎に27 mm大の腫瘍を認めた。副腎静脈サンプリングによる局在診断では左側病変が示唆され、左副腎摘出術を実施されることとなった。</p> <p>病棟担当医として診療を行った。</p>
<p>9 末期腎不全により悪化した血糖変動は腹膜透析により可逆的となる 葛西 貴広(慶応義塾大学 医学部腎臓内分泌代謝内科), 鷺田 直輝, 篠塚 圭祐, 森本 耕吉, 林 晃一, 伊藤 裕</p>	<p>—</p>	<p>平成27年4月</p>	<p>日本内分泌学会雑誌 (0029-0661) 91巻1号 Page321(2015. 04)</p>	<p>概要 16人のPD導入患者(うち4人は糖尿病患者)、健常人8人において、24～72時間CGMSを施行した。PD患者は入院にて導入前後1週間時点の糖代謝をそれぞれCGMSで評価し比較した。食事は導入前後共に総カロリー30kcal/kg/day、蛋白0.8g/kg/dayに統一した。透析液は1.5%ブドウ糖透析液1.5Lを2時間貯留×3回/日使用した。結果として、導入初期においてPD導入により、糖負荷がかかるにも関わらず、血糖上昇は抑制され血糖変動は改善した。しかしPD導入期の低血糖や糖尿病患者の夜間血糖変動には注意を要する。</p> <p>学会発表者として発表スライドの作成、データ収集、データ解析を行った。</p>
<p>10 腹膜透析導入により血糖変動が改善した1型糖尿病の一例 葛西 貴広(慶応義塾大学 医学部腎臓内分泌代謝内科), 鷺田 直輝, 篠塚 圭祐, 森本 耕吉, 林 晃一, 伊藤 裕</p>	<p>—</p>	<p>平成27年4月</p>	<p>日本内分泌学会雑誌 (0029-0661) 91巻1号 Page391(2015. 04)</p>	<p>概要 55歳女性、25年前に1型糖尿病を発症した。インスリン治療を行うも腎機能が悪化し、2014年1月に血清クレアチニン; 8.8mg/dLで腹膜透析 (PD) 導入となった。インスリンは本研究経過中全て超即効型朝昼夕22u、超持続型眠前22uで血糖コントロールした。PD導入前後1週間ならびにPD導入6か月後時点で72時間CGMSを施行した。PD導入により血糖変動は改善したが、導入初期には低血糖の出現を認めた。PD透析液夜間貯留により夜間低血糖は抑制された。</p> <p>学会発表者として発表スライドの作成、データ収集、データ解析を行った。</p>
<p>11 腹膜透析患者における長時間作用型ESA製剤の鉄代謝や血圧に与える影響 葛西 貴広(慶応義塾大学 医学部腎臓内分泌代謝内科), 鷺田 直輝, 篠塚 圭祐, 森本 耕吉, 林 晃一, 伊藤 裕</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年4月</p>	<p>日本内分泌学会雑誌 (0029-0661) 91巻1号 Page399(2015. 04)</p>	<p>概要 腹膜透析患者におけるダルボポエチンα (DA) とさらに長時間作用型のエポエチンβベゴル(CERA)の効果を評価した。DA投与下患者29人が登録された。登録後全例DAからCERAに投与変更され、12ヶ月間前向きに血清Hgb濃度、血圧、鉄代謝が検討された。腹膜透析患者において、CERAはDAより少ない投与量や投与回数で同等のHgbレベルを維持でき、鉄代謝の改善作用を認めた。また血圧上昇作用はDAよりCERAの方が少ない可能性が示唆された。</p> <p>外来診療、データ収集を行った。</p>
<p>11 腹膜透析患者の陰嚢水腫の患側同定に腹膜透析液へ99mTc-MMAを混入したシンチグラフィが有用であった一例 葛西 貴広(慶応義塾大学 医学部腎臓内分泌代謝内科), 鷺田 直輝, 篠塚 圭祐, 森本 幸吉, 脇野 修, 伊藤 裕</p>	<p>—</p>	<p>平成27年7月</p>	<p>日本腎臓学会誌 (03 85-2385) 57巻6号 Page976</p>	<p>概要 49歳男性。10年ほど前から糖尿病、高血圧を起因として徐々に腎機能が悪化し、腎代替療法の適応となった。腹膜透析開始後、両側の陰嚢水腫を認めたため、99mTc-MMAを混入した腹膜透析液を注液しシンチグラフィを撮影し、放射性同位体の精巣側へ移行を認めた。後日鼠径管閉鎖術を行い、その後は問題なく腹膜透析を行っている。本例ではシンチグラフィをリアルタイムに撮影することで患側同定し、手術侵襲を最小限に出来た。</p> <p>学会発表者として発表スライドの作成、病棟担当医として診療を行った。</p>
<p>12 内科医による腹膜透析カテーテル挿入に対する影響：患者、看護師へのアンケート調査の結果 葛西 貴広, 鷺田 直輝, 相川 佳代子, 井上 秀二, 篠塚 圭祐, 森本 耕吉, 細谷 幸司, 林 晃一, 伊藤 裕</p>	<p>—</p>	<p>平成27年10月</p>	<p>インタベンションネフロロジー研究会 平成27年10月 東京</p>	<p>概要 腎代替療法の療法選択において、患者や看護師の腹膜透析における腎臓内科医によるカテーテル挿入に対する影響を評価した。末期腎不全患者120人に対して腎臓内科医による腹膜透析カテーテル挿入術が行われた。また72人の患者と53名の看護師に対するアンケート調査が行われた。結果として、腎臓内科によるカテーテル挿入を採用してから、腹膜透析を選択される患者が増加した。また患者、看護師ともに内科医による手術に対する懸念はなく、患者、看護師、医師間意思疎通にも問題を生じなかった。</p> <p>発表者として発表スライドの作成主としてデータの収集、カテーテルの挿入を行った。</p>

13 ハイブリッド透析療法を施行中に陰経部カルシフィラキシスを発症した一例 葛西 貴広、鷺田 直輝、篠塚 圭祐、森本 耕吉、脇野修、伊藤 裕	—	平成27年11月	日本腹膜透析医学会 平成27年11月 仙台	概要 CKDにて2011年にPD導入、2012年4月にHD併用となった。2014年12月より亀頭部の水泡形成、黒色化、疼痛が出現し、2015年3月に当院皮膚科を受診した。初診時に亀頭背側に径28×30mm大の境界明瞭な黒色壊死を認めた。骨盤部Xpでは陰茎部・血管の石灰化を認め、カルシフィラキシスが示唆された。徐々に疼痛が増悪し6月23日に当院入院となった。7月1日からチオ硫酸ナトリウムの点滴を開始し、現在療養中である。 学会発表者として発表スライドの作成、病棟担当医として診療を行った。
14 内科医による腹膜透析カテーテル挿入に対する影響：患者、看護師へのアンケート調査の結果 葛西 貴広、鷺田 直輝、相川 佳代子、井上 秀二、篠塚 圭祐、森本 耕吉、細谷 幸司、林 晃一、伊藤 裕	共著	平成27年11月	日本腹膜透析医学会 平成27年11月 仙台	概要 腎代替療法の療法選択において、患者や看護師の腹膜透析における腎臓内科医によるカテーテル挿入に対する影響を評価した。末期腎不全患者120人に対して腎臓内科医による腹膜透析カテーテル挿入術が行われた。また72人の患者と53名の看護師に対するアンケート調査が行われた。結果として、腎臓内科によるカテーテル挿入を採用してから、腹膜透析を選択される患者が増加した。また患者、看護師ともに内科医による手術に対する懸念はなく、患者、看護師、医師間の意思疎通にも問題を生じなかった。 主としてデータの収集、カテーテルの挿入を行った。
15 腹膜透析症例におけるアンルーフィング後の腹膜炎発症に関する検討 森本 耕吉(慶応義塾大学 医学部腎臓内分泌代謝内科)、鷺田 直輝、葛西 貴広、篠塚 圭祐、脇野 修、林 晃一、伊藤 裕	共著	平成28年5月	日本透析医学会雑誌 (1340-3451)49巻Suppl. 1 Page606 (2016. 05)	概要 皮下トンネル感染に対するアンルーフィングの腹膜炎回避に対する有効性について当院でアンルーフィングを実施した12例に関して検討した。12例中4例でアンルーフィング後の腹膜炎発症を認め、うち3例で皮下トンネル感染と異なる起炎菌による腹膜炎の既往あり、1例はNTMによる腹膜炎であった。腹膜炎既往を有する症例やNTMによる感染を呈する症例では、アンルーフィングが腹膜炎回避に有効でない可能性が示唆された。 アンルーフィング術を施行した。
16 血液透析導入による糖代謝への影響 葛西 貴広(慶応義塾大学 腎臓内分泌代謝内科)、鷺田 直輝、篠塚 圭祐、森本 耕吉、脇野 修、伊藤 裕	—	平成28年5月	日本腎臓学会誌(03 85-2385)58巻3号 Page334	概要 19人のHD導入患者に48～72時間CGMSを施行した。HD患者全体で血糖<70mg/dlの割合は導入前後で有意に導入後の方が高かった。また糖尿病患者11人では血糖<70mg/dlの割合は導入前後で有意に導入後の方が高かった。本研究では血糖変動に関して、HD導入前と比較してHD導入後では低血糖の割合が増加する変化を認めた。HD導入時では低血糖の出現に注意を要する必要がある。 学会発表者として発表スライドの作成、データ収集、データ解析を行った。
17 認知症患者の腸骨稜上縁での出口部作成が奏功した腹膜透析導入の一例 葛西 貴広(慶応義塾大学 医学部腎臓内分泌代謝内科)、鷺田 直輝、篠塚 圭祐、森本 耕吉、脇野 修、伊藤 裕	—	平成28年5月	日本透析医学会雑誌(1340-3451)49巻 Suppl. 1 Page603	概要 69歳女性。以前よりCKD、アルツハイマー型認知症で当院にてフォローされていた。SPIEDにてPDカテーテル挿入術を行った。通常の出口部作成ではカテーテル自己抜去のリスクが高く、出口部を通常より側方の右腸骨稜上縁の直上で作成した。退院後も現在まで出口部の状態は良好である。従来法と比較して自己抜去のリスクの軽減と、背部と比較して体側部の出口部では物理的的刺激を軽減する効果を期待できると考えられた。 学会発表者として発表スライドの作成、カテーテル挿入、外来診察を行った。
18 当院でのWカテーテル使用の経過報告 葛西 貴広(慶応義塾大学 医学部腎臓内分泌代謝内科)、鷺田 直輝、篠塚 圭祐、森本 耕吉、脇野 修、伊藤 裕	—	平成28年9月	日本腹膜透析医学会 平成28年9月 札幌	概要 当院では腹膜透析(PD)カテーテルによる感染リスクを軽減するため、皮下に2つ、腹膜に1つのカフを持ち従来型より長さを延長し、形状をW型にしたWカテーテルを使用している。皮下カフを2つ持つため、トンネル感染の際も簡易な出口変更術で皮下カフが1つ残ることにより腹膜炎のリスクを軽減でき、強い抗感染性を持つ可能性がある。また、W型の形状や全長の長さから、必要に応じて従来型より出口部の外側への作成が可能である。 学会発表者として発表スライドの作成、カテーテル挿入、外来診察を行った。
19 ハイブリッド透析療法を施行中に陰経部カルシフィラキシスを発症した一例 葛西 貴広、鷺田 直輝、篠塚 圭祐、森本 耕吉、脇野修、伊藤 裕	—	平成28年12月	PD22 平成28年12月 東京	概要 CKDにて2011年にPD導入、2012年4月にHD併用となった。2014年12月より亀頭部の水泡形成、黒色化、疼痛が出現し、2015年3月に当院皮膚科を受診した。初診時に亀頭背側に径28×30mm大の境界明瞭な黒色壊死を認めた。骨盤部Xpでは陰茎部・血管の石灰化を認め、カルシフィラキシスが示唆された。徐々に疼痛が増悪し6月23日に当院入院となった。7月1日からチオ硫酸ナトリウムの点滴を開始し、1年以上経過したのちも経過は良好である。 学会発表者として発表スライドの作成、病棟担当医として診療を行った。

<p>20 セフェピム（CFPM）投与により脳症を発症した腹膜透析患者の2例 葛西 貴広、鷺田 直輝、森本耕吉、篠塚 圭祐、内山清貴、徳山 博文、脇野修、伊藤 裕</p>	<p>—</p>	<p>平成29年5月</p>	<p>東京PD研究会 平成29年5月 東京</p>	<p>概要 CFPMは細菌感染治療に有用であるが、副作用にCFPM脳症があり、注意が必要である。今回、我々は腹膜透析患者に対しCFPMを用いて加療を行い、脳症を発症した2例を経験したため、報告した。CFPM脳症は意識障害、不随意運動が主な症状である。腎機能、肝機能障害の患者で発症した場合、代謝性脳症が除外診断として挙げられるが、今回の症例では否定的であった。CFPM脳症では特徴的な脳波を認める所見を示す報告があるが（臨床神経学 52巻5号2012：5）MRI、脳波では今回は特徴的な所見は認めなかった。CFPMは広いスペクトラムを持ち細菌感染治療には非常に有用であるが、CFPM脳症はICU患者の10%で発症していた、との報告もあり（Crit Care 2013；17 R264）、特に腎機能低下の症例に用いる際には投与後の経過を慎重に観察すべきである。</p> <p>学会発表者として発表スライドの作成、病棟担当医として診療を行った。</p>
<p>21 IT化による新次元在宅医療支援システム構築とその現況 葛西 貴広、鷺田 直輝、脇野 修、伊藤 裕</p>	<p>—</p>	<p>平成29年6月</p>	<p>日本透析医学会雑誌 (1340-3451)49 巻 Suppl. 1 Page403(2017.05)</p>	<p>概要 今後、日本では高齢化に伴う医療費の高騰化、医療人材の不足を解決するために、今までの施設医療から効率的、効果的な在宅医療への移行が不可欠となる。そこで我々はIT化による在宅医療推進のためのシステムの構築を計画し、その現況を報告した。医療にITを導入することにより、超高齢化社会の中で成り立つ近未来の医療モデルの確立を目指し、遠隔外来やシンクロ審査の有用性を現在検証している。</p> <p>学会発表者として発表スライドの作成、システムの有用性に対する検証を被験者を用いて行った。</p>
<p>22 セフェピム（CFPM）投与により脳症を発症した腹膜透析患者の2例 葛西 貴広、鷺田 直輝、森本耕吉、篠塚 圭祐、内山清貴、徳山 博文、脇野修、伊藤 裕</p>	<p>—</p>	<p>平成29年9月</p>	<p>日本腹膜透析医学会 平成29年9月 小倉</p>	<p>概要 CFPMは細菌感染治療に有用であるが、副作用にCFPM脳症があり、注意が必要である。今回、我々は腹膜透析患者に対しCFPMを用いて加療を行い、脳症を発症した2例を経験したため、報告した。CFPM脳症は意識障害、不随意運動が主な症状である。腎機能、肝機能障害の患者で発症した場合、代謝性脳症が除外診断として挙げられるが、今回の症例では否定的であった。CFPM脳症では特徴的な脳波を認める所見を示す報告があるが（臨床神経学 52巻5号2012：5）MRI、脳波では今回は特徴的な所見は認めなかった。CFPMは広いスペクトラムを持ち細菌感染治療には非常に有用であるが、CFPM脳症はICU患者の10%で発症していた、との報告もあり（Crit Care 2013；17 R264）、特に腎機能低下の症例に用いる際には投与後の経過を慎重に観察すべきである。</p> <p>学会発表者として発表スライドの作成、病棟担当医として診療を行った。</p>

教 育 研 究 業 績 書				
			氏名	KHANDAKAR MOHAMMAD ANWARUL HAQUE
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
感染症学、備瀬物学、		感染症対策、サーバランス、耐性菌		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
1 ESBL-producing Enterobacteriaceae in environmental water in Dhaka, Bangladesh. (ダッカの環境水からのESBL産生腸内細菌科細菌の検出) (査読付)	共著	2014年 11月	J Infect Chemother. 20(11):735-737	Haque A, Yoshizumi A, Saga T, Ishii Y, Tateda K. 薬剤耐性菌の一種である基質特異性拡張型βラクタマーゼ (ESBL) 産生菌による感染症は治療に抵抗性を示す。今回、バングラデシュの首都ダッカにおけるESBL産生菌の環境汚染の状況を調査した結果、環境水から腸内細菌科の菌として大腸菌が最も多く分離され、ESBLを産生する菌も確認された。その遺伝子解析によってCTX-M型およびSHV型のESBLを産生する菌の存在が明らかとなった。本研究によりバングラデシュにおける耐性菌汚染の状況が深刻になっていることが示唆された。本研究において、現地における検体採取から菌の分離同定、感受性検査、耐性機序の確認まで一連の検討を中心的に行った。
2. High Mobility Group Box 1 levels in on and off-pump cardiac surgery patients. (非体外式血液循環方式による心血管手術患者におけるHMGB1の解析) (査読付)	共著	2011年 1月	International Heart Journal. 52(1):170-174	Haque A, Kunimoto F, Narahara H, Okawa M, Hinohara H, Kurabayashi M, Saito S. High mobility group box 1 (HMGB1)は炎症性サイトカインと類似した性質を有し、活性化した免疫細胞などから分泌される。心肺バイパスは全身性の炎症や心筋虚血を誘導することが知られているが、本研究では心臓手術や冠動脈バイパスによってHMGB1の分泌が誘導されるかどうかについて検討を行った。手術の前後および手術中の患者血漿中のHMGB1および炎症性サイトカインの濃度を測定した結果、冠動脈バイパス術後30分後の時点で血中のHMGB1が有意に上昇していることが示された。一方、TNF-αとIL-1βについては、検出限界以下であった。これらの結果から冠動脈バイパスに伴う虚血と免疫細胞の活性化が起こっていることが示唆された。本研究においては、主にHMGB1および炎症性サイトカインの濃度測定を行うとともにデータ解析やその評価を担当した。

(その他)				
<p>1. Necrotizing fasciitis following psoas muscle abscess caused by hypermucoviscous <i>Klebsiella pneumoniae</i>. (高粘稠性肺炎桿菌による壊死性筋膜炎の症例) (査読付)</p>	共著	2012年 8月	J Infect Chemother. 18(8):565-588	<p>Mita N, Narahara H, Okawa M, Hinohara H, Kunimoto F, <u>Haque A</u>, Saito S, Oshima K. 本論文は高粘稠性肺炎桿菌 (<i>hypermucoviscous Klebsiella pneumoniae</i>) の感染症例の症例報告である。糖尿病を基礎疾患に有する59歳の日本人が倦怠感と発熱、背部痛を主訴に来院した。腹部CTによって腹部の壊死性筋膜炎と腸腰筋膿瘍の存在が疑われた。群馬大学附属病院に搬送され、抗菌薬治療とともにデブリードマンが行われた。血液培養から分離された肺炎桿菌の菌株を解析した結果、高度な粘稠性を有する菌株であることが明らかとなった。皮膚移植を実施された後、回復がみられ、治療開始して134日後に無事退院となった症例を報告した。本研究においては、肺炎桿菌の細菌学的解析に関する部分を担当した。</p>
<p>2. Giant coronary artery aneurysm with coronary arteriovenous fistula draining into the coronary sinus. (動静脈瘻を伴う巨大冠動脈瘤の症例) (査読付)</p>	共著	2011年 10月	J Anesth. 25(10):749-752	<p>Mita N, Kaida S, Kagaya S, Miyoshi S, Kawauchi C, Kanemura Y, <u>Haque A</u>. 本論文は冠血管の動静脈瘻の症例を報告したcase reportである。77歳の巨大冠動脈瘤を有し動静脈瘻を伴う症例が入院となった。動静脈瘻の存在は経食道エコーでは確認できなかったが、直接拍動を触知することでその存在が確認された。動静脈瘻は部分切除術によって摘出された。このような症例においては、画像診断だけでなく他のアプローチによる診断を併せて実施することで診断レベルが向上することが示唆された。本研究においては、症例のデータ解析を主に担当した。</p>

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 木内 智喜
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
形成外科学		再建外科学、マイクロサージェリー学		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1				
(学術論文) 1 Composite grafting for distal digital amputation with respect to injury type and amputation level. (末節部切断指におけるcomposite graftの適応：受傷機転と切断レベルでの検討) (査読付)	共著	2015年3月	J Plast Surg Hand Surg 2015;49(4):224-228	末節部切断指におけるcomposite graftの適応を受傷機転と切断レベルで分類して検討した。全ての受傷機転のsub-zone Iでの切断と、clean-cutなsub-zone IIでの切断はcomposite graftの良い適応である。Blunt-cutとCrush-avulsionなsub-zone IIでの切断は適応の境界である。全ての受傷機転のsub-zone IIIまたはIVでの切断は顕微鏡下血管吻合での治療が適切である。(担当：診療、臨床データの解析と原稿執筆) <u>Kiuchi T</u> , Shimizu Y, Nagasao T, Ohnishi F, Minabe T, Kishi K
(その他) 1 マイクロサージェリー時のバックグラウンドシートに関して	—	2015年4月	第58回日本形成外科学会総会学術集会	マイクロサージェリー時に使用するバックグラウンドシートの条件について検討した。シートの条件として弾力性や厚さ、入手しやすさなどがあるが、特に色が重要であるため色に関する考察を中心に行った。黒いナイロン糸の視認性を高めるためには明度の高い色が適切である。また、術野にはピンクや黄色が多いため、それらの補色である緑や青が適切である。以上より明るい緑や青のシートが最適であると考察した。 木内智喜、石井直弘、谷裕美子、政岡浩輔、鈴木彩馨、貴志和生

教 育 研 究 業 績 書				
			氏名 大橋（木下）陽子	
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学分野 外科系臨床医学		麻酔蘇生学、周術期管理学、疼痛管理学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 脳神経外科と麻酔ハンドブック	共著	平成9年4月	株式会社 医学書院エムワイ ダブリュー P 271-291	<p>麻酔中の全身管理については、各臓器機能を最適な状態で維持することが肝要であり、その目的で各臓器の機能を測定あるいは推測するための各種機器が開発されている。麻酔は中枢神経を抑制することが目的であり、中枢神経機能を麻酔中評価することは困難である。麻酔によって中枢神経機能を悪化させないようにする必要があり、そのために脳神経系の病態生理を十分理解するために書かれた本である。</p> <p>担当：頭蓋内血管手術の麻酔の翻訳を担当。 共著者名：大平孝之、篠崎正博、尾崎 眞、林行雄、横山和子、飯島毅彦、巖 康秀、大脇 昭、金子 剛、落合亮一、畔 政和、大橋陽子、大西佳彦、林 成之、徐 成夫、櫛 英彦、渋谷 肇</p> <p>術前評価 心血管系の評価、神経学的評価、呼吸器系の評価、前投薬と術前訪問。 モニタリング 新血管系のモニター、呼吸器系のモニター、神経学的モニタリング。 麻酔導入 麻酔維持 麻酔科的考察、低血圧麻酔と高血圧の調節、脳脊髄液ドレナージ、マンニトール、過換気、低体温、麻酔と脳保護、術中の脳動脈瘤破裂 妊婦 覚醒 脳動静脈奇形</p>
(学術論文) 1 品胎以上の多胎妊娠の帝王切開の麻酔 (査読付)	共著	平成5年7月	麻酔42：1081-1085	<p>帝王切開を施行した品胎以上の多胎症例20（15）例を双胎21（21）例、単胎325（280）例と比較した（カッコ内は脊椎麻酔例）。多胎群では比較的硬膜外麻酔が多く、緊急症例の割合は少なかった。脊椎麻酔に限定して比較すると、多胎群で在胎日数、出生体重が小さく、子宮切開一娩出時間は、多胎3子で延長し、1分後のアプガー指数が低い値を示す割合が増加した。エフェドリン使用頻度は、緊急症例で単胎、双胎、多胎の順に増加する傾向があった。 分担：筆頭著者として論文全体のデザインと統括を行った 共著者：大橋陽子、太城力良、谷上博信、福光一夫、木内恵子、稲森紀子、高内裕司、西村匡司</p>
2 新生児・乳児の心臓手術中のFio2とSpo2 (査読付)	共著	平成6年6月	麻酔43：867-872	<p>1991年7月より1993年1月までに施行された新生児および乳児の心臓手術62症例を対象とし、術中の吸入酸素濃度（Fio2）と経皮的動脈酸素飽和度（Spo2）について検討した。心室中隔欠損、大動脈縮窄・離断、動脈管開存、肺動脈絞扼術といった肺血流の多い疾患においてFio2が低く維持され、修復後は修復前に比べやや高いFio2が使用された。各疾患の病態をは把握して病態と術中Spo2に応じた適切なFio2で呼吸管理を行うことが必要であると考えられた。 分担：データ収集と解析を行った。 共著者：木内恵子、西田朋代、東 佳世、大橋陽子、高内裕司、福光一夫、太城力良、岸本英文</p>

<p>3 Duration of apnoea in anaesthetized children required for desaturation of haemoglobin to 95%; comparison of three different breathing gases (査読付) (麻酔下の小児経皮的動脈酸素濃度が95%まで低下するのに必要な時間を3種あるの違った吸入ガスで比較した)</p>	共著	平成7年5月	Paediatr Anaesth. 5(2):115-119	<p>吸入ガスの種類によって、低酸素血症 (Spo2が95%以下)になるのにかかる時間を測定した。ASA PS=1-2の2か月から12歳までの小児25症例を対象に3グループ、①Fio2=1.0②N2O/O2 (Fi2=0.4) ③air/O2 (Fio2=0.4)に分けた。麻酔導入、気管挿管後で8分以上換気後無呼吸の状態し、Spo295%になるまでの時間を測定した。①群で低酸素となるのに時間を要した。Fio2の低い状態による麻酔導入は容易に低酸素血症になる可能性がある。 分担：データ収集と解析を担当した。 共著者：木内恵子、福光一夫、太城力良、高内裕司、大橋陽子、西田朋代</p>
<p>4 内頸動脈内膜剥離術と冠動脈再建術の同時手術の麻酔管理 (査読付)</p>	共著	平成8年1月	循環制御17:99-102	<p>5症例の内頸動脈内膜剥離術と冠動脈再建術の同時手術を経験した。全例内頸動脈の高度狭窄と、冠動脈の多枝病変を合併しており同時手術の適応であると考えられた。麻酔がフェンタニールを用いて十分な麻酔深度を維持した。術中は血圧、動脈血二酸化炭素分圧、体温、ヘパリンの使用による予想外の出血に注意をはらった。その結果術後術前に脳神経症状があった2例を含め、全症例において合併症を起こさず麻酔管理が可能であった。 分担：筆頭著者と共に当該症例の麻酔を担当し、データ収集と解析を行った。 共著者：岩崎達雄、大橋陽子、宮下徹也、赤松哲也、平田隆彦、畔 政和</p>
<p>5 鎌状赤血球症患者の開心術 (査読付)</p>	共著	平成8年10月	麻酔45:1269-1271	<p>鎌状赤血球症合併患者の緊急開心術の麻酔を経験した。症例は39歳、西アフリカ出身の黒人男性。左室破裂を疑われ緊急開心術となった。鎌状化の誘因となる低酸素血症、アシドーシスを避ける目的で過換気状態を維持し、末梢循環不全の予防に血管拡張薬を使用した。体外循環は大動脈遮断を行わず、血液温31℃で行った。過換気、血管拡張薬使用は有効で、鎌状化はみられず、術後神経学的所見に異常はみられなかった。 分担：症例を担当し、筆頭著者として、症例検討、文献検討を行い、考察をし発表した。 共著者：大橋陽子、赤松哲也、平田隆彦、内田整、畔 政和</p>
<p>6 体外循環離脱後に大動脈解離を起こした症例 (査読付)</p>	共著	平成8年10月	麻酔45:1281-1284	<p>体外循環離脱後の大動脈乖離は非常にまれではあるが、発生すると重篤で予後不良な合併症である。今回、体外循環離脱後に大動脈解離を発生し、緊急上行大動脈置換術を施行したが、重篤な脳障害、心機能低下を来し術後4日目に死亡した症例を経験した。大動脈解離が発生した場合、大動脈弁逆流の発症や動脈圧低下に迅速に対応し、脳障害発生予防を行う必要がある。また早期確定診断には経食道心エコーが有効であった。 分担：筆頭著者として、症例検討、文献検討を行い、考察をし発表した。 共著者：大橋陽子、大西佳彦、赤松哲也、丸山晃一、畔 政和</p>
<p>7 Nitric oxide inhalation as a chemical assist for circulation in patients after cardiovascular surgery (査読付) (一酸化窒素 (NO)の心臓血管外科手術後患者の循環動態に対しての化学的補助効果)</p>	共著	平成11年2月	Artif Organs23 (2) :169-174	<p>一酸化窒素 (NO)吸入が、酸素運搬能の低下した開心術後の患者に対して有効かどうか検討した。12名の成人開心術後患者を対象にし、NO吸入前、120分以上吸入後のデータを比較した。吸入後、有意に酸素供給量は増加し、動脈血酸素含有量、心拍出量係数 (CI)も増加した。また混合静脈血酸素飽和度も上昇した。肺動脈圧、肺動脈血管抵抗も下がり、肺血管抵抗とCIは反比例した。NO吸入は開心術後の患者の酸素供給を改善し、循環動態を改善した。 分担：データ収集と解析を行った。 共著者：Kumon K, Yahagi N, Imanaka H, Takeuchi M, Miyano H, Ohashi Y</p>
<p>8 Nitrous oxide activate GABAergic neurons in the spinal cord in Fischer rats. (査読付) (笑気がフィッシャーラットで脊髄のGABAニューロンを活性化する)</p>	共著	平成13年8月	Anesthesiology:95(2)463-469	<p>笑気の鎮痛効果発現のメカニズムは不明である。笑気の鎮痛効果が見られるFischer ratsとみられないLewis ratsでc-Fosを使って鎮痛効果発現のメカニズム解明を行った。Fischer ratsでは笑気を吸入することにより脊髄のc-Fos陽性細胞は吸入前の3倍になり、GABA合成酵素を蛍光染色すると共存が見られた。Lewis ratsではc-Fos陽性細胞数には変化なかった。これらより、笑気は脊髄のGABAニューロンを活性化して鎮痛効果を得ることが分かった。 分担：実験、データ収集と解析を行った。 共著者：Hashimoto T, Maze M, Ohashi Y, Fujinaga M</p>

9 Developmental variation in nitrous oxide-induced c-Fos expression in Fischer rat spinal cord (査読付) (笑気により発現するフィッシャーラットの脊髄のc-Fosの成長発達による変化)	共著	平成14年1月	Anesthesiology : 96(1)249-251	笑気により脊髄の下降性抑制系が賦活化されて鎮痛効果が得られることが分かってきている。新生児期では下降性抑制系の機能が十分に発達していないので笑気の効果は新生児期のラットで調べた。成人のラットでは笑気により脊髄でc-Fos発現が見られたが、新生児期のラットでは見られなかった。新生児期ラットではノルアドレナージックな下降性抑制系が十分な機能を果たしていないため、笑気の鎮痛効果は下降性抑制系の発達が不十分なため得られない。 分担：実験、データ収集と解析を行った。 共著者：Hashimoto T, <u>Ohashi Y</u> , Nelson LE, Maze M
10 Nitrous oxide exerts age-dependent antinociceptive effects in Fischer rat (査読付) (笑気のフィッシャーラットにおける鎮痛効果発現の年齢による違い)	共著	平成14年11月	Pain : 100(1-2)7-18	笑気 (N2O)は中脳のアピオイドを放出させて下降性抑制系を賦活化させて鎮痛効果を発現するといわれているが、詳細なメカニズムは不明である。下降性抑制系の十分な発達を乳幼児期ではしていない。このため若いラットで笑気の効果はc-Fosを用いて検討した。成人ラットで笑気により賦活化され発現した脊髄のc-Fosが若年ラットでは発現しなかった。乳児期では笑気の鎮痛効果が得られない可能性がある。 分担：筆頭著者として、研究全体のデザイン、実験、データ収集と解析、考察を行った。 共著者： <u>Ohashi Y</u> , Stowell JM, Nelson LE, Hashimoto T, Maze M, Fujinaga M
11 Evidence for the involvement of spinal cord alpha adrenoreceptors in nitrous oxide-induced antinociceptive effects in Fischer rats. (査読付) (フィッシャーラットでα1アドレナリンレセプターが笑気による鎮痛効果に関与していることの証拠)	共著	平成14年12月	Anesthesiology ; 97(6)1258-1465	今回α1アドレナリン受容体がcFosの活性化に関与しているのではないかと推測した。笑気を吸入後に脊髄の凍結切片を作成し、cFosとα1アドレナリン受容体を二重染色し共存の有無を調べた。またオピオイド、α1、α2、セロトニン受容体の拮抗薬を投与しcFosの発現を調べた。オピオイド、α1、α2拮抗薬で笑気の鎮痛効果が弱められ、α1アドレナリン受容体とcFosが二重染色で共存した。 分担：実験、データ収集と解析を行った。 共著者：Orii R, <u>Ohashi Y</u> , Guo T, Nelson LE, Hashimoto T, Maze M, Fujinaga M
12 GABAergic interneurons at supraspinal and spinal levels differentially modulate the antinociceptive effect of nitrous oxide in Fischer rats. (査読付) (フィッシャーラットの脊髄上レベルと脊髄レベルでのGABAニューロンの笑気の鎮痛作用制御における効果の違い)	共著	平成15年5月	Anesthesiology : 98(5)1223-1230	GABAニューロンが脊髄より上位で下降性抑制系の tonic inhibitionを拮抗することにより笑気鎮痛効果を発現するのではないかと予測した。笑気の鎮痛効果はGABA(A)受容体アゴニスト(脳室内)、GABA(A)受容体アンタゴニスト(くも膜下腔)ミダゾラム(腹腔内)によって低下した。ミダゾラム(腹腔内)は脊髄レベルのcFos発現とA7でcFos発現を減少させた。GABAニューロンは脊髄上位では効果を増強させ脊髄レベルでは効果を低下させる。 分担：実験、データ収集と解析を行った。 共著者：Orii R, <u>Ohashi Y</u> , Halder S, Giombini M, Maze M, Fujinaga M
13 Brain stem opioidergic and GABAergic neurons mediate the antinociceptive effect of nitrous oxide in Fischer rats. (査読付) (フィッシャーラットにおける、脳幹部オピオイドニューロンとGABAニューロンの笑気による鎮痛作用制御について)	共著	平成15年10月	Anesthesiology : 99(4)947-954	笑気の鎮痛効果発現のメカニズムを解明を目的とした。中脳中心灰白質に投与されたナロキソン、マシモロールは脊髄、橋で笑気により発現される下降性抑制系のノルアドレナージック神経細胞のcFos発現を抑制し、特にA7で抑制した。またA7に投与されたマシモロール、ナロキソンも抑制した。橋でGABAニューロンによりTonic inhibitionされている下降性抑制系を笑気は脳幹でオピオイドを放出させて賦活化することにより活性化させる。 分担：筆頭著者として、研究全体のデザイン、実験、データ収集と解析、考察を行った。 共著者： <u>Ohashi Y</u> , Guo T, Orii R, Maze M, Fujinaga M
14 Dexmedetomidine exerts dose-dependent age-independent antinociception but age-dependent hypnosis in Fischer rats. (査読付) (フィッシャーラットでデキサメドミジン(α2アゴニスト)の鎮痛効果は量依存で年齢には依存しないが、鎮静効果は年齢に依存する)	共著	平成17年5月	Anesth Analg : 100(5)1295-1302	デキサメドミジン(α2アゴニスト)は鎮痛鎮静に成人で効果がある。新生児期、小児では効果についての情報は少ない。いくつかの薬剤では鎮痛効果がないことも分かった。今回若年ラットで鎮痛効果の発現について検討した。S生後7日から29日までのラットにデキサメドミジンを投与し、行動調査とフォルマリンplanter testを行った。すべての年齢で鎮痛効果を発現した。また新生児期のラットで最も鎮静効果が強かった。分担：実験、データ収集と解析を行った。共著者：Sanders RD, Giombini M, Ma D, <u>Ohashi Y</u> , Hossain M, Fujinaga M, Maze M

15 乳幼児期における全身麻酔中にネオスチグミンによると考えられるアナフィラキシー症状を来した2症例（査読付）	共著	平成28年4月	麻酔65：377-379	<p>アナフィラキシーは、全身麻酔中に起こる合併症の中でもっとも重篤なものの一つである。アナフィラキシー発症年齢は、医療をうける頻度が高くなると考えられる40歳代に多く、乳幼児期の報告は少ない。過去に複数回の麻酔経験がある乳幼児で全身麻酔中にネオスチグミンによると考えられるアナフィラキシー症状を経験した。複数回の麻酔経験のある患児には乳幼児期でもアナフィラキシーが起こる可能性があり注意が必要である。</p> <p>分担：症例を筆頭著者と共に担当し、文献検索、症例検討を行い、投稿経験のない筆頭著者の指導も行った。</p> <p>共著者：岩崎紗世、木下陽子、浅越佑太郎、松崎孝、新井美奈子、佐藤哲文</p>
16 経尿道的膀胱腫瘍摘出術（TUR-Bt）中に起こった膀胱穿孔により低ナトリウム血症を来した2症例（査読付）	共著	平成30年7月	麻酔67：752-757	<p>経尿道的膀胱腫瘍摘出術（TUR-Bt）中に膀胱穿孔により低ナトリウム（Na）血症を来した2症例を経験した。膀胱穿孔はTUR-Btにおいて膀胱穿孔は2番目に頻度が高く、1.3-5%の頻度で発生する。漏出した灌流液へNaが移行するため低Na血症を来す。ナトリウム移行とともに血液量の低下も来し、低血圧を本2症例もみとめた。治療は膀胱外に漏出した灌流液を早期に取り除き、灌流液へのNa移行を最小限にとどめ循環血液量の補正を行う。</p> <p>分担：症例を筆頭著者と共に担当し、文献検索、症例検討を行い、投稿経験のない筆頭著者の指導も行った。</p> <p>共著者：瀬戸富美子、永谷雅子、池上まりあ、木下陽子、佐藤哲文</p>
（その他・抄録）				
1 急性痛と神経因性疼痛における下垂体の組織学的解析	共著	平成22年6月	日本麻酔科学会：抄録	<p>急性痛および慢性疼痛における下垂体の機能的変化を、細胞活動の指標となるc-Fosタンパク質に着目し、検討した【方法】急性体性疼痛モデル、急性内臓痛モデル、慢性神経因性疼痛モデル、慢性炎症性疼痛モデルにおいて疼痛反応を評価し、さらに下垂体凍結切片を作成しc-Fos陽性細胞数を計測した。【結果】急性体性疼痛モデル群、急性内臓痛モデル群、慢性炎症性疼痛群において、下垂体前葉でコントロールと比較して有意にc-Fos陽性細胞が増加していた。</p>
2 超音波診断装置を用いた乳幼児網膜芽細胞腫に対する選択的動脈抗がん剤注入術中の頭蓋内血流の変化	共著	平成28年5月	日本麻酔科学会：抄録	<p>選択的動脈抗がん剤注入術は、網膜芽細胞腫に対する局所化学療法である。バルーンカテーテルを挿入時内頸動脈を動脈分岐の遠位を一時的に遮断する。Willisの動脈輪を介しての血流が遮断による血流低下を補償するかどうか検討した。遮断時大泉門から超音波診断装置を用いてWillis動脈輪をカラードプラー法で頭蓋内血流を描出し、パルスドプラー法で中大脳動脈の流速を測定した。内頸動脈遮断後遮断測の中大脳動脈血流速度は低下した。解除後は速やかに改善した。乳幼児において、Willis動脈輪よりの反対側への血流補償は十分でないと考えられた。</p>
3 Changes in the Tissue Oxygenation in Selective Ophthalmic Artery Infusion Therapy for Infants with Retinoblastoma （選択的動脈抗がん剤注入術中の局所脳組織酸素飽和度の変化）	共著	平成28年10月	米国麻酔科学会：抄録	<p>選択的動脈抗がん剤注入術は、網膜芽細胞腫に対する局所化学療法である。バルーンカテーテルを挿入時内頸動脈を動脈分岐の遠位を一時的に遮断する。この期間での局所脳組織酸素飽和度（rSO2）を測定した。遮断時遮断測rSO2は低下した。遮断解除後は一過性にrSO2は上昇し、以後ベースラインに復した。対側には変化なかった。乳幼児において、血管病変が存在する可能性は少ないと考えられ、Willis動脈輪よりの反対側への血流補償十分でないと考えられた。</p>
（その他・学会発表）				
[国内シンポジウム]				
1 『腎不全患者の周術期管理』開心術における血中マグネシウム濃度 - 正常患者と腎機能障害患者との比較 -	一	平成9年8月	第43回日本麻酔学会関西地方会、大阪	<p>概略：マグネシウムについてのシンポジウムにおいて発表した。マグネシウムは腎よりのみ排泄されるため、マグネシウムを使用した心筋保護液を使用した場合、対岸循環離脱後高マグネシウム血症となる可能性があり、低血圧や循環不全となる可能性があり、血中のマグネシウムイオンの測定が重要である主旨の発表を行った。</p> <p>共同演者：大橋陽子、内田 整、畔 政和</p>

<p>2『Mgの循環系への作用』術後の不整脈とイオン化マグネシウム</p>	—	平成11年5月	第20回日本循環制御医学会総会、 仙台	<p>概要：日本循環制御医学会総会のマグネシウムについてのシンポジウムで発表した。食道がん術後にはよく不整脈（心房細動）が起こることがある。この予防にマグネシウムを投与し、血中のマグネシウムイオンの濃度を高く維持することで、治療に必要な不整脈の発生を予防できたことを中心に、今まで集めたデータについても若干触れて発表した。 共同演者：大橋陽子、西村匡司、西村信哉、藤野裕士、妙中信之、畔 政和</p>
<p>[海外]</p> <p>1. Lung injury induced by extracorporeal circulation in infants. (小児における人工肺の及ぼす肺障害について)</p> <p>2. The effect of magnesium rich cardioplegic solution upon blood ionized magnesium level during open heart surgery (マグネシウムを多く含む心筋保護液を使用した場合開心術後のイオン化マグネシウム濃度へ及ぼす影響)</p> <p>3. The suppressive effects of magnesium rich cardioplegic solutions on arrhythmias after open heart surgery . (マグネシウムを多く含む心筋保護液の使用は開心術後の不整脈を減らす)</p> <p>4. Effect of nitrous oxide formalin-induced c-Fos expression in the spinal cord of adult and newborn Fischer rats. (新生児期と成人のフィッシャーラットでフォルマリンにより誘発される脊髄のc-Fosに笑気が及ぼす影響)</p> <p>5. Neural nuclei activated by nitrous oxide in Fischer rats. (神経核を笑気は活性化する)</p>	—	<p>平成8年4月</p> <p>平成8年10月</p> <p>平成9年10月</p> <p>平成13年10月</p> <p>平成13年10月</p>	<p>11 th World Congress of Anaesthesiologists Sydney Australia,</p> <p>American society of anesthesiologists New Orleans, Louisiana</p> <p>American society of anesthesiologists San Diego, Californi</p> <p>American society of anesthesiologists New Orleans, Louisiana,</p> <p>American society of anesthesiologists New Orleans, Louisiana,</p>	<p>概要：小児の体外循環後肺再灌流直後に肺動脈と肺静脈、橈骨動脈より採血を行い白血球数、補体について測定した。体外循環後補体は活性化し、肺障害を引き起こすと考えられた。 共同演者：Ohashi Y, Yamamoto F, Uchida O, Iribe G, Kuro M.</p> <p>概要：マグネシウムを多く含む心筋保護液を使用した場合、開心術後のイオン化マグネシウムは高値を維持した。 共同演者：Ohashi Y, Uchida O, Kuro M.</p> <p>概要：マグネシウムを多く含む心筋保護液を使用した場合、開心術後の治療を有する心室性の不整脈を減らした。 共同演者：Ohashi Y, Uchida O, Kuro M.</p> <p>概要；ポスターディスカッションで発表した。新生児期ラットは下降性抑制系が発達していないので、笑気による鎮痛効果が見られなかった。 共同演者：Ohashi Y, Stowell JM, Nelson LE, Maze M, Fujinaga M.</p> <p>概要；ポスター発表した。笑気は脊髄のc-Fosを発現させる。これは脊髄レベルでの下降性抑制系の賦活化をしているためと考えられる。 共同演者：Ohashi Y, Stowell JM, Orii R, Maze M, Fujinaga M.</p>

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 古山 桂太郎				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
内科系臨困医学		核医学(PETを含む)、画像診断学(含放射線診断学)、放射性医薬品・造影剤、放射線治療学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. FDG-PETによる自己免疫性膵炎の診断—最近の動向を踏まえた診断意義の再考	共著	平成24年1月	肝胆膵 64(1): 53-60, 2012・アークメディア 8ページ	消化器分野の自己免疫性膵炎に対するFDG-PETの意義、検査施行法や有用性について記した。FDG-PETを用いた自己免疫性膵炎と膵癌の鑑別についても記した。 (役割) 筆頭著者として、論文全体に主導的な立場で関わった。古山桂太郎, 高橋美和子, 百瀬敏光
(学術論文) 1. Evaluation of mass-transfer characteristics in alginate-membrane liquid-core capsules prepared using polyethylene glycol (査読付) (ポリエチレングリコールを用いて調製したアルギン酸皮膜液芯カプセルにおける物質移動特性の評価)	共著	平成16年2月	J Biosci Bioeng. 2004;97(2):111-8 8ページ	ポリエチレングリコールを用いてアルギン酸皮膜液芯カプセルを作製し、その内部へのグルコースの物質移動特性を評価した。その結果、アルギン酸皮膜液芯カプセル内へのグルコースの物質移動係数は、アルギン酸ビーズおよび水中を上回ることを確認し、固定化担体としてアルギン酸皮膜液芯カプセルの有用性を示した。(役割) 筆頭著者として、論文全体に主導的な立場で関わった。Koyama K, Seki M.
2. Cultivation of yeast and plant cells entrapped in the low-viscous liquid-core of an alginate membrane capsule prepared using polyethylene glycol (査読付) (ポリエチレングリコールを用いて調製したアルギン酸皮膜低粘性液芯カプセル内での酵母と植物細胞の培養)	共著	平成16年8月	J Biosci Bioeng. 2004;98(2):114-21. 8ページ	ポリエチレングリコールを用いてアルギン酸皮膜液芯カプセルを作製し、その内部で酵母を培養したところ、カプセルの増大なく、内部に高濃度で酵母を培養出来ることを示した。また、アルギン酸皮膜液芯カプセル内でイチゴ培養細胞も培養可能であることを確認した。結果、細胞固定化担体としてアルギン酸皮膜液芯カプセルの有用性を示した。 (役割) 筆頭著者として、論文全体に主導的な立場で関わった。Koyama K, Seki M.
3. A ⁹⁰ Y-labelled anti-ROB01 monoclonal antibody exhibits antitumour activity against hepatocellular carcinoma xenografts during ROB01-targeted radioimmunotherapy (査読付) (⁹⁰ Y標識ROB01モノクローナル抗体はROB01対象とした放射免疫療法によって肝細胞癌ゼノグラフトに対して抗腫瘍効果を発揮する)	共著	平成26年6月	EJNMMI Res. 2014; 4: 29 10ページ	肝細胞癌表面のROB01に対する抗ROB01抗体を用いて、Y-90標識抗ROB01抗体を作製し、肝細胞癌担癌マウスに投与したところ、体重減少などの副作用を認めずに、抗腫瘍効果が確認された。結果、肝細胞癌に対する放射免疫療法の薬剤として、Y-90標識抗ROB01抗体の有用性を示した。 (役割) データの測定・解析等を行った。Kentaro Fujiwara, Keitaro Koyama, Kosuke Suga, Masako Ikemura, Yasutaka Saito, Akihiro Hino, Hiroko Iwanari, Osamu Kusano-Arai, Kenichi Mitsui, Hiroyuki Kasahara, Masashi Fukayama, Tatsuhiro Kodama, Takao Hamakubo, and Toshimitsu Momose

<p>4. Dynamic metabolic changes during the first 3 months after ⁹⁰Y-ibritumomab tiuxetan radioimmunotherapy (査読付)</p> <p>(⁹⁰Yイブリツモマブ チウキセタンによる放射免疫療法による最初投与3ヶ月の代謝変化)</p>	共著	平成26年6月	ScientificWorldJournal. 2014 6ページ	<p>放射免疫療法としてY-90標識イブリツモマブ チウキセタンを難治性濾胞性リンパ腫患者に投与した際の、投与3ヶ月のリンパ腫の代謝変化をFDG-PETを用いた糖代謝で評価した。その結果、投与1週間で糖代謝は多くの病変で20%まで低下した。しかし、4週間から12週間の間で、糖代謝が増加する病変も存在し、この間の代謝を注意深く評価する必要性を示した。</p> <p>(役割) データの測定・解析等を行った。 Miwako Takahashi, Toshimitsu Momose, <u>Keitaro Kovama</u>, Motoshi Ichikawa, Mineo Kurokawa and Kuni Ohtomo</p>
<p>5. ⁹⁰Y-Labeled Anti-ROB01 Monoclonal Antibody Exhibits Antitumor Activity against Small Cell Lung Cancer Xenografts (査読付)</p> <p>(⁹⁰Y標識ROB01モノクローナル抗体は肺小細胞癌ゼノグラフトに対して抗腫瘍効果を発揮する)</p>	共著	平成27年5月	PLoS One. 2015 May 27;10(5) 13ページ	<p>Y-90標識抗ROB01抗体を、細胞表面にROB01が発現している肺小細胞癌を移植したマウスに投与したところ、著明な腫瘍縮小効果が達成された。病理学的にも凝固壊死、細胞変性、アポトーシスなどの変化を確認した。結果、肺小細胞癌に対する放射免疫療法の薬剤として、Y-90標識抗ROB01抗体の有用性を示した。</p> <p>(役割) データの測定・解析等を行った。 Kentaro Fujiwara, <u>Keitaro Kovama</u>, Kosuke Suga, Masako Ikemura, Yasutaka Saito, Akihiro Hino, Hiroko Iwanari, Osamu Kusano-Arai, Kenichi Mitsui, Hiroyuki Kasahara, Masashi Fukayama, Tatsuhiko Kodama, Takao Hamakubo, Toshimitsu Momose</p>
<p>6. Preoperative evaluation of renal cell carcinoma by using ¹⁸F-FDG PET/CT (査読付)</p> <p>(¹⁸F-FDG PET/CTを用いた腎細胞癌の術前評価)</p>	共著	平成27年12月	Clin Nucl Med. 2015 Dec; 40(12) 5ページ	<p>術前腎癌患者にFDG-PETを施行し、SUVと組織型、核異型評価との関連を検討したところ、異型度が高い淡明細胞型腎細胞癌と乳頭状腎細胞癌のSUVは、コントロールと比較して有意に高かった。また、異型度が高い淡明細胞型腎細胞癌のSUVは異型度が低い腫瘍より有意に高かった。結果、FDG-PETのSUVは腎細胞癌の異型度を予測出来る可能性を示した。</p> <p>(役割) データの測定・解析等を行った。 Miwako Takahashi, Haruki Kume, <u>Keitaro Kovama</u>, Tohru Nakagawa, Tetsuya Fujimura, Teppei Morikawa, Masashi Fukayama, Yukio Homma, Kuni Ohtomo, and Toshimitsu Momose</p>
<p>(その他) (学会発表)</p> <p>1. 小動物用PET 装置を用いた肝腫瘍モデルマウスにおける⁶⁴Cu標識抗ROB01 抗体の体内動態の解析</p> <p>2. 抗ROB01抗体を用いた小細胞肺癌に対する放射免疫療法の開発</p>	-	<p>平成22年11月</p> <p>平成23年10月</p>	<p>第50回 日本核医学会 学術総会, 埼玉</p> <p>第51回 日本核医学会 学術総会, 茨城</p>	<p>放射免疫療法の薬剤開発において、核種標識化抗体の担癌モデルマウスにおける生体内分布の経時的変化の評価は重要な位置を占める。そこでこの評価を小動物用PET装置からの収集データを用いて行うことを目的とし、抗体として肝細胞癌等の膜タンパク質ROB01に対する抗ROB01 IgG抗体を作製し、これをポジトロン核種Cu-64で標識した抗体をROB01の発現を認める肝腫瘍モデルマウスに投与し、小動物用PET装置を用いて、PETデータ収集を施行した。その結果、腫瘍および正常組織への集積をPETの収集データより定量的に算出することが出来た。<u>古山桂太郎</u>, 藤原健太郎, 熊倉嘉貴, 高橋美和子, 百瀬敏光</p> <p>膜タンパク質ROB01は肝細胞癌や小細胞肺癌(SCLC)などに特異的に高発現しているため、ROB01を標的とする放射免疫療法(RIT)の達成が期待されている。そこで本研究では、SCLCマウスを導入し、小動物用PETを用いてCu-64標識抗ROB01抗体の腫瘍への集積を確認した後、Y-90標識抗ROB01抗体によるRITを施行した。その結果、小動物用PET実験では、標識化抗体の腫瘍への集積を確認した。この結果を踏まえて施行したRIT実験では、腫瘍の縮小が観察され、投与20日後には腫瘍体積は投与前の6%まで減少した。<u>古山桂太郎</u>, 藤原健太郎, 北田孝幸, 荒井拓也, 高橋美和子, 百瀬敏光</p>

<p>3. 放射免疫療法における標識化抗体の投与法の検討</p>	-	平成24年10月	第52回 日本核医学会学術総会, 札幌	放射免疫療法の抗腫瘍効果の改善を目的として、再投与がもたらす抗腫瘍効果や副作用を評価した。Y-90標識抗ROB01抗体を肺小細胞癌担癌マウスに対し投与した後の21日目に、Y-90標識抗ROB01抗体を再投与した。その結果、副作用の骨髄抑制による血球数減少は、再投与1ヶ月後にはほぼ正常まで回復した。また、再投与による腫瘍の再縮小も確認されたが、再投与時の抗腫瘍効果は初回投与時と比して低下する傾向にあり、腫瘍の消失までには至らなかった。 古山桂太郎, 藤原健太郎, 北田孝幸, 荒井拓也, 高橋美和子, 百瀬敏光
<p>4. Radioimmunotherapy for small cell lung cancer utilizing newly developed Y-90 labeled anti-ROB01 antibody (新たに開発されたY-90標識抗ROB01抗体を用いた小細胞癌肺癌に対する放射免疫療法)</p>	-	平成25年6月	The Society of Nuclear Medicine and Molecular Imaging 2013 Annual Meeting, Vancouver, Canada	膜タンパク質ROB01は小細胞肺癌(SCLC)などに特異的に高発現しているため、ROB01を標的とする放射免疫療法の達成が期待されている。そこで本研究では、SCLCマウスを導入し、Y-90標識抗ROB01抗体によるRITを施行した。その結果、腫瘍の縮小が観察され、投与20日後には腫瘍体積は投与前の6%まで減少した。骨髄抑制による血球減少は一時的であった。また、抗腫瘍効果の放射エネルギー依存性も確認した。 <u>Keitaro Kovama</u> , Kentaro Fujiwara, Takayuki Kitada, Miwako Takahashi, Toshimitsu Momose
<p>5. F-18 FDGおよび小動物用PET/CT装置を用いた放射免疫療法による抗腫瘍効果の経時的変化の検討</p>	-	平成25年11月	第53回 日本核医学会学術総会, 福岡	FDG-PETを導入し、腫瘍の糖代謝能を指標として、放射免疫療法による抗腫瘍効果の評価を行った。放射免疫療法としてY-90標識抗ROB01抗体をSCLCマウスに対し投与し、投与後から1週間おきに、小動物用PET/CTを用いて、FDG投与1時間後の腫瘍への集積の画像化と集積程度の算出を行った。その結果、RITによる腫瘍の縮小とともに腫瘍への集積は減少していき、腫瘍体積が最小となった21日目に集積も最小となり、開始前の57%まで減少した。FDG-PETは放射免疫療法の治療効果の評価に有用である可能性が示唆された。 古山桂太郎, 菅康佑, 藤原健太郎, 北田孝幸, 高橋美和子, 百瀬敏光
<p>6. Evaluation of importance of myocardial scintigraphy for diagnosis of diffuse Lewy body disease based on comparisons with brain perfusion SPECT (脳血流SPECTとの比較に基づいたびまん性レビー小体病の診断に対する心筋シンチグラフィの重要性の評価)</p>	-	平成26年6月	The Society of Nuclear Medicine and Molecular Imaging 2014 Annual Meeting, St. Louis, USA	脳血流SPECTとの比較に基づいた、びまん性レビー小体病(DLBD)の診断に対するMIBG心筋シンチグラフィの重要性を評価した。その結果、脳血流SPECTでDLBDと診断されなかった症例の17%でMIBG心筋シンチグラフィの結果からDLBDと診断された。逆に、脳血流SPECTでprobable DLBDと診断された症例の55%しかMIBG心筋シンチグラフィでDLBDと診断されなかった。従って、DLBDの診断には脳血流SPECTのみでなく、MIBG心筋シンチグラフィが重要であることが示唆された。 <u>Keitaro Kovama</u> , Miwako Takahashi and Toshimitsu Momose
<p>7. 放射免疫療法の開発におけるCu-64標識癌特異的抗体のPET Imagingの有用性の検討</p>	-	平成26年11月	第54回 日本核医学会学術総会, 大阪	肝細胞癌の膜タンパク質ROB01に対する抗ROB01抗体を作製後、ポジトロン核種Cu-64標識化抗ROB01抗体の肝細胞癌担癌マウスへの投与によるPET Imagingを施行し、計測された定量的結果と解剖法による結果を比較したところ、腫瘍への集積程度に有意差を認めなかった。この結果から、Cu-64標識化抗体を用いたPET Imagingによる評価も抗体のin vivoにおける腫瘍特異性のscreeningおよび放射免疫療法の開発の進行に有用である可能性が示唆された。 古山桂太郎, 菅康佑, 藤原健太郎, 北田孝幸, 高橋美和子, 齋藤泰孝, 日野明弘, 百瀬敏光

<p>8. シンポジウム がん特異性蛋白を認識するイメージング技術とその治療への応用 「ROB01抗原を標的としたCu-64およびY-90標識モノクローナル抗体を用いた腫瘍イメージングおよび治療」</p>	-	<p>平成27年4月</p>	<p>第74回日本医学放射線学会総会, 横浜</p>	<p>癌細胞表面の抗原に対する抗体を用いたRI標識化抗体は、新たな画像診断薬や放射免疫療法(RIT)の薬剤として注目を集めている。RI標識化抗体の生体内imagingの中で、PETが高分解能、高感度、定量化といった特徴を持つため、有用とされている。肝細胞癌や小細胞肺癌(SCLC)などに特異的に高発現している膜タンパク質ROB01を標的とした抗ROB01抗体を作製し、肺小細胞癌マウスを導入して、小動物用PETを用いたCu-64標識抗ROB01抗体のPET imagingとY-90標識抗ROB01抗体によるRITの実験結果を踏まえながら、ポジトロン核種で標識した抗体のPET imagingについて発表を行った。</p>
<p>9. 腫瘍性低リン血症性骨軟化症におけるFDG-PET/CTの有用性の検討</p>	-	<p>平成27年11月</p>	<p>第55回 日本核医学会学術総会, 東京</p>	<p>腫瘍性低リン血症性骨軟化症(TIO)の検出におけるFDG-PET/CTの有用性を検討した。摘除症例は、全てに責任病変にFDG集積を認めた。責任病変は、前頭蓋窩、外耳道、耳下腺、副鼻腔、腸骨、大腿骨、足底部に認め、全身に及んだ。結果、TIOの責任病変検出に頭部、下肢を含むFDG-PET/CTの全身撮像が有用と考えられた。古山桂太郎, 高橋美和子, 百瀬敏光</p>
<p>10. 軟部組織/骨悪性腫瘍におけるFDG-PET/CTの有用性の検討</p>	-	<p>平成28年11月</p>	<p>第56回日本核医学会学術総会, 愛知,</p>	<p>軟部組織/骨悪性腫瘍に対するFDG-PET/CTの有用性を検討した。病変のFDG集積程度は幅広く分布し、組織型別の集積程度もそれぞれの間で重なりが大きかったが、Pleomorphic sarcomaは高集積である傾向にあった。一方、集積程度と悪性度の指標の一つであるMIB-1 Indexとの相関はほとんど認めなかった。古山桂太郎, 高橋美和子, 百瀬敏光</p>

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 笹生 豊
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
整形外科、脊椎脊髄病		整形外科、脊椎脊髄外科、脊柱変形、骨粗鬆症、筋肉生理学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 難病の理解とケア 後縦靭帯骨化症	共著	2002年4月	Gakken、Nursing Mook 10	ISBN4-05-602593-2 厚生労働省難病指定疾患である靭帯骨化症の詳細と看護上の問題点を紹介した。 水島 裕監修、 <u>笹生 豊</u> 他
2. 難病の理解とケア 広範脊柱管狭窄症	共著	2002年4月	Gakken、Nursing Mook 10	ISBN4-05-602593-2 厚生労働省難病指定疾患である広範脊柱管狭窄症の詳細と看護上の問題点を紹介した。 水島 裕監修、 <u>笹生 豊</u> 他
3. 今日の診断基準、第1版	共著	2007年6月	南江堂	ISBN978-4-23908-5 腰椎椎間板ヘルニアの診断・治療の解説 編集：大田健／奈良信雄 (担当：13章 腰椎椎間板ヘルニア： <u>笹生 豊</u> 青木治人)
4. 今日の診断基準、第1版	共著	2007年6月	南江堂	ISBN978-4-23908-5 脊椎分離症・すべり症の診断・治療の解説 編集：大田健／奈良信雄 (担当：13章 脊椎分離・すべり症： <u>笹生 豊</u> 青木治人)
5. インフォームドコンセントtool整形外科イラストLibrary	共著	2008年3月	Medical View社	ISBN978-4-7583-0638-6 実際の手術説明を想定したのポイントをイラスト画像を用いながら紹介。腰椎2 腰椎椎間板ヘルニアの執筆を担当。 平泉裕編、 <u>笹生 豊</u> 他
6. 今日の整形外科治療指針、第6版	共著	2010年6月	医学書院	ISBN978-4-00802-0 全国の大学で使用する目的で作成した診療辞典。 (担当：1 診断と治療総論 トピックス：椎体形成術) 骨粗鬆症性椎体骨折に対する椎体形成術を担当し、適応、手技、合併症を解説した。 編集：国分正一／岩谷力／落合直之／佛淵孝夫、 <u>笹生 豊</u> 他
7. 難病辞典、第1版	共著	2015年12月	学研メディカル秀潤社	ISBN978-4-7809 看護師を対象にした厚生労働省指定難病における広範脊柱管狭窄症の診断・治療・看護の問題を説明。 責任編集：尾崎承一、 <u>笹生 豊</u> 他
(翻訳) 1. 見てわかるスポーツ整形外科手術	共著	2005年7月	エルゼビア・ジャパン	ISBN4-86034-831-1 Surgical Atlas of Sports Medicine. Mark D. Miller, Richard F. Howard, Kevin D. Plancher著の翻訳。 担当：20章 膝蓋骨骨折の治療：145-149 監訳 別府諸兄、青木治人、 <u>笹生 豊</u> 他

2. 運動器の超音波診断	共著	2010年9月	NAP	ISBN978-4-931411-99-9 Fundamentals of Musculoskeletal Ultrasound. Jon A. Jacobson著。 担当：第2章 超音波の基礎：15-32 監訳 別府諸兄、中島浩志、 <u>笹生 豊</u> 他
3. 整形外科 スポーツ傷害診察ハンドブック	共著	2012年3月	NAP	ISBN978-4-905168-13-3 orthopedic and Athletic Injury Examination Handbook, edition2の翻訳。 担当 13章 胸椎と腰椎の病態：295-338 監訳 別府諸兄、 <u>笹生 豊</u> 他
(学術論文)				
【原著】				
1. 頸椎前方固定に対するチタンケージの使用経験 (査読付)	共著	2007年9月	日本脊椎インストゥルメンテーション学会誌；7(1):7-10.	頸椎前方除圧後の固定としてチタンケージを単独で挿入した手術成績を報告した。椎体沈下例はあるが、概ね良好な成績であった。 (担当部分) 企画、校閲 三浦竹彦、富永泰弘、鈴木健宙、 <u>笹生 豊</u> 、 <u>益雄</u> 、 <u>浜辺正樹</u> 、 <u>別府諸兄</u>
2. 骨粗鬆症性圧迫骨折に対する経皮的椎体形成術のQOL評価 (査読付)	共著	2008年4月	Japan Journal of Intervention Radiology 24:42-47.	当院で施行した骨粗鬆症性椎体骨折後の疼痛残存例に対して行った経皮的椎体形成術後のQOL評価を前向きに分析した。QOLの改善は、施行70%に認めた。 (担当部分) 症例提供、校閲 吉松美佐子、滝澤謙治、中島康雄、杉森裕樹、境野晋二郎、小川晋久、八木橋国博、上島巖、橋川薫、舟窪正勝、松岡伸、 <u>笹生 豊</u>
3. 胸椎後縦靭帯骨化症に対する手術成績に影響を与える因子の検討—多施設後ろ向き研究— (査読付)	共著	2008年6月	臨床整形外科43(6):531-569.	脊椎手術の中でも最も困難とされる胸椎後縦靭帯骨化症の手術成績を大規模太施設後ろ向き試験でその問題点を抽出した。多椎病変の後方法の除圧単独例に成績不良を認めた。 (担当部分) 分担研究員、データ提供 松本守雄、千葉一裕、戸山芳昭、竹下克志、星地亜都司、中村耕三、有水淳、藤林俊介、平林茂平野徹、岩崎幹季、金岡恒治、川口善治、井尻幸成、前田健、松山幸弘、三上靖夫、村上英樹、永島英樹、永田見生、中原進之介、野原裕、岡史朗、坂本桂造、猿渡康雄、 <u>笹生 豊</u> 、清水克時、田口敏彦、高橋誠、田中靖久、谷 俊一、徳橋泰明、内田研造、山本謙吾、山崎正志、横山徹、吉田宗人、西脇祐司。
4. Surgical results and related factors for ossification of posterior longitudinal ligament of the thoracic spine -A multi-institutional retrospective study-. (査読付) 胸椎後縦靭帯骨化症に対する手術成績に影響を与える因子の検討—多施設後ろ向き研究—	共著	2008年9月	Spine (Phila Pa 1976) ; 33(9):1034-1041.	脊椎手術の中でも最も困難とされる胸椎後縦靭帯骨化症の手術成績を大規模太施設後ろ向き試験でその問題点を抽出した。多椎病変の後方法の除圧単独例に成績不良を認めた。 (担当部分) 分担研究員、データ提供 Matsumoto M, Chiba K, Toyama Y, Takeshita K, Seichi A, Nakamura K, Fujibayashi S, Hirabayashi S, Hirano T, Iwasaki M, Kaneoka K, Kawaguti Y, Ijiri H, Maeda T, Mikami Y, Nagashima H, Nagata K, Nakahara S, Nohara Y, Oka S, Sakamoto K, Shirahashi Y, <u>Sasao Y</u> , Shimizu K, Taguchi T, Takahashi M, Tani T, Tokuhashi Y, Uchida K, Yamamoto K, Yamazaki M, Yokayama T, Yoshida M, Tanaka Y, Nishiwaki Y.

5. An experimental study on initial fixation strength in transpedicular screwing augmented with calcium phosphate cement (査読付) : CPCを用いた椎弓根螺子の初期固定に対する生体力学研究	共著	2008年9月	Spine (Phila Pa 1976) ;34(20):E724-E728.	骨粗鬆症椎体の初期固定力の向上には椎弓根螺子挿入穴にPMMA注入で引き抜き強度が増加する。CPCは骨の親和性と誘導能を持つ骨補填剤である。しかし、この骨ペーストの注入時間と引き抜き強度の関係を示す報告は無い。今回、顆粒状CPCに溶解液を混入後の注入時間と椎弓根螺子引き抜き強度の関係を生体力学と脱灰標本から検討した。結果、開始4分後にCPCと椎弓根螺子を挿入することが最も望ましい。 (担当部分) 実験発案から計画、データ解析と論文校閲。正木大賀医師の学位論文。 Masaki T, Sasao Y, Miura T, Torii Y, Kojima A, Aoki H, Beppu M
6. 脊椎圧迫骨折患者の脊椎と上肢挙上との関係—Spinal Mouse®による検討— (査読付)	共著	2009年2月	聖マリアンナ医大雑誌 ; 37 : 191-202.	脊椎圧迫骨折患者の脊椎と上肢挙上との関係をspinal mouseを用いて評価した。後彎が増すに従って、肩甲骨の運動領域が減少し、肩関節可動域は減少する。 (担当部分) 企画指導、校閲指導 金子天哉、清水弘之、笹生 豊、別府諸兄
7. Short-term outcome of percutaneous vertebroplasty (PVP). (査読付) 骨粗鬆症性椎体骨折に対する経皮的椎体形成術PVPの短期手術成績	共著	2010年12月	Journal of St. Marianna University ; 1(2):27-35.	骨粗鬆症性椎体骨折に対する経皮的椎体形成術(PVP)は、併存症の多い高齢者や続発性骨粗鬆症にも適応する手技である。2006年10月～2007年11月までに施行し、2年経過観察可能な70例(121椎体)、平均年齢75.6歳の対象のVAS, HRQOL、画像評価を行った。臨床項目の全ては1週目から術前より有意に2年まで改善は維持されていた。椎体cleft群の画像変化は、1週後楔状角3度改善し、6ヵ月で術前と同様の値に矯正損失するが、2年まで維持した。 (担当部分) 筆頭著者として論文全体の企画、校正、統括、執筆に携わる。 笹生 豊、滝澤謙治、別府諸兄
8. スポーツ選手の腰椎分離症に対するPedicle screw hook rod法を用いた分離部修復術 (査読付)	共著	2011年5月	日本整形外科学会誌 ; 31(3):212-218.	スポーツによる疲労骨折が原因とされる腰椎分離症の手術選択は難しい。我々が行ったpedicle screw hook rod法による分離部修復術の成績と手術のコツを紹介した。 (担当部分) 企画立案、校閲指導 小島 敦、笹生 豊、鳥居良昭、森岡成太、藤井厚司、別府諸兄
9. Acute cervical spinal cord injury complicated by preexisting ossification of the posterior Longitudinal ligament: A multicenter study. (査読付) 頸椎後縦靭帯骨化症による脊髄損傷例の入院時合併症検討 全国多施設研究。	共著	2011年8月	Spine(Phila Pa) ;36(18):1453-1458.	頸椎後縦靭帯骨化症による脊髄損傷例の合併症の後ろ向き全国多施設研究。 (分担部分) 分担研究員、データ提供 Chikuda H, Seichi A, Takeshita K, Matsunaga S, Watanabe M, Nakagawa Y, Oshima K, Sasao Y, Tokuhashi Y, Nakahara S, Endo K, Uchida K, Takahata M, Yokoyama T, Nohara Y, Imagama S, Hosoe H, Ohtsu H, Kawaguchi H, Toyama Y, Nakamura K.
10. 側弯症に対する後方矯正法の基本.	単著	2011年10月	Stryker Infos Spine 2011;2:15-17.	思春期脊柱側弯症に対する椎弓根螺子を用いた後方矯正法の手術成績・合併症を検討した。術後矯正は80%、合併症も無く安定な成績であった。
11. 成人側弯症の手術治療 経験 手術時年齢での検討. (査読付)	共著	2011年11月	Journal of Spine Research ; 2(11):1847-1852	成人側弯症の手術例を70歳以上と70歳未満の2群での手術成績を比較検討した。合併症は70歳以上に有意に多く、慎重に手術適応を選択すべきである。 (担当部分) 企画立案、校閲指導 小島 敦、笹生 豊、鳥居良昭、森岡成太、安原和之、上野純、別府諸兄

12. 成人腰椎・胸腰椎側弯症の画像変化と臨床像。(査読付)	共著	2012年11月	Journal of Spine Research ;3:1496-1499.	高齢胸腰椎・腰椎側弯症の画像変化と腰痛を考察した。対象はCobb角45度以上(平均56.1度)で55歳以上(平均年齢68.1歳)の未治療腰椎主カーブ例34例で、患者アウトカムと脊柱バランスを計測し、ピアソン相関係数を算出した。結果VASとRDQは脊柱バランスと骨盤傾斜・下肢長差に相関を示した。腰痛と脊柱アンバランスにも相関を認めた。骨盤傾斜を呈する例が約30%認め腰痛と相関した。下肢長差由来腰椎・胸腰椎側弯症は高齢期に問題となる。 (担当部分)筆頭著者として論文全体の企画、校正、統括、執筆に携わる。 笹生 豊、鳥居良昭、小島 敦、森岡成太、上野 純、別府諸兄
13. 骨粗鬆症性椎体骨折における医療連携	共著	2013年3月	整形外科最小侵襲手術ジャーナル, 64:37-41.	骨粗鬆症性椎体骨折に対する経皮的椎体形成術を安全に行うために整形外科と放射線科がチームとなり、その適応を吟味し入院から外来経過観察までの流れを紹介した。 (分担部分)筆頭著者として論文全体の企画、校正、統括、執筆に携わる。 笹生豊、滝沢謙治、別府諸兄
14. 骨粗鬆症性椎体骨折における医療連携	共著	2013年3月	整形外科最小侵襲手術ジャーナル, 64:37-41.	骨粗鬆症性椎体骨折に対する経皮的椎体形成術を安全に行うために整形外科と放射線科がチームとなり、その適応を吟味し入院から外来経過観察までの流れを紹介した。 (分担部分)筆頭著者として論文全体の企画、校正、統括、執筆に携わる。 笹生豊、滝沢謙治、別府諸兄
15. 成人脊柱変形に対する骨切り術の選択	共著	2013年4月	別冊整形外科、2014 ; 6 3 : 2 3 9 - 2 4 2 .	2008年から2012年までに成人脊柱変形に対し骨切り手術を施行し、6ヵ月以上経過観察が可能であった19例を対象とした。除外項目は、grade1の骨切り例で、骨切り方法の内訳はgrade2が2例、grade3が15例、grade5が1例、grade6が1例の手術成績を評価した。術前後のアウトカムは、VAS値、RDQ、ODI、EQ-5Dとも著明に改善し、術前後の矢状面アライメントもSVA、PT、PI-LLともに有意に改善し、骨切り術の有用性が評価できた。 (担当部分)企画発案、データ解析、著者 笹生 豊、鳥居良昭、小島 敦、森岡成太、藤井厚司、別府諸兄
16. Image finding following vertebroplasty in osteoporotic vertebral compression fractures: Bone healing and sagittal alignment (査読付) 骨粗鬆症性椎体骨折による椎体形成術PVP後の治癒過程と矢状面アライメント	共著	2013年9月	Open Journal of Radiology 2013, 3(3), 152-158. Doi:10.4236/ojrad 2013, 33025	骨粗鬆症性椎体骨折による椎体形成術は、後彎防止効果が期待できるが、48例101椎体に椎体形成を行った例の術後6ヶ月以上経過後の画像から、後彎は2.5度進行するが臨床成績に影響なかった事を報告した。 (担当部分)データ解析、校閲指導 Ikeda H, Nishio M, Matsoka S, Lohman D.B, Matsushita S, Ogawa Y, Hamaguchi S, Nakajima Y, Kojima A, Torii Y, Sasao Y.
17. 高齢者頸髄損傷患者の退院後の動向.	共著	2014年5月	日脊髄医誌、26:22-25	頸椎中心性脊髄損傷は高齢者に多い。若い年齢層の脊髄損傷が減少し、高齢者の脊髄損傷が増加している。この高齢者の退院後の動向についての報告は少ない。高度損傷例は、退院後死亡やその後動向不明例が多い。 (担当部分)企画発案、校閲指導 鳥居良昭、笹生 豊、小島 敦、森岡成太、別府諸兄。
18. 胸腰移行部椎体破裂骨折に対し、経皮的整復操作を用いた新しいシステムによる最小侵襲脊椎安定術(MIS t)の初期治療経験 (査読付)	共著	2014年6月	関東整災誌、45(5) : 335-341	胸腰移行部椎体破裂骨折に対し、経皮的征服操作をTRIOトラウマスパインシステムを使用した最小侵襲脊椎安定術を施行し良好な成績を示した臨床経験を紹介した。 (担当部分)データ解析、校閲 小島敦、笹生豊、鳥居良昭、別府諸兄

19. 骨粗鬆症性椎体骨折に対する最小侵襲脊椎安定術 (MIS t) (査読付)	共著	2015年8月	J. Spine Res ; 6 : 1256-1261	高齢者骨粗鬆症性椎体骨折に対し長期臥床を避ける為に、一般的に椎体形成術 (BKP) 適応外例に積極的にMIS tを施行。制動範囲3椎体：S群と4椎体以上：L群の2群の臨床成績を比較した。術後S群に後彎進行を有意に認めた。 (担当部分) 校閲 小島敦、笹生豊、鳥居良昭、森岡成太、梅原亮、石森光一、黒屋進吾、新井賢一郎、仁木久照
20. Sagittal Alignment of Spine and Spinal Cord for Upper Cervical Irreducible Atlantoaxial Kyphosis in Elderly Patients (査読付) 高齢者上位頸椎非整復性後彎症の術前後脊椎・脊髄矢状面アライメント	共著	2016年7月	Journal of clinical spine 29(6) E303-E308	当科で著者の手術した関節リウマチと歯突起骨を病因とする高齢非整復性上位頸椎後彎症に対し頸椎後頭・頸胸椎除圧固定例29例の術前後で臨床並びに矢状面の脊椎並びに脊髄の画像評価を調査した。結果、臨床症状は疼痛・麻痺ともRanawat分類で著明に改善した。術前に非整復性頸椎病変は、術後の矢状面脊椎アライメントは不変であったが、脊髄アライメントはC1高位でCSFの幅と脊髄前後径ともに有意に改善を認めた。 (担当部分) 企画発案、データ解析、著者 Sasao Y, Kojima A, Torii Y, Morioka S, Fujii A, Beppu M, Aoki H
21. 高齢者の急性腰痛に対するMRIの有用性椎体骨折診断における単純X線像との比較 (査読付)	共著	2017年4月	臨床整形外科 2017;52(4) : 379-385.	70歳以上の高齢者で、急性腰背部痛を主訴として整形外科外来受診した患者に単純レントゲン写真とMRIを撮影し、椎体骨折の有無を評価した。単純写真で85.7%形態骨折を認め、MRIで82%に新鮮骨折を認めた。新鮮骨折例は、VAS79.8mmと高値でもある。 (担当部分) 校閲 小島敦、笹生豊、鳥居良昭、森岡成太、藤井厚司、新井賢一郎
22. Quantification of L5 radiculopathy due to foraminal stenosis using three-dimensional magnetic resonance myelography (査読付) 椎間孔狭窄による第5腰神経根の三次元MRI画像	共著	2017年7月	Spine Surg and Relat Res;1(3):146-151	270例の第5腰神経根由来の症状を呈した脊椎障害例にたいしてMRIを行い、そのMRImelographyから6.5mm以上の腫脹、DRGの左右さが1.2倍が椎間孔病変診断のポイントであった。 (担当部分) 企画立案、校閲指導 Kojima A, Torii Y, Morioka S, Sasao Y.
(その他) (症例報告)				
1. 後頭頸椎亜脱臼の1症例	共著	2007年5月	日本脊髄障害医学会雑誌 ; 20 (1) : 114-115.	交通事故後、MRI/CT検査にて、後頭骨とC1の脱臼と診断。神経学的には、上肢しびれ・筋力低下であった。手術加療により良好な経過を呈した1例の報告。 (担当部分) データ整理、校閲指導 朝熊 弘年、笹生 豊、磯見 卓、富永 泰弘、別府 諸兄
2. 非外傷性脊髄損傷を生じた頸椎椎間板ヘルニアの1例.	共著	2007年5月	日本脊髄障害医学会雑誌 ; 20 (1) : 64-65.	頸椎椎間板ヘルニアを原因とする進行性の四肢麻痺例の手術例の問題点を文献的考察をした1例の報告。 (担当部分) 校閲指導 鈴木 健宙、三浦 竹彦、吉田 典之、笹 益雄、笹生 豊、別府 諸兄
3. 首下がりを呈した頸髄症の一例	共著	2008年5月	日本脊髄障害医学会雑誌 ; 21 (1) : 146-147	頸椎首下がり病の手術症例は、稀で多数回手術となり易い。我々が経験した1例は、初回手術後にC2椎弓根螺子が脱転し、後頭骨に固定延長した。(担当部分) 校閲指導 三浦竹彦、笹益雄、小島 敦、鈴木健宙、笹生 豊、別府諸兄

4. 転倒により上位頸髄損傷をきたした強直性脊椎炎	共著	2008年5月	日本脊髄障害医学会雑誌;21(1):174-175	転倒によりC2/3に可動性のある強直性脊椎炎の上位脊髄損傷例に対し、気管切開後人工呼吸器管理で救命し、手術後麻痺が改善。杖歩行で通院加療まで回復した1例報告。 (担当部分) 校閲指導 朝熊弘年、 <u>笹生 豊</u> 、三浦竹彦、磯見 卓、富永泰弘、鈴木健宙、森岡成太、金子天哉、別府諸兄
5. 腰部脊柱管内に発生した毛細血管性血管腫の1例	共著	2009年5月	日本脊髄障害医学会雑誌;22(1):180-181	椎体内毛細血管性血管腫が脊柱管内に隆起し、馬尾症候群を呈した手術例を経験した。椎体との連続性、血流分布ならびに血管腫の特徴を捉える造影CTは有用である。 (担当部分) 校閲指導 秋山 唯、 <u>笹生 豊</u> 、三浦竹彦、正木大賀、朝熊弘年、鳥居良昭、小島 敦、森岡成太、別府諸兄
6. Os odontoidiumによる上位頸髄病変の治療経験	共著	2009年5月	日本脊髄障害医学会雑誌;21(1):48-49	高齢者のos odontoidiumによる上位頸髄障害は稀である。通常非整復性であり、手術の効果も乏しい。急速に進行した手術例の経験を報告した。 (担当部分)校閲指導 小島 敦、 <u>笹生 豊</u> 、三浦竹彦、鳥居良昭、森岡成太、藤井厚司、秋山 唯、別府諸兄
7. 頸椎後縦靭帯骨化症と鑑別を要した低カリウム性周期性四肢麻痺の一例	共著	2011年5月	日本脊髄障害医学会雑誌;25(1):116-117	四肢麻痺を呈した頸椎後縦靭帯骨化症例の低カリウム性周期性四肢麻痺と診断した1例を経験した。 (担当部分) 校閲指導 齊藤亜沙子、 <u>笹生 豊</u> 、鳥居良昭、小島敦、森岡成太、梅原亮
8. 歯突起骨折後の変形治癒による遅発性脊髄症状を呈した1例	共著	2014年3月	神奈川整形災害外科医学会雑誌;26(4):67-69	歯突起骨折後の変形治癒による遅発性麻痺例の手術を経験した。術中徐脈を認めたが、C1椎弓切除のみで良好な経過であった。 (担当部分) 校閲指導 安原和之、 <u>笹生 豊</u> 、鳥居良昭、小島 敦、森岡成太、金子天哉、藤井厚司、上野純、梅原 亮、別府諸兄
9. 外傷性第5腰椎脱臼の2例	共著	2015年12月	関東整形災害外科学会雑誌;46(6):325-330	交通事故後と作業中の落石事故の2例の外傷性第5腰椎脱臼を経験し、いずれも全身麻酔下で観血整復後にPLIFを行い治療した。 (担当部分) 校閲指導 石森光一、 <u>笹生 豊</u> 、鳥居良昭、森岡成太、藤井厚司、安原和之、仁木久照
その他)				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 高橋 茜
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学 境界医学		放射線治療技術学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1) 尿路上皮癌におけるFDG-PET/CT所見(査読付)	共著	平成24年12月	臨床放射線(0009-9252)57巻12号 Page1697-1702(2012.06)	18F-FDG-PET/CTは尿の集積の影響で尿路上皮癌にあまり有用とされていないが、2010年の診療報酬改定により尿路上皮癌も保険が適用されるようになった。当院における尿路上皮癌のFDG-PET所見を検討した。尿路上皮癌のうち腫瘤を形成するものはFDGの集積が認められCTとの融合情報と併せれば腫瘍の道程は可能であった。 (役割) データの測定・解析等を行った。戸矢和仁、鈴木和代、喜多和代、金子英樹、橋川奈生、高橋茜、萬篤憲、磯部義憲、西山徹、斉藤史郎
2) 膀胱癌における利尿剤および経口水投与後のFDG-PET/CT遅延相の評価(査読付)	共著	平成 25年11月	臨床放射線(0009-9252)58巻12号 Page1761-1767	膀胱癌では一般的に18F-FDG-PET検査はFDGが尿に排泄されるため、原発巣の評価にあまり有用とされていない。しかし近年尿路上皮癌には原発巣、再発、遠隔転移にたいしてFDGが強く集積するとの報告がでてきている。特に膀胱癌に関しては膀胱内尿中のFDGが洗いだされれば検出率が高まると考えられ、今回我々は膀胱癌に対するFDG-PET/CT検査として利尿剤および経口水投与後の遅延相撮影を試み、原発巣が良好に描出される症例を経験しその有用性を認識した。 (役割) データの測定・解析等を行った。戸矢和仁、鈴木和代、喜多和代、吉田佳代、金子英樹、小池直義、橋本一樹、橋川奈生、高橋茜、佐伯拓馬、矢木康人、香野友帆、斉藤史郎
3) 前立腺癌I-125シード治療におけるLink SeedとLoose Seedの比較(査読付)	共著	平成26年9月	臨床放射線(0009-9252)59巻9号 Page1203-1211	前立腺癌I-125シード治療におけるLinkedシードとLooseシードを比較検討した。限局性前立腺癌患者118例を対象とし、線量解析で前立腺のD90は術中、術後ともに2群に有意差はなかった。前立腺のV100は術中ではLI群のほうが高かったが術後では有意差がなかった。前立腺のV150は術中、術後ともにLI群のほうが高かった。術中の尿道V150、直腸V100は2群すべて0であった。尿道のD30、直腸のD2ml、D0.1mlは術中でLIのほうが高かったが、術後は有意差がなかった。尿道と直腸のほかのパラメータは術中、術後ともに有意差がなかった。尿道と直腸のほかのパラメータは術中、術後ともに有意差がなかった。前立腺外における迷入は、LI群が優位にLO群より少なかったが、その数は0ではなかった。 (役割) データの測定・解析等を行った。戸矢和仁、萬篤憲、江里口貴久、田中智樹、黒岩信子、新谷幸子、高橋茜、矢木康人、西山徹、斉藤史郎

<p>(その他・学会発表等)</p> <p>PET/CT健診が発見の契機となったPSA正常の前立腺癌の1例</p>	<p>共著</p>	<p>平成23年9月</p>	<p>第11回世田谷医師会学会</p>	<p>前立腺癌はPET/CTで集積を示すことは少ないため、一般的に有用ではないと考えられている。前立腺がんの健診にはPSAが用いられている。しかし、今回PSAは正常であったが、PET健診が前立腺癌発見の契機になった症例を経験したため報告する。 (役割) 筆頭著者として発表を行った。 高橋茜・戸矢和仁・鈴木和代・喜多和代・吉田佳代・金子英樹・小池直義・橋本一樹・橋川奈生・萬篤憲・磯部義憲・独立行政法人国立病院機構東京医療センター泌尿器科矢木康人・斉藤史郎</p>
<p>3) 前立腺シード治療におけるRAPID Strandの使用経験</p>	<p>共著</p>	<p>平成26年12月</p>	<p>日本放射線腫瘍学会第27回学術大会</p>	<p>2014年2月よりLoose seedとハイブリッドでRAPID Strand Seedを用いた前立腺癌シード治療を開始した。前立腺癌のD90とV150の術後の値は術中とほぼ不変であった。V100は145Gy処方線量による場合を除き術後に低下した。尿道線量は単独群にて術後に上昇する傾向を呈したが、併用群では有意に上昇しなかった。直腸線量は主にD0.2ml以外で術後に上昇した。Loose seedとRAPID Strand Seedのハイブリッドによる治療で従来と遜色ないDVHを得たが術中の線量分布作成に熟練が必要と思われた。 (役割) データの測定・解析等を行った。 戸矢和仁、萬篤憲、黒岩信子、新谷幸子、高橋茜、西山徹、矢木康人、斉藤史郎、白石悠</p>

教 育 研 究 業 績 書				
氏名 多田 裕司				
研 究 分 野			研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
生物系 医歯薬学 内科系臨床医学			臨床呼吸器学、分子細胞呼吸器学	
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 樹状細胞と腫瘍細胞の相互作用におけるFas-Fasリガンドの役割.	共著	平成15年1月	臨床免疫 科学評論社 D73:ED73:E75	Fas-FasL系は細胞死に関するシグナルだが、がん細胞に発現したFasLは攻撃するT細胞にapoptosisきたし免疫寛容を誘導する。しかしFasLをがん細胞に強制発現させてマウスに移植すると強い拒絶反応が起こり、後に腫瘍特異的な獲得免疫が成立する事が報告された。そのメカニズムの1つとして、私たちは宿主の樹状細胞上のFasLががん抗原の獲得に関係する事を明らかにした。(この項目において筆頭著者)
2 TGF-βファミリーの異常と血管病変.	共著	平成17年7月	THE LUNG perspective メディカルビュー社	家族性肺動脈性肺高血圧症の原因遺伝子としてBMPR2が同定された。私たちコロラド大学の研究チームは、同定された何種類かの遺伝子変異を導入し、BMPR2発現を選択的に阻害できるトランスジェニックマウスを作成した。これらのマウスは無刺激でも肺高血圧の表現型を示したが、低酸素やsheer stressに対する刺激にも過剰反応し優れた肺高血圧症の動物モデルであることが証明された。(このコラムにおいて筆頭著者)
3 限局型小細胞肺癌 CDDP+ETP+RT療法.	共著	平成21年6月	エビデンスに基づいた癌 化学療法ハンドブック. メディカルビュー社	限局型小細胞肺癌は、化学療法(CDDP+VP16)と早期からの加速化分割の放射線の併用療法で根治できる症例がある。対象の症例の選択や副作用の対処などを記述した。(この項目において筆頭著者)
4 薬剤誘発性肺高血圧症.	共著	平成21年12月	別刷日本臨床. 呼吸器症候群(第2版) II	薬剤性肺毒性は多岐にわたるが、その中で肺高血圧症、肺静脈閉塞症をきたす薬剤(抗うつ薬、食欲抑制薬ほか)と臨床所見、対処法等について概説した。(この項目において筆頭著者)
5 肺性肥大型骨関節症.	共著	平成21年12月	別刷日本臨床. 呼吸器症候群(第2版) III	肺癌や中皮腫で見られる肺性肥大型骨関節症の画像診断と有症状時の治療、予後への影響などを解説した。(この項目において筆頭著者)
6 悪性胸膜中皮腫の遺伝子治療の展望.	共著	平成22年10月	分子細胞治療フロンティア 外科分子細胞治療研究会 編	悪性胸膜中皮腫の遺伝子治療のうち米国で施行された臨床試験につき試験の効果、浮き彫りにされた問題点、臨床試験の先行きなどを概説した。(この項目において筆頭著者)
7 肺性肥大型骨関節症 (Marie-Bamberger症候群).	共著	平成23年5月	症候群ハンドブック 中山書店	肺癌や中皮腫で見られる肺性肥大型骨関節症の画像診断と有症状時の治療、予後への影響などを情報を追加して解説した。(この項目において筆頭著者)
8 限局型小細胞肺癌保険 医療で可能なレジメン: CDDP+ETP+RT療法	共著	平成24年6月	エビデンスに基づいた癌 化学療法ハンドブック メディカルビュー社	限局型小細胞肺癌は、化学療法(CDDP+VP16)と早期からの加速化分割の放射線の併用療法で根治できる症例がある。対象の症例の選択や副作用の対処などを前号の情報を更新して記述した。(この項目において筆頭著者)

9 高齢者の慢性閉塞性肺疾患 (COPD).	共著	平成26年2月	スーパー総合医. 中山書店	高齢者の呼吸器疾患の代表として、いわゆる「たばこ病」の慢性閉塞性肺疾患 (COPD) を概説した。たばこ煙によって生じるCOPDの病態 (喘息との違い)、肺機能検査や画像検査による診断、肺癌・骨粗鬆症・うつ病などの合併症、現在使用できる気管支拡張薬と副作用対策などについて、実地医家にも理解しやすいようにまとめた。(この項目において筆頭著者)
10 疾患の病因と病態：気腫肺形成におけるCD40の関与.	共著	平成26年12月	Annual Review 呼吸器. 中外医学社	CD40はT細胞やB細胞の活性化に関与する副シグナルだが、COPDの病態との関連は明らかにされていない。私たちの研究では、肺胞上皮細胞、肺血管内皮細胞をCD40で活性化するとFas感受性が上昇しapoptosisが誘導されるとともにIFN- γ 、CCR5など炎症性サイトカイン、ケモカインの産生が亢進した。以上よりCD40は炎症惹起と肺胞構成細胞の細胞死という2つの機序により肺の気腫化に関与することが示された。(自ら指導した大学院生と共同で執筆した)
11 胸膜腫瘍	共著	平成27年1月	今日の治療指針. 医学書院	胸膜に発生する腫瘍の中で特に悪性胸膜中皮腫に対する治療 (化学療法、手術、放射線治療、その他臨床試験) を投与方法まで含めて具体的に記述した。(この項目において筆頭著者)
12 シアル糖鎖抗原 (KL-6) 日常診療のための検査値のみかた<アンジオテンシン変換酵素>	共著	平成27年4月	日常診療のための検査値のみかた. 中外医学社	間質性肺炎で上昇する血清マーカーKL-6につき、発見の経緯、上昇する疾患と鑑別、治療による増減とその意義を解説した。同様に、サルコイドーシスで上昇するアンジオテンシン変換酵素 (ACE) と鑑別疾患、検査の適応、データの意義につき開設した。(この項目において筆頭著者)
13 悪性胸膜中皮腫に対する分子標的治療の現状.	共著	平成27年10月	分子細胞治療フロンティア	悪性胸膜中皮腫に対して、化学療法や分子標的治療薬を含めて過去に行われた臨床試験をリストにまとめた。さらに現在われわれが施行している遺伝子治療 (NK4アデノウィルスベクター) を含め本邦で施行されている遺伝子治療の現状を概説した。(この項目において筆頭著者)
14 COPD治療における吸入ステロイド薬の位置づけ.	共著	平成28年3月	Q&AでよくわかるCOPD (概念・診断・治療・管理) 多田裕司 巽浩一郎 (監修) メディカルビュー社	喘息と異なり、安定期のCOPDでは吸入ステロイドの単剤は勧められない。しかし長時間作用型 β_2 刺激剤 (LABA) と吸入ステロイドの併用 (合剤の使用を含む) はLABA単剤と比べ、特に重症例において急性増悪の回数を減らし予後改善に結びつくことが臨床試験で証明された。(この項目の筆頭著者。千葉大学教授巽浩一郎と多田裕司はこの書籍の監修を担当した)
15 COPD治療における長時間作用型 β_2 刺激薬の位置づけ.	共著	平成28年3月	Q&AでよくわかるCOPD (概念・診断・治療・管理) 多田裕司 巽浩一郎 (監修) メディカルビュー社	COPDに対する吸入気管支拡張剤には長時間作用型 β_2 刺激剤 (LABA) と長時間作用型抗コリン剤 (LAMA) の2種類がある。過去に行われた臨床試験では両者に優劣つけがたく、いずれも第一選択薬として使用できる。喘息COPD合併症候群 (ACO) に対しては、ステロイドとの併用でLABAを使用することが勧められる。(この項目の筆頭著者。千葉大学教授巽浩一郎と多田裕司はこの書籍の監修を担当した)
16 COPDの予後規定因子はどのような因子か.	共著	平成28年3月	Q&AでよくわかるCOPD (概念・診断・治療・管理) 多田裕司 巽浩一郎 (監修) メディカルビュー社	COPD患者の予後規定因子は気流制限の程度、酸素濃度、栄養状態、肺高血圧の合併、肺がんの合併など多岐にわたるが、これらの因子はおそらく交絡しており1つの強い因子というものはない。あえて挙げるならば多因子による総合評価のBODE indexが最も臨床では使用しやすい。(この項目の筆頭著者。千葉大学教授巽浩一郎と多田裕司はこの書籍の監修を担当した)

17 ALK融合遺伝子を有する非小細胞肺癌患者におけるセリチニブの活性および安全性 (ASCEND-1試験: 多施設共同非盲検第I相試験の最新結果)	共著	平成28年7月	Lung Cancer Cutting Edge	ALK阻害剤crizotinibの抵抗症例および頭蓋内病変を有する症例に対するceritinibの有効性を検討した臨床試験 (ASCEND-1) に対するコメントを記述した。(この項目において筆頭著者)
18 ALK肺癌	共著	平成28年10月	分子腫瘍マーカー診療ガイドライン (日本分子腫瘍マーカー研究会編) 金原出版	非小細胞肺癌細胞の遺伝子異常症例の中で、EGFRに次いで明らかになったALK陽性肺癌について、臨床所見、他の遺伝子異常との関係、生検標本を用いた診断法、現在使用できる分子標的薬剤、それらの効果と副作用、多施設で施行されている臨床試験の毛化、薬剤同士の比較、再発時の対処などを概説した。(この項目の筆頭著者)
19 わが国の悪性胸膜中皮腫に対する遺伝子治療の取り組み.	共著	平成29年4月	医学のあゆみ (廣島健三, 多田裕司 監修) 医歯薬出版	悪性胸膜中皮腫は肺癌と比較すると患者数は少なく、診断法、治療法の開発が遅れている。悪性胸膜中皮腫の現在の診断法と問題点、新しい診断法、外科治療の進歩、化学療法法の進歩の遅れ、分子標的薬の効果、免疫チェックポイント阻害剤への期待、遺伝子治療など新たな治療法の取り組みなどを網羅した。(このコラムの筆頭著者。また「医学のあゆみ」のこの号では多田と廣島健三医師 (東京女子医大教授) が共同編集した)
20 わが国の悪性胸膜中皮腫に対する遺伝子治療. ゲノム情報と遺伝子治療-遺伝子治療の最新の最新動向.	共著	平成29年5月	日本臨床	わが国の悪性悪性胸膜中皮腫は胸郭内進展が主体で遠隔転移しにくいいため、胸腔内遺伝子治療に適している。現在まで主に米国で施行された遺伝子治療の臨床試験の結果を紹介し、遺伝子導入効率や中和抗体による効果減弱など克服しなくてはならない問題を提起した。また千葉大学で行われているNK4発現ベクターを用いた試験をはじめ、本邦で行われているもしくは、これから施行されようとしている遺伝子治療を紹介した。(この項目の筆頭著者)
21 非小細胞肺癌の治療 (間質性肺炎合併肺癌に対するステートメント)	共著	平成29年10月	日本呼吸器学会腫瘍学術部会・びまん性肺疾患学術部会編 南江堂	間質性肺炎は癌の発生母地となりうるため、肺癌は間質性肺炎に高頻度に合併する。しかしながら、分子標的治療薬を含めて多くの抗がん剤の副作用には致死的な肺毒性があり、治療の適応にならないか、治療が難渋する事が多い。間質性肺炎合併肺癌に対するステートメント中で、多田は特に遺伝子異常を有さない非小細胞肺癌に対する殺細胞性抗がん剤のレジメを過去の臨床試験の結果を比較して検討した。(この項目の筆頭著者)
22 限局型小細胞肺癌保険医療で可能なレジメン: CDDP+ETP+RT療法.	共著	平成29年6月	エビデンスに基づいた癌化学療法ハンドブック メディカルビュー社	限局型小細胞肺癌は、化学療法 (CDDP+VP16) と早期からの加速化分割の放射線の併用療法で根治できる症例がある。対象の症例の選択や副作用の対処などを前号、前前号の情報を更新して記述した。(この項目において筆頭著者)
23 まれな呼吸器悪性腫瘍: 悪性線維性組織球腫.	共著	平成30年3月	呼吸器内科 (科学評論社)	最近の新しい肉腫の病理学的分類では「未分化多形肉腫」と定義しなおされた。四肢に発生する事が多く、稀な腫瘍であるが肺の肉腫の中では多い方で、複数の免疫染色などによる病理学的な確定診断が必須である。完全切除すれば比較的前後は良いが、不完全切除例では放射線治療、化学療法を併用しても予後不良である。手術や抗がん剤の種類による治療効果などをまとめて解説した。(この項目の筆頭著者)

24 可溶性メゾテリン関連ペプチド (SMRP)	共著	令和2年4月	臨床雑誌 内科	悪性胸膜中皮腫の腫瘍マーカーとして診断と効果判定におけるSMRPの役割をレビューした (この項目の筆頭著者)。
25 好酸球性肺炎に対するMepolizumabの効果	共著	令和2年7月	臨床免疫・アレルギー科 (科学評論社)	喘息治療に有効と考えられているMepolizumabが好酸球性肺炎にも有効であることを原著論文を参考にレビューした (この項目の筆頭著者)。
(学術論文) 1 Resistance to apoptosis induced by microenvironmental stresses is correlated with metastatic potential in Lewis lung carcinoma. (査読付) (Lewis肺癌の転移形成能は、微小環境ストレスによってもたらされるアポトーシス抵抗性と関連がある)	共著	平成11年7月	Clin Exp Metastasis 17(5):409-16.	Takasu M, Tada Y, Wang J0, Tagawa M, Takenaga K Lewis肺癌細胞株を血清飢餓状態、グルコース欠乏状態、低酸素などの刺激に暴露するとapoptosis抵抗性になった。Apoptosis抵抗性に変化した細胞では、Fas刺激に対する感受性低下や、apoptosis関連因子、転移関連遺伝子の発現変化が認められた。生体内で起こっているこれらの微小環境ストレスが、がん細胞の不死化に関与している可能性が示された。(基礎データの収集と解析を行った)
2 Expression of herpes simplex virus-thymidine kinase gene controlled by a promoter region of the midkine gene confers selective cytotoxicity to ganciclovir in human carcinoma cells. (査読付) (ミッドカインプロモーター領域下にHSV-TKを発現させると、ガンシクロビル投与で選択的ながん細胞死を誘導できる)	共著	平成14年3月	Int J Cancer 91(5):723-7.	Miyauchi M, Yoshida Y, Tada Y, Narita M, Maeda T, Bahar R, Kadomatsu K, Muramatsu T, Matsubara S, Nakagawara A, Sakiyama S, Tagawa M. ミッドカインは発生や細胞の分化に関わるタンパクだが、腫瘍細胞にも好発現する。ミッドカインpromoter下に、自殺遺伝子であるHSV-Tk発現領域を組み込んだベクターをがん細胞にtransfectionしガンシクロビルで処理した。ミッドカイン発現細胞では腫瘍特異的に細胞死が誘導されたが、ミッドカイン発現陰性腫瘍では効果が認められなかった。この現象はin vivoの実験でも再現された。(基礎データの収集と解析を行った)
3 DNA polymerase kappa, implicated in spontaneous and DNA damage-induced mutagenesis, is overexpressed in lung cancer. (査読付) (自然発生的、またはDNA障害時の遺伝子変異に関するDNAポリメラーゼ κ は肺癌で過剰発現している)	共著	平成14年7月	Cancer Res 61(14):5366-9.	O-Wang J, Kawamura K, Tada Y, Ohmori H, Kimura H, Sakiyama S, Tagawa M. DNA二重鎖の損傷修復酵素の欠損、機能不全は発がんに関与することが知られている。DNAポリメラーゼ κ (Pol κ -b)は、ヒト非小細胞肺癌の患者検体で高率に発現していることを、Northern blot, Western blotとRT-PCRの3通りで初めて証明した。Pol κ -bの発現は、遺伝子変異を蓄積することによりがんの発生、進展に密接に関与する可能性が示唆された。(基礎データの収集と解析を行った)
4 Clast5/Stra13 is a negative regulator of B lymphocyte activation. (査読付) Clast5/Stra13はB細胞活性の負の制御因子である)	共著	平成14年3月	Biochem Biophys Res Commun 292(1):121-7.	Seimiya M, Bahar R, Wang Y, Kawamura K, Tada Y, Okada S, Hatano M, Tokuhisa T, Saisho H, Watanabe T, Tagawa M, O-Wang J. B-cellは副刺激であるCD40刺激で活性化するが、その過程で抑制が起こる蛋白Clast5/Stra13を同定した。B-cellにClast5/Stra13を強制発現させると細胞増殖シグナルやFas依存性apoptosisも抑制されることがわかった。(基礎データの収集と解析を行った)

<p>5 T cell dependent and independent antitumor immunity generated by the expression of Fas ligand on mouse lung carcinoma cells. (査読付) (FasLを過剰発現させたマウス肺癌細胞はT細胞依存性・非依存性の抗腫瘍活性を誘導する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成14年3月</p>	<p>Int J Mol Med 9(3):281-5.</p>	<p>Tada Y, O-Wang J, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Tagawa M. 膜型FasLを強制発現させた腫瘍細胞をマウスに移植すると、好中球による炎症で腫瘍が拒絶されると発表され、その後も特異的な抗腫瘍効果を誘導するとされていたが、T細胞を欠如するヌードマウスや、好中球の機能不全のCD18欠損でも腫瘍は拒絶された。しかしFasを欠如するlpr/lprマウスでは腫瘍の拒絶がみられなかった。したがって局所での拒絶は腫瘍上のFasLと宿主のFas受容体の直接関係が関与している可能性がある。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>6 Antitumor effects are produced by forced expression of membrane-bound but not soluble Fas ligand in murine lung carcinoma cells. (査読付) (膜型FasLの過剰発現細胞は抗腫瘍効果を誘導するが、可溶性FasL発現細胞では誘導されない)</p>	<p>共著</p>	<p>平成14年3月</p>	<p>Anticancer Res 22(2A):831-6.</p>	<p>Tada Y, O-Wang J, Seimiya M, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Tagawa M. Lewis肺がん細胞にFasLを強制発現させた細胞株(クローン)を作成しマウスに皮下移植したところ、膜型FasL発現細胞では腫瘍は拒絶されるが、溶解型FasL発現細胞では腫瘍の拒絶が起こらなかった。この結果は膜上FasLは宿主のFasと結合してapoptosisや炎症反応を惹起するが、可溶性FasLはドミナントネガティブに作用してしまい、抗腫瘍活性の獲得に結びつかないことを示唆するものであった。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>7 Expression of the TNF-alpha gene on mouse lung carcinoma cells suppresses spontaneous lung metastasis without affecting tumorigenicity. (査読付) (腫瘍壊死因子αを発現させたマウス肺癌細胞は腫瘍形成能と関係なく肺転移を抑制する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成14年6月</p>	<p>Oncol Rep 9(3):585-8.</p>	<p>Tada Y, O-Wang J, Takenaga K, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Tagawa M. 腫瘍細胞に腫瘍壊死因子(TNF-α)を発現させたLewis肺癌のクローンを作成し、マウスに皮下移植(肺転移モデル)、尾静脈からの注入を行ったところ、腫瘍の種類に関わらず、自然発生的な肺転移を抑制する事ができた。腫瘍拒絶の機序としては、TNFαによる局所の炎症反応と、それに引き続く獲得免疫の成立が関与すると考えられた。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>8 Cutting edge: a novel role for Fas ligand in facilitating antigen acquisition by dendritic cells. (査読付) (Fasリガンドの樹状細胞の抗原獲得における役割)</p>	<p>共著</p>	<p>平成14年9月</p>	<p>J Immunol 169(5):2241-5.</p>	<p>Tada Y, O-Wang J, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Okada S, Tokuhisa T, Sakiyama S, Tagawa M. 腫瘍上のFasLは宿主の免疫細胞にapoptosisを誘導して、抗腫瘍免疫から逃れている機序が報告されたが、一方でFasL発現腫瘍を移植すると免疫トレランスどころか、激しい局所炎症を起こす。その後にチャレンジした腫瘍細胞も特異的に排除し、獲得免疫が成立する。本研究では、宿主の樹状細胞上のFasと直接関係して腫瘍抗原の受け渡しと認識を行い、腫瘍特異的な獲得免疫を成立させていることを明らかにした。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>9 Fas ligand-expressing tumors induce tumor-specific protective immunity in the inoculated hosts but vaccination with the apoptotic tumors suppresses antitumor immunity. (査読付) (Fasリガンド発現腫瘍はがん特異的な獲得免疫を誘導するが、アポトーシス誘導細胞は腫瘍免疫を抑制する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成15年2月</p>	<p>Cancer Gene Ther 10(2):134-40.</p>	<p>Tada Y, O-Wang J, Wada A, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Sakiyama S, Tagawa M. FasLを強制発現させた腫瘍細胞は、宿主に特異的な抗腫瘍免疫を誘発する。しかしこれらを凍結融解法や紫外線照射でapoptosisを誘導し、宿主をワクチンすると、引き続きchallengeした腫瘍を拒絶できず抗腫瘍免疫効果が減弱する。獲得免疫の成立にはがん細胞上のFasLと宿主のFasが直接interactionする必要がある。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>

<p>10 T-cell-dependent antitumor effects produced by CD40 ligand expressed on mouse lung carcinoma cells are linked with the maturation of dendritic cells and secretion of a variety of cytokines. (査読付) CD40過剰発現細胞は宿主の樹状細胞の成熟によりT細胞依存性の抗腫瘍活性を誘導する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成15年6月</p>	<p>Cancer Gene Ther 10 (6):451-6.</p>	<p>Tada Y, O-Wang J, Yu L, Shimozato O, Wang YQ, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Takenaga K, Sakiyama S, Tagawa M. T細胞、B細胞の活性化に必要な副シグナルであるCD40Lを強制発現させたLewis肺がん細胞をマウスに移植したところ、腫瘍上のCD40Lが宿主の樹状細胞上のCD40を活性化し、T細胞依存性の腫瘍特異的な獲得免疫を成立させることができた。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>11 Pulmonary hypertension in transgenic mice expressing a dominant-negative BMPRII gene in smooth muscle. (査読付) (平滑筋特異的にドミナントネガティブに作用するBMPRII遺伝子を発現マウスの肺高血圧症)</p>	<p>共著</p>	<p>平成16年4月</p>	<p>Circ Res 94(8):1109-14.</p>	<p>West J, Fagan K, Steudel W, Fouty B, Lane K, Harral J, Hoedt-Miller M, Tada Y, Ozimek J, Tudor R, Rodman DM. doxycycline投与下で、dominant negativeに作用する変異型BMPRIIを血管平滑筋細胞特異的に発現するtransgenic mouse (Dn-BMPRII)を作成し、表現型を解析した。doxycyclineを投与すると、血管壁肥厚(内膜と中膜の肥厚)、内腔狭小化、心カテーテルで右心圧上昇など、ヒトの肺動脈性肺高血圧に類似し、優れた動物モデルであることが証明された。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>12 Adenoviral gene transfer to the neonatal rat pulmonary circulation (査読付) (アデノウイルスベクターをもちいた新生児ラットの肺循環への遺伝子導入法)</p>	<p>共著</p>	<p>平成16年7月</p>	<p>J Gene Med 6(7):734-9.</p>	<p>West J, Buchholz M, Fiero A, Tada Y, Fagan K, Rodman D. 制限増殖性アデノウイルスベクターを、肺循環を介して幼少ラットの肺動脈に注入し遺伝子導入を試みた。アデノウイルスベクターの指向性により、時間が経過すると最終的には肝臓に集積する傾向があるが、病理組織の検討では、主幹部動脈から細動脈に至るまで、確実にレポーター遺伝子の発現が認められた。今後この手技は臨床応用できる可能性が示唆された。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>13 Expression of CD40 ligand in CD40-positive murine tumors activates transcription of the interleukin-23 subunit genes and produces antitumor responses. (査読付) (CD40L発現型げっ歯類がん細胞はIL-23のサブユニット発現を促し抗腫瘍活性を誘導する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成16年10月</p>	<p>Anticancer Res 24(5A):2713-6.</p>	<p>Wada A, Tada Y, Shimozato O, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Tagawa M. 免疫の副シグナルであるCD40を発現するA11と発現していないP29の2種類のLewis肺がん細胞株に、CD40Lを強制発現させ、宿主に移植するとA11群ではIL-23のサブユニットであるp40とp19の遺伝子発現が有意に上昇しており、腫瘍の発育が抑制されていた。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>14 Vaccination of apoptotic Fas ligand-expressing tumors decreased antitumor responses by enhanced production of immunosuppressive cytokines. (査読付) (アポトーシスを誘導したFasL発現細胞は、炎症抑制性サイトカインの産生を誘導し抗腫瘍活性を減弱させる)</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年2月</p>	<p>Anticancer Res 25(1A):299-303.</p>	<p>Wada A, Tada Y, Shimozato O, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Tagawa M. (equally contributed) 膜型 FasLを強発現させた癌細胞を移植すると、局所の炎症で拒絶される事が報告されている。私たちは紫外線照射でapoptosisを誘導したFasL発現細胞をマウスに移植し、後に誘導される獲得免疫の有無を調べた。ワクチン後に同種WTのがん細胞を接種すると発育はむしろ増強した。その機序は腫瘍細胞と接触した樹状細胞の機能不全(トランス)ではなく局所で産生される免疫抑制性サイトカインの影響が考えられた。(基礎データの収集と解析を行った)</p>

<p>15 Low-voltage-activated (T-type) calcium channels control proliferation of human pulmonary artery myocytes. (査読付) (低電位型カルシウムチャンネルはヒト肺動脈お筋細胞の増殖を制御する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年4月</p>	<p>Circ Res 96(8):864-72.</p>	<p>Rodman DM, Reese K, Harral J, Fouty B, Wu S, West J, Hoedt-Miller M, <u>Tada Y</u>, Li KX, Cool C, Fagan K, Cribbs L. 低電位活性型Caチャンネルは、ヒトの肺動脈の平滑筋細胞の細胞周期へのエントリー過程に必須である。RT-PCR、細胞染色、免疫染色で評価したところ、中でもCa(v)3.1の発現が平滑筋細胞の細胞周期に関連していた。Ca3.1sRNAで選択的に阻害すると肺動脈血管平滑筋細胞の細胞周期へのリエントリーが遅延し細胞増殖に影響が出た。以上よりCa(v)3.1は肺動脈性肺高血圧症の治療ターゲットとなる可能性がある。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>16 Suppression of type II bone morphogenic protein receptor in vascular smooth muscle induces pulmonary arterial hypertension in transgenic mice. (査読付) (II型骨形成蛋白受容体シグナルの抑制はマウスで肺高血圧を示す)</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年12月</p>	<p>Chest 128:553S.</p>	<p>West J, <u>Tada Y</u>, Fagan KA, Steudel W, Fouty BW, Harral JW, Miller M, Ozimek J, Tuder RM, Rodman DM. ドキシサイクリン投与下に、ドミナントネガティブに作用する変異型BMP2遺伝子を発現するトランスジェニックマウスを何種類か作成した。血管平滑筋特異的、血管内皮細胞特異的なプロモーター下で発現させるが、変異型BMP2遺伝子も家族性肺動脈性肺高血圧の家系で報告されたものをいくつか作成した。これらのトランスジェニックマウスを用いて肺動脈壁の肥厚と右室圧の上昇など、肺高血圧の表現型の差を解析している。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>17 Interleukin-6 causes mild pulmonary hypertension and augments hypoxia-induced pulmonary hypertension in mice. (査読付) (インターロイキン6はマウスで軽度の肺高血圧を誘導し、低酸素による肺高血圧を増強する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年12月</p>	<p>Chest 128 572S-573S.</p>	<p>Golembeski SM, West J, <u>Tada Y</u>, Fagan KA. HIV感染は肺高血圧症の原因の1つと考えられているが、AIDS症例では血清中のIL-6濃度が上昇している。また肺高血圧の発症には血管内膜の炎症が関与することも報告されている。そこで私たちは外因性のIL-6が肺高血圧の増悪因子となっているかどうかを調べた。マウスに微注ポンプを用い経皮的にリコンビナント IL-6を持続投与したところ、低酸素性肺高血圧が対照群と比較して有意に悪化した。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>18 Molecular effects of loss of BMP2 signaling in smooth muscle in a transgenic mouse model of PAH. (査読付) (マウス肺高血圧モデルにおけるBMP2シグナル阻害の分子的影響の検討)</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年6月</p>	<p>Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol 292(6):L1556-63.</p>	<p><u>Tada Y</u>, Majka S, Carr M, Harral J, Crona D, Kuriyama T, West J. Dominant negative に作用する変異型BMP2を発現するトランスジェニックマウスを用い、肺高血圧を発症させた後に肺組織からDNAを回収しマイクロアレイで解析した。BMP2シグナルを阻害すると細胞増殖マーカー、筋原性マーカー、細胞骨格マーカー、炎症性マーカーなどが上昇した。BMPシグナル阻害は単に平滑筋細胞の増殖に留まらず、複数の機序により肺高血圧の発症に関わっていることが示唆された。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>19 Decreased lipoprotein lipase in obstructive sleep apnea syndrome. (査読付) (閉塞性無呼吸症候群患者におけるリポ蛋白リパーゼ値の低下)</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年8月</p>	<p>Circ J 71(8):1293-8.</p>	<p>Iesato K, Tatsumi K, Saibara T, Nakamura A, Terada J, <u>Tada Y</u>, Sakao S, Tanabe N, Takiguchi Y, Kuriyama T. リポ蛋白リパーゼ (LPL) はトリグリセリドの代謝酵素だが、閉塞性睡眠時無呼吸症候群 (OSAS) との関係は知られていない。155人のOSAS患者の血清中LPL濃度を測定したところ、対照群と比較して有意に低く、OSASの重症度と関連していた。未治療のOSAS患者にCPAP療法を導入し3か月後にLPLを再測定すると有意に上昇した。OSASの病態と脂質代謝異常には密接な関係があることが示唆された。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>

<p>20 Altered gene expression by cisplatin in a human squamous cell lung carcinoma cell line. (査読付) (ヒト肺扁平上皮癌におけるシスプラチン投与による遺伝子発現の変化)</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年10月</p>	<p>Anticancer Res 27(5A):3235-43.</p>	<p>Yatomi M, Takiguchi Y, Asaka-Amano Y, Arai M, <u>Tada Y</u>, Kurosu K, Sakao S, Kasahara Y, Tanabe N, Tatsumi K, Seki N, Kuriyama T. ヒト扁平上皮がん細胞株を低濃度のcisplatinに暴露し、上昇する遺伝子、低下する遺伝子をDNAマイクロアレイで解析した。Cisplatin曝露は直接的な殺細胞作用だけではなく、抗がん剤の感受性、抵抗性、apoptosis関連因子、他の抗がん剤との相乗作用に関連する遺伝子の発現の変化を促した。この結果はcisplatinを用いた併用療法の機序を考えるのに有用である。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>21 VEGF-R blockade causes endothelial cell apoptosis, expansion of surviving CD34+ precursor cells and transdifferentiation to smooth muscle-like and neuronal-like cells. (査読付) (VEGF受容体の阻害は内皮細胞のアポトーシス、生存したCD34陽性前駆細胞の増加と、筋原性、神経原性様細胞への分化転換を誘導する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年11月</p>	<p>FASEB J 21(13):3640-52.</p>	<p>Sakao S, Taraseviciene-Stewart L, Cool CD, <u>Tada Y</u>, Kasahara Y, Kurosu K, Tanabe N, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Voelkel NF. 肺高血圧症の発症のメカニズムの1つに血管内皮細胞の無秩序な増殖がある。VEGF受容体阻害剤のSugen5416をラットに投与すると内皮細胞のapoptosisが誘導されるが、その中で生き残ったCD34陽性の血管前区細胞が内皮間葉転換を起こして平滑筋様細胞に形質転換し、増殖して血管内腔を閉塞する事が分かった。肺動脈性肺高血圧症の発症メカニズムの一因と考えられる所見であった。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>22 Phase II study of weekly irinotecan and cisplatin for refractory or recurrent non-small cell lung cancer. (査読付) (治療抵抗性または再発型の非小細胞肺癌に対するweeklyイリノテカン+シスプラチンの第2相臨床試験)</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年11月</p>	<p>Lung Cancer 58(2):253-9.</p>	<p>Takiguchi Y, Moriya T, Asaka-Amano Y, Kawashima T, Kurosu K, <u>Tada Y</u>, Nagao K, Kuriyama T. 非小細胞肺癌の再発例に対する2次治療としてweekly シスプラチン+塩酸イリノテカン併用療法の有効性を検討した。再発例48人に上記レジメンをweeklyで投与したところ、奏効率26%、無増悪生存期間3か月、生存期間中央値11か月と他のレジメンに劣らなかつた。有害事象はいずれも制御可能なレベルであり、このレジメンは2次治療レジメンとして有望であると考えられた。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>23 Daytime hypercapnia in obstructive sleep apnea syndrome. (査読付) (閉塞性睡眠時無呼吸症候群における、日中の高炭酸ガス血症の検討)</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年12月</p>	<p>Chest 132(6):1832-8.</p>	<p>Kawata N, Tatsumi K, Terada J, <u>Tada Y</u>, Tanabe N, Takiguchi Y, Kuriyama T. 閉塞性睡眠時無呼吸症候群(OSAS)の患者の中で、日中の高二氧化碳ガス血症を有する患者の割合を調べた。睡眠外来受診中の1227人を対象に、血中二氧化碳濃度測定したところ、14%の患者で有意な上昇がみられ、OSASの重症度との相関も認められた。これらの患者ではBMIや無呼吸低呼吸指数(AHI)が高い症例が多かつた。未治療の患者に3か月間CPAPを導入したところ、高二氧化碳血症に改善が認められた。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>24 Pulmonary and systemic toxicity of bleomycin on severe combined immune deficiency mice. (査読付) (ブレオマイシン投与が混合型免疫不全マウスに与える全身毒性と肺毒性に関する研究)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年1月</p>	<p>Exp Lung Res 34(1):1-17.</p>	<p>Miyazawa H, Takiguchi Y, Hiroshima K, Kurosu K, <u>Tada Y</u>, Kasahara Y, Sakao S, Tanabe N, Tatsumi K, Kuriyama T. SCIDマウスにブレオマイシンを経気道的に曝露させてARDS状態を再現した動物モデルを作成した。ブレオマイシン吸入による、SCIDマウスの肺へのリンパ球やマクロファージの浸潤は、野生型マウスと比較して短期間で比較的軽度であったが、apoptosisや肺障害は重篤でSCIDマウスは早期に死亡した。ブレオマイシンの肺毒性は炎症を介するのではなく、直接的な薬剤による細胞毒性が原因と考えられた。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>

<p>25 Inhalation of <i>Stachybotrys chartarum</i> causes pulmonary arterial hypertension in mice. (査読付) (<i>Stachybotrys chartarum</i> の吸入によって生じる肺高血圧)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年1月</p>	<p>Int J Exp Pathol 89(3).</p>	<p>Ochiai E, Kamei K, Watanabe A, Nagayoshi M, <u>Tada Y</u>, Nagaoka T, Sato K, Sato A, Shibuya K. 環境中に存在する真菌の1種である <i>Stachybotrys chartarum</i> をマウスに18回、反復気道曝露させたところ、好酸球を主体とする気道/血管周囲の炎症が惹起された。採取した肺組織の病理増から肺動脈壁肥厚が認められた。これらのマウスに心臓カテーテルを行ったところ、投与群で右心室圧20mmHg(対照群12mmHg)と高値で肺高血圧の発症が確認された。原因不明の肺高血圧の一因である可能性がある。 (基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>26 Identification of annexin 1 as a novel autoantigen in acute exacerbation of idiopathic pulmonary fibrosis. (査読付) (肺線維症の急性増悪においてアネキシン1は新規の自己抗原である)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年7月</p>	<p>J Immunol 181(1):756-67.</p>	<p>Kurosu K, Takiguchi Y, Okada O, Yumoto N, Sakao S, <u>Tada Y</u>, Kasahara Y, Tanabe N, Tatsumi K, Weiden M, Rom WN, Kuriyama T. 間質性肺炎の急性増悪は患者の予後不良に関する重要な因子であるが正確な機序が明らかになっていない。私たちが明らかにしたのは annexin-1 が肺線維症急性増悪患者のCD4陽性T細胞が認識する自己抗原であることである。特に Annexin-1 のN末端は急性増悪の際に最も認識されやすい部位で治療のターゲットになりうる。 (基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>27 Murine pulmonary response to chronic hypoxia is strain specific. (査読付) (低酸素に対するマウスの呼吸器の反応には種差がある)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年8月</p>	<p>Exp Lung Res 34(6):313-23.</p>	<p><u>Tada Y</u>, Laudi S, Harral J, Carr M, Ivester C, Tanabe N, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T, Nichols WC, West J. 系統による肺高血圧発症の脆弱性を調べるため、3系統のマウスを同条件で低酸素状態に暴露し、肺循環系の血行動態、形態学的変化(血管壁の肥厚)、発現遺伝子パターン(DNAアレイ)を比較した。その結果、マウスの系統によりいづれの因子も顕著な差が検出された。この結果はヒト肺高血圧症罹患率の人種差にも関連している可能性がある。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>28 Tiotropium bromide attenuates respiratory syncytial virus replication in epithelial cells. (査読付) (チオトロピウム臭化物は肺胞上皮内のRSウイルスの増殖を抑制する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年8月</p>	<p>Respiration 76(4):434-41.</p>	<p>Iesato K, Tatsumi K, Saito K, Ogasawara T, Sakao S, <u>Tada Y</u>, Kasahara Y, Kurosu K, Tanabe N, Takiguchi Y, Kuriyama T. RSウイルス(RSV)はいわゆる風邪ウイルスだがCOPDの急性増悪に関連する。私たちはin vitroの実験で肺胞上皮細胞にRSVを感染させ、チオトロピウムプロマイドで処理したところ、合包体の形成、RhoA活性、ICAM発現が有意に低下した。チオトロピウムプロマイドは気道拡張作用のみならず、RSV感染率を低下させることによりCOPD急性増悪を防いでいることが示唆された。 (研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>29 Gender differences in chronic thromboembolic pulmonary hypertension in Japan. (査読付) (日本の慢性肺血栓塞栓症患者の性差についての検討)</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年10月</p>	<p>Circ J 72(12):2069-74.</p>	<p>Shigeta A, Tanabe N, Shimizu H, Hoshino S, Maruoka M, Sakao S, <u>Tada Y</u>, Kasahara Y, Takiguchi Y, Tatsumi K, Masuda M, Kuriyama T. 千葉大学で治療中の慢性肺血栓塞栓症患者150人を対象にHLA-B*5201の有無と臨床状態を解析した。このPhenotypeの保有率には性差が認められ、臨床所見、右心機能、血行動態、手術成績、治療反応性、予後などに差があることが証明された。患者の治療方針を検討する際に参考にできるデータである。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>

<p>30 Gene medicine for cancer treatment: commercially available medicine and accumulated clinical data in China. (査読付) (がん治療における遺伝子医療の実際、中国で市販で蓄積されたデータをもとに)</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年2月</p>	<p>Drug Des Devel Ther 2:115-22.</p>	<p>Ma G, Shimada H, Hiroshima K, <u>Tada Y</u>, Suzuki N, Tagawa M. P53発現型アデノウイルスベクターとE1 B55kd欠損型腫瘍溶解性ウイルスベクターは、中国において市販・臨床応用が実際に行われておりデータの蓄積が進んでいる。これらの臨床データは今後の遺伝子治療の方向性を照らすとともに、世界共通の規約の整備の必要性などの問題も浮き彫りになった。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>31 Chronic obstructive pulmonary disease and interstitial lung disease in patients with lung cancer. (査読付) (慢性閉塞性肺疾患と間質性肺炎患者における肺癌発生に関して)</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年4月</p>	<p>Respirology 14 (3):377-83.</p>	<p>Mizuno S, Takiguchi Y, Fujikawa A, Motoori K, <u>Tada Y</u>, Kurosu K, Sekine Y, Yanagawa N, Hiroshima K, Muraoka K, Mitsushima T, Niki N, Tanabe N, Tatsumi K, Kuriyama T. 未治療肺がん患者256人と対照群947人の2群で、性別、年齢、喫煙歴をマッチさせ、呼吸機能検査、胸部CT画像を比較した。上記の検査所見で間質性肺炎とCOPDと診断された症例では、肺がんの発生率が有意に高いことが示された。間質性肺炎やCOPDは以前から肺がんの活性母地と仮定されていたがそれを実証した研究である。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>32 Combinatory cytotoxic effects produced by E1B-55kDa-deleted adenoviruses and chemotherapeutic agents are dependent on the agents in esophageal carcinoma. (査読付) (食道がんに対する、E1B-55kDa欠失アデノウイルスベクターと化学療法在の併用効果は薬剤依存性である)</p>	<p>共著</p>	<p>平成22年2月</p>	<p>Cancer Gene Ther 17(11):803-13.</p>	<p>Ma G, Kawamura K, Li Q, Okamoto S, Suzuki N, Kobayashi H, Liang M, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Hiroshima K, Shimada H, Tagawa M. E1 B55kd欠損型腫瘍溶解性ウイルスベクターと、抗癌剤の併用効果を9種類のヒト食道がん細胞を用いて検証した。抗がん剤の中でエトポシド、マイトマイシンC、5-FUは腫瘍溶解性ウイルスベクターと併用効果を示したが、シスプラチンは併用効果を示さなかった。併用効果の有無は投与スケジュールではなく、抗がん剤の種類(主に作用機序)と関連していた。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>33 Phase I/II study of docetaxel and S-1, an oral fluorinated pyrimidine, for untreated advanced non-small cell lung cancer. (査読付) (未治療進行非小細胞肺癌に対するドセタキセルとS-1の第1/2相臨床試験)</p>	<p>共著</p>	<p>平成22年6月</p>	<p>Lung Cancer 68(3):409-14.</p>	<p>Takiguchi Y, <u>Tada Y</u>, Gemma A, Kudoh S, Hino M, Yoshimori K, Yoshimura A, Nagao K, Niitani H. 未治療非小細胞肺癌に対し1次治療としてのdocetaxel+S-1の有効性を検証する第I/II相試験を施行した。第1相では9人参加し最大耐用量はdocetaxelのMTDは60mg/m²と設定された。第2相試験では60人に投与したが、奏効率が高く毒性の少ないレジメンであることが示された。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>34 Synergistic effect of non-transmissible Sendai virus vector encoding the c-myc suppressor FUSE-binding protein-interacting repressor plus cisplatin in the treatment of malignant pleural mesothelioma. (査読付) (悪性中皮腫細胞に対する、c-Myc抑制因子FUSE発現型 非伝染性センダイウイルスとシスプラチンの併用効果の検討)</p>	<p>共著</p>	<p>平成23年7月</p>	<p>Cancer Sci 102(7):1366-73.</p>	<p>Kitamura A, Matsushita K, Takiguchi Y, Shimada H, <u>Tada Y</u>, Yamanaka M, Hiroshima K, Tagawa M, Tomonaga T, Matsubara H, Inoue M, Hasegawa M, Sato Y, Levens D, Tatsumi K, Nomura F. c-Mycの転写抑制因子であるFIRを発現するセンダイウイルスベクターSeV/ΔF/FIRを作成し、in vitroおよびマウスの異種移植モデルを用いて、ヒト中皮腫細胞に対する抗腫瘍効果を証明した。またセンダイウイルスベクターSeV/ΔF/FIRベクターとcisplatinの併用により相加相乗効果的な抗腫瘍効果、生存期間の延長も観察された。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>

<p>35 Inhalation of <i>Stachybotrys chartarum</i> evokes pulmonary arterial remodeling in mice, attenuated by Rho-kinase inhibitor. (査読付) (<i>Stachybotrys chartarum</i> 吸入によるマウス肺高血圧の発症はRhoキナーゼ阻害剤で抑制された)</p>	<p>共著</p>	<p>平成23年7月</p>	<p>Mycopathologia 172(1):5-15.</p>	<p>Nagayoshi M, Tada Y, West J, Ochiai E, Watanabe A, Toyotome T, Tanabe N, Takiguchi Y, Shigeta A, Yasuda T, Shibuya K, Kamei K, Tatsumi K. 真菌の1種である<i>Stachybotrys chartarum</i>をマウスに反復気道曝露させると、好酸球を主体とする気道、血管周囲の炎症が惹起されるとともに、肺動脈壁肥厚による肺高血圧症が起きていた。真菌感染により放出されるTh2サイトカインによる血管壁の炎症が内膜、中膜肥厚の機序として考えられるが、Rho-K阻害剤のFasudil投与で肺高血圧の進行が抑制された。 (基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>36 Rho-kinase inhibition alleviates pulmonary hypertension in transgenic mice expressing a dominant-negative type II bone morphogenetic protein receptor gene. (査読付) (Rhoキナーゼ阻害剤は、ドミナントネガティブBMPR2発現マウスの肺高血圧発症を抑制する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成23年11月</p>	<p>Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol 301(5):L667-74.</p>	<p>Yasuda T, Tada Y, Tanabe N, Tatsumi K, West J. (corrsponding author) 血管平滑筋特異的にドミナントネガティブに作用する変異型BMPR2を発現するトランスジェニックマウスを作成したことは以前にも報告したが、この動物モデルを用いてRHO-K阻害剤の効果を実証した。肺高血圧を発症させた後にFasudilを定期的に腹腔内投与すると肺動脈中膜の肥厚が抑制され、右心カテ検査でも右室圧が著明に低下していた。BMPR2とRHOにはクロストークが存在し、RHO阻害剤は肺高血圧症の治療に有望である。 (筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>37 Expression of a murine homolog of apoptosis-inducing human IL-24/MDA-7 in murine tumors fails to induce apoptosis or produce anti-tumor effects. (査読付) (アポトーシス誘導性のヒトIL-24/MDA-7のげっ歯類ホモログはアポトーシス誘導能や抗腫瘍活性を有さない)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年2月</p>	<p>Cell Immunol 275(1-2):90-7.</p>	<p>Nagakawa H, Shimozato O, Yu L, Wada A, Kawamura K, Li Q, Chada S, Tada Y, Takiguchi Y, Tatsumi K, Tagawa M. ヒトIL24はIL-6やTNFα、IFN-γの発現により腫瘍にapoptosisを誘導するが、このホモログである、げっ歯類由来のIL-24には促炎症作用、apoptosis誘導作用、抗腫瘍効果は認められなかった。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>
<p>38. Cytoskeletal defects in <i>Bmpr2</i>-associated pulmonary arterial hypertension. (査読付) (BMPR2関連肺高血圧における細胞骨格の機能異常)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年3月</p>	<p>Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol 302(5):L474-84.</p>	<p>Johnson JA, Hennes AR, Perrien DS, Schuster M, Robinson LJ, Gladson S, Loibner H, Bai S, Blackwell TR, Tada Y, Harral JW, Talati M, Lane KB, Fagan KA, West J. 血管平滑筋、血管内皮細胞などで異常型BMPR2を発現させた肺高血圧マウスモデルは、細胞骨格をtargetにした治療(RHOK阻害剤など)で治療する事ができた。RHOK阻害剤のように血管壁を構成する細胞の細胞骨格をターゲットにした治療は、一度固定化されたリモデリングをreverseする性質を秘めており、臨床応用できる可能性がある。(研究計画の構想段階で協力した)</p>

<p>39 Upregulated p53 expression activates apoptotic pathways in wild-type p53-bearing mesothelioma and enhances cytotoxicity of cisplatin and pemetrexed. (査読付) (野生型p53保有の悪性中皮腫に対するp53の強制発現はアポトーシスを増強し、シスプラチン、ペメトレキセドによる細胞毒性を増強する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年3月</p>	<p>Cancer Gene Ther 19(3):218-28.</p>	<p>Li Q, Kawamura K, Yamanaka M, Okamoto S, Yang S, Yamauchi S, Fukamachi T, Kobayashi H, <u>Tada Y</u>, Takiguchi Y, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. 悪性胸膜中皮腫では野生型p53を発現し、変異を認めないことが多いが、P16とP14の欠失により、実質的にp53の機能的な欠損を有する。私たちはアデノウイルスベクターを用いてp53を腫瘍に過剰発現させ、抗癌剤との併用効果を解析した。遺伝子治療によるp53の外因性強発現は、中皮腫の細胞増殖を抑制し、シスプラチン、ペメトレキセドによる細胞死誘導を増強した。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>40 Zoledronic acid produces antitumor effects on mesothelioma through apoptosis and S-phase arrest in p53-independent and Ras prenylation-independent manners. (査読付) (ゾレドロン酸は、アポトーシス誘導と、p53非依存性、Rasのプレニレーション非依存性のS期停止によって悪性中皮腫に対して抗腫瘍活性を示す)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年5月</p>	<p>J Thorac Oncol 7(5):873-82.</p>	<p>Okamoto S, Kawamura K, Li Q, Yamanaka M, Yang S, Fukamachi T, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Kobayashi H, Tagawa M. 第三世代の骨転移抑制剤であるゾレドロン酸はある種の腫瘍に対して抗腫瘍活性を示すことが報告されている。In vitroゾレドロン酸を投与すると、p53野生株の悪性胸膜中皮腫細胞ではp53リン酸化、カスパーゼ活性化によるapoptosisを誘導した。胸腔内に中皮腫細胞を移植しゾレドロン酸を胸腔内に投与すると胸腔内腫瘍量を抑え、生存期間も延長した。ゾレドロン酸の胸腔内投与は中皮腫に治療に有望である。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>41 Metabolomic analysis of bone morphogenetic protein receptor type 2 mutations in human pulmonary endothelium reveals widespread metabolic reprogramming. (査読付) (ヒトBMPR2変異型内皮細胞は多彩な代謝のリプログラミングが起きている)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年6月</p>	<p>Pulm Circ 2(2): 3.</p>	<p>Fessel JP, Hamid R, Wittmann BM, Robinson LJ, Blackwell T, <u>Tada Y</u>, Tanabe N, Tatsumi K, Hennes AR, West JD. BMPR2阻害マウスの肺血管内皮の代謝情報を解析したところ、広範囲な代謝異常が肺動脈性肺高血圧の重要な病因になっている可能性があることが示された。代謝の各経路をそれぞれブロックするより、多数の経路を同時に抑制する方が効果的に治療を行うことができる。 (論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>
<p>42 Interaction and cross-resistance of cisplatin and pemetrexed in malignant pleural mesothelioma cell lines. (査読付) (悪性中皮腫細胞におけるシスプラチンとペメトレキセドの相関と交叉耐性に関する検討)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年7月</p>	<p>Oncol Rep 28(1):33-40.</p>	<p>Kitazono-Saitoh M, Takiguchi Y, Kitazono S, Ashinuma H, Kitamura A, <u>Tada Y</u>, Kurosu K, Sakaida E, Sekine I, Tanabe N, Tagawa M, Tatsumi K. 悪性胸膜中皮腫の治療としてすでに臨床で使用されている、シスプラチンとペメトレキセドの併用効果のメカニズムを、ヒト中皮腫細胞株を用いて検証した。両薬剤は相乗的に作用し、交叉耐性は認められなかった。また一般的にペメトレキセドの標的と考えられているチミジル酸合成酵素の発現とペメトレキセド耐性には関連性が認められなかった。 (研究計画の構想段階で協力した)</p>

<p>43 CD40 amplifies Fas-mediated apoptosis: a mechanism contributing to emphysema. (査読付) (CD40刺激によるFas感受性亢進は肺の気腫化を促進する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年7月</p>	<p>Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol 303(2):L141-51.</p>	<p>Shigeta A, <u>Tada Y</u>, Wang JY, Ishizaki S, Tsuyusaki J, Yamauchi K, Kasahara Y, Iesato K, Tanabe N, Takiguchi Y, Sakamoto A, Tokuhisa T, Shibuya K, Hiroshima K, West J, Tatsumi K. (corresponding author) COPD発症機序としてCD40の役割を検討した。肺胞上皮細胞、肺血管内皮細胞をCD40処理するとFas発現とapoptosis感受性が亢進した。またin vitroではCCR5リガンドとIFN-γ産生が亢進していた。マウスにCD40抗体を反復投与すると肺胞構成細胞のapoptosisが亢進し気腫肺が形成された。CD40はCOPDの病態に関与し、CD40系の制御によりCOPDの治療に応用できる可能性がある。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>44 Antiproliferative action of metformin in human lung cancer cell lines. (査読付) (ヒト肺癌細胞に対するメトホルミンの細胞増殖抑制効果)</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年7月</p>	<p>Oncol Rep 28(1):8-14.</p>	<p>Ashinuma H, Takiguchi Y, Kitazono S, Kitazono-Saitoh M, Kitamura A, Chiba T, <u>Tada Y</u>, Kurosu K, Sakaida E, Sekine I, Tanabe N, Iwama A, Yokosuka O, Tatsumi K. 経口血糖降下剤であるメトホルミンは、扁平上皮がん、腺がん、大細胞がん、小細胞がんの各病理型のヒト肺癌細胞株に対し、in vitroの解析において細胞増殖抑制効果を示した。一方でシスプラチン曝露によるapoptosisには用量依存性に阻害効果を示した。メトホルミンはがんの種類により、また併用する抗がん剤により効果の増強、減弱が異なることが示された。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>45 E1B-55 kDa-defective adenoviruses activate p53 in mesothelioma and enhance cytotoxicity of anticancer agents. (査読付) E1B-55kDa欠失型アデノウイルスベクターは悪性中皮腫のP53を活性化し細胞毒性を増強する。</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年12月</p>	<p>J Thorac Oncol 7(12):1850-7.</p>	<p>Yamanaka M, <u>Tada Y</u>, Kawamura K, Li Q, Okamoto S, Chai K, Yokoi S, Liang M, Fukamachi T, Kobayashi H, Yamaguchi N, Kitamura A, Shimada H, Hiroshima K, Takiguchi Y, Tatsumi K, Tagawa M. (equally contributed) 悪性胸膜中皮腫はp53の遺伝子異常を示すことは少ないが、INK4A/ARFのホモ接合対欠失による機能的p53欠損がある。E1B55Kd欠損型アデノウイルスベクターを用いヒト中皮腫細胞に対してin vitro, in vivoで解析したところ、細胞のM周期での細胞周期休止と、その後続くapoptosis誘導が認められた。このベクターはさらに抗がん剤と併用すると効果の増強が認められた。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>46 Diagnostic usefulness of p16/CDKN2A FISH in distinguishing between sarcomatoid mesothelioma and fibrous pleuritis. (査読付) (p16/CDKN2A FISHの測定は肉腫型中皮腫と線維性胸膜炎に鑑別に有用である)</p>	<p>共著</p>	<p>平成25年1月</p>	<p>Am J Clin Pathol 139(1):39-46.</p>	<p>Wu D, Hiroshima K, Matsumoto S, Nabeshima K, Yusa T, Ozaki D, Fujino M, Yamakawa H, Nakatani Y, <u>Tada Y</u>, Shimada H, Tagawa M. 悪性胸膜中皮腫は病理検体の免疫染色での診断が困難であり、それ以外の検査法の追加が必要である。私たちが施行したP16/CDKN2Aのホモ接合態欠失を検出するFISH検査は、線維性胸膜炎と肉腫型悪性中皮腫の鑑別に有用であり、また悪性中皮腫の予後予測に有用であった。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>

<p>47 Zoledronic acid produces combinatory anti-tumor effects with cisplatin on mesothelioma by increasing p53 expression levels. (査読付) (ゾレドロン酸とシスプラチンの併用は、p53の発現レベルを上げることで中皮腫に対する抗腫瘍活性を発動する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成25年5月</p>	<p>PLoS One 8(3):e60297.</p>	<p>Okamoto S, Jiang Y, Kawamura K, Shingyoji M, Fukamachi T, <u>Tada Y</u>, Takiguchi Y, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Kobayashi H, Tagawa M. 第三世代骨転移抑制剤のゾレドロン酸は、悪性中皮腫細胞に対して抗腫瘍効果を示すことを以前に報告した。私たちはゾレドロン酸をp53発現アデノベクターと同時に処理する、もしくは抗がん剤と併用して効果を調べたところ、p53依存性apoptosisを増強した。ゾレドロン酸には直接的な殺細胞性のメカニズムがあるが、それとは別のp53発現増強作用もあることが示された。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>48 Interferon-β produces synergistic combinatory anti-tumor effects with cisplatin or pemetrexed on mesothelioma cells. (査読付) (インターフェロンβとシスプラチンおよびペメトレキセドの悪性中皮腫に対する併用効果の検討)</p>	<p>共著</p>	<p>平成25年8月</p>	<p>PLoS One 8(8):e72709.</p>	<p>Li Q, Kawamura K, Yang S, Okamoto S, Kobayashi H, <u>Tada Y</u>, Sekine I, Takiguchi Y, Shingyouji M, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. 米国で施行された悪性胸膜中皮腫の胸腔内遺伝子治療ではIFN-βが使用されており妥当な抗腫瘍効果が認められていた。その作用機序は単なる炎症惹起のみではないと推測されていた。私たちは悪性胸膜中皮腫に対して、インターフェロンβはシスプラチン、ペメトレキセドを併用したところp53発現が増強していた。中皮腫に対するIFN-βの新たな機序が示された。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>49 Quantitative assessment of cross-sectional area of small pulmonary vessels in patients with COPD using inspiratory and expiratory MDCT. (査読付) (COPD患者における、吸気呼気多列検出器型CTを用いた微小肺血管断面積の評価)</p>	<p>共著</p>	<p>平成25年10月</p>	<p>Eur J Radiol 82(10):1804-10.</p>	<p>Matsuura Y, Kawata N, Yanagawa N, Sugiura T, Sakurai Y, Sato M, Iesato K, Terada J, Sakao S, <u>Tada Y</u>, Tanabe N, Suzuki Y, Tatsumi K. 50人のCOPD患者と、喫煙歴のある非COPD患者で胸部CTで低吸収領域(LAA)、肺血管断面積(%CSA)を定量的に測定して比較した。血管断面積の総計はCOPD患者で気腫領域が拡大するほど減少した。すなわち肺血管密度の減少が気腫化に関与していることが示された。この傾向はまだCOPDの基準を満たしていない非COPD喫煙者でも認められた。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>50 CD90 is a diagnostic marker to differentiate between malignant pleural mesothelioma and lung carcinoma with immunohistochemistry. (査読付) (CD90は免疫染色による中皮腫と肺癌の鑑別に有効な腫瘍マーカーである)</p>	<p>共著</p>	<p>平成25年10月</p>	<p>Am J Clin Pathol 140(4):544-9.</p>	<p>Kawamura K, Hiroshima K, Suzuki T, Chai K, Yamaguchi N, Shingyoji M, Yusa T, <u>Tada Y</u>, Takiguchi Y, Tatsumi K, Shimada H, Tagawa M. CD90発現を原発性肺癌と悪性胸膜中皮腫の病理検体で比較した。CD90免疫染色は上皮型中皮腫と肺癌の鑑別に従来の鑑別法と同等に有用であることがわかった。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>51 Effect of metformin on residual cells after chemotherapy in a human lung adenocarcinoma cell line. (査読付) (化学療法後の残存腫瘍に対するメトホルミンの効果)</p>	<p>共著</p>	<p>平成25年12月</p>	<p>Int J Oncol 43(6):1846-54.</p>	<p>Kitazono S, Takiguchi Y, Ashinuma H, Saito-Kitazono M, Kitamura A, Chiba T, Sakaida E, Sekine I, <u>Tada Y</u>, Kurosu K, Sakao S, Tanabe N, Iwama A, Yokosuka O, Tatsumi K. 血糖降下剤であるメトホルミンはin vivoで一度生着した肺腺癌の腫瘍塊を縮小させることはできないが、ゲフィチニブなど化学療法で縮小させたあとで投与すると有意に再発を防ぐ。メトホルミンは治療後の再発を抑制する作用を有すると考えられる。(基礎データの収集と解析を行った)</p>

<p>52 Combination of adenoviruses expressing melanoma differentiation-associated gene-7 and chemotherapeutic agents produces enhanced cytotoxicity on esophageal carcinoma. (食道癌に対してMDM-7発現型アデノウィルスベクターと抗がん剤は効果増強が見られた)</p>	共著	平成26年1月	Cancer Gene Therapy. 21:31-37.	<p>Ma G, Kawamura K, Shan Y, Okamoto S, Li Q, Namba M, Shingyoji M, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Hiroshima K, Shimada H, Tagawa M. MDM-7 (IL-24) 発現型アデノウィルスベクター (Ad-MDA-7/IL-24) はヒト食道がん細胞に対しAkt発現とは関係なく、5-FU, シスプラチン、マイトマイシンC、エトポシドの抗癌剤との併用で抗腫瘍効果の増強を示した。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>53 Incidence, risk factors and treatment outcomes of extravasation of cytotoxic agents in an outpatient chemotherapy clinic. (査読付) (外来通院治療室における抗がん剤血管外漏出の頻度、危険因子、治療効果の検討)</p>	共著	平成26年2月	Jpn J Clin Oncol 44(2):168-71.	<p>Sakaida E, Sekine I, Iwasawa S, Kurimoto R, Uehara T, Ooka Y, Akanuma N, <u>Tada Y</u>, Imai C, Oku T, Takiguchi Y. 通院治療室で起こる化学療法の血管外漏出の発生頻度をまとめた。2007年から2012年まで通院治療室を利用した患者43557人中、35人(0.08%)に血管外漏出が発生した。全体的に症状は軽度で皮膚移植を含めて外科的処置を要する症例はなかった。皮内に設置したポートから抗がん剤が漏出した症例でやや重くなるケースが多かった。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>54 The effects of emphysema on airway disease: correlations between multi-detector CT and pulmonary function tests in smokers. (査読付) (気流制限における気腫化の影響;喫煙者での多列検出型CTと呼吸機能検査の関係)</p>	共著	平成26年6月	Eur J Radiol 83(6):1022-8.	<p>Yahaba M, Kawata N, Iesato K, Matsuura Y, Sugiura T, Kasai H, Sakurai Y, Terada J, Sakao S, <u>Tada Y</u>, Tanabe N, Tatsumi K. 千葉大学を受診中の91人のCOPD患者にMDCT,呼吸機能検査を行い、画像と閉塞性障害の関連を解析した。CTで低吸収域の少ない非気腫型のCOPD患者では気道壁幅(%CSA)と気流障害に相関がみられたが、気腫肺群では相関がなかった。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>
<p>55 Mesenchymal stem cells are efficiently transduced with adenoviruses bearing type 35-derived fibers and the transduced cells with the IL-28A gene produces cytotoxicity to lung carcinoma cells co-cultured. (査読付) (35型アデノウィルスベクターは間葉系幹細胞に効率よく感染しIL-28Aを発現して抗腫瘍活性を示した)</p>	共著	平成26年9月	BMC Cancer 2014. 14:713.	<p>Suzuki T, Kawamura K, Li Q, Okamoto S, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Yamaguchi N, Tagawa M. 35型fiber領域を有するアデノウィルスベクターを作成し、間葉系幹細胞に曝露したところ、効率よく感染し、搭載する外因性遺伝子発現が認められた。このベクターは幹細胞を介する癌治療に応用することができる。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>56 Home-based pulmonary rehabilitation in patients with inoperable or residual chronic thromboembolic pulmonary hypertension: a preliminary study. (査読付) (非切除、肺血残存の肺血栓塞栓症患者に対する自宅での呼吸リハビリテーションの有効性)</p>	共著	平成26年11月	Respir Investig 52(6):357-64.	<p>Inagaki T, Terada J, Tanabe N, Kawata N, Kasai H, Sugiura T, Shigeta A, Asano Y, Murata A, Tsushima K, <u>Tada Y</u>, Sakao S, Tatsumi K. 慢性肺血栓塞栓症の患者で切除不能もしくは切除後血栓残存の自宅での呼吸リハビリテーションの効果を調べた。自宅でのリハビリを施行することで、全身状態の改善、下肢筋力の維持、生活の質の改善などが得られることが分かった。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>

<p>57 Zoledronic acid induces apoptosis and S-phase arrest in mesothelioma through inhibiting Rab family proteins and topoisomerase II actions. (査読付) (ゾレドロン酸はRab関連蛋白の阻害とトポイソメラーゼ2活性化により中皮腫にS期停止とアポトーシスを誘導する)</p>	共著	平成26年11月	Cell Death Dis 5:e1517	<p>Okamoto S, Jiang Y, Kawamura K, Shingyoji M, <u>Tada Y</u>, Sekine I, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kobayashi H, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. ゾレドロン酸は悪性胸膜中皮腫に対する抗腫瘍効果を有する。その機序を解析したところSmall protein Gとトポイソメラーゼを介するRabファミリーの阻害作用によるものであることが示された。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>58 Fas ligand DNA enhances a vaccination effect by coadministered DNA encoding a tumor antigen through augmenting production of antibody against the tumor antigen. (査読付) (FasLと腫瘍抗原DNAの同時ワクチンは、腫瘍に対する抗体の産生を増強する)</p>	共著	平成27年2月	J Immunol Res :743828.	<p>Zhong B, Ma G, Sato A, Shimozato O, Liu H, Li Q, Shingyoji M, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. FasL発現腫瘍は宿主に炎症作用を惹起し、あらたにチャレンジする同種の腫瘍を拒絶する(獲得免疫を成立する)ことが知られている。Fas-Ligand DNAにより宿主をワクチンしたところ、液性免疫の活性化を介して同時に接種した腫瘍抗原に対するワクチン効果を増強した。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>59 Effect of threshold on the correlation between airflow obstruction and low attenuation volume in smokers assessed by inspiratory and expiratory MDCT. (査読付) (吸気、呼気のMDCTにおける気流制限と低吸収域の閾値とその相関)</p>	共著	平成27年4月	Acta Radiol 56(4) :438-46.	<p>Yanagawa N, Kawata N, Matsuura Y, Sugiura T, Suzuki T, Kasai H, Irie R, Iesato K, <u>Tada Y</u>, Tanabe N, Suzuki Y, Tatsumi K. COPDの重症度の評価には胸部CTによる低吸収領域(LAA)が利用されるが、CTの閾値と肺活量の関係を示した報告がなかった。LAV%は吸気、呼気のいずれにおいてもCT閾値に密接に関与していた。気流制限とCT閾値の関連は呼気のデータで吸気のデータより顕著に示されていた。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>60 Clinical, physiological, and radiological features of asthma-chronic obstructive pulmonary disease overlap syndrome. (査読付) (喘息COPD合併症候群の臨床所見、生理学的検査所見、画像所見の検討)</p>	共著	平成27年5月	Int J Chron Obstruct Pulmon Dis 10:947-54.	<p>Suzuki T, <u>Tada Y</u>, Kawata N, Matsuura Y, Ikari J, Kasahara Y, Tatsumi K. (equally contributed) 慢性閉塞性肺疾患(COPD)の中にはアレルギー要素を有する患者群があり、喘息COPD合併症候群(ACO)と命名された。ACO患者40人とCOPD患者100人で臨床症状や検査データを比較した。ACO群ではCOPDのQOLを示すCATスコアが高く、CTではLAAの程度は同等だが気道壁肥厚が顕著であった。またブデソニドホルメテロールの吸入を開始するとACO群ではCOPD群と比較して著明な改善が見られた。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>61 Influence of pulmonary emphysema on COPD assessment test-oriented categorization in GOLD document. (査読付) (COPDアセスメントの要素を取り入れた新規GOLD分類における気腫の影響の検討)</p>	共著	平成27年6月	Int J Chron Obstruct Pulmon Dis 10:1199-205.	<p>Suzuki T, <u>Tada Y</u>, Kawata N, Ikari J, Kasahara Y, Sakurai Y, Iesato K, Nishimura R, West J, Tatsumi K 呼吸機能とCATスコア(COPDのQOL)と新しく設定されたGOLDの新分類の相関を200人のCOPD患者で調べた。CATスコアは呼吸機能のいくつかのパラメーター、胸部MDCTの低吸収閾、気道壁肥厚と相関していた。GOLDの新分類は患者のQOLや器質的な変化を予想するうえで有用な仕組みであることが新たに認識された。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>

<p>62 Cytotoxic effects of replication-competent adenoviruses on human esophageal carcinoma are enhanced by forced p53 expression. (査読付) (ヒト食道癌に対する増殖型アデノウィルスの抗腫瘍効果はp53発現で増強する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年6月</p>	<p>BMC Cancer 2015. 15:464.</p>	<p>Yang S, Kawamura K, Okamoto S, Yamauchi S, Shingyoji M, Sekine I, Kobayashi H, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Hiroshima K, Shimada H, Tagawa M. Fiber knob 領域を改良しIB領域をsurvivin, midkineの転写制御領域に置換した35型増殖型アデノウィルスベクターを作成し、p53発現5型アデノウィルスベクターと併用して食道癌細胞に投与したところ、増殖型アデノベクターがp53依存性apoptosis活性を増強する事により相乗効果が得られた。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>63 Estimation using the impulse oscillation system in patients with pulmonary sarcoidosis. (査読付) (インパルスオシレーションシステムを用いたヒト肺サルコイドーシスの評価に関して)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年7月</p>	<p>Sarcoidosis Vasc Diffuse Lung Dis 32(2):144-50.</p>	<p>Suzuki T, Tsushima K, Kawata N, Matsumura T, Matsuura Y, Ichimura Y, Terada J, Sakao S, <u>Tada Y</u>, Tanabe N, Tatsumi K. インパルスオシレーションシステム (IOS) は閉塞性呼吸障害の程度の測定に有用である。私たちは46人のサルコイドーシス患者に対し、IOSを施行し臨床症状、血液データ、呼吸機能検査、胸部CTを施行した。IOSの値は閉塞性障害、CTでの気管支壁肥厚のインデックスと相関があった。IOSはサルコイドーシス初期の呼吸機能障害の発見に有効であることが示された。 (論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>
<p>64 A clinical protocol to inhibit the HGF/c-Met pathway for malignant mesothelioma with an intrapleural injection of adenoviruses expressing the NK4 gene. (査読付) (胸膜中皮腫に対しHGF/cMET系の阻害型アデノウィルスの胸腔内投与試験の計画書)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年7月</p>	<p>Springer plus 2015. 4:358.</p>	<p><u>Tada Y</u>, Hiroshima K, Shimada H, Morishita N, Shirakawa T, Matsumoto K, Shingyoji M, Sekine I, Tatsumi K, Tagawa M. c-METのアンタゴニストであり、HGFやVEGF経路に干渉して細胞増殖抑制作用と血管新生阻害を有する、NK4発現型アデノウィルスベクターを作成した。これを切除不能悪性胸膜中皮腫に対して、胸腔内に直接投与し、その安全性と抗腫瘍効果を検証する第I相臨床試験を計画した。この試験は同時に胸腔内でのNK4発現と遺伝子導入も(血清中抗体や胸水中のNK4蛋白測定で)検証するようにデザインした。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>65 Expression of p53 synergistically augments caspases-mediated apoptosis induced by replication-competent adenoviruses in pancreatic carcinoma cells. (査読付) (すい臓がんではp53発現は増殖性アデノウィルスベクター感染によるカスパーゼ由来のアポトーシスを増強する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年9月</p>	<p>Cancer Gene Ther 22(9):445-53.</p>	<p>Takei Y, Okamoto S, Kawamura K, Jiang Y, Morinaga T, Shingyoji M, Sekine I, Kubo S, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Yamaguchi N, Tagawa M. 自立増殖可能型アデノウィルスベクターは膵がん細胞においてp53発現上昇によるapoptosis感受性を増強させる。またsurvivin, midkine発現ベクターを同時に投与すると、ベクターの感染効率とがん細胞内での上記遺伝子の発現が亢進し相乗的な効果が認められた。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>
<p>66 A combinatory use of adenoviruses expressing melanoma differentiation-associated gene-7 and replication-competent adenoviruses produces synergistic effects on pancreatic carcinoma cells. (査読付) (すい臓がんに対してMDM-7発現アデノウィルスと増殖性アデノウィルスの併用は相乗効果がある)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年9月</p>	<p>Tumour Biol 36(10):8137-45.</p>	<p>Ma G, Zhong B, Okamoto S, Jiang Y, Kawamura K, Liu H, Li Q, Shingyoji M, Sekine I, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. Mda-7発現5型アデノウィルスベクター (Ad-MDM-7) はさまざまなタイプの腫瘍に抗腫瘍活性を有する。しかし膵がんはこのベクターに対する感染力が低い。私たちは (Ad-MDM-7) と増殖型アデノウィルスベクターの相乗効果を検討した。両者を同時投与したところ、前者の感染効率が上昇し、発現したmda-7はウィルス増殖による細胞毒性を増強して補助的に抗腫瘍活性を示した。(研究計画の構想段階で協力した)</p>

<p>67 Administration of DNA Encoding the Interleukin-27 Gene Augments Antitumour Responses through Non-adaptive Immunity. (査読付) (IL-27のDNAワクチンは非特異的な免疫の誘導により抗腫瘍効果を示す)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年10月</p>	<p>Scand J Immunol 82(4):320-7.</p>	<p>Li Q, Sato A, Shimozato O, Shingyoji M, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. IL-27のDNAによるワクチンと特異的腫瘍抗原によるワクチン投与による免疫治療を大腸がん細胞株を用いて試みた。この組み合わせはNK細胞の活性化と非獲得性免疫の活性化を通じて、腫瘍抗原に特異的な腫瘍ワクチン効果が認められた。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>68 Efficacy of thrombomodulin for acute exacerbation of idiopathic pulmonary fibrosis and nonspecific interstitial pneumonia: a nonrandomized prospective study. (査読付) (肺線維症と非特異的間質性肺炎の急性増悪におけるトロンボモジュリンの有効性、非ラダム化比較試験)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年10月</p>	<p>Drug Des Devel Ther 9:5755-62.</p>	<p>Abe M, Tsushima K, Matsumura T, Ishiwata T, Ichimura Y, Ikari J, Terada J, <u>Tada Y</u>, Sakao S, Tanabe N, Tatsumi K. 間質性肺炎において急性増悪の発症は予後を左右する状態である。私たちは千葉大学で急性増悪を発症した間質性肺炎患者(特発性肺線維症、非特異性間質性肺炎)に対して、リコンビナントのトロンボモジュリンの有効性を確認する臨床研究を行った。急性増悪時にトロンボモジュリン投与群では非投与群と比較して90日後における致死率が著明に低下しており(90%対36%)、また投与群でも有害事象も少なかった。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>69 Replication-competent adenoviruses with the type 35-derived fiber-knob region achieve reactive oxygen species-dependent cytotoxicity and produce greater toxicity than those with the type 5-derived region in pancreatic carcinoma. (査読付) (すい臓がんにおいて35型増殖型アデノウイルスベクターは5型ベクターと比較して活性酸素を介した細胞毒性が増強した)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年12月</p>	<p>Apoptosis 20(12):1587-98.</p>	<p>Yamauchi S, Kawamura K, Okamoto S, Morinaga T, Jiang Y, Shingyoji M, Sekine I, Kubo S, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. アデノウイルスベクター結合受容体を通常のCARからCD46へ変換した増殖型アデノウイルスベクター(AdF35)は、膵がん細胞に感染させると、いわゆるType 5型のアデノウイルスベクターに比べ、活性酸素依存性の強い殺細胞作用を示した。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>70 Expression of activation-induced cytidine deaminase is associated with a poor prognosis of diffuse large B cell lymphoma patients treated with CHOP-based chemotherapy. (査読付) (A活性化誘導シチジンデアミナーゼ(AID)の発現はB細胞悪性リンパ腫の予後不良な因子である)</p>	<p>共著</p>	<p>平成28年1月</p>	<p>J Cancer Res Clin Onc142(1):27-36.</p>	<p>Kawamura K, Wada A, Wang JY, Li Q, Ishii A, Tsujimura H, Takagi T, Itami M, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. Activation-induced cytidine deaminase (AID)の発現レベルとリンパ腫の予後の関連を、千葉県がんセンターで治療中の悪性リンパ腫患者のリンパ節89個のAIDレベルをNorthern blotで解析した。CHOPで治療後のびまん性大細胞性B細胞リンパ腫ではAID発現レベルが高いほど予後不良であることが示された。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>
<p>71 Safety of a short hydration method for cisplatin administration in comparison with a conventional method-a retrospective study. (査読付) (シスプラチンの短時間補液法の安全性を標準的手法と比較する後方視的研究)</p>	<p>共著</p>	<p>平成28年4月</p>	<p>Jpn J Clin Onco 46(4):370-7.</p>	<p>Sakaida E, Iwasawa S, Kurimoto R, Ebata T, Imai C, Oku T, Sekine I, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Takiguchi Y. 千葉大学通院治療室にて治療を行った患者のうち、シスプラチン含有レジメンを通常投与方法で行った患者(69人)と短時間補液法で行った患者(74人)を比較した。腎機能障害は短時間補液法群で発症が少なく他の有害事象には有意差がなかった。シスプラチン含有レジメンに対する短時間補液法は投与しやすく安全である。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>

<p>72 Drug resistance originating from a TGF-β/FGF-2-driven epithelial-to-mesenchymal transition and its reversion in human lung adenocarcinoma cell lines harboring an EGFR mutation. (査読付) (TGFβとFGF2で上皮間葉転換を誘導したEGFR遺伝子変異を有する肺腺がんの薬剤耐性に関する研究)</p>	共著	平成28年5月	Int J Oncol 48(5):1825-36.	Kurimoto R, Iwasawa S, Ebata T, Ishiwata T, Sekine I, <u>Tada Y</u> , Tatsumi K, Koide S, Iwama A, Takiguchi Y. EGFR遺伝子変異を有するヒト肺癌細胞株をTGF β とFGF-2で処理して上皮間葉転換(EMT)を誘導した。さらにこの細胞をmTOR阻害剤であるpp242、DMSO、メトホルミンで処理すると一度起こったEMTが反転し、化学療法(シスプラチン、ゲフィチニブ)に対する感受性が回復し、PDL-1の発現が亢進した。この結果はEGFR-TKIに耐性になった肺腺がんはEMT阻害剤投与で薬剤耐性が克服できることを示す。(研究計画の構想段階で協力した)
<p>73 Prominin-1/CD133 expression as potential tissue-resident vascular endothelial progenitor cells in the pulmonary circulation. (査読付) (肺循環の組織常在性の血管内皮前駆細胞におけるProminin-1/CD133発現の意義)</p>	共著	平成28年6月	Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol 310(11):L1130-42.	Sekine A, Nishiwaki T, Nishimura R, Kawasaki T, Urushibara T, Suda R, Suzuki T, Takayanagi S, Terada J, Sakao S, <u>Tada Y</u> , Iwama A, Tatsumi K. 肺血管内皮の障害によってさまざまな呼吸器疾患が発生するが、肺高血圧症において内皮修復過程で関与する細胞群の抽出を試みた。VEGF阻害剤やモノクローリン処理でCD133陽性細胞の増殖が見られたが、組織在在の血管内皮前駆細胞の性格が認められた。CD133をKOしたマウスに、通常マウスからの骨髄移植を行い、上記刺激を与えたと肺組織内にCD133陽性細胞の集簇が観察され修復作業の関与が明らかになった。(研究計画の構想段階で協力した)
<p>74 Endothelial-to-mesenchymal transition in lipopolysaccharide-induced acute lung injury drives a progenitor cell-like phenotype. (査読付) (LPS吸入による急性肺障害の過程で内皮間葉系転換が起きる)</p>	共著	平成28年6月	Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol 310(11):L1185-98.	Suzuki T, <u>Tada Y</u> , Nishimura R, Kawasaki T, Sekine A, Urushibara T, Kato F, Kinoshita T, Ikari J, West J, Tatsumi K. (equally contributed) ARDSは致命的な病態だが運よく回復しても高度な肺の線維化に悩まされる。その機序には内皮間葉転換(EndMT)が関与しているのではないかと仮設し、マウスにLPSを吸入させて急性肺障害モデルを作成しEndMTの関与の有無を解析した。予想した通り初期の肺血管内皮細胞とそれに続く間葉系細胞への形質転換が分子レベルで証明できた。その機序には局所で産生される活性化酸素と、組織常在性肺幹細胞が関係していた。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)
<p>75 Cytologic Differential Diagnosis of Malignant Mesothelioma and Reactive Mesothelial Cells With FISH Analysis of p16 (査読付) (p16FISH法による中皮腫細胞と反応性中皮細胞の細胞学的な鑑別方法)</p>	共著	平成28年7月	Diagn Cytopathol 44(7):591-8.	Hiroshima K, Wu D, Hasegawa M, Koh E, Sekine Y, Ozaki D, Yusa T, Walts AE, Marchevsky AM, Nabeshima K, <u>Tada Y</u> , Shimada H, Tagawa M. 悪性中皮腫の診断には胸膜生検で大きな検体を採取する必要があるが、全身状態が悪いため生検が行えないケースも多い。今回私たちは原因不明の胸水で悪性中皮腫が疑われた症例から胸水セルブロックを作成し、免疫染色とp16FISHを同時に行ってみたところ、細胞が中皮由来か否か、また悪性疾患か否かの判断ができ、悪性中皮腫の診断に有用であることが分かった。(患者の臨床データの収集と解析を行った)

<p>76 Combination of a third generation bisphosphonate and replication-competent adenoviruses augments the cytotoxicity on mesothelioma. (査読付) (中皮腫に対して第三世代ビスフォスフォネートと増殖性アデノウイルスベクターの併用効果の検討)</p>	<p>共著</p>	<p>平成28年7月</p>	<p>BMC Cancer 2016. 16:455.</p>	<p>Jiang Y, Zhong B, Kawamura K, Morinaga T, Shingyoji M, Sekine I, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. 悪性胸膜中皮腫に対し、E1B55Kdを欠損させた増殖性アデノウイルスベクターと、前臨床試験で悪性中皮腫に対して特異的な抗腫瘍活性を示した第三世代骨修飾因子のゾレドロン酸の併用療法につき解析した。併用療法はそれぞれの単剤治療と比較して、ウイルス増殖、apoptosis経路の活性化を介して抗腫瘍効果が増強していた。 (研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>77 Usefulness of p16/CDKN2A fluorescence in situ hybridization and BAP1 immunohistochemistry for the diagnosis of biphasic mesothelioma. (査読付) (二相型中皮腫の診断におけるp16/CDKN2AのFISHとBAP1の免疫染色の有効性の検討)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年2月</p>	<p>Ann Diagn Pathol 26:31-37.</p>	<p>Wu D, Hiroshima K, Yusa T, Ozaki D, Koh E, Sekine Y, Matsumoto S, Nabeshima K, Sato A, Tsujimura T, Yamakawa H, <u>Tada Y</u>, Shimada H, Tagawa M. 悪性胸膜中皮腫は特徴的な免疫染色の染色パターンを示すが、いまだ病理診断が難しく、確定診断には免疫染色以外の補助的な診断ツールが必要である。私たちが行ったP16ホモ接合体欠失を検出するFISHとBAPの免疫染色の併用は、従来の免疫染色法と比較して二相型中皮腫と異常な間質細胞を伴う上皮型中皮腫との鑑別に有用であることが示唆された。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>78 An intrapleural administration of zoledronic acid for inoperable malignant mesothelioma patients: a phase I clinical study protocol. (査読付) (切除不能悪性胸膜中皮腫を対象としたゾレドロン酸の胸腔内投与の安全性を確認する第I相臨床試験)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年2月</p>	<p>Springerplus 2017. 5:195.</p>	<p><u>Tada Y</u>, Hiroshima K, Shimada H, Shingyoji M, Suzuki T, Umezawa H, Sekine I, Takiguchi Y, Tatsumi K, Tagawa M. 切除不能悪性胸膜中皮腫患者を対象に、骨修飾因子であるゾレドロン酸を、段階用量的に胸腔内投与する第I相臨床試験を計画し、千葉大学病院で試行している。ちなみに前臨床で行った動物実験では、ゾレドロン酸は静脈内投与では腫瘍に対する効果がなく、胸腔内への直接投与で抗腫瘍効果が得られている。また現時点で詳細な機序は不明だがゾレドロン酸とシスプラチンとの併用で相加相乗効果が得られている。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>79 Longitudinal changes in structural abnormalities using MDCT in COPD: do the CT measurements of airway wall thickness and small pulmonary vessels change in parallel with emphysematous progression? (査読付) (COPD患者の長期経過による肺構造の変化の検討; 気道壁厚と小血管断面積と気腫化に相関があるか)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年2月</p>	<p>Int J Chron Obstruct Pulmon Dis 12:551-560.</p>	<p>Takayanagi S, Kawata N, <u>Tada Y</u>, Ikari J, Matsuura Y, Matsuoka S, Matsushita S, Yanagawa N, Kasahara Y, Tatsumi K. 千葉大学病院を受診中のCOPD患者58人に対し、治療介入前後2年間で、症状、QOL、呼吸機能、胸部CTの変化などを追跡した。CATスコアで示されるQOL、閉塞性障害は2年間のインターバルでは有意な変化は認められなかった。しかしながらMDCTでの低吸収域の面積 (LAA) と血管断面積には有意な変化があり、ただし両者に正負ともいずれも相関は認められなかった。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>

<p>80 Midkine is a potential novel marker for malignant mesothelioma with different prognostic and diagnostic values from mesothelin. (査読付) (ミッドカインはメソテリンとは別の診断的、予後予測の良いマーカーである)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年3月</p>	<p>BMC Cancer 17(1):212.</p>	<p>Ak G, Tada Y, Shimada H, Metintas S, Ito M, Hiroshima K, Tagawa M, Metintas M. (equally contributed) トルコ人と日本の共同研究で、トルコ人の悪性胸膜中皮腫患者95人、対照群として転移性胸膜腫瘍56人の血清を用い、血清中のメソテリンとミッドカインの濃度と患者の予後の関連性を解析した。既報にもある様にメソテリンは感受、特異性とも中皮腫に対して優れており、またミッドカインは中皮腫の優れた予後予測マーカーであることがわかった。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>81 Metformin produces growth inhibitory effects in combination with nutlin-3a on malignant mesothelioma through a cross-talk between mTOR and p53 pathways. (査読付) (メトホルミンとnutlin-3aの併用は、mTOR, p53系の相互関係により中皮腫に対して抗腫瘍活性を示す)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年5月</p>	<p>BMC Cancer 17(1):309</p>	<p>Shimazu K, Tada Y, Morinaga T, Shingyoji M, Sekine I, Shimada H, Hiroshima K, Namiki T, Tatsumi K, Tagawa M. (equally contributed) 経口血糖降下薬でm-TOR阻害剤を有するメトホルミンはある種のがん細胞に増殖抑制作用があると報告されている。私たちはメトホルミンと、MDM-p53阻害剤でp53経路を活性化するnutlin-3aの併用による抗腫瘍効果を、ヒト中皮腫細胞株を用いて検証した。細胞株の遺伝的背景により差異があるが、p53とm-TORの相互作用および別の機序にて併用療法の効果が観察された。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>82 Pirfenidone may revert the epithelial-to-mesenchymal transition in human lung adenocarcinoma. (査読付) (ピルフェニドンはヒト肺腺癌の上皮間葉転換の過程を反転することができる)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年7月</p>	<p>Oncol Lett 14(1):944-950.</p>	<p>Kurimoto R, Ebata T, Iwasawa S, Ishiwata T, Tada Y, Tatsumi K, Takiguchi Y. 上皮間葉転換 (EMT) はがんの発生、進展に大きな役割を持つが、私達はヒト非小細胞肺癌の細胞株をTGF-β、FGF2で処理してEMTを誘導する実験系を作成した。線維化を抑制する機序があり肺線維症の治療薬であるピルフェニドン、ニンテダニブを、EMT誘導後の細胞に投与すると上皮の性格を再現する事ができた。これらの薬剤はEMTを反転させる能力があり、臨床的にもがん治療に応用できる可能性がある。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>
<p>83 The Relationship of Bone Mineral Density in Men with Chronic Obstructive Pulmonary Disease Classified According to the Global Initiative for Chronic Obstructive Lung Disease (GOLD) Combined Chronic Obstructive Pulmonary Disease (COPD) Assessment System. (査読付) (COPDの男性患者における骨密度と新規GOLD評価分類との関係)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年7月</p>	<p>Intern Med 56(17):2311-2315.</p>	<p>Sakurai-Iesato Y, Kawata N, Tada Y, Iesato K, Matsuura Y, Yahaba M, Suzuki T, Ikari J, Yanagawa N, Kasahara Y, West J, Tatsumi K. 骨粗鬆症はCOPDに随伴しやすい合併症であるが、私達はCOPD患者の骨密度と重症度の相関の有無を調べた。千葉大学病院に受診中の50人で対照群と背景を一致させると、DEXA測定で低い骨密度は閉塞性障害の度合い、CT画像での低吸収域(気腫肺)の度合い、QOLの低下と相関していた。GOLD分類のD群ではより骨密度が低く、健康状態が悪い傾向が見られこの群に対するケアが特に必要だと考えられた。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>

<p>84 Carbon-ion radiotherapy for non-small cell lung cancer with interstitial lung disease: a retrospective analysis. (査読付) (間質性肺炎合併肺癌に対する重粒子線治療の検討: 後方視的研究)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年9月</p>	<p>Radiat Oncol 12(1):144.</p>	<p>Nakajima M, Yamamoto N, Hayashi K, Karube M, Ebner DK, Takahashi W, Anzai M, Tsushima K, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Miyamoto T, Tsuji H, Fujisawa T, Kamada T. 29人の間質性肺炎合併の肺がん患者を対象に、重粒子線治療の安全性と効果を解析した。化学療法や放射線治療など、通常の治療法の適応となりえない間質性肺炎合併肺がん症例でも、重粒子治療により低いリスクで根治を得る事ができた。可能な限り低用量照射域も縮小させることが、治療後の放射線性肺臓炎の発症リスクを抑えることができる。間質性肺炎合併肺炎に対する新しい治療法の提起として画期的な研究成果である。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>85 Cytotoxicity of replication-competent adenoviruses powered by an exogenous regulatory region is not linearly correlated with the viral infectivity/gene expression or with the E1A-activating ability but is associated with the p53 genotypes. (査読付) (外来性制御因子による増殖性アデノウイルスベクターの細胞毒性はウイルスの感染効率や遺伝子発現、E1A活性化とは直線的に相関せず、p53の遺伝子型に影響される。)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年9月</p>	<p>BMC Cancer 17(1):622.</p>	<p>Yamauchi S, Zhong B, Kawamura K, Yang S, Kubo S, Shingyoji M, Sekine I, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. E1A領域をsurvivin, midkine, cyclooxygenase-2の転写調節領域で置換した改良型35型増殖性アデノウイルスベクターを作成し、ヒトすい臓癌、食道癌、中皮腫の細胞株に感染させた。細胞毒性はp53遺伝子変異のある細胞株で高かったことから、遺伝子発現率やウイルス感染率とは直接に相関せず、各細胞株のp53のgenotypeに影響されることが判明した。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>86 Vildagliptin ameliorates pulmonary fibrosis in lipopolysaccharide-induced lung injury by inhibiting endothelial-to-mesenchymal transition. (査読付) (VildagliptinはLPSで誘発される急性肺障害後の肺の線維化を抑制する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年10月</p>	<p>Respir Res 18(1):177.</p>	<p>Suzuki T, <u>Tada Y</u>, Gladson S, Nishimura R, Shimomura I, Karasawa S, Tatsumi K, West J. (equally contributed) 急性呼吸促拍症候群 (ARDS) 発症後の高度の肺線維化が臨床上で問題となる。線維化の過程には障害を受けた血管内皮細胞が間葉系細胞に形質転換する内皮間葉転換 (EndMT) の関与が分かってきた。私たちはマウスにLPSを吸入させた急性肺障害モデルに、DPP4阻害剤Vildagliptinを腹腔内投与してその治療効果を解析した。DPP4阻害剤は傷害肺組織においてEndMTを阻害し肺線維症への進行を防いだ。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>87 An image cytometric technique is a concise method to detect adenoviruses and host cell proteins and to monitor the infection and cellular responses induced. (査読付) (イメージ細胞解析技術はアデノウイルスと宿主の蛋白の検出ができるため、ベクターの感染効率や宿主細胞の反応を追跡しやすい)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年11月</p>	<p>Virol J 14(1):219.</p>	<p>Morinaga T, Nguyễn TTT, Zhong B, Hanazono M, Shingyoji M, Sekine I, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. イメージサイトメトリーはin vivoで腫瘍内に投与したアデノウイルスベクターの動向を、細胞単位で追跡することができるシステムで、前臨床試験で遺伝子治療を行うにあたり非常に有用である。今後は臨床応用を検討中である。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>

<p>88 Augmented expression of cardiac ankyrin repeat protein is induced by pemetrexed and a possible marker for the pemetrexed resistance in mesothelioma cells. (査読付 (中皮腫細胞でペメトレキセド投与後に過剰発現するcardiac ankyrin repeat 蛋白はペメトレキセド抵抗性のマーカーになりうる)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年12月</p>	<p>Cancer Cell Int 17:120.</p>	<p>Qin Y, Sekine I, Fan M, Takiguchi Y, <u>Tada Y</u>, Shingyoji M, Hanazono M, Yamaguchi N, Tagawa M. 2種類のペメトレキセド耐性ヒト悪性中皮腫細胞株を用い、in vitroでペメトレキセド投与後の遺伝子発現の変化を、DNAマイクロアレイを用いて解析し、ペメトレキセド耐性関連因子を抽出した。その中ではCARP (cardiac ankyrin repeat protein) がペメトレキセド耐性マーカーとして最も有用であることが分かった。(研究計画の構想段階で協力した)</p>
<p>89 Identification of factors during bronchoscopy that affect patient reluctance to undergo repeat examination: Questionnaire analysis after initial bronchoscopy. (査読付) 気管支鏡の再検査の拒否に影響する要因 (検査後の患者アンケートによる検討)</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年12月</p>	<p>PLoS One. 13(12):e0208495.</p>	<p>Fujimoto K, Ishiwata T, Kasai H, Terada J, Shionoya Y, Ikari J, Kawata N, <u>Tada Y</u>, Tsushima K, Tatsumi K. (基礎データの収集と解析を行った) 気管支内視鏡検査を行う際に最も苦痛に感じた要素をアンケート調査で解析した。再度検査を受けない要因として女性、検査時の不快感、喉頭麻酔の不快感などが有意差のある項目として認識された。</p>
<p>90 Isolation and characterization of endothelial-to-mesenchymal transition cells in pulmonary arterial hypertension. (査読付) (肺動脈性肺高血圧症において出現する内皮間葉転換細胞株の単離)</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年1月</p>	<p>Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol 314(1):L118-L126.</p>	<p>Suzuki T, Carrier EJ, Talati MH, Rathinasabapathy A, Chen X, Nishimura R, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, West J. (equally contributed). Cdh5Cre/Gt (ROSA) 26Sortm4 (ACTBtdTomato. EGFP) Lu/J マウスは、in vivoで肺高血圧特有の細胞 fate mappingできる優れた動物モデルであった。SU5416+低酸素刺激で、完全型、部分型の2種類の内皮間葉転換が認められ、完全 EndMT細胞は高い細胞増殖能力と遊走能を有した。EndMT細胞の増加は、内膜・中膜の肥厚をきたし、内腔閉塞につながる肺動脈性肺高血圧の病態を再現できる。さらにEndMT細胞から周囲の微小環境にパラクライン的な働きかけが起こり、血管構成細胞の増殖、血管新生など間接的な変化をきたすことが示された。(筆頭著者につき研究全体のデザインと統括を行った)</p>
<p>91 Inhibition of Gli leads to antitumor growth and enhancement of cisplatin-induced cytotoxicity in large cell neuroendocrine carcinoma of the lung. (査読付) (Gliの阻害は肺神経内分泌大細胞の細胞増殖を抑制しシスプラチンによる細胞毒性を増強する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年3月</p>	<p>Oncol Rep 39(3):1148-1154.</p>	<p>Ishiwata T, Iwasawa S, Ebata T, Fan M, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Takiguchi Y ヘッジホッグ経路は発生だけでなくがんの増殖にも関連している。私たちはヒト由来の3つのLCNEC (大細胞神経内分泌肺がん) 細胞株を用いてヘッジホッグ阻害剤の効果を調べた。ヘッジホッグ (Hh) 阻害剤のBMS833923とGL1阻害剤GANT61で細胞を処理すると相乗効果によりGL1、GL2を抑制し細胞増殖を阻害した。さらにcisplatinの感受性や各種刺激によるapoptosis感受性も亢進させた。(論文の査読、校正など執筆段階で協力した)</p>
<p>92 Heat shock protein 90 inhibitors augment endogenous wild-type p53 expression but down-regulate the adenovirally-induced expression by inhibiting a proteasome activity. (査読付) (Heat shock protein 90は内因性p53発現を亢進させるが、アデノウイルスベクターを介するプロテアソーム活性を抑制する)</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年5月</p>	<p>Oncotarget 9(40):26130-26143.</p>	<p>Chai K, Ning X, Nguyễn TTT, Zhong B, Morinaga T, Li Z, Shingyoji M, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Yamaguchi N, Tagawa M. ヒト悪性中皮腫細胞に対するHeat shock protein 90 (HSP90)阻害剤と、p53発現型アデノウイルスベクターの併用効果を解析した。HSP90阻害剤はアデノウイルスベクターによる外因性のp53発現は抑制し、一方で内因性p53発現を有意に促進することにより、両者の併用は相乗的な抗腫瘍効果の増強を示した。(研究計画の構想段階で協力した)</p>

<p>93 Efficacy of End-Tidal Capnography Monitoring during Flexible Bronchoscopy in Nonintubated Patients under Sedation: A Randomized Controlled Study. (査読付) (鎮静剤使用下、軟性気管支鏡試行時のCO₂モニターの有効性)</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年6月</p>	<p>Respiration 28:1-8.</p>	<p>Ishiwata T, Tsushima K, Terada J, Fujie M, Abe M, Ikari J, Kawata N, <u>Tada Y</u>, Tatsumi K. 気管支鏡施行時には、過度の鎮静による低酸素のリスクが生じることが知られている。私達は非挿管患者における軽度鎮静下での呼吸終末期カブノメーターによるモニタリングの有効性を調べた。合計185人の患者背景をマッチさせ、カブノメーター使用群と非使用群で比較すると、使用群では低酸素暴露の状態が有意に短縮されており、カブノメーターによる検査の安全性が示唆された。 (患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>94 Safety of diagnostic flexible bronchoscopy in patients with echocardiographic evidence of pulmonary hypertension. (査読付) (心エコーで肺高血圧を指摘された患者に対する軟性気管支鏡検査の安全性)</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年10月</p>	<p>Resp investig S2212-5345(18) 30245-4</p>	<p>Ishiwata T, Abe M, Kasai H, Ikari J, Kawata N, Terada J, Sakao S, <u>Tada Y</u>, Tanabe N, Tatsumi K. 2004年から2016年まで右室圧>40mmHgの肺高血圧症を有する患者に対し、気管支鏡、肺生検を施行し、出血量、不整脈発生率、心機能の変化などを評価した。肺高血圧群45人、対照群90人を後方視的に解析したところ両群に有意差は認められなかった。この結果より注意して行う限り、肺高血圧を有する症例でも経気道肺生検は安全に行えることが示された。(患者の臨床データの収集と解析を行った)</p>
<p>95 A p53-stabilizing agent, CP-31398, induces p21 expression with increased G2/M phase through the YY1 transcription factor in esophageal carcinoma defective of the p53 pathway. (査読付) P53の分解阻害剤のCP-31398は、p53経路を欠失する食道癌細胞において、YY1転写因子を介してG2/M期を増加させp21発現を誘導する。</p>	<p>共著</p>	<p>平成31年1月</p>	<p>Am J Cancer Res. 9(1):79-93.</p>	<p>Zhong B, Shingyoji M, Hanazono M, Nguyễn TTT, Morinaga T, <u>Tada Y</u>, Hiroshima K, Shimada H, Tagawa M. p53シグナルに欠損を有する9つの食道扁平上皮癌細胞株を用いて、CP-31398 (P53還元機能、もしくは野生株p53への転換機能を有する化合物)による抗腫瘍効果を、in vitroおよびin vivoにおいて明らかにした。(基礎データの収集と解析を行った)</p>
<p>96 Drug library screen reveals benzimidazole derivatives as selective cytotoxic agents for KRAS-mutant lung cancer. (査読付) 薬剤ライブラリースクリーニングによる、KRAS 遺伝子変異を有する肺がん細胞に対するbenzimidazole誘導体の殺細胞性の検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成31年1月</p>	<p>Cancer Lett. 451:11-22.</p>	<p>Iwao Shimomura, Akira Yokoi, Isaku Kohama, Minami Kumazaki, <u>Yuji Tada</u>, Koichiro Tatsumi, Takahiro Ochiya, Yusuke Yamamoto 非小細胞肺癌で30%を占めるK-Ras遺伝子変異に対する有効な治療法はないが、私達は薬剤ライブラリースクリーニングでベンジミダゾールとフェンベンダゾールという2つの低分子化合物がK-Ras阻害作用を示し、またMEK阻害剤と併用すると有意に相加相乗効果を示すことを発見した。</p>
<p>97 Characterization of pulmonary intimal sarcoma cells isolated from a surgical specimen: In vitro and in vivo study. 外科的切除で得られた肺動脈内皮肉腫細胞株のin vitro、およびin vivoでの特性の検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成31年3月</p>	<p>PLoS One. 29;14(3):e0214654.</p>	<p>Sanada TJ, Sakao S, Naito A, Ishibashi-Ueda H, Suga M, Shoji H, Miwa H, Suda R, Iwasawa S, <u>Tada Y</u>, Ishida K, Tanabe N, Tatsumi K (基礎データの収集と解析を行った) 患者の手術検体を用いて肺動脈内皮肉腫細胞株の樹立を行った血管内皮肉腫細胞株はまれな腫瘍で、培養細胞の樹立に至ったのは今後の治療法の探索にも重要である。</p>

98 AMPK activation induced in pemetrexed-treated cells is associated with development of drug resistance independently of target enzyme expression. (査読付) ペメトレキセド処理細胞でのAMPKの活性化は標的酵素の発現に非依存性に薬剤耐性を誘導する	共著	令和1年6月	Mol Oncol. 13(6):1419-1432.	Qin Y, Sekine I, Hanazono M, Morinaga T, Fan M, Takiguchi Y, <u>Tada Y</u> , Shingyoji M, Yamaguchi N, Tagawa M. (基礎データの収集と解析を行った) 葉酸拮抗がん剤であるペメトレキセドで処理したがん細胞はAMPKの標的酵素の発現に非依存性に薬剤耐性が獲得されることをin vitroおよびin vivoの実験系で明らかにすることができた。
99 Feasibility and accuracy of rapid on-site evaluation of touch imprint cytology during transbronchial biopsy. (査読付) 気管支鏡検査における、擦過細胞診の迅速診断の妥当性と有効性の検討	共著	令和1年6月	J Thorac Dis. 12(6):3057-3064.	Shikano K, Ishiwata T, Saegusa F, Terada J, Sakayori M, Abe M, Kawasaki T, Ikari J, Kawata N, <u>Tada Y</u> , Tatsumi K. (基礎データの収集と解析を行った) 気管支鏡検査時の擦過細胞診 (ROSE) の迅速細胞診の有効性につき解析した。迅速細胞診の正診率は高く、EGFR, ALK, ROS1, PDL1などの分子標的治療薬の選別において非常に有用であることが判明した。
100 S100A12 inhibits fibroblast migration via the receptor for advanced glycation end products and p38 MAPK signaling. (査読付) S100A12はRAGE受容体およびP38MAPKシグナルの活性化を介して線維芽細胞の走化性を抑制する	共著	令和1年9月	In Vitro Cell Dev Biol Anim. 55(8):656-664.	Tanaka N, Ikari J, Anazawa R, Suzuki M, Katsumata Y, Shimada A, Suzuki E, Matsuura Y, Kawata N, <u>Tada Y</u> , Tatsumi K. (基礎データの収集と解析を行った) 慢性閉塞性肺疾患の組織のリモデリングにおいて線維芽細胞の果たす役割が注目されているがS100A12という低分子化合物はp38MAPKシグナルを活性化させ線維芽細胞の遊走能を向上させることが判明した。S100A12は慢性閉塞性肺疾患など肺泡破壊性の呼吸器疾患の組織修復に役立つ可能性がある。
101 Longitudinal changes in structural lung abnormalities using MDCT in chronic obstructive pulmonary disease with asthma-like features. 多列検出型CTを用いた喘息合併慢性閉塞性肺疾患 (ACO) の経時的な構造変化の解析	共著	令和1年12月	PLoS One. 30;14(12):e0227141.	Anazawa R, Kawata N, Matsuura Y, Ikari J, <u>Tada Y</u> , Suzuki M, Takayanagi S, Matsuoka S, Matsushita S, Tatsumi K. (基礎データの収集と解析を行った) 最近、注目されている喘息合併慢性閉塞性肺疾患 (ACOS) の画像解析を多列検出型CTを用いて行い、純粋な気管支喘息や純粋な慢性閉塞性肺疾患との差を経時的に比較解析した。ACOS症例では気道壁肥厚、低吸収域 (LAA) の進展が他の2つの病態より早く進行するが、吸入ステロイドや気管支拡張剤の治療介入で抑制されることが分かった。
102 Combination of a p53-activating CP-31398 and an MDM2 or a FAK inhibitor produces growth suppressive effects in mesothelioma with wild-type p53 genotype. (査読付) P53活性化型CP-31398とMDM2もしくはFAK阻害剤はp53野生型の悪性中皮腫に対して増殖抑制作用を有する。	共著	令和2年8月	Apoptosis. 25(78):535-547.	Zhong B, Shingyoji M, Hanazono M, Nguyễn TT, Morinaga T, <u>Tada Y</u> , Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. (基礎データの収集と解析を行った) p53活性化能を有する低分子化合物CP-31398とMDM2阻害剤もしくはFAK阻害剤との併用は、野生型P53を有する悪性胸膜中皮腫細胞株において、in vitroおよびin vivoで細胞増殖能を有意に抑制させることができた。このコンビネーションは中皮腫の新しい治療法となる可能性を秘めている。
(その他) 症例報告 1 TS-1が著効して長期生存が得られた再燃原発不明癌の1例。(査読付)	共著	平成19年6月	肺癌. 2007;47(4):361-5	<u>多田裕司</u> , 滝口裕一, 外山真一, 黒須克志, 廣島健三, 栗山喬之.

2 Paclitaxelが多発性肺転移巣に著効した骨盤原発血管肉腫の1例.	共著	平成19年12月	癌と化学療法 2007;34(13):2275-7.	多田裕司, 滝口裕一, 寺田二郎, 吉田多賀子, 篠崎理, 坂尾誠一郎, 笠原靖紀, 黒須克志, 田邊信宏, 巽浩一郎, 廣島健三, 栗山喬之.
3 ボセンタンが著効した腎不全に伴う肺高血圧症の1例	共著	平成19年10月	Therapeutic Research, 2007;28(10):1987-8.	安田直史, 田邊信宏, 坂尾誠一郎, 多田裕司, 笠原靖紀, 黒須克志, 滝口裕一, 巽浩一郎, 栗山喬之.
4 慢性肺血栓塞栓症における凝固異常の頻度と凝固, 線溶, 内皮マーカーと病態との関連について	共著	平成19年6月	Therapeutic Research. 2007; 28(6):1058-9.	清水秀文, 田邊信宏, 重田文子, 寺田二郎, 星野晋, 安井山広, 坂尾誠一郎, 多田裕司, 笠原靖紀, 滝口裕一, 巽浩一郎, 栗山喬之.
5 Spontaneous disappearance of a Pulmonary Lesion in a Patient with Active Wegener's Granulomatosis (査読付) (Wegener肉下種で肺病変が自然退縮した1例)	共著	平成19年11月	JJSB: 2007;29 (6), 362-5	Sakao S, Takiguchi Y, Ishizaki S, Yano T, Tada Y, Kasahara Y, Kurosu K, Tanabe N, Tatsumi K, Hiroshima, Kuriyama T. 咯血で発症したが、原因検索中に無治療で病変が消退した(後で診断がついた) Wegener肉下種の1例を報告した。
6 中枢性副腎不全を呈したPGI2持続療法中慢性肺血栓塞栓症の2例	共著	平成20年10月	Therapeutic Research. 2008;29(10):1737.	伊狩潤, 田邊信宏, 山中満佳子, 坂尾誠一郎, 笠原靖紀, 多田裕司, 黒須克志, 滝口裕一, 巽浩一郎, 栗山喬之, 峰澤朝美, 龍野一郎.
7 慢性肺血栓塞栓症肺高血圧症患者の性差とその臨床的特徴について.	共著	平成20年5月	Therapeutic Research. 2008; 29(5): 740-1.	重田文子, 田邊信宏, 清水秀文, 外山真一, 丸岡美貴, 寺田二郎, 星野晋, 川田奈緒子, 安井山広, 坂尾誠一郎, 多田裕司, 笠原靖紀, 滝口裕一, 巽浩一郎, 増田政久, 松原宙, 栗山喬之
8 Pulmonary toxicity by a cytotoxic agent, S-1. (査読付) (抗腫瘍S-1による肺毒性の1例)	共著	平成20年8月	Intern Med. 2008; 46(15):1243-6.	Tada Y, Takiguchi Y, Fujikawa A, Kitamura A, Kurosu K, Hiroshima K, Sakao S, Kasahara Y, Tanabe N, Tatsumi K, Kuriyama T. 舌癌に対してTS-1を投与したところ肺毒性を生じた症例を報告した。DLSTを施行したところ、S-1の構成成分のうちテガフルに対して反応があった。ステロイド治療により速やかに改善した。
9 中枢性副腎不全を呈したPGI2持続療法中慢性肺血栓塞栓症の2例	共著	平成20年10月	Therapeutic Research, 2008, 29(10):1737-8.	伊狩潤, 田邊信宏, 山中満佳子, 多田裕司
10 Pulmonary hypertension in a patient on chronic hemodialysis. (査読付) (血液透析患者に合併した肺高血圧の1例)	共著	平成21年6月	Nihon Kokyuki Gakkai Zasshi. 47(1):52-6.	Yasuda T, Tanabe N, Konishi K, Shigeta A, Shinohara M, Toyama S, Nakamura M, Maruoka M, Tada Y, Takiguchi Y, Tatsumi K, Kuriyama T. 血液透析中に呼吸困難を訴え、精査により診断がついた肺高血圧症例で、血管拡張剤のボセンタンで安全に治療を行うことができた貴重な症例。
11 大動脈炎症候群または線維筋性異形成症の関与が示唆された肺動脈および体動脈に多発性の狭窄・途絶を認める若年性肺高血圧症の1例	共著	平成21年10月	Therapeutic Research. 2009;30(10): 1541-2.	矢野利章, 笠原靖紀, 田邊信宏, 齋藤美弥子, 坂尾誠一郎, 多田裕司, 黒須克志, 滝口裕一, 巽浩一郎, 東浩二, 安川久美, 福田佳奈
12 ラブドイド形質を伴った肺腫瘍の1例. (査読付)	共著	平成22年6月	肺癌. 2010;50 (3):292-6.	芦沼宏典, 滝口裕一, 岩澤俊一郎, 多田裕司, 中谷行雄, 巽浩一郎.
13 化学療法が奏効した多発性内分泌腺腫I型(MEN I)合併胸腺カルチノイドの1例. (査読付)	共著	平成22年11月	日本呼吸器学会誌. 2010, 48(11):855-859.	天野寛之, 山田高之, 重城喬行, 黒田文伸, 坂尾誠一郎, 多田裕司, 黒須克志, 笠原靖紀, 田邊信宏, 滝口 裕一, 巽浩一郎

14 8年間の慢性咳嗽を呈した気管原発腺様嚢胞癌の1例。(査読付)	共著	平成22年9月	気管支学 2010;32:431-434.	芳賀高浩, 黒田文伸, 北村淳史, 多田裕司, 黒須克志, 田邊信宏, 滝口裕一, 巽浩一郎
15 ACTH deficiency and PGI(2) therapy in chronic thromboembolic pulmonary hypertension. (慢性肺血栓塞栓症の治療経過で発症したACTH欠乏症の症例)		平成23年2月	Int J Cardiol. 3;146(3):449-50.	Ikari J, Tanabe N, Tatsuno I, Yamanaka M, Sakao S, Tada Y, Kurosu K, Kasahara Y, Takiguchi Y, Tatsumi K. 慢性肺血栓塞栓症に対しPGI2治療中にステロイド欠乏症状をきたし精査によりACTH欠乏が指摘された、非常に珍しい症例を報告した。
16 SIADHとLambert-Eaton筋無力症候群を併発した小細胞肺癌の1例 (査読付)	共著	平成23年3月	日本呼吸器学会誌. 49(3): 197-20	小林健, 渡辺丈, 芦沼宏典, 天野寛之, 黒田文伸, 多田裕司, 滝口裕一, 廣島健三, 巽浩一郎
17 Pneumocystis pneumonia in everolimus therapy: An indistinguishable case from drug induced interstitial lung disease. (査読付) (エベロリムス投与中に発症し鑑別が困難であったニューモシスチス肺炎の1例)	共著	平成25年8月	Respiratory Medicine Case Reports.2013; 10 27e30.	Toshio Suzuki , Yuji Tada , Kenji Tsushima a, Jiro Terada, Takayuki Sakurai , Akira Watanabe, Yasunori Kasahara , Nobuhiro Tanabe , Koichiro Tatsumi. 腎臓がんに対してエベロリムスを投与したところ間質性肺炎が発症した。薬剤性肺炎を疑いステロイドによる治療にも抵抗性で増悪したが、ニューモシスチスが検出されST合剤で軽快した。
18 Choroidal metastasis of non-small cell lung cancer that responded to gefitinib. (査読付) (脈絡叢転移病変に対してゲフィチニブが奏効した非小細胞肺癌の1例)	共著	平成25年9月	Case Rep Ophthalmol Med.2013; 213124.	Shimomura I, Tada Y, Miura G, Suzuki T, Matsumura T, Tsushima K, Terada J, Kurimoto R, Sakaida E, Sekine I, Takiguchi Y, Yamamoto S, and Tatsumi K. EGFR遺伝子異常を有する肺腺がんの脈絡膜転移にgefitinibが奏功し視力が回復した。視力障害は患者のQOLを大きく低下させるため、EGFR変異陽性腺がんの眼転移では、速やかにEGFR-TKIを投与するべきである。
19 Nontuberculous mycobacterium diseases and chronic thromboembolic pulmonary hypertension. (査読付) (非結核性好酸菌症と肺高血圧を合併した症例)	共著	平成26年10月	Intern Med. 2014; 53(20):2273-9.	Kuroda F, Tanabe N, Igari H, Sakurai T, Sakao S, Tada Y, Kasahara Y, Tatsumi K. 非結核性好酸菌症と肺高血圧を合併する10例に関して臨床所見をまとめた。手術などによる血流の改善で薬剤感受性が回復する可能性が示唆された。
20 Pulmonary arterial hypertension as the first manifestation in a patient with hereditary hemorrhagic telangiectasia. (査読付) (遺伝性出血性末梢血管拡張症の症状で気づかれた肺高血圧の1例)	共著	平成26年10月	Intern Med. 2014; 53(20):2359-63.	Ishiwata T, Terada J, Tanabe N, Abe M, Sugiura T, Tsushima K, Tada Y, Sakao S, Kasahara Y, Nakanishi N, Morisaki H, Tatsumi K. 繰り返す鼻出血から遺伝性出血性末梢血管拡張症の診断となり、その後に変異遺伝子 (ACVRL-1) のキャリアであることが判明し肺高血圧症の治療を行った17歳の患者を報告した。
21 Alveolar hemorrhage associated with pemetrexed administration. (査読付) (ペメトレキセドによる肺出血の1例)	共著	平成27年4月	Intern Med. 2015; 54(7):833-6.	Kurimoto R, Sekine I, Iwasawa S, Sakaida E, Tada Y, Tatsumi K, Takahashi Y, Nakatani Y, Imai C, Takiguchi Y. ペメトレキセドの有害事象として薬剤性間質性肺炎が有名であるが、肺出血の報告は本症例が初めてである。
22 Nivolumab-induced Acute Fibrinous and Organizing Pneumonia (AFOP). (査読付) (ニボルマブによる急性線維性器質化肺炎の1例)	共著	平成29年7月	Intern Med 56(14):1781-1790.	Ishiwata T, Ebata T, Iwasawa S, Matsushima J, Ota S, Nakatani Y, Tsushima K, Tada Y, Tatsumi K, Takiguchi Y. 肺癌に対し使用した免疫チェックポイント阻害剤のニボルマブを使用した際に発生した急性線維性器質化肺炎で、ステロイド投与で軽快し治療を継続できた1例を報告した。

23 悪性胸膜中皮腫に対する化学療法中に進行胃癌との重複癌が判明した1例	共著	平成28年6月	日本胸部臨床 2016, 75(6): 683-688.	梅澤弘毅, 多田裕司, 寺田二郎, 巽浩一郎
24 Eosinophilic bronchiolitis successfully treated with mepolizumab. 治療抵抗性の好酸球性細気管支炎に対してメボリズマブが有効であった1例 (査読付)	共著	平成31年3月	J Allergy Clin Immunol Pract. 2020 Mar;8(3):1159-1161.	Takeshita Y, Nobuyama S, Kanetsuna Y, Tanaka A, Adachi M, Sato T, <u>Tada Y.</u>
総説 1 Cancer therapy with local oncolysis and topical cytokine secretion. (査読付) (局所での腫瘍溶解性とサイトカイン産生によるがん治療)	共著	平成23年1月	Front Biosci. 13:2578-87.	Tagawa M, Kawamura K, Ueyama T, Nakamura M, <u>Tada Y.</u> , Ma G, Li Q, Suzuki N, Shimada H, Ochiai T. 腫瘍溶解ウイルスベクターに何らかの催炎症作用を発現させると、炎症による腫瘍の崩壊、免疫の活性化、ウイルスベクターの腫瘍内への散布というメカニズムで、広範囲に及ぶ悪性中皮腫を選択的に消滅させることができる。
2 Gene therapy for malignant pleural mesothelioma: present and future. (査読付) (悪性胸膜中皮腫に対する遺伝子治療: 過去から未来へ)	共著	平成23年9月	Oncol Res. 17(6):239-46.	<u>Tada Y.</u> , Takiguchi Y, Hiroshima K, Shimada H, Ueyama T, Nakamura M, Tatsumi K, Kuriyama T, Tagawa M. 悪性中皮腫は胸腔内に局所進展する事が多く、遺伝子治療のよい対象として優れている。過去にはHSV-Tkやインターフェロンなど免疫賦活性の遺伝子治療が欧米で施行されてきた。遺伝子導入効率や腫瘍への浸透性などまだ克服すべき課題は多い。
3 A possible anticancer agent, type III interferon, activates cell death pathways and produces antitumor effects. (査読付) (3型インターフェロンはがん細胞死を誘導する抗がん剤として利用できる)	共著	平成23年10月	Clin Dev Immunol. 2011:479013.	Tagawa M, Kawamura K, Li Q, <u>Tada Y.</u> , Hiroshima K, Shimada H. I型インターフェロンの抗腫瘍効果は30年前から認められ臨床試験が行われたが、受容体の発現が副作用が無視できない。IL-28, IL-29などIII型インターフェロンはapoptosis誘導作用とともに生体での発現が局限しているため臨床応用できると思われる。
4 A potential therapeutic strategy for malignant mesothelioma with gene medicine. (査読付) (悪性中皮腫にたいする遺伝子治療)	共著	平成25年1月	Biomed Res Int. 572609.	<u>Tada Y.</u> , Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. 多くの中皮腫ではp14ARF, p16INK4Aの欠失があり、間接的にp53機能不全に陥っている。この機能欠損を埋め合わせるべく開発された、胸腔内へのアデノウイルスベクター投与による遺伝子治療は有望な治療戦略である。悪性胸膜中皮腫に対して過去に行われた分子標的治療の臨床試験をまとめその意義について考えた。現時点では悪性中皮腫に有効な分子標的薬は存在しない。
5 Gene therapy for malignant mesothelioma: current prospects and challenges. (査読付) (悪性中皮腫に対する遺伝子治療、現在までのまとめと今後の挑戦)	共著	平成25年3月	Cancer Gene Ther. 20(3):150-6.	Tagawa M, <u>Tada Y.</u> , Shimada H, Hiroshima K. 局所進行する悪性中皮腫は胸腔内遺伝子治療のよい対象である。現在までに腫瘍抑制遺伝子搭載がt、炎症性サイトカイン発現型、血管新生制御型、腫瘍溶解型などの遺伝子治療が施行されてきたが、単独で成果を挙げたものはない。将来的には化学療法や免疫療法との併用が期待される。
6 Novel type III interferons produce anti-tumor effects through multiple functions. (査読付) (3型インターフェロンは多彩な機序で抗腫瘍活性を示す)	共著	平成25年6月	Front Biosci (Landmark Ed). 1: 18:909-18.	Li Q, Kawamura K, <u>Tada Y.</u> , Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M. IL-28, IL-29などIII型インターフェロン (IFN- λ) はI型IFNと同様にウイルス感染で惹起され、同様のシグナル伝達経路を活性化する。しかしIFN- λ の受容体発現には細胞特異性があり表現型にも差がある。IFN- λ を用いたがん治療に関してはこの特異性に注意する必要がある。

7 Molecular-Targeted Therapy for Malignant Mesothelioma. (査読付) (悪性中皮腫に対する分子標的治療)	共著	平成27年6月	PLEURA 1-11 DOI: 10.1177/2373997515600403 この雑誌は廃刊になっています	Tada Y, Suzuki T, Shimada H, Hiroshima H, Tatsumi K, Tagawa M. 中皮腫は遺伝子治療などの局所治療の良い適応であり、米国での臨床試験ではある程度の成功を収めている。しかし遺伝子導入効率の低さや抗ウイルス抗体の産生による効果減弱など、克服しなければならない課題も多い。
8 悪性胸膜中皮腫：最近の治療法の動向 (査読付)	単著	平成27年6月	日本気管支内視鏡学会雑誌2017;39, 210-4.	多田裕司
9 Summary of the Japanese Respiratory Society statement for the treatment of lung cancer with comorbid interstitial pneumonia. 日本呼吸器学会 間質性肺炎を合併した肺がんの治療指針	共著	令和1年11月	Respir Investig. ;57(6):512-533.	Ogura T, Takigawa N, Tomii K, Kishi K, Inoue Y, Ichihara E, Homma S, Takahashi K, Akamatsu H, Ikeda S, Inase N, Iwasawa T, Ohe Y, Ohta H, Onishi H, Okamoto I, Ogawa K, Kasahara K, Karata H, Kishimoto T, Kitamura Y, Gemma A, Kenmotsu H, Sakashita H, Sakamoto S, Sekine K, Takiguchi Y, Tada Y, Toyooka S, Nakayama Y, Nishioka Y, Hagiwara K, Hanibuchi M, Fukuoka J, Minegishi Y, Yanagihara T, Yamamoto N, Yamamoto H, Gaga M, Fong KM, Powell CA, Kiura K; DLD/TO Assemblies of JRS. 間質性肺炎合併肺がんの治療に関する日本呼吸器学会のガイドラインで、特に非小細胞肺癌に対する 化学療法の実状と治療薬の選択法、有害事象発生時の対象法につき、過去のデータを参考にレビューを行った。
研究報告書				
1 原発性肺高血圧症の分子機序解明と治療戦略	単著	平成20年4月	科学研究費助成事業 研究報告書2007-2008.	多田裕司
2 Rhoキナーゼ阻害薬による優位阻害型骨形成因子II型受容体 (BMPRII) 発現マウスに生じる肺高血圧の治療.	共著	平成23年4月	厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業「呼吸不全に関する調査研究」平成22年度分担研究報告: 273-275, 2011.	安田直史, 多田裕司, 田邊信宏, 巽浩一郎
3 慢性肺気腫症の病態解析とCD40抑制による新規治療法の開発	単著	平成25年4月	科学研究費助成事業 研究報告書2011-2013.	多田裕司
4 中皮腫に対する新規遺伝子医薬品の研究.	共著	平成25年4月	平成23年度受託研究報告: 1-36, 2012.	多田裕司, 島田英昭, 田川雅俊, 廣島健三.
5 慢性閉塞性肺疾患と骨粗鬆症に関する調査研究	単著	平成28年2月	ちば県民保健予防財団 研究成果報告書, 2016年.	多田裕司
学会抄録 (最近5年の主なものの10演題のみ抜粋)				
1 Zoledronic acid induces apoptosis and S-phase arrest in mesothelioma through inhibiting Rab and topoisomerase II actions. (ゾレドロン酸はRabとトポイソメラーゼIIの活性阻害を介して、中皮腫にアポトーシスとS期停止を誘導する)	—	平成26年10月	The 10th International Mesothelioma Interest Group (Cape Town, South Africa).	Tada Y, Okamoto S, Shimazu K, Kozono T, Shingyoji M, Takiguchi Y, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M.

2 敗血症性ARDSモデルマウスにおける酸化ストレス誘導性内皮間葉転換.	—	平成27年4月	第55回日本呼吸器学会学術講演会（東京）	鈴木敏夫, 多田裕司, 西村倫太郎, 漆原崇司, 須田理香, 関根亜由美, 川崎剛, 巽浩一郎.
3 Clinical, physiological, and radiological features of asthma-chronic obstructive pulmonary disease overlap syndrome. (喘息COPD合併症候群の臨床的、生理的、画像的な所見に関する検討)	—	平成27年10月	World Allergy Congress XXIV (Seoul, Korea)	Suzuki T, Tada Y, Kawata N, Matsuura Y, Ikari J, Kasahara Y, Tatsumi K.
4 ミニシンポジウム4: 敗血症性肺障害修復時の組織常在性血管内皮前駆細胞に対するNAD(P)H oxidase inhibitorの保護的作用.	—	平成28年5月	第56回日本呼吸器学会学術講演会（京都）	鈴木敏夫, 多田裕司, 漆原崇, 関根亜由美, 西村倫太郎, 川崎剛, 寺田二郎, James West, 巽浩一郎.
5 Anti-tumor effects of metformin and nutlin-3A in malignant pleural mesothelioma. (胸膜中皮腫に対するメトホルミンとnutlin 3Aの抗腫瘍効果)	—	平成28年5月	The 13th International Mesothelioma Interest Group Annual Meeting (Birmingham, U.K)	Tada Y, Morinaga T, Suzuki T, Shimada H, Tatsumi K, Hiroshima K, Tagawa M.
6 Preclinical and clinical researches for malignant mesothelioma with gene medicine and bisphosphonates (悪性中皮腫に対する遺伝子医療とビスホスホネートの前臨床および臨床試験)	—	平成28年5月	International Society of Cell and Gene Therapy of Cancer (Seoul, Korea)	Tagawa M, Tada Y, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K.
7 E1B-55kDa-defective adenoviruses product cytotoxicity in combination with MDM2 inhibitors on INK4A/ARF-defective mesothelioma. (E1B-55kD欠損アデノウイルスとMDM2阻害剤の、INK4A/ARF欠損中皮腫に対する併用効果)	—	平成28年10月	International meeting on replicating oncolytic virus therapeutics (Vancouver, British Columbia, Canada)	Tada Y, Thanh N, Thảo T, Kubo S, Shingyoji M, Sekine I, Tatsumi K, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M.
8 Inhibition of the HGF/c-Met for mesothelioma with an intra-pleural injection of the NK4 gene-expressing adenoviral vectors (HGF/c-Met阻害作用を有するNK4遺伝子発現アデノウイルスベクターの胸腔内投与による中皮腫の遺伝子治療)	—	平成30年5月	The 14th International Mesothelioma Interest Group Annual Meeting (Ottawa, Canada)	Y Tada, T. Morinaga, I. Sekine, T. Suzuki, K. Tatsumi, H. Shimada, K. Hiroshima, M. Tagawa
9 Inhibition of the HGF pathway for malignant mesothelioma with an intra-thoracic injection of the NK4-expressing Adenovirus vectors. (HGF/c-Met阻害作用を有するNK4遺伝子発現アデノウイルスベクターの胸腔内投与による悪性胸膜中皮腫の遺伝子治療)	—	平成30年9月	World Conference on Lung Cancer (Toronto, Canada)	Tada Y, Morinaga T, Sekine I, Toshio S, Shimomura I, Tatsumi K, Takiguchi Y, Shimada H, Hiroshima K, Tagawa M

10 K-Ras変異肺がん細胞に対するYAP1阻害剤の抗腫瘍効果の検討	—	平成30年9月	第77回 日本癌学会学術総会（大阪）	下村巖、山本雄介、 <u>多田裕司</u> 、巽浩一郎、落谷孝広
教育講演、シンポジウム等				
1 各種疾患における喫煙の影響「喫煙と肺癌の関係」	共著	平成19年11月	シンポジウム 第2回日本禁煙科学会学術総会（奈良）.	<u>多田裕司</u> 滝口裕一、黒須克志、坂尾誠一郎、笠原靖紀、田邊信宏、巽浩一郎、栗山喬之
2 Recent treatment strategies for lung cancer. 肺がんの最近の治療方針（内科的治療）	単著	平成28年4月	教育講座 日本放射線技術学会 第72回総会学術大会（横浜）.	多田裕司
3 悪性胸膜中皮腫：診断と治療の現状	共著	平成29年5月	教育フォーラム9 第90回 日本産業衛生学会（東京）	<u>多田裕司</u> 、田川雅敏、巽浩一郎
4 A phase 1 clinical trial of inhibiting the HGF/c-Met pathway for malignant pleural mesothelioma with NK4 gene-expressing adenoviral vectors (HGF/c-Met阻害作用を有するNK4遺伝子発現アデノウイルスを用いた悪性胸膜中皮腫の第1相臨床試験)	単著	平成30年7月	シンポジウムXII : Cancer Gene Therapy 「臨床に進みつつある遺伝子医薬の展開」The 24th Annual Meeting of Japan Society of Gene and Cell Therapy. 2018.	Yuji Tada

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 唐仁原 全
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学分野 外科系臨床医学 外科学一般		移植外科学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) 肝臓病-今日の話題-	共著	1991年10月	中外医学社 編者：小幡裕	海外において肝移植を受け帰国した患者の予後、合併症、管理上の問題点について検討した。分担：「肝移植後の合併症と管理上の問題点」について執筆した。259-263ページ 寺岡 慧、小池太郎、大崎慎一、唐仁原全
2) Organ Procurement and Preservation for Transplantation (移植臓器摘出と臓器保存)	共著	1997年	Springer 編者：LH Toled-Pereyra	肝移植に用いられる臓器保存液の組成とその理論的根拠につき概説した。また、肝保存の動物実験成績と臨床成績についても報告した。第8章 Liver preservation 127-148ページ Tojimbara T, Ojogho ON, Esquivel CO.
3) 腎不全の外科	共著	2000年 8月	南光堂 編者：阿岸鉄三、東間紘、寺岡慧	腎不全患者おもに透析患者の上部消化管疾患について概説し、手術手技、管理上の問題点についても言及した。分担：「消化器疾患」について執筆した。152-162ページ 唐仁原全、藤川博康
4) 腎移植のための腹腔鏡下手術	共著	2003年10月	日本医学館 編者：寺岡 慧、渕之上昌平、中島一朗、唐仁原全	血液型不適合腎移植において当時必須であったレシピエントの脾臓摘出術を腹腔鏡下手術にて実施する方法をその注意点とともに解説した。 分担：「ABO不適合腎移植における腹腔鏡下脾摘術」について執筆した。111-120ページ 唐仁原全、津田信次
5) 腎疾患治療のエビデンス	共著	2003年3月	文光堂 監修：黒川 清	血液型不適合腎移植の術前、術中、術後の実際と今後の展望について概説した。 分担：「血液型不適合移植」について執筆した。345-350ページ 寺岡 慧、唐仁原全
6) 実地医家のための Helicobacter pylori除菌法 Q & A	単著	2004年10月	先端医学社 編者：浅香正博、川野淳	慢性腎不全患者、透析患者における Helicobacter pylori除菌法の注意点について解説した。 実地医科のための Helicobacter pylori除菌法 Q & Aにおいて「除菌法の工夫・除菌失敗例への対応策」について執筆した。62-63ページ
7) ABO-incompatible Organ Transplantation from JAPAN 日本におけるABO血液型不適合臓器移植	共著	2006年3月	Elsevier 編者：K Takahashi	従来の免疫抑制法では不成功に終わった血液型不適合腎移植患者に対して新しい免疫抑制法を開発した。 分担：Newly developed pre-conditioning regimen consisting of rituximab, splenectomy and plasmapheresis for non-responders to conventional regimen in ABO-incompatible kidney transplantation. 99-104ページ リツキサンの脾摘、血漿交換による新しい免疫抑制レジメンの開発 Teraoka T, Kai K, Iwado K, Toujinbara T.

8) 免疫の進化	共著	2006年3月	医薬ジャーナル社 監修：シクロスポリン 学術国際シンポジウム	免疫抑制療法の進歩に伴う腎移植成績の改善について全国データをもとに解説した。 分担：免疫の進化の中で「新しい免疫抑制剤プロトコールの導入による腎移植の成績の進歩」について執筆した。75-89ページ 寺岡 慧、唐仁原全、中島一朗
9) 透析療法辞典	単著	2009年6月	医学書院 編者：中本雅彦、佐中 孜、秋澤忠男	透析患者の腹部手術の問題点、術後管理の注意点について解説した。 分担：透析療法辞典の中で「透析患者の腹部手術」について執筆した。466-467ページ
(学術論文) 原著 (英文) 1) Long-term outcomes in kidney transplantation from expanded-criteria donors after circulatory death (査読付) (心停止後適応拡大ドナーからの腎移植の長期成績)	共著	2017年1月	Transplant Proc 49	心停止かつ適応拡大ドナー (expanded-criteria donor) は欧米では忌避される傾向にあるが、わが国では脳死ドナーの不足から積極的に行われて来た。その長期成績は欧米の脳死腎移植の長期成績を凌駕するものである。 45-48ページ Tomita Y, <u>Tojimbata T</u> , Iwadoh K, et al.
2) Thrombotic microangiopathy caused by oral contraceptives in a kidney transplant recipient (査読付) (経口避妊薬により惹起された腎移植患者の血栓性微小血管炎の1例)	共著	2016年7月	Nephrology Supl 1	血栓性微小血管病変により急激に移植腎機能が悪化し、経口避妊薬との関連が強く示唆された腎移植の1例を報告した。 41-43ページ Shirai H, Yashima J, <u>Tojimbata T</u> , et al.
3) Outcomes of kidney transplantation from circulatory death donors with increased terminal creatinine levels in serum (査読付) (終末期に血清クレアチニンが上昇した心停止ドナーからの腎移植成績)	共著	2016年7月	Transplantation 100:	死線期に腎機能の低下した心停止ドナーからの腎移植は欧米においてはほとんど行われない。わが国では脳死ドナー不足から条件の悪い心停止ドナーからの腎移植を行わざるを得ず、その成績は欧米の脳死ドナー腎移植を凌駕している。 1532-1540ページ Tomita Y, <u>Tojimbata T</u> , Iwadoh K, et al.
4) Effectiveness of skin perfusion pressure monitoring during surgery for an ischemic steal syndrome associated refractory ulcer. (査読付) (虚血スティーラ症候群に対する手術時の皮膚灌流圧モニターの有効性)	共著	2015年3月	J Vasc Access 16:	透析患者のシャント肢に生じた何知性海洋を伴うスティーラ症候群に対し血流軽減術を施行した。その際血流調節に皮膚灌流圧モニターが有用であった。 163-166ページ Okubo K, Sato T, Matsubara C, <u>Tojimbata T</u> .

Efficacy and safety of febuxostat, a novel nonpurine selective inhibitor of xanthine oxidase for the treatment of hyperuricemia in kidney transplant recipients (査読付) (腎移植患者の高尿酸血症に対するfebuxostatの有用性と安全性)	共著	2014年2月	Transplant Proc 46:	腎移植患者の高尿酸血症治療に対する新しい非プリン体キサンチンオキシダーゼ阻害剤 febuxostatの有用性と安全性を検討した。 511-513ページ <u>Tojimbara T</u> , Nakajima I, Yashima J, et al.
5) Nine-yr experience of 700 hand-assisted laparoscopic donor nephrectomies in Japan (査読付) (日本における用手補助下内視鏡的ドナー腎摘術700例の検討)	共著	2012年9月	Clin Transplant 26:	われわれの施設における9年間700例におよぶ用手補助下内視鏡的ドナー腎摘術の成績について検討した。 797-807ページ Nakajima I, Iwadoh K, Koyama I, <u>Tojimbara T</u> , et al.
6) The 5-year outcome of ABO-incompatible kidney transplantation with rituximab induction (査読付) (rituximabを用いた免疫抑制導入療法によるABO血液型不適合腎移植の5年成績)	共著	2011年4月	Transplantation 91:	われわれはABO血液型不適合腎移植に対し rituximabを用いた免疫抑制療法を世界で初めて臨床応用した。5年間の長期観察においてABO適合移植と遜色のない良好な成績を確認した。 853-857ページ Fuchinoue S, Ishii Y, Sawada T, <u>Tojimbara T</u> , et al.
7) Successful third kidney transplantation with intensive immunosuppression in a highly sensitized recipient (査読付) (集中的免疫抑制療法により成功した高度に感作された3次腎移植の1例)	共著	2008年9月	Transplant Proc 40:	高度に感作され拒絶反応のリスクが極めて高い患者に術前から集中的な免疫抑制療法を採用し3回目の腎移植を成功させた。 2428-2430ページ Kawase T, <u>Tojimbara T</u> , Niki R, et al.
8) Hand-assisted laparoscopic splenectomy in ABO-incompatible kidney transplant recipients (査読付) (ABO不適合腎移植における用手補助下内視鏡的脾摘術)	共著	2008年9月	Transplant Proc 40:	ABO血液型不適合腎移植時に必要な脾臓摘出術を腎移植創を用いて内視鏡的に行なった症例の検討結果を報告した。 2336-2338ページ <u>Tojimbara T</u> , Nakajima I, Nanmoku K, et al.
9) Effect of immunosuppressants on the progression of hepatitis C in hepatitis C virus-positive renal transplantation and the usefulness of interferon therapy (査読付) (HCV陽性腎移植患者における免疫抑制療法の影響とインターフェロン療法の効果)	共著	2008年9月	Transplant Proc 40:	免疫抑制剤の種類によるC型肝炎ウイルスへの影響とインターフェロン療法の効果を検討した。 2382-2385ページ Nanmoku K, Imaizumi R, <u>Tojimbara T</u> , et al.

10) How can we increase living related donor renal transplantations? (査読付) (いかにして生体ドナー腎移植を増やすか)	共著	2008年9月	Transplant Proc 40:	生体腎移植数を増加させるためにドナー腎摘術を内視鏡下で行うことの影響を考察した。 2104-2107ページ Nakamura Y, Konno O, Matsuno N, <u>Tojimbara T</u> , et al.
11) Improved outcomes of renal transplantation from cardiac death donors: a 30-year single center experience. (査読付) (心停止下ドナー腎移植の長期成績の改善)	共著	2007年3月	Am J Transplant 7:	ABO血液型不適合腎移植時に必要な脾臓摘出術を腎移植創を用いて内視鏡的に行なった症例の検討結果を報告した。 609-617ページ <u>Tojimbara T</u> , Fuchinoue S, Iwadoh K, et al.
他 71 編				
原著 (和文)				
1) 腹腔・後腹膜肉腫の外科治療	共著	2017年印刷中	癌の臨床	希少癌である肉腫は再発率が高く、治療に難渋し、術後生存率も低い。積極的に外科治療を行う施設も少なくいわゆる癌難民が問題となっている。腹腔内および後腹膜肉腫の現状と最近の治療法の進歩について概説した。 印刷中 矢嶋淳、高橋克仁、白井博之、 <u>唐仁原全</u>
2) 高齢者バスキュラーアクセスの作製上の問題点・留意点	共著	2016年1月	臨床透析 32:	透析患者の高齢化が進み、高齢者の透析用バスキュラーアクセスの必要性が増加している。動脈硬化、組織脆弱性、心機能低下などアクセス作製上の問題点につき解説した。 55-62ページ 大久保健太郎、佐藤隆、 <u>唐仁原全</u>
3) 腎移植後大腸原発悪性リンパ腫の1例	共著	2015年3月	腎と透析 78:	生体腎移植13年後に発症した大腸原発のB細胞悪性リンパ腫の手術症例を報告した。 45-48ページ 白井博之、矢嶋淳、 <u>唐仁原全</u>
4) 渡航移植患者の診療拒否は善か？悪か？	単著	2014年7月	今日の移植 27:	世界保健機関(WHO)による渡航移植の自粛を求める指針および臓器売買禁止の勧告を期に渡航移植を控える動きが出ている。帰国後の移植患者への医療機関の対応にも混乱が見られる。移植医の今後の対応につき問題提起した。 258ページ
5) 急性結腸偽性閉塞症(Ogilvie症候群) および急性腎不全を呈した1症例の治療経験	共著	2011年4月	腎と透析 70:	明らかな器質的病変を認めず急性に結腸が拡張し腸閉塞症状を呈する急性結腸偽性閉塞症(Ogilvie症候群)の1手術例について報告した。 47-50ページ 矢嶋淳、 <u>唐仁原全</u>
6) ドナー由来の水痘再感染が疑われた献腎移植患者の1例	共著	2010年7月	第43回日本臨床腎移植学会記録集	献腎移植23日後に発症したドナー由来の水痘再感染が疑われる症例を報告した。 126-128ページ 矢嶋淳、松尾研、森典子、 <u>唐仁原全</u>

7) イスタンブール宣言とわが国の腎移植の将来	単著	2009年9月	腎と透析 67:	2008年国際移植学会により出されたイスタンブール宣言では、死体臓器提供による治療の潜在的な可能性は腎臓のみならず他の臓器についても各国の移植医療ニーズに応じて最大化されるべきであり、死体ドナーによる臓器移植の推進は生体ドナーの負担を最小化するために不可欠である、としている。わが国の移植医療の将来について考察した。 281-282ページ
8) 移植腎慢性拒絶反応に関する危険因子と治療効果の検討	共著	2009年12月	移植 44:	慢性拒絶反応は移植腎機能障害の主因の一つである。慢性拒絶反応症例を検討し、危険因子としてHLAクラス2抗原に対する既存抗体が重要であった。 592-599ページ 矢嶋淳、唐仁原全、中島一朗
9) マージナルドナーシリーズ 肝臓	単著	2008年4月	Organ Biology 15:	肝臓移植において脳死ドナーが一般的であるが、ドナーの高齢化、死戦期の低血圧、阻血時間の遷延など条件の悪いマージナルドナーからの移植も存在する。心停止ドナーを含むマージナルドナーからの肝移植の現況について海外のデータを中心に概説した。 5-12ページ
10) 重度四肢虚血肢に対しての末梢幹細胞移植の可能性	共著	2008年4月	移植 43:	重症四肢虚血肢の治療として虚血部周辺組織からの血管新生や側副血行路の発達を促す血管新生療法が行われる。われわれは細胞移植療法の一つである末梢血幹細胞移植を行っており、56%の症例に一定の効果を認めた。 98-106ページ 矢嶋淳、南木浩二、添野真嗣、唐仁原全
11) 緊急を要するバスキュラーアクセス関連手術	共著	2008年7月	腎と透析 65別冊:	2006年に救命またはそれに準ずる目的で施行したバスキュラーアクセス緊急手術42件について検討した。内訳は感染、敗血症が半数を占め、他に出血、切迫破裂、スティール症候群などであった。 17-21ページ 廣谷紗千子、甲斐耕太郎、工藤真嗣、唐仁原全
他 73 編 (その他・学会発表) 国外発表 33 国内発表 42 (その他・総説) 総説 26 (その他・症例報告) 症例報告 17 (その他・学術刊行物) 学術刊行物 5				

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 福留 潤
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
放射線治療に関する実務		放射線治療・体外照射・定位放射線治療・IMRT・IGRT		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文) 1. 放射線治療の最新エビ デンス	共著	平成15年12月	月刊新医療 30(12), 78-80, 2003-12	放射線治療領域の最新エビデンスの解説(共 著: 青木幸昌、 <u>福留潤</u>)
2. 癌局所療法・骨転移	単著	平成17年12月	治療学39(12), 37-40, 2005-12	癌の骨転移に対する放射線治療の最新エビデンス に基づく知見の解説
(その他) 学会発表 1. 癌研病院における前立 腺癌の放射線治療経験	—	平成15年4月	第62回日本医学放射線 学会総会、横浜	癌研病院における前立腺癌治療患者の治療成績の 発表。発表者 福留潤

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	Vo Kim Cat Tuyen
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド			
産婦人科		出生前診断、妊娠/不妊、婦人科腫瘍学			
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要	
(著書) 該当なし					
(学術論文) 1 ティエンザンのドング・ ディエムハイスクールにお ける生理衛生に関する女子 学生の知識と習慣	共著	2012年12月	ホーチミン市医療プラク ティスジャーナル ISSN : 1859-1779	384名の女子学生の生理衛生に関する知識と習慣 を評価するための公共研究 著者：ボー・キ ム・キャット・テュエン、グエン・デュイ・タ イ 役割/貢献：調査、データ解析、論文の作成	
2 妊娠における悪阻	共著	2016年5月	HOSREMジャーナル	妊娠における吐き気、妊娠悪阻（重度の吐き 気）：症状、兆候、分類、および治療法。著 者：ボー・キム・キャット・テュエン、リ・ホ ング・カム 役割・貢献：文献調査、情報調査 および論文の作成	
3 フンブン病院の超音波検査 におけるソフトマーカによ る妊娠中の胎児の転帰	共著	2016年12月	ホーチミン市医療プラク ティスジャーナル ISSN : 1859-1779	妊娠中期超音波診断に置いてソフトマーカーによ る妊娠中の胎児の転帰についての研究 著者： ボー・キム・キャット・テュエン、ト・マイ・ スアン・ホン 役割・貢献：データ収集、解 析、論文の作成、原稿の入稿	
4 がん患者の新型コロナウイ ルス感染：ベトナムのケー ススタディ	共著	2020年1月	アジアパシフィック ジャーナル 環境と癌 ISSN : 2645-5404	新型コロナウイルスに罹患した3名のベトナム 人がん患者のケーススタディ 著者：ボー・キ ム・キャット・テュエン、レ・チャン・グア ン、フィン・ゴツ・イヘン・ニイ、タ・ハ・グ エン、グエン・ティエン・ミン 役割・貢献： データ収集、論文の作成、原稿の入稿	
(その他) 該当なし					

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 細谷 幸司
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物学 内科学 腎臓病学		慢性腎不全、インスリン抵抗性、ミネラルコルチコイドレセプター、ADMA, DDAH		
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. Break-point Checkerboard Plate法が有用であった多剤耐性菌緑膿菌感染症合併血液透析患者の1症例	共著	2012年9月	日本透析医学会雑誌Vol. 45 (2012) No. 9 p. 881-887	感染症は維持透析患者における頻度の高い死亡原因のひとつである多剤耐性緑膿菌 (multi-drug resistant <i>Pseudomonas aeruginosa</i> : MDRP) は有効な治療手段に乏しく, 治療法の確立が急務とされている。今回われわれはBreak-point Checkerboard Plate (BCプレート) 法を用いて抗菌薬の選択を行い良好な結果が得られた1例を経験したので報告する。入院半年前にS状結腸捻転症を発症し, 手術施行後発熱を認め, 盲端と腹腔内との交通を確認した。長期の各種抗菌薬, ドレナージ施行も改善認めず, DRPによる直腸周囲炎と診断した。抗菌薬の感受性を調べるためBCプレート法を施行し, 結果に従い治療を選択しMDRPの陰性化を認めた。 (役割) 症例の検査法, 治療法等の検討を共同で行った。なお, 全体的に関わっており, 具体的な役割抽出は不可能である。田蔭 昌憲, 脇野 修, 菅野 義彦, 坂東 和香, 細谷 幸司, 井上 秀二, 徳山 博文, 吉田 理, 長谷川 直樹, 岩田 敏, 林 松彦, 林 晃一, 伊藤 裕
2. 口腔内レンサ球菌による多発性肝嚢胞感染をきたした維持透析多発性嚢胞腎患者の1例	共著	2015年11月	日本透析医学会雑誌Vol. 48 (2015) No. 11 p. 663-668	多発性嚢胞腎の肝嚢胞感染は通常, 経胆道感染であり, 腸内細菌および嫌気性菌が原因菌となることが多い。しかし, 多発性嚢胞腎患者の感染性肝嚢胞において, 通常的一般培養では検出できなかったが, 16S rRNA法により口腔内常在レンサ球菌の一種である <i>Streptococcus gordonii</i> が原因菌であると判明した症例を経験した。早期の経皮的ドレナージおよび8週間の経静脈的抗菌薬投与にて予後良好な経過を得た。また, 本患者では, 口腔内レンサ球菌が検出された原因として, 齲歯などの口腔内衛生環境の問題や穿刺時の感染予防策などの問題があった。 (役割) 症例の検査法, 治療法等の検討を共同で行った。なお, 全体的に関わっており, 具体的な役割抽出は不可能である。内木場 紗奈, 吉藤 歩, 細谷 幸司, 二木 功治, 田島 敬也, 小松 素明, 日比野 祐香, 立松 寛, 竜崎 崇和
3. 腹部CT画像上、極軽度の水腎症を認め、腎瘻造設によって腎機能改善したmalignant ureteral obstruction (MUO) の一例	共著	2016年1月	日本メディカルセンター社『臨床透析』	悪性腫瘍に伴う水腎症は腎後性急性腎不全の原因として重要である。画像所見上、極軽度の水腎症を呈し、無尿を認めた稀少な症例を経験したので経過と画像所見を提示し報告する。本症例では、杯拡張はごく軽度であり、画像上、この程度の水腎症により無尿でCre19mg/dlと高度な腎後性腎不全を来たすとは考えにくかった。尿管ステント留置、腎瘻造設に急激に尿量の回復、腎機能の回復を認めた。水腎症は、腎後性の急性腎不全の原因として重要な疾患であり、通常は画像検査にて比較的わかりやすい疾患である。 (役割) 筆頭著者として、治療方針の決定、経過の分析などを行い、全文を記載した。 細谷 幸司, 日比野 祐香, 小松 素明, 竜崎 崇和

<p>学術論文</p> <p>1. Rho-kinase inhibition ameliorates peritoneal fibrosis and angiogenesis in a rat model of peritoneal sclerosis. (Rhoキナーゼ阻害は、腹膜硬化症のラットモデルにおいて腹膜線維症および血管新生を改善する) (査読付)</p> <p>2. Rho and Rho-kinase activity in adipocytes contributes to a vicious cycle in obesity that may involve mechanical stretch. (脂肪細胞におけるRhoとRhoキナーゼ活性は、機械的ストレッチを含めて、肥満での悪循環に影響する。) (査読付)</p> <p>3. Role of mineralocorticoid receptor/Rho/Rho-kinase pathway in obesity-related renal injury. (肥満関連腎障害におけるミネラルコルチコイドレセプター/Rho/Rho-kinase pathwayの役割) (査読付)</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2011年9月</p> <p>2011年1月</p> <p>2012年8月</p>	<p>Nephrol Dial Transplant. 2011 Sep;26(9):2770-</p> <p>Sci Signal. 2011 Jan 25;4(157)</p> <p>Int J Obes (Lond). 2012 Aug;36(8):1062-71</p>	<p>腹膜線維症 (PF) と血管新生は、腹膜透析患者における腹膜機能の喪失につながる、典型的な形態学的変化である。低分子量Gタンパク質のRhoおよびその下流のエフェクターRhoキナーゼは、組織線維症の過程に関与することが示されている。この研究で、これらの変化の病因におけるRhoキナーゼの役割を調べた。その結果、Rhoキナーゼの活性化は、組織線維症および血管新生を含む複数の段階で、腹膜損傷に関与した。 (役割) 実験計画への助言、実験手技指導などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Washida N, Wakino S, Tonozuka Y, Homma K, Tokuyama H, Hara Y, Hasegawa K, Minakuchi H, Fujimura K, <u>Hosoya K</u>, Hayashi K, Itoh H.</p> <p>肥満の進展は、複数の機構を持っている。ここでは、機構の一つとして、グアノシントリRhoとそのエフェクターRhoキナーゼを介した、脂肪細胞のシグナル伝達を同定した。高脂肪食 (HFD) を与えられたマウスは、低脂肪食を与えられたマウスに比べ、脂肪組織のRhoキナーゼ活性増加を示した。Rhoキナーゼ阻害剤フェスジルによる治療は高脂肪食マウスにおける体重増加およびインスリン抵抗性を減弱した。Rho-Rhoキナーゼシグナル伝達の阻害は、肥満を悪化させるような、脂肪細胞のストレッチ、Rho-Rhoキナーゼシグナル伝達、および脂肪組織の炎症の悪循環を断ち切る治療戦略となりうる。 (役割) 研究構想に参加、共同で実験を遂行、掲載版への最終的な承認などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Hara Y, Wakino S, Tanabe Y, Saito M, Tokuyama H, Washida N, Tatematsu S, Yoshioka K, Homma K, Hasegawa K, Minakuchi H, Fujimura K, <u>Hosoya K</u>, Hayashi K, Nakayama K, Itoh H.</p> <p>C57BL/6Jマウスに高脂肪食および低脂肪食を与え、高脂肪食を与えられたマウスには、ミネラルコルチコイドレセプターアンタゴニストであるエプレレノンにより治療された。C57BL/6Jマウスにおいて、過度の脂質摂取は肥満と腎障害を引き起こし、これらの変化は強化ミネラルコルチコイド受容体/Rho/Rhoキナーゼ経路及び炎症過程により媒介される。腎臓組織とそれに続くRhoキナーゼ刺激におけるミネラルコルチコイド受容体の活性化は、血清アルドステロン濃度の上昇なしに肥満関連性腎症の増悪に影響する可能性を認めた。 (役割) 研究構想に参加、実験計画への助言、掲載版への最終的な承認などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Tokuyama H, Wakino S, Hara Y, Washida N, Fujimura K, <u>Hosoya K</u>, Yoshioka K, Hasegawa K, Minakuchi H, Homma K, Hayashi K, Itoh H.</p>
--	-------------------------------	--	---	--

<p>4. Renal tubular Sirt1 attenuates diabetic albuminuria by epigenetically suppressing Claudin-1 overexpression in podocytes. (腎尿細管 Sirt1はepigeneticallyにポドサイトのClaudin1過剰発現を抑制することにより糖尿病性アルブミン尿を改善する) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2013年11月</p>	<p>Nature Medicine. 2013 Nov;19(11):1496-504</p>	<p>Sirtuin1 (Sirt1)は、NAD(+)規定ジアセチル化酵素であり細胞や身体の代謝に多くの正の効果を示すことが知られており、腎皮質、髄質にて表現されている。それは糖尿病のような年齢関連疾患に対し、保護効果があることが知られている。近位尿細管のSirt1は尿アルブミンが低下することを、ストレプトゾシン誘発性または肥満糖尿病ラットにて発見した。Sirt1が糸球体近傍のnicotinamide mononucleotide (NMN)濃度の維持により、ポドサイトのClaudin1過剰発現を抑制することにより、糖尿病性の尿アルブミンに対し近位尿細管保護作用があり、ポドサイト機能に影響することを示した。 (役割) 研究構想に参加、共同で実験を遂行などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Hasegawa K, Wakino S, Simic P, Sakamaki Y, Minakuchi H, Fujimura K, <u>Hosoya K</u>, Komatsu M, Kaneko Y, Kanda T, Kubota E, Tokuyama H, Hayashi K, Guarente L, Itoh H.</p>
<p>5. The hydrolase DDAH2 enhances pancreatic insulin secretion by transcriptional regulation of secretagogin through a Sirt1-dependent mechanism in mice. (マウスにおいて、hydrolase DDAH2はSirt1依存性機構を通してsecretagogin転写規定により、膵インスリン分泌に影響する。) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2013年1月</p>	<p>FASEB J. 2013 Jun;27(6):2301-15</p>	<p>糖代謝におけるdimethylarginine dimethylaminohydrolase 2 (DDAH2)の役割はよく知られていない。DDAH2トランスジェニック(Tg)マウスでは、高脂肪食を摂らせた結果、野生型マウスに比べてより低い血糖およびより高いインスリン濃度を認めた。インスリン腹腔内注入試験や経口糖負荷試験により、Tgマウスではインスリン抵抗性の改善を認めた。DDAH2過剰表現は膵特異的Sirt1欠乏マウスにおいて、Glucose-stimulated insulin secretion (GSIS)を改善した。Sirt1/DDAH2/ secretagogin経路はGSISの規定するものであった。 (役割) 研究構想に参加、実験計画への助言、共同で実験を遂行などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Hasegawa K, Wakino S, Kimoto M, Minakuchi H, Fujimura K, <u>Hosoya K</u>, Komatsu M, Kaneko Y, Kanda T, Tokuyama H, Hayashi K, Itoh H.</p>
<p>6. Ghrelin protects against renal damages induced by angiotensin-II via an antioxidative stress mechanism in mice. (グレリンは、マウスの抗酸化ストレス機構を介してのアンジオテンシンIIにより誘導される腎障害から腎を保護する。) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2014年4月</p>	<p>PLoS One. 2014 Apr 18;9(4):e94373</p>	<p>我々は、消化管ペプチドであるグレリンによる腎保護効果を検討した。グレリンの日々の腹腔内注射により、継続的にアンジオテンシンII (AgII群)を発現するC57BL/6マウスにて、タンパク質の尿中排泄量と尿細管のマーカールによる評価において、腎損傷の改善を認めた。グレリン/GHSR(growth hormone secretagogue receptor)経路は腎のROSレベルの維持に重要な役割を演じる。 (役割) 研究構想に参加、共同で実験を遂行、掲載版への最終的な承認などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Fujimura K, Wakino S, Minakuchi H, Hasegawa K, <u>Hosoya K</u>, Komatsu M, Kaneko Y, Shinozuka K, Washida N, Kanda T, Tokuyama H, Hayashi K, Itoh H.</p>

<p>7. Insulin resistance in chronic kidney disease is ameliorated by spironolactone in rats and humans. (ラットおよびヒトでは、慢性腎臓病によるインスリン抵抗性はスピロノラクトンにより改善する) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年4月</p>	<p>Kidney Int. 2015 Apr;87(4):749-60.</p>	<p>慢性腎臓病(chronic kidney disease :CKD)における糖代謝異常及びインスリン抵抗性 (Insulin resistance:IR) の発症機序を明らかにした。臨床研究では、CKD患者においてアルドステロンがIRの発症に寄与し、基礎研究では、5/6腎摘、CKDモデルラットにおいてIRが生じ、その原因としてアルドステロン/mineralocorticoid receptor(MR)経路の活性化の関与を示した。更にこの活性化機序として、CKDの脂肪組織におけるアルドステロン産生が増加し、dimethylarginine dimethylaminohydrolase (DDAH)1および2の発現を減少させ、脂肪組織内のasymmetric dimethylarginine (ADMA)蓄積を引き起こし、Nitric Oxide (NO)量が減少することで、phosphoinositide 3-kinase (PI3-キナーゼ)の活性の低下が生じることを示した。また、抗アルドステロン薬投与がCKDにおけるIRを回復することを示した。 (役割)筆頭著者として研究計画の立案、データ収集と解釈、論文構成など研究構想に参加、実験の遂行、論文執筆など全体的に、中心として行った。 <u>Hosoya K</u>, Minakuchi H, Wakino S, Fujimura K, Hasegawa K, Komatsu M, Yoshifuji A, Futatsugi K, Shinozuka K, Washida N, Kanda T, Tokuyama H, Hayashi K, Itoh H.</p>
<p>8. Impact of Switching From Darbepoetin Alfa to Epoetin Beta Pegol on Iron Utilization and Blood Pressure in Peritoneal Dialysis Patients. (腹膜透析患者における、ダルベポエチンアルファからエポエチンベータペゴルへの切り替えによる鉄利用と血圧の影響) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年10月</p>	<p>Ther Apher Dial. 2015 Oct;19(5):450-6.</p>	<p>より長い半減期を有する新規赤血球生成刺激剤は、末期腎疾患を有する患者における貧血の治療のために開発された。この研究は、腹膜透析 (PD) 患者におけるダルベポエチンα (DA) と長時間作用型エポエチンベータペゴル (持続性エリスロポエチン受容体活性化剤、CERA) の有効性を29人のPD患者により評価した。PD患者では、CERAのより少ない頻度の注射および低用量により、DA療法によって達成されるものと同様のレベルでHgb維持が達成でき、鉄利用率と血圧減少効果も認めた。 (役割)研究構想に参加、実験計画への助言、実験手技指導などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Washida N, Inoue S, Kasai T, Shinozuka K, <u>Hosoya K</u>, Morimoto K, Wakino S, Hayashi K, Itoh H.</p>
<p>9. Impact of Peritoneal Dialysis Catheter Insertion by a Nephrologist: Results of a Questionnaire Survey of Patients and Nurses. (神経科医による腹膜透析カテーテル挿入の影響：患者と看護師のアンケート調査の結果。) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年4月</p>	<p>Ther Apher Dial. 2015 Oct;19(5):450-6</p>	<p>腹膜透析 (PD) は優れた透析方法であり、それは米国と日本では十分に活用されている。本研究では、腎代替療法の選択とPD合併症における効果を、患者および看護師の介入によりどのような結果をもたらしたかを評価した。PD治療専門看護師の約60%は介入により高いモチベーションを示し、患者、看護師、および医師の間での三者の連携により、腹膜炎の発生率やPD治療選択に良い効果を示した。 (役割)研究構想に参加、実験計画への助言、掲載版への最終的な承認などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Washida N, Aikawa K, Inoue S, Kasai T, Shinozuka K, Morimoto K, <u>Hosoya K</u>, Hayashi K, Itoh H.</p>

<p>10. EVALUATION OF DAY-BY-DAY BLOOD PRESSURE VARIABILITY IN CLINIC (DO WE STILL NEED STANDARD DEVIATION?). (クリニックによる日々の血圧変動評価IN DAY-BY-DAY血圧変動性の評価。(我々はまだ標準偏差が必要ですか?)) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年1月</p>	<p>J Hypertens. 2015 Jun;33 Suppl 1</p>	<p>血圧 (BP) の変動は、血圧自体、心臓血管疾患と相関する。クリニックにおいて血圧変動を評価するための簡単な方法は知られていない。血圧変動の指標として、標準偏差 (SD) と比較して、月の血圧の最大最小差 (MMD) の有用性を評価した。私たちは、ある月の日々の血圧変動性の指標として、MMDとSDは、非常に類似し、MMDを測定することにより、容易にSDを評価することができた。しかし、我々は、患者の月の測定回数に注意する必要がある。 (役割) 研究構想に参加、実験計画への助言、掲載版への最終的な承認などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Ryuzaki M, Nakamoto H, <u>Hosoya K</u>, Komatsu M, Hibino Y.</p>
<p>11. The role of adipose tissue asymmetric dimethylarginine/dimethylarginine dimethylaminohydrolase pathway in adipose tissue phenotype and metabolic abnormalities in subtotaly nephrectomized rats. (腎部分摘除ラットにおける脂肪組織表現型による脂肪組織アシンメトリックジメチルアルギニン/ジメチルアルギニン ジメチルアミノヒドロラーゼ経路と代謝異常の役割) (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2016年3月</p>	<p>Nephrol Dial Transplant. 2016 Mar;31(3):413-23. doi: 10.1093/ndt/gfv367. Epub 2015 Oct 28.</p>	<p>脂肪異常症表現型が早期CKDに認められる。これは脂肪組織萎縮、組織インスリン抵抗性、脂質異常症、異所性脂肪蓄積などがある。その表現型で、インスリン感受性に関与する二つの尿毒素、内因性一酸化窒素合成酵素であるアシンメトリックジメチルアルギニン (ADMA) とインドキル硫酸塩 (IS) について、腎摘ラット、3 T3L線維芽細胞、ADMA過剰表現型トランスジェニックマウスを使い調べた。早期CKDにおいて、脂肪組織のADMA/DDAH経路の調節異常は、異所性脂肪沈着を含む脂質異常様表現変化を引き起こす。(役割) 研究構想に参加、実験計画への助言、実験手技指導、共同で実験を遂行、掲載版への最終的な承認などを行った。なお、全体的に関わっており、具体的な役割抽出は不可能である。 Minakuchi H, Wakino S, <u>Hosoya K</u>, Sueyasu K, Hasegawa K, Shinozuka K, Yoshifuji A, Futatsugi K, Komatsu M, Kanda T, Tokuyama H, Hayashi K, Itoh H.</p>
<p>学術集会</p> <p>1. The Aberrant Temporal Changes in Blood Glucose Levels in CKD. (CKDにおける血糖日内変動の異常—CGMsを用いた検討)</p>	<p>—</p>	<p>2012年11月</p>	<p>American society of nephrology 2012 11</p>	<p>【目的】CKDでインスリン抵抗性(IR)が認められるが、血糖日内変動の詳細は不明である。近年、持続血糖測定装置(continuous glucose monitoring system:CGMs)により持続的な血糖測定が可能となった。今回、非糖尿病CKD患者での血糖日内変動を明らかにした。【結論】CKDでは非糖尿病であってもIRのため血糖日内変動が大きく間欠的な食後高血糖を認めた。そして、この食後高血糖はFFAと強い関連があった。つまり腎不全により脂質代謝系の異常が食後高血糖を引き起こす可能性を示唆した。そして、この” glucose spike” は心血管障害に寄与しうると考えられた。 (役割) 研究の構想構築、データ収集、解析、発表などを全体的に中心として行い、主演者として発表した。 <u>Koji Hosoya</u>, Akira Minaguchi, Naoki Washida, Hirohumi Tokuyama, Syu Wakino, Koichi hayashi, Hiroshi Ito</p>

2. 慢性腎臓病 (CKD) でのインスリン抵抗性におけるアルドステロンの役割	—	2013年5月	第56回日本腎臓学会学術総会	<p>CKDにおけるミネラルコルチコイドレセプター(MR)の活性化とそのインスリン抵抗性(IR)に対する影響について検討した。方法：5週齢SDラットにて、コントロール群(cont群)、5/6腎摘群(Nx群)、及び5/6腎摘+スピロラクトン投与群(Spi群)を作成比較検討し、3T3L1fibroblastを脂肪細胞に分化させアルドステロン投与を行うin vitroの検討も行った。結果：OGTT、IPTT検査はNx群で増悪しSpi群で改善した。脂肪組織においてインスリン投与後pAktの発現はNx群で低下しSpi群で回復し、肝、筋組織では変化を認めなかった。MR及びその下流のSGK1発現はNx群で上昇、Spi群で低下を認めた。尿毒物質ADMAは、脂肪組織においてNx群で上昇しSpi群で低下した。脂肪細胞においてアルドステロン投与によりADMA規定因子DDAHの発現低下を認めた。結論：CKDのIRに脂肪組織におけるMRの活性化およびADMAの上昇が関与することが示唆された。</p> <p>(役割) 研究の構想構築、データ収集、解析、発表などを全体的に中心として行い、主演者として発表した。</p> <p>細谷幸司、脇野修、水口斉、鷲田直輝、徳山博文、林晃一、伊藤裕</p>
3. 長期腹膜透析施行における腹膜機能の検討	—	2013年9月	第19回腹膜透析学会学術集会	<p>【背景】腹膜透析は末期腎不全患者の在宅治療に寄与している。一方で、腹膜透析治療の長期化に伴う被嚢性腹膜硬化症や尿毒症管理不良例の発生は、腹膜透析に対する信頼性を損なう。さらに、血液透析併用が保険適応となり、併用で長期に腹膜透析継続する例が散見されるが、その効果は未定である。【目的】当院における8年以上の長期腹膜透析患者(併用療法を含む)の腹膜機能検査の経年変化を検討する。【結論】中性液や血液透析併用により、10年以上腹膜機能(D/P Cr)が維持できることが示唆された。</p> <p>(役割) 研究の構想構築、データ収集、解析、発表などを全体的に中心として行い、主演者として発表した。</p> <p>細谷幸司、萩原あいか、立松覚、竜崎崇和</p>
4. Waldenström macroglobulinemiaに合併したFanconi症候群の5年間の病理比較の1例 (Pathology comparison for five years of the Fanconi syndrome which complicated to Waldenström macroglobulinemia)	—	2014年10月	第44回東部腎臓学術集会 ベルサール新宿グランドホテル (優秀演題賞受賞)	<p>2006年10月から蛋白尿、腎障害が出現し、2008年5月尿蛋白1.4 g/day、尿中BJPの排泄を認め、免疫電気泳動でIgMκ型M蛋白血症が認められ、骨髄生検でリンパ形質細胞を10%認めたためWaldenström macroglobulinemia (WM) と診断された。血中P 2.0 mg/dL、尿酸、K、Mg低下を認め、尿中P、尿酸、尿糖排泄上昇、尿酸クリアランス60.8 ml/minよりFanconi症候群と診断された。2008年及び2013年12月に腎生検施行されたが大きな変化は認めず、尿細管上皮には散在性ではあるが針様の封入体を認め、今回のFanconi症候群の責任病変と考えられた。尿細管に病変の主座がある稀な一例を経験した。</p> <p>(役割) 治療方針、病態分析、講演の構想構築、データ収集、解析、発表などを全体的に中心として行い、主演者として発表した。</p> <p>細谷幸司、中嶋賢人、上田尚子、井上博之、平尾磨樹、塚田唯子、立松覚、菊池隆秀、渡辺健太郎、橋口明典、竜崎崇和</p>

5. CAPD腹膜炎の治療経過中にPDカテーテル抜去部からのリークをきたした一例	—	2014年9月	第20回腹膜透析学会 学術集会	<p>糖尿病性腎症により平成26年1月から腹膜透析(PD)を導入した。同6月にPDトンネル感染に対し、左側腹部のPDカテーテルを抜去、右側腹部へ再度カテーテルを挿入しPDを継続していたが、同12月CAPD腹膜炎にて入院した。CeftazidimeとCefazolinの腹腔内投与を開始、炎症反応は改善傾向だったが、第9病日に左下腹部腫脹が出現、また排液困難を認めた。同日PDを中止、血液透析(HD)を実施した。腹腔内造影によるCTを施行、PDカテーテル抜去部からのリークと診断した。PD注流量を1300 mlと減らし、HDとのハイブリッド療法で対応、現在のところ経過良好である。(役割)治療方針、病態分析、講演の構想構築、データ収集、解析、発表などを全体的に行ったが、具体的な役割抽出は不可能である。 林勇海、細谷幸司、日比野祐香、小松素明、立松覚、竜崎崇和</p>
6. シスタチンCを用いたeGFRの検討。CreによるGFR, Ccrとの関連について(Consideration of eGFR using cystatin C. About the relation with eGFR using cystatin C and Ccr.)	—	2015年9月	第45回東部腎臓学会学術集会	<p>【背景】シスタチンCは食事や筋肉量、運動の影響を受けず、糸球体に障害があると血中濃度が上昇するため、早期の腎機能指標として注目されている。我々はシスタチンCより推定されるGFR (eGFRcys) と従来のeGFRおよびクレアチニンクリアランスより推定されるGFR(eGFRccr)を比較、検討した。【結果】患者のeGFRcys/eGFRは1.43±0.31であり、eGFRccr/eGFRは1.09±0.22であり、それぞれ正の相関を示した。【考察】日本腎臓学会でもeGFRcysの有効性が提唱されているが、eGFRcysはeGFRに対して、1.43倍、ccrはeGFRに対して1.09倍と高値を示した。(役割)研究の構想構築、データ収集、解析、発表などを全体的に中心として行い、主演者として発表した。 細谷幸司、吉藤歩、日比野祐香、小松素明、立松覚、竜崎崇和</p>
7. A CASE OF LEFT PLEURAL EFFUSION BY PLEUROPERITONEAL COMMUNICATION THROUGH PERICARDIAL CAVITY AFTER CARDIAC SURGERY(心臓手術後に心膜腔を通じて横隔膜交通症から左胸水貯留をきたした一例)	—	2015年11月	International Society for Peritoneal Dialysis	<p>25歳時より糖尿病指摘、53歳時、心筋梗塞CABG治療、腎機能増悪が進行し、腹膜透析を導入された。経過良好のため11月30日に退院となったが、1週間で体重が6kg増加し精査目的で再入院となった。腹膜透析導入後より左片側性の胸水貯留、体重増加を認めた。99mTc-MAAを用いた胸腹腔シンチの結果、腹腔から心嚢を経て左胸水となる所見を認め、CABG術後のために生じている可能性が考えられた。血液透析移行後に、胸水は消失し順調に経過した。【考察】CABG等の心臓手術後には心嚢(縦隔)を介しての胸水貯留をきたす可能性がある。(役割)治療方針、病態分析、講演の構想構築、データ収集、解析、発表などを全体的に行ったが、具体的な役割抽出は不可能である。 Ryuzaki M, Nakamoto H, Hosoya K, Komatsu M, Hibino Y.</p>

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 真鍋 晋
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系、医歯薬学分野、外科系臨床医学		心臓血管外科学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 びまん性冠動脈病変の臨床	共著	平成22年11月	メディカルビュー社	虚血性心疾患の中でも、びまん性に狭窄病変がある場合の冠動脈病変の診断、治療を解説した参考書。手術を施行した場合の術後管理の実際を解説した。10章 びまん性冠動脈病変の術後管理 p 120-127真鍋 晋、高梨秀一朗
2 心エコー図 知ってるつもりの基本と知識	共著	平成23年2月	メディカルビュー社	臨床検査技師、循環器内科医を主な対象とした初学者向けの心エコーの参考書。冠動脈バイパス術の一般的な方法について解説を行った。9章4節 冠動脈バイパス術 p308-313 真鍋 晋、高梨秀一郎
3 EBM循環器疾患の治療	共著	平成24年3月	中外医学社	毎年更新される広く様々な循環器疾患を扱う参考書。最新のエビデンスを解説しながらトピックを解説する。左主幹部病変の治療について解説を行った。1章23節 左主幹部病変の最適な治療は何か?本当にハートチームは作れるか? p113-118 真鍋 晋、高梨秀一郎
4 運動器の痛みをとる・やわらげる	共著	平成24年4月	メジカルビュー社	一般臨床医(主に整形外科)を対象としたさまざまな場面での痛みに関する、診断、治療を解説した参考書。循環器領域の痛みを見逃さないための方法を解説している。6章 46節 心臓血管外科疾患を見逃さないコツはなんですか? p235-237 (編) 宗圓 聡、紺野慎一 (著) 真鍋 晋、他
5 循環器急性期診療 Critical Care Cardiology	共著	平成27年6月	メディカルサイエンスインターナショナル社	主に循環器内科医を対象とした循環器疾患の急性期治療に関する教科書。感染性心内膜炎の診断、手術適応、タイミングの解説を行った。6章 急性心内膜炎 p737-746 (編) 香坂 俊 (著) 真鍋 晋、他
6 心臓血管外科手術 周術期管理のすべて	共著	平成29年3月	メジカルビュー社	心臓血管外科チームを対象とした周術期管理の解説書。その中でも僧帽弁形成術を行い術後にSAM(僧帽弁前方運動)に陥った場合の対処法の解説を行っている。one point advice @SAMを防ぐには? p334-339 (編) 國原 孝、 (著) 真鍋 晋、他
7 ザ・ベスト・トリートメント! 弁膜症 ガイドラインを深読み・先読みする	共著	平成29年3月	文光堂	循環器内科医を対象としたさまざまな弁膜症の解説書。三尖弁閉鎖不全症の手術適応と手術の実際を解説した。4章2節 他の心臓手術に合わせたTRの手術適応と術式 p119-131 (編) 伊藤 浩、 (著) 真鍋 晋、他

8 循環器診療のギモン、百戦錬磨のエキスペートが答えます！	共著	平成30年6月	羊土社	初期研修医を対象とした循環器診療の解説書。急性大動脈解離の診断のコツ、診療の進め方、手術の実際を解説している。1章9節 急性大動脈症候群の最新Evidence based Diagnosisを教えてください。 p701-706 (編) 永井利幸、 (著) 真鍋 晋、他
9 心臓麻酔デビュー	共著	平成30年8月	メディカルサイエンスインターナショナル社	麻酔科医向けの心臓麻酔の解説書。慢性心房細動に対して行う、メイズ手術の原理、方法や麻酔時の注意点を解説している。11章 メイズ手術p97-106 (編) 坪川恒久、 (著) 真鍋 晋、他
(学術論文) 1 重複大動脈瘤手術症例の検討 (査読付)	共著	平成9年5月	日心外会誌 1997;26:293-7	大動脈瘤が複数存在する患者の外科治療を後方視的に分析した。手術の順序、治療成績、ピットフォールを検討した。 分担：筆頭著者 真鍋 晋、長岡秀郎、印南隆一、ほか
2 慢性透析患者に対する心臓手術症例の検討 (査読付)	共著	平成14年1月	日心外会誌 2002;31:18-23	慢性透析患者の心臓手術を後方視的に分析した。周術期の透析管理や術後の合併症を検討した。 分担：筆頭著者 真鍋 晋、田中啓之、恵木康壮、ほか
3 Measurement of Ulnar flow is helpful in predicting ischemia after radial artery harvest. (査読付) 橈骨同位採取後の虚血予測に尺骨動脈血流の測定が有用である。	共著	平成14年2月	Thorac Cardiovasc Surg 2002;50:325-328	冠動脈バイパス術で橈骨動脈を採取する場合に、術後の手指虚血の回避のために、術前にエコーを用いて尺骨動脈血流を計測しておくことが有用であることを報告した。 分担：筆頭著者 S Manabe, N Tabuchi, M Toyama, et al.
4 虚血性心疾患を合併した腹部大動脈瘤症例の外科的治療経験 (査読付)	共著	平成15年1月	日心外会誌 2003;32:1-5	虚血性心疾患が合併症している腹部大動脈瘤の手術症例を後方視的に分析した。大動脈手術前の冠血行再建の実際や、オフポンプ冠動脈バイパスによる同時手術の有用性を検討した。 分担：筆頭著者 真鍋 晋、外山雅章、河瀬 勇、ほか
5 Oxygen pressure measurement during grip exercise reveals exercise intolerance after radial harvest. (査読付) 把握試験中の酸素分圧測定が橈骨動脈採取後の運動不耐能を明らかにする	共著	平成16年6月	Ann Thorac Surg 2004;77:2066-70	橈骨動脈を採取した場合手指壊死など重度の虚血が生じることは稀であるが、機能的な評価は行われていなかった。把握試験を行いつつ指酸素分圧を計測することで、非採取側と比べて、採取側では運動時の酸素分圧の低下がみられた。 分担：筆頭著者 S Manabe, N Tabuchi, M Toyama, et al.
6 Effects of the postoperative administration of diltiazem on renal function after coronary artery bypass grafting. (査読付) 冠動脈バイパス術後のジルチアゼム投与が腎機能に及ぼす影響	共著	平成17年3月	Ann Thorac Surg 2005;79:831-6	冠動脈バイパス術後にジルチアゼムを投与すると腎機能が低下すると報告されていた。そこで冠動脈バイパス術後6時間毎にクレアチニンクリアランスを計測し、ジルチアゼム投与群と非投与群を比較したところ、腎機能への影響はほとんどみられなかった。 分担：筆頭著者 S Manabe, H Tanaka, T Yoshizaki, et al.
7 Physiological comparison of off-pump and on-pump coronary artery bypass grafting in patients on chronic hemodialysis. (査読付) 慢性透析患者に対するオフポンプバイパスとオンポンプバイパスの生理学的比較	共著	平成18年1月	Jpn J Thorac Cardiovasc Surg 2006;54:3-10	冠動脈バイパス術を行った慢性透析患者を後方視的に分析した。オフポンプバイパスとオンポンプバイパスの間で比較検討し、オフポンプバイパスのほうが術後の呼吸機能が良好であった。 分担：筆頭著者 S Manabe, H Arai, H Tanaka, et al.

8 Influence of carotid artery stenosis on stroke in patients undergoing off-pump coronary artery bypass grafting. (査読付) オフポンプ冠動脈バイパス術における頸動脈狭窄が脳梗塞に及ぼす影響	共著	平成20年9月	Euro J Cardiothorac Surg 2008;34:1005-8	頸動脈に狭窄がありながら、オフポンプ冠動脈バイパス術を来なった49例を後方視的に分析した。脳梗塞を発症した症例はみられなかった。 分担：筆頭著者 S Manabe, T Shimokawa, T Fukui, et al.
9 Coronary artery bypass surgery versus percutaneous coronary artery intervention in patients on chronic hemodialysis: Does a drug-eluting stent have an impact on clinical outcome? (査読付) 慢性透析患者におけるCABGとPCIの比較	共著	平成21年5月	J Card Surg 2009;24:234-9	冠血行再建を行った慢性透析患者47例を後方視的に分析した。外科手術とカテーテル治療を比較したところ、あきらかにカテーテル治療群の有害事象発症が高かった。 分担：筆頭著者 S Manabe, T Shimokawa, T Fukui, et al.
10 Impact of proximal anastomosis procedure on stroke in off-pump coronary artery bypass grafting. (査読付) オフポンプ冠動脈バイパス術における中枢吻合手技が脳梗塞に及ぼす影響	共著	平成21年11月	J Card Surg 2009;24:644-49	オフポンプ冠動脈バイパス術を行った535例を後方視的に分析した。中枢吻合方法を、①克蘭プ下、②デバイス下、③中枢吻合無しの3群に分け、脳梗塞発症例を比較したが、いずれもの群も脳梗塞発症はまれで、有意差はみられなかった。 分担：筆頭著者 S Manabe, T Fukui, K Miyajima, et al.
11 Arterial graft deterioration one year after coronary artery bypass grafting. (査読付) オフポンプ冠動脈バイパス術1年後の動脈グラフトの劣化	共著	平成22年3月	J Thorac Cardiovasc Surg 2010;140:1306-11	動脈グラフトが、経年的に狭小化したり、閉塞し、機能しなくなることが知られており、その頻度や危険因子を分析した。冠動脈バイパス術を行い、術直後グラフト開存が確認されているグラフトを対象に、1年後の開存率を調査した。約10%にグラフトの劣化が認められた。 分担：筆頭著者 S Manabe, T Fukui, M Tabata, et al.
12 Increased graft occlusion or string sign in composite arterial grafting for mildly stenosed target vessels. (査読付) 軽度狭窄病変に対するコンポジットグラフトの使用は、グラフト閉塞やストリングサインを増加させる	共著	平成22年3月	Ann Thorac Surg 2010;89:683-8	複数のグラフトを組み合わせて、複数個所に吻合を行うコンポジットグラフトの開存率を調査した。特に標的冠動脈の狭窄が軽度である場合に、開存率が著しく悪くなることを発表した。 分担：筆頭著者 S Manabe, T Fukui, T Shimokawa, et al.
13 Impact of papillary muscle approximation on mitral valve configuration in the surgical correction of ischemic mitral regurgitation. (査読付) 虚血性僧帽弁逆流の外科的矯正において、乳頭筋併置法が僧帽弁形態に及ぼす影響	共著	平成24年4月	Thorac Cardiovasc Surg 2012;60:269-274	虚血性僧帽弁閉鎖不全症の外科治療において、従来のリングによる弁輪形成に加え、乳頭筋併置法を追加した場合に、術後僧帽弁はどのような形態変化を伴うかを心エコーを用いて分析した。その結果、形態変化はわずかにすぎず、あまり治療効果が期待できないことを明らかにした。 分担：筆頭著者 S Manabe, T Shimokawa, T Fukui, et al.
14 Morphological analysis of systolic anterior motion after mitral valve repair. (査読付) 僧帽弁形成術後SAMの形態的分析	共著	平成24年8月	Interactive Cardiovascular and Thoracic Surg, 2012;15:235-9	僧帽弁前方運動(SAM)は、僧帽弁が前方に移動し、僧帽弁逆流や左室流出路障害に陥る病態であり、僧帽弁形成術後に発生することが知られている。SAMを発症した僧帽弁の形態にどのような特徴があるかを、心エコーを用いて評価した。 分担：筆頭著者 S Manabe, H. Kasegawa, T. Shimokawa, et al.

15 Influence of left ventricular function on development of systolic anterior motion after mitral valve repair. (査読付) 僧帽弁形成術後SAM発生における左心機能が及ぼす影響	共著	平成25年8月	J Thorac Cardiovasc Surg 2013;146:291-5	僧帽弁形成術後にSAMを発症する危険因子を後方視的に分析した。その結果、術前の左室が小さく、壁運動の良好なものほど、術後にSAMを発症しやすいことが明らかとなった。 分担：筆頭著者 S Manabe, H Kasegawa, T Fukui, et al.
16 Do semi-rigid prosthetic rings affect left ventricular function after mitral valve repair? (査読付) セミリジッドリングは僧帽弁形成術後の左室機能に影響を与えるか?	共著	平成25年8月	Circ J 2013;77:2038-42	僧帽弁形成術に用いる人工弁輪には柔らかいものと、一部硬いもの(セミリジッドリング)がある。リングの硬さが術後の左室機能に影響があるかを、後方視的に分析した。 分担：筆頭著者 S Manabe, H Kasegawa, T Fukui, et al.
(その他)				
1 総説 慢性透析患者の冠血行再建	共著	平成12年9月	胸部外科 2000;53:825-30	慢性透析患者の虚血性心疾患における診断、治療、特に冠動脈バイパス術の治療成績をまとめた。真鍋 晋、砂盛 誠、坂本 徹、ほか
2 review Hand circulation after radial artery harvest for coronary artery bypass grafting. (総説 冠動脈バイパス術の橈骨動脈採取後の手指虚血)	共著	平成17年6月	J Med Dent Sci 2005;53:101-107	冠動脈バイパス術で橈骨動脈をグラフト血管として採取することがある。この場合の手指虚血発症の実際や予防のためのスクリーニング方法をまとめた。S Manabe, N Tabuchi, H Tanaka, et al.
3 review Radial artery graft for coronary artery bypass surgery: Biological characteristics and clinical outcome. (総説 冠動脈バイパス術における橈骨動脈グラフト 生物学的特徴と臨床成績)	共著	平成18年1月	J Card Surg 2006;21:102-114	冠動脈バイパス術で橈骨動脈をグラフト血管として使用することがある。手指虚血予防のためのスクリーニング、グラフトスバズム予防のための治療、臨床成績、開存率をまとめた。S Manabe, M Sunamori.
4 総説 糖尿病に対する冠血行再建療法	共著	平成20年10月	冠疾患誌 2008;14:266-72	依頼原稿。糖尿病患者の虚血性心疾患の特徴とカテーテル冠動脈形成術と冠動脈バイパス術の比較、冠動脈バイパス術の治療成績をまとめた。真鍋 晋、高梨秀一郎
5 高齢者に対する冠動脈バイパス術	共著	平成22年9月	日心外会誌 2010;39:235-41	依頼原稿。高齢者の冠動脈バイパス術の特徴や実際を過去の報告を基にまとめた。真鍋 晋、高梨秀一郎
6 冠動脈バイパス術の周術期脳梗塞	共著	平成23年6月	冠疾患誌 2011;17:160-164	依頼原稿。冠動脈バイパス術では1%程度、周術期に脳梗塞を発症することがある。そのメカニズム、予防法、治療方針について過去の報告をもとにまとめた。真鍋 晋、高梨秀一郎
7 インターベンション医と外科医のコラボレーション：ハートチームの概念とPCIの適応	共著	平成23年9月	Coronary Intervention 2011;7:77-81	依頼原稿。循環器治療を内科医、外科医が協力しハートチームとして診療することが注目されている。ハートチーム運営の実際をまとめている。真鍋 晋、高梨秀一郎
8 胸痛の診断は時間軸で考える。外科医にはいつコンサルトするべきか?	共著	平成26年9月	レジデントノート 2014; 16: 1695-1703	依頼原稿。胸痛を主訴とした疾患は、特に救急医療の場面では、急を要することが多い。こうした患者に対する具体的な管理プロトコルを研修医にも理解できるよう平易に解説している。真鍋 晋、他
9 特集CABGを科学する。コンボジットグラフトは有効な治療戦略になり得るか?	共著	平成26年11月	呼吸と循環 2014; 62: 1033-1039	依頼原稿。冠動脈バイパス術では複数のグラフト血管を縫合し、複数個所にバイパスを行うコンボジットグラフトが使用されている。コンボジットグラフト使用の実際やその注意点をまとめている。真鍋 晋、他

10 外科治療における心エコーの役割 外科医が知りたい ASのポイント なぜ？どうして？	共著	平成27年9月	心エコー 2015 ; 16 : 882-886	依頼原稿. 臨床検査技師、若手循環器内科医を対象に書かれている。大動脈弁狭窄症の術前診断の実際を、外科医が手術するうえで必要な情報という観点からまとめている。真鍋 晋、他
11 内科医に必要な心臓外科手術の知識 SAMのリスクファクターとは？	共著	平成27年10月	Heart View 2015 ; 19 : 1125-1131	依頼原稿. 僧帽弁形成術後にSAM(僧帽弁前方運動)が発症するメカニズム、対処方法をまとめている。真鍋 晋、他
12 特集心臓血管外科 術式別に学ぶ心臓血管手術：弁膜症と不整脈 僧帽弁手術	共著	平成27年10月	Intensivist 2015;7:733-743	依頼原稿. 集中治療医を対象としている。僧帽弁手術を行う際ICUでどのような管理を行うのがよいか、どのような合併症がおこりうるかを解説している。真鍋 晋、他
13 特集心臓血管外科 術式別に学ぶ心臓血管手術：弁膜症と不整脈 感染性心内膜症に対する手術適応とタイミング	共著	平成27年10月	Intensivist 2015;7:765-774	依頼原稿. 集中治療医を対象としている。感染性心内膜炎治療の実際。特に手術の抵抗やそのタイミングについて、過去の報告をもとにまとめている。真鍋 晋、他
14 三尖弁と右室機能 右室と三尖弁の解剖	共著	平成28年3月	心エコー 2016 ; 17 : 198-205	依頼原稿. 臨床検査技師、循環器内科医を主な対象としている。右室の解剖、三尖弁の解剖、その機能や生理学的特性をわかりやすく解説している。真鍋 晋、他
15 弁膜症 現在使われている主な人工弁の種類と選択基準	共著	平成29年12月	Medical Practice 文光堂 2017;34:2006-12	依頼原稿. 現在人工弁には機械弁と生体弁の2種類が使用されている。それぞれの特徴や使用方法をまとめている。真鍋 晋、他
16 完全保存版 人工弁のすべて 人工弁選択のトレンド	共著	平成29年3月	心エコー 2017;18:204-213	依頼原稿. 現在人工弁には機械弁と生体弁の2種類が使用されている。それぞれの特徴や使用方法をまとめている。真鍋 晋、他
17 ASとARを見直す 大動脈弁の解剖	共著	平成29年9月	心エコー 2017;18:830-837	依頼原稿. 臨床検査技師、循環器内科医を主な対象としている。大動脈弁の解剖や生理学をわかりやすく解説している。真鍋 晋、他
18 Management of systolic anterior motion of the mitral valve: A mechanism-based approach. (査読付き) 僧帽弁収縮期前方運動の管理：メカニズムに基づいたアプローチ	共著	平成30年7月	Gen Thora Cardiovasc Surg. 2018;66:379-389	依頼原稿. SAMは様々な疾患で見られ、そのメカニズムや危険因子、治療法に関する報告をまとめた。S. Manabe, H. Kasegawa, H. Arai, S. Takanashi.
19 総おさらい！知っておきたい心臓の解剖 5心膜の解剖	共著	平成31年2月	Heart View メジカルビュー社2019;23:32-35	依頼原稿. 主に循環器内科医を対象としている。解剖の特集号で心膜の解剖を詳しく解説している。真鍋 晋、他
20 総おさらい！知っておきたい心臓の解剖 2半月弁・房室弁	共著	平成31年2月	Heart View メジカルビュー社2019;23:1-17	依頼原稿. 主に循環器内科医を対象としている。解剖の特集号で心臓弁の解剖を詳しく解説している。真鍋 晋、他
21 まるわかり肺高血圧と右心機能 右室の解剖・構造を理解する	共著	令和元年10月	心エコー 文光堂 2019;20:956-962	依頼原稿. 臨床検査技師、若手循環器内科医を対象に書かれている。右心室の解剖と構造を解説している。真鍋 晋、他
22 デキル内科医のコンサルトー専門医が教える隠れたエッセンスー 急性大動脈解離を疑う場合	共著	令和2年4月	medicina 2020;57:714-7	依頼原稿. 一般医師むけの雑誌。専門領域外の医師が初診を行う際のコツを、各専門医が解説している。急性大動脈解離の診断法を解説した。真鍋 晋、他

教 育 研 究 業 績 書					
				氏名	増淵 達夫
研 究 分 野			研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学分野 頭頸部外科学			(A)臨床薬学、(C)医療薬剤学、(D)医薬品情報・安全性学、 (F)薬剤経済学、(J)病院薬局・保険薬局管理学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要	
(著書) 1 【耳鼻咽喉科領域における難治性疾患】 甲状腺未分化癌	単著	平成17年9月	JOHNS 21巻9号 Page1407-1410	甲状腺未分化癌は、濾胞上皮由来の悪性腫瘍で、きわめて予後不良である。急激に発症、急速に増大し、全身化する。分化癌の診断で手術された摘出標本中に少量の未分化癌成分を認めるような症例では長期生存する例がある。手術、放射線外照射、化学療法を適宜組み合わせるが行うが、奏効率は低い。緩和ケア主体の治療がQOL維持の面から推奨される場合もある。	
(学術論文) 1 Clinicopathological significance of androgen receptor, HER2, Ki-67 and EGFR expressions in salivary duct carcinoma (唾液腺導管癌におけるアンドロゲン受容体、HER2、Ki-67、及びEGFRの発現に関する臨床病理学的検討) (査読付)	単著	平成27年2月	International journal of clinical oncology 20: 35. doi:10.1007/s10147-014-0674-6	唾液腺導管癌の組織におけるアンドロゲン受容体、上皮成長因子受容体、Ki-67の発現を調べ、予後との関連を検討した。本研究はこれらの因子が予後予測因子であることを示した初の報告である。また、乳癌のサブタイプ分類SDCを5つのサブタイプに分類することを試みた。Ki-67, AR, HER2, EGFRのうち少なくとも1つの発現を認めた症例は90%以上であり、これらを標的とした分子標的治療薬や内分泌療法が有用である可能性が示され、SDCの全身的な治療法の選択に際してサブタイプ分類を用いた治療の個別化が有用となる可能性が示唆された。	
(その他) 1 前側方喉頭垂直部分切除術を施行した喉頭癌74例の臨床的検討 根治照射後救済手術としての有用性	共著	平成19年8月	日本耳鼻咽喉科学会会報 110巻8号 Page571-580	FLPVLを施行した74例について、喉頭機能の回復および創傷治癒の経過と腫瘍制御の面から検討した。退院後の合併症の有意な増加と、創部完全治癒期間に有意な延長を認めたが、入院中の合併症、経鼻栄養チューブ留置期間、気管孔完全閉鎖期間、入院期間に差は認めなかった。拡大切除の群では標準切除の群に比べて気管孔完全閉鎖期間と、入院期間が有意な延長を認めたが、MPTは有意に良好であった。(三浦弘規 増淵達夫：臨床的側面からの共著であり、明確な区分けによる抽出が困難)	
2 頭蓋底・顔面深部へのアプローチと再建 顔面神経・下顎骨を保存する側頭下窩・中頭蓋底へのアプローチ	共著	平成20年10月	頭頸部癌 34巻3号 Page265-269	副咽頭間隙腫瘍に対して、経外側頸部切開での剥離・摘出を基本としているが、腫瘍の頭側である頭蓋底面の操作は盲目的にならざるを得ず、さらに上方に中頭蓋底骨を巻き込んでいたり、側頭下窩にひろく大きな病変においては、術中温存する顔面神経のため、十分な視野を得られないことが問題であった。我々は口腔よりの経側粘膜炎切開、あるいは冠状皮膚切開から経側頭開頭のアプローチを追加することで顔面皮切を回避し、顔面神経、頬骨弓、下顎骨を温存	

3 中咽頭前壁癌に対する放射線同時併用超選択的動注化学療法	共著	平成21年4月	頭頸部癌 35巻1号 Page15-20	した切除を心掛けている。(鎌田信悦 増淵達夫: 臨床的側面からの共著であり、明確な区分わけによる抽出が困難) 舌根癌症例に対する持続的超選択的動注化学療法の初回治療効果について報告する。対象は舌根部扁平上皮癌新鮮例8例である。浅側頭動脈よりカテーテルを目的の血管に超選択的に挿入し、持続的に動注した。薬剤は、CDDP、DOC、PEPを少量持続動注し、5-FU静注、又はTS-1内服を同時併用した。8例全例で原発巣、頸部リンパ節ともCRを得られた。経過観察期間は8~26ヵ月で、全例無病生存中である。有害事象としてはGrade 3の口内炎が5例、疼痛が4例、白血球減少が3例に見られた。その他にGrade 3以上の副反応は見られなかった。(多田雄一郎 増淵達夫: 臨床的側面からの共著であり、明確な区分わけによる抽出が困難)
4 遊離皮弁再建後合併症とその対応 遊離皮弁再建術後の合併症とその対応 瘻孔形成	共著	平成22年12月	頭頸部癌 36巻4号 Page400-405	当センターで5年間に経験した遊離皮弁再建術321例をretrospectiveに検討した。結果: 瘻孔が先行した皮弁全壊死、頸動脈破裂の症例はなかった。1例を除き全例保存的対応で救済し得た。閉鎖まで6週以上を要したのは、咽頭皮膚瘻作成、早期再発あるいは術後放射線治療を優先した計3症例であった。結果: 遊離皮弁再建術後の瘻孔の救済には、積極的手術は通常必要なく的確なドレナージによる保存的対応で充分である。(三浦弘規 増淵達夫: 臨床的側面からの共著であり、明確な区分わけによる抽出が困難)
5 頭頸部癌の化学放射線療法に伴う口腔粘膜炎予防に関する検討	共著	平成23年10月	癌と化学療法 38巻10号 Page1647-1651	頭頸部癌の化学放射線療法では、有害事象として口腔粘膜炎が発生し、苦痛を伴うことがある。さらに口腔粘膜炎は経口摂取困難による栄養低下や栄養障害に起因する合併症の併発による在院期間の延長につながる。今回、口腔粘膜炎に有効であるとされるレバミピド液(R液)またはボラブレジンク-アルギン酸Na液(P-A液)による含嗽を行い、対象群であるアズレンスルホン酸Na含嗽(S液)との評価を行った。(登坂千聖 増淵達夫: 臨床的側面からの共著であり、明確な区分わけによる抽出が困難)
6 側頭骨垂全摘術におけるDiamond Threadwire Sawの使用経験	共著	平成23年11月	頭頸部癌 37巻4号 Page520-523	側頭骨垂全摘術での錐体尖部の骨切りでは、脳、内頸動静脈、S状静脈洞、脳神経などの周囲重要器官にたいして細心の注意を要し、もっとも経験と技量が問われる最重要ポイントである。われわれは、この操作に線鋸を用いている。この骨切りの操作は容易で、安全性が高く手術時間を短縮することができた。また切除ライン確保のための乳突洞削開を必要としないため、腫瘍あるいは細菌の播種の予防にも有用と考えられた。(三浦弘規 増淵達夫: 臨床的側面からの共著であり、明確な区分わけによる抽出が困難)
7. 下咽頭喉頭全摘頭部食道切除における気管傍郭清の工夫 頭部気管を栄養する血管系の温存と気管孔の状態について	共著	平成24年2月	頭頸部外科 21巻3号 Page255-258	下咽頭喉頭全摘頭部食道切除(咽喉食摘術)に施行される気管傍の郭清では、気管軟骨壊死をおこさないように、気管の虚血には細心の注意を払う必要がある。われわれは下甲状腺動脈から、あるいは上甲状腺動脈から甲状腺を介した気管への血流の、左右4系列いずれかを温存することをこころがけている。この手技によって郭清の質を落とすことなく、安全な気管孔の作製をすることが両立しえた。(三浦弘規 増淵達夫: 臨床的側面からの共著であり、明確な

<p>8 .Provox2による代用音声をより明瞭にする発声方法の一工夫</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年2月</p>	<p>頭頸部外科 21巻3号 Page259-264</p>	<p>公・臨床的側面からの共著のため、明確な区分けによる抽出が困難)</p> <p>Provox2による代用音声をより明瞭にする発声方法の一工夫について報告する。対象は遊離空腸再建を施行された2例で、異なる3パターンの発声方法で会話能力の評価、空気力学的パラメーター、発声時内視鏡所見について比較検討し、日常生活の使用満足度についての聴取も行った。3パターンの中で今回報告する新発声法で会話能力の評価、声の強さ、呼気流率が向上しており、日常生活上での満足度も高かった。(石川幸伸 増淵達夫：臨床的側面からの共著であり、明確な区分けによる抽出が困難)</p>
<p>9 副咽頭間隙腫瘍に対しナビゲーションシステム下に穿刺吸引細胞診を施行した症例</p>	<p>共著</p>	<p>平成24年4月</p>	<p>頭頸部外科 38巻1号 Page60-63</p>	<p>今回我々は副咽頭間隙腫瘍に対してナビゲーションシステムを用いてFNAを施行したので報告する。ナビゲーションシステム下のFNAの特徴として、腫瘍内の穿刺針をモニターで視認しながらFNAを施行できるため正診率の増加が予測される。また、ナビゲーション用CTを造影することで大血管の損傷を避けることができる。しかし、神経損傷のリスクを回避することはできない。(岡本伊作 増淵達夫：臨床的側面からの共著であり、明確な区分けによる抽出が困難)</p>
<p>10 副咽頭間隙腫瘍76例の発生部位と病理組織の検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成25年3月</p>	<p>日本耳鼻咽喉科学会会報 116巻4号 Page540</p>	<p>副咽頭間隙腫瘍76例を経験した。病理組織学的診断の内訳は良性腫瘍が69例(90.8%)、悪性腫瘍が7例(9.2%)であった。良性腫瘍では神経鞘腫32例(42.1%)と多形腺腫28例(36.8%)で大部分を占めていた。多形腺腫は茎突前区由来が26例(93.8%)、神経鞘腫は茎突後区由来が28例(87.5%)、悪性腫瘍に関しては茎突前区由来が7例(100%)であった。術前FNAを施行している症例は55例で正診率は39例/55例(70.9%)であった。術前画像診断は病理組織を予測する上で非常に有用であると思われた。(岡本伊作 増淵達夫：臨床的側面からの共著であり、明確な区分けによる抽出が困難)</p>
<p>11 当院における鼻腔・篩骨洞悪性腫瘍の検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成25年4月</p>	<p>頭頸部癌 39巻1号 Page21-26</p>	<p>目的:鼻腔・篩骨洞の悪性腫瘍の現状を理解する。対象と方法:国際医療福祉大学三田病院頭頸部腫瘍センターを受診された鼻腔・篩骨洞原発の悪性腫瘍127例につき外来・入院診療録をretrospectiveに検討した。結果:T3・T4が70%を占めた。一次例では扁平上皮癌27%、嗅神経芽細胞腫21%、悪性リンパ腫15%、粘膜悪性黒色腫10%、肉腫9%、小唾液腺癌6%、未分化癌5%、腺癌2%、他5%であった。悪性リンパ腫を除く症例での初回治療は、放射線65%、手術23%、緩和・未治療9%であった。結論:当院で根治治療を施した症例の3年無病生存率37%、3年疾患特異的生存率56%であった。(三浦弘規 増淵達夫：臨床的側面からの共著であり、明確な区分けによる抽出が困難)</p>
<p>12 頭頸部再建手術におけるグルセルナ-Exの血糖管理における有用性</p>	<p>共著</p>	<p>平成25年10月</p>	<p>頭頸部癌 39巻3号 Page385-390</p>	<p>低糖質、低GI・GL(glycemic index・glycemic load)流動食であるグルセルナ-Exを頭頸部再建術後の周術期管理に使用し、血糖管理の有用性について検討した。対象は、2008年8月1日から2011年12月31日までの、既往に糖尿病のない79症例(グルセルナ-Ex投与群34症例、他栄養剤投与群45例)を後方視的解析した。平均最高血糖値・血糖標準偏差・血糖変動幅は有意にグルセルナ-Ex投与群が低値であった。(伏見千宙 増</p>

<p>13 蝶形洞腫瘍15例の検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成26年4月</p>	<p>頭頸部癌 39巻3号 Page385-390</p>	<p>淵達夫：臨床的側面からの共著であり、明確な区分けによる抽出が困難)</p> <p>目的:蝶形洞腫瘍を臨床的に検討する。対象と方法:国際医療福祉大学三田病院頭頸部腫瘍センターでの蝶形洞腫瘍と15例につき外来・入院診療録をretrospectiveに検討した。結果:当院受診の鼻腔・副鼻腔悪性腫瘍の4%を占めた。。病理組織像は多彩であった。腫瘍容積中央値43cm³、全例頭蓋内浸潤を認めていた。全例に放射線療法が行われ手術施行例はなかった。結論:個々の症例に適した放射線療法の手技と化学療法の使い分け・見極めは、生存期間の確保に貢献すると考えられた。(三浦弘規 増淵達夫：臨床的側面からの共著であり、明確な区分けによる抽出が困難)</p>
<p>14 ベッセルシーリングシステムを使用した頭頸部手術</p>	<p>単著</p>	<p>平成25年4月</p>	<p>頭頸部癌 116巻4号 Page561</p>	<p>リガシユア等の新たなエナジーデバイスが、頭頸部領域に応用され始め、さまざまな施設からその有用性や問題点が報告されている。当センターにおいても、メスで行うことを基本としていた頸部郭清術や、遊離皮弁採取など、頭頸部外科医にとって基本となる手術から、照射後の再発症例等の術後合併症リスクが高い症例にまで積極的に応用している。当センターでの使用方法や、デバイスを使用しない手術との比較など、私見を交え、多少の文献的考察も加え報告する。</p>
<p>15耳下腺・副咽頭間隙に発生したhybrid carcinomaの2例</p>	<p>共著</p>	<p>平成28年6月</p>	<p>日本耳鼻咽喉科学会会報 119巻4号</p>	<p>混成癌 (hybrid carcinoma) は、組織学的に2種類の異なった組織型の癌腫成分からなる唾液腺悪性腫瘍で、発生頻度は唾液腺腫瘍の0.1%未満と非常にまれである。最近、副咽頭間隙・耳下腺深葉を原発部位とする唾液腺導管癌と筋上皮癌からなる多形腺腫由来混成癌(浸潤型)を2例経験した。症例1は51歳男性、症例2は75歳女性である。2例ともに、副咽頭間隙腫瘍摘出術、耳下腺全摘術を施行し、症例2のみ術後照射を施行した。症例1は1年後に局所再発を来し、症例2は照射中に多発骨転移、肝転移を来した。いずれの症例も免疫組織化学染色にて唾液腺導管癌成分がHER2 強陽性を示したことより、トラスツズマブ・ドセタキセル併用療法を施行した。2症例の経過について病理組織学的、免疫組織化学的検討、および文献的考察を加えて報告する。(岡田拓郎 増淵達夫：臨床的側面からの共著であり、明確な区分けによる抽出が困難)</p>
<p>16 頭頸部領域におけるエナジーデバイスの有用性</p>	<p>単著</p>	<p>平成24年8月</p>	<p>口腔咽喉科 25巻3号 Page313</p>	<p>消化器外科領域等の手術において、目覚ましい発展を遂げてきたリガシユア等の新たなエナジーデバイスが、頭頸部領域に応用され始め、様々な施設からその有用性や問題点が報告されている。当センターにおいても、代々メスで行うことを基本としていた頸部郭清術や、遊離皮弁採取など、頭頸部外科医にとって基本となる手術に積極的に応用しはじめている。当センターでの使用方法や、デバイスを使用しない手術との比較など、私見を交え、多少の文献的考察も加え報告する。</p>

17 プランルカストが効果的であった木村氏病例	単著	平成16年9月	日本耳鼻咽喉科学会会報 107巻9増刊 Page818-819	症例は5年前から徐々に増大する左耳後部の腫瘍を主訴に来院した】2歳の男児であり、身体所見ヒ、40×42mmの腫瘍を左耳後部に認め、頸部および鼠径部に腫大したリンパ節を触知した。好酸球とIgEの著明な増多を認め、木村氏病が強く疑われた。全身麻酔下に生検術施行し、病理診断を得て木村氏病と診断された。患者が若年であること等を考慮しプランルカスト単剤による内服治療を開始し、腫瘍の縮小および好酸球数の低下を認めている。
18. 鎮痛補助薬プレガバリンの使用経験	単著	平成22年5月	頭頸部癌 37巻2号 Page269	今回使用した経験を報告するプレガバリンは、過剰に興奮した神経系において、各種神経伝達物質の放出を抑制することにより、従来の鎮痛薬とはまったく異なる新しい作用記所により除痛を図る薬剤である。除通行かが発言するまでの時間が短いことが特徴で、長期投与でも持続的な効果が得られることが確認されている。当センターで手術加療後に生じた、副咽頭間隙腫瘍術後のfirst bite syndromeや、口腔癌再建術後の神経痛など、外来で除痛に難渋した症例に使用した経験を若干の文献的考察を交え報告する。
19 ボイスプロステシス (PROVOX 2) 60例の経験	単著	平成23年11月	喉頭科学会 37巻2号 Page269	当センターでは2008年2月から2013年2月までの5年間で約60例のボイスプロステシスを施行した。近年、喉頭全摘後の代用音声としてPROVOX2などのボイスプロテゼが広く普及してきている。PROVOX2は比較的簡単な手技とその音声再獲得率の高さから今後、さらに多くの症例に対し施行されることが予想される。当センターで行っている、挿入法、経験した合併症、当院での言語聴覚士によるリハビリ指導等につき供覧する。
20. Reconstructive Surgery before and after Introduction of Vessel Sealing Instruments Vessel sealing器具の導入前後の再建手術	単著	平成27年5月	頭頸部癌 41巻2号Page291	当センターでは、2011年に血管シーリング装置を頭頸部手術に導入した。導入当初は、複数のエナジーデバイスを交互に使用していたが、2013年からは血管シーリング装置であるリガシユアをすべての再建手術で使用している。デバイスによるバイアスがなくなった導入後の二年間（2013年・2014年）と、導入前の二年間（2009年・2010年）の再建手術症例群をその手術時間・出血量・術後合併症等につき検討した。計4年間の遊離皮弁による再建症例は全256症例で、そのうち、皮弁壊死による再手術や、咽頭瘻閉鎖に遊離皮弁を用いた症例等の再手術症例7例を除いた250例を対象症例とした。頭頸部外科手術経験年数で執刀医を3つのグループ（頭頸部外科専従5年以下、5年以上10年以下、10年以上）に分け検討した。手術時間は、デバイスを主に使用する、手術開始から原発巣を摘出するまでの時間とした。

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 村上 文祥
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
生物系 医歯薬学 外科系臨床医学 産婦人科学		産婦人科学、婦人科腫瘍学		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文) 1. FDG-PET/CTは婦人科癌リンパ節転移診断に有用か	共著	2010年7月	産婦人科治療101巻1号	概要：FDG-PET/CTによる進行子宮頸癌(IIB-IVB期)のリンパ節転移診断は、感度:75~100%、特異度:87~100%と信頼性が高い。予期せぬ遠隔転移巣(鎖骨窩リンパ節転移など)を検出することにより、治療計画が是正される場合も少なくなく、進行頸癌の治療開始時にFDG-PET/CTは必須の検査である。一方、早期(I-IIA期)での感度は低い(25~73%)。子宮内膜癌でも同様である。FDG-PET/CTでのリンパ節転移のサイズ別検出率は、概略10mm ≤:ほぼ100%、5~9mm:50%前後、5mm>:ほぼ0%。すなわち、従来の画像診断CT、MRI(10mmが検出限界)より向上しているが、婦人科早期癌での転移リンパ節(中央値:3~9mm)を検出するには不十分で、系統的リンパ節郭清を省略できるほどの精度ではなく、PETのhard面、診断方法のさらなる改良が望まれる。 掲載ページ：55-64 担当：データ収集と解析。 共著者：清水 敬生、桜井 秀、村上 文祥、棚田 修二
2. 転移性卵巣腫瘍との鑑別が困難であった卵巣甲状腺腫の1例(査読付)	共著	2011年11月	臨床放射線56巻3号	概要：48歳女。7ヵ月前に乳癌で左乳房切除術を施行されていたが、子宮癌検診で卵巣腫大を指摘された。MRIでダグラス窩に9cm弱の円形で境界明瞭な充実性腫瘍を認め、T2強調像では腫瘍の辺縁に索状の低信号域がみられ、中心部は軽度高信号であった。造影では早期相から著明に染まる充実成分が内部の大部分を占め、拡散強調像では軽度の高信号であった。転移性卵巣腫瘍を第一に考え、浮腫を伴う線維腫を鑑別として挙げ、消化器原発悪性腫瘍の転移の可能性も考慮した。患者の希望により他院で両側付属器摘出術が施行され、術前PETでは明らかな異常集積を認めなかった。摘出標本で腫瘍は被膜に覆われ、断面は黄色調で出血を伴っていた。病理組織学的には大小不同の濾胞から成る甲状腺組織がみられ、辺縁に脂肪成分が同定された。一部に腺を伴い、成熟奇形腫の成分と考えられ、卵巣甲状腺腫と診断した。MRIのT2強調像で高信号の部位は間質の浮腫性変化がみられた。 掲載ページ：1837-1840。 担当：当該症例の手術などの実臨床。 共著者：小野田結、田村綾子、松尾義朋、不破相勲、藤原美恵子、鈴木高祐、齋田幸久、村上 文祥
3. A Rare Case with a Solitary Fibrous Tumour of the Colon and an Epithelioid Angiomyolipoma of the Kidney (大腸弧在性線維腫と腎血管筋脂肪腫を発症したまれな一例) (査読付)	共著	2013年7月	Case Reports in Pathology Volume 2013 (2013), Article ID 324538, 7 pages	概要：大腸弧在性線維腫と腎血管筋脂肪腫という各々まれである腫瘍を合併した症例について、免疫組織化学的に検討。 担当：当該症例における手術、化学療法などの実臨床。 共著者：Thong Quang Pham, Shinsuke Aida, Ichiro Mori, Takeo Koshida, Takashi Ohigashi, Katsuyoshi Katase, Fumiyo Murakami, Thong Minh Tran, and Robert Y. Osamura

(その他) 学会発表等 1. クリニカルディベート 婦人科癌に対して内視鏡手術 の応用は可能か 2. 悪性腺腫と診断され再検 討後endocervical glandular hyperplasiaであった2例	2006年11月	第41回日本婦人科腫瘍学会 大阪	清水 敬生, <u>村上 文祥</u> , 山田 昌代, 金子 容子, 桜井 秀, 石谷 敬之, 片瀬 功芳
	2007年10月	第45回日本癌治療学会 京 都	山田 昌代, <u>村上 文祥</u> , 小川 奈津希, 山崎 綾 乃, 石谷 敬之, 片瀬 功芳, 清水 敬生, Silverberg Steven G.
3. APAM(Atypical polypoid adenomyoma)について	2007年10月	第45回日本癌治療学会 京 都	<u>村上 文祥</u> , 小川 奈津希, 山崎 綾乃, 山田 昌 代, 石谷 敬之, 片瀬 功芳, 清水 敬生
4. ポリープ状異型腺筋腫 (Atypical Polypoid Adenomyoma:APAM)について	2008年4月	第60回日本産婦人科学会 神奈川	<u>村上 文祥</u> , 小川 奈津希, 山田 昌代, 山崎 綾 野, 石谷 敬之, 片瀬 功芳, 清水 敬生
5. Normal-sized ovary carcinoma syndromeの6例 Neoadjuvant chemotherapy及 び根治手術について	2008年4月	第60回日本産婦人科学会 神奈川	山崎 綾野, 小川 奈津希, <u>村上 文祥</u> , 山田 昌 代, 石谷 敬之, 片瀬 功芳, 清水 敬生
6. Normal sized ovary carcinoma syndromeの4例 Neoadjuvant chemotherapy及 び根治手術について	2008年10月	第46回日本癌治療学会 愛 知	山崎 綾野, 清水 敬生, 片瀬 功芳, 石谷 敬之, <u>村上 文祥</u> , 小川 奈津希, 野間 桃
7. TC両方を含む標準治療後 卵巣癌再発し、CDDP-based化 学療法でCRとなり完全切除術 を施行した3症例	2008年10月	第46回日本癌治療学会 愛 知	概要：再発卵巣癌は難治性のことが多く、寛解導 入すら達成することは容易ではない。再発卵巣癌 に対する標準治療法は確立されていない。TC療法 を含む標準治療後の再発卵巣癌にCDDP-based化学 療法を行い、完全治癒切除術施行した3例につい て検討報告する 演者： <u>村上 文祥</u> , 山崎 綾野, 野間 桃, 小川 奈 津希, 山田 昌代, 石谷 敬之, 片瀬 功芳, 清水 敬生
8. PET-CTは子宮頸癌、子宮 体癌、卵巣癌リンパ節転移診 断に有用か	2010年10月	第48回日本癌治療学会 京 都	概要：婦人科癌におけるリンパ節転移診断に関し て、FDG-PET/CT検査の感度、特異度、信頼度につ いて検討する。演者： <u>村上 文祥</u> , 小川 奈津希, 山崎 綾野, 石谷 敬之, 笠原 国武, 清水 敬生, 片瀬 功芳
9. 当科で施行した腹腔鏡下 子宮筋腫核出術症例中の子宮 肉腫症例の頻度とその病像	2014年9月	第54回日本産科婦人科内視 鏡学会 鹿児島	成田 達哉, 一瀬 俊一郎, 大原 健, 松永 茂剛, 長井 智則, 高井 泰, <u>村上 文祥</u> , 斎藤 正博, 馬 場 一憲, 関 博之
10. 当院の子宮頸部神経内分 泌腫瘍7症例の検討	2015年10月	日本臨床細胞学会雑誌 54巻、Page 727	関根 理恵子, 佐野 弘子, 片瀬 功芳, 石谷 敬 之, <u>村上 文祥</u> , 笠原 健弘, 西井 しのぶ, 阿部 仁美, 相原 乃理子, 松崎 佳子, 鈴木 智, 玉井 誠一, 相田 信介, 森 一郎, 長村 義之

<p>11. 当院における LEGH(lobular endocervical glandular hyperplasia)の診 断基準の検討</p>	<p>2016年4月</p>	<p>日本臨床細胞学会雑誌 55巻、Page 250</p>	<p>概要：当院におけるLEGH(lobular endocervical glandular hyperplasia)の診断基準の検討につい て学会発表。共同演者：佐野弘子、関根理恵子、 片瀬功芳、石谷敬之、<u>村上文祥</u>、玉井誠一、相田 真介、森一郎、長村義之</p>
---	----------------	------------------------------------	--

教 育 研 究 業 績 書				
				氏名 山根 建樹
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
消化器内科学		(1)上部消化管学(食道、胃、十二指腸)、(2)下部消化管学(小腸、大腸)		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 腸管アミロイドーシス	共著	平成17年1月	臨床外科, pp 83-90	概要:虚血性腸疾患とその周辺、について特集された。腸管アミロイドーシスの項を担当した。 役割:代表的な腸管アミロイドーシスであるAA型とAL型のそれぞれの病態、診断、治療について記述した。 共著者名: <u>山根建樹</u> 、中村 眞、内山 幹、他
2 胃の臨床	共著	平成19年5月	日本メディカルセンター, VII「1」320-323	各種の上部消化管疾患について内視鏡写真も含めて詳述された図書である。 役割:GERDの項を担当し、病態、分類、診断、治療について記述した。 共著者名: <u>山根建樹</u> 、石井隆幸、田尻久雄
3 難治性胃潰瘍の治療	単著	平成20年4月	Medicament News	Hp除菌療法導入後の難治性胃潰瘍の特徴について記述した。
4 十二指腸球後部潰瘍におけるHp感染と除菌	共著	平成21年1月	消化器科, pp 24-28	概要:H. pylori除菌療法の選択と拡大、について特集された。十二指腸球後部潰瘍について担当した。 役割:十二指腸球後部潰瘍におけるHp感染の頻度および除菌後の経過について記述した。 共著者名: <u>山根建樹</u> 、内山 幹、石井隆幸、他
(学術論文) 1 A case of familiar Mediterranean fever with onset in the fifties (50歳代に発症した家族性地中海熱の1例) (査読付)	共著	平成18年5月	Internal Medicine, vol 45, 515-517	本邦では稀な周期熱症候群の1つである家族性地中海熱症例について報告した。遺伝子検査で確定診断され、家族歴も疑われ、コルヒチン投与が症状の改善に有用であった。また本例は50歳代に初発しており、極めて稀な症例であった。 <u>Tateki Yamane, Kan Uchiyama, Daigo Hata, et al</u>
2 Two cases of refractory post-bulbar duodenal ilcer (難治性十二指腸球後部潰瘍の2例) (査読付)	共著	平成19年9月	Internal Medicine, vol 46, 1413-1417	PPI投与に難治性の十二指腸球後部潰瘍2例について報告した。1例はHp陰性で胆嚢への穿通が確認され、胆摘、SPVが施行された。術後はPPI freeでも治癒が維持されSPVが効果的と考えられた。もう1例はHp陽性で高用量のPPI投与後に治癒し除菌を行ったが再発し、PPI投与再開にて治癒が維持され、Hpの関連は低いと考えられた。両例とも主に胃酸に関係した病態と推察された。 <u>Tateki Yamane, Kan Uchiyama, Takayuki Ishii, et al</u>

3 A case of multiple inflammatory myoglandular polyps of the colon (多発性大腸炎症性筋腺管ポリープの1例) (査読付)	共著	平成19年10月	Digestive Endoscopy, vol 19, 192-194	大腸炎症性筋腺管ポリープは稀であり、また国外、本邦でも多発例の報告は皆無である。世界初となる多発性を呈した同ポリープ症例について報告した。患者は白血病で骨髄移植を受け腸管GVHD発症の既往があり、同ポリープの発生と腸管GVHD罹患歴の関連性も推測された。 <u>Tateki Yamane</u> , Kan Uchiyama, Daigo Hata, et al
4 A case of refractory antral gastric ulcer of unknown etiology (発症原因不明の難治性胃前庭部潰瘍の1例) (査読付)	共著	平成20年10月	Digestive Endoscopy, vol 20, 203-206	PPI投与に抵抗性であり、発症原因不明の胃前庭部潰瘍症例について報告した。pH monitoringにてPPI投与下での夜間の胃酸分泌の非抑制が確認され、PPIにH2-RAを追加投与したところ治癒が得られた。 <u>Tateki Yamane</u> , Kan Uchiyama, Takayuki Ishii, et al
5 Thiopurines S-methyltransferase and inosine triphosphate pyrophosphohydrolase genes in Japanese patients with inflammatory bowel disease in whom adverse drug reactions were induced by azathiopurine/6-mercaptopurine treatment (アザチオプリン/6-MP投与により副作用が発現した日本人の炎症性腸疾患患者におけるTPMTとITPA遺伝子変異の検討) (査読付)	共著	平成21年3月	Japan Gastroenterology, vol , 197-203	炎症性腸疾患治療に用いられる免疫調節薬のチオプリンであるアザニン/6-MPには顆粒球減少などの重大な副作用があり、欧米人に比し日本人での発生が多い。TPMTとITPAの2種類の遺伝子変異が原因として挙げられるが、日本人における変異の詳細は不明である。炎症性腸疾患患者と健康人ボランティアでこれらの遺伝子変異について検討した。結果として日本人ではITPA変異が多く、副作用の発現に強く関与していると考えられた。 Kan Uchiyama, Makoto Nakamura, Takahiro Kubota, <u>Tateki Yamane</u> , et al
6 A case of inflammatory fibroid polyp of the esophagogastric junction (食道胃接合部に発生した炎症性類線維性ポリープの1例) (査読付)	共著	平成21年4月	Digestive Endoscopy, vol 21, 97-100	部分的EMRにより確定診断された極めて稀な食道胃接合部に発生した炎症性類線維性ポリープ症例について報告した。PPIとH-RA併用投与による強力な胃酸分泌抑制により縮小し、胃酸のrefluxに関連した病態と推察された。 <u>Tateki Yamane</u> , Kan Uchiyama, Takayuki Ishii, et al
7 A case of refractory diverticular colitis with progressive ulcerative colitis-like change extending to the rectum(経過中に直腸まで伸展する潰瘍性大腸炎様変化を呈した難治性憩室性大腸炎の1例) (査読付)	共著	平成22年7月	Digestive Endoscopy, vol 21, 188-191	経過中に直腸まで伸展する潰瘍性大腸炎への変化を示した難治性の憩室性大腸炎症例について報告した。本邦では憩室性大腸炎の報告は少なく、また国外では散見されるが潰瘍性大腸炎への変化を呈した症例の報告は本邦では極めて稀である。潰瘍性大腸炎発生の機序のつととして憩室性大腸炎の関与が推測された。 <u>Tateki Yamane</u> , Kan Uchiyama, Takayuki Ishii, et al
8 A case of isolated granulomatous gastritis showing discoloration of lesions after Helicobacter pylori eradication (ヘリコバクター・ピロリ除菌後に病変部の褪色性変化がみられた肉芽腫性胃炎の1例) (査読付)	共著	平成23年4月	Digestive Endoscopy, vol 22, 140-143	Hp陽性であり除菌後に多発性の潰瘍や粘膜下腫瘍様病変が消退し、平坦な褪色調粘膜となった極めて稀な肉芽腫性胃炎症例について報告した。同胃炎はHp感染に対する人間の1つの免疫応答として発症することが推測された。 <u>Tateki Yamane</u> , Kan Uchiyama, Takayuki Ishii, et al

9 Evaluation of six cases of idiopathic gastoric antral ulcer (特発性胃前庭部潰瘍6例の検討) (査読付)	共著	平成24年6月	Gastroenterology Research, vol 5, 120-126	発症原因不明の胃前庭部潰瘍6症例について検討した。いずれも多発性の小型の潰瘍であり、PPI投与にても難治であったが、PPIの高用量投与が有効であった。病態としては胃酸の関与の他に、前庭部の蠕動亢進からの粘膜どうしの擦過による機械的な要因が推測された。 Tateki Yamane, Takayuki Ishii, Akira Umeda, et al.
10 Analysis of recent cases of intestinal tuberculosis in Japan (日本における最近の腸結核の検討) (査読付)	共著	平成24年8月	Internal Medicine, vol 53, 957-962	本邦における最近の腸結核の臨床的特徴について検討した。肺病変をとみなさない原発例が多く、免疫不全例は少なく、無症状で検診の便潜血陽性が診断の契機となった症例も認められた。またInterferron- γ releasing assayは腸結核の診断においても有用であることが示唆された。 Tateki Yamane, Akira Umeda, Hitoshi Shimao
11 著明な多発性を呈した特発性肝膿瘍症例 (査読付)	共著	平成27年3月	治療, vol 97, 443-447	肝臓の両葉に極めて多発性の病変が認められた他に類をみない細菌性肝膿瘍症例について報告した。当初は悪性腫瘍の多発性肝転移も疑われたが、細菌性膿瘍と診断し抗菌薬の長期投与にて治癒が得られた。感染経路不明の特発例であったが、歯周炎が原因として疑われた。 山根建樹、梅田 啓、嶋尾 仁
12 気腹とChilaiditi症候群および大量の腹水がみられた慢性偽性腸閉塞による腸管囊腫様気腫症の1例 (査読付)	共著	平成27年10月	内科, vol 6, 717-720	腸管囊腫様気腫症により腹腔内free airがみられChilaiditi症候群の併発も認められた特発性の慢性偽性腸閉塞症例について報告した。経過中に反応性と考えられる大量の腹水貯留もみられ、極めて稀な症例であった。治療として酸素投与、PG- α 製剤・ワゴスチグミン投与が有効であった。 山根建樹、梅田 啓、嶋尾 仁
(その他) (学会発表) 1 経過中に潰瘍性大腸炎様の変化を呈した治療抵抗性のdiverticular colitisの1例(主題: CASE)	—	平成19年5月	第73回日本消化器内視鏡学会総会、東京	経過中に直腸まで伸展する潰瘍性大腸炎への変化を示した難治性の憩室性大腸炎症例について発表した。憩室性大腸炎の本邦での報告は少なく、さらに潰瘍性大腸炎への変化をきたした症例報告は極めて稀である。 筆頭演者として発表した。 山根建樹、内山 幹、藤瀬清隆、他
2 十二指腸球後部潰瘍におけるHelicobacter pylori感染、除菌についての検討(主題: パネルディスカッション)	—	平成19年10月	第49回日本消化器病学会大会、神戸	十二指腸球後部潰瘍におけるHp感染率および除菌後の経過について発表した。感染率は50%であり、除菌例は全例再発が認められた。 筆頭演者として発表した。 山根建樹、内山 幹、藤瀬清隆
3 Helicobacter pylori除菌後に病変部粘膜の褪色様変化がみられたisolated granulomatous gastritis症例	—	平成22年4月	第96回日本消化器病学会総会、新潟	Hp除菌後に病変部である多発性の潰瘍や粘膜下腫瘍様隆起が消退し、平坦な褪色調粘膜となった極めて稀な肉芽腫性胃炎症例について発表した。 筆頭演者として発表した。 山根建樹、石井隆幸、新里高広、他

4 特発性胃前庭部潰瘍症例の検討	—	平成23年10月	第53回日本消化器病学会大会、福岡	発症原因不明の胃前庭部潰瘍症例を集計し臨床的特徴について検討した。いずれも小型の多発性潰瘍であり、PPIに抵抗性で難治であった。筆頭演者として発表した。 山根建樹、石井隆幸、他
5 腸結核症例の検討	—	平成25年4月	第110回日本内科学会講演会、東京	最近の腸結核症例を集計し臨床的に検討した。腸管原発例が多く、免疫不全例は少なく、無症状で検診が診断の契機となった症例も認められた。またQFTが診断において有用であった。筆頭演者として発表した。 山根建樹、梅田 啓、嶋尾 仁
6 胃潰瘍難治例の検討	—	平成26年4月	第111回日本内科学会講演会、東京	Hp除菌療法が導入されLDAやNSAIDsの投薬機会が増加している近年における難治性胃潰瘍症例を集計し臨床的に検討した。従来の報告通り巨大例、胃角部の線状例がみられたが、噴門部例や特発性の前庭部例も認められた。筆頭演者として発表した。 山根建樹、梅田 啓、嶋尾 仁
7 消化管内視鏡検査によって診断されたアミロイドーシス症例の検討	—	平成27年4月	第112回日本内科学会講演会、京都	消化管内視鏡検査によって診断されたアミロイドーシス症例について検討した。アミロイドの種類はAA型とAL型であり、AA型では粗造～顆粒状粘膜の他粘膜下腫瘍様隆起例が認められた。AL型は粘膜下腫瘍様隆起例が多かったが潰瘍形成例もみられた。筆頭演者として発表した。 山根建樹、梅田 啓、嶋尾 仁
8 当院におけるCameron病変の検討	—	平成28年4月	第113回日本内科学会講演会、東京	最近当院で診療したCameron病変症例を集計し検討した。いずれもgastroesophageal flap valveが明瞭であり、出血例が多かった。また通常量のPPI投与に抵抗を示す症例が多くみられた。筆頭演者として発表した。 山根建樹、梅田 啓、嶋尾 仁